

名

1987.8.10 佐藤

茨城県教育財団文化財調査報告第38集

一般国道4号改築工事地内埋蔵文化財  
調査報告書1(総和地区)

南坪A・B・C遺跡 向坪A・B遺跡

高野遺跡 北新田A・B・C遺跡

西坪A・B遺跡 溜原B遺跡

昭和61年8月

財團法人 茨城県教育財團

寄贈  
歴史人類学系  
平成年月日

110.1.21  
So 93  
(NK)

茨城県教育財団文化財調査報告第38集

# 一般国道4号改築工事地内埋蔵文化財

## 調査報告書1(総和地区)

南坪A・B・C遺跡

高野遺跡

西坪A・B遺跡

向坪A・B遺跡

北新田A・B・C遺跡

溜原B遺跡

昭和61年8月

財團法人 茨城県教育財團

96605135

# 序

建設省は、国道4号線の交通量の増加による交通渋滞の緩和をはかるため、埼玉県越谷市から茨城県の五霞村、境町、総和町、三和町、結城市を通過して、栃木県宇都宮市にいたる「新4号国道」の建設を進めております。昭和60年4月には、越谷市から総和町柳橋間と小山市から宇都宮市間が開通しました。

財団法人茨城県教育財団は、昭和57年度以降建設省関東地方建設局と埋蔵文化財発掘調査について委託契約を結び、新4号国道建設用地内に所在する埋蔵文化財の発掘を実施してまいりました。

本書は、昭和57年度から昭和60年度にかけて発掘調査を実施した総和町に所在する12の遺跡について、調査成果を収録したものであります。本書が記録保存の役割としてだけでなく、教育及び研究の資料として、広く活用されることを希望いたします。

最後に、発掘調査及び整理に当たり、建設省関東地方建設局宇都宮国道工事事務所、茨城県教育委員会、総和町教育委員会をはじめ、関係諸機関、関係各位の御指導・御協力に対しまして、心より謝意を表します。

昭和61年8月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 川又友三郎

## 例 言

- 1 本書は、建設省の委託により、財団法人茨城県教育財團が、昭和57年度から昭和60年度にかけて発掘調査を実施した、茨城県猿島郡総和町に所在する南坪A遺跡ほか11遺跡の調査報告書である。
- 2 南坪A遺跡ほか11遺跡の調査・整理に関する当教育財團の組織は、次のとおりである。

理 事 長	大 金 新 一	～昭和58年11月
	竹 内 藤 男	昭和58年12月～昭和61年3月
	川 又 友三郎	昭和61年4月～
副 理 事 長	古 橋 靖	～昭和58年7月
	川 又 友三郎	昭和58年7月～昭和61年3月
	磯 田 勇	昭和61年4月～
常 務 理 事	綿 引 一 夫	昭和57年4月～昭和60年3月
	萩 原 薫之助	昭和60年4月～昭和61年3月
	滑 川 貞 雄	昭和61年4月～
事 務 局 長	小 林 義 久	～昭和58年3月
	小 林 洋	昭和58年4月～昭和60年3月
	堀 井 昭 生	昭和60年4月～
調 査 課 長	寺 内 寛	～昭和59年3月
	青 木 義 大	昭和59年4月～
班 長	坪 秀 雄	～昭和57年5月
◆	今 村 信 夫	昭和57年6月～昭和59年3月
◆	市 毛 洋 一	昭和59年4月～昭和60年3月
◆	北 島 健	昭和60年4月～
主 任 調 査 員	加 藤 雅 美	昭和57年4月～昭和61年3月
管 理 主 事	鈴 木 三 郎	～昭和60年3月
◆	海 老 沢 一 夫	昭和57年4月～昭和60年3月
◆	綿 引 良 人	～昭和58年3月
◆	大曾根 徹	昭和58年4月～昭和61年3月
◆	田 所 多 佳 男	昭和60年4月～
◆	山 嶋 初 雄	昭和60年4月～

	*	大部 章	昭和61年4月～
調査班	班長	青木義夫	昭和57年度
	*	安藤幸重	昭和58年度
	*	堀川計三	昭和59・60年度
	主任調査員	久野俊度	昭和57年度調査
	*	柴正	昭和58年度調査
	*	中沢時宗	昭和57・58・59年度調査、昭和59・60年度整理・執筆
	*	小河邦男	昭和57年度調査
	*	和田雄次	昭和60年度調査、昭和61年度整理・執筆
調査員	*	高村勇	昭和57年度調査
	桜井一美	昭和59・60年度調査	
整理班長	渡辺千秋	昭和59年度	
	石井毅	昭和60年度	
	加藤雅美	昭和61年度	

3 本書は、発掘担当者の協力を得て、次のように執筆分担した。

第1・2・3・4章・終章

南坪A遺跡・南坪B遺跡・南坪C遺跡・高野遺跡・西坪A遺跡  
西坪B遺跡・向坪A遺跡・向坪B遺跡・北新田A遺跡 } 中沢時宗

北新田B遺跡・北新田C遺跡 ..... 桜井一美  
溜原B遺跡 ..... 和田雄次

4 発掘調査及び出土遺物の整理等に際して、国学院大学日本文化研究所の樋山林雄氏、東京都八王子市教育委員会の服部敬史氏から御指導をいただいた。

5 本書に使用した記号等については、第4章構構・遺物の記載方法を参照されたい。

6 発掘調査から報告書刊行にいたるまで御協力をいただいた、建設省関東地方建設局宇都宮国道工事事務所、茨城県教育委員会、総和町教育委員会はじめ、関係諸機関、関係各位に対し心から感謝の意を表したい。

# 目 次

序	
例 言	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	2
第2章 位置と環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	7
第3章 調査方法	11
第1節 地区設定	11
第2節 遺構確認	12
第3節 遺構調査	12
第4章 遺構・遺物の記載方法	13
第1節 遺構の記載方法	13
第2節 遺物の記載方法	16
第5章 遺跡の調査結果	17
南坪A遺跡	17
1 遺跡の概観	17
2 調査経過	17
3 遺物	19
4 まとめ	22
南坪B遺跡	25
1 遺跡の概観	25
2 調査経過	25
3 遺物	25
4 まとめ	28
南坪C遺跡	29
1 遺跡の概観	29
2 調査経過	29

3 遺物	29
4 まとめ	33
高野遺跡	35
1 遺跡の概観	35
2 調査経過	35
3 造構と遺物	38
4 まとめ	40
西坪A遺跡	43
1 遺跡の概観	43
2 調査経過	43
3 造構と遺物	45
4 まとめ	67
西坪B遺跡	69
1 遺跡の概観	69
2 調査経過	69
3 遺物	69
4 まとめ	72
向坪A遺跡	73
1 遺跡の概観	73
2 調査経過	73
3 造構と遺物	75
4 まとめ	80
向坪B遺跡	81
1 遺跡の概観	81
2 調査経過	81
3 造構と遺物	84
4 まとめ	109
北新田A遺跡	117
1 遺跡の概観	117
2 調査経過	117
3 造構と遺物	122
4 まとめ	312

北新田B遺跡	345
1 遺跡の概観	345
2 調査経過	345
3 遺物	345
4 まとめ	347
北新田C遺跡	349
1 遺跡の概観	349
2 調査経過	349
3 遺構と遺物	351
4 まとめ	354
溜原B遺跡	357
1 遺跡の概観	357
2 調査経過	357
3 遺構と遺物	357
4 まとめ	363
終章 むすび	367

# 挿図目次

第1図 茨城県内新4号国道関係遺跡分 布図	3	第23図 土坑実測図1)	51
第2図 新4号国道周辺の遺跡分布図	8	第24図 土坑実測図2)	52
第3図 グリッド概念図	11	第25図 土坑実測図3)	53
第4図 遺構実測図の作成方法 南坪A遺跡	14	第26図 土坑実測図4)	54
第5図 南坪A遺跡地形図	18	第27図 土坑実測図5)	55
第6図 南坪A遺跡全体図	19	第28図 土坑実測図6)	56
第7図 グリッド出土土器拓影図	21	第29図 土坑実測図7)	57
第8図 グリッド出土遺物実測図 南坪B遺跡	22	第30図 土坑実測図8)	58
第9図 南坪B遺跡地形図	26	第31図 土坑実測図9)	59
第10図 南坪B遺跡全体図	27	第32図 土坑実測図10)	60
第11図 グリッド出土土器拓影図・石器 実測図	27	第33図 土坑実測図11)	61
南坪C遺跡		第34図 第1・2号溝実測図	63
第12図 南坪C遺跡地形図	30	第35図 第3号溝実測図	64
第13図 南坪C遺跡全体図	31	第36図 第4号溝実測図	65
第14図 グリッド出土土器拓影図・実測 図	32	第37図 第5・6号溝実測図	66
高野遺跡		第38図 グリッド出土土器拓影図	67
第15図 高野遺跡地形図	36	西坪B遺跡	
第16図 高野遺跡全体図	37	第39図 西坪B遺跡地形図	70
第17図 第1号溝実測図	39	第40図 西坪B遺跡全体図	71
第18図 グリッド出土土器拓影図	40	第41図 グリッド出土土器拓影図	72
第19図 グリッド出土遺物実測図 西坪A遺跡	41	向坪A遺跡	
第20図 西坪A遺跡地形図	44	第42図 向坪A遺跡地形図	74
第21図 西坪A遺跡全体図	45	第43図 向坪A遺跡全体図	75
第22図 遺構配置図	46	第44図 第1号溝実測図	76
		第45図 第2・3号溝実測図	77
		第46図 第1・2号井戸実測図	79
		第47図 グリッド出土土器拓影図	79
		向坪B遺跡	
		第48図 向坪B遺跡地形図	82
		第49図 向坪B遺跡全体図	83

第50図	第1号住居跡実測図	85	第81図	第4号住居跡実測図	133
第51図	第1号住居跡遺物出土状態図	86	第82図	第4号住居跡出土遺物実測図	134
第52図	第1号住居跡出土遺物実測図1)	87	第83図	第5・11・12号住居跡実測図	135
第53図	第1号住居跡出土遺物実測図2)	88	第84図	第5号住居跡カマド実測図	136
第54図	第1号住居跡出土遺物実測図3)	90	第85図	第5号住居跡出土遺物実測図1)・137	
第55図	第1号住居跡出土遺物実測図4)	93	第86図	第5号住居跡出土遺物実測図2)・138	
第56図	第1号住居跡出土遺物実測図5)	94	第87図	第6号住居跡実測図	140
第57図	第1号住居跡出土遺物実測図6)	95	第88図	第6号住居跡遺物出土状態図	141
第58図	第2号住居跡実測図	97	第89図	第6号住居跡カマド実測図	142
第59図	第2号住居跡遺物出土状態図	98	第90図	第6号住居跡出土遺物実測図1)・144	
第60図	第2号住居跡出土遺物実測図1)	99	第91図	第6号住居跡出土遺物実測図2)・145	
第61図	第2号住居跡出土遺物実測図2)	100	第92図	第6号住居跡出土遺物実測図3)・146	
第62図	土坑実測図1)	101	第93図	第7号住居跡実測図	147
第63図	土坑実測図2)	102	第94図	第7号住居跡出土遺物実測図	148
第64図	土坑出土遺物実測図	103	第95図	第8号住居跡・カマド実測図	149
第65図	第1号溝実測図	105	第96図	第8号住居跡出土遺物実測図	150
第66図	第2号溝実測図	106	第97図	第9号住居跡実測図	151
第67図	グリッド出土遺物実測図	107	第98図	第9号住居跡出土遺物実測図	152
第68図	古錢拓影図	108	第99図	第10号住居跡実測図	153
第69図	臼玉出土状況模式図	112	第100図	第10号住居跡出土遺物実測図	154
北新田A遺跡			第101図	第11号住居跡出土遺物実測図	154
第70図	北新田A遺跡地形図	118	第102図	第13号住居跡実測図	156
第71図	北新田A遺跡全体図	119	第103図	第13号住居跡出土遺物実測図	157
第72図	第1号住居跡実測図	124	第104図	第14号住居跡実測図	159
第73図	第1号住居跡出土遺物実測図	125	第105図	第14号住居跡カマド実測図	160
第74図	第2号住居跡・カマド実測図	126	第106図	第14号住居跡出土遺物実測図	160
第75図	第2号住居跡遺物出土状態図	127	第107図	第15・16・17号住居跡実測図	161
第76図	第2号住居跡出土遺物実測図1)	129	第108図	第15・17号住居跡カマド実測図	162
第77図	第2号住居跡出土遺物実測図2)	130	第109図	第15・16号住居跡出土遺物実測	
第78図	第3号住居跡実測図	131	図		163
第79図	第3号住居跡カマド実測図	132	第110図	第17号住居跡出土遺物実測図1)・165	
第80図	第3号住居跡出土遺物実測図	132	第111図	第17号住居跡出土遺物実測図2)・166	

第112図	第18号住居跡実測図	168	第142図	第32・33号住居跡出土遺物実測 図	205
第113図	第18号住居跡出土遺物実測図	169	第143図	第33号住居跡実測図	206
第114図	第19号住居跡実測図	170	第144図	第34号住居跡実測図	207
第115図	第20号住居跡実測図	171	第145図	第34号住居跡出土遺物実測図1)・209	
第116図	第20号住居跡カマド実測図	172	第146図	第34号住居跡出土遺物実測図2)・210	
第117図	第20号住居跡出土遺物実測図	173	第147図	第34号住居跡出土遺物実測図3)・211	
第118図	第21号住居跡・カマド実測図	175	第148図	第35・36号住居跡・カマド実測 図	213
第119図	第21号住居跡出土遺物実測図1)	177	第149図	第35・36号住居跡出土遺物実測 図	214
第120図	第21号住居跡出土遺物実測図2)	178	第150図	第37・62号住居跡実測図	217
第121図	第22号住居跡実測図	179	第151図	第37号住居跡カマド実測図	218
第122図	第23号住居跡実測図	180	第152図	第37号住居跡出土遺物実測図1)・219	
第123図	第23号住居跡出土遺物実測図	181	第153図	第37号住居跡出土遺物実測図2)・220	
第124図	第24号住居跡実測図	182	第154図	第38号住居跡実測図	222
第125図	第24号住居跡出土遺物実測図	184	第155図	第38号住居跡出土遺物実測図1)・224	
第126図	第25号住居跡・カマド実測図	185	第156図	第38号住居跡出土遺物実測図2)・225	
第127図	第25号住居跡出土遺物実測図1)	187	第157図	第39号住居跡実測図	227
第128図	第25号住居跡出土遺物実測図2)	188	第158図	第39号住居跡出土遺物実測図1)・228	
第129図	第26・27号住居跡実測図	189	第159図	第39号住居跡出土遺物実測図2)・229	
第130図	第26・27号住居跡カマド実測図	190	第160図	第40号住居跡実測図	231
第131図	第26・27号住居跡出土遺物実測 図	191	第161図	第40号住居跡出土遺物実測図	232
第132図	第28号住居跡実測図	193	第162図	第41号住居跡実測図	233
第133図	第28号住居跡カマド実測図	194	第163図	第41号住居跡カマド実測図	234
第134図	第28号住居跡出土遺物実測図	195	第164図	第41号住居跡出土遺物実測図	235
第135図	第29号住居跡・カマド実測図	196	第165図	第42号住居跡・カマド実測図	236
第136図	第29号住居跡出土遺物実測図	198	第166図	第42号住居跡出土遺物実測図1)・238	
第137図	第30・31号住居跡・カマド実測 図	199	第167図	第42号住居跡出土遺物実測図2)・239	
第138図	第30号住居跡出土遺物実測図1)	201	第168図	第43号住居跡・カマド実測図	240
第139図	第30号住居跡出土遺物実測図2)	202	第169図	第44号住居跡実測図	241
第140図	第31号住居跡出土遺物実測図	203	第170図	第44号住居跡出土遺物実測図	242
第141図	第32号住居跡実測図	204			

第171図	第45号住居跡・カマド実測図	242	第201図	第59・60号住居跡出土遺物実測 図	279
第172図	第46号住居跡・カマド実測図	244	第202図	第60号住居跡実測図	281
第173図	第46号住居跡遺物出土状態図	245	第203図	第61号住居跡・カマド実測図	282
第174図	第46号住居跡出土遺物実測図1)	247	第204図	第61号住居跡出土遺物実測図1)	284
第175図	第46号住居跡出土遺物実測図2)	248	第205図	第61号住居跡出土遺物実測図2)	285
第176図	第46号住居跡出土遺物実測図3)	249	第206図	第62号住居跡出土遺物実測図	286
第177図	第47号住居跡実測図	250	第207図	第1・2・4~7号土坑実測図	287
第178図	第47号住居跡出土遺物実測図	251	第208図	第3号土坑実測図・遺物出土状 態図	290
第179図	第48号住居跡実測図	252	第209図	第3号土坑出土遺物実測図1)	291
第180図	第48号住居跡出土遺物実測図	253	第210図	第3号土坑出土遺物実測図2)	292
第181図	第49号住居跡実測図	254	第211図	第3号土坑出土遺物実測図3)	293
第182図	第49号住居跡遺物出土状態図	255	第212図	第3号土坑出土遺物実測図4)	294
第183図	第49号住居跡カマド実測図	256	第213図	第1号溝実測図	296
第184図	第49号住居跡出土遺物実測図1)	259	第214図	第2号溝実測図	297
第185図	第49号住居跡出土遺物実測図2)	260	第215図	第3号溝実測図	298
第186図	第50号住居跡実測図	261	第216図	第4号溝実測図	299
第187図	第50号住居跡出土遺物実測図	263	第217図	第5号溝実測図	301
第188図	第51号住居跡実測図	264	第218図	第6号溝実測図	302
第189図	第51号住居跡出土遺物実測図	265	第219図	第7号溝実測図	303
第190図	第52・55号住居跡・カマド実測 図	266	第220図	第8号溝実測図	304
第191図	第52号住居跡出土遺物実測図	267	第221図	第9号溝実測図	305
第192図	第53号住居跡・カマド実測図	268	第222図	第10号溝実測図	306
第193図	第53号住居跡出土遺物実測図	269	第223図	第1・2号井戸実測図	308
第194図	第54号住居跡・カマド実測図	271	第224図	第1号井戸出土遺物実測図	309
第195図	第56号住居跡実測図	272	第225図	第1号掘立柱建物跡実測図	310
第196図	第57号住居跡実測図	274	第226図	土器編年図1)	313
第197図	第57号住居跡出土遺物実測図	275	第227図	土器編年図2)	315
第198図	第58号住居跡実測図	275	第228図	土器編年図3)	317
第199図	第59号住居跡・カマド実測図	276	第229図	土器編年図4)	319
第200図	第59号住居跡出土遺物実測図	278	第230図	土器編年図5)	321

第21図 土器編年図6).....	323	第24図 グリッド出土土器拓影図.....	348
第22図 土器編年図7).....	325	北新田C遺跡	
第23図 土器編年図8).....	327	第25図 北新田C遺跡地形図.....	350
第24図 時期別住居跡配置図1).....	330	第26図 北新田C遺跡全体図.....	351
第25図 時期別住居跡規模・主軸方向1).....	331	第27図 第1号方形周溝状遺構実測図.....	352
第26図 時期別住居跡配置図2).....	333	第28図 第1号方形周溝状遺構出土遺物	
第27図 時期別住居跡規模・主軸方向2).....	334	実測図.....	353
第28図 時期別住居跡配置図3).....	336	第29図 グリッド出土土器拓影図.....	353
第29図 時期別住居跡規模・主軸方向3).....	337	溜原B遺跡	
第30図 時期別住居跡配置図4).....	339	第30図 溜原B遺跡地形図.....	358
第31図 時期別住居跡規模・主軸方向4).....	340	第31図 溜原B遺跡グリッド図.....	359
北新田B遺跡		第32図 溜原B遺跡全体図.....	361
第32図 北新田B遺跡地形図.....	346	第33図 第1号溝実測図.....	362
第33図 北新田B遺跡全体図.....	347	第34図 グリッド出土土器拓影図1).....	364
		第35図 グリッド出土土器拓影図2), 上	
		製品・石器実測図.....	365

## 表 目 次

表 1 遺跡一覧表 .....	9	表 5 土玉計測表 .....	96
西坪A遺跡		表 6 土坑一覧表 .....	100
表 2 土坑一覧表 .....	45	表 7 住居跡一覧表 .....	109
向坪B遺跡		北新田A遺跡	
表 3 勾玉計測表 .....	92	表 8 住居跡一覧表 .....	341
表 4 白玉計測表 .....	92		

# 写真図版目次

## 南坪A遺跡

P L 1 調査前全景、調査後全景

P L 2 グリッド出土土器(1),  
グリッド出土土器(2)

P L 3 グリッド出土石器

## 南坪B遺跡

P L 4 調査前全景、調査後全景

P L 5 グリッド出土土器、砥石

## 南坪C遺跡

P L 6 調査前全景、調査後全景

P L 7 グリッド出土土器、内耳土器  
高野遺跡

P L 8 調査前全景,  
グリッド発掘による確認調査

P L 9 第1号溝（昭和57年度調査）,  
第1号溝（昭和59年度調査）

P L 10 グリッド出土土器、内耳土器  
西坪A遺跡

P L 11 調査前全景,  
グリッド発掘による確認調査

P L 12 第2号土坑、第3号土坑、第6  
号土坑、第13号土坑、第19～22  
号土坑、第16・17・41号土坑

P L 13 第1号溝、第1号溝、第2号溝、  
第3号溝、第4号溝、第5・6  
号溝

P L 14 第24～39号土坑、調査後全景  
P L 15 グリッド出土土器、  
グリッド出土陶器

## 西坪B遺跡

P L 16 調査前全景、調査後全景

P L 17 グリッド出土遺物  
向坪A遺跡

P L 18 調査前全景、調査後全景

P L 19 第1号溝、第2号溝、第3号溝、  
第2号溝・第1号井戸、第1号  
井戸、第2号井戸

P L 20 グリッド出土遺物  
向坪B遺跡

P L 21 調査前全景、  
グリッド発掘による確認調査

P L 22 第1号住居跡遺物出土状況、  
第1号住居跡  
P L 23 第1号住居跡遺物出土状況、第  
1号住居跡遺物出土状況、第1  
号住居跡遺物出土状況

P L 24 第1号住居跡遺物出土状況、第  
1号住居跡遺物出土状況、第1  
号住居跡子持勾玉出土状況

P L 25 第1号住居跡勾玉・白玉出土状  
況、第1号住居跡勾玉・白玉出  
土状況、第1号住居跡白玉出土  
状況

P L 26 第2号住居跡遺物出土状況、第  
2号住居跡

P L 27 第2号住居跡遺物出土状況、第  
2号住居跡遺物出土状況、第2  
号住居跡遺物出土状況

P L 28 第1・2号土坑、第3・5・6

号土坑, 第11・19号土坑	P L 52 第28号住居跡, 第29号住居跡
P L 29 第14・15・17・18・21・22号土坑, 第1号溝, 第2号溝	P L 53 第30・31号住居跡, 第32号住居跡
P L 30 住居跡出土土器(1)	P L 54 第33号住居跡, 第34号住居跡
P L 31 住居跡出土土器(2)	P L 55 第35・36号住居跡, 第37・62号住居跡
P L 32 住居跡出土土器(3)	P L 56 第38号住居跡, 第39号住居跡
P L 33 住居跡出土土器(4)	P L 57 第40号住居跡, 第41号住居跡
P L 34 子持勾玉	P L 58 第42号住居跡, 第43号住居跡
P L 35 石製品・土製品	P L 59 第44号住居跡, 第45号住居跡
P L 36 白玉	P L 60 第46号住居跡, 第47号住居跡
P L 37 ひしの実, 第1・2号住居跡, 土坑・グリッド出土遺物	P L 61 第48号住居跡, 第49号住居跡
P L 38 グリッド出土土器  北新田A遺跡	P L 62 第50号住居跡, 第49・51号住居跡
P L 39 調査前全景, グリッド発掘による確認調査	P L 63 第52・55号住居跡  第53号住居跡
P L 40 遺構確認状況, 第1号住居跡	P L 64 第54号住居跡, 第56号住居跡
P L 41 第2号住居跡, 第3号住居跡	P L 65 第57号住居跡, 第58号住居跡
P L 42 第4号住居跡, 第5・11・12号住居跡	P L 66 第59号住居跡, 第60号住居跡
P L 43 第6号住居跡遺物出土状況, 第6号住居跡	P L 67 第61号住居跡, 第1号掘立柱建物跡
P L 44 第7号住居跡, 第8号住居跡	P L 68 第1号土坑, 第2号土坑, 第4号土坑
P L 45 第9号住居跡, 第10号住居跡	P L 69 第3号土坑遺物出土状況, 第3号土坑
P L 46 第13号住居跡, 第14号住居跡	P L 70 第5号土坑, 第6号土坑, 第7号土坑
P L 47 第15・16・17号住居跡, 第18号住居跡	P L 71 第1号溝, 第2号溝, 第3号溝, 第4号溝
P L 48 第19号住居跡, 第20号住居跡	P L 72 第5号溝, 第6号溝, 第7号溝, 第8号溝
P L 49 第21号住居跡, 第22号住居跡	P L 73 第9号溝, 第10号溝, 第1号井戸,
P L 50 第23号住居跡, 第24号住居跡	
P L 51 第25号住居跡, 第26・27号住居跡	

第2号井戸	P L 104 土坑出土土器5), 井戸出土土器,
P L 74 住居跡出土土器(1)	墨書き土器
P L 75 住居跡出土土器(2)	P L 105 石製品、土製品、瓦
P L 76 住居跡出土土器(3)	P L 106 鉄製品(1)
P L 77 住居跡出土土器(4)	P L 107 鉄製品(2)
P L 78 住居跡出土土器(5)	P L 108 鉄製品(3)
P L 79 住居跡出土土器(6)	北新田B遺跡
P L 80 住居跡出土土器(7)	P L 109 調査前全景、調査後全景
P L 81 住居跡出土土器(8)	P L 110 作業風景、グリッド出土土器
P L 82 住居跡出土土器(9)	北新田C遺跡
P L 83 住居跡出土土器(10)	P L 111 調査前全景
P L 84 住居跡出土土器(11)	第1号方形周溝状遺構
P L 85 住居跡出土土器(12)	P L 112 第1号方形周溝状遺構遺物出土状況、
P L 86 住居跡出土土器(13)	第1号方形周溝状遺構出土土器
P L 87 住居跡出土土器(14)	P L 113 グリッド出土土器
P L 88 住居跡出土土器(15)	溜原B遺跡
P L 89 住居跡出土土器(16)	P L 114 調査前全景、 <sup>14</sup> Cグリッド発掘
P L 90 住居跡出土土器(17)	P L 115 第1号溝、グリッド出土遺物
P L 91 住居跡出土土器(18)	
P L 92 住居跡出土土器(19)	
P L 93 住居跡出土土器(20)	
P L 94 住居跡出土土器(21)	
P L 95 住居跡出土土器(22)	
P L 96 住居跡出土土器(23)	
P L 97 住居跡出土土器(24)	
P L 98 住居跡出土土器(25)	
P L 99 住居跡出土土器(26)	
P L 100 住居跡出土土器(27)	
土坑出土土器(1)	
P L 101 土坑出土土器(2)	
P L 102 土坑出土土器(3)	
P L 103 土坑出土土器(4)	

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経過

一般国道4号は一名奥州街道とも呼ばれ、本土を縦貫する幹線道路である。全延長は791.5kmのわが国最長の路線であり、東京都中央区日本橋を起点とし、埼玉・茨城・栃木・福島・宮城・岩手を縦断し青森市に至っている。

近年の産業・経済の発展、人口の集中等から、本国道の交通量の増加は著しいものがある。建設省宇都宮国道工事事務所管内には、古河・小山・宇都宮等の各市街地が広がり、現国道の拡幅は極めて困難である。

建設省は、将来にわたる交通量の緩和をはかるべく、その解決策として新4号国道を計画し、昭和40年に調査を始め、昭和44年に「新4号バイパス」の計画を提示した。新4号バイパスは埼玉県越谷市と栃木県宇都宮市を結ぶ約82kmで、そのうち茨城県部分は21.35kmあり、南から五霞村境町・総和町・三和町・結城市を通過する予定である。

これに伴い、同年、宇都宮国道工事事務所から茨城県教育委員会に、当該路線上の埋蔵文化財の有無、その位置、その取り扱いについての照会がなされた。茨城県教育委員会では直ちに分布調査を実施し、総和町に12遺跡（内1遺跡は境町にもかかる）、三和町に12遺跡、結城市に3遺跡、計27遺跡を確認した。（第1図）

昭和45年から国道工事が開始され、昭和56年までに五霞～境間、小山～宇都宮間が暫定2車線で開通している。

昭和56年6月15日、宇都宮国道工事事務所から茨城県教育委員会に、新4号国道改築事業の施工に係る総和地区と結城地区の埋蔵文化財の確認調査及び遺跡の取り扱いについて照会がなされた。茨城県教育委員会では再度分布調査を行い、同年10月22日、総和地区的南坪A遺跡ほか7遺跡（S 1～S 8）と結城地区的本田遺跡（S 27）を埋蔵文化財包蔵地として、発掘調査による記録保存の措置を講ずるよう回答するとともに、調査機関として茨城県教育財團を紹介した。同年10月29日、宇都宮国道工事事務所から茨城県教育財團に発掘調査の依頼があり、その後、茨城県教育財團では宇都宮国道工事事務所と協議を重ね、昭和57年4月20日委託契約を結んだ。こうして当教育財團による、新4号国道関係遺跡の発掘調査は昭和57年4月から実施されることになった。

なお、新4号国道路線上の27遺跡の略号は、路線上を南から北へS 1（南坪A遺跡）、S 2（南坪B遺跡）、S 3（南坪C遺跡）………S 27（本田遺跡）とした。

## 第2節 調査経過

各遺跡の調査経過については第5章で記すことにして、この章では昭和57年から昭和60年にわたる、総和地区的調査全体の経過の概略を記述する。

総和地区的調査は、当初昭和57年10月から開始する予定であった。国道工事との関係で、昭和57年度は南坪A遺跡ほか7遺跡（S1～S8）のうち、道路の中央線を境として、S1～S6は下り車線部分、S7とS8は上り車線部分を発掘調査し、昭和58年4月から9月までに、それぞれの反対側の車線部分を調査する計画であった。しかし、結城地区的本田遺跡の調査が、昭和57年4月から1年間の予定であったが、遺構、遺物が少なく、7月末日で終了したため、8月から総和地区的調査を開始した。

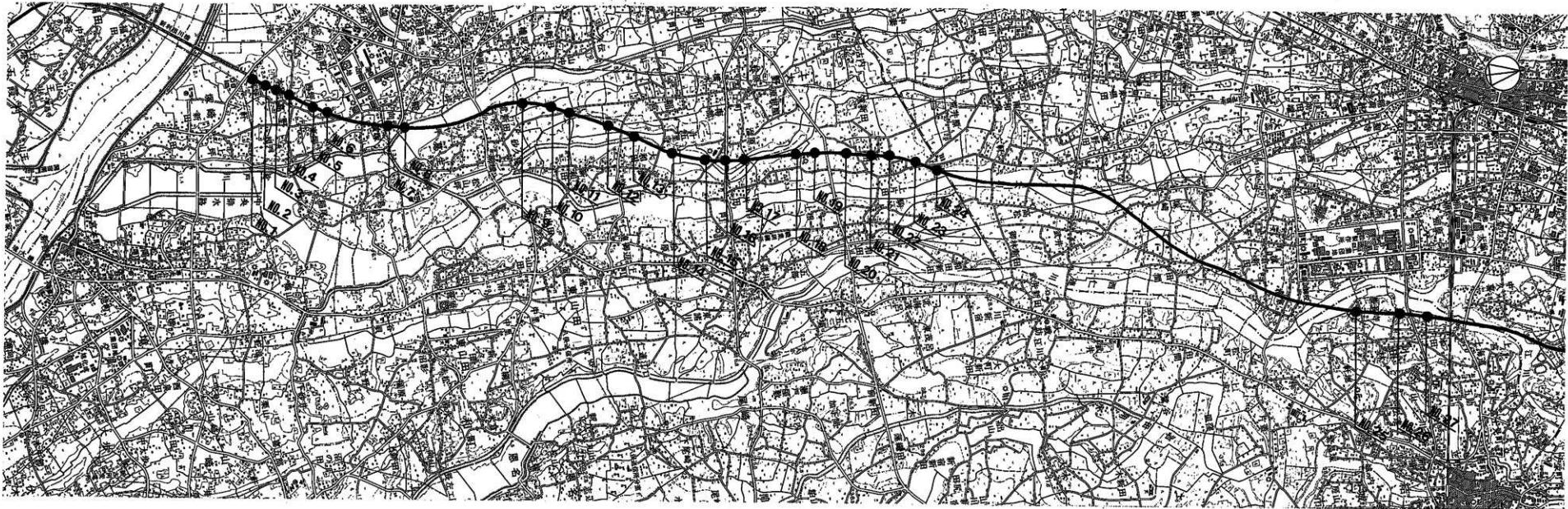
調査は片側車線部分であるため、各遺跡の面積は少なく、8遺跡が工事路線にそって点在しているので、調査を能率的に進める必要があった。そのため、遺跡間の距離が近い場合には、調査の段階によって、2～3遺跡を並行して発掘調査を進めた。しかし、各遺跡とも予想より遺構、遺物が少なく、計画より早く調査が終了する予定がたったので、契約変更をし、引き続き昭和58年度調査計画であった反対側の車線を調査し、3月に高野遺跡の上り車線部分を除いて終了した。高野遺跡の上り車線部分は、用地問題が未解決だったため、調査は後日にまわすこととした。

昭和58年4月からは北新田A遺跡ほか2遺跡（S9～S11）の調査を開始した。こののち、北新田B遺跡と北新田C遺跡は、遺構・遺物がほとんどなく、北新田B遺跡は5月末に北新田C遺跡は7月末に終了した。北新田A遺跡では多数の竪穴住居跡が検出され、昭和59年3月まで調査を実施した。しかし、北新田A遺跡のうち約500m<sup>2</sup>は、用地問題が未解決のため調査は用地問題解決後に実施することにした。

昭和59年4月からは三和地区的二十五里寺A遺跡・二十五里寺B遺跡・二十五里寺C遺跡・溜原A遺跡の調査を開始したが、前述の高野遺跡の上り車線部分の用地問題が解決したため、三和地区的調査と並行して、5月から高野遺跡の調査を実施し、約1か月で終了した。

昭和60年4月から、総和地区的溜原B遺跡、三和地区的下片田遺跡と昭和58年度調査を実施した北新田A遺跡のうち用地問題が未解決であった500m<sup>2</sup>の調査を実施した。

総和地区的南坪A遺跡ほか11遺跡について、昭和57年8月から調査を開始し、昭和60年7月に溜原B遺跡の調査が終了して、総和地区的「新4号バイパス」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査はすべて終了した。



No.	略号	遺跡名	No.	略号	遺跡名	No.	略号	遺跡名	No.	略号	遺跡名	No.	略号	遺跡名	No.	略号	遺跡名	No.	略号	遺跡名
1	S 1	南坪 A 遺跡	6	S 6	西坪 B 遺跡	11	S 11	北新田 C 遺跡	16	S 16	溜原 A 遺跡	21	S 21	中新田 C 遺跡	26	S 26	小田林遺跡			
2	S 2	南坪 B 遺跡	7	S 7	向坪 A 遺跡	12	S 12	二十五里寺 A 遺跡	17	S 17	溜原 B 遺跡	22	S 22	上片田 A 遺跡	27	S 27	本田遺跡			
3	S 3	南坪 C 遺跡	8	S 8	向坪 B 遺跡	13	S 13	二十五里寺 B 遺跡	18	S 18	下片田 遺跡	23	S 23	上片田 B 遺跡						
4	S 4	高野 遺跡	9	S 9	北新田 A 遺跡	14	S 14	二十五里寺 C 遺跡	19	S 19	中新田 A 遺跡	24	S 24	上片田 C 遺跡						
5	S 5	西坪 A 遺跡	10	S 10	北新田 B 遺跡	15	S 15	二十五里寺 D 遺跡	20	S 20	中新田 B 遺跡	25	S 25	善長寺 遺跡						

第1図 茨城県内新4号国道関係遺跡分布図

なお、各遺跡の調査面積、調査期間、調査担当者は次の通りである。

遺跡略号	遺 跡 名	面 積	調 査 期 間	担 当 者
S 1	南坪 A 遺跡	5000m <sup>2</sup>	57. 8. 11~58. 1. 11	小河邦男・高村勇
S 2	南坪 B 遺跡	3480m <sup>2</sup>	57. 8. 11~58. 1. 7	小河邦男・高村勇
S 3	南坪 C 遺跡	3600m <sup>2</sup>	57. 10. 12~57. 11. 16	小河邦男・高村勇
S 4	高野 遺跡	6600m <sup>2</sup>	下り車線部分 57.10.14~58.3.11 上り車線部分 59.5.17~59.6.15	小河邦男・高村勇 中沢時宗・桜井一美
S 5	西坪 A 遺跡	7000m <sup>2</sup>	57. 9. 13~58. 3. 18	久野俊度・中沢時宗
S 6	西坪 B 遺跡	5930m <sup>2</sup>	57. 9. 21~57. 11. 2	久野俊度・中沢時宗
S 7	向坪 A 遺跡	5500m <sup>2</sup>	57. 8. 2~57. 12. 22	久野俊度・中沢時宗
S 8	向坪 B 遺跡	2500m <sup>2</sup>	57. 8. 2~57. 12. 15	久野俊度・中沢時宗
S 9	北新田A 遺跡	16600m <sup>2</sup>	16100m <sup>2</sup> 58. 6. 9~59. 3. 31 500m <sup>2</sup> 60. 4. 1~60. 6. 30	柴正・中沢時宗 和田雄次・桜井一美
S 10	北新田B 遺跡	3200m <sup>2</sup>	58. 5. 10~58. 5. 30	柴正・中沢時宗
S 11	北新田C 遺跡	2800m <sup>2</sup>	58. 5. 31~58. 7. 26	柴正・中沢時宗
S 17	溜原 B 遺跡	2400m <sup>2</sup>	60. 6. 18~60. 7. 13	和田雄次・桜井一美

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

総和町は茨城県の南西部に位置し、東は三和町、西は古河市に接し、南は境町、及び利根川を隔てて五霞村に、北は栃木県野木町に隣接している。人口は41,341人、面積は53.34km<sup>2</sup>で、現在町域は、東西約8.2km、南北約11kmである。かつては純農村地帯であったが、近年工業団地が造成され、大企業が進出して工業化が急速に進みつつある。また、東京から約60kmということもあって、人口も急増し、首都圏のベッドタウンとして的一面も見られる。農業は首都圏向けの野菜栽培が盛んである。鉄道はないが、町の西部を国道4号線が南北に、町の北部を国道125号線が東西に走り、交通の便がよい。地形はなだらかな猿島台地が町域の大部分を占め、南部は利根川に沿って沖積地となっている。

猿島台地は利根川と飯沼川の間にあり、北西から南東方向へ延びている。台地は関東構造盆地の中心部に近い古河市で標高15~16mで、南北に向かってしだいに高くなるが、平均20m前後である。台地は2~3mのローム層に覆われ、主に畑や平地林として利用されており、特に茶の栽培は有名である。

利根川は関東平野を貫流し、太平洋へ注いでいるが、古くは東京湾へ流れ込んでいて、たびたび氾濫をくり返していた。そのため人工的に何度も流路が変えられ、沿岸に低湿な沖積地と多くの湖沼が形成された。利根川左岸の低湿な沖積地に存在した大山沼・瓢迦沼・水海沼・長井戸沼・一ノ谷沼・鶴戸沼などは、利根川の氾濫や流路の変更によってできたものである。これらの沼は猿島台地の奥まで細長く入り込み、複雑な地形を形づくっているが、いずれも近世以降に干拓され、多くは水田に生まれ変わり、現在は大穀倉地帯となっている。

新4号国道は、五霞村から新利根川橋を渡り、猿島台地を横断するように、総和町の南東部、三和町の北西部、小山市の南東部を通過する計画となっている。この国路上の調査遺跡を、南から北へたどってみると、南坪A・南坪B・南坪C・高野・西坪A・西坪Bの6遺跡が点在し、いずれも近接している。この付近は台地と沖積地の違いが明確ではないが、標高は13~15m、水田との比高は1~2mであり、北へ向かうにつれてわずかに高くなる。これらの遺跡の東方約1.5kmには長井戸沼が南北に延びており、利根川から約3.5kmの境町稻尾付近で東西両枝に分岐し、それぞれ台地奥まで狭長な沖積地を形成している。長井戸沼西枝の西側の台地は標高約16.5mで、水田との比高は約6mである。この西枝に面する台地縁辺部には向坪A・向坪B遺跡が所在する。長井戸沼西枝の東側の台地に所在する北新田A・北新田B・北新田C遺跡は、標高19~20mである。同台地上をさらに北上すると三和町に至る。三和町の遺跡としてこの台地の東縁辺部に、二

十五里寺A・二十五里寺B・二十五里寺C・二十五里寺D・溜原A遺跡が連なっている。国道15号を横切って再び総和町に入った所には、長井戸沼東枝から分れた谷津に面して溜原B遺跡が所在する。以上、間に三和町の遺跡を挟むが、総和町の新4号国道関係遺跡は合計12遺跡で、総面積64610m<sup>2</sup>である。

## 第2節 歴史的環境

新4号国道が計画されている利根川の沖積地から猿島台地にかけては、かつては低湿地や湖沼が多く、生産活動が妨げられてきた。しかし、護岸工事、干拓など人々の努力により、現在は水田地帯が広がり、台地は野菜の生産地、工業団地と変貌している。このように人々が日々と築いてきた生活の跡は、原始・古代から認めることができる。

先土器時代の遺跡はまだ調査されていないが、古河市の虚空蔵東遺跡で尖頭器、徳星寺前遺跡でナイフ形石器が採取されている<sup>⑪</sup>。

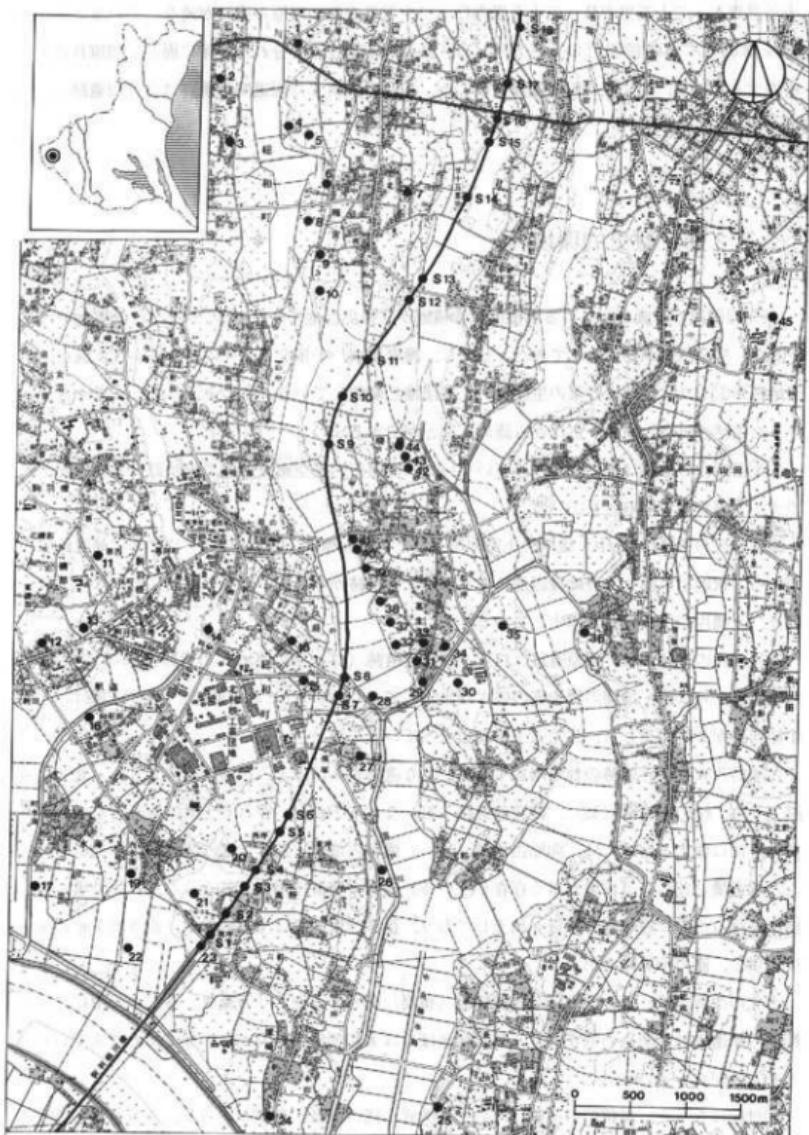
縄文時代の遺跡には、中・後期の土器が出土している大崎A・B遺跡(11・13)、表ノ前遺跡(19)がある。駿河沼に面した台地縁辺部にある秋迦才仮遺跡からは、中期から晩期にかけての土器のほか、土偶片や注口土器が出土している<sup>⑫</sup>。

弥生時代の遺跡には、西原遺跡(14)、萩山A遺跡(41)、西のうせん山遺跡(45)などがある。西原遺跡からは中・後期の甕や壺の破片が出土しており、西のうせん山遺跡では整地の際に、大型の住居跡が2軒発見され、弥生式土器が出土している<sup>⑬</sup>。

古墳時代になると遺跡の数が増加するが、上の遺跡をあげると、行屋西遺跡(8)、北久保遺跡(6)、杉の木遺跡(35)、観音前遺跡(21)などがあり、いずれも土師器が分布している。長井戸沼に面する台地には、向原古墳群(15)、横塚古墳群(27)、毘沙門塚古墳群(26)、べつたり塚古墳(28)など古墳が多く存在している。向原古墳群は円墳3基からなり、2号墳からは樹根を掘った際に短い直刀1振が出土しており<sup>⑭</sup>。毘沙門塚古墳は全長約60m、高さ約7mの前方後円墳で、直刀や埴輪が出土している<sup>⑮</sup>。

大化の改新以後、この地方は下総国猿島(猿島)郡となるが、「万葉集」卷二十の中に、猿島郡から派遣された防人の歌があり、8世紀半ばには大和朝廷の勢力がこの地方にも及んでいたことをものがたっている。

10世紀になると、平将門の活動に伴い、東国武士団の成長、発展があるが、これを促した基礎には鉄と馬の生産が考えられる。その例として、長井戸沼沿岸には金糞B遺跡(3)、弁才天B遺跡(42)、萩山C遺跡(40)などの古代製鉄遺跡が多く分布しており、フイゴ片や大量の鐵滓



第2図 新4号国道周辺の遺跡分布図

表1 遺跡一覧表

番号	遺跡名	種類	遺跡の時代			番号	遺跡名	種類	遺跡の時代		
			先土器	縄文	弥生				古墳	その他の	
S 1	南坪 A 遺跡	包藏地	○			1 5	向原古墳群	古墳群			○
S 2	南坪 B 遺跡	包藏地	○			1 6	向新田遺跡	包藏地			○
S 3	南坪 C 遺跡	包藏地	○			1 7	三島前遺跡	包藏地			○
S 4	高野遺跡	包藏地	○			1 8	林割遺跡	包藏地			○
S 5	西坪 A 遺跡	包藏地				1 9	表ノ前遺跡	包藏地	○		
S 6	西坪 B 遺跡	包藏地				2 0	新田山遺跡	包藏地			○
S 7	向坪 A 遺跡	包藏地				2 1	親音前遺跡	包藏地			○
S 8	向坪 B 遺跡	包藏地				2 2	水海城跡	城館跡			○
S 9	北新田 A 遺跡	包藏地				2 3	南坪遺跡	包藏地	○	○	
S 10	北新田 B 遺跡	包藏地	○			2 4	塚崎貝塚	貝塚	○		
S 11	北新田 C 遺跡	包藏地	○	○		2 5	南長井戸古墳群	古墳群			○
S 12	二十五里寺 A 遺跡	包藏地	○			2 6	毘沙門塚古墳群	古墳群			○
S 13	二十五里寺 B 遺跡	包藏地	○			2 7	横塚古墳群	古墳群			○
S 14	二十五里寺 C 遺跡	包藏地	○			2 8	べったり塚古墳	古墳			○
S 15	二十五里寺 D 遺跡	包藏地				2 9	二階木 B 遺跡	包藏地			○
S 16	溜原 A 遺跡	包藏地	○			3 0	二階木 A 遺跡	包藏地			○
S 17	溜原 B 遺跡	包藏地				3 1	磯ノ木 B 遺跡	包藏地			○
S 18	下片川遺跡	包藏地	○			3 2	磯ノ木 A 遺跡	包藏地			○
1	地蔵堂遺跡	包藏地	○			3 3	磯ノ木 C 遺跡	製鉄跡			○
2	円満寺遺跡 (小堀城跡)	寺院跡				3 4	二階木 C 遺跡	包藏地	○		
3	金糞 B 遺跡	製鉄跡				3 5	杉の木遺跡	包藏地			○
4	本田山古墳群	古墳群	○			3 6	古新田遺跡	包藏地			○
5	本田山 B 遺跡	製鉄跡				3 7	宮戸井遺跡	包藏地			○
6	北久保遺跡	包藏地	○			3 8	鍋穂遺跡	包藏地			○
7	東小路遺跡	製鉄跡				3 9	萩山 B 遺跡	包藏地	○	○	
8	行屋西遺跡	包藏地	○			4 0	萩山 C 遺跡	製鉄跡			○
9	高草遺跡	包藏地	○			4 1	萩山 A 遺跡	包藏地	○	○	
10	高草前古墳群	古墳群				4 2	弁才天 B 遺跡	製鉄跡			○
11	大橋 A 遺跡	包藏地	○			4 3	弁才天 A 遺跡	包藏地			○
12	秋迦才仏遺跡	包藏地	○			4 4	柳橋城跡	城館跡			○
13	大橋 B 遺跡	包藏地	○			4 5	西のうせん山遺跡	包藏地	○		
14	西原遺跡	包藏地	○								

が出土している。また、駒羽根、駒込など馬に関する地名も残っている。

中世には、下河辺や古河公方足利氏の支配下に置かれ、柳橋城跡（44）、小堤城跡（2）、水海城跡（22）などの城館跡が知られている。

このように、各時代にわたり周知の遺跡が数多く分布しているが、調査例はきわめて少なく、今後の調査によって、貴重な資料がもたらされるものと思われる。

#### 注

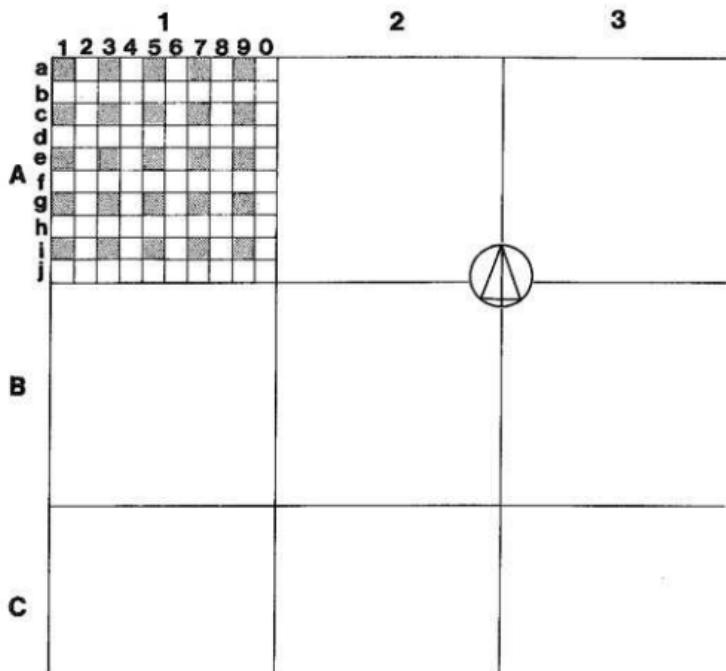
- (1) 古河市史編さん委員会原始古代部会『古河市遺跡分布調査報告書』古河市 昭和59年
- (2) 総和町教育委員会『総和町埋蔵文化財包蔵地基本調査報告書』昭和52年
- (3)(4)(5) 今井隆助『猿島の郷土史』溪水社 昭和40年

## 第3章 調査方法

### 第1節 地区設定

各遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IV系原点を起点として、100mごとのX軸、Y軸の交点を遺跡内に求め、それを基準点とした。その交点が遺跡内にない場合は、遺跡に最も近い交点を起点とし、そこから40mの倍数で遺跡内まで平行移動し、基準点とした。基準点から座標北で40m方眼の大調査区を設定した。さらに大調査区を4m方眼の小調査区に分割した。つまり、40m方眼の大調査区内に4m方眼の小調査区を100個設定したわけである。

大調査区の名称は、北から南へ大文字で、「A」・「B」・「C」……とし、西から東へ大文字で、「1」・「2」・「3」とし、A1区、B2区等と表記した。小調査区の名称は、北から南へ小文字で、「a」・「b」・「c」……「i」・「j」とし、西から東へ小文字で、「1」・「2」・「3」……「9」・「0」とし、大調査区と合わせて「Aa1」・「B2b2」区のように表記



第3図 グリッド概念図

した。この小調査区をグリッドと呼称した。

## 第2節 遺構確認

遺構の確認作業は、第3図のように、全調査区の4分の1の割合で、グリッドの表土を除去するという方法で行うことを基本としたが、新4号国道関係の調査では、單一年度内における調査遺跡数が多いことや、調査計画策定上遺構の有無を早く確認する必要から、次の方法で行った遺跡もある。つまり、先に各遺跡とも8分の1の割合で表土除去を行い、遺構確認をしたのち、またもとに戻りながら、さらに8分の1の割合で表土を除去し、最終的には全調査区の4分の1にあたるグリッドの表土を除去して確認するという、1遺跡にとっては不連続的な二段階の確認方法をとった。次いで遺構の確認状況や遺物の出土状況に応じて、周囲のグリッドを拡張した。

遺構の分布が濃密な場合は、土層を観察し、遺構・遺物を破壊しないと考えられる層まで、重機によって全域を表土除去し、その後に遺構確認を行った。表土からの出土遺物は、出土したグリッド名、層位、年月日を記録して取り上げた。

## 第3節 遺構調査

各遺構の調査については次のような方法を用いた。

住居跡の調査は、長軸方向とそれに直交する方向に、土層観察用のベルトを設け、1～4区に分割して掘り込む四分割法で実施し、地区の名称は北から時計回りに1～4区とした。土坑の調査は、長径で二分する二分割法で実施し、井戸の調査は土坑の調査に準じた。溝の調査は、適宜な位置に土層観察用のベルトを設定し、掘り込んだ。

土層については、土質、色相、各種粒子の含有状態、粘性、硬さ、結まり、吸水性、混入物等と堆積状況を観察して分類の基準とした。

遺物の取り上げについては、各遺構の地区名、遺物番号、出土位置、レベル、年月日等を記録して取り上げた。

平面実測については、遺跡内の大調査区杭を基準に、水糸で1m方眼を地割し、鍾を使って測量した。土層断面、遺構断面の実測は、標高を用いて水糸を水平にセットし、水糸を基準として実測した。

記録の過程は、土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況平面図作成→遺構断面写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成の順を基本とした。図面、写真等に記録できない事項については、調査日誌や遺構カードに記録した。

# 第4章 遺構・遺物の記載方法

## 第1節 遺構の記載方法

本書における遺構の記載方法は、下記の要領で統一した。

### 1 使用記号

堅穴住居跡 - S I 土坑 - S K 溝 - S D 片戸 - S E ピット - P  
掘立柱建物跡 - S B

### 2 遺構に伴う施設等の表示方法

焼土……  カマド…… 

### 3 土層の分類

土層觀察は、「新版標準土色帖」（小山忠正・竹原秀雄編著・日本色研事業株式会社）を使用し、整理の段階で土層を次のように分類記号化し、図中にその記号をもって載せた。

番号	土色名	色相	明度／彩度	含 有 物
1	黒褐色	Hue10YR · 7.5YR	% % % %	a* ローム粒子多量 a ローム粒子 a' ローム粒子少量 a'' ローム粒子極少量
2	暗褐色	Hue10YR	% %	b* ロームブロック多量 b ロームブロック b' ロームブロック少量
3	暗褐色	Hue7.5YR	% %	c* ローム小ブロック多量 c ローム小ブロック c' ローム小ブロック少量
4	褐色	Hue10YR	% %	d* ローム大ブロック多量 d ローム大ブロック d' ローム大ブロック少量
5	褐色	Hue7.5YR	% % %	e* ハードロームブロック多量 e ハードロームブロック e' ハードロームブロック少量
6	に赤い黄褐色	Hue10YR	% %	f ローム (ローム層・ハードローム層)
7	黒色	Hue10YR · 7.5YR	% %	g* 炭化物多量 (炭化粒子多量) g 炭化物 (炭化粒子) g' 炭化物少量 (炭化粒子少量)
8	灰褐色	Hue7.5YR · 2.5YR	% % %	
9	に赤い赤褐色	Hue2.5YR · 5 YR	% % % %	
10	暗赤褐色	Hue2.5YR · 5 YR-10YR	% % % %	
11	暗赤褐色	Hue2.5YR · 5 YR	% %	
12	に赤い褐色	Hue7.5YR	% %	
13	赤褐色	Hue2.5YR · 10R	% % % %	
14	灰赤色	Hue2.5YR	% %	
15	極暗赤褐色	Hue2.5YR	% % %	

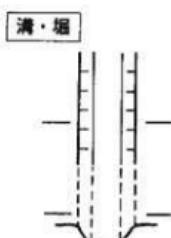
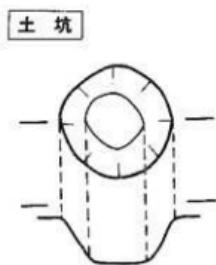
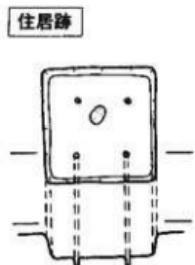
16	赤 黒 色	Hue2.5YR - 10R	g	h*	黒色土多量 (黒色土粒子多量)
17	橙 色	Hue5 YR	g g	h	黒色土 (黒色土粒・黒褐色土)
18	赤 色	Hue10R	g g g	h'	黒色土少量 (黒色土粒子少量)
19	極暗褐色	Hue7.5YR	g	i*	黒色土ブロック多量
20	暗 赤 色	Hue10R	g g	i	黒色土ブロック
21	灰 黄 褐 色	Hue10YR	g	i'	黒色土ブロック少量
22	黄 褐 色	Hue10YR	g	j*	焼土多量 (焼土粒子多量)
23	明 褐 色	Hue7.5YR	g	j	焼土 (焼土粒子)
24	にぼい橙色	Hue7.5YR	g	j'	焼土少量 (焼土粒子少量)
25	褐 灰 色	Hue7.5YR	g	j''	焼土極少量
26	暗オリーブ色	Hue5 R	g	l*	焼土ブロック多量 (焼土塊)
27	暗 赤 灰 色	Hue10R	g	l	焼土ブロック (焼土小ブロック)
28	灰 赤 色	Hue10R	g	l'	焼土ブロック少量 (焼土小ブロック少量)
				l''	焼土ブロック極少量
				m*	粘土多量 (粘土粒子多量・粘土ブロック多量)
				m	粘土 (砂質粘土・粘土粒子・粘土ブロック)
				m'	粘土少量 (粘土粒子少量・粘土ブロック少量)
				m''	粘土極少量
				n*	砂粒多量
				n	砂粒 (細砂粒)
				n'	砂粒少量
				o*	ローム微粒子多量
				o	ローム微粒子
				o'	ローム微粒子少量
				K	擾乱
				D	灰
				P	小块
				Q	木炭

#### 4 造構実測図と作成方法

(1) 住居跡

(2) 土坑

(3) 溝



第4図 造構実測図の作成方法

- 住居跡は、縮尺20分の1の原図をトレースして版組みし、それをさらに4分の1に縮小して掲載した。
- 土坑、井戸は縮尺20分の1の原図をトレースして版組みし、それをさらに3分の1に縮小して掲載した。
- カマドは、縮尺10分の1の原図をトレースして版組みし、それをさらに4分の1に縮小して掲載した。
- 溝は、縮尺20分の1の原図をトレースして版組みし、それをさらに大きさに応じて、2分の1、3分の1、4分の1に縮小して掲載した。

## 5 一覧表の見方について

### (1) 住居跡一覧表

住居 番号	位置	主軸方向	平面形	規 模		床面	柱穴数	炉・カマド	覆土	出土遺物	時期	備 考
				長軸×短軸(m)	壁高(cm)							

- 位置は、造構が占める面積の割合が最も大きいグリッド名をもって表示した。
- 主軸方向は、座標北と長軸のなす角度で示した。
- 平面形は、掘り込み上面の形状を記した。
- 規模の長軸×短軸は上面の計測値、壁高は残存壁高の計測値を記した。
- 床面は「平坦」、「凹凸」、「緩い起伏」に分類して表記した。
- 柱穴数は、その住居跡に伴うと考えられる柱穴数を記した。
- 炉とカマドは、その種別を記し、検出されない住居跡については空欄とした。
- 覆土は、堆積の状態が自然堆積の場合は「自然」、人為堆積の場合は「人為」、擾乱を受けている場合は「擾乱」と記した。
- 出土遺物は、主な遺物名を記した。
- 時期は、出土遺物から時期判定の可能な範囲で、土器型式によって記した。
- 備考は、重複関係等について記した。

### (2) 土坑一覧表について

番 号	位 置	長 軸 方 向	平 面 形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	出 土 遺 物	備 考
				長軸×短軸(m)	深さ(cm)					

- 土坑一覧表については、住居跡一覧表の項目にはば準じた。
- 壁面は、底面からの立ち上がりの状態を簡潔に記した。
- 底面は、住居跡の「床面」の項に準じた。

## 第2節 遺物の記載方法

遺跡によって遺物の出土量は異なるが、可能な限り復元、実測、拓本等をして、できるだけ多く掲載した。

### 1 実測図の作成方法と掲載方法

#### (1) 作成方法

- ・土器は、四分割法を用い、中心線を挟んで左側に外面、右側に内面及び断面を実測した。
- ・石器、石製品は展開図法を基本とした。
- ・上記以外の遺物については、効果的と思われる方法で実測した。

#### (2) 掲載方法

- ・実測図の掲載にあたっては、縮尺4分の1を基本としたが、遺物の大きさによっては1分の1、2分の1、3分の1の縮尺で掲載した。
- ・上器撮影図は、右側に断面を載せ、縮尺3分の1で掲載した。なお、繊維を混入するものについては、断面に点を付加した。

### 2 出土遺物解説表について

遺構ごとの遺物を、次のような表にまとめた。

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
----	----	--------	-------	-------	----------	----

- ・番号は、実測図中の番号と同じものである。
- ・法量は、口径—A、器高—B、底径—C、高台径—D、高台高—Eとし、単位はcmである。なお、( )は推定値である。
- ・胎土・焼成・色調の欄は、上から胎土、焼成、色調の順で記した。焼成については、良好、普通、不良に3分類し、焼き締って硬いものは良好、焼成があまく手でこすると器面が剥落するものを不良とし、その中間のものを普通とした。色調については、前節の土層の分類と同じ色帖を使用した。
- ・備考は、完存率や付着物、その他必要と思われる事項を記した。
- ・なお、この表で解説できない遺物については、文章で解説した。

## 第5章 遺跡の調査結果

### 南坪A遺跡

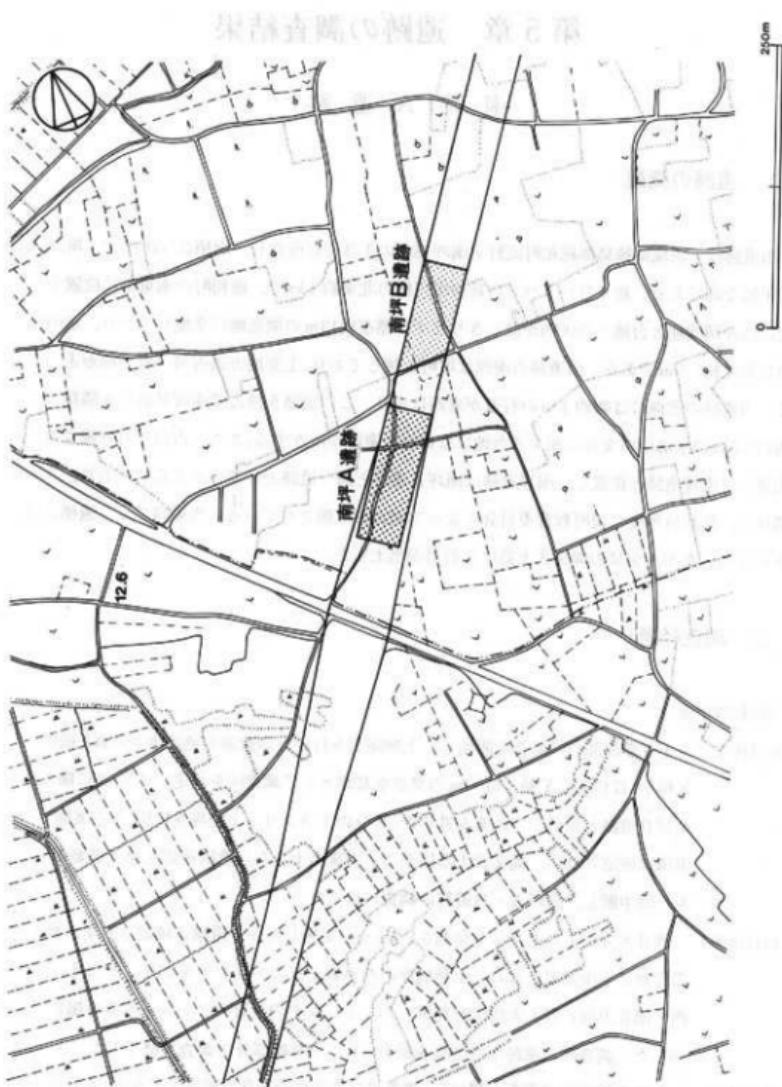
#### 1 遺跡の概観

当遺跡は、茨城県猿島郡総和町高野字南坪1837の1ほかに所在し、面積は5000m<sup>2</sup>で、現況はほぼ平坦な畑である。新4号バイパスの新利根川橋の北東約1kmで、総和町の南東端に位置する。近辺は沖積低地と台地との区別がはっきりせず、標高約13mの微高地に立地しており、水田面との比高は約1.5mである。当遺跡の南側は境町と接しており、主要地方道古河一岩井線が走っている。当遺跡の北側には幅約4mの町道が東西に走り、この道路を挟んで南坪B遺跡が隣接し、北西約0.5kmの水海沼の支谷に面する台地には観音山遺跡が所在する。また、古河一岩井線を挟んで南側には南坪遺跡が位置し、南坪遺跡は南坪A遺跡と同一遺跡としてとらえられており、工事の関係で、昭和51年度に境町教育委員会によって調査が実施されている。<sup>(1)</sup>当遺跡では、遺構は確認されなかったが、少量の縄文式土器片と石器が出土した。

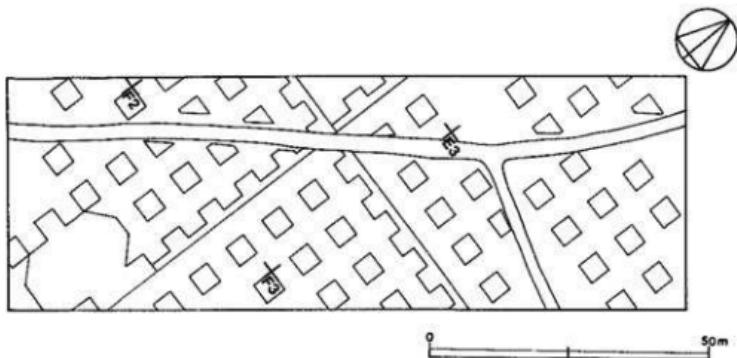
#### 2 調査経過

##### 〈昭和57年度〉

- 8月後半 下り車線部分の調査を開始し、上物除去を行い、調査前の遺跡全景写真を撮影した。X軸+14740m、Y軸-5700mの交点を基準として調査区を設定して北側に隣接する南坪B遺跡と並行して作業を進めた。8分の1のグリッド発掘をF2区から実施したが、遺構は確認されず、縄文式土器片がごく少量出土した。遺構確認を急ぐ必要から調査を一時中断し、向坪A・B遺跡の調査に移った。
- 12月後半 残り8分の1のグリッド発掘をF2区から実施したが、遺構は確認されず、縄文式土器片がごく少量出土した。土層観察のため幅1mのトレチをグリッドにそって、東西・南北方向に各1本設定し発掘した。トレチの土層セクション写真を撮影し、実測した。調査後の遺跡全景写真を撮影し、下り車線部分の調査を終了した。
- 1月前半 上り車線部分の調査を開始し、調査前の遺跡全景写真を撮影してから、4分の1のグリッドを発掘した。さらに遺跡の中で比較的土器が多く出土しているF2区を一部拡張したが、遺構は確認されず、縄文式土器片がごく少量出土しただけであった。調査後の遺跡全景写真を撮影し、上り車線部分の調査を終了し、南坪A遺跡の調査を完了した。



第5図 南坪A遺跡地形図



第6図 南坪A遺跡全体図

### 3 遺物

当遺跡では、面積の4分の1のグリッド発掘を行い、さらに比較的遺物が多く出土したF2g<sub>3</sub>を中心に周囲のグリッドを拡張して遺構の確認に努めたが、縄文式土器片約50点と石器3点が出土しただけである。

#### (1) 土器

##### 縄文式土器 (第7図1~35)

いずれも破片であり、器形をうかがえるものはない。土器形式や施文法から、次のように3群に分けられる。

##### 第1群土器 (1~24・35)

繊維を含み、前期の黒浜式に比定できる土器を本群とした。色調は褐色、にぶい褐色、灰褐色のものが多く、胎土には繊維のほかに砂粒を含んでいる。焼成は普通である。

##### 第1類 (1~18)

縄文を唯一の文様とするものを本類とした。1・2は口縁部に無文部を残し、その下からLRの縄文が施されており、1は緩い波状口縁である。3も口縁部であるが、無文部を残さずに複数のLRの縄文が施されている。4~14は胴部片でいずれもLRの縄文が施されているが、擦りの緩いものが多い。15・16は無節である。17・18は単節と思われるが、擦りは不明である。

##### 第2類 (19~23)

無文地に沈線の文様が配されているものを本類とした。19と21は3本、20は2本の平行沈線によって文様を構成している。22・23は太い棒状工具によって複数の沈線を走らせている。

### 第3類 (24・35)

第1・2類以外のものを一括した。24は円形刺突文が横位に3列施されている。35は底部片で平底である。無文であるが繊維痕が多く観察される。

### 第2群土器 (25・26)

後期前半の壺之内Ⅱ式に比定できるものである。25・26は沈線による直線や曲線のX画内に、L.Rの縄文が充填されている。色調は25が黒褐色、26が灰褐色を呈している。いずれも胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。

### 第3群土器 (27~34)

安行Ⅰ式に比定できる土器群である。色調は褐色、にぶい褐色を呈するものが多く、胎土には砂粒・スコリアを含んでいる。焼成はいずれも普通である。

#### 第1類 (27)

帶状縄文系の土器を本類とした。27は台付鉢の台部片である。隆起帶状縄文が平行に2帯巡つておらず、下の帯に接して径7mmの円形の穿孔がみられる。

#### 第2類 (28~34)

いわゆる純縄文系の土器を本類とした。28は口縁直下に列点刺突文を巡らし、その下に細い斜行の条線文が施されている。29は胴部片で縱位の条線文を地文とし、列点状刺突文を配した紐線が横位に付されている。30~34はいずれも胴部片で、条線文が施されているものである。

## (2) 石器 (第8図)

### 1 石鎌 (1)

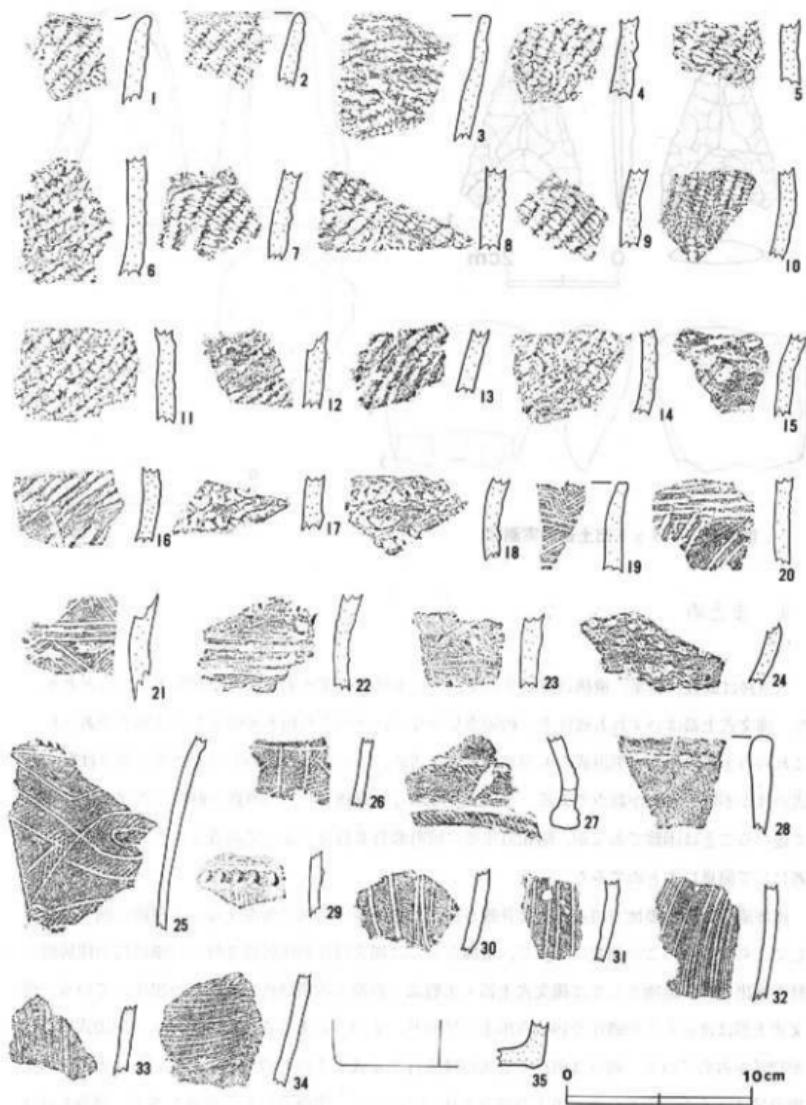
簡基無茎鎌で入念に削離されている。片方の脚部先端が欠損している。長さ3.1cm・幅2.1cm・厚さ0.4cm・重さ1.8gで、石質はチャートである。

### 2 締器 (3)

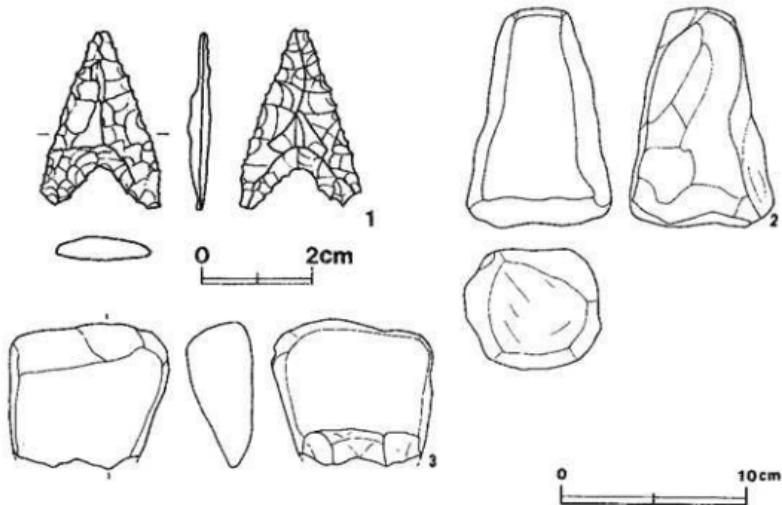
扁平な砾の縁辺に加熱して刃部(片刃)を作り出している。長さ7.9cm・幅8.6cm・厚さ3.5cm・重さ346gで、石質は流紋岩である。

### 3 スタンプ形石器 (2)

河原石の下半部を打ち欠き、側縁を敲打によって幾分えぐるように加工している。手で握ると握りやすい。底面の平坦部が使用面であるが、使用痕はほとんど観察されない。長さ11.7cm・幅7.8cm・重さ750gで、石質は石英斑岩である。



第7図 グリッド出土土器拓影図



第8図 グリッド出土遺物実測図

#### 4 総まとめ

当遺跡は調査の結果、造構は確認されず、ごく少暈の縄文式土器と石器が出土したにとどまった。縄文式土器はいずれも破片で、約50点しかなく、そのうち折本可能なものは34点であった。これらの土器片のうち黒浜式のものが約72%を占め、次いで安行式のものが20%、残りは堀之内式のほか不明のものが数点である。このような少ない遺物から、当遺跡の時期や性格などについて述べることは困難であるが、昭和51年度に境町教育委員会によって調査された、南坪遺跡を参考にして簡単にまとめてみた。

南坪遺跡は、主要地方道古河一岩井線を挟んで当遺跡の南側に所在する。当遺跡と同一遺跡としてとらえられ、この調査によって、造構としては縄文時代の住居跡3軒、古墳時代の住居跡6軒が検出され、遺物としては縄文式土器・土製品・石器と古墳時代の土師器が出上している。縄文式土器はほとんどが破片で1942点出土しており、そのうち黒浜式のものが75%、関山式のものが12%を占めている。残りは円戸下層式以降安行3a式までのものが出土している。当遺跡の遺物の量ははるかに少ないが、出土の割合を比べてみると、黒浜式のものが最も多く、割合もほぼ同じである。

これらのことから当遺跡を考えてみると

- ① 当遺跡では遺構が確認されなかったこと。
- ② 当遺跡から出土した遺物は南坪遺跡よりも少ないとこと。
- ③ 両遺跡とも遺物の中で黒浜式の土器が最も多いこと。
- ④ 当遺跡は南坪遺跡の北約150mに位置していること。

以上のことを考え合わせると、黒浜式期においては、当遺跡は、南坪遺跡の集落跡の一部であり、当時の人々の生活圏であったのではないかと考えられる。

#### 注

(1)新4号遺跡発掘調査会『南坪遺跡』昭和53年



## 南坪B遺跡

### 1 遺跡の概観

当遺跡は、茨城県猿島郡和町高野字南坪1795の1ほかに所在し、面積は3480m<sup>2</sup>、現況は標高約13.5mの平坦な畑で、一部宅地と水田がふくまれている。南坪A遺跡の北側に幅4mほどの町道が東西に走り、その町道を挟んで南坪B遺跡が位置している。地形的には南坪A遺跡とほとんど変わらず、水田面との比高も約1.5mである。当遺跡の周辺は農家が点在しており、北方約300mには南坪C遺跡が所在する。当遺跡ではごく少量の縄文式土器片が出土しただけで、遺構は確認されなかった。

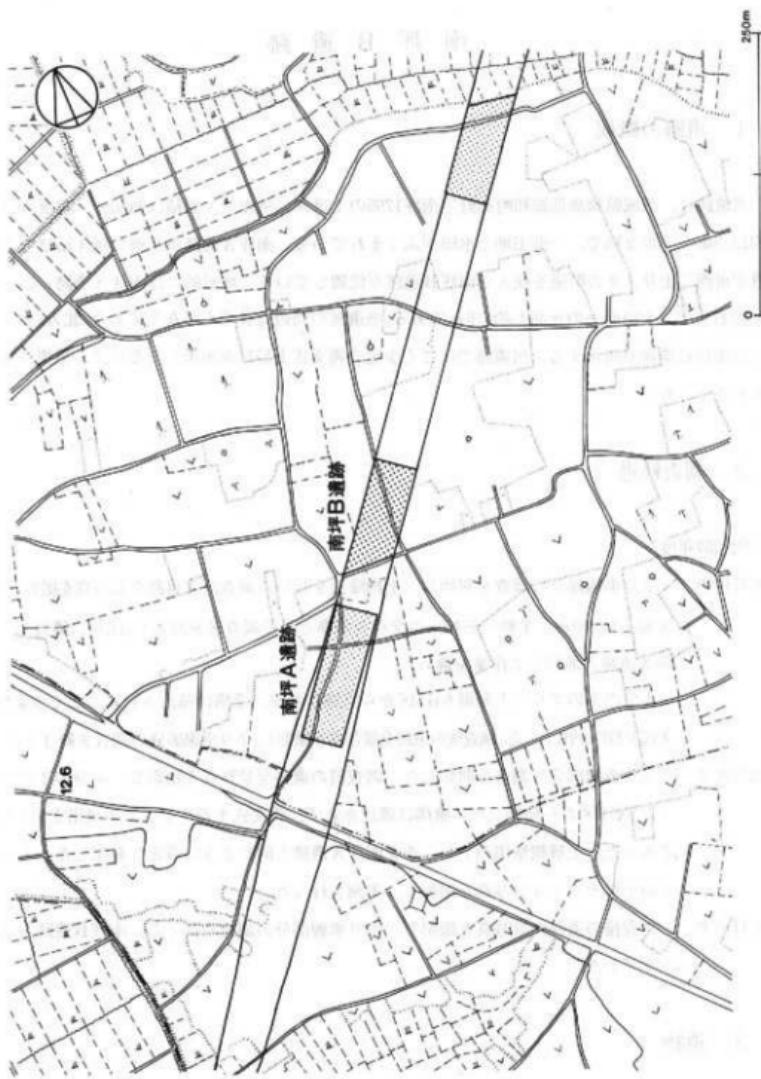
### 2 調査経過

〈昭和57年度〉

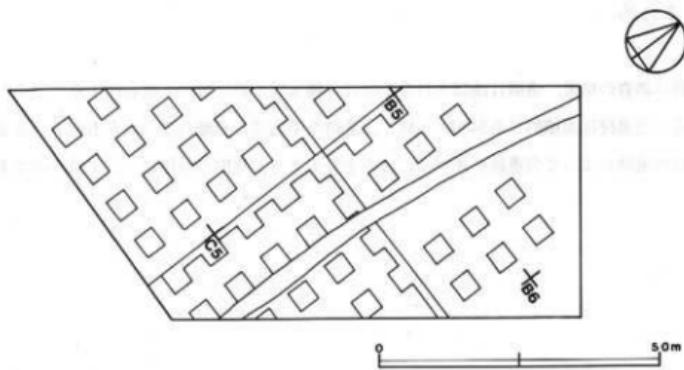
- 8月後半　　下り車線部分の調査を開始し、上物除去を行い、調査前の遺跡全景写真を撮影した。  
X軸+14900m、Y軸-5540mの交点を基準として調査区を設定し、南側に隣接する南坪A遺跡と並行して作業を進めた。
- 4分の1のグリッド発掘をB5区から実施したが、遺構は確認されず、ごく少量の縄文式土器片が出土した。調査後の遺跡全景写真を撮影し、下り車線部分の調査を終了した。
- 12月後半　　上り車線部分の調査を開始した。調査前の遺跡全景写真を撮影し、4分の1のグリッドをC4区から発掘した。遺構は確認されず、縄文式土器片がごく少量出土しただけであった。土層観察用のトレチを南坪A遺跡と同じように設定し発掘した。トレチの土層セクション写真を撮影し、実測を行った。
- 1月前半　　調査後の遺跡全景写真を撮影し、上り車線部分の調査を終了し、南坪B遺跡の調査が完了した。

### 3 遺物

当遺跡からは、面積の4分の1のグリッド発掘の結果、遺構は確認できなかった。また、遺物も縄文式土器片が4点と砥石片が1点出土しただけである。



第9図 南坪B遺跡地形図



第10図 南坪B遺跡全体図

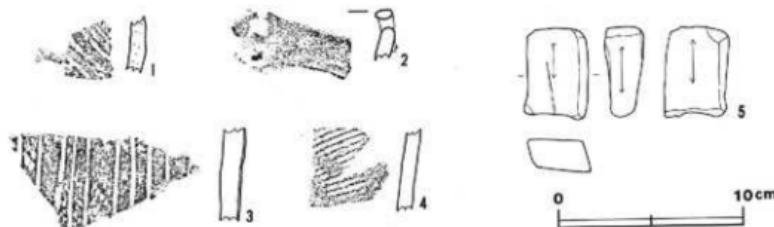
(1) 土器 (第11図)

縄文式土器 (1~4)

1は胴部片で、器面が荒れており判断しにくいが、無節の縄文が施されている。色調は灰褐色を呈し、胎土には纖維や砂粒を含んでいる。焼成は良くない。2は口縁部片で、波状口縁を呈し、波頂部に貫通孔を有している。3は胴部でR Lの地文に継位の太い沈線が施されている。2~4とも色調はにぼい褐色を呈し、胎土に砂粒を含んでいる。焼成は普通である。1は黒浜式、2~4は堀之内式のものと思われる。

(2) 石製品 (第11図-5)

5は砥石である。形状は扁平な直方体である。両端を除いて4面が使用され、そのうち上下2面が最も使用されている。下半部を欠損しており、現存長は4.9cm・幅3.6cm・厚さ1.9cmであり、石質は凝灰岩である。時期は不明である。



第11図 グリッド出土土器拓影図・石器実測図

#### 4　まとめ

当遺跡は調査の結果、遺構は確認されなかった。縄文式土器片数点と磁石片1点が出土しただけである。当遺跡は面積的にも3480m<sup>2</sup>と狭く、遺跡の中心部から離れていたとも考えられるが、これだけの遺物によって当遺跡を述べるには不十分であり、時期や性格については不明である。

## 南坪C遺跡

### 1 遺跡の概観

当遺跡は、茨城県猿島郡緑町高野字本田1769ほかに所在し、面積は3600m<sup>2</sup>、現況は標高13.5mの山林である。遺跡の北側には西から東へ向かって幅約50mの細長い谷津があり込んでいる。谷津は水田として利用されており、遺跡は水田面との比高が約1.5mの微高地に立地している。当遺跡は、南側で標高13.7m、北側では13.2mで、南側が高く、遺跡の北側の谷津に向って、ややなだらかに傾斜している。谷津田を隔てて当遺跡の北方100mには高野遺跡が所在し、南方約300mには南坪B遺跡が所在している。当遺跡では全面を表土除去し、遺構確認したが、遺構は確認されず、わずかに縄文式土器片が出土しただけである。

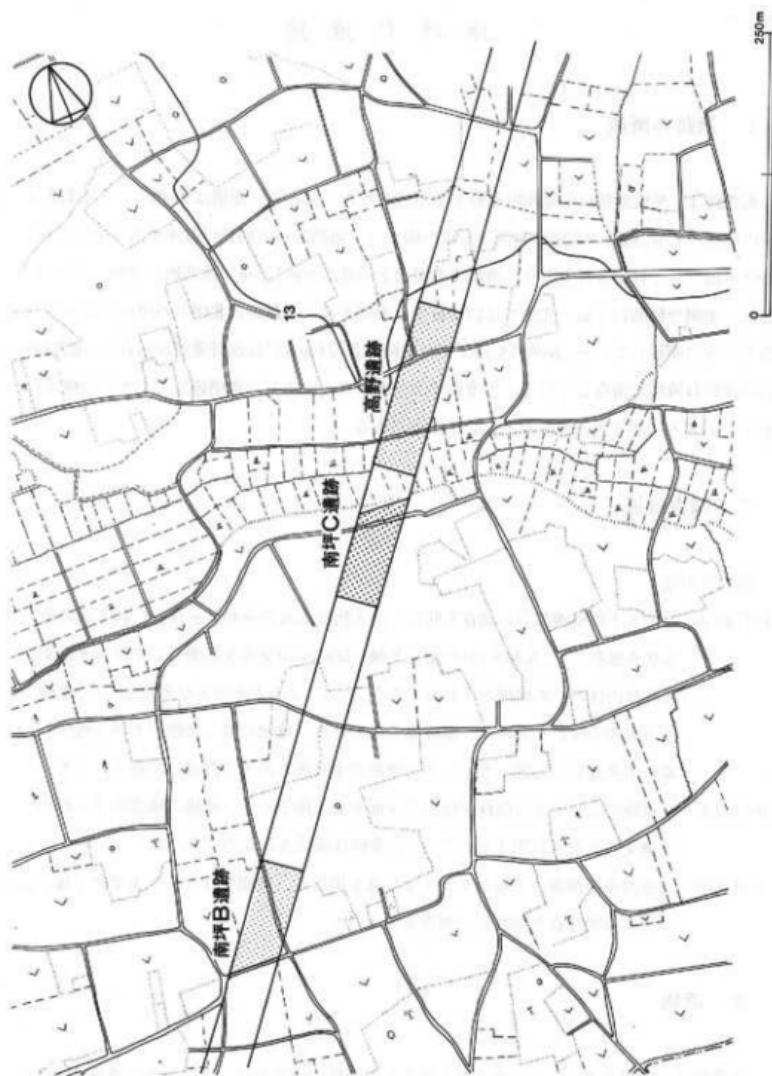
### 2 調査経過

(昭和57年度)

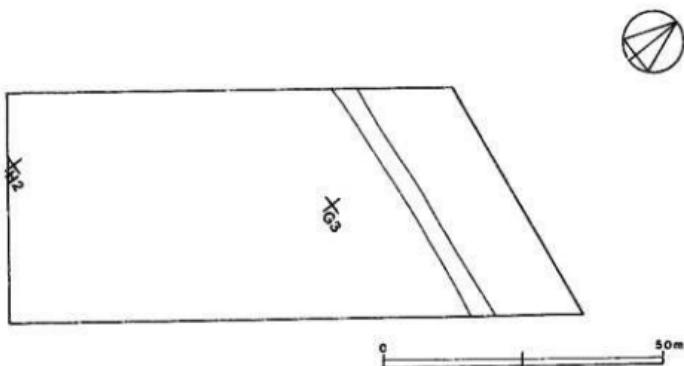
- 10月前半 上・下両車線部分の調査を開始し、土物除去及び草刈りを行い、調査前の遺跡全景写真を撮影した。X軸+15160m、Y軸+5360mの交点を基準として調査区を設定した。遺跡は山林のため根株がきわめて多く、人力による表土除去が困難なため、重機を導入する方向で検討を進めた。重機導入にあたり、遺物の混入状態や土層を観察するため、遺跡中央部に1m幅のトレンチを道路の中央線に沿って設定し試掘を行った。
- 10月後半 重機により大きな根株を除いて全面を表土除去した。遺構の確認作業を行い、少量の縄文式土器片が出土しただけで、遺構は確認されなかつた。
- 11月前半 道路の両側面の土層セクション写真を撮影し、実測を行った。実測終了後、調査後の遺跡全景写真を撮影し、調査を完了した。

### 3 遺物

当遺跡は、重機を導入して全面を表土除去し、遺構の確認を行った。しかし遺構は確認できず、縄文式土器片20点と内耳上器片1点が出土しただけである。



第12図 南坪C遺跡地形図



第13図 南坪C遺跡全体図

(1) 土器 (第14図)

縄文式土器 (1~20)

いずれも破片で、器形をうかがえるものはない。拓本が可能なものはすべて掲載し、3群に分類した。

第1群土器 (1)

早期末のものと思われる土器である。1は胴部片で、縦条体条痕文を地文とし、縦条体压痕文が横位に2本施されており、内面には貝殻条痕文が見られる。色調は褐色を呈しており、胎土は砂粒・小礫・繊維を含んでいる。焼成は普通であるが、摩滅している。

第2群土器 (2~16・20)

繊維を含む前期の黒浜式に比定される土器である。色調は褐色やにぶい褐色のものが多く、胎土は繊維のほか砂粒を含んでいる。焼成は普通である。

第1類 (2~11)

縄文を唯一の文様とするものを本類とした。2は口縁部にわずかに無文部が残り、その下からRLの繩文が施されている。3~11はいずれも胴部片であり、3はRL、4・5・6はLRの繩文が施されている。7・8・9は燃りがゆるく無筋のように見えるが、RLの繩文が施されている。10・11は、太い条と細い条を燃り合わせた異条繩文である。

第2類 (12~15)

無文地に半截竹管によって文様を構成しているものを本類とした。12は口縁部片で、斜行の平行沈線が雜に施されている。13~15は胴部片で、13は肋骨文のように思われ、途中で刺突文が加えられている。14は鉛齒状文、15は刺突文が施されている。

### 第3類 (16・20)

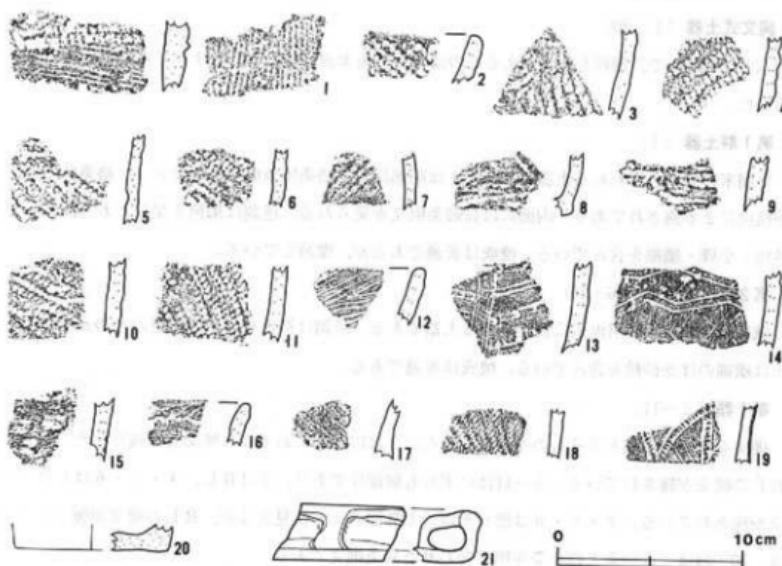
第1・2類以外のものを一括した。16は口縁部片で無文である。20は底部片で平底である。いずれも器面に纖維痕が顕著に残っている。

### 第3群土器 (17~19)

前期後半の諸式と思われるものである。いずれも胴部片で、17・18はR Lの繩文が施され、19は半截竹管による連続爪形文が施されている。色調は17・18が褐色、19が橙色を呈している。いずれも胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。

### 内耳土器 (21)

21は平底で、体部はほぼ垂直に立ち上がっている。口縁部は丸味をもって膨らんでいる。内耳は粘土を板状にのばしたもので、口縁上端から付されている。器内外面ともナデ整形が施されている。器高は2.8cmと低い。色調は外面が褐灰色、内面がにぶい褐色を呈している。胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。



第14図 グリッド出土土器拓影図・実測図

#### 4 まとめ

当遺跡は全面を表土除去し、造構確認に努めたが、造構は確認できず少量の縄文式土器片と内耳土器片が出土しただけである。縄文式土器片は20点あり、そのうち早期末と思われるものが1点、諸磯式と思われるものが3点。残りはすべて黒浜式のものである。また、水田を挟んで当遺跡の北方100mに高野遺跡が所在するが、この遺跡の南部から黒浜式の土器片がわずかではあるが出土しており、黒浜式以外の縄文式土器は出土していない。いずれも量的には少なく、推定の域を脱し得ないが、この付近に黒浜期の遺跡が存在したことが考えられ、当遺跡と高野遺跡の南側部分は、往時の人々の生活圏の一部であると思われる。



# 高野遺跡

## 1 遺跡の概観

当遺跡は、茨城県猿島郡総和町高野字西坪554の1ほかに所在し、面積は6600m<sup>2</sup>で、現況は畑である。高野集落を二分するように、西から東へ向かって幅50m前後の細長い谷津が延びており、遺跡はその谷津の北側の微高地に立地している。標高は12.5~13.5mで、南から北に向かってわずかに高く、水田面との比高も0.5~1.5mである。遺跡の中央部を町道が東西に横切り、遺跡は北側と南側に二分されている。当遺跡の南方約100mには、谷津を挟んで南坪C遺跡が所在し、北方約300mには西坪A遺跡が所在する。当遺跡は下り車線部分を昭和57年度に調査したが、上り車線部分は用地問題の解決が遅れたため、昭和59年度に調査を実施した。当遺跡では、溝1条が検出され、遺物はグリッドから少量の縄文式土器片と内耳土器片が出土した。

## 2 調査経過

### （昭和57年度）

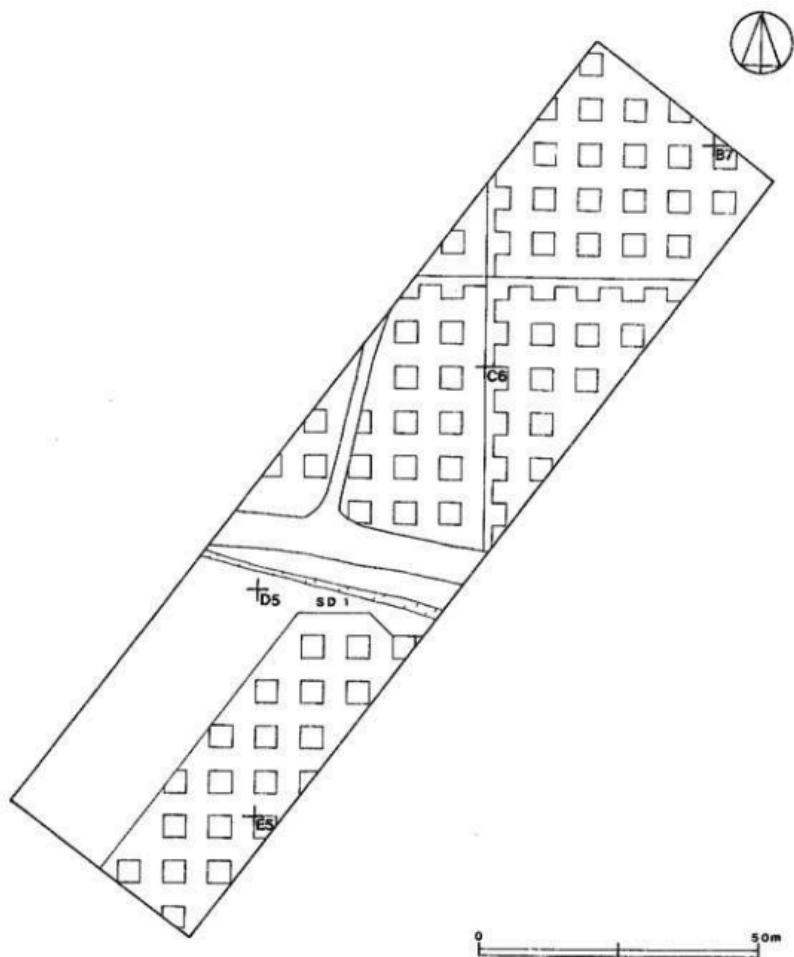
- 10月後半 下り車線部分の調査を開始し、土物除去をおこない、調査前の遺跡全景写真を撮影した。X軸+15360m、Y軸-5200mの交点を基準として調査区を設定した。遺跡中央を横切る道路の南側は、幅1mのトレンチを道路中央線に沿って3本設定して試掘した。試掘の結果遺構確認面までが70~100cmと深く、水はけが悪いため重機で表土除去をすることにした。道路の南側を重機によって表土除去を進め、遺構確認作業を実施した。C4区からC5区にかけて溝1条を確認した。確認作業中、ごく少量の縄文式土器片が出土した。道路南側の遺構確認が終了した段階で調査を一時中断し、南坪C遺跡の遺構確認作業に移った。
- 2月前半 第1号溝の調査を実施した。溝は遺跡の中央部を横切る道路の南側に、ほぼ東西に延びており、出土遺物はなかった。道路の北側の土物除去を行い、B6・C5区の4分の1のグリッド発掘を実施したが、遺構は確認されず、グリッドから内耳土器片が数点出土した。溝の調査が終了したため調査の主力を西坪A遺跡の調査に移した。
- 2月後半 土層観察用トレンチを幅1mで東西・南北方向に各1本設置し発掘した。
- 3月前半 トレンチの土層セクション写真を撮影し、実測した。遺跡全体を清掃し、調査後の遺跡全景写真を撮影して、下り車線部分の調査を完了した。



第15図 高野遺跡地形図

〈昭和59年度〉

5月後半 上り車線部分の調査を開始し、上物を除去し草刈りを行った。調査前の遺跡全景写真を撮影して、調査区を設定した。C 6区から南へ向かって4分の1のグリッド発掘を行い、C5区からD5区にかけて第1号溝の延長部を確認した。グリッドからはごく少量



第16図 高野遺跡全体図

の縄文式土器片が出土した。下り車線部分の土層観察用のトレンチを延長し発掘を行った。

6月前半 第1号溝の周辺のグリッドを拡張し、トレンチの土層セクション写真を撮影して、実測した。第1号溝の延長部の調査を行った結果、下り車線部分と同様に直線的に調査区域外へ延びており、出土遺物はなかった。調査後の遺跡全景写真を撮影し、補足調査を行い、上り車線部分の調査を完了した。

### 3 遺構と遺物

当遺跡からは、溝1条が検出された。溝からの出土遺物はなく、各グリッドからの遺物も縄文土器片14点と内耳土器片3点が出土しただけである。

#### (1) 溝

##### 第1号溝（第17図）

本跡は、C4・C5・D5区にかけて検出され、遺跡の中央部を東西に走る町道には沿っている。主軸方向はN-77°Wを指し、西北西-東南東の方向で直線的に延びている。検出された溝の長さは約44mであるが、両端とも調査区域外まで延びている。断面は端形を呈しており、上幅は1.6~1.8mで西寄りの方がわずかに細くなっている。遺構確認面から底面までの深さは50~60cmである。底面のレベルは、東側から西へ向かって中間部までは15cmほど低くなり、さらに中間部から西端に向かうと約60cm低くなっている。底面や両壁面はハードロームで、凸凹が多い。覆土は自然堆積の状態を示しており、黒褐色土が上である。上層にはローム粒子、下層にはロームブロックが含まれている。出土遺物はなく、時期や性格については不明である。

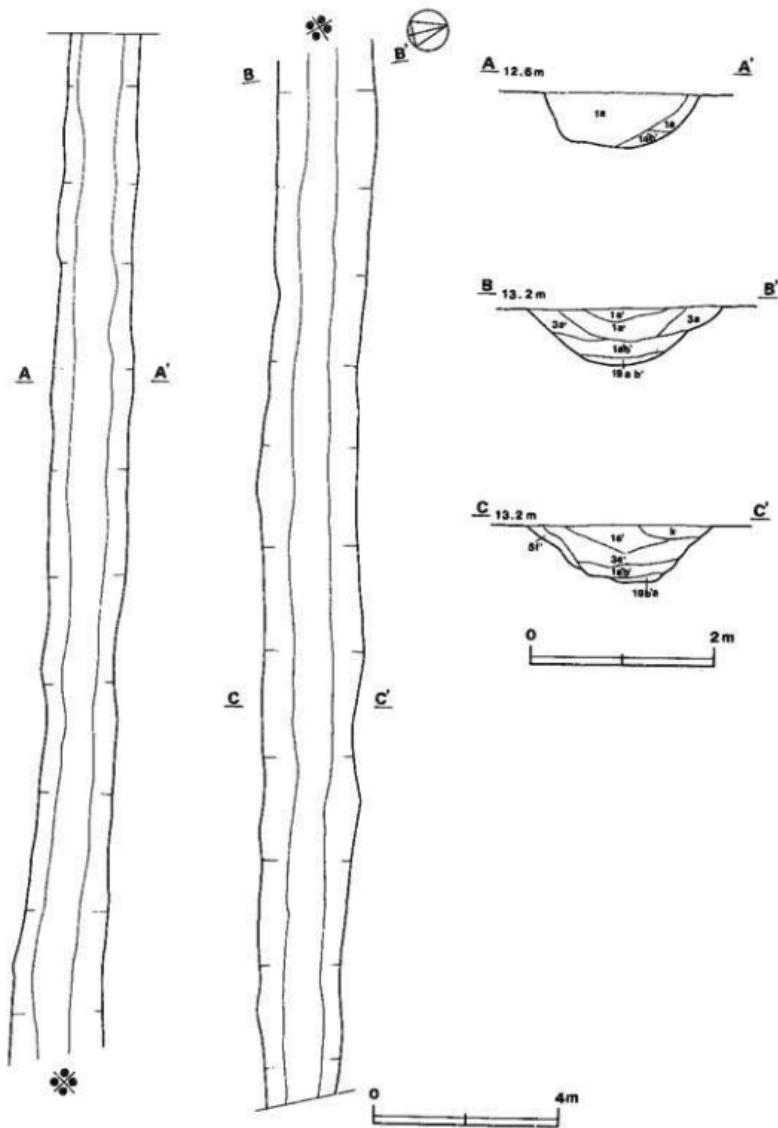
#### (2) 遺物

遺跡の南部のグリッドからは縄文式土器、北部のグリッドからは内耳土器が出土している。

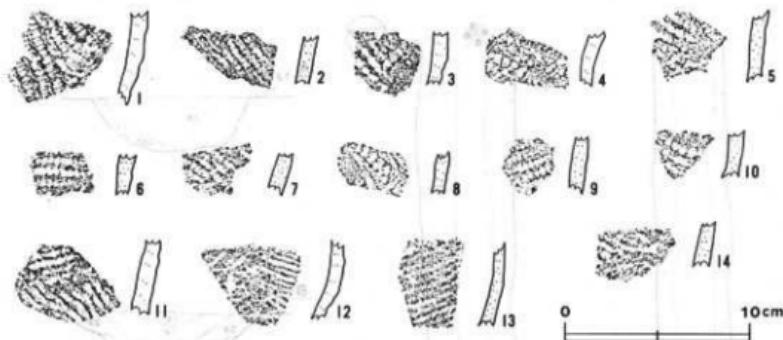
##### 縄文式土器（第18図-1~14）

いずれも胎部片で、纖維を含む前期黒浜式に比定されるものである。色調はにぶい褐色や暗褐色を呈しており、胎土には纖維のほかに砂粒を含んでいる。焼成は普通である。

1~14までいずれも縄文が施されているが、雑な施文が多く見られる。1~6はRL、7~10はLRの縄文が施されている。11~14は無節である。いずれも器面が荒れており、燃りの方向は判別できない。



第17図 第1号溝実測図



第18図 グリッド出土土器拓影図

#### 内耳土器（第19図-1～3）

1は体部がいったん垂直に立ち上がってから、外傾して口縁部へと続き、口唇部は平坦である。内耳は口縁上端から配されており、断面は円形である。器内外面ともナデ整形されている。色調はにぶい赤褐色を呈しており、胎土は砂粒、金雲母を含んでいる。焼成は普通である。完存率は約10%で、推定で口径は34cmである。

2は平底であり、体部は外傾して立ち上がっている。器内外面ともナデ整形されているが、底部と体部の境は削り整形である。外面には煤が付着している。色調は褐灰色を呈しており、胎土は砂粒を含んでいる。焼成は普通である。完存率は約10%で、推定で底径は20.1cmである。

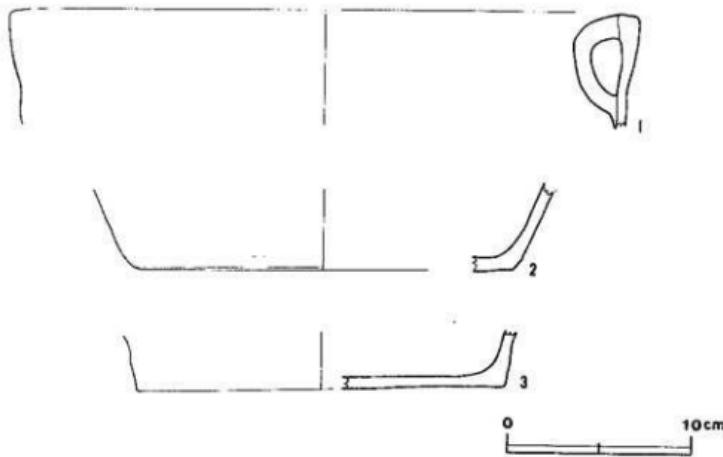
3は平底であり、体部は外傾して立ち上がる。器内外面ともナデ整形されており、外面には煤が付着している。色調はにぶい褐色を呈しており、胎土は砂粒、金雲母を含んでいる。焼成は普通である。完存率は約10%で、推定で底径は19.8cmである。

#### 4 まとめ

当遺跡は調査の結果、遺構としては溝1条が検出され、遺物はごくわずかの縄文式土器片と内耳土器片が出土しただけである。

縄文式土器片は南坪C遺跡と同じく、すべて黒浜式のものであり、遺跡の南部D4・D5区から出土している。土器片数は少ないが、当遺跡の南部は、当遺跡の南方約100mに所在する南坪C遺跡などと同様、往時の人々の生活圏の一部であったと思われる。

内耳土器片は遺跡の北部B6区から出土している。内耳土器は中世から近世まで使用されており、さらに戦前まで使用されていたという話も聞いている。出土した内耳土器片はわずかに3片であ



第19図 グリッド出土遺物実測図

り、当該期の遺構も確認されてなく、内耳土器の時期については不明である。

第1号溝は当遺跡唯一の遺構であるが、溝からの遺物もなく、時期や性格などについては不明である。



## 西坪A遺跡

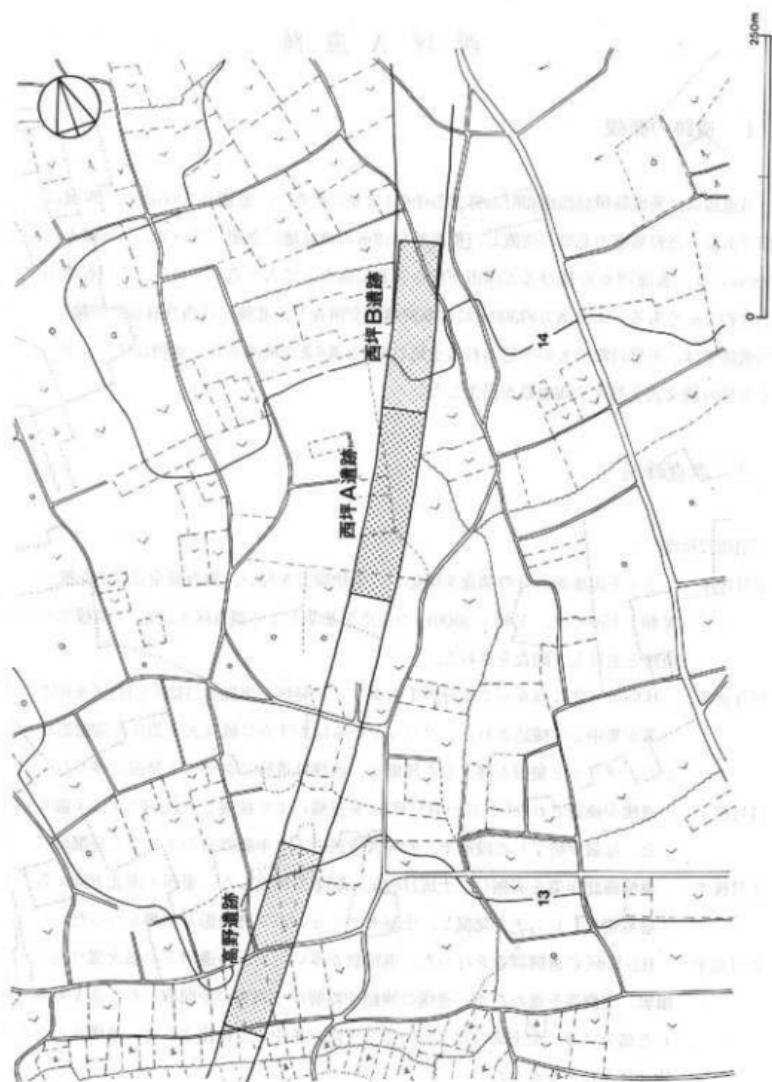
### 1 遺跡の概観

当遺跡は、茨城県猿島郡総和町高野字谷中651ほかに所在し、面積は7000m<sup>2</sup>で、現況は平坦な畑である。高野集落の北側に位置し、標高約14.3mの微高地に立地している。当遺跡から西方約500mには、水海沼から延びる谷津田が南から北に向かって入り込んでおり、その谷津田との比高は約2mである。また南方約300mには高野遺跡が所在し、北側には西坪B遺跡が接している。当遺跡では、近世以降のものと思われる土坑116基と溝6条が検出され、遺物はグリッドから、ごく少量の縄文式土器片や陶磁器が出土した。

### 2 調査経過

〈昭和57年度〉

- 9月後半 上・下両車線部分の調査を開始し、上物除去を行い、調査前全景写真を撮影した。  
X軸+15600m、Y軸-5000mの交点を基準として調査区を設定し、隣接する西坪B遺跡と並行して調査を進めた。
- 10月前半 H2区から北に向かって4分の1のグリッド発掘を実施し、H2区とH3区を中心に土坑と溝が集中して確認された。グリッドからはわずかに縄文式土器片と陶磁器片が出土した。グリッド発掘が終了した段階で、西坪B遺跡のグリッド発掘に移った。
- 11月前半 造構が確認されたG2・G3・H2・H3区を重機により拡張し、F2・F3区は手掘りで拡張した。拡張が終了した段階で、向坪A遺跡の下り車線部分のグリッド発掘に移った。
- 1月後半 造構確認作業を実施し、土坑116基、溝6条を検出した。東西・南北方向に各1本の土層観察用トレンチを発掘し、土層セクションの写真撮影と実測を行った。
- 2月前半 H2・H3区の造構調査を行った。造構数が多いため、各造構とも順次掘り込み、写真撮影、実測等を進めたが、造構の凍結や霜解けで調査に手間取った。第1号溝に埋まれた部分には、全土坑の約3分の2の土坑が集中して検出された。造構からの出土遺物はほとんどなかった。
- 2月後半 他の遺跡の調査は完了しており、全作業員を当遺跡の調査に投入し、G2・G3区の造構調査を進めた。
- 3月前半 F2区の造構調査後、遺跡の全体清掃を行い、調査後の遺跡全景写真を撮影して、西

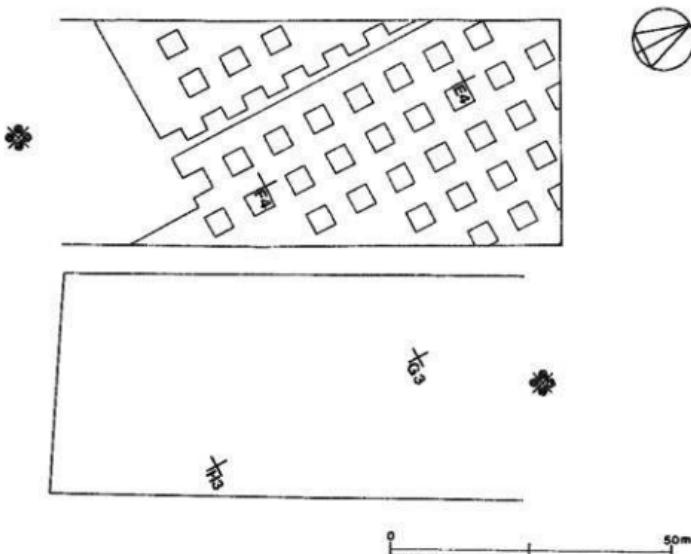


第20図 西坪A遺跡地形図

坪A遺跡の調査を完了した。

### 3 遺構と遺物

当遺跡から遺構は、土坑116基・溝6条が遺跡の南部に集中して検出された。遺物はグリッドから繩文式土器片8点と陶磁器数点が出土したが、いずれも破片であり、遺構からはほとんど出土していない。



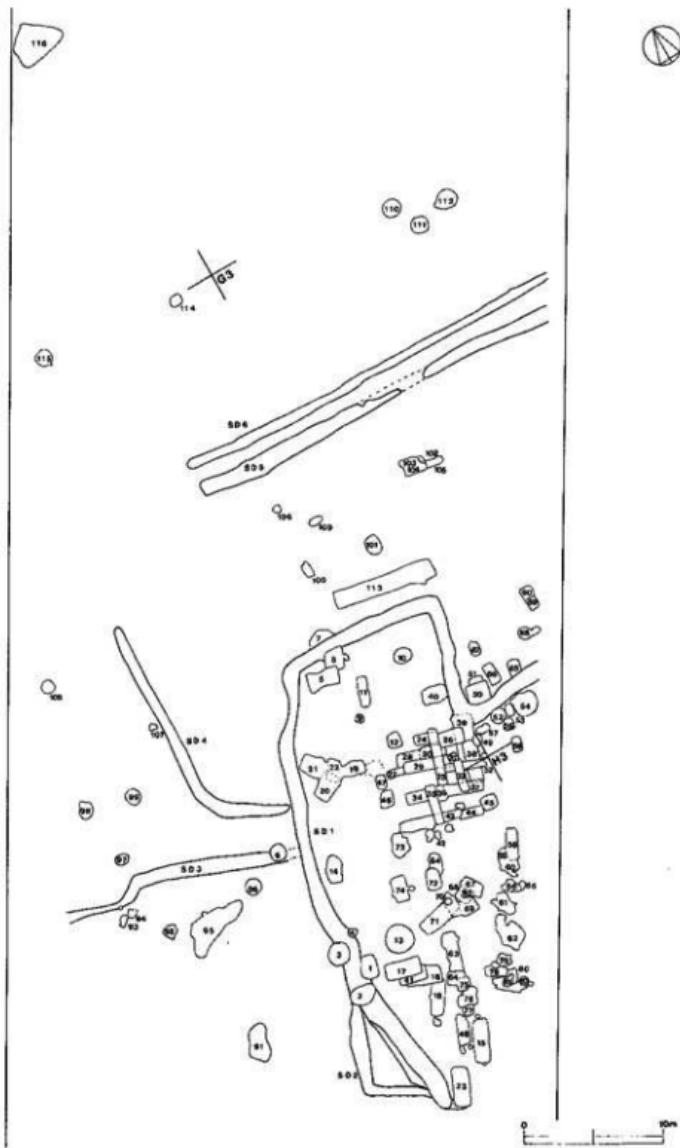
第21図 西坪A遺跡全体図

#### (1) 土坑

遺跡の南部G2・G3・H2区に集中して116基検出された。以下一覧表にまとめた。

表2 土坑一覧表

土坑 番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	備 考
				長径×短径[m]	深さ[m]			
1	H2e7	N-12°-E	隅丸長方形	1.81×1.23	15~20	外傾	平坦	SD1と重複
2	H2e8	N-77°-E	不規則四角形	1.82×1.30	—	?	—	SD1と重複 井戸か



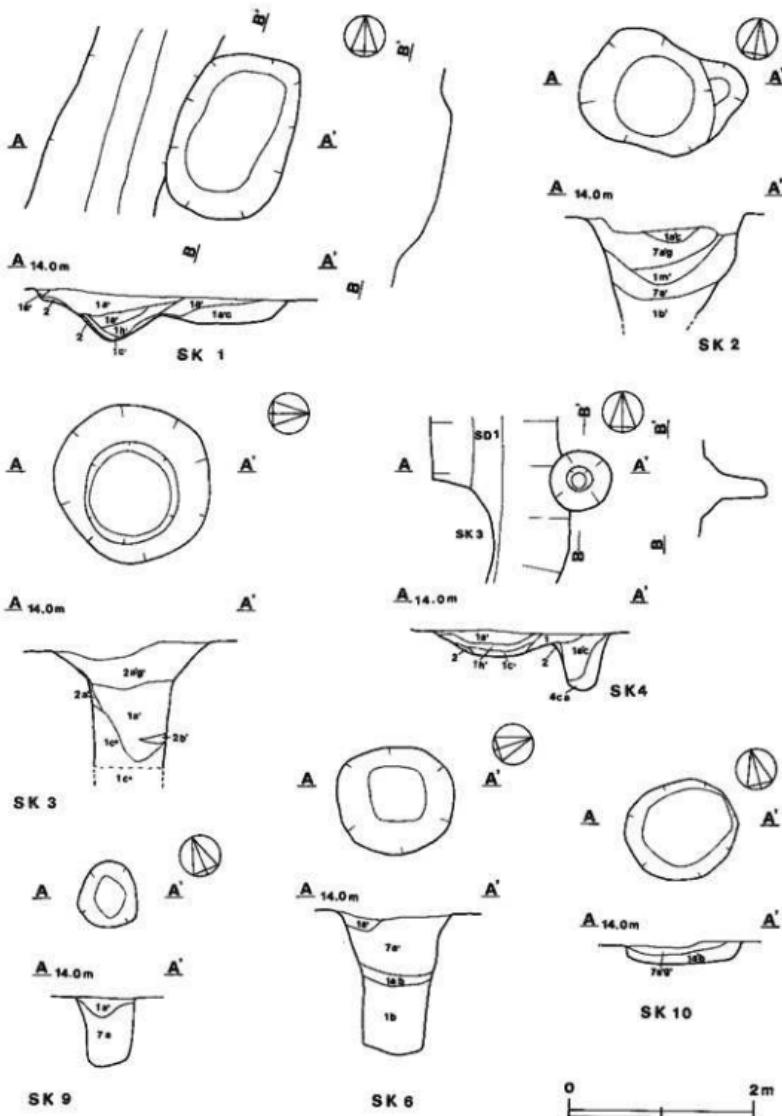
## 第22図 遺構配置図

土地番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	備 考
				長径×短径(m)	深さ(m)			
3	H2b*	——	円 形	1.70×1.68	——	外傾	——	SD1と重複 井戸か
4	H2b*	——	円 形	0.65×0.65	70	※	平坦	SD1と重複
5	G2hs	N- 80°-W	長 方 形	2.34×1.10	73	内傾	※	SK8と重複
6	G2j*	——	円 形	1.25×1.17	150	外傾	※	SD3と重複 井戸か
7	G2g*	N- 89°-E	不 定 形	——×——	34	※	※	SD1と重複
8	G2hs	N- 18°-E	長 方 形	——×1.25	35	※	※	SK5と重複
9	G2i*	——	円 形	0.72×0.63	67	※	※	
10	G2hs	——	円 形	1.19×1.10	20	※	※	
11	G2hs	N- 21°-E	長 方 形	2.19×0.75	10~21	※	※	
12	G2i*	N- 4°-E	隅丸長方形	1.18×0.96	10~18	※	緩い起伏	
13	H2cs	——	円 形	2.00×1.99	——	※	平 坦	井戸か
14	H2ar	N- 30°-E	長 方 形	1.95×1.10	15~20	※	緩い起伏	
15	H2es	N- 28°-E	長 方 形	3.17×1.11	23	垂 直	平 坦	
16	H2cr	N- 69°-W	長 方 形	——×1.32	22	※	※	SK18・41と重複
17	H2cr	N- 75°-W	長 方 形	2.60×1.20	59	※	※	SK41と重複
18	H2ds	N- 29°-E	長 方 形	2.60×0.85	15	※	※	SK16と重複
19	G2is	N-64.5°W	長 方 形	2.65×0.94	87	内傾	※	SK22と重複
20	G2j*	N-51.5°E	長 方 形	——×1.25	75	※	※	SK21・22と重複
21	G2i*	N- 40°-W	長 方 形	——×1.34	65	※	※	SK20・22と重複
22	G2i*	N-51.5°E	長 方 形	——×0.75	75	※	※	SK19・20・21と重複
23	H2er	N-23.5°E	長 方 形	3.00×1.30	34	外傾	※	SD1と重複
24	G2j*	N- 72°-W	長 方 形	——×0.80	15	垂 直	緩い起伏	SK25と重複
25	G2j*	N-18.5°E	長 方 形	4.13×0.66	20	※	平 坦	SK24・29・30・32と重複
26	G2j*	N- 76°-W	長 方 形	1.82×1.03	25	外傾	※	SK30・39と重複
27	G2j*	N- 80°-W	長 方 形	——×0.54	20	※	※	SK28・29と重複
28	G2j*	N- 74°-W	長 方 形	——×1.45	15	※	※	SK27・29・30と重複
29	G2j*	N-70.5°W	長 方 形	——×0.78	27	※	※	SK25・31・32と重複
30	G2j*	N- 76°-W	長 方 形	1.77×——	23	※	※	SK25・26と重複
31	G2j*	N- 5°-W	長 方 形	——×0.58	32	※	※	SK29・32・33と重複
32	G2j*	N-68.5°W	長 方 形	2.97×0.56	25	※	※	SK38と重複
33	H2as	N- 13°-E	長 方 形	2.37×0.58	38	垂 直	緩い起伏	SK31・32・37と重複

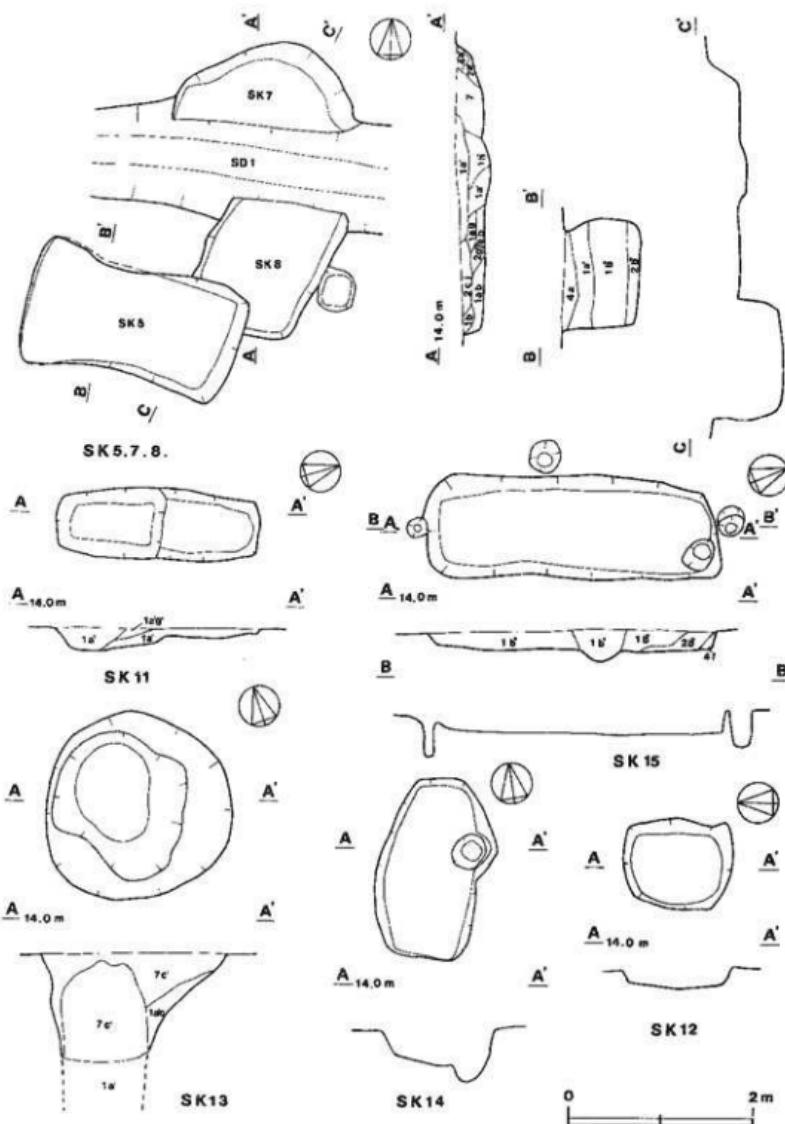
上坑番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	備 考
				長径×短径(m)	深さ(m)			
34	H2as	N-72°-W	長 方 形	—×0.90	17~25	外傾	平坦	SK35と重複
35	H2as	N-12°-E	長 方 形	2.94×0.60	45	垂直	*	SK34・43と重複
36	H2as	N-11°-E	長 方 形	1.17×—	18	外傾	緩い起伏	SK37と重複
37	H2as	N-72°-W	長 方 形	—×0.89	17~25	*	平坦	SK33・36と重複
38	G2j*	N-17°-E	長 方 形	3.12×1.07	20	*	*	SK32・49・39と重複
39	G2j*	N-19°-E	長 方 形	—×1.27	15	*	*	SK38・26と重複
40	G2i*	N-81°-W	長 方 形	1.89×1.24	15	*	緩い起伏	
41	H2er	N-79°-W	長 方 形	2.00×1.05	35	垂直	平坦	SK16・17と重複
42	H2as	N-57.5°-W	不 定 形	1.03×0.56	63	*	緩い起伏	
43	H2as	N-72.5°-W	長 方 形	4.60×0.94	18	*	平坦	SK35と重複
44	H2as	N-74°-W	長 方 形	1.70×0.67	27	*	*	
45	H2as	N-86.5°-W	長 方 形	1.10×0.91	40	*	*	
46	G2j*	N-34°-E	長 方 形	1.26×0.88	25~30	外傾	緩い起伏	
47	G2j*	N-16.5°-E	長 方 形	1.00×0.73	35	垂直	平坦	
48	H2es	N-11.5°-E	不 定 形	2.22×0.88	10	外傾	*	
49	G2j*	——	円 形	0.86×0.71	28	垂直	*	SK38と重複
50	G3i*	N-75.5°-W	長 方 形	1.73×1.35	21	外傾	*	SK51と重複
51	G3i*	N-80°-W	長 方 形	—×1.00	12	*	*	SK50と重複
52	G3j*	——	円 形	1.15×1.08	19	*	*	
53	G3j*	N-14.5°-E	長 方 形	0.93×0.63	43	垂直	*	
54	G3j*	——	不整円形	1.88×1.72	19	外傾	緩い起伏	
55	G3j*	N-14.5°-E	長 方 形	0.82×0.70	20	垂直	平坦	
56	H3ai	N-18°-E	長 方 形	1.11×0.58	42	*	*	
57	G3j*	N-87.5°-W	楕円形	0.93×0.56	10	外傾	緩い起伏	
58	H2bs	N-20.5°-E	長 方 形	—×0.72	30	*	平坦	SK59と重複
59	H2bs	N-8.5°-E	不 定 形	1.23×—	35	*	緩い起伏	SK58と重複
60	H2bs	N-71.5°-E	不 定 形	0.91×0.86	28~39	*	凹凸	
61	H2es	N-18°-W	不 定 形	1.74×0.87	25	*	緩い起伏	
62	H2es	N-7.5°-W	不 定 形	3.88×1.67	32	*	凹凸	
63	H2es	N-17°-E	長 方 形	—×1.05	30	*	緩い起伏	SK64と重複
64	H2ds	N-72°-W	長 方 形	1.27×1.11	31	*	平坦	SK63・75と重複

上坑 番号	位置	長径方向	平面形	規 模		吸 水	底 面	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)			
65	H2c <sub>a</sub>	N- 67°-E	不 定 形	0.85×0.55	38	垂 直	凹 凸	SK66と重複
66	H2c <sub>a</sub>	N- 57°-W	不 定 形	0.75×0.43	15-50	*	*	SK65と重複
67	H2b <sub>a</sub>	N- 31°-W	長 方 形	1.62×—	31	*	緩い起伏	SK68- 82と重複
68	H2b <sub>a</sub>	N- 25°-W	長 方 形	—×X—	26	外 傾	*	SK68- 69- 82と重複
69	H2c <sub>a</sub>	N- 90°	長 方 形	(1.30) × (0.80)	32	垂 直	平 坦	SK68- 70と重複
70	H2b <sub>a</sub>	N- 5°-E	長 方 形	—×0.76	22	外 傾	凹 凸	SK69- 71と重複
71	H2c <sub>a</sub>	N-78.5°-E	長 方 形	3.18×1.16	18-32	*	平 坦	SK70と重複
72	H2b <sub>a</sub>	N- 24°-E	梢 円 形	1.52×0.98	16	*	緩い起伏	SK84と重複
73	H2a <sub>a</sub>	N- 2°-E	不 定 形	1.62×1.22	4	*	凹 凸	
74	H2b <sub>a</sub>	N-11.5°-E	長 方 形	1.87×1.07	44	*	緩い起伏	
75	H2d <sub>a</sub>	N-18.5°-E	不 定 形	—×0.89	34	*	平 坦	SK64と重複
76	H2d <sub>a</sub>	N-72.5°-W	長 方 形	1.37×0.68	15	*	*	SK77と重複
77	H2d <sub>a</sub>	N-72.5°-W	長 方 形	—×0.80	10	*	緩い起伏	SK76と重複
78	H2d <sub>a</sub>	N- 48°-W	長 方 形	0.95×0.89	27	垂 直	*	SK79と重複
79	H2d <sub>a</sub>	N- 56°-W	長 方 形	1.61×0.74	29	外 傾	平 坦	SK78- 80と重複
80	H2d <sub>a</sub>	N- 69°-W	長 方 形	1.01×0.76	28	*	緩い起伏	SK79- 81と重複
81	H2d <sub>a</sub>	—	不 整 円 形	0.69×0.68	45	*	*	
82	H2b <sub>a</sub>	N- 64°-W	梢 円 形	0.89×0.59	36	垂 直	平 坦	SK67- 68と重複
83	H2d <sub>a</sub>	—	不 整 円 形	0.85×0.66	47	外 傾	凹 凸	
84	H2b <sub>a</sub>	N- 35°-E	梢 円 形	1.58×0.97	7	*	緩い起伏	SK72と重複
85	G3i <sub>a</sub>	N- 95°-E	長 方 形	—×0.90	11	*	平 坦	SD1と重複
86	G3i <sub>a</sub>	N- 1°-W	長 方 形	1.55×0.80	9	*	*	
87	G3i <sub>a</sub>	N- 2.5°-E	長 方 形	1.12×0.72	41	垂 直	*	
88	G3i <sub>a</sub>	N- 74°-W	不 定 形	1.58×0.86	16	外 傾	*	
89	G3i <sub>a</sub>	N- 1°-E	長 方 形	0.91×0.79	22	*	緩い起伏	SK89と重複
90	G3h <sub>a</sub>	N- 2°-W	不 定 形	—×0.97	19	*	*	SK89と重複
91	H2c <sub>a</sub>	N-37.5°-E	不 定 形	2.62×1.44	63	*	凹 凸	
92	G2j <sub>a</sub>	N- 0°	不 定 形	1.05×0.91	14	*	平 坦	
93	G2j <sub>a</sub>	N- 49°-E	不 定 形	0.86×0.54	8	*	緩い起伏	SK94と重複 燃土あり
94	G2j <sub>a</sub>	N- 52°-E	不 定 形	0.64×0.61	9-15	*	*	SK93と重複 燃土あり
95	H2as	N- 72°-E	不 定 形	4.81×1.79	105	*	*	

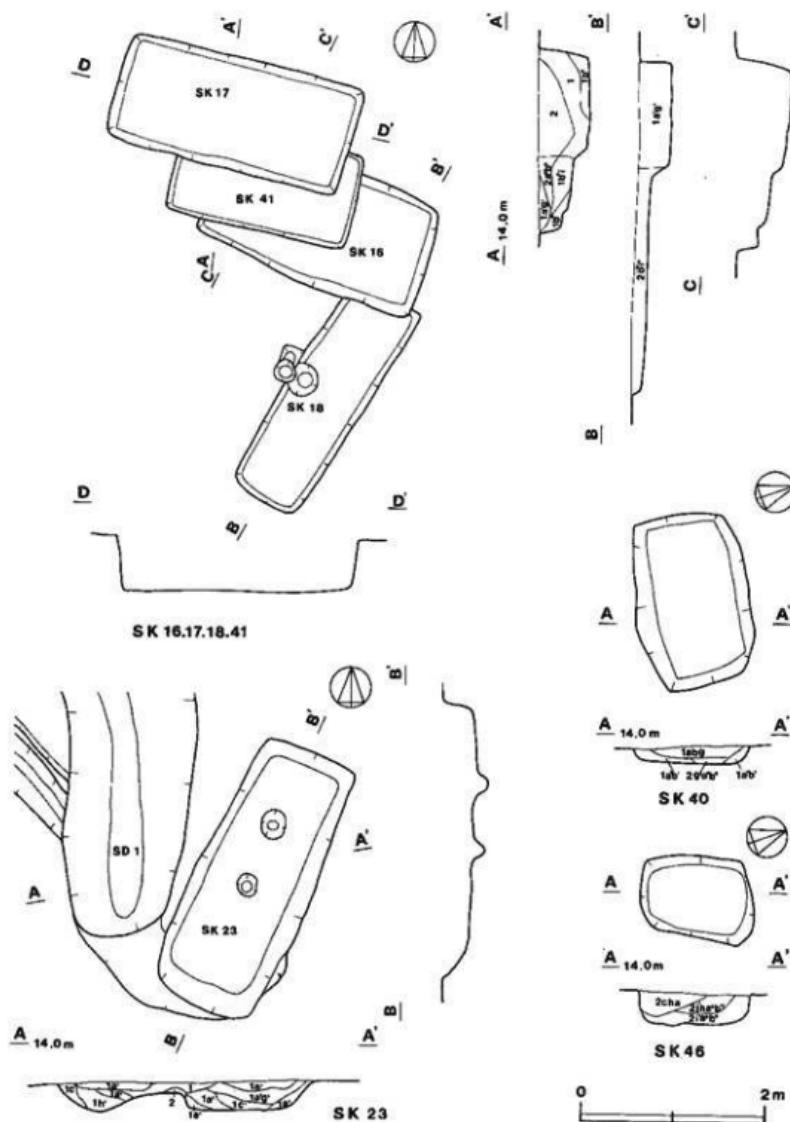
土坑番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁面	底面	備 考
				長径×短径(m)	深さ(m)			
96	G2j*	——	円 形	1.16×1.11	12	外傾	平坦	-
97	G2i*	——	円 形	0.92×0.85	23	*	*	
98	G2h*	N- 0°	不 定 形	1.26×1.02	21	垂直	平坦	
99	G2hs	——	不整円形	1.16×1.07	14	外傾	*	
100	G2f*	N- 1°-W	椭 圆 形	1.10×0.63	16	垂直	緩い起伏	
101	G3f*	N- 0°	椭 圆 形	1.37×1.04	47	外傾	*	
102	G3ez	N-69.5°W	長 方 形	—×—	10	*	平坦	
103	G3ex	N- 78°-W	椭 圆 形	1.30×—	25	*	*	SK104と重複
104	G3ez	N- 80°-W	長 方 形	1.57×—	30	*	*	SK103と重複
105	G3ez	N- 82°-W	不 定 形	—×0.60	10	*	*	
106	G2e*	——	円 形	0.64×0.62	40	垂直	*	
107	G2g*	——	不整円形	0.56×0.51	11	外傾	緩い起伏	
108	G2e*	——	円 形	0.97×0.95	12	*	*	
109	G2e*	N- 78°-W	椭 圆 形	0.92×0.63	13	*	*	
110	G3a*	——	円 形	1.33×1.25	23	*	平坦	
111	G3b*	——	円 形	1.28×1.25	25	*	*	
112	G3a*	——	円 形	1.67×1.33	39	*	*	
113	G2g*	N-80.5°W	長 方 形	7.39×1.38	20~34	垂直	*	
114	G2a*	——	円 形	1.00×0.90	114~116	*	*	
115	F2j*	——	円 形	1.20×1.18	11	外傾	*	
116	F2es	N- 81°-W	不 定 形	3.61×2.61	142	*	緩い起伏	



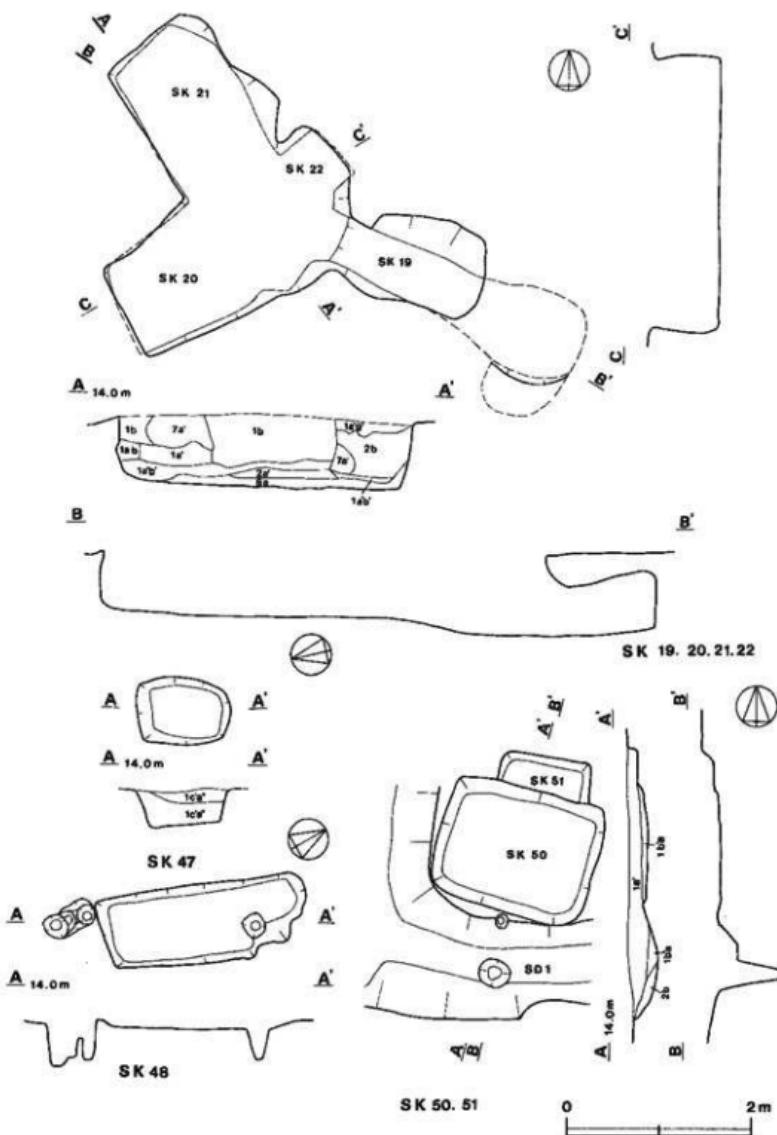
第23図 土坑実測図 (1)

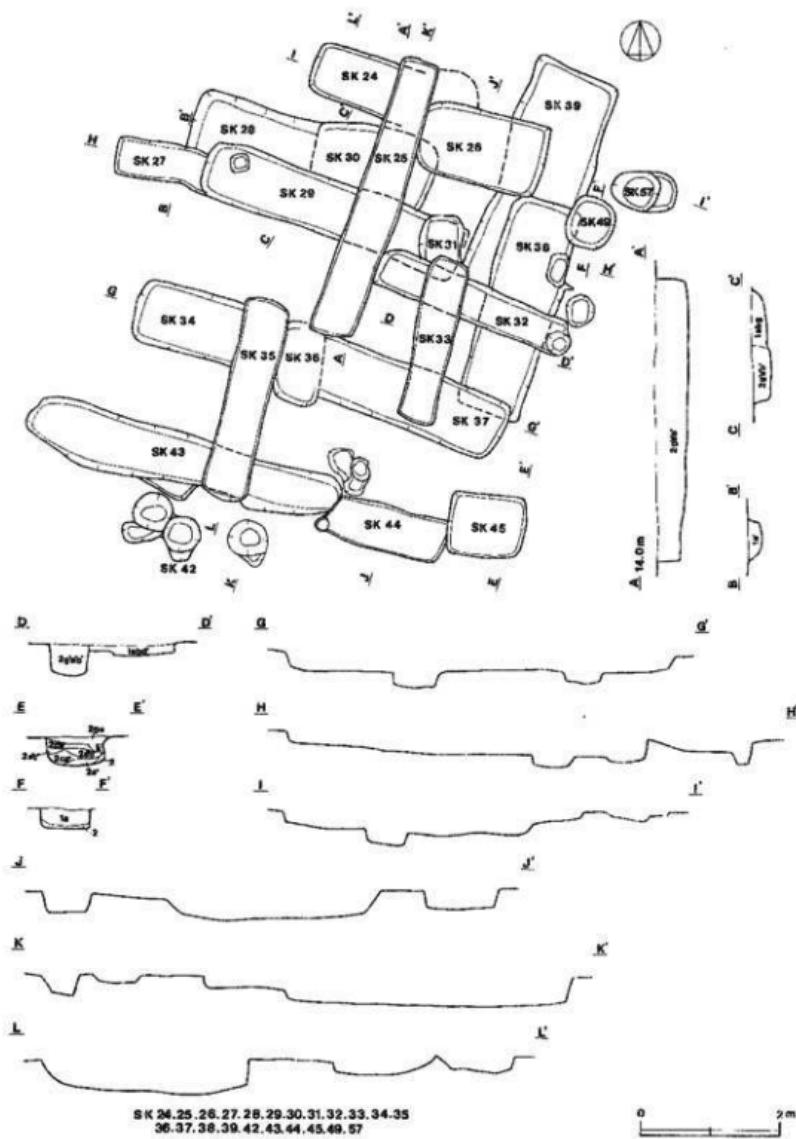


### 第24図 土坑実測図 (2)

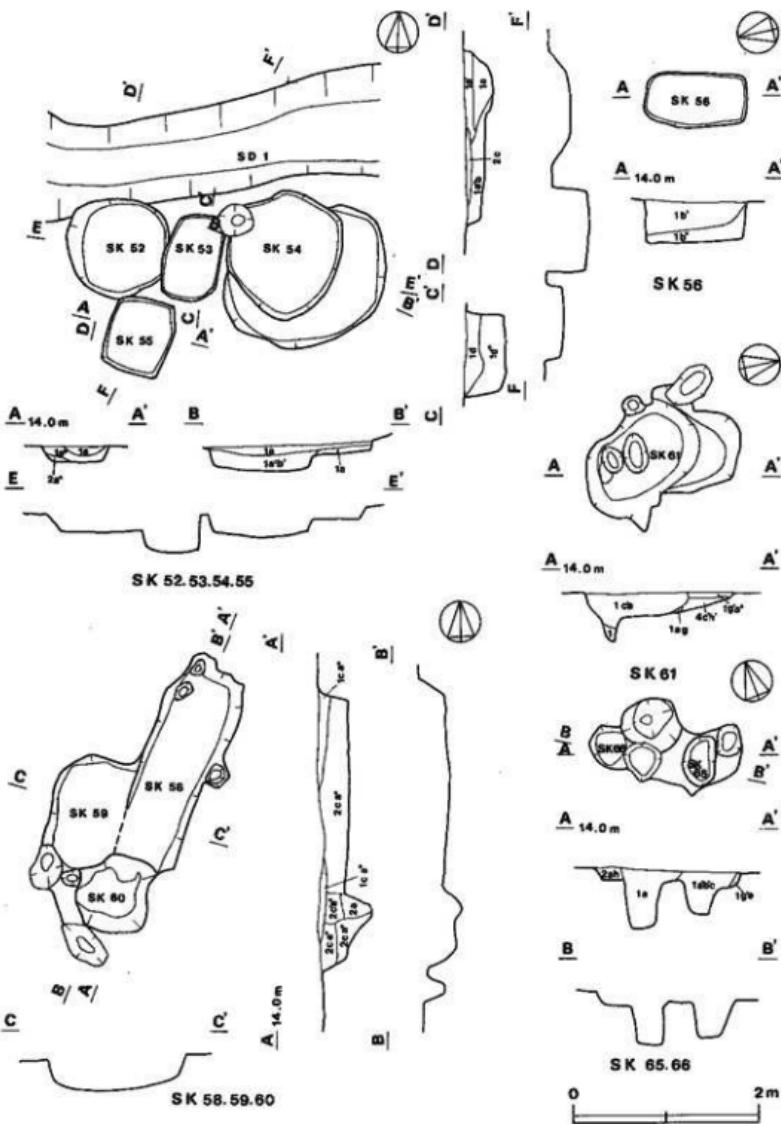


### 第25図 土坑実測図 (3)

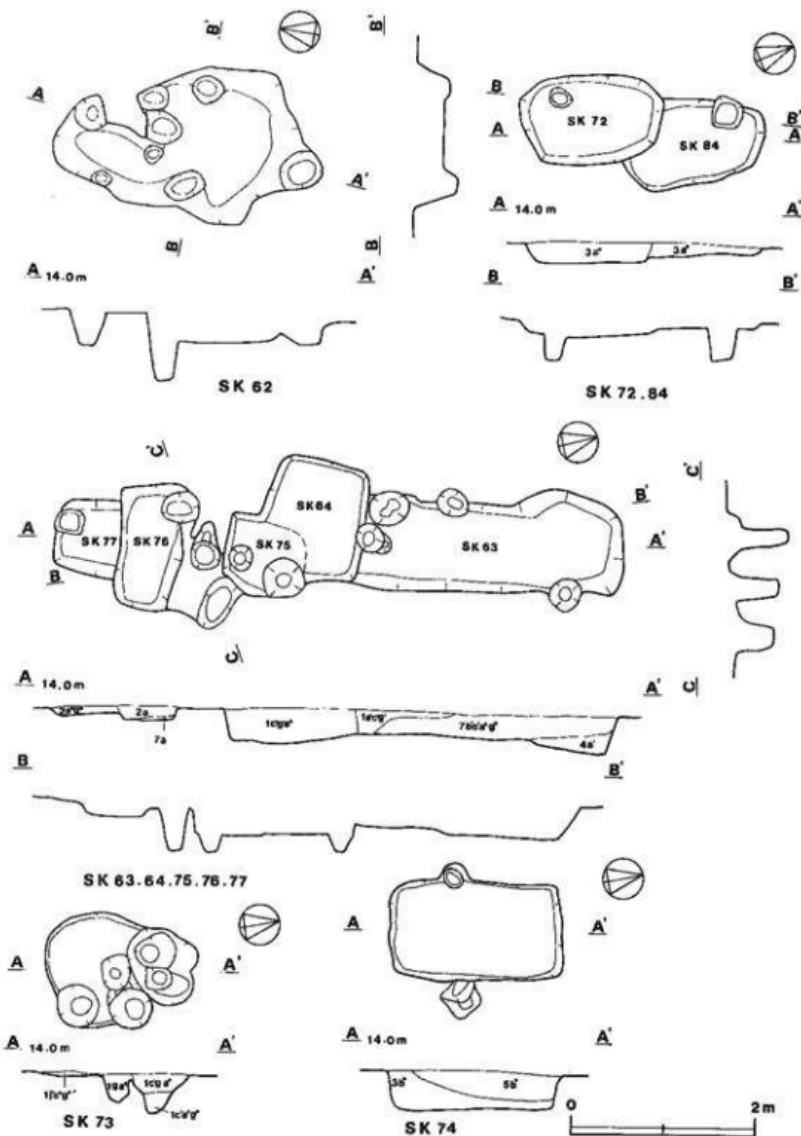




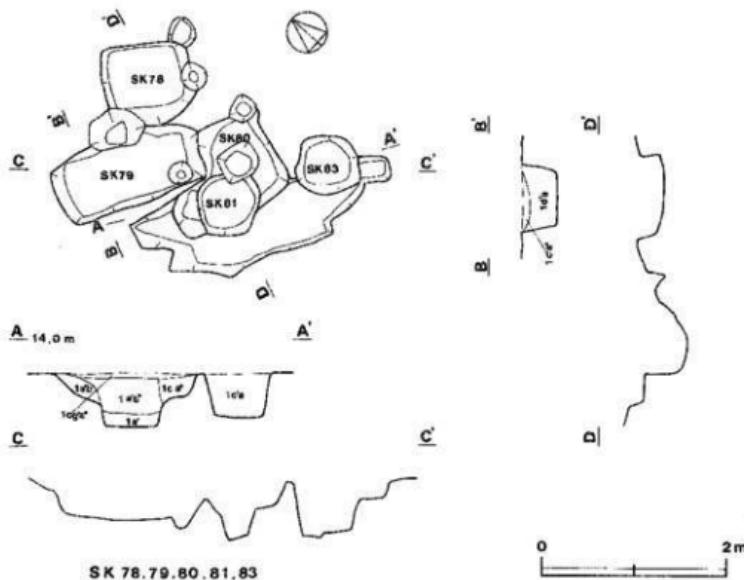
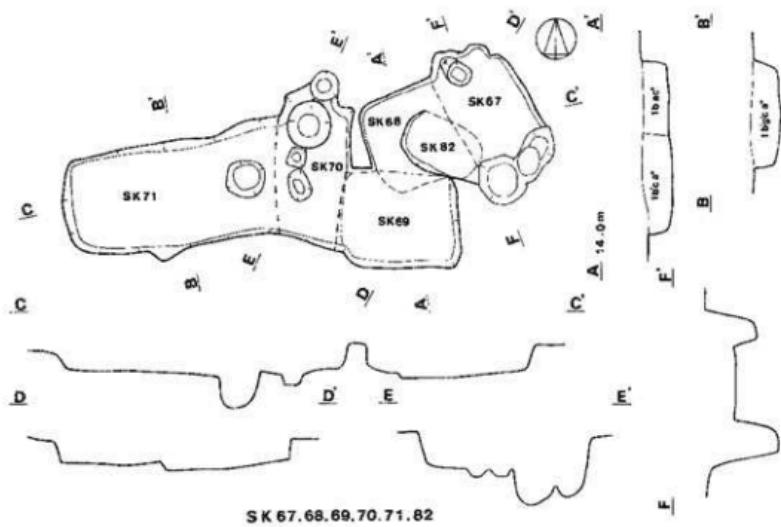
第27図 土坑実測図 (5)



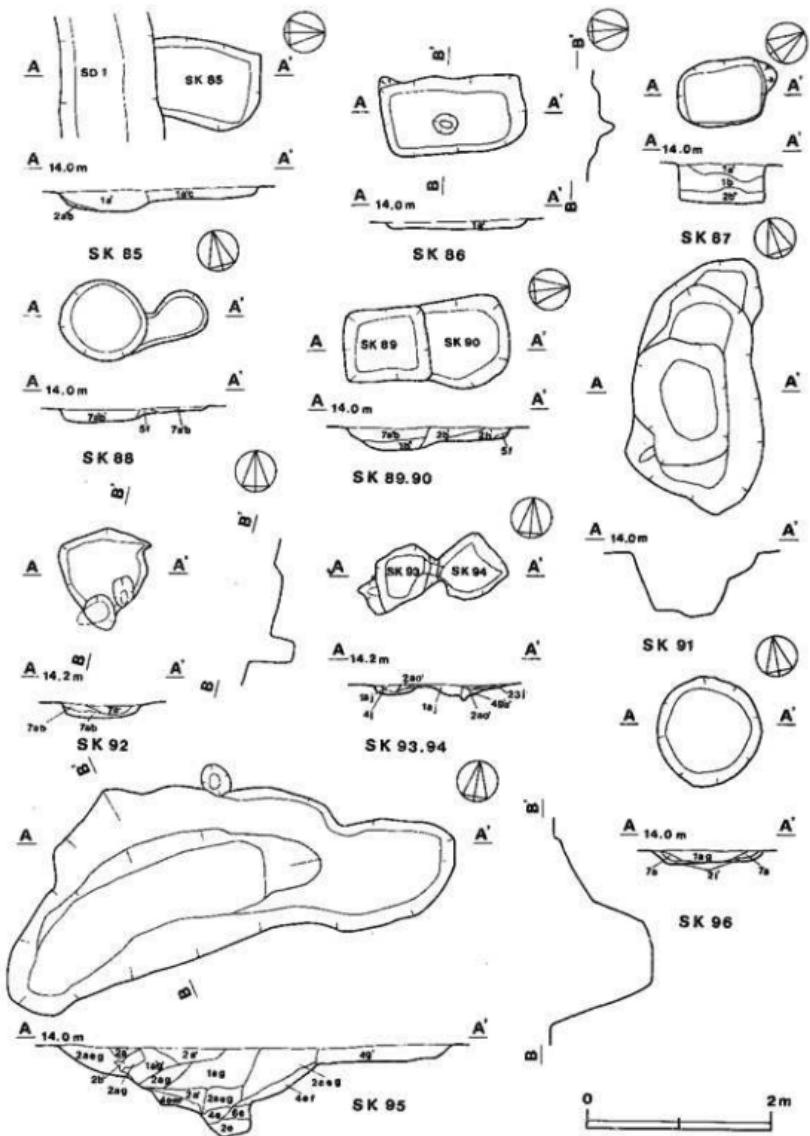
第28図 土坑実測図 (6)



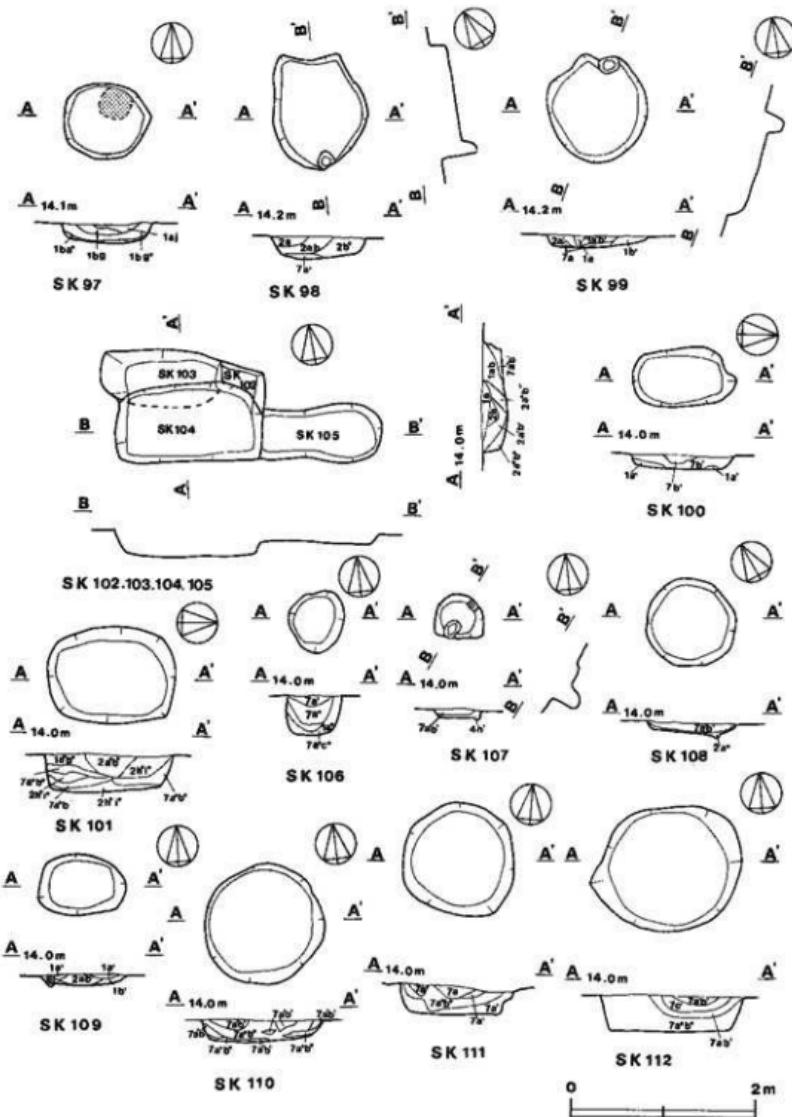
第29図 土坑実測図 (7)



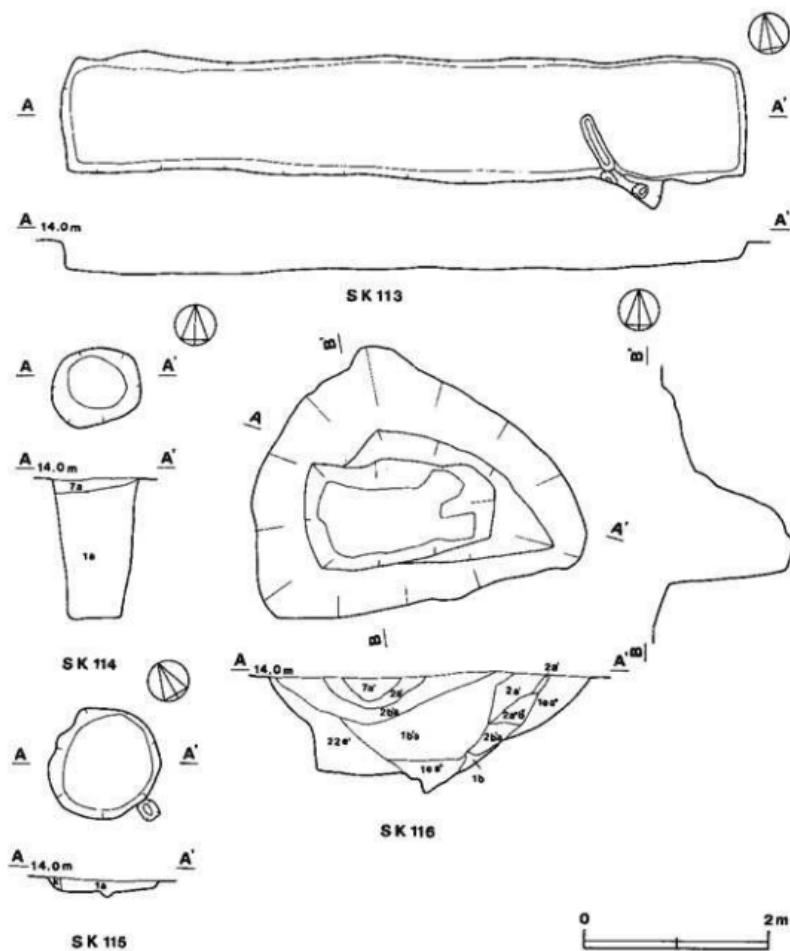
第30図 土坑実測図 (B)



第31図 土坑実測図 (9)



第32図 土坑実測図 (10)



第33図 土坑実測図 (1)

## (2) 溝

### 第1号溝（第34図）

本跡は遺跡の南部G2・G3・H2区から検出された。

土坑群を閉むように屈曲し、検出された長さは約60mである。遺跡の南端のH2f<sub>7</sub>からほぼ北へ約15m向かい、緩やかにカーブして北北東へ約18m、G2g<sub>8</sub>から東へと向きを変え約11m、さらにH3h<sub>1</sub>で南南西へ向きを変え約9m、G2j<sub>6</sub>で再び東へ向きを変え約7m、そして東へ向きながら調査区域外へと延びている。断面は「U」形を呈しており、上幅は70~130cm、下幅は30~40cmである。遺構確認面から底面までの深さは30~50cmで、底面のレベル差はほとんどない。覆土は黒褐色土が主で、自然堆積の状況を呈している。

遺物の出土はなかった。

### 第2号溝（第34図）

本跡はH2区に第1号溝と重複して検出され、全長は約12mである。

H2e<sub>7</sub>からN=60°-Wを指し、西北西へ約5m、H2e<sub>8</sub>からN=23°-Eを指して北北東へ約7m延びて第1号溝と重複するが、第1号溝の東側へは延びていない。断面は「U」形を呈しており、上幅は50~80cm、下幅は約30cmである。遺構確認面から底面までの深さは35~40cmで、底面のレベル差はほとんどない。壁面や底面は凹凸が多く見られる。覆土は自然堆積の状況を呈しているが、軟らかく縮まりがない。

遺物の出土はなかった。

### 第3号溝（第35図）

本跡はG2区に検出され、第1号溝の西側5mに位置している。

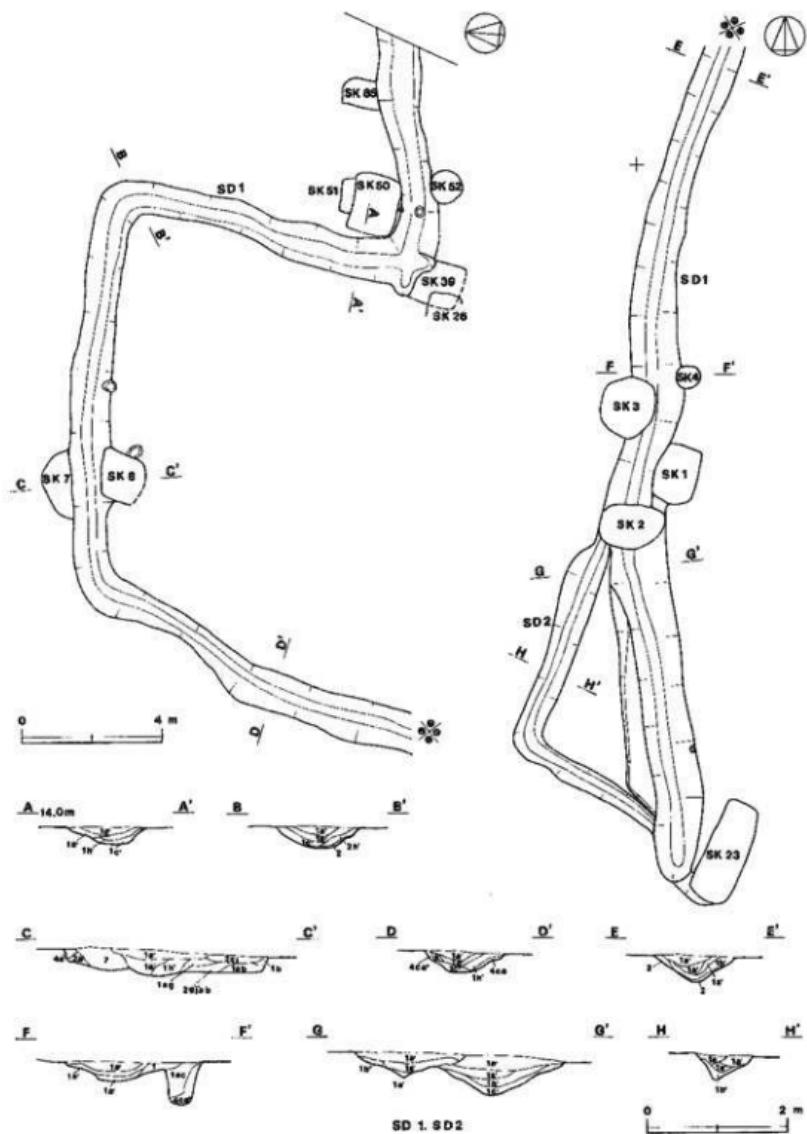
検出された長さは約15mで、クランク状に屈曲している。溝の東端はG2i<sub>7</sub>に検出され、そこからN=68°-Wを指し、西北西へ約10m延びている。G2i<sub>4</sub>で南西に向きを変え約1m、G2j<sub>4</sub>で再び西北西へ約4m延びて調査区域外へと向かっている。断面形は「U」形をしており、上幅は50~100cm、下幅は約20cmである。遺構確認面から底面までの深さは約20cmと浅く、底面のレベル差はほとんどない。覆土は黒褐色土が主で、自然堆積である。

遺物の出土はなかった。

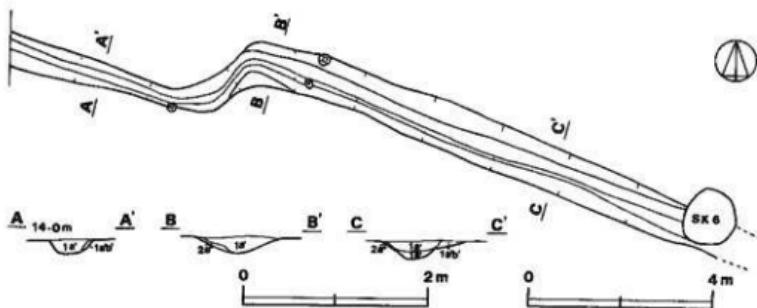
### 第4号溝（第36図）

本跡はG2区に検出され、第3号溝の北側4mに位置している。

全長は約20mで、「し」字状にカーブしている。溝の南東端はG2j<sub>7</sub>に検出され、そこから北西



第34図 第1・2号溝実測図



第35図 第3号溝実測図

へ約5m向かい、G2e<sub>4</sub>で緩やかにカーブして北へ約5m延び、G2e<sub>5</sub>で途切れる。断面は「—」形を呈しており、底面は平坦である。上幅は60~100cm、下幅は30~40cmであり、造構確認面から底面までの深さは15~40cmである。覆土はローム粒子を多量に含む黒褐色土が主で、やや縮まりがあり、自然堆積である。

遺物の出土はなかった。

#### 第5号溝（第37図）

本跡はG2・G3区に検出され、第6号溝の南側1mに並行している。

溝の西端はG2d<sub>5</sub>で検出され、そこからほぼ東へ直線的に延びており、調査区域外まで続いている。検出された長さは約28mで、中間は浅く、長さ2mほどプランが不明瞭である。上幅は90~140cm、下幅は50~80cmであり、造構確認面から底面までの深さは平均20cmである。断面は中間から西側は「～」形、東側は「」形を呈しており、中間からやや西寄りに、径70cm、深さ50cmのピットが1か所掘り込まれている。覆土は自然堆積である。

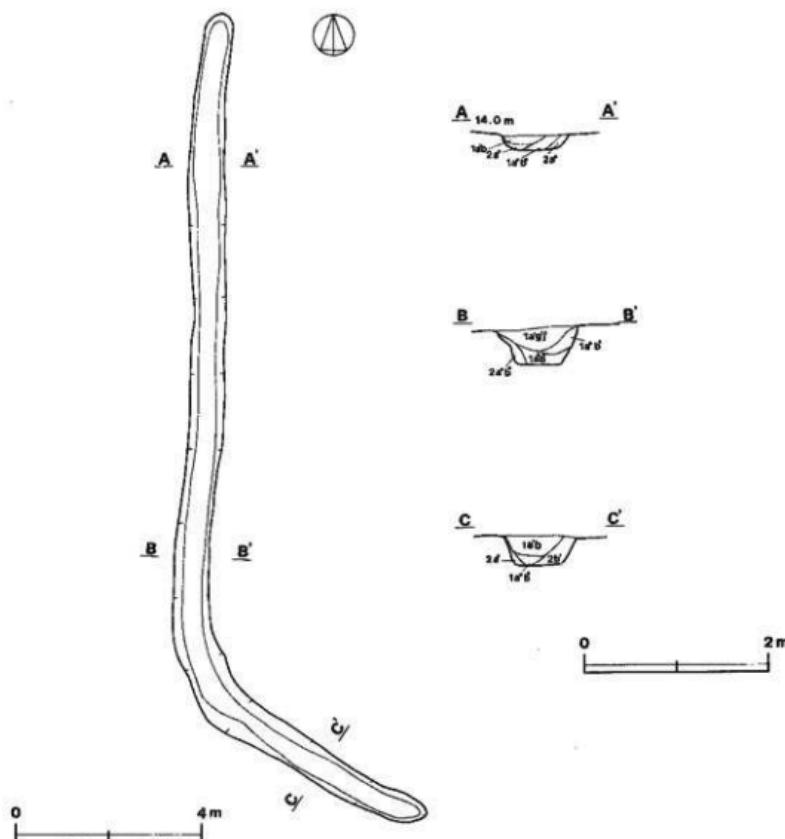
遺物の出土はなかった。

#### 第6号溝（第37図）

本跡はG2・G3区に検出され、第5号溝の北側1mに並行している。

G2c<sub>5</sub>から第5号溝と同じように、東を向いて直線的に調査区域外まで延びている。検出された長さは約29mあり、断面は「」形を呈している。上幅は60~100cm、下幅は約20cmであり、造構確認面から底面までの深さは約30cmである。底面のレベル差はほとんどない。覆土は自然堆積である。

遺物の出土はなかった。



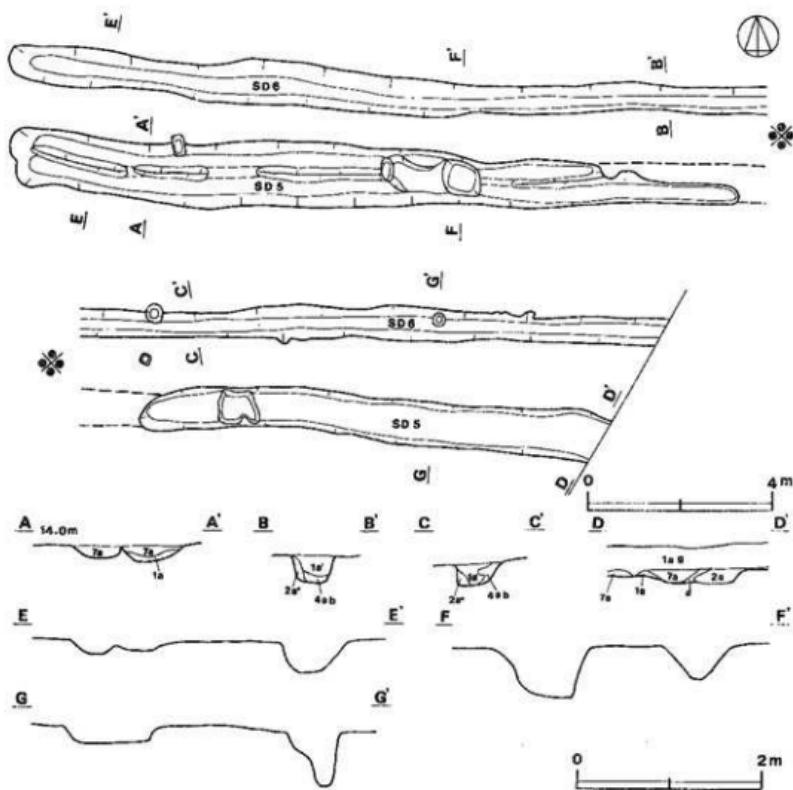
### 第36図 第4号溝実測図

### (3) 遺物

遺構から出土したものはほとんどなく、グリッドからも縄文式土器片8点と陶磁器片数点が出土しただけである。

### 縄文式土器（第38図-1～8）

】は胴部片で、黒浜式のものと思われる。機織痕が多く文様ははっきりしない。色調は黒褐色を呈しており、胎土は機織のほかに砂粒を含んでいる。焼成は普通である。2~8はいずれも胴部片で、斜行する条線文が施されている。安行I式に比定されるもので、同一体の破片かと思わ

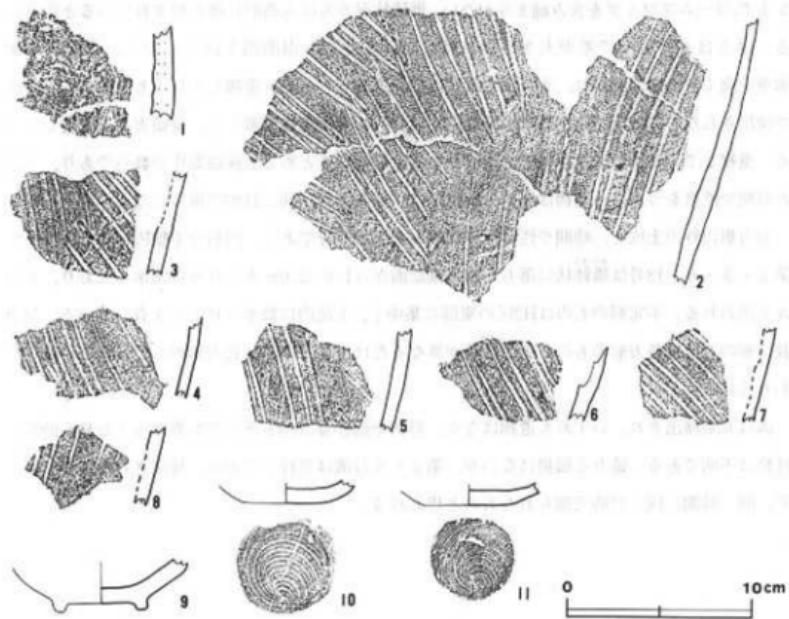


第37図 第5・6号溝実測図

れる。色調は褐色を呈しており、胎土は砂粒を含んでいる。焼成は良くなく、内面は剥落している。

#### 陶磁器（第38図-9～11）

いずれも破片で、器形の判断できるものはない。時期については近世～明治のものと思われる。9～11は底部片である。9は貼高台の塊かと思われる。胎土は灰褐色で、暗緑灰色の釉が施されている。10・11は回転糸切りである。10は淡黄緑色の釉が施され、胎土は灰白色で緻密である。瀬戸産かと思われる。11は暗褐色の釉が一部に付着している。胎土は灰白色で砂粒を含んでいる。そのほかには染付、常滑、<sup>八島手</sup>などの破片が出土している。



第38図 グリッド出土土器拓影図

#### 4 まとめ

当遺跡では、南部のG2・G3・H2区を中心に土坑116基・溝6条が集中して検出され、ほかの調査区からは検出されなかった。遺物はグリッドからわずかに縄文式土器片と陶磁器片が出土しただけで、遺構からはほとんど出土していない。

土坑は116基検出されているが、時期や性格については不明のものが大部分である。平面形状からみると、長方形・円形・橢円形・不整円形・隅丸長方形・不定形と様々である。これらのうち長方形のものが62基と半数強を占め、次いで不定形21基・円形16基となり、ほかは数基ずつである。

長方形のものは、最大の第113号（ $7.39 \times 1.38m$ ）を除いても、長軸が $0.82 \sim 4.60m$ ・短軸が $0.54 \sim 1.45m$ と規模に差がみられる。長軸や短軸の差を除いては、いずれも基本的に底面、壁の立ち上がり、覆土の堆積状況、遺構確認面から底面までの深さ、長軸方向については同じ傾向がみられる。底面は平坦で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がるか、外傾している。覆土は黒褐色土

が主で、ロームブロックを含み締まりがない。堆積状況からは人為的に埋め戻されていると思われる。深さは9~87cmで差が大きい。長軸方向は北北東~南南西を向くものと、西北西~東南東を向くものとに分かれ、その割合はほぼ半々である。また、重複しているものが多く、単独で検出されたものは少ない。特に、第24~39・43~45号は重複が激しく、長軸方向が直交している。重複している割には遺存状態は良好である。遺物はまとめて陶磁器片が数点であり、土坑の時期や性格をつかめる遺物はない。規模には差があるが、同じ目的で掘られたものと思われる。

長方形以外の土坑も、時期や性格は不明のものが大部分である。円形や不整形のもののうち、第2・3・6・13号は<sup>ようじ</sup>落ち込み、確認面から1.5~2.0mあたりから湧水しており、井戸かと思われる。不定形のものはH2区の東部に集中し、土坑内に數本のピットを有している。隅丸長方形のものは長方形のものと平面形状が異なるだけであるので、長方形のものに含まれると思われる。

溝は6条検出され、いずれも遺物はなく、形状や延びる方向もそれぞれ異なっており、時期や性格は不明である。確たる根拠はないが、第5・6号溝は並行しており、検出された長さも同じで、同一時期に同じ目的で掘られたものと思われる。

## 西坪B遺跡

### 1 遺跡の概観

当遺跡は、茨城県猿島郡和町高野字谷中705ほかに所在し、面積は5930m<sup>2</sup>。現況は畠である。当遺跡は西坪A遺跡の北側に接しており、北利根工業団地の南方約500mに位置する。立地的には西坪A遺跡と全く同様であるが、標高は14.4~14.7mでわずかに高い。当遺跡の西方約0.5kmには南から北に向かって水海沼からの谷津が延びており、その谷津に面して新田山遺跡が所在し、北東約1.4kmの長井戸沼西枝の西側台地上には向坪A遺跡が所在する。当遺跡からは、グリッドからごく少量の縄文式土器片と擂鉢片トロボウが出土した。

### 2 調査経過

〈昭和57年度〉

9月後半 上・下両車線部分とも調査を開始した。上物除去を行い、調査前の遺跡全景写真を撮影した。X軸+15820m、Y軸-4920mの交点を基準として調査区を設定し、隣接する西坪A遺跡と並行して、調査を進めた。

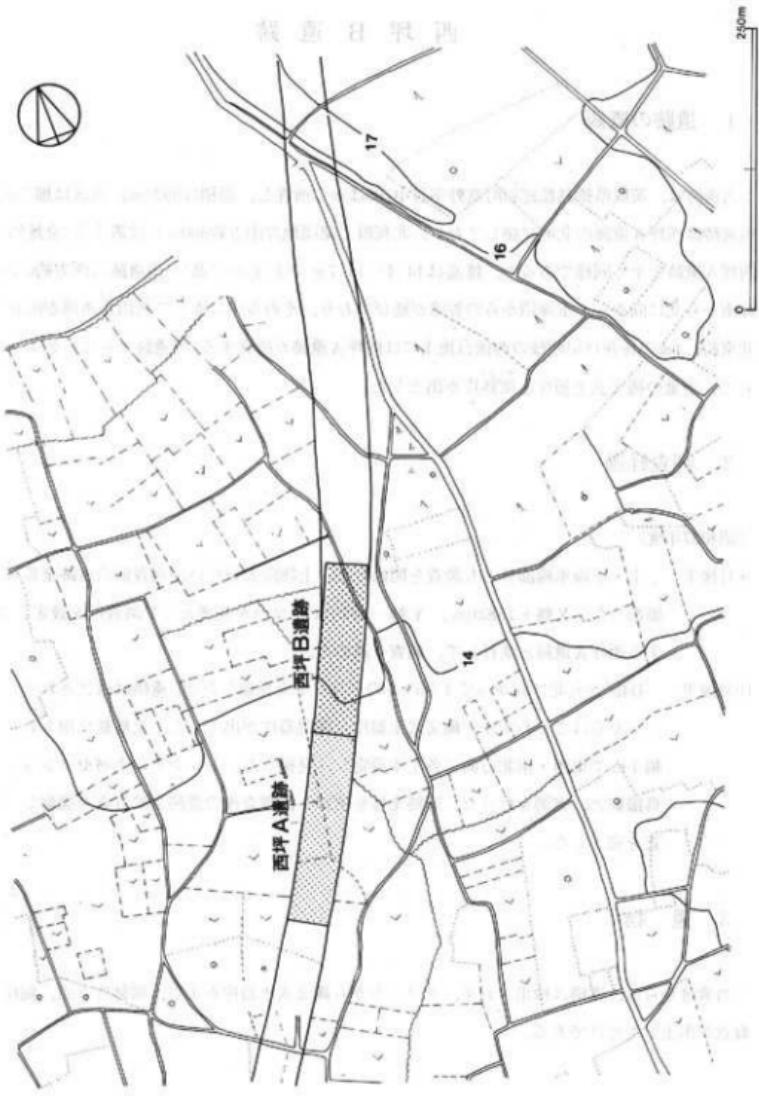
10月後半 D4区から北に向かって4分の1のグリッドを発掘したが、遺構は確認されず、グリッドからはごくわずかの縄文式土器片、陶磁器片が出土した。土層観察用トレンチを幅1mで東西・南北方向に各1本設定し、発掘した。トレンチの土層セクションの写真撮影と、実測を行った。遺跡全体を清掃し、調査後の遺跡全景写真を撮影して、調査を完了した。

### 3 遺物

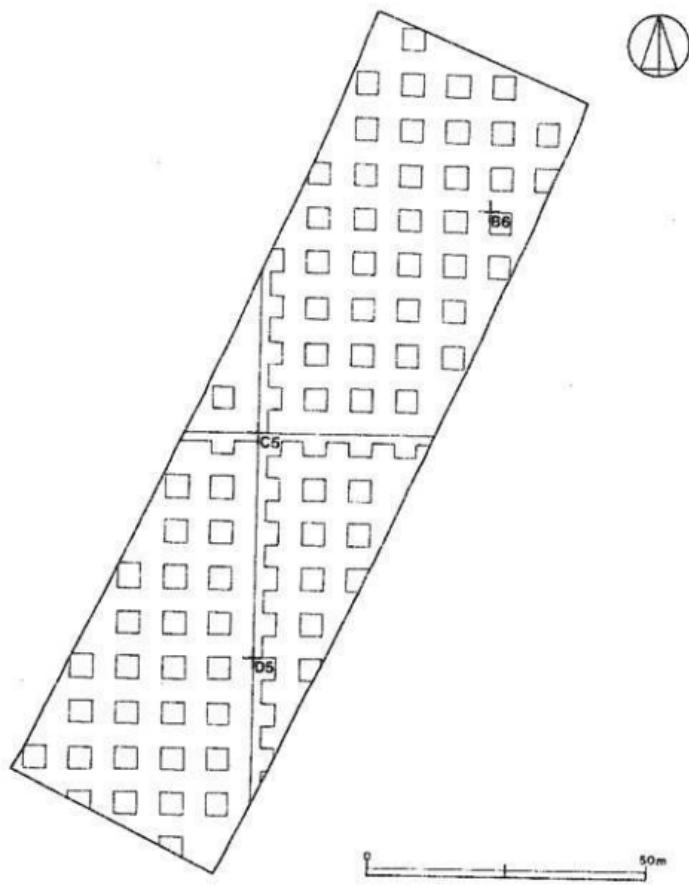
当遺跡からは、遺構は検出されず、グリッドから縄文式土器片が1点、擂鉢片3点、陶磁器片数点が出土しただけである。

縄文式土器（第41図-1）

1は胴部片でL Rの縄文が施されている。色調はにぶい褐色を呈しており、胎土には砂粒・スコリアを含んでいる。焼成は普通である。



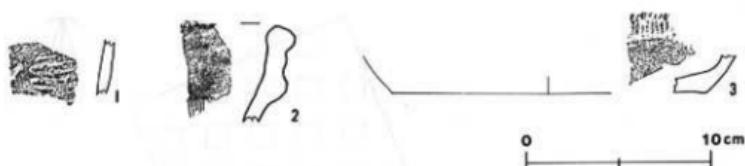
第39圖 西坪遺跡地形圖



第40図 西坪日遺跡全体図

**擂鉢 (第41図-2・3)**

2は口縁部片で、胎土は褐灰色で砂粒を含んでいる。暗赤褐色の釉が施され光沢がある。擂目が口縁部のやや下から施されている。3は底部片で、推定底径は17cmである。胎土は褐灰色を呈し、砂粒・雲母を含んでいる。にぶい赤褐色の釉が施され、光沢はない。このほかに瀬戸片数点、板碑の断片かと思われる雲母片岩が出土している。陶磁器は近世のものと思われる。(PL17)



第41図 グリッド出土土器拓影図

#### 4 まとめ

当遺跡からは、遺構は検出されず、遺物も各時代にまたがるが、その数は微々たるものであり、当遺跡の時期や性格については不明である。

## 向坪A遺跡

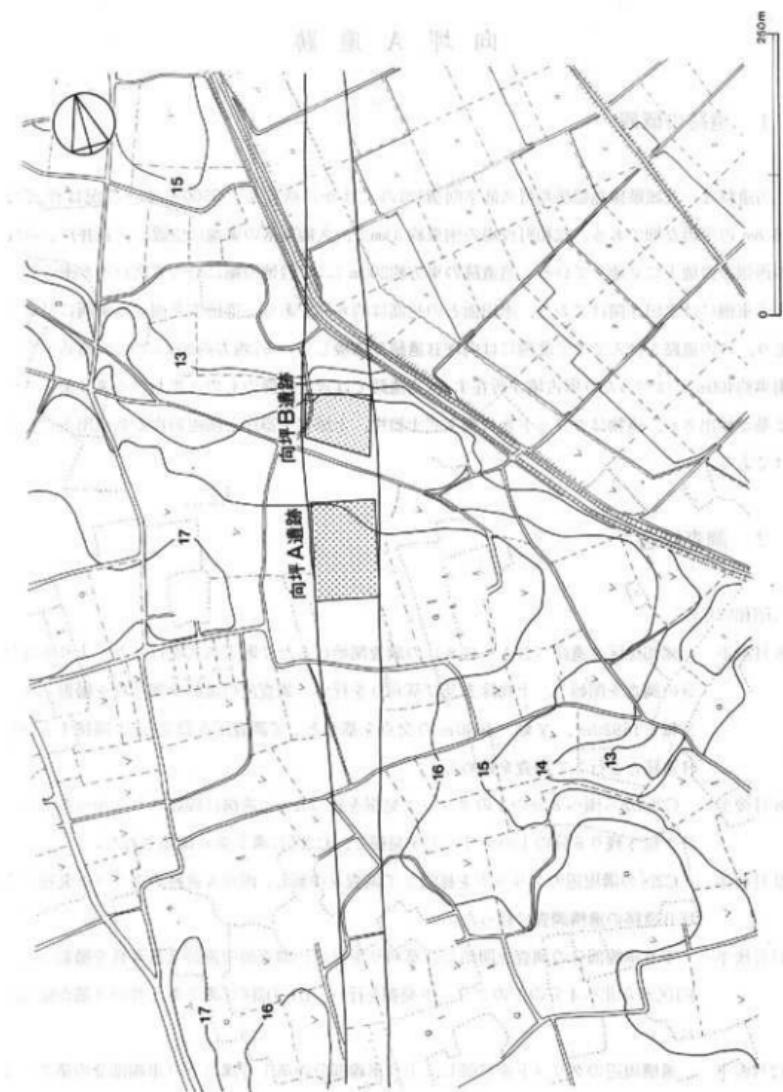
### 1 遺跡の概観

当遺跡は、茨城県猿島郡総和町久能字向裏121の1ほかに所在し、5500m<sup>2</sup>で、現況は標高約16.8mの平坦な畑である。総和町役場の南東約3kmで、久能集落の東端に位置し、長井戸沼西枝の西側の台地上に立地している。当遺跡の東方約200mには、台地の裾に沿って宮戸川が南流し、その東側には水田が開けており、水田面との比高は約6mである。遺跡の北側には東西に県道が走り、この道路を挟んで北側には向坪B遺跡が隣接している。西方約200mには向原古墳群、南東約400mにはべったり塚古墳が所在する。当遺跡では近世以降のものと思われる溝3条と井戸2基が検出され、遺物はグリッドから縄文式土器片、土師質土器片と陶磁器片が数点出土ただけである。

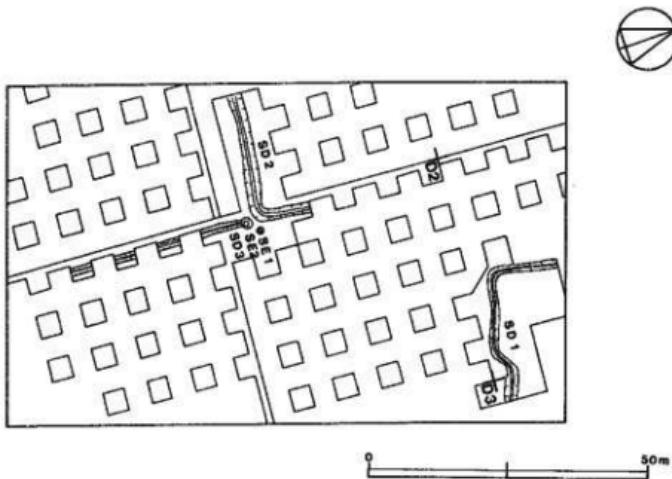
### 2 調査経過

〈昭和57年度〉

- 8月前半 総和地区8遺跡（S1～S8）の調査開始にあたり鍼入れ式を行った。上り車線部分の調査を開始し、上物除去及び草刈りを行い、調査前の遺跡全景写真を撮影した。  
X軸+16920m、Y軸-4640mの交点を基準として調査区を設定した。隣接する向坪B遺跡と並行して調査を進めた。
- 8月後半 C2区から南へ8分の1のグリッド発掘を行ったが、遺構は確認されなかったため、ひき続き残り8分の1のグリッドを発掘し、C2区に溝1条が確認された。
- 9月前半 C2区の溝周辺のグリッドを拡張して調査を中断し、西坪A遺跡のグリッド発掘と向坪B遺跡の遺構調査に移った。
- 11月後半 下り車線部分の調査を開始し、草刈りを行い、調査前の遺跡全景写真を撮影した。E1区から北へ4分の1のグリッド発掘を行い、D1-D2区に溝2条と井戸2基が確認された。
- 12月前半 遺構周辺のグリッドを拡張し、上り車線部分の第1号溝と下り車線部分の第2・3号溝、第1・2号井戸の調査を実施した。各遺構とも掘り込みに時間を要したが、出土遺物はなかった。遺構調査終了後、遺跡全体の清掃を行い、調査後の遺跡全景写真を撮影して向坪A遺跡の調査を完了した。



第42図 向坪A遺跡地形図



第43図 向坪A遺跡全体図

### 3 遺構と遺物

当遺跡からは溝3条・井戸2基が検出された。遺物はグリッドから縄文式土器片2点、カワラケ片1点、陶磁器片数点が出土しているが、遺構からは出土していない。

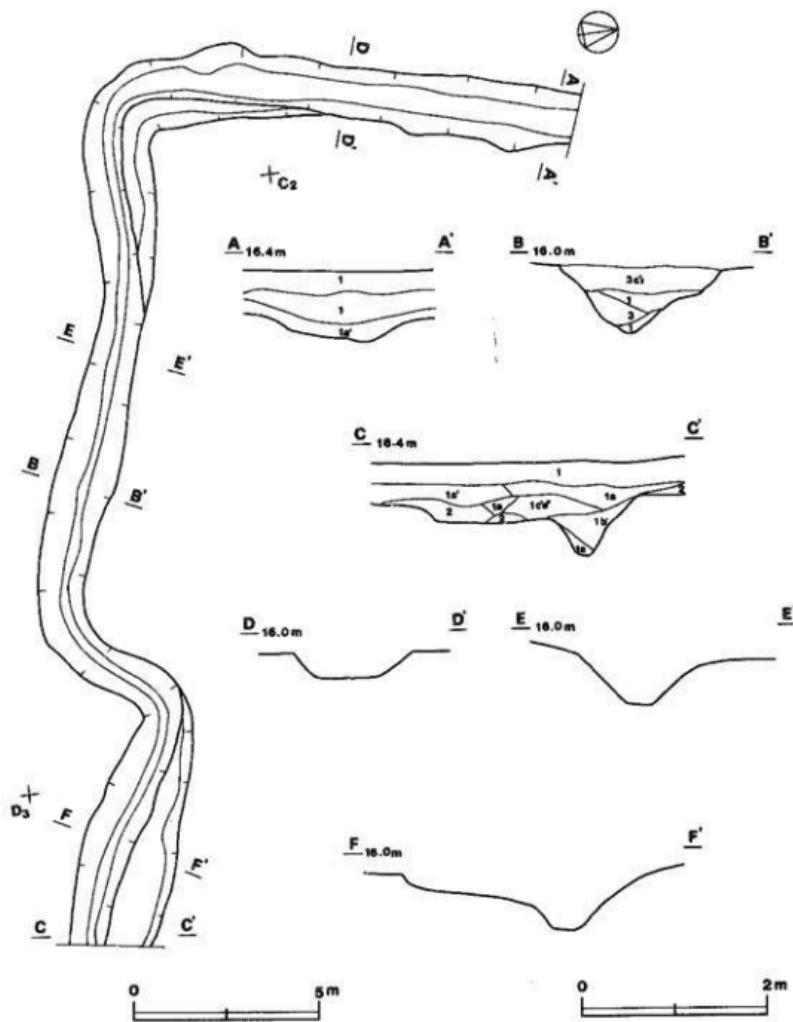
#### (1) 溝

##### 第1号溝（第44図）

本跡は遺跡の北端C2・C3区に検出された。

検出された長さは約36mで、両端とも調査区域外まで延びている。C3j<sub>1</sub>からN-66°-Wを指して西北西へ約7m、C2j<sub>0</sub>から南西へ向きを変え約3m、C2j<sub>0</sub>で再び西北西へ向き約15m、C2i<sub>0</sub>からN-18°-Eを指し、北北東へ約11m延びて調査区域外へと向かっている。断面は「U」形を呈しており、上幅は110~160cm、下幅は30~50cmである。遺構確認面から底面までの深さは50~70cmあり、底面のレベル差は東端より北端の方が30cm低くなっている。底面、壁面とも凹凸は見られない。覆土は黒褐色土や暗褐色土が主で、自然堆積の様相を呈しているが、部分的に擾乱が見られる。

遺物は出土していない。

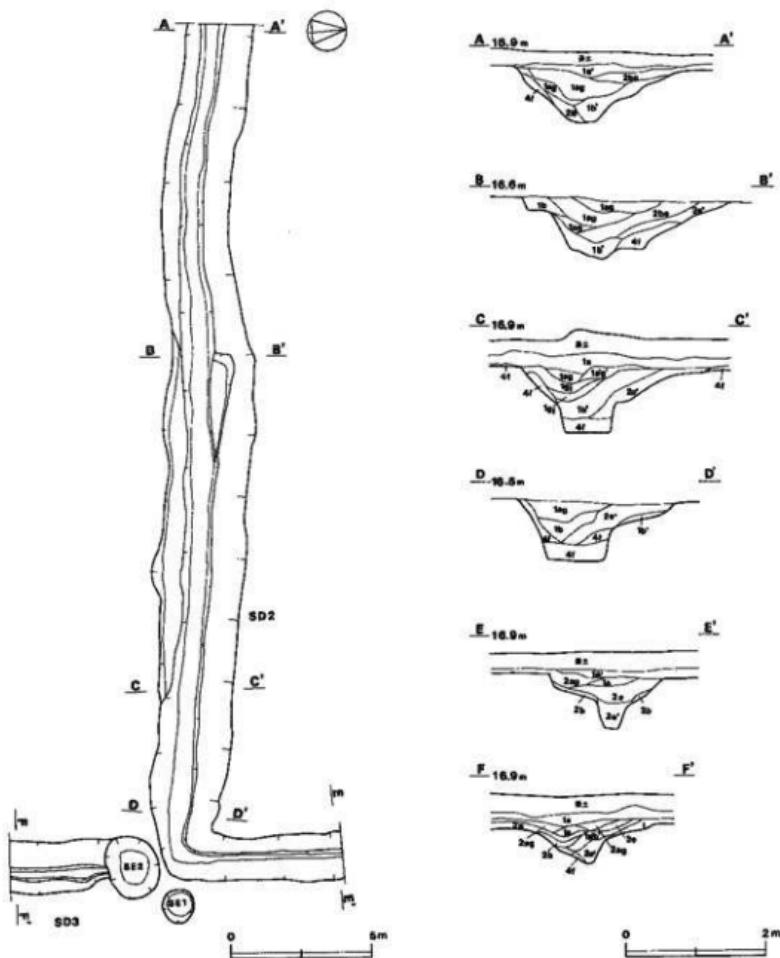


第44図 第1号溝実測図

#### 第2号溝（第45図）

本跡は遺跡の中央部西寄りのD1・D2区に検出された。全長は約60mである。

遺跡の西端D1eからN-93°Eを指し、ほぼ東へ直線的に約30m、そこから北方向へ直線的に



第45図 第2・3号溝実測図

約30m 延び消滅している。断面は「U」形を呈しており、上幅は150~250cm、下幅は60~80cmである。遺構確認面から底面までの深さは80~90cmであり、底面のレベル差はほとんどない。底面や壁面は凹凸が多くみられ、崩れやすい。覆土はハードロームブロックを多量に含む黒褐色土が主で、人為的に埋められたものと思われる。

遺物は出土していない。

### 第3号溝（第45図）

本跡はD2-E2区に検出された。

第2号溝が東から北へ折れるD2jに本跡の北端があり、第2号井戸と重複している。そこから直線的に南へ約30m E2gまで延びて、消滅している。主軸は第2号溝と同一軸で結ばれる。断面も第2号溝とほぼ同じで、上幅は180~200cm、下幅は約30cmである。遺構確認面から底面までの深さや覆土の堆積状況も第2号溝と同じである。北から南へ向かって底面のレベルはわずかに低くなり、その差は約20cmである。

遺物は出土していない。

### (2) 井戸

#### 第1号井戸（第46図）

本跡はD2iiに検出され、第2号溝が東から北へ折れる角のすぐ東側40cmに位置している。

平面形は、径約1.3mの円形を呈しており、深さ約2m以下は、湧水していく掘り込むことはできなかった。壁はほぼ垂直に落ち込んでいるが、上端から約0.7mまではやや外傾し、その下はわずかにオーバーハングしている。覆土はロームブロックを多量に含む暗褐色土が主で、人為的に埋め戻されている。

遺物は出土していない。

#### 第2号井戸（第46図）

本跡はD2iiに検出され、第1号井戸の南西0.5mに位置している。

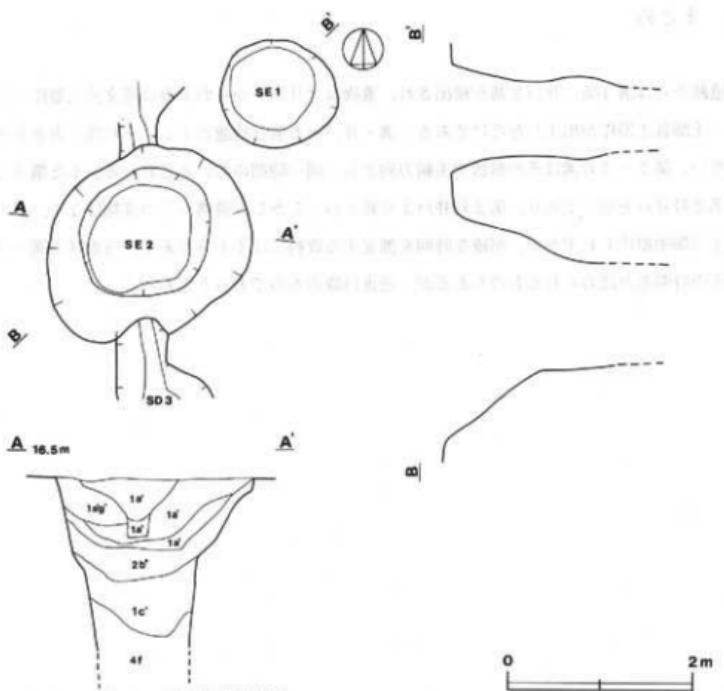
平面形は、長径2.4m・短径1.9mの楕円形を呈しており、深さ約2mで湧水している。壁の上端から約1mまでは擂鉢状に落ち込み、その下約1.3mほど垂直に落ち込んでいる。覆土は人為的に埋め戻されており、締まりがなく、第3号溝北端部が切り込んでいる。

遺物は出土していない。

### (3) 遺物

#### 縄文式土器（第47図-1・2）

1は浅鉢の胴部片かと思われる。キザミのある細い陰線が横位に配され、沈線の区画内にRLの繩文が充填されている。加曾利B式のものと思われる。色調は黒褐色で、胎土には砂粒を含んでいる。焼成は普通である。2は平底の底部片で、推定底径は7.0cmである。網代痕が残っている。



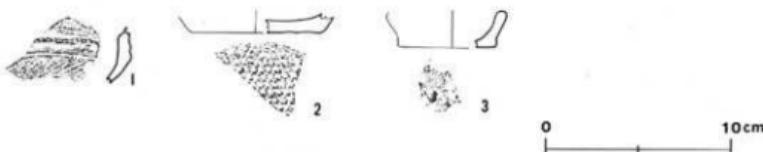
第46図 第1・2号井戸実測図

る。色調はにぼい褐色で、胎土には砂粒を含んでいる。焼成は普通である。

#### 土師質土器 (第47図-3)

3はカワラケ片である。推定で口径は7.5cm, 器高は2.0cm, 推定で底径は5.5cmである。色調はにぼい橙色で、胎土には砂粒を含んでいる。焼成は普通である。

このほか染付・青磁・瀬戸などの陶磁器片が数片出土しているが、いずれも近世のものと思われる。(PL20)



第47図 グリッド出土土器拓影図

#### 4　まとめ

当遺跡からは溝3条、井戸2基が検出され、遺物はグリッドからわずかに縄文式土器片・陶磁器片・土師質土器片が出土しただけである。溝・井戸とも遺存状態がよく、それはほど古さを感じさせない。第2・3号溝はその形状や主軸方向から、同一時期のものと思われる。また第3号溝は、第2号井戸を切っており、第2号井戸より新しい。しかし、遺構からの遺物はなく、グリッド出土の陶磁器片もわずかで、明確な時期を推定する資料には不十分である。当遺跡の溝・井戸は若干の時期差が認められるものもあるが、近世以降のものであると思われる。

## 向坪B遺跡

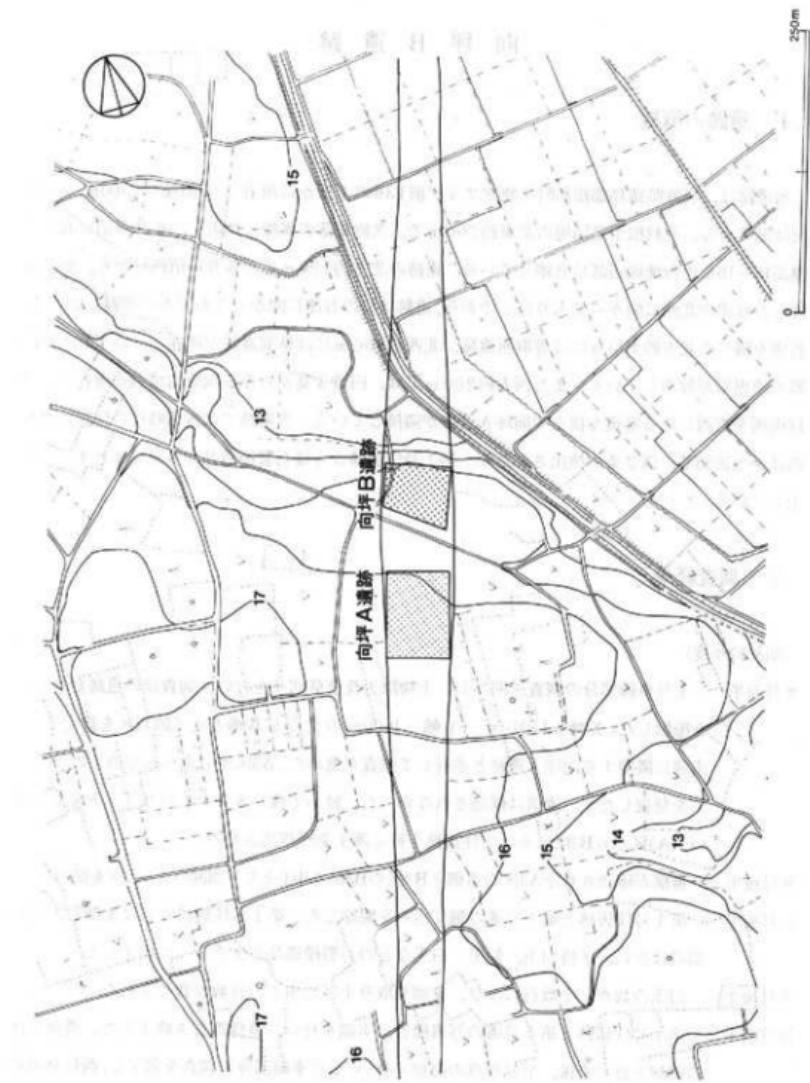
### 1 遺跡の概観

当遺跡は、茨城県猿島郡総和町久能字アミダ前136の1ほかに所在し、面積は2500m<sup>2</sup>で、現況は畠である。北利根工業団地の北東約700mで、久能集落の東端に位置し、長井戸沼に面する標高15~16mの台地縁辺部に立地している。遺跡の北方約150mには長井戸沼西枝から、幅50mほどの谷津が北西に向かって入り込んでおり、遺跡はこの谷津に向かってわずかに傾斜している。谷津を隔てた北方約400mには香取西遺跡、北西約400mには林割遺跡が所在し、いずれも土師器や須恵器が散布している。また西方約200mには、円墳3基からなる向原古墳群が所在し、遺跡南側を東西に走る県道を挟んで向坪A遺跡が隣接している。当遺跡では古墳時代の住居跡2軒のほか土坑23基、溝2条が検出されたが、第1号住居跡からは石製模造品が多量にまとまって出土している。

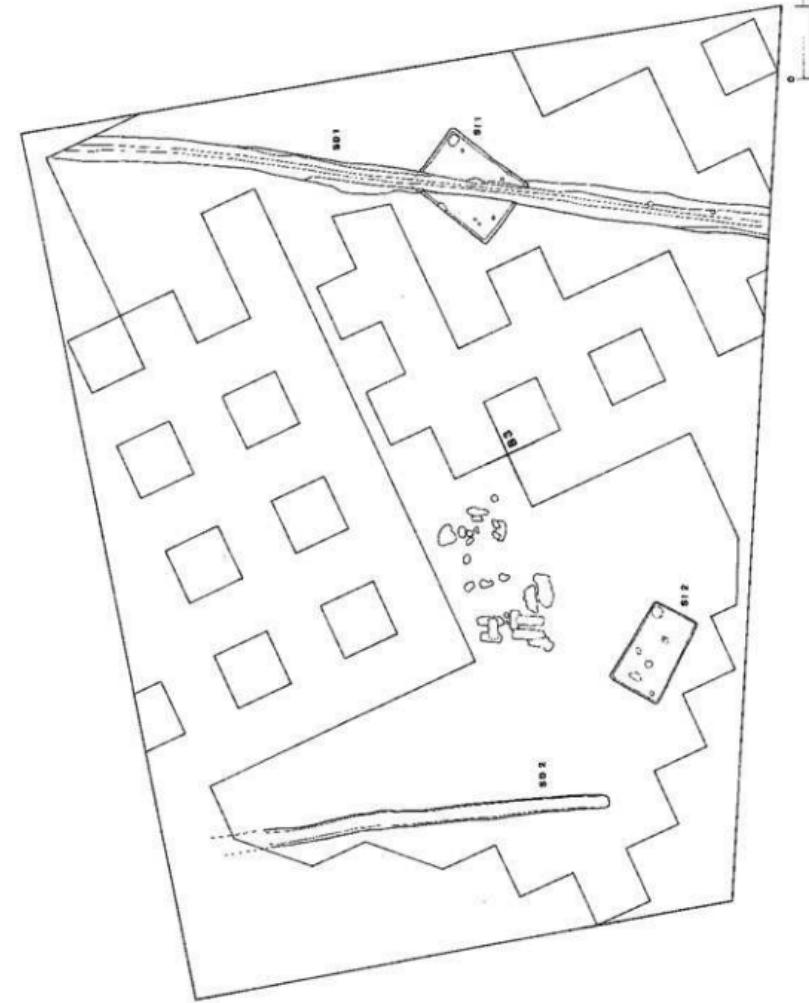
### 2 調査経過

（昭和57年度）

- 8月前半 上り車線部分の調査を開始し、上物除去及び草刈りを行い、調査前の遺跡全景写真を撮影した。X軸+17040m、Y軸-4600mの交点を基準として調査区を設定して、南側に隣接する向坪A遺跡と並行して調査を進めた。A3区から南へ8分の1のグリッドを発掘したが、遺構は確認されなかった。続いて残り8分の1のグリッド発掘を行い、A3区からB3区にかけて住居跡1軒と溝1条が確認された。
- 8月後半 遺構が確認されたA3区の東側とB3区のB3bsを中心として周囲のグリッドを拡張した。
- 9月前半 第1号住居跡と第1号溝の掘り込みを開始した。第1号住居跡からは土師器、須恵器のほかに、子持勾玉、勾玉、白玉などの石製模造品がまとめて出土した。
- 9月後半 白玉の数が三千数百に及び、実測や取り上げに多くの日数が費やされた。
- 10月前半 第1号住居跡と第1号溝の写真撮影、実測を行い、遺構調査を終了した。遺跡全体の清掃を行った後、全景写真の撮影を行い、上り車線部分の調査を完了し、西坪B遺跡の調査に移った。
- 11月後半 下り車線部分の調査を開始した。草刈り及び調査前の遺跡全景写真の撮影を行い、調査区を設定した。A2区から南へ4分の1のグリッド発掘を行い、B2区に住居跡1軒、



第48図 向坪日遺跡地形図



第49図 向坪B遺跡全体図

A2区に土坑23基、溝1条が確認された。ひき続き遺構調査を行うため、遺構が確認されたA2区の南側とB2区の北側のグリッドを拡張した。

12月前半 第2号住居跡、第2号溝、第1~23号土坑の調査を開始した。第2号住居跡からは土師器、勾玉などが出土し、土坑からは土師質土器片が出土した。各遺構の調査終了後、遺跡全体清掃、調査後の遺跡全景写真の撮影を行い、下り車線部分の調査が終了し、向坪B遺跡の調査が完了した。

### 3 遺構と遺物

当遺跡からは竪穴住居跡2軒・土坑23基・溝2条が検出された。遺物は住居跡から、土師器片・須恵器片・石製品などが出土し、土坑からは土師質土器が出土している。特に、第1号住居跡からは、祭祀関係の遺物が出土している。

#### (1) 竪穴住居跡

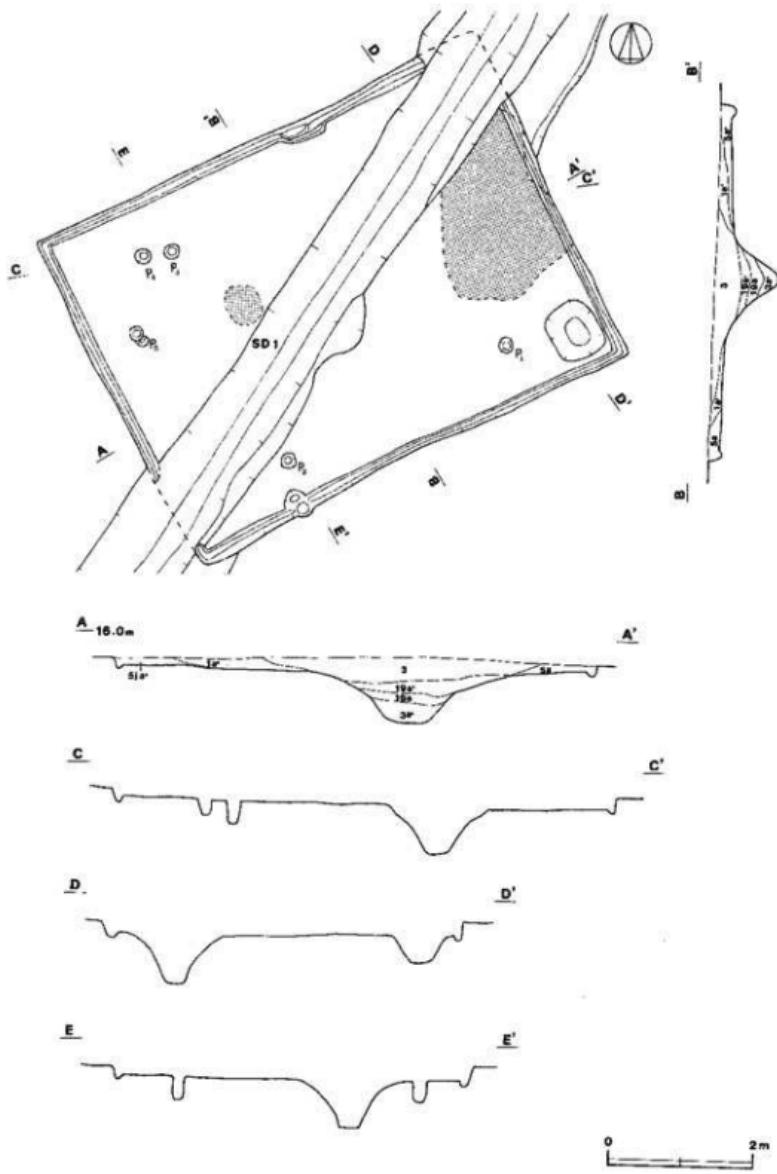
##### 第1号住居跡（第50図）

本跡はB3bsを中心に検出され、第2号住居跡の約30m東に位置している。

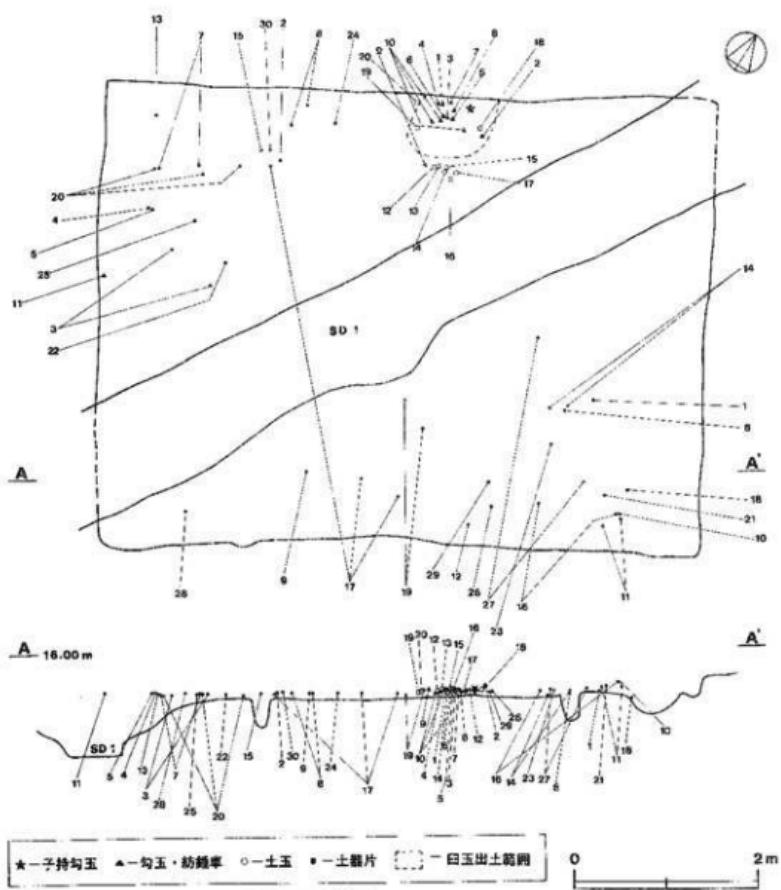
平面形は長軸6.6m・短軸4.8mの長方形を呈しており、主軸方向はN-63°-Eを指している。本跡の北コーナーから南コーナーにかけては、対角線状に第1号溝によって、幅1mで床面が切り込まれている。

壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約20cmである。床面は北東壁中央付近に、多少凹凸がみられ、やや軟弱であるが、おおむね平坦である。壁下を幅約10cm、深さ5~6cmの縦溝が全周している。ピットは5か所検出されたが、P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>が主柱穴と思われる。いずれも直径約20cm、深さ約30cmである。主柱穴は等間隔に4本配置されたものと推定され、そのうち北側の1本は第1号溝によって失われたものと思われる。東コーナーには貯蔵穴が検出された。平面形は隅丸長方形を呈しており、長軸80cm・短軸68cm・深さ42cmで、擂鉢状に掘り込まれている。北東壁中央部付近と住居跡中央部のやや西の床面には焼土の広がりがあったが、炉跡は確認できなかった。第1号溝によって切り込まれた部分に、炉跡があったかどうかは不明である。覆土はローム粒子を含む暗褐色土が上で、自然堆積の状況を示している。

遺物は、土師器・須恵器・石製模造品・土製品などが出土しており、完形または復元可能なものが多い。第1号溝によって切り込まれた部分を除いて、ほぼ床全面にわたって出土している。特に、北西壁中央部からやや北の縫隙に子持勾玉が1個出土し、その周囲から勾玉が10個、白玉が3570個も出土している。また、その周囲から炭化したヒシの実が数十個出土している。



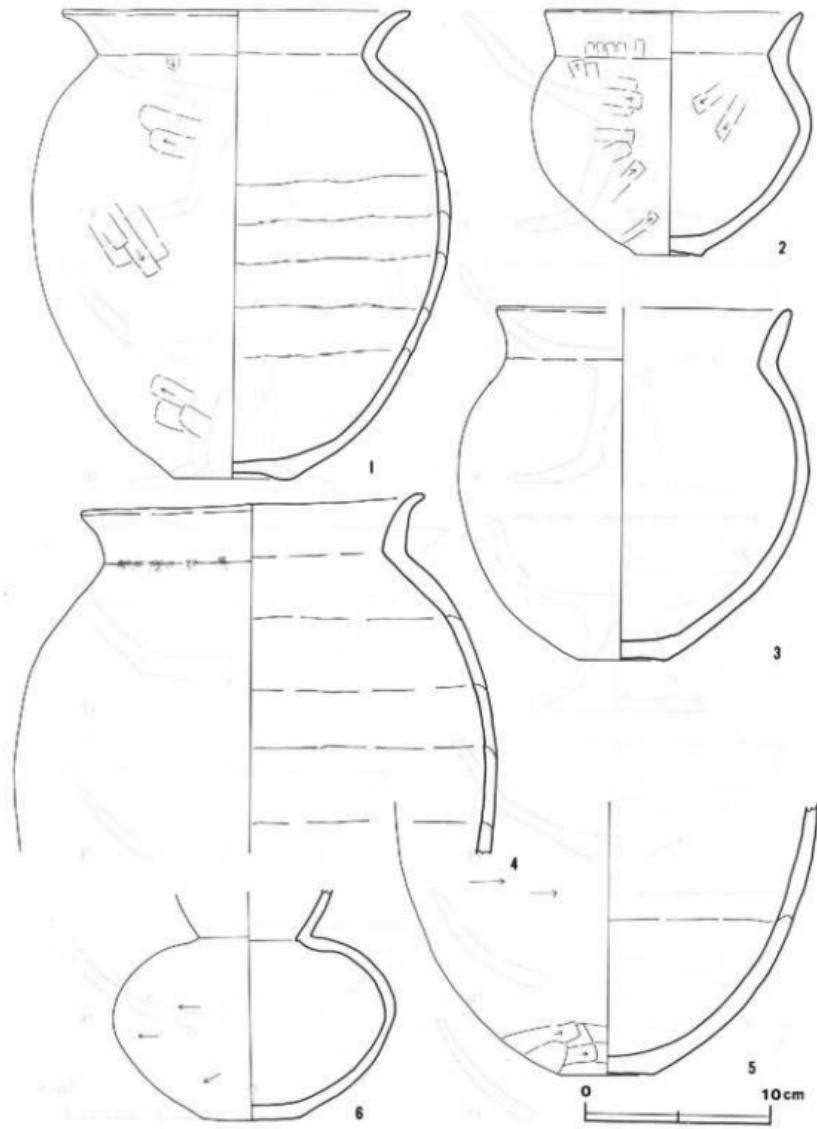
第50図 第1号住居跡実測図

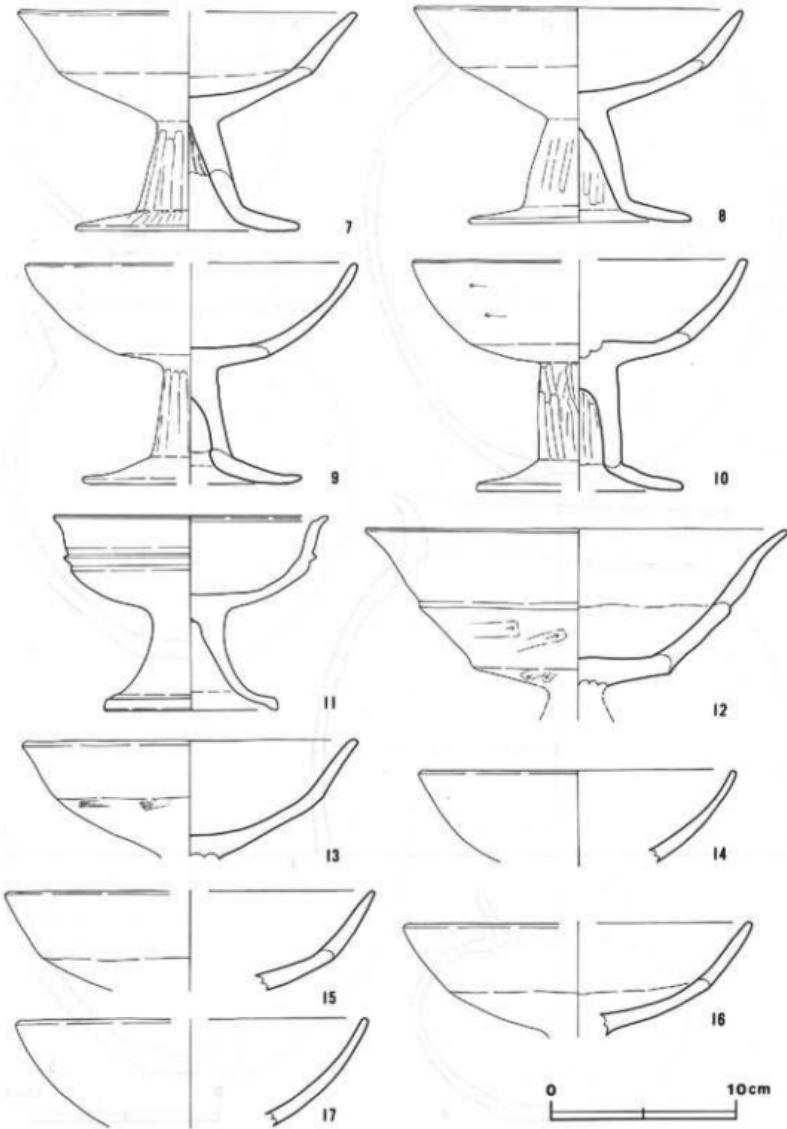


第51図 第1号住居跡遺物出土状態図

### 出土土器觀察表（第52~54圖）

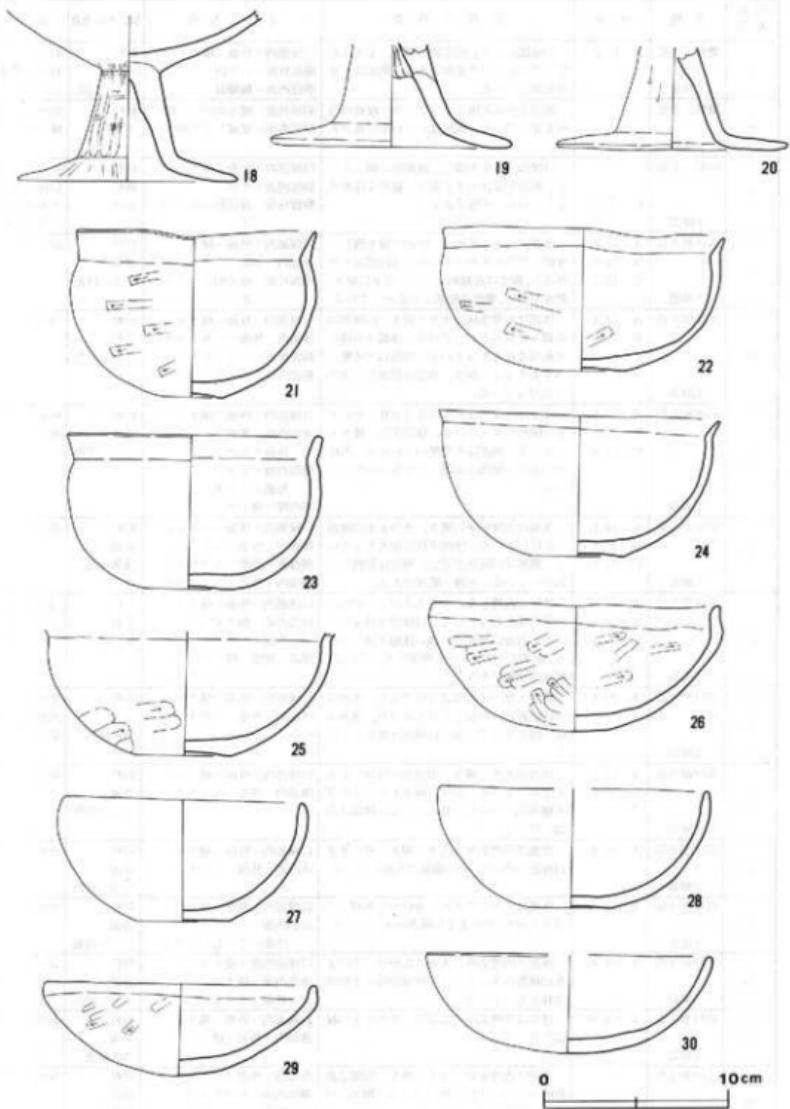
問題番号	基 標	法 量	難 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	點々・度数・色調	備 考
1	要形 土器	A 18.8 B 25.4 C 6.4	口縁部は「く」の字状に開き、上半は外張りしている。腹部はやや膨らむ球形を呈している。底部はあげ底である。	L1端部内・外面-横ナゲ 胴部内・外面-へラ削り 底部-ヘラ削り	砂粒・舌形 著者 にいわゆる	65%
	要形 上器	A 13.8 B 13.3 C 3.5	口縁部は「く」の字状に開き、底部上段は張り、以下すばさうっている。底部は小さく、あげ底である。内底の口縁部と断部の接し地をもっている。	L1端部内・外面-横ナゲ 胴部内-へラナゲ 胴部外底-へラ削り	砂粒 不真 赤褐色	90% 胴部に煤付 著 一次焼成
	土師器					
3	要形 土器	A (15.5) B 19.1 C 4.6	口縁部は「く」の字状に開き、朝部はは球形を呈するが、上位がやや張りしている。底部はややあげ底である。	L1端部内・外面-横ナゲ 胴部内・外面-ナゲ 底部-ヘラ削り	砂粒 不真 赤色	40% 二次焼成 全体に底座
	上部器					





第53図 第1号住居跡出土遺物実測図(2)

国版番号	器種	法号	器形の特徴	手法の特徴	胎土・施成・色調	備考
4	彫形 土器 土師器	A 17.9	I縁部は「く」の字状に開き、上半は外反している。やや長脚である。脚部は下半が欠損している。	口縁部内・外面一横ナデ 脚部外側一ハケ目 脚部内面一横筋模	砂粒 不良 にぶい褐色	40% 外側は擦減している。
5	彫形 上部 土師器	C 5.0	脚部上半は欠損していて、やや縮長の球形を呈している。底部はいく分あげ底である。	脚部外面一横万商のヘラ削り 脚部内面一掌底成して不明	砂粒 不良	40% 底付着
6	彫形 土器 土師器	C 5.4	I縁部上半を欠損し、直線的に開いている。胸部中段は大きく張り、扁平な球形をなしている。底付着である。	口縁部内・外面一横ナデ 脚部内面一ナダ 脚部外側一横筋斜位のヘラナダ	砂粒 良好 赤色	90% 口縁部内面と外側全体に擦耗
7	高环形土器 土師器	A (17.8) B 11.9 C 12.1	体部が大きく広がり、中位に縦を残し、外傾して立ち上がりでいる。口縁部はやや外反し、脚部は直線的に「ハ」の字に開き、肥厚である。脚部は扭曲して広がっている。	I縁部内・外面一横ナデ 体部内・外面一ヘラミガキ 脚部外側一縱方向のヘラミガキ	砂粒 滑油 にぶい褐色	85%
8	高环形土器 土師器	A 17.6 H 11.8 C 12.0	体部は内壁気味に大きく開き、口縁部は外傾して立ち上がりでいる。体部との境には不鮮明な縞をもっている。脚部はやや盛らみをもしながら開き、脚部は扭曲して大きく広がっている。	口縁部内・外面一横ナデ 体部内・外面一ヘラミガキ 脚部外側一ヘラミガキ 脚部内面一ヘリケズリ	砂粒 良好 にぶい褐色	100%
9	高环形土器 土師器	A (17.6) B 12.0 C (11.8)	体部は内壁しながら立ち上がり、そのまま脚部へ至っている。脚部下位に縞をもっている。脚部はやや開いているが、円錐状である。脚部は扭曲して平底で広がっている。	口縁部内・外側一横ナデ 体部内面一横成 外面一ナダ 脚部内部一ナダ 外面一ミガキ 窓部内部一横ナデ	砂粒 普通 にぶい褐色	60% 底付着
10	高环形土器 土師器	A (18.1) B 12.6 C (11.1)	体部は内壁気味に開き、そのまま口縁部へ続いている。体部下位に縞をもっている。脚部は円錐状を呈し、脚部は扭曲して広がっている。全体に肥厚である。	口縁部内・外面一ヘラナデ 体部内・外面一ヘラナデ 脚部内・外面一ヘラケズリ 脚部内・外面一ヘラケズリ	砂粒 普通 浅黄褐色	70%
11	高环形土器 陶器	A 14.8 B 10.7 C 9.4	体部は内壁しながら立ち上がり、中位にへたをもっている。口縁部は外反している。内面に唇直下に浅い沈線が残っている。脚部は外反しながら脚部へもっている。底部は平底である。	口縁部内・外面一横ナデ 体部内面一横ナデ 外面一ヘラケズリ 脚部・脚部一横ナデ	砂粒 不良 灰白色	100%
12	高环形土器 土師器	A 22.8	脚部欠損。その底部は平底である。体部はほぼ直線的に外傾して立ち上がり、体部中段に縞をもっている。I縁部は外反している。	I縁部内・外面一横ナデ 体部内・外面一ヘラナデ	砂粒 普通 浅黄褐色	50% 内外面一赤彩
13	高环形土器 土師器	A 17.7	体部は大きく開き、中位から外傾して立ち上がり。中位に縞をもら。その後を横方向にハケ目が残っている。脚部は欠損している。	I縁部内・外面一横ナデ 体部内・外面一ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい褐色	40%
14	高环形土器 土師器	A 16.8	体部は内壁気味に大きく開き、そのまま口縁部へ続いている。脚部は欠損している。	I縁部内・外面一横ナデ 体部内・外面一ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい褐色	30%
15	高环形土器 土師器	A (19.8)	体部は大きく広がり、中位から外傾して立ち上がり。そのまま口縁部へ至っている。	口縁部内・外面一横ナデ 体部内面一ヘラナデ 外面一ていねいなナデ	砂粒 普通 にぶい褐色	20%
16	高环形土器 土師器	A (18.4)	体部は内壁気味に大きく広がり。そのまま口縁部へ至っている。体部中位に不鮮明な縞をもっている。	I縁部内面一横ナデ 体部内面一横ナデ 外面一ヘラナデ	砂粒 良好 にぶい褐色	30%
17	高环形土器 土師器	A (18.6)	体部は内壁気味に広がり。そのままI縁部へ至っている。	口縁部内・外面一横ナデ 体部内・外面一横ナデ	砂粒 普通 浅黄褐色	10%
18	高环形土器 土師器	C 11.8	体部は内壁気味に大きく開き、脚部は直線的に「ハ」の字状に開いている。脚部は扭曲して広がっている。	体部内・外面一ヘラミガキ 脚部内面一ヘラケズリ 外面一ヘラミガキ 脚部外側一ヘラミガキ	砂粒 良好 相色	60%
19	高环形土器 土師器	C 13.0	体部は欠損している。脚部は「ハ」の字状に開き、脚部は扭曲して広がっている。	脚部内面一絞り痕焼る 外面一ていねいなナデ 脚部内・外面一横ナデ	砂粒 普通 にぶい褐色	30%



第54図 第1号住居跡出土遺物実測図(3)

国版 番号	器種	法規	器形の特徴	手法の特徴	胎・焼成・色調	備考
20	高环形土器 土師器	C 12.5	口部は外捲している。脚部は直線的に「ハ」の字状に彫き、断部は屈曲してから平底に広がっている。	脚部内面-ナデ 外面-ていかいナデ 脚部内・外面一觸ナデ	砂粒・スコ リア 苦透 にぶい橙色	40%
21	塊形 土器 土師器	A 12.8 B 9.0 C 3.4	体部は内側しながら立ち上がり、口縁部は外傾し、丸んでいる。底部はあら底板である。内側底盤と口縁部の縁に明瞭な棱をもっている。	口縁部内・外面一觸ナデ 体部内面-ヘラナデ 外面-ヘラケズリ	砂粒・雲母 良好 赤色 内外面とも 赤彩	
22	塊形 土器 土師器	A 15.2 B 8.0 C 4.4	体部は内寄して大きく聞きながら立ち上がり、口縁部は短く外傾している。内面には体部と口縁部の縁に明瞭な棱をもち、あら底板である。	口縁部内・外面一觸ナデ 体部内・外面-ヘラケズリ 上部-ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	95%
23	塊形 土器 土師器	A 13.4 B 8.4 C 4.3	体部は内寄して立ち上がり、口縁部は短く外傾している。あら底である。	口縁部内・外面-横ナデ 体部内・外面-ヘラナデ	砂粒 普通 明赤褐色	80%
24	塊形 土器 土師器	A 15.2 B 7.8	体部は内寄しながら立ち上がり、口縁部は短く外傾している。内面は底盤と体部の縁に棱をもっている。	口縁部内・外面-横ナデ 脚部内面-ヘラナデ 底部-横ナデ	砂粒 普通 褐色	100%
25	塊形 上器 土師器	C 5.0	体部は内寄しながら立ち上がり、あら底である。口縁部は外傾している。	口縁部内・外面-横ナデ 体部内・外面-横方向のヘラ ケズリ	砂粒 普通 にぶい橙色	70%
26	塊形 土器 土師器	A 15.4 B 7.0	底部から背部へと内寄気味に大きく開き、口縁部は内傾している。丸底である。	口縁部内・外面-横ナデ 体部内・外面-ヘラケズリ 底部内・外面-ヘラケズリ	砂粒 普通 褐色	100%
27	塊形 上器 土師器	A 12.8 B 6.8 C 5.0	体部は内寄しながら立ち上がり、そのまま口縁部へ続いている。あら底である。	口縁部内・外面-横ナデ 体部内・外面-ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	90%
28	塊形 土器 土師器	A (14.4) B 6.5 C 4.6	体部は内寄しながら立ち上がり、そのまま口縁部へ続いている。いく分あら底である。	口縁部内・外面-横ナデ 体部内面-ヘラナデ 体部下部-ヘラケズリ	砂粒 普通 明赤褐色	70%
29	塊形 上器 土師器	A 14.6 B 5.0	底部から背部へと内寄気味に大きく開き、口縁部は内傾している。口縁部と体部の縁に棱をもっている。	口縁部内・外面-横ナデ 体部内面-ヘラナデ 外面-ヘラケズリ	砂粒 良好 褐色 口縫内外に 赤彩色	100%
30	塊形 土器 土師器	A (15.3) B 5.4	体部は内寄しながら立ち上がり、そのまま口縁部へと続いている。丸底である。 (底部と体部の縁は不規則である。)	口縁部内・外面-横ナデ 体部内・外面-ヘラナデ 全体に厚成している	砂粒 普通 にぶい橙色	40%

### 子持勾玉（第55図）

北西壁中央部のやや北寄りの壁際から、腹部を壁の方向に向けて出土した。長さ9.2cm・幅6.3cm・身の幅3.9cmを測り、石質は滑石である。断面は、ほぼ円形を呈しており、頭尾両端は平坦に截断されている。頭部には両側から穿孔されており、左側は孔径5.25mm、右側は4.65mmで、中間はやや細くなる。背部に4個、腹部に1個、両側に3個ずつの発達した鰐状の突起を持っていて。ナイフ状の用具で削って、精巧に作られており、全体的に均整がとれている。

### 勾玉（第56図-1~10）

全部で10個出土したが、いずれも扁平で板状を呈しており、やや粗製である。両面は平滑に研磨されているが、形状は大小差が見られる。石質は滑石である。

表3 勾五計測表

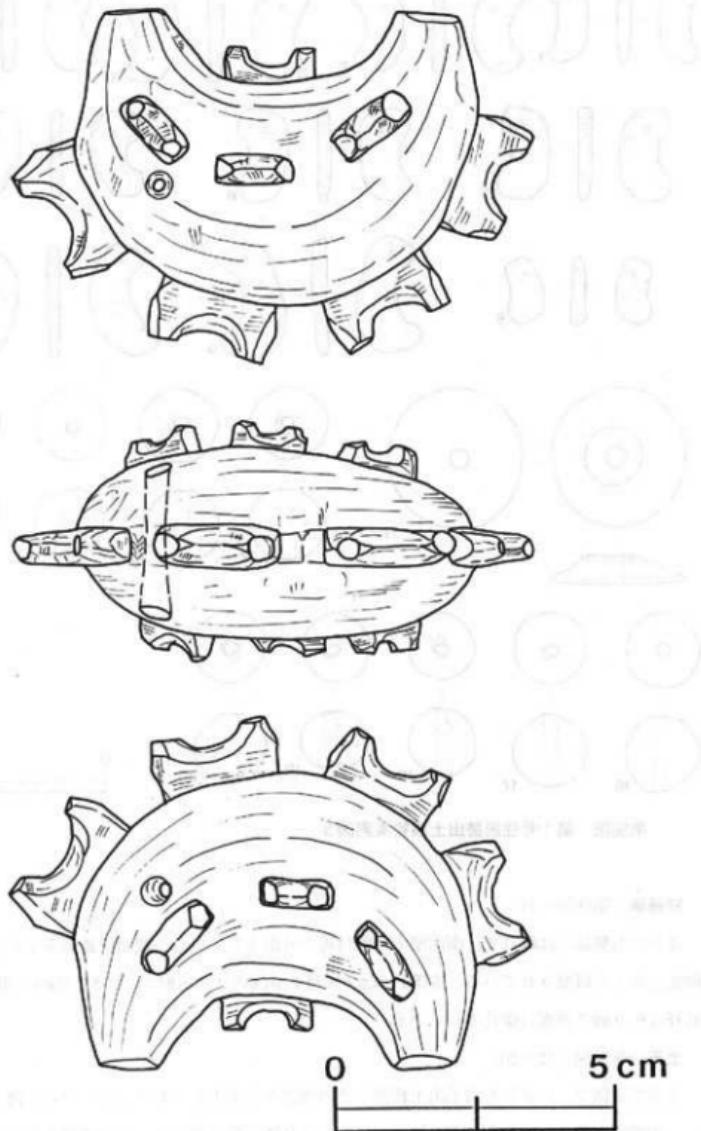
図版番号	長さ(cm)	幅(cm)	頂部幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(mm)	図版番号	長さ(cm)	幅(cm)	頂部幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(mm)
1	2.8	1.3	1.1	0.55	3.0	1.50	6	3.4	1.8	1.4	0.50	5.0	1.80
2	3.2	1.8	1.3	0.45	4.0	1.60	7	3.1	1.9	1.3	0.40	4.0	1.95
3	3.5	2.0	1.6	0.50	6.5	1.45	8	2.4	1.4	1.2	0.55	3.0	1.70
4	3.0	1.8	1.3	0.55	4.5	1.65	9	4.2	2.3	1.5	0.60	7.0	2.00
5	3.4	1.8	1.4	0.50	5.0	1.80	10	4.0	2.0	1.4	0.40	6.5	1.80

## 臼玉(第57図-1~100)

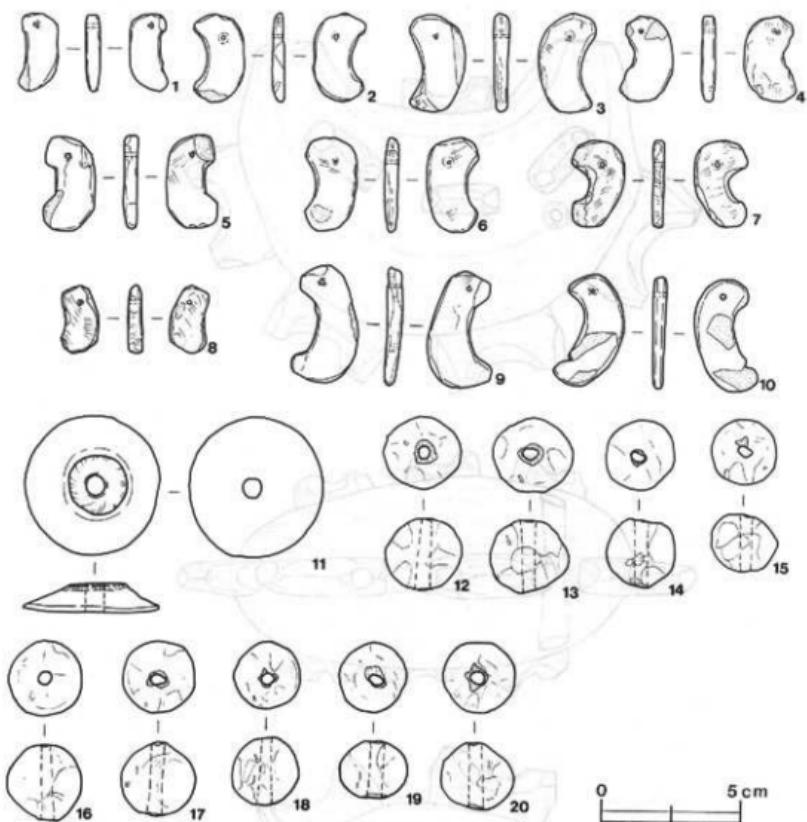
子持勾玉や勾玉と共に出土し、3570個を数え、すべて成品である。いずれも側面を縱方向に研磨し、ほぼ円形に仕上げている。上下面是平坦に研磨されているものと、凹凸が残っているもののが見られる。石質は滑石で、粗製のものと精製のものが半々である。長さは1.7~4.5mm、径は4.05~5.8mm、孔径は1.4~2.4mmであり、大きさにもばらつきが見られる。以下、100個を無作為に抽出して計測した結果は、次のとおりである。

表4 白玉計測表(単位mm)

図版番号	径	長さ	孔径	図版番号	径	長さ	孔径	図版番号	径	長さ	孔径	図版番号	径	長さ	孔径
1	5.5	3.4	1.9	26	5.0	2.6	2.1	51	5.3	3.4	1.8	76	5.0	3.2	1.7
2	5.2	2.9	1.8	27	5.0	2.3	2.4	52	4.8	4.1	1.7	77	4.8	4.2	1.8
3	5.8	3.2	1.8	28	5.3	2.9	1.8	53	5.1	3.1	1.8	78	5.8	2.1	1.8
4	4.6	2.0	1.7	29	4.7	3.7	2.1	54	5.3	3.1	1.8	79	5.0	2.8	1.7
5	5.1	3.0	1.9	30	5.0	3.2	2.1	55	5.3	2.3	2.3	80	4.6	1.8	1.7
6	4.6	1.7	1.7	31	5.5	3.6	1.9	56	5.2	2.6	2.1	81	5.4	3.2	1.4
7	5.7	2.2	2.2	32	4.3	3.0	1.5	57	4.4	2.4	1.7	82	5.1	3.8	1.9
8	4.7	1.9	1.8	33	5.4	2.8	2.0	58	5.2	2.1	1.5	83	5.4	3.2	1.4
9	5.3	3.4	1.7	34	4.5	2.1	1.8	59	4.8	2.5	2.2	84	4.1	2.2	1.7
10	4.5	2.9	1.9	35	5.3	2.8	1.9	60	4.4	3.1	1.7	85	5.2	3.8	1.8
11	4.1	1.7	1.6	36	4.7	2.5	2.4	61	4.2	2.3	1.4	86	5.2	3.4	1.9
12	5.5	2.9	1.8	37	4.5	2.3	2.3	62	4.9	3.8	2.1	87	4.4	3.5	1.7
13	4.6	2.0	2.0	38	4.55	2.1	1.8	63	5.5	4.3	2.05	88	5.0	2.8	1.7
14	5.1	3.3	1.7	39	5.5	2.7	1.7	64	5.0	4.0	1.6	89	4.5	3.8	1.9
15	5.5	3.4	2.1	40	4.4	2.4	1.7	65	4.6	1.9	1.7	90	5.6	2.8	2.1
16	4.7	2.95	1.7	41	5.4	3.1	2.0	66	5.5	2.6	1.8	91	5.1	3.1	2.1
17	4.05	1.7	1.5	42	5.6	3.2	2.0	67	4.7	2.4	1.8	92	4.2	2.3	1.7
18	5.4	3.4	1.8	43	5.2	3.3	1.8	68	4.4	2.8	1.6	93	4.4	3.3	1.6
19	4.8	3.1	1.6	44	5.1	3.1	1.7	69	5.1	4.2	1.9	94	5.1	3.1	2.1
20	4.3	3.0	1.9	45	5.3	4.1	1.9	70	4.7	3.1	1.8	95	5.4	3.5	1.8
21	5.3	3.6	1.7	46	5.3	2.6	2.0	71	4.1	4.5	1.6	96	5.2	3.45	1.3
22	5.2	3.0	1.85	47	5.3	2.8	1.7	72	5.3	3.1	1.7	97	4.55	3.1	1.9
23	5.25	2.9	1.7	48	5.2	3.0	2.0	73	5.1	1.7	2.0	98	5.1	3.2	1.7
24	5.6	3.6	1.9	49	5.25	3.5	1.7	74	5.1	3.4	1.9	99	5.2	2.1	1.8
25	5.4	2.8	1.8	50	5.0	2.6	1.8	75	5.3	3.4	2.2	100	4.8	3.8	2.3



第55図 第1号住居跡出土遺物実測図(4)



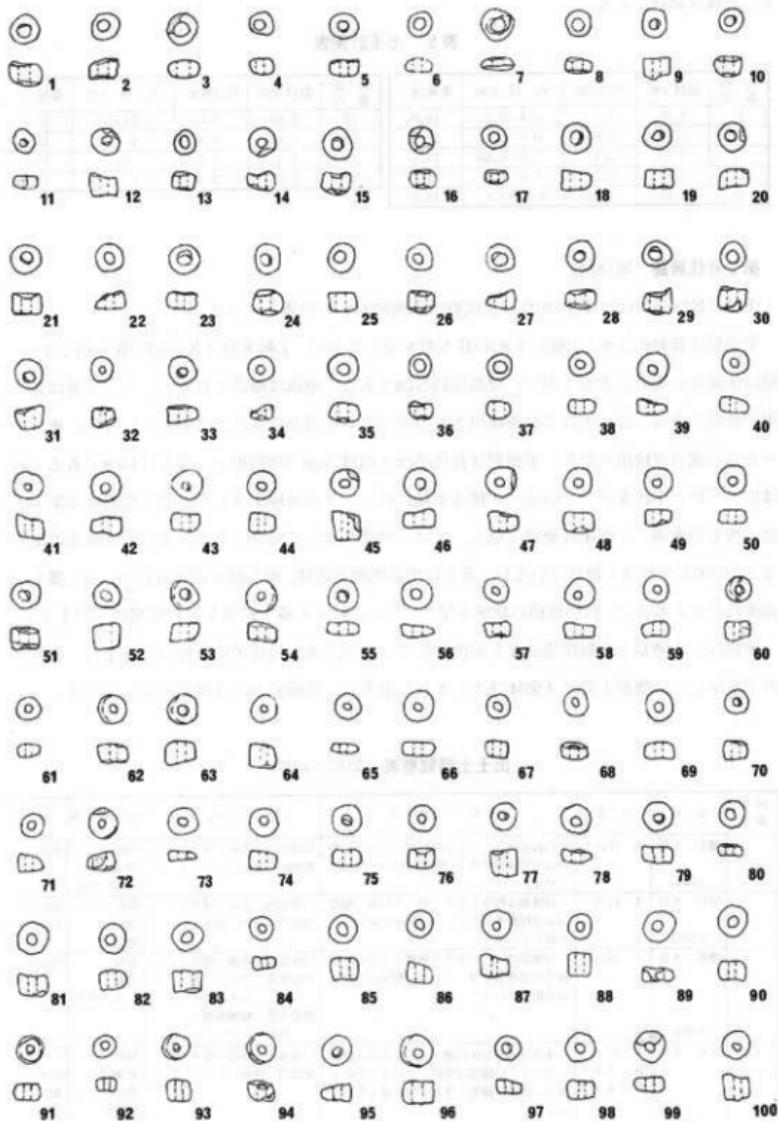
第56図 第1号住居跡出土遺物実測図(5)

#### 紡錘車（第56図-11）

ほかの石製品とは離れて、南西壁中央部付近から出土している。截頭円錐形を呈し、上下面・側面ともよく研磨されている。長径5.0cm・短径4.8cmのほぼ円形で、厚さ1.03cm・重量30.4g・孔径は6.9mmで垂直に穿孔されている。

#### 土玉（第56図-12~20）

全部で9個で、いずれも臼玉出土範囲とその周囲から出土しており、ほかからは出土していない。指頭痕が残るものもあるが、指ナデによって全体に作りがよく、ほぼ球形を呈している。大きさもそれほど差はない。いずれも色調は暗褐色か褐色を呈しており、胎土には砂粒を含んでい



スケール (S=1)

第57図 第1号住居跡出土遺物実測図(6)

る。焼成は良好である。

表5 土玉計測表

回 番 号	長径(cm)	短径(cm)	孔 径(cm)	重量(g)	回 番 号	長径(cm)	短径(cm)	孔 径(cm)	重量(g)
12	2.75	2.5	0.4~0.5	16.0	17	2.60	2.6	0.4~0.5	16.5
13	2.80	2.6	0.5~0.55	17.0	18	2.40	2.4	0.4~0.6	13.0
14	2.50	2.45	0.5~0.55	13.5	19	2.40	2.0	0.5	11.5
15	2.30	2.1	0.4~0.5	11.7	20	2.35	2.4	0.5~0.6	13.5
16	2.70	2.65	0.35~0.5	16.5					

### 第2号住居跡（第58図）

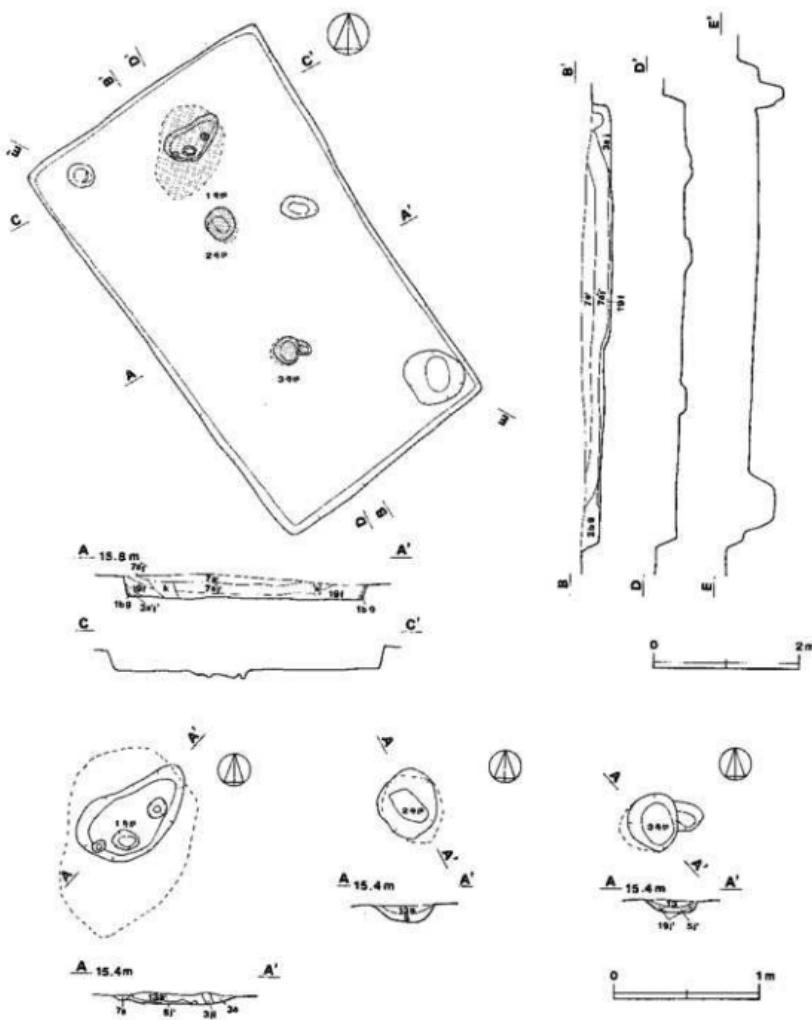
本跡はB2asを中心に検出され、七坑群の南西約6mに位置している。

平面形は長軸6.2m・短軸3.7mの長方形を呈しており、主軸方向はN-36°-Wを指している。壁は床面から垂直に立ち上がり、壁高は約27cmである。壁溝は確認されなかった。床面はほぼ平坦で軟弱である。ピットは2か所検出されたが、その位置から柱穴とは考えられない。東コーナーから貯蔵穴が検出された。平面形は長径85cm・短径70cmの楕円形で、深さは43cmである。断面は広い「U」字状を呈している。炉跡は主軸に沿って3か所検出された。北に位置する第1号からは、焼土が充満し、がれ床は焼けて堅く、ブロック状を呈している。第2・3号からは焼土の量も少なく、炉床もそれほど焼けていない。第1号の周囲の床は、堅く踏み固められている。覆土は一部擾乱がみられるが、自然堆積の状況を呈し、ローム粒子や焼土粒子を含む黒褐色土が主である。

遺物は、土師器・石製模造品などが出土しているが、第1号住居跡と比べて少ない。第1号炉の上を中心に、變形土器が3個体分まとめて出土し、貯蔵穴からは塊が出土している。

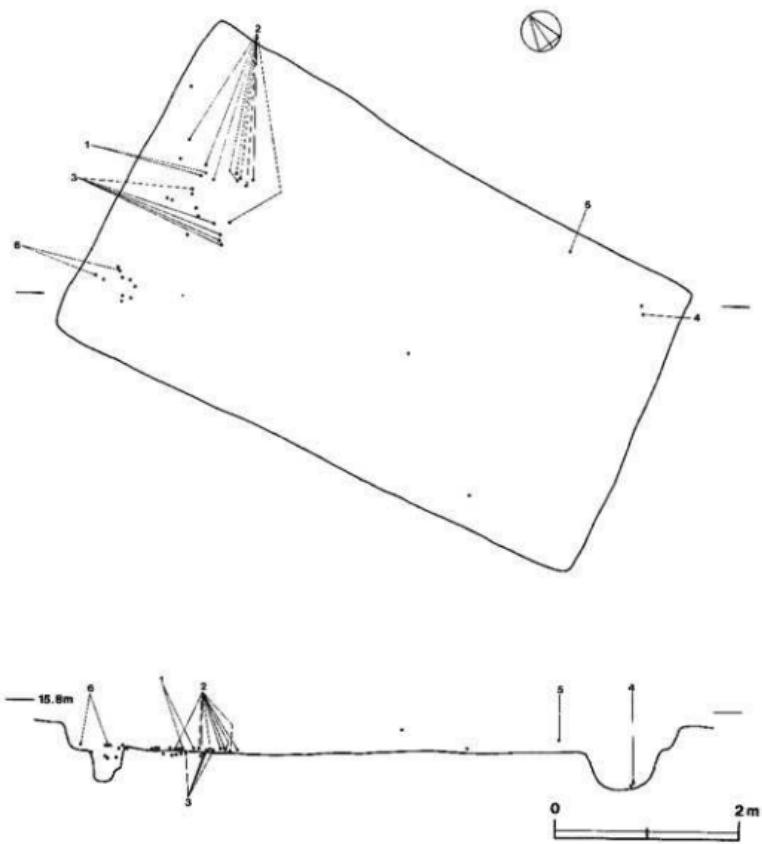
出土土器観察表（第60・61図）

回 番 号	器 種	法 量	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土燒成・色調	著 者
1	變形 土器 上部器	A 17.6	口縁部は「く」の字状に外傾している。側部はやや膨張である。側部下段以下欠損している。	口縁部内・外面・横ナデ 側部内・外面・ヘリナデ	砂粒 普通 に赤い褐色	60%
2	變形 上器 上部器	A 17.0	口縁部は外反しながら開いている。側部はほぼ環形を呈している。側部下段以下は欠損している。	口縁部内・外面・横ナデ 側部内・外面・横ナデ	砂粒 普通 に赤い褐色	80% 内面は灰褐色
3	變形 七石 上部器	A 16.8	口縁部は「く」の字状に外傾している。側部はほぼ環形を呈している。側部下段以下は欠損している。	口縁部内・外面・横ナデ 側部外面・ハケ目(部分的) のあとナデ 側部内面・輪池試験ら 外側・ナデ	砂粒 普通 に赤い褐色	60%
4	變形 上器 上部器	A 15.8 B 7.1 C 4.7	全体は内側凹凸に開き、上位はほぼ直立している。口縁部は外傾している。平底である。内面口縁部と全体の間に縫をもっている。	口縁部内・外面・横ナデ 全体内・外面・ナデ	砂粒 普通 赤色。に赤い褐色 割落が付いて	95%
5	變形 上器 土師器	A 13.9 B 4.7	全体内側しながら開いて立ち上がり、口縁部は内ソギ狀で丸底である。	口縁部内・外面・横ナデ 全体内・外面・ナデ	砂粒 良好 に赤い褐色	80%



第58図 第2号住居跡実測図

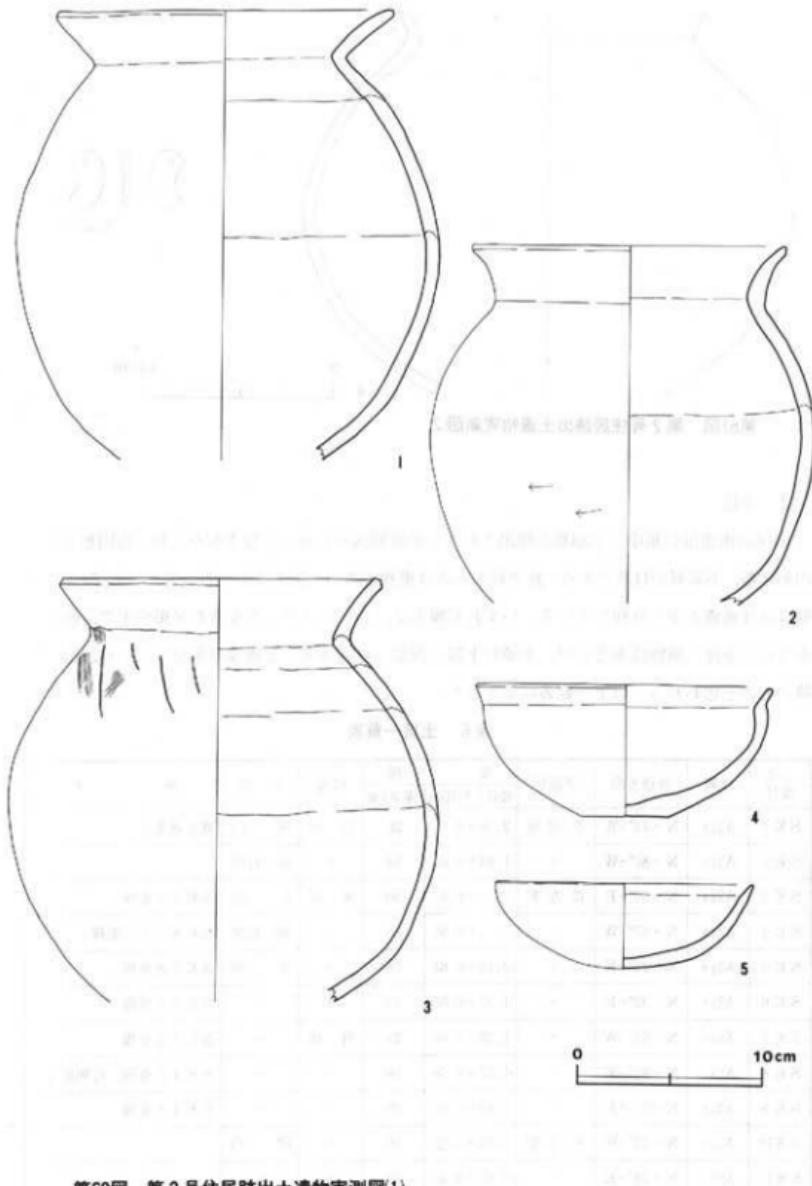
国宝 番号	器種	法観	器形の特徴	手法の特徴	釉上・施色・色刷	備考
6	變形土器 土師器	/	口縁部は「く」の字状に外傾し、腹部中位は大きく張り、やや扁平な球形を呈している。腹部下位以下と、口縁部上半は欠損している。	口縁部内・外面 横ナメ 腹部一斜めのヘラミガキ	砂粒 普通・不良 赤色	20% 剥落が著しい



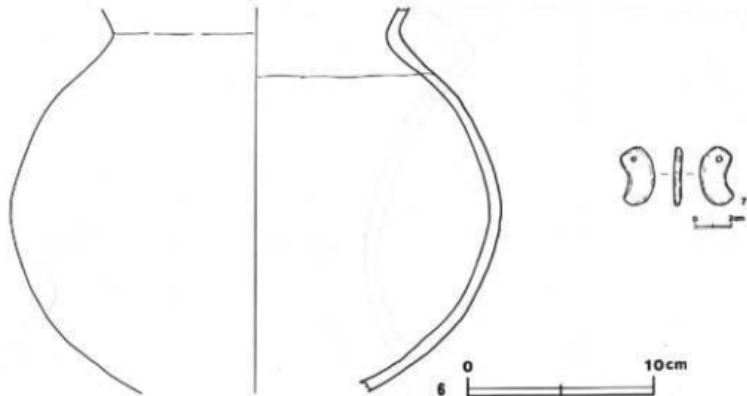
第59図 第2号住居跡遺物出土状態図

#### 勾玉（第61図-7）

本跡からは1点だけ出土している。第1号住居跡出土のものと同じく、扁平で板状を呈している。長さ3.1cm・幅1.9cm・腹部幅1.4cm・厚さ0.4cm・孔径2.0mm・重量3.3gで、石質は滑石である。



第60図 第2号住居跡出土遺物実測図(1)



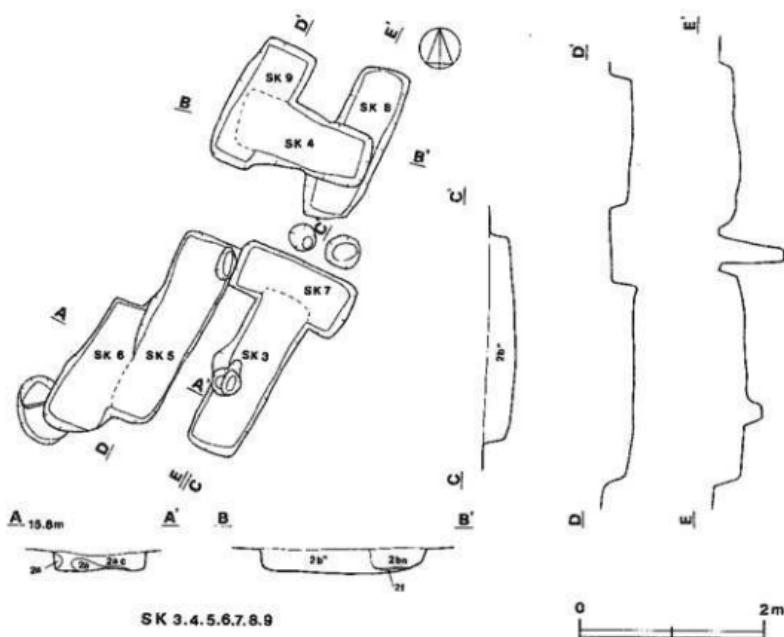
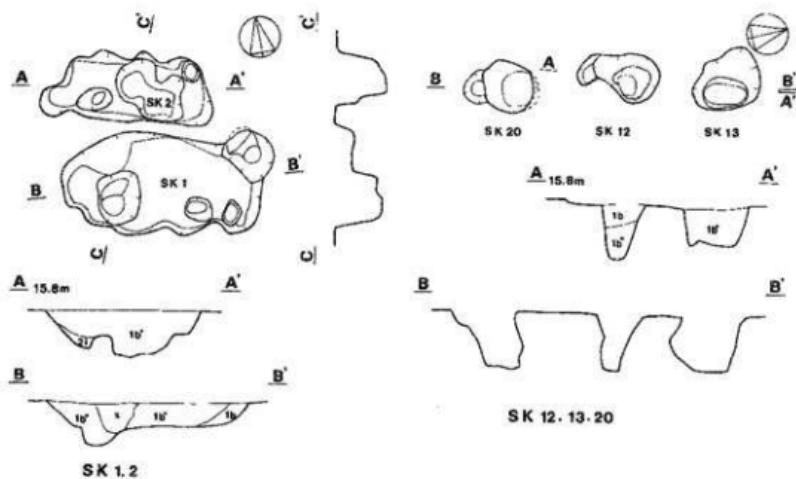
第61図 第2号住居跡出土遺物実測図(2)

## (2) 土坑

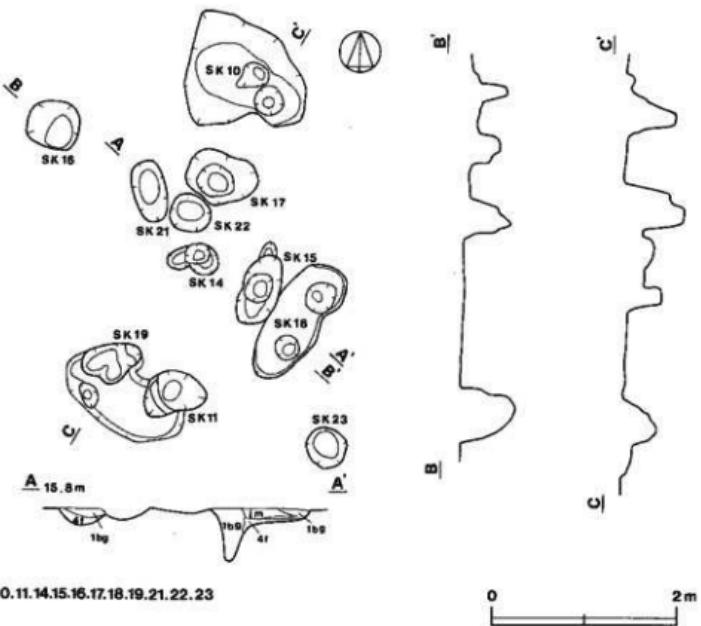
A2区の南東部に集中して23基が検出された。平面形状からみると長方形が7基、楕円形3基、円形2基、不定形が11基である。長方形のものは重複が多い。深さは5~69cmで一定していない。壁はほぼ垂直か少し外傾している。いずれも覆土は、ロームブロックを含む黒褐色土で、縮まりがない。全体に遺物は少ないが、土師質土器、陶器、寛永通宝、土錘等が出土しており、近世以前のものと思われる。以下一覧表にまとめた。

表6 土坑一覧表

土坑 番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁面	底面	備 考
				長径×短径(cm)	深さ(cm)			
SK 1	A2j*	N - 73°-W	不 定 形	2.16×1.1	28	外 傾	凹 凸	寛永通宝1
SK 2	A2j*	N - 80°-W	*	1.84×0.64	54	*	緩い起伏	
SK 3	A2j*	N - 30°-E	長 方 形	—×0.6	30	垂 直	平 坦	SK 7と重複
SK 4	A2i*	N - 67°-W	*	—×0.65	25	*	緩い起伏	SK 8・9と重複
SK 5	A2j*	N - 25°-E	*	2.18×0.62	28	*	平 坦	SK 6と重複
SK 6	A2j*	N - 32°-E	*	1.57×0.55	22	*	*	SK 5と重複
SK 7	A2i*	N - 65°-W	*	1.35×0.65	27	外 傾	*	SK 3と重複
SK 8	A2i*	N - 25°-E	*	1.77×0.59	18	*	*	SK 4と重複、灯明皿1
SK 9	A2i*	N - 25.5°-E	*	1.45×0.65	25	*	*	SK 4と重複
SK 10	A2i*	N - 42°-W	不 定 形	1.55×1.25	10	*	凹 凸	
SK 11	A2j*	N - 78°-E	*	0.67×0.45	69	*	*	



第62図 土坑実測図(1)

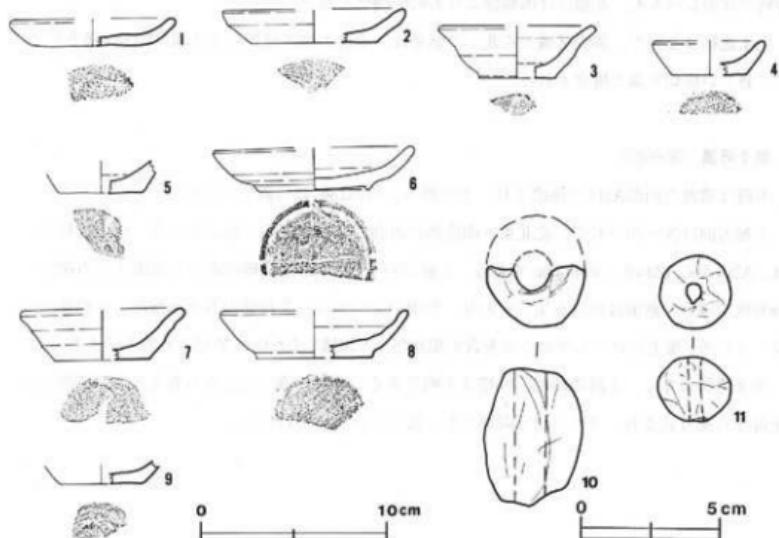


第63図 土坑実測図(2)

土 坑 番 号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁面	底 面	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)			
S K12	A2j+	N - 17° - E	不定形	0.89 × 0.51	62	外傾	凹凸	
S K13	A2j+	N - 18° - E	*	0.70 × 0.67	60	内傾	平坦	
S K14	A2i+	N - 90°	*	0.55 × 0.35	53	外傾	凹凸	
S K15	A2j+	N - 22° - E	*	0.92 × 0.40	49	*	*	灯明皿4・上鍊1・土玉1
S K16	A2i+	N - 69° - W	棱円形	0.57 × 0.51	60	*	緩い起伏状	
S K17	A2i+	N - 70° - W	不定形	0.74 × 0.55	64	*	凹凸	灯明皿3
S K18	A2j+	N - 33° - E	棱円形	1.40 × 0.58	5	*	*	
S K19	A2j+	N - 64° - W	不定形	1.40 × 0.83	7 - 11	*	*	
S K20	A2j+	N - 14° - E	*	0.75 × 0.55	62	内傾	緩い起伏状	
S K21	A2i+	N - 12° - W	棱円形	0.67 × 0.35	20	外傾	*	
S K22	A2i+	—	円形	0.44 × 0.40	27	*	*	
S K23	A2j+	—	*	0.44 × 0.40	60	*	平坦	

出土土器観察表 (第64図)

回収番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	施土・焼成・色調	備考
1	皿形 土器 土師質土器	A ( 8.6) B 1.4 C ( 6.0)	体部は内側気味に近く開いている。平底である。	内・外面一ナデ 底部一回転糸切り	砂粒 良好 に近い橙色	25%
2	皿形 土器 土師質土器	A ( 9.7) B ( 1.8) C ( 6.8)	体部は厚く、短く外傾して立ち上がっていいる。平底である。	内・外面一ナデ 底部一回転糸切り	砂粒 良好 灰褐色	15% SK 8出土
3	皿形 土器 土師質土器	A ( 8.0) C ( 4.2)	体部は内側して立ち上がり。口縁部は直線的に開いている。平底である。	内・外面一ナデ 底部一回転糸切り	砂粒 良好 に近い橙色	15% SK 15出土
4	皿形 土器 土師質土器	A ( 5.9) B 1.9 C ( 4.1)	体部は厚く、直線的に開いて立ち上がっていいる。平底である。	内・外面一ナデ 底部一回転糸切り	砂粒 普通 灰褐色	15% SK 15出土
5	皿形 土器 土師質土器	C ( 4.6)	体部は厚く、外傾して立ち上がっていいる。平底である。	内・外面一ナデ 底部一回転糸切り	砂粒 普通 橙色	10% SK 17出土
6	皿形 土器 陶器	A (10.5) B 2.3 C ( 5.9)	体部は内側気味に大きく開いている。	底部を削り込んで高台を作り出している。	砂粒・礫 良好 灰褐色	45% SK 15出土 灰白色の釉
7	皿形 土器 土師質土器	A ( 8.5) B 2.8 C ( 5.0)	体部は外傾して立ち上がり。口縁部はやや外反する。平底である。	内・外面一ナデ 底部一回転糸切り	砂粒 良好 橙色	30% SK 17出土
8	皿形 土器 土師質土器	A ( 9.8) B 2.5 C ( 6.3)	体部は内側気味に開いている。平底である。	内・外面一ナデ 底部一糸切り後ナデている。	砂粒 良好 に近い橙色	40% SK 17出土
9	皿形 土器 土師質土器	C ( 4.4)	体部は厚く、内側気味に開いている。	内・外面一ナデ 底部一糸切り後、少しナデしている。	砂粒 普通 に近い橙色	10% SK 15出土



第64図 土坑出土遺物実測図

### 土製品（第64図-10・11）

10・11とも第15号土坑の覆土中から出土したものである。10は管状土錐で、約半分が欠損している。指頭整形で、長さ4.9cm・径3.5cm・孔径1.1cm・現存の重量は21gである。11は土玉でほぼ球形を呈しており、長径2.55cm、短径2.3cm、孔径0.5cm、重量14gである。いずれも色調は暗褐色で、胎土には砂粒を含んでいる。焼成は普通である。

### 古鏡（第68図-1）

第1号土坑の覆土中から出土したもので、寛永通宝である。直径2.4cm・厚さ1.4mmである。

### (3) 溝

#### 第1号溝（第65図）

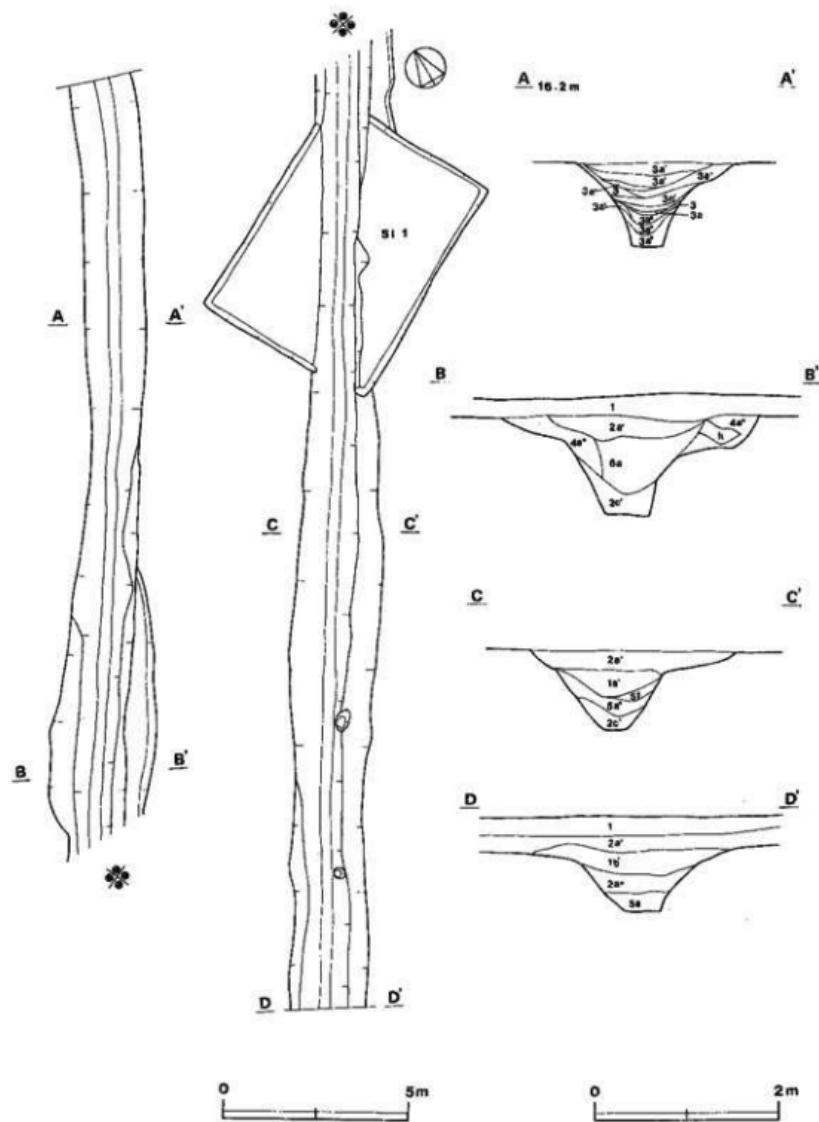
本跡は遺跡の東部A3・B3区に検出され、B3bs付近で第1号住居跡を切り込んでいる。主軸方向はN-32°-Eを指し、北北東-南南西の方向で、直線的に延びている。検出された長さはA3f<sub>9</sub>からB3f<sub>2</sub>までの約50mであるが、両端とも調査区域外へ続いている。上幅は140~220cm、下幅は30~40cmで、造構確認面から底面までの深さは80~100cmである。断面は「U」形を呈しており、底面、壁面ともに凹凸は少ない。覆土はローム粒子を含む暗褐色土や黒褐色土が主で、一部耕作による擾乱もあるが、ほぼ自然堆積の状況を呈している。当遺跡は北に向かっており、本跡の底面レベルも、北端部は南端部よりも約60cm低くなっている。

出土遺物はないが、調査区域から北への延長は、山林と畑の境界にある溝に接続すると思われ、ごく新しい掘り込み溝と推定される。

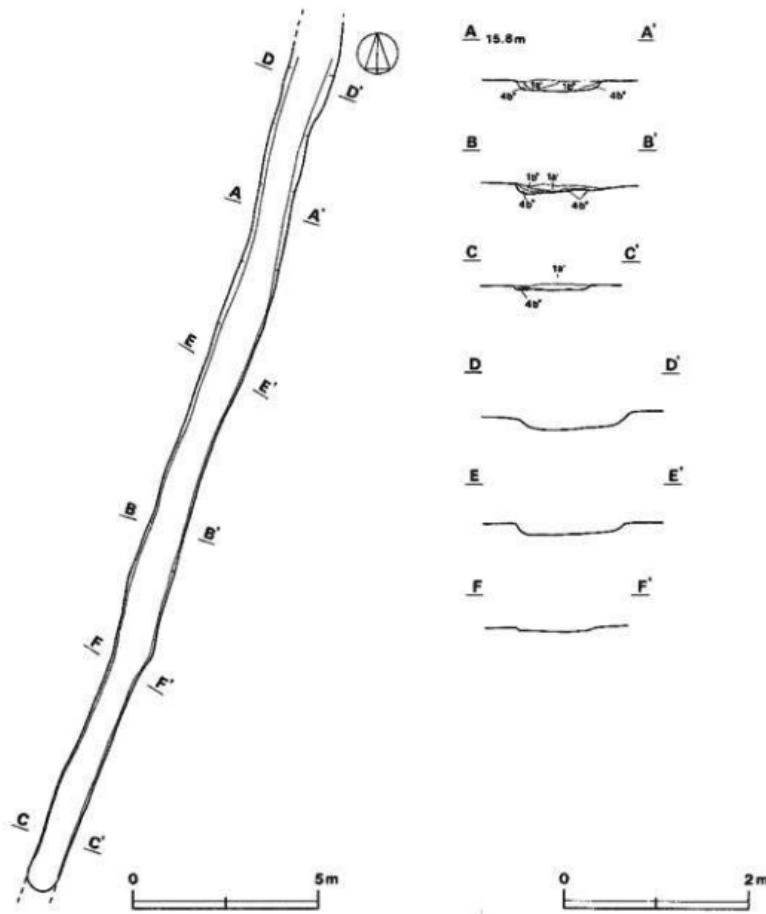
#### 第2号溝（第66図）

本跡は遺跡の西部A2区に検出され、土坑群の北西約13mに位置している。主軸方向はN-20°-Eで、北北東-南南西の方向でほぼ直線的に延びている。検出された長さは、A2j<sub>1</sub>からA2d<sub>6</sub>までの約25mである。上幅は90~110cm、造構確認面から底面までの深さは10cm前後で浅い。断面は皿状を呈しており、底面のレベルは、北端部の方が南端部よりも約20cm低くなっている。覆土はロームブロックを含む黒褐色土が堆積しており、埋め戻されたものと思われる。

出土遺物はなく、本跡の時期、性格は不明である。非常に浅いことから考えると、実際は表土上部から掘り込まれ、さらに長く両端とも、延びていたと思われる。



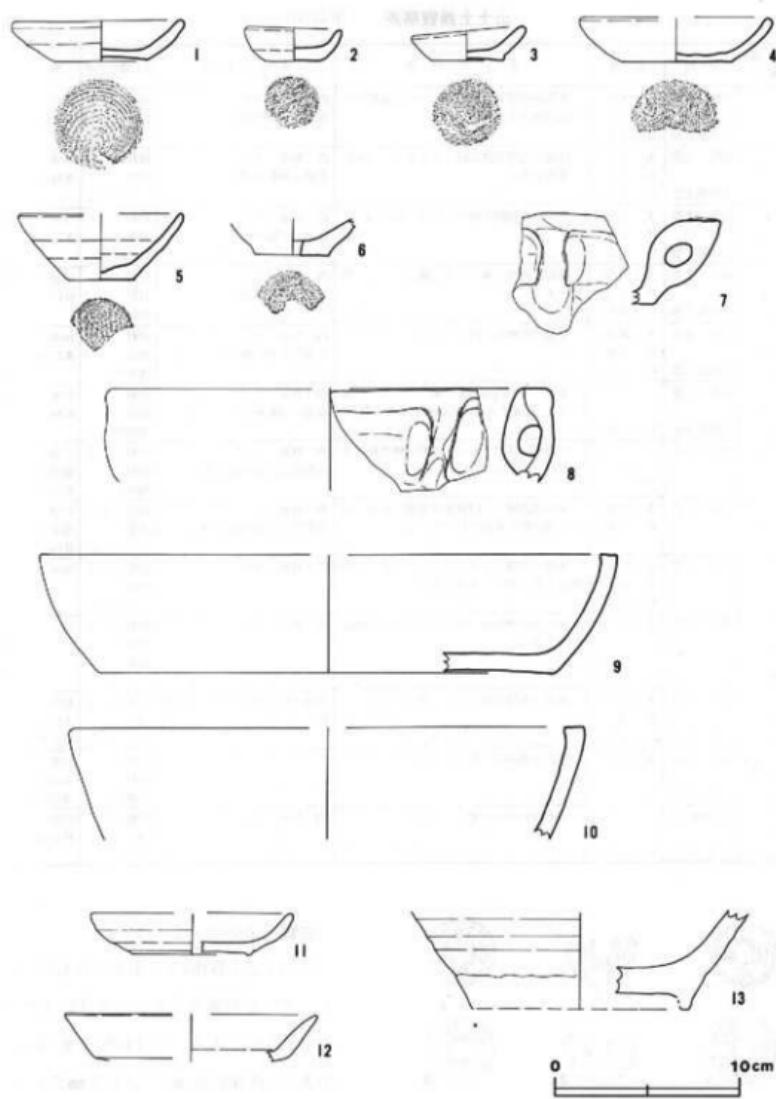
第65図 第1号溝実測図



第66図 第2号溝実測図

#### (4) グリッド出土遺物

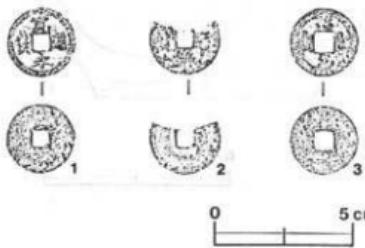
各グリッドからは、土師質土器、陶器、内耳土器などがわずかに出土している。土師質土器と陶器は、土坑群付近のグリッドから出土しており、器種、器形、その他土坑出土のものと同じものである。



第67図 グリッド出土遺物実測図

出土土器観察表 (第67図)

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	粘土・焼成色調	備考
1	皿形 土器 土師質土器	A 8.8 B 2.2 C 5.1	体部は内壁気味に開いている。底部はややけ底である。	内・外面一ナデ 底部一回転糸切り	砂粒 良好 にほい褐色	85% A3ja出土
2	皿形 土器 土師質土器	A 4.8 B 1.9 C 3.0	体部は内壁気味に短く立ち上がっている。平底である。	内・外面一ナデ 底部一回転糸切り	砂粒 良好 にほい褐色	95% A2ia出土
3	皿形 土器 土師質土器	A 5.8 B 1.9 C 3.9	体部は直線的に開いている。平底である。	内・外面一ナデ 底部一回転糸切り	砂粒 良好 にほい褐色	100% A2ja出土
4	皿形 土器 土師質土器	A (10.1) B 2.4 C ( 6.0)	体部は内壁気味に大きく開いている。平底である。	内・外面一ナデ 底部一回転糸切り	砂粒 良好 褐色	40% B2aa出土
5	皿形 土器 土師質土器	A ( 8.5) B 3.6 C 3.5	体部は直線的に開いている。	内・外面一ナデ 底部一系切り後ナデしている。	砂粒 良好 浅黄色	30% A2ia出土
6	皿形 土器 土師質土器	C ( 4.0)	体部はやや内壁気味に開いている。平底である。底部中央に径6mmの焼成前の穿孔。	内・外面一ナデ 底部一回転糸切り	砂粒 良好 淡褐色	15% B3ea出土
7	内耳 土器		口唇部は平底である。内耳には棒状粘土を貼り付けている。	内・外面一ナデ 内耳部分は指顎痕が残る。	砂粒・黒母 良好 褐色	5% 蝶付着 B3ea出土
8	内耳 土器	A (23.6) B ( 5.6)	体部は内壁し、口唇部は平出である。内耳には棒状粘土を貼り付けている。	内・外面一ナデ 内耳部分は指顎痕が残る。	砂粒・黒母 普通 にほい褐色	10% 蝶付着 B3ea出土
9	内耳 土器	A (29.5) B 6.4 C (24.6)	体部は内壁して立ち上がりしている。口唇部は平出である。平底である。	内・外面一ナデ	砂粒・黒母 良好 にほい褐色	30%
10	内耳 土器	A (27.7)	体部は内壁気味に開いている。口唇部は平出である。	内・外面一ナデ	砂粒・小礫 黒母 良好 にほい褐色	10%
11	皿形 土器 陶器	A (10.7) B 2.2 C ( 6.2)	体部は内壁気味に大きく開いている。	底部を削り込んで高台を作り出している。	砂粒・小礫 良好 にほい褐色	40% A2ia出土 灰白色の釉
12	皿形 土器 陶器	A (13.2)	体部は直線的に開いている。		砂粒 良好 灰褐色	10% A2ia出土 黄緑の釉
13	台付皿形土器 陶器	C (11.2)	体部は直線的に開いている。	内・外面一ナデ	砂粒 良好 灰色	10% B3ad出土



第68図 古銭拓影図

古銭 (第68図-2・3)

2・3ともB3baから出土したものである。2は永楽通宝である。直径2.4cm、厚さ1.5mmである。3は紹聖元宝(宋錢)である。直径2.35cm、厚さ1.5mmである。

新規実材出土物一覧表

## 4 まとめ

当遺跡からは、古墳時代の住居跡2軒、近世の土坑23基、不明の溝2条が検出されたが、注目されるのは、第1号住居跡から石製模造品の祭祀遺物が多量に出土したことである。ここでは、第1・2号住居跡とその出土遺物についてまとめ、さらに当遺跡における祭祀について考えてみる。なお、当遺跡の祭祀については、樋山林繼先生の御教示を参考とした。

### (1) 遺構と遺物について

表7 住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規 模 底面 柱穴数	か	埋土	出士遺物	時期
1	H3bs	N-63°-E	長方形	6.6×4.8 20 平坦	3	自然	土師器、須恵器、石製模造品、玉類品	古墳時代 中期
2	H2as	N-36°-W	長方形	6.2×3.7 27 平坦	0 か	自然	土師器、石製模造品	古墳時代 後期

#### 出土遺物数

第1号住居跡 — 高环形土器14（うち須恵器1）、變形土器5、塊形土器8、環形土器2、埴形土器1、子持勾玉1、勾玉10、白玉3570、紡錘車1、土玉9

第2号住居跡 — 變形土器4、塊形土器1、環形七器1、勾玉1

#### ① 住居跡

当遺跡では、住居跡2軒とも平面形は長方形を呈しており、第2号住居跡は第1号住居跡より細長い。和泉期では、一般に方形のものが多く、特に、第1号住居跡からは祭祀遺物が出土していることから、長方形のものは祭祀に関係があるようにも考えられるが、出土土器はこの時期に通常見られるものであり、住居跡の形状は、祭祀との結びつきはないと思われる。

#### ② 土器

大部分が土師器で、須恵器が1点だけ出土している。いずれも同一時期のものであり、量的には第1号住居跡の方が多い。高环形土器が最も多く、次いで塊、變形土器である。

#### ○變形土器

口縁部は「く」の字に開くが、直線的に外傾するものと、外反するものがある。胴部はほぼ球形のものと、やや長胴のものとがある。口縁部は横ナデであり、胴部はヘラ削りカナデ整形である。

#### ○塊・塊形七器

环形土器と塊形土器とを明確に区別するのは困難であり、まとめて記述する。体部は内側しながら立ち上がり、口縁部は短く外傾する。底部は小さく、ややあげ底である。内面の口縁部と体部の境に稜を有している。同じく体部が内側しながら立ち上がり、そのまま口縁部へ至り、半球

形を呈するものや、口縁部が内傾するものがある。口縁部は横ナデ、体部はナデやヘラ削りがみられる。

#### ○高环形土器

体部は内側気味に大きく開き、体部の中位または下位に棱を有している。棱を境に外傾して口縁部へ至る。脚部はほぼ直線的に「ハ」の字に開き、裾部は屈曲して広がっている。口縁部は横ナデ、体部・脚部ともナデかヘラミガキがなされている。これらのはかに唯一の須恵器の高环形土器と、内外面赤彩で体部に段を有する大形の高环形土器がある。

#### ○壺形土器

大形のものが1点だけである。小形壺とも言えるもので、胴部が大きく張り、扁平な球形を呈するものである。

以上、器種別に器形、整形を観察したが、いずれも和泉期のうちで新しいとされるものである。また、次の鬼高峰期へ継続するものも見られる。第52図の1・4・5のやや長刺化した變形土器や、第54図の26・29の丸底で浅く、棱をもち、口縁部が直立または内傾する壺・环形土器がそうである。また須恵器の高环形土器であるが、器形・整形から5世紀の第4四半期頃のものと思われる。第1・2号住居跡出土の少ない土器からではあるが、住居跡にカマドを持たないことと合わせて、時期を推定すれば古墳時代中期末で、5世紀末から6世紀初めにかけてのものと思われる。

### ③ 石製模造品

第1号住居跡の北西壁中央部付近の床面から、長径約1m、短径約0.8mの範囲で子持勾玉1点、勾玉10点、臼玉3570点がまとまって出土し、約4m離れた南西壁中央部の壁下から、紡錘車が1点出土している。また、第2号住居跡からは勾玉が1点出土している。いずれも滑石製で、未成品は見られない。出土したのはこの4種類だけで、有孔円板や劍形品は全く出土していない。

#### ○子持勾玉

子持勾玉は各地で出土しているが、大部分は年代推定の手がかりとなるような伴出遺物もなく、単独でしかも偶然に発見されていて、出土状況が明らかなものは少ないようである。<sup>(1)</sup> この意味では、当遺跡出土のものは貴重な例であると思われる。

石製模造品は一般に、精巧で、入念に作られたものが古く、粗製で扁平なものが後出のものとされており、それは子持勾玉も同様である。子持勾玉の場合は、まず、古くは身の断面が円形に近く、やがて梢円形、板状となり粗製品化する。頭や尾も、古くは両端を平坦に截断しているが、新しくなるにつれ、丸味をもち、細くなるようである。当遺跡の子持勾玉は、身の断面がほぼ円形であり、入念、精巧に製作されている。また全体に均整がとれ、美しい形を呈している。頭尾両端も平坦に截り落とされている。さらに、背に4個、両側に3個、腹に1個の鱗状突起もよく発達しており、この形状からすると、最も古く、出土例も多い部類にはいるものである。大場盤

<sup>2</sup> 植博士の形式分類による、いわゆるA I型になるものである。この型の子持勾玉は、本県では、岩井市弓馬田<sup>3</sup>、北相馬郡内、行方郡牛堀町などから出土しているが、牛堀町出土のものは鰐状突起はそれほど発達していない。

子持勾玉は秋田県～鹿児島県まで出土しているが、特に関東地方に多く、全国の約30%を占めている。下総から常陸南部にかけて多く出土し、本県ではすでに25か所27個が出土している。

#### ○勾玉

出土した10点は、大小の差はあるが、いずれも扁平で板状であり、粗製である。石製模造品では新しい部類に入るものの、子持勾玉とは時間的に逆になる。おそらく、石材から板状のものを作り、これから勾玉形に彫り出されたものと思われる。孔は一方から穿たれており、両面、側面とも研磨されている。

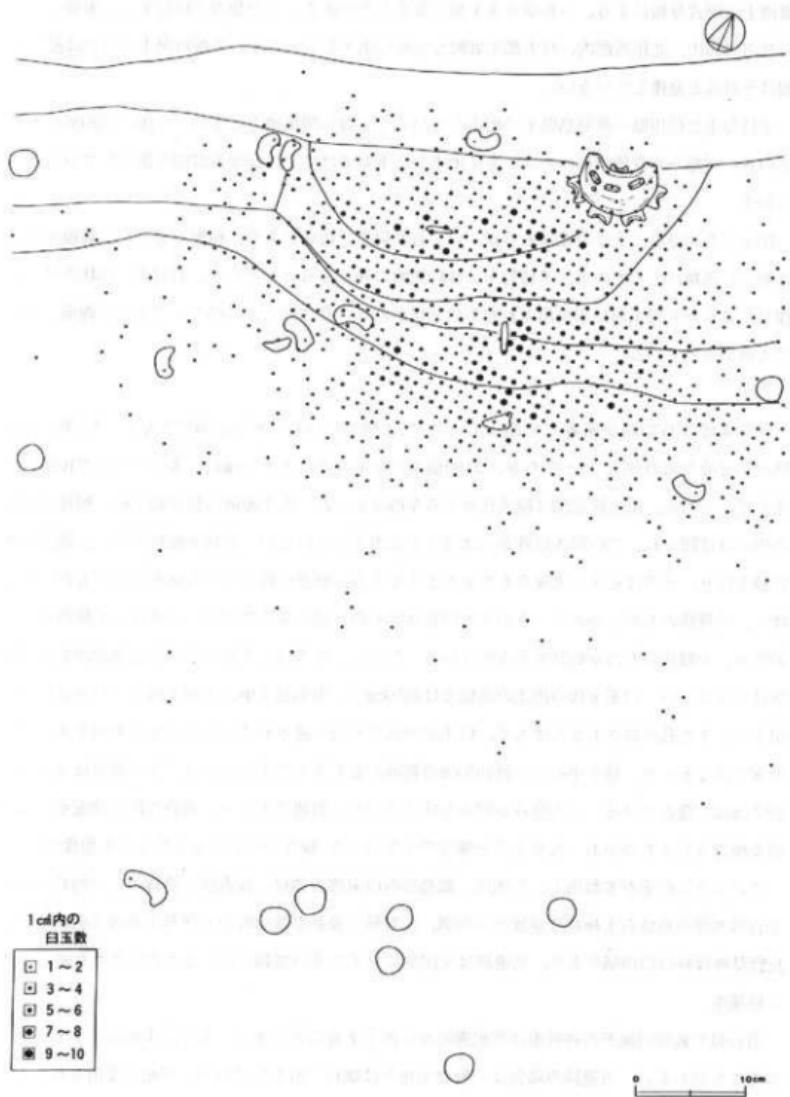
#### ○臼玉

狭い場所に3570個が密着して出土したため、1個ずつのレベルは計測できなかった。平面分布状況も可能な限り図におとしたが、2190個までであった。また1cmに、多いところで10個も出土しているため、出土状況図は模式化せざるを得なかった。出土範囲は長径約1m、短径0.8mの中にはば限られ、この場所以外からはほとんど出土していない。形状を観察すると、側面中央に棱を作り、そろばん玉に丸味をもたせたようなもの、側面に棱がなく丸味をおびたもの（太鼓状）、円筒状のものとがある。そのうち円筒状のものが最も多く約57%，そろばん玉状のものが約22%，太鼓状のものが約21%を占めている。しかし、そろばん玉状のものと太鼓状のものの区別はつきにくい。臼玉全体の出土の高低差は約10cmで、黒褐色土中に1個1個バラバラの状態で出土し、また孔の向きもまちまちで、臼玉が糸状のものに通されていたかどうか判別できる出土状況ではなかった。腰を中心半径約30cmの範囲が最も多く出土しており、その範囲は床面より約7cmほど離れている。この窪みが何を意味するかが、問題であるが、遺物の出土状況からは特別な施設らしきものがあったかどうか確認できなかった。棒などの木を立てたかとも想像できる。

このように臼玉が多数出土した例は、福島県西白河郡表郷村三森遺跡（速鉢川）の約4574個、奈良県天理市布留石上神社禁足地の3502個、佐賀県三養基郡藤山町小倉伊勢山遺跡の約2000個、長野県神坂峠の1319個があり、当遺跡は全国的に見ても多い部類にはいるものと思われる。

#### ○紡錘車

滑石製で截頭円錐形の紡錘車は祭祀遺跡から出土することが多い。また、実用品とすることも可能なものも多い。当遺跡の場合は、他の玉類とは離れて出土しており、祭祀に使用されたかどうかは不明である。使用される場合は、棒を通し糸などを巻いて奉納されたものと思われる。



第69図 玉出土状況模式図

### (2) 向坪B遺跡の時期について

石製模造品を出土する祭祀遺跡は、遺跡により差もあるが、だいたい5～6世紀を中心に展開されている。しかし、祭祀遺跡から出土する石製模造品には、地域的に差がなく、特色がみられない。これは、祭祀遺物と祭祀の方法が、短期間に強い力によって広まつたことが考えられる。そのため、祭祀遺跡や仮器化、儀器化した祭祀遺物の編年は困難となり、まだ確立されていないのが現状である。そこで、伴出する土器によって、年代を推定しているが、一般に和泉期と鬼高一期のものが多く、特に鬼高一期でも占いもの（鬼高1式）が多いようである。

当遺跡においても、子持勾玉と勾玉では、その製法からみると時間的には逆になり、年代推定には問題がある。伴出土器によって推定するならば、当遺跡の土器は前述のとおり、和泉期末に比定されるものであり、5世紀末～6世紀初めということになる。

### (3) 向坪B遺跡における祭祀について

#### ①第1号住居跡の性格について

祭祀遺物が多量に出土した第1号住居跡の性格を把握することは、当遺跡における祭祀についても考えることになる。

第1号住居跡からは、甕・壇・环形土器などの日用什器が出土しており、その中には二次焼成を受けた變形土器もある。またこの時期では、一般的な住居跡からも、高坛形土器や赤彩の土器が多く出土しており、祭祀だけに使用されたものではないと考えられる。従って本跡は、祭祀に関係のある者の日常生活の場であった可能性が強く、祭祀だけを行った特別な遺構ではないと思われる。そこで問題になるのは、第1号住居跡内で祭祀が行われたかどうかということである。

本跡と非常に類似している千葉県小室遺跡D203号住居跡と比較してみる。D203号住居跡は、1辺10m以上の方形の大形住居跡で、和泉式土器のほかに、西壁中央部から径3cm、長さ約2mの炭化木材が十数本並んで出土したことから、棚が設けられていたと考えられている。この周囲から、多くの小形壺、高壺とともに、石製模造品、紡錘車、土玉等が出土している。本跡では、棚と思われるような施設があったかどうかは、出土状況からは判断できず、石製模造品が土器を伴っていないことがD203号住居跡と異なっている。

本跡の場合、石製模造品が集中出土していることは、祭祀用具を保管していた場所を考えることもできる。また、この場所では祭祀には使用されたであろう土器が出土せず、石製模造品だけが出土していることも、祭祀が行われたのではなく、祭祀用具の保管の場の可能性もありうる。

しかし、子持勾玉をはじめ勾玉や多量の臼玉が出土していることは、祭祀が行われたことも充分考えられる。以下、第1号住居跡内で祭祀が行われた場合について考えてみる。

### ②祭祀の対象について

関東地方は祭祀遺跡が多いことから、祭祀の対象も各種類があるといわれている。まず、山岳を対象としたものには、赤城山、二荒山（男体山）、筑波山などの大岳名山を対象としたものと、いわゆる神奈備型のものがある。そのほか、石を対象としたもの、池・沼・海などの水體を祭った遺跡、古社に関する遺跡、集落内の祭祀などがある。

当遺跡の場合、祭祀の対象として考えられるのは、山と沼であろう。当遺跡から望むことができる山は、南西に富士山、北に男体山、東に筑波山がある。いずれも名山であるが、当遺跡からは遠距離すぎて、見ても小さく印象的ではない。また、富士山、男体山は季節によっては見ることはできず、最も近い筑波山も当遺跡からは約30kmもあり、従って、祭祀の対象とするには、無理なように思える。むしろ、当遺跡の約60m 東にある長井戸沼（現在は干拓されて水田となっている）をその対象と考えた方が、自然である。しかし、沼（水）の神を対象として祭祀が行われた場合、住居跡内での石製模造品の出土位置が、沼のある方向（東側）でないのが、不自然で問題が残る。

### ③祭祀の状況について

第1号住居跡で祭祀が行われた場合に、どのような状況が想定されるか、遺物の出土状況から推定できることをあげてみる。

○石製模造品の周囲からは、炭化したヒシの実が出土しているが、このヒシの実は、おそらく長井戸沼から採取されたものと思われる。ヒシの実は食用にもなるが、祭祀が行われる時に沼の神に供献されたものとも考えられる。

○白玉が多量に出土していることから、祭祀を行う上で、多くの白玉を必要としたことが考えられる。また、集落内の白玉を持ち寄ったことも考えられる。

○子持勾玉であるが、特別な出土状況は認められず、他の石製模造品と同じ状況で出土しており、出土状況からは、子持勾玉が特別に扱われていた可能性は少ない。

○石製模造品をどのように使用したかであるが、出土状況からは、他に遺物を伴っておらず状況を復元するのは困難である。想像の域を出ないが、狭い範囲に集中して出土したことと、すべて有孔の玉類ということから、北西壁際に紳が立てられ、糸状のものを通した玉類がクリスマスツリー状に垂げられたものと思われる。

○本跡からの出土土器中唯一の須恵器（高环）であるが、祭祀遺跡では、祭祀関係の遺物のほかに、量的には少ないが須恵器が出土する例が見られる。須恵器は日用什器として使用されたほかに、祭器として使用されたのではないかとも言われている。そのほか、古墳や祭祀遺跡で多く見られる例として、破砕された須恵器がある。当遺跡の須恵器は接合して完形となったが、破砕された状態で出土しており、祭祀に関係あると考えられなくもない。しかし、他の土師器

も破碎された状態で出土していること、また、石製模造品が出土した位置からは離れて出土していることなどから、須恵器が祭祀に使用されたかどうかは不明である。

以上、向坪B遺跡における祭祀について、考えられることを述べてきたが、多くの問題を残している。祭祀遺跡の調査例は増えているが、まだ不明な点が多く、子持勾玉ひとつをとっても、その用途、性質についてはまだ解明されていない。当遺跡の場合も、当時の人々がどの様な祭りを行ない、何を神に祈ったかなど、祭祀の形態を明らかにするには、まだまだ不十分であり、研究の余地を残しているので、今後検討を加えたい。

#### 注

- (1) 大場磐雄ほか『神道考古学講座』第3巻 昭和58年
- (2) 大場磐雄ほか『武藏伊興』国学院大学考古学研究報告第2冊 昭和37年
- (3) 大場磐雄ほか『神道考古学講座』第1巻 昭和58年
- (4) 小野真一『祭祀遺跡』考古学ライブラリー10 昭和57年
- (5) 梶山林輔ほか『小室』千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書I 昭和49年

#### 参考文献

- 大場磐雄ほか『神道考古学講座』第2巻 昭和57年
- 茨城県『茨城県史料』考古資料編・古墳時代 昭和49年
- 倉田芳郎ほか『千葉・上ノ台遺跡』千葉市教育委員会 昭和57年
- 阪田正一ほか『八千代市権現後遺跡』千葉県文化財センター 昭和59年
- 小野真一『祭祀遺跡地名総覧』考古学ライブラリー11 昭和57年
- 佐藤政則『家屋内出土の祭祀遺物』日立市郷土博物館『紀要』第2号 昭和57年
- 定岡明義ほか『聖山公園遺跡』宇都宮市教育委員会 昭和59年
- 寺村光晴『房縄出土の古代の玉』千葉県立房縄風土記の丘 昭和56年



# 北新田A遺跡

## 1 遺跡の概観

当遺跡は、茨城県猿島郡和町柳橋字香取前237ほかに所在し、面積は16600m<sup>2</sup>で、幅約40m、長さ約400mの南北に細長い調査区域となっている。当遺跡は、柳橋地区の北西約1kmに位置し、長井戸沼の東枝と西枝に挟まれた北から南に延びる平坦な台地の南～西縁辺部に立地しており、標高は18～19mで、現況は平坦な畑である。西方約200mには長井戸沼西枝が南北に延びて水田となっており、水田面との比高は6～7mである。南方約100mには長井戸沼西枝から東に向かって小さな谷津が入り込んでいる。当遺跡は香取前遺跡の一部としてとらえられており、東方約800mには柳橋城跡が所在し、その南には弁才天B遺跡が接してあり、鐵滓やフィゴ片が出土している。北方約250mの新4号国道路線上には、北新田B遺跡が所在する。

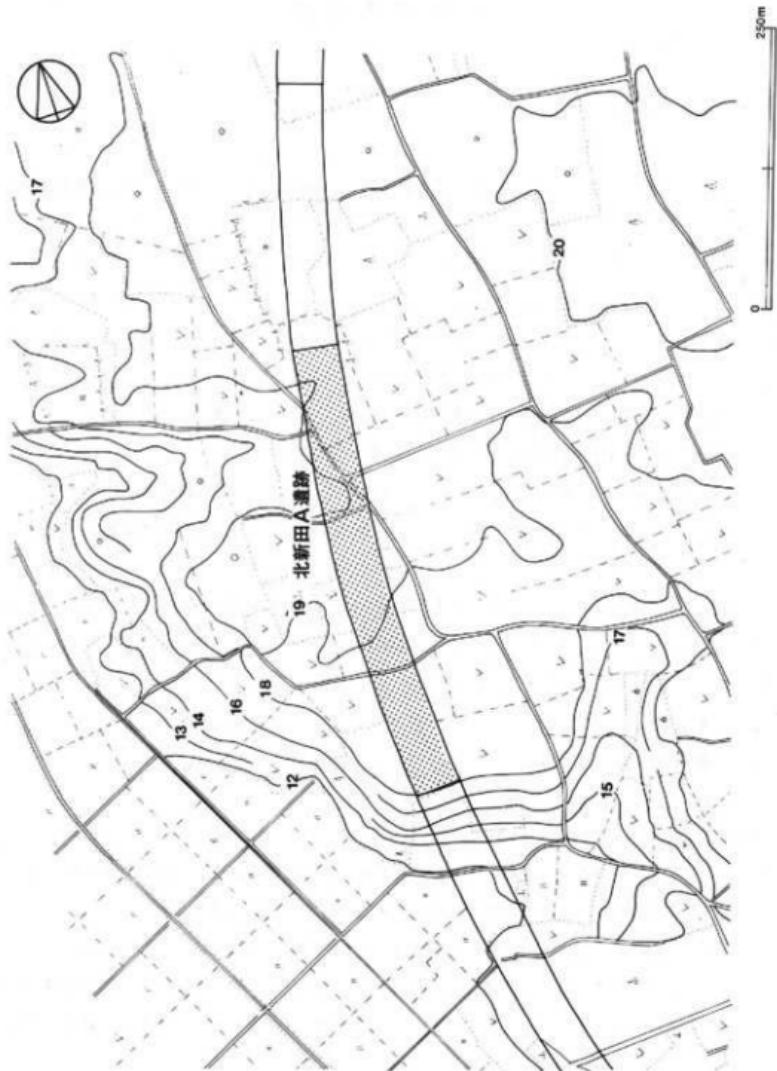
検出された遺構は、古墳時代前期から奈良・平安時代にかけての住居跡62軒のほか、溝10条、土坑7基、井戸2基、掘立柱建物跡1棟である。遺物は土師器、須恵器のほか鐵製品、土製品、石製品などが出土している。

当遺跡は、昭和58年度に16,100m<sup>2</sup>を調査し、残り500m<sup>2</sup>は用地問題の解決が遅れたため、昭和60年度に調査した。なお、J区からK区にかけて南北に、幅約7m、長さ約65mにわたり、深さ2～3mほど土取りされていた。

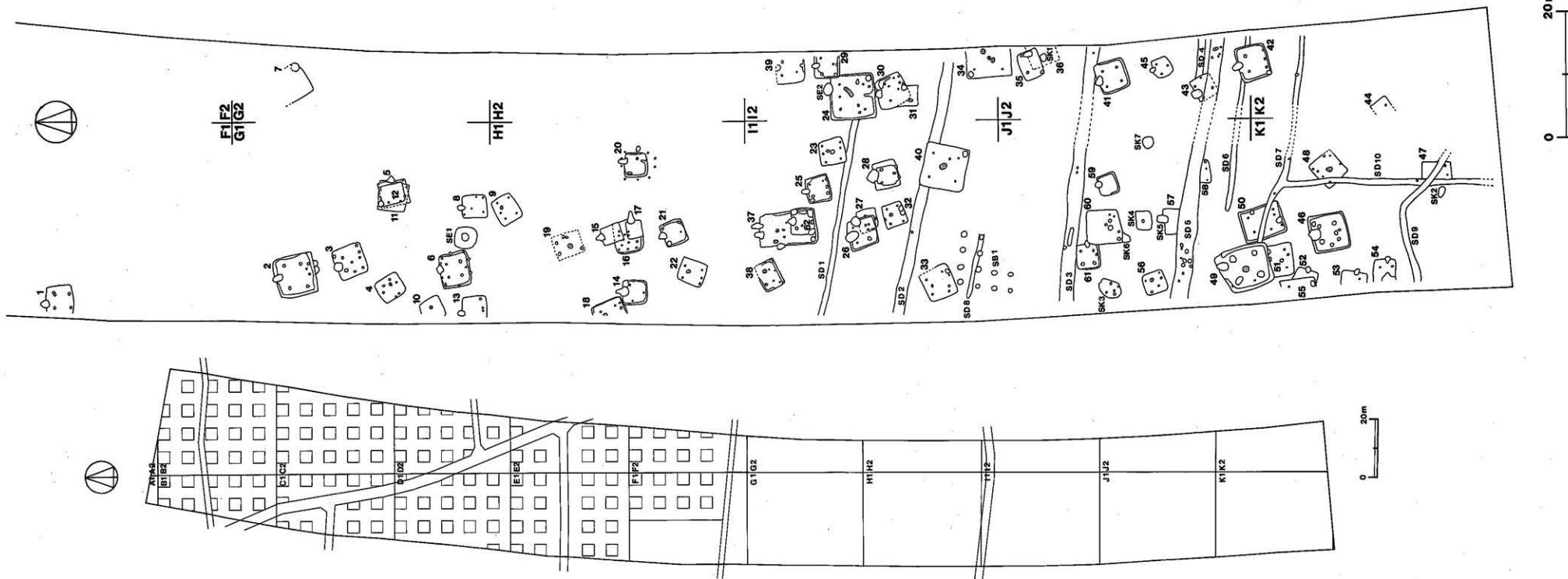
## 2 調査経過

### <昭和58年度>

- 4月 本年度調査する北新田A・B・C遺跡の調査区域を踏査し、調査計画を練った。総和町教育委員会、当該地区的区長の協力を得て作業員を募集した。
- 5月 各遺跡の基本測量、事務所・倉庫等の設置など、調査のための準備を進めた。9日には北新田A・B・C遺跡合同の歓入れ式を実施し、上物の関係から、北新田B・C遺跡の調査を先行し、北新田B遺跡は遺構が確認されなかったため31日で調査を終了した。
- 6月 北新田C遺跡の調査と並行して、9日より北新田A遺跡の調査を開始した。上物除去を行い、遺跡の調査前の全景写真を撮影後、X軸+19200m、Y軸-4700mの交点を基準として調査区を設定し、方眼杭打ちを行った。14日より、A1～A2区から順に



第70図 北新田A遺跡地形図



第71図 北新田A遺跡全体図

南へ8分の1のグリッド発掘を開始した。遺跡の北半分のA～F区からは遺構は確認されず、遺物の出土もほとんどなかったが、南半分のG～K区からは、遺構と思われる落ち込みが約20か所確認され、また各グリッドからは土師器や須恵器が出土し、集落跡の存在が判明した。

- 7月 残り8分の1グリッド発掘を行った。A～F区にかけては、F1区から住居跡1軒が確認されただけであった。G～K区は全域にわたって遺構の存在が予想されたため、土層観察を行い、全面を重機によって表土除去することにした。F1区で確認された住居跡の周囲のグリッドを拡張し、第1号住居跡として調査を進めた。北新田C遺跡は本月末日で調査を完了した。
- 8月 2日から重機によりG～K区の表土除去を行った。表土除去後、順次遺構確認作業を行い、住居跡約50軒、溝10条、そのほか掘立柱建物跡や土坑を検出した。住居跡の何軒かは、重複しており、またカマドを有するものも半数以上認められた。連日猛暑が続き、確認作業が難航したが、当遺跡は古墳時代から奈良・平安時代にかけての集落跡であることが判明した。
- 9月 G区から南へ順に遺構調査を開始した。G1・G2区の第2～13号住居跡と第1号井戸の調査を行った。第6号住居跡からは、土師器・須恵器や鉄製品など多くの遺物が出土した。また、第1号井戸は、最初住居跡として掘り込んだところ、2段掘り込みの井戸であることが判明した。
- 10月 H1・H2・I1・I2区の第14～25号住居跡と第1号溝・第2号井戸の調査を行った。第15・16・17号住居跡は3軒が重複しており、新旧関係の把握に手間取った。
- 11月 引き継ぎ遺構の多いI1・I2区の第26～31・37～40・62号住居跡と第2・3号溝の調査を行った。第26号住居跡の上に第27号住居跡が重複し、重複部分には貼り床が認められた。また第37号住居跡の北壁にはカマドが2基検出された。
- 12月 I1・I2・J1・J2区の第32～36号住居跡、第8号溝・第1号土坑・第1号掘立柱建物跡の調査を行った。第36号住居跡は削平されて遺存状態が悪く、床面とカマドの一部しか残っていなかった。
- 1月 J2・K2区の第41～45号住居跡、第4・5・6号溝の調査を行ったが、例年になく雪が多く、調査に支障をきたした。第44号住居跡は土取りのため、遺構の大部分が切り取られており、一部の調査にとどまった。
- 2月 除雪作業をしながらJ1・K1区の第46～51号住居跡、第7・9・10号溝の調査を進めた。第46・49号住居跡からは甕形土器・环形土器などの多くの遺物が出土し、出土状況の記録に時間を費やした。

3月 K1区の第52～55号住居跡、第2号土坑の調査を行った。3日に現地説明会を開き、多くの見学者が訪れた。その後補足調査を行い、8日に昭和58年度分の調査を完了した。

#### ＜昭和60年度＞

- 4月 北新田A遺跡の未調査分500m<sup>2</sup>の現地踏査を行い、調査区域を確認した。現場事務所・倉庫の設置、器材の搬入等調査の準備を進め、併せて作業員の募集をした。25日より作業員を投入し、伐開、土物の焼却作業を行った後、重機によって全面を表土除去した。続いて造構の確認作業を行い、住居跡6軒、土坑5基、溝2条を検出したが、溝2条は、58年度に調査した第3・5号溝の延長であることが判明した。
- 5月 調査区を設定し、方眼杭打ちを実施した。J1区の第56・57・60号住居跡、第3～5号土坑・第5号溝の調査を実施した。全体に出土遺物は少ないが、第3号土坑からは、多くの土器が投棄されたような状態で出土した。
- 6月 引き続きJ1区の第58・59・61号住居跡、第6・7号土坑、第3号溝の調査を実施した。第61号住居跡は、第3号溝によって切られ、大木の根株の下に位置していた割には遺存状態が良く、遺物も比較的多く、カマドも大部分が残っていた。全景写真撮影後、補足調査を行い、19日に調査を完了した。

### 3 遺構と遺物

当遺跡で検出された遺構は、竪穴住居跡62軒、土坑7基、溝10条、井戸2基、掘立柱建物跡1棟である。これらの遺構はいずれも、台地の南端に近い遺跡の南半分から検出されており、台地のやや奥にある北半分からは、遺構は検出されていない。調査区域が南北に細長いため、遺構の分布（集落の範囲）はさらに東西へ広がるものと思われる。住居跡は、出土遺物は古墳時代から平安時代にかけてのもので、約3分の1は重複している。土坑・溝・井戸・掘立柱建物跡については、その時期・性格については不明なものが多い。

遺物はほとんどが住居跡出土のもので、土師器、須恵器、鉄製品、石製品、土製品などである。土師器では斐形土器・壺形土器のほか、高台付环形土器・塊形土器・高环形土器・瓶形土器などが出土している。須恵器では环形土器・斐形土器が多く、そのほか蓋・台付長頸壺・盤などが出上している。鉄製品では鎌・鎌、石製品では紡錘車等が頗るなものである。

なお、遺構解説文中の規模の記述について、( ) mは計測不可能のため空欄とした。

## (1) 穴住居跡

### 第1号住居跡（第72図）

本跡はF1d<sub>4</sub>を中心に確認され、当遺跡の遺構の中で最も北方で、第2号住居跡の北側約35mに位置している。本跡の西側部分は調査区域外へと延びている。

平面形は4.20m×( )mの方形を呈していると推定され、主軸方向はN-2.5°-Wを指している。壁は西壁を除いてやや外傾して立ち上がり、壁高は10~15cmである。床面はほぼ平坦で全体に堅い。南壁中央部から北に向かって幅約1m、長さ約2mの範囲は、周開より2~3cm床面が高く、しかもよく踏み固められている。また南壁下から幅1mの範囲には2~3本のピットが並んでおり、出入口部かと思われる。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>の17か所が検出されたが、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は主軸に対称に配置され、いずれも径40~50cm・深さ70~90cmとしっかりしたもので主柱穴と思われる。カマドは北壁中央部に付設されているが、耕作による搅乱のため原形をとどめていない。規模は不明であるが、北壁を70cmほど切り込み、火床は床を15cm掘り凹めている。覆土はカマド付近の搅乱を除いて、ほぼ自然堆積の状態を示している。褐色土が主で、上層にはローム粒子、下層には焼土粒子が含まれている。

遺物は土師器や須恵器が少量出土している。南壁際や中央部の床面からは土師器・須恵器の环形土器（第73図-2・3）、覆土からは古銭3枚（第73図-4~6）が出土し、カマド内からは鉄鏃（第73図-7）が出土している。

出土土器観察表（第73図）

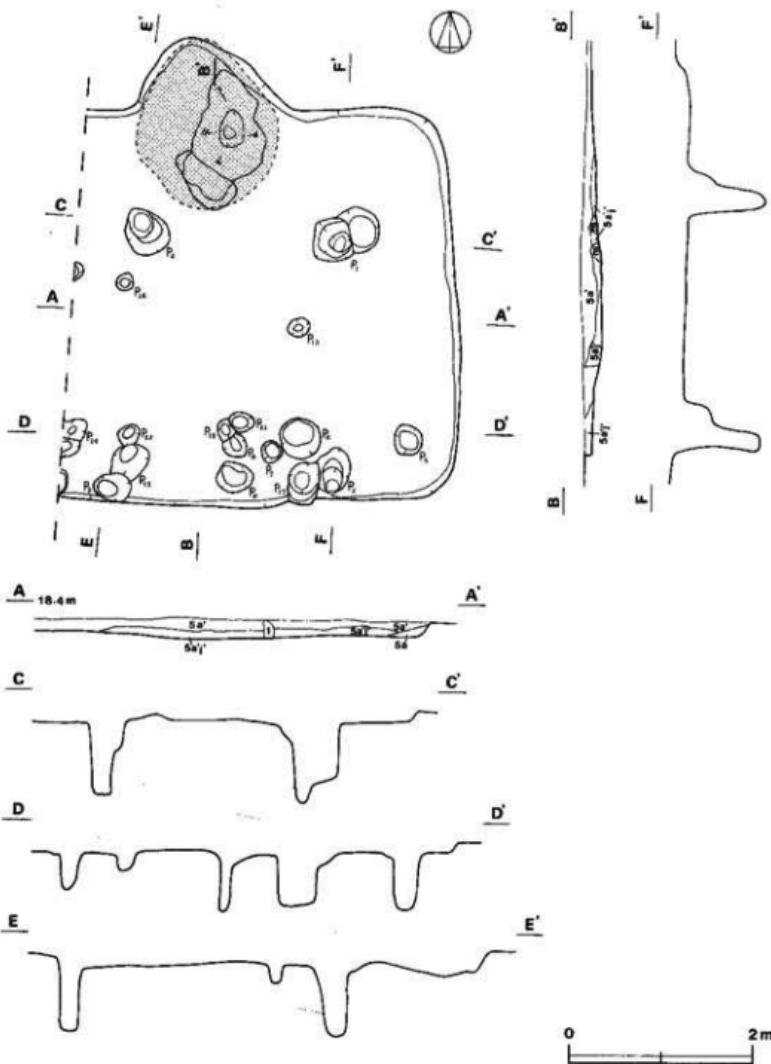
図版 番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土-焼成-色調	備考
1	環形 土器 土師器	A 23.4	口縁部は外反しながら開く。器肉は薄い。	口縁部内・外面 横ナテ	砂粒 普通 にない褐色	10%
2	環形 土器 七時器	C 8.0	底部は平底で、体部は外上方へ立ち上がる。	底部一方の手持ちへラ削り て切り離しは不明。 体部下端・手持ちへラ削り	砂粒 普通 にない褐色	60%
3	環形 土器 須恵器	A (12.4) B 3.85 C ( 6.9)	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	底部一方の手持ちへラ削り て切り離しは不明。 口縁部から内面 は横ナテで丁寧な作り	砂粒 良好 青灰色	40%

### 古銭（第73図-4~6）

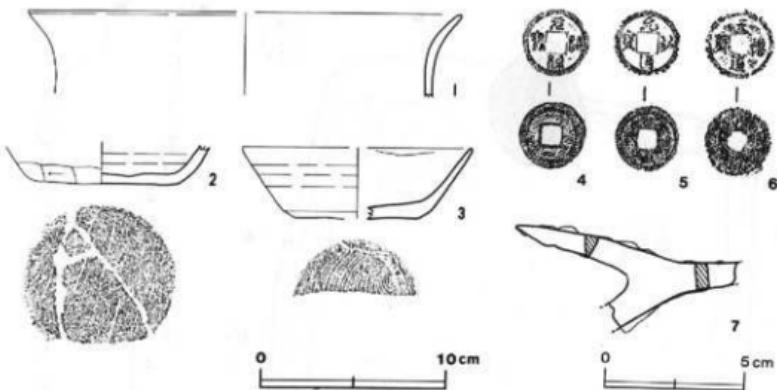
4は元祐通宝（北宋1086）で完存品である。径2.4cm・内孔7mm四方・輪1.5mmである。

5も元祐通宝であるが、4とは字体が異なり完存品である。径2.3cm・内孔7mm四方・輪2mmである。

6は天禧通宝（北宋1017~1021）で完存品であるが、やや摩滅している。径2.4cm・内孔7mm・輪1.5mmである。



第72図 第1号住居跡実測図



第73図 第1号住居跡出土遺物実測図

鉄製品（第73図-7）

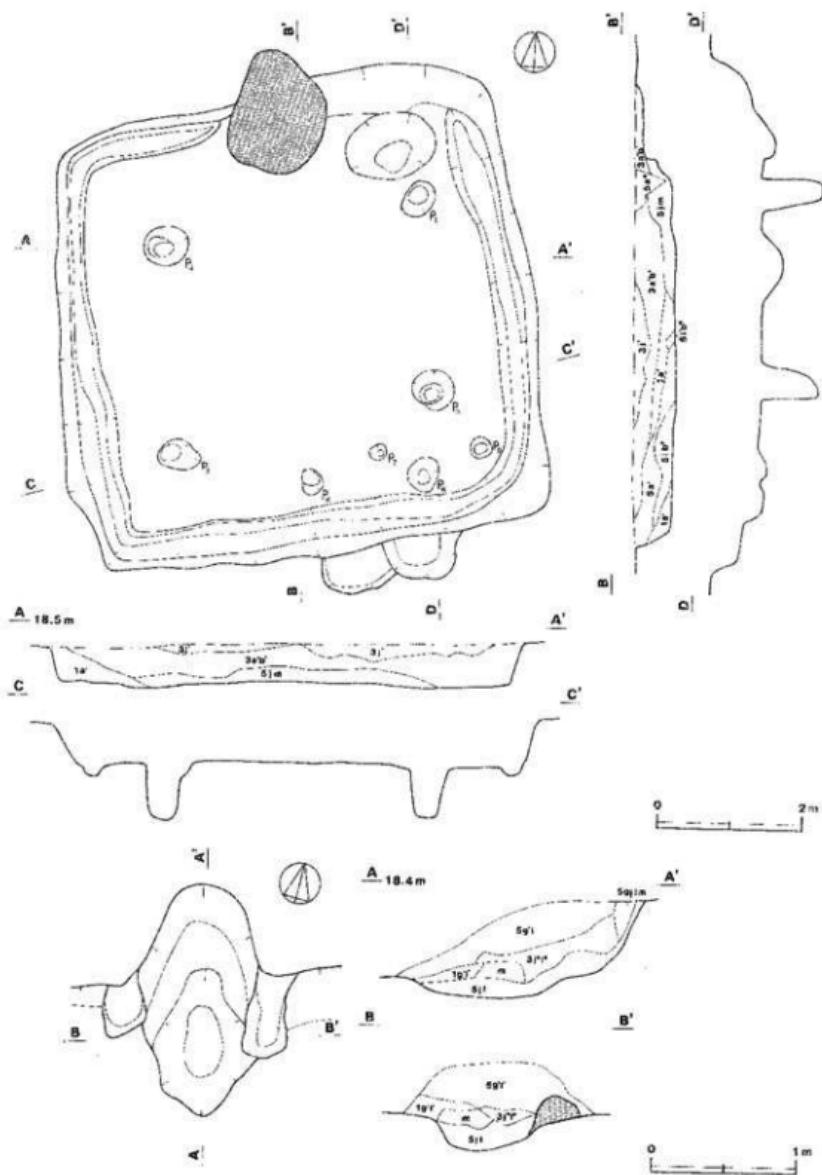
7は雁股の鐵である。片方の先端部と基部を欠損している。現存長は7.9cmである。

第2号住居跡（第74・75図）

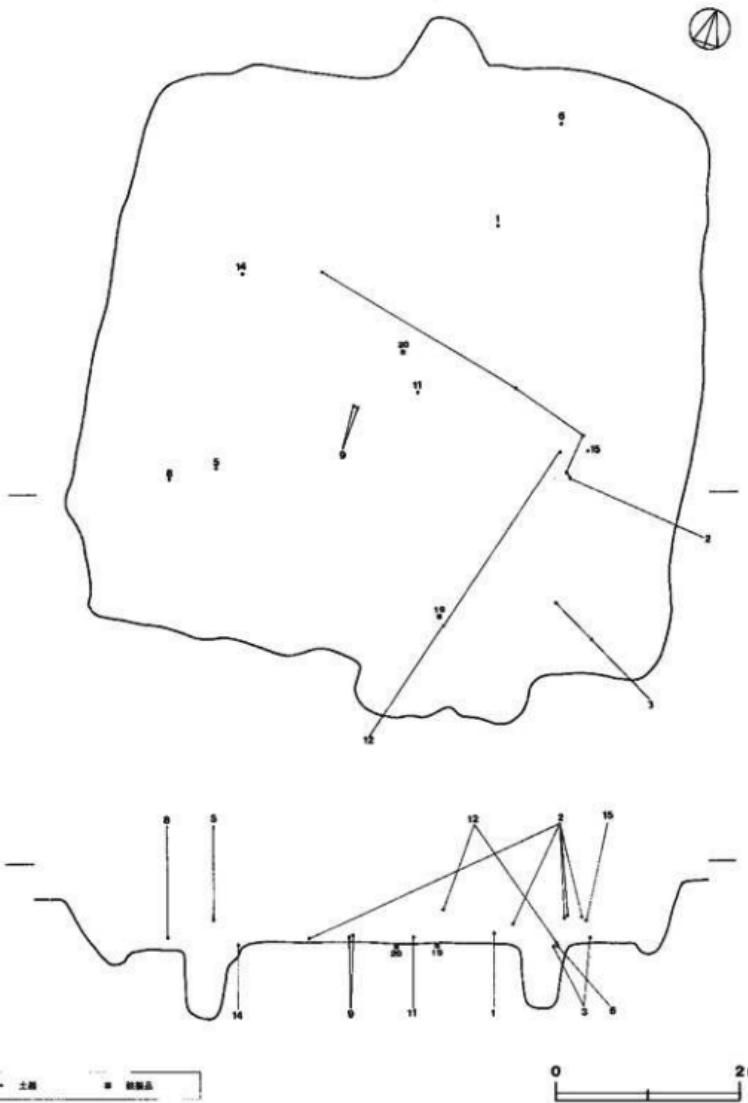
本跡はG1esを中心に確認され、第3号住居跡の北側約5mに位置している。

平面形は長軸6.60m・短軸6.50mの方形を呈し、主軸方向はN-10°-Wを指している。壁はいずれも遺存状態がよくほぼ垂直に立ち上がり、壁高は50-70cmである。壁下には壁溝が周回しており、上幅18-24cm・下幅9-16cm・深さ8-12cmである。床は平坦で全体に堅く、特に4本の主柱穴の内側はよく踏み固められている。ピットはP<sub>1</sub>-P<sub>8</sub>の8か所検出されており、ほぼ対角線上に位置するP<sub>1</sub>-P<sub>4</sub>が主柱穴と思われる。いずれも径50-60cm・深さ61-73cmでしっかりしたものである。カマドは北壁中央部に付設されているが、天井部は崩落し袖部の一部が残っているだけである。長さ160cm・幅125cmで北壁を約65cm切り込んでいる。火床は床を25cm掘り凹められており、焼けて硬化し、ゴツゴツしている。カマドの東側には貯蔵穴が検出され、平面形は長径120cm・短径90cmの楕円形を呈し、深さ約30cmである。覆土は南壁から中央部に向かってロームブロックを多量に含む褐色土が崩れ込むように堆積しているほかは、ほぼ自然堆積の状態を示しており、ローム粒子を含む暗褐色土が主である。

遺物は多量に出土し、須恵器の环形土器・變形土器・長頸壺、土師器の變形土器・鉢形土器・环形土器などが出土し、變形土器片は約1400点も出土している。中央部の床面から鉄斧（第77図-20）、南壁際の床面からは鎌（第77図-19）が出土し、カマド内からは墨書き土器（第76図-5）が出土している。



第74図 第2号住居跡・カマド実測図



第75図 第2号住居跡遺物出土状態図

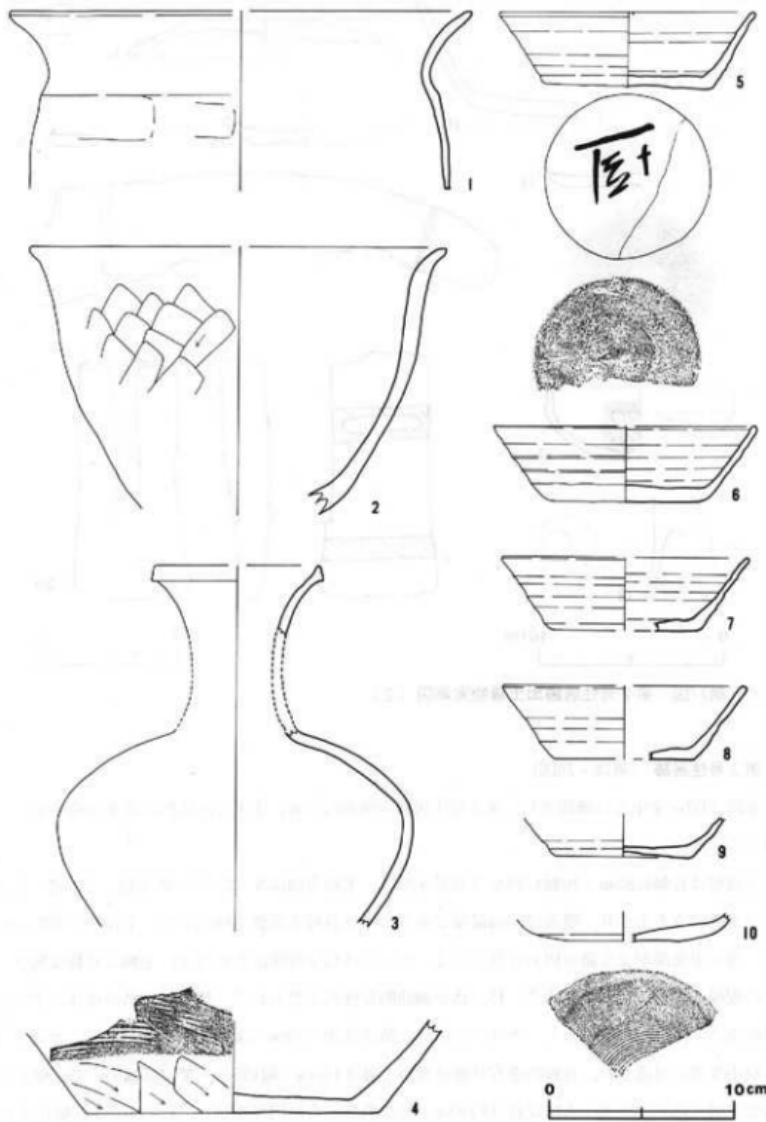
出土土器觀察表 (第76・77図)

図版番号	器種	法星	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼土色調	備考
1	變形土器 土師器	A (25.0)	側部はあまりはらず、腹部で少しきびれ。口縁部は大きく外反する。	口縁部内・外面 横ナデ 側部外面一へラ削り 内面一ナデ	砂粒 普通 明赤褐色	30%
2	鉢形土器 土師器	A (22.5)	体部は内壁気泡に聞いて立ち上がり。口縁部は外反する。	口縁部内・外面 横ナデ 側部外面一斜位のへラ削り 内面一ナデ	砂粒 普通 にぶい褐色	50%
3	長縫合形 土器 須恵器	A (9.0)	側部は大きく張り、頸部は上位ほど外反度が大きい。口縁端部は下方向に広がって垂れます。	側部に緑色の自然釉	砂粒・繊維 普通 灰色	25%
4	變形土器 須恵器	C 15.8	底部は平底で、側部は外上方へ立ち上がる。	側部外面・斜位の平行叩き 下端一斜位の静止へラ削り 内面一ナデ	細粒・露骨末 やや不良 灰白色	15%
5	環形土器 須恵器	A 13.9 B 4.1 C 9.0	底部は平底で、体部は外上方へ立ち上がる。口縁部はやや外反し、頸部は丸い。	腹部 一方向の手持ちへラ削りで、切り離しは不明	砂粒・石英 普通 青灰色	60% 底部外面に墨跡
6	环形土器 須恵器	A (14.1) B 4.1 C 8.5	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸い。	腹部 一方向の手持ちへラ削りで、切り離しは不明 ロクロ回転方向は右	細粒・露骨末 やや不良 灰黄色	60%
7	环形土器 須恵器	A (13.2) B 4.0 C (8.0)	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部はわずかに外反し、頸部は丸い。	腹部一定方向の手持ちへラ削りで、切り離しは不明 側部下端一手持ちへラ削り	砂粒・繊維 普通 灰色	30%
8	环形土器 須恵器	A 13.0 B 4.0 C (7.6)	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸い。	底部一回転へラ削り後、一定方向の手持ちへラ削り 体部下端一手持ちへラ削り	砂粒・繊維 普通 灰色	50%
9	环形土器 須恵器	C 7.4	やや盛り上がった底部から、体部は外上方へ立ち上がる。	底部一回転へラ削り後、一方向の手持ちへラ削り 体部下端一手持ちへラ削り	細粒・露骨 やや不良 灰色	25%
10	环形土器 須恵器	C (9.4)	底部は平底で、体部は外上方へ立ち上がる。	底部一回転系切り抜きを中央部に残し、外周部一手持ちへラ削り後ナデ	砂粒・繊維 不良 灰白色	15%
11	高台付 环形土器 須恵器	A 19.7 B (7)	底部と体部の境は不明瞭で、体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く、口縁部に凹部をめぐらしている。	底部一回転利用のへラ削りの後、高台を貼り付けているが欠損	砂粒・繊維 やや不良 灰白色	50%
12	変形土器 須恵器	C 16.6	天井部は平坦で、口縁部に向かってだんだんに下降する。口縁部は下方向に短く切られし、頸部はやや丸く。	天井部一回転へラ削りつまりみはラセン状の凹みをつけて貼り付け	砂粒・繊維 良好 灰褐色	55% 内面に重ね焼き痕
13	変形土器 須恵器	つまみ径2.8 高1.1	天井部は平底で、宝珠形のつまみが付く。	天井部一回転利用の横ナデ	砂粒・繊維 やや不良 灰白色	20%
14	环形土器 土師器	C 8.1	底部は平底で、体部は外上方へ立ち上がる。	底部一回転系切り抜きを中央部に残し、手持ちへラ削り	繊維・露骨 良好 青褐色	50% 内面黒色處理
15	环形土器 須恵器	C 6.1	やや盛り上がった底部から体部は外上方へ立ち上がる。	底部一方向の手持ちへラ削りで、切り離しは不明 体部下端一手持ちへラ削り	砂粒・繊維 不良 にぶい黄色	55%
16	环形土器 須恵器	C 6.0	底部は平底で、体部は外上方へ立ち上がる。	底部一回転へラ削り後、一方向の手持ちへラ削り ロクロ回転方向は右	砂粒・繊維 普通 灰色	55%
17	环形土器 土師器	A (10.2)	底部は丸底で、体部は内壁しながら大きく開く。口縁部は外反気味に立直する。外側の口縁部と体部の境に棱を有する。	口縁部内・外面 横ナデ 体部外面一へラ削り 内面へラ削り	砂粒 普通 にぶい褐色	15%
18	高环形土器 土師器		脚部広。脚部は直角柱状を呈し、脚部に向かってみると開く。	脚部外面一側位のへラ削り 内面一ナデで上部に破り痕を残す	細粒 良好 赤褐色	10% 外側に赤彩

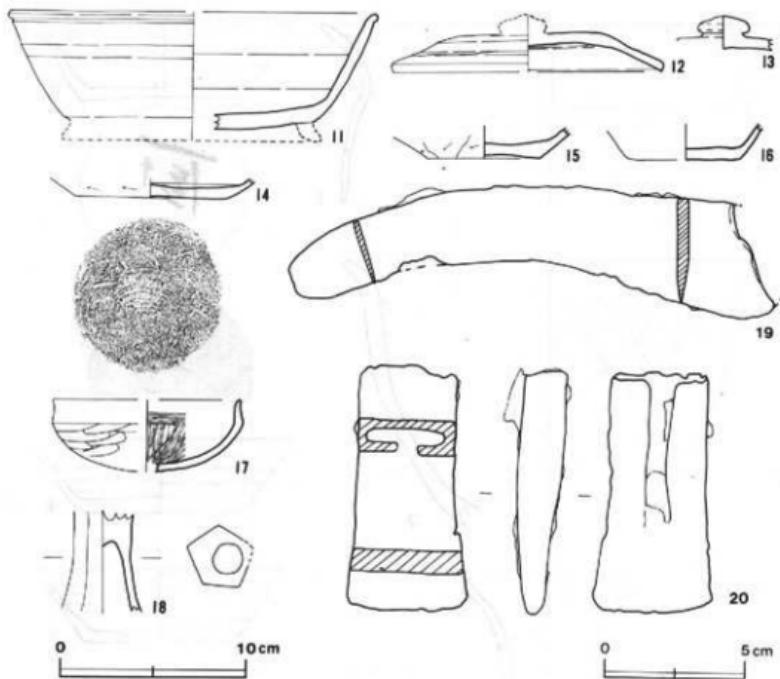
鉄製品 (第77図 -19・20)

19は鎌で基部が欠損する。先細りとなり、断面は三角形を呈し、現存長は17.4cmである。

20は袋式鉄斧で完存品である。楔形を呈し、長さ8.9cm・刃幅4.3cmである。



第76図 第2号住居跡出土遺物実測図(1)

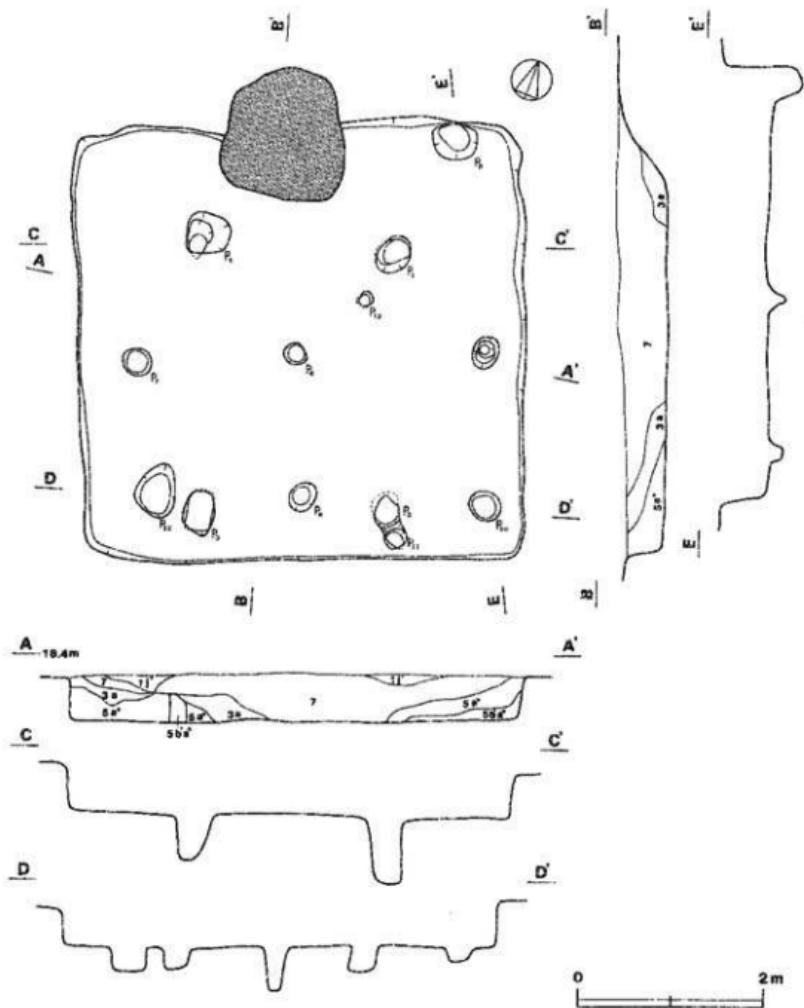


第77図 第2号住居跡出土遺物実測図（2）

### 第3号住居跡（第78・79図）

本跡はGlesを中心確認され、第2号住居跡の南側約5m、第4号住居跡の北東側約4mに位置している。

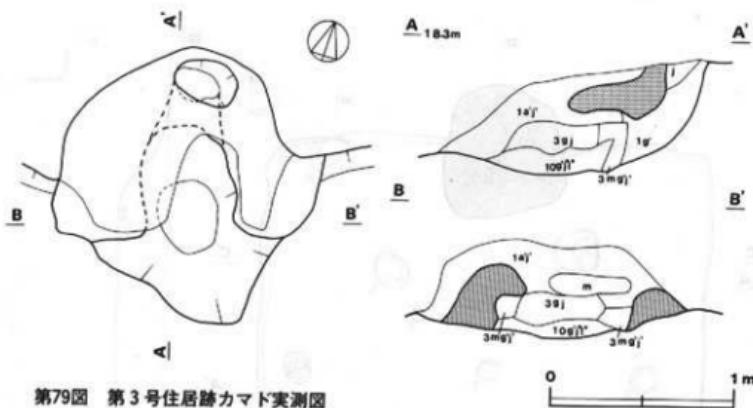
平面形は長軸4.80m・短軸4.70mの方形を呈し、主軸方向はN-22.5°-Wを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は50cm前後である。床は良好な状態で検出され、全体的に平坦で堅く、特に中央部がよく踏み固められている。ピットは13か所検出されたが、主軸に対称な配置とその規模からP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>が主柱穴で、P<sub>5</sub>～P<sub>8</sub>が補助的な柱穴と思われる。特にP<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>の径はいずれも約40cmで、深さ56～69cmとしっかりしており、他は径20～30cm・深さ20～30cmである。カマドは北壁中央部に付設され、比較的遺存状態は良い。長さ145cm・幅135cm・焚口部幅55cmで、壁を60cmほど切り込んでいる。火床は長径約40cm・短径約30cmの梢円形を呈し、床を14cmほど掘り凹め、奥壁はゆるやかに立ち上がっている。覆土は一部擾乱も見られるが、ほぼ自然堆積の状態を示している。住居中央部では確認面から床面まで黒色土が堆積し、周辺部はローム粒子を含む暗褐色



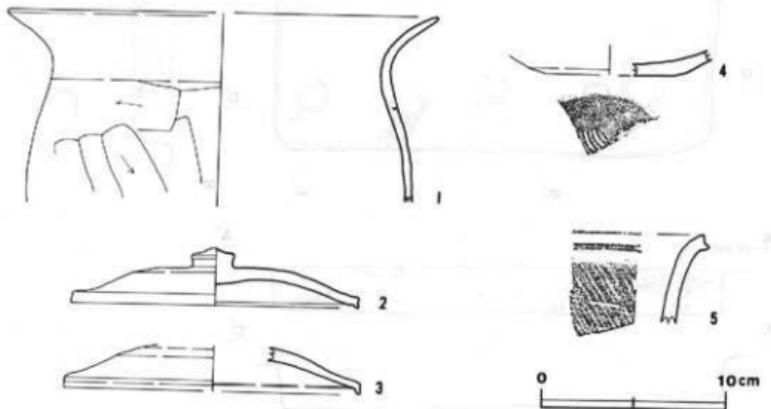
第78図 第3号住居跡実測図

土が中央部に向かって流れ込むように堆積している。

遺物は覆土から上師器の壺形土器片、須恵器の壺形土器片が出土しており、また住居中央部のやや南寄りの床面と東壁下の床面から蓋形土器（第80図—2・3）が出土している。



第79図 第3号住居跡カマド実測図



第80図 第3号住居跡出土遺物実測図

出土土器観察表 (第80図)

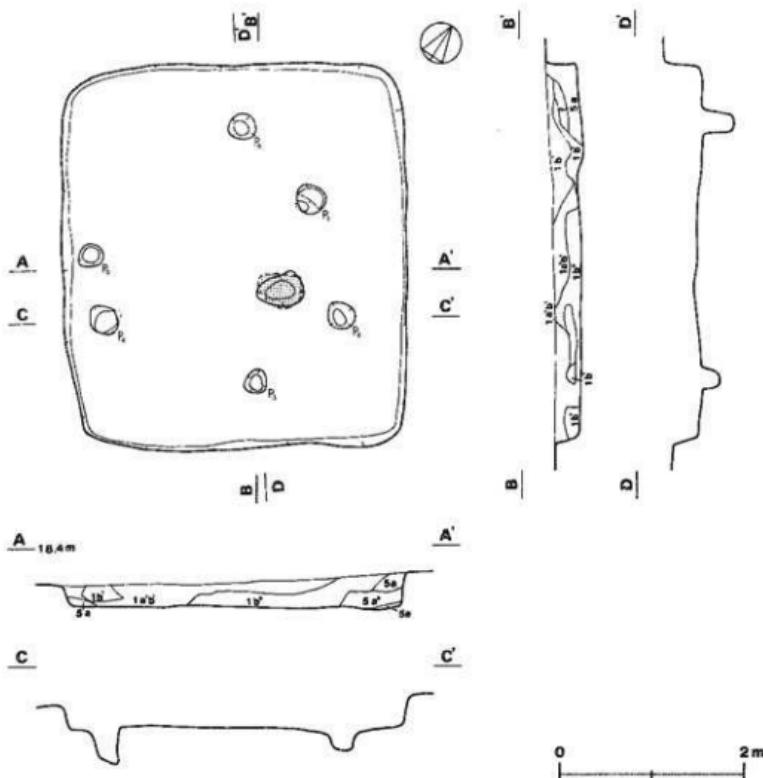
図版 番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	粘土・焼成・色調	備考
1	変形土器 土師器	A (23.2)	側部の張りは弱く口縁部は大きく外反する。	口縁部内・外面一横ナメ 側部外壁一へラ削り 内面一ナメ	砂粒 普通 に赤い赤褐色	10%
2	変形土器 須恵器	A 15.6 B 3.15 つまみ2.35	天井部中央に擬宝珠形のつまみをついている。天井部は扁平であるが、口縁に向かってなだらかに下降する。口縁部は下方向に屈曲する。	天井部一右回転利用の回転へラ削り 内・外面の水焼き模は弱く丁寧な作り	砂粒・細砂 雲母末 やや不良 に赤い黄色	80% 天井部内部に繩・焼土付着
3	変形土器 須恵器	C (16.1)	天井部はなだらかに下降し、口縁部は下方向に回転する。	天井部一右回転利用の回転へラ削り	細砂・雲母 やや不良 灰色	30%

図版 番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	粘土・焼成・色調	備考
4	环形 土器 土師器	C ( 6.8 )	底部は平底で、体部と底部の接は不明瞭	底部 土粘糸切り後、中央部 に糸切り痕を残す。外周--右 同軸利用の回転ヘラ削り	砂粒・粗砂 良 褐灰色	10%
5	鉢形 土器 環底器	/	口縁部分で短かく外反する。	LH椎部内外面-横ナデ 底部外面-斜位の平行叩きの 後横ナデ 内面-ナデ	粗砂・黄母 普通 灰イリーブ色	5%

#### 第4号住居跡（第81図）

本跡はG1g<sub>4</sub>を中心確認され、第3号住居跡の南西側約4m、第10号住居跡の北東側約4mに位置している。

平面形は長軸4.15m・短軸3.75mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-35°-Wを指している。



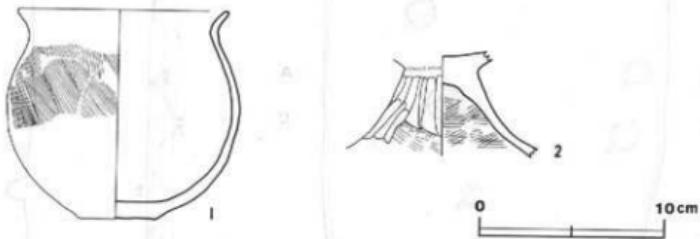
第81図 第4号住居跡実測図

壁はいずれもほぼ垂直に立ち上がり、壁高は25~38cmである。床面はほぼ平坦で、やわらかい。ピットは6か所検出され、いずれも径25~35cm・深さ30~40cmであるが、配置が不規則であり支柱穴は不明である。炉跡が住居中央部からやや東寄りに検出され、長径53cm・短径34cmの橢円形を呈し、床を約10cm掘り凹めている。焼土量は少なく、炉床も堅く焼けておらずあまり使用した痕跡は認められない。覆土は全体に搅乱を受けており、ロームブロックを含む黒褐色土が主である。

遺物は少なく、南コーナー部から土師器の変形土器（第82図-1）、炉跡内から高环形土器の脚部（第82図-2）が出土している。

出土土器観察表（第82図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土-焼成-色調	備考
1	変形土器	A 11.4	底部は平底で、肩部はほぼ球形を呈する。	口縁部内-外縁一横ナデ 脚部外縁-肩部のハケ目 内面-ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	
	土師器	B 31.4	口縁部は外反して開く。			
		C 4.1				
2	高环形土器		脚部はラバ状に開く。	脚部外縁-瓶底のヘラ削り 内面-ハケ目 瓶部外縁-無いハケ目	砂粒 普通 にぶい橙色	100%
	土師器					

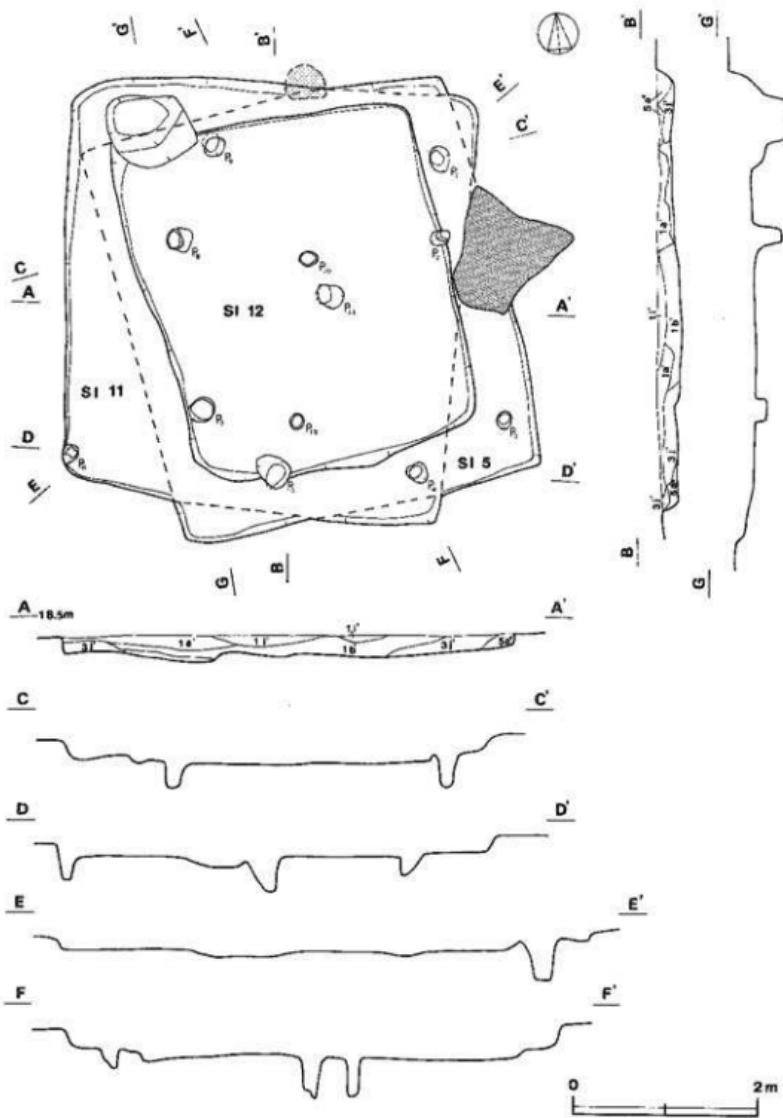


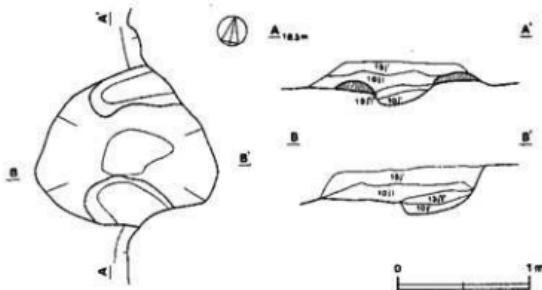
第82図 第4号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡（第83・84図）

本跡はG1gaを中心に確認され、第4号住居跡の東側約10m、第8号住居跡の北側約9mに位置している。第11・12号住居跡と重複しているが、本跡は第11号住居跡を切って、第12号住居跡の上に構築されており、本跡が最も新しいものと思われる。

平面形は長軸4.55m・短軸4.05mの方形を呈し、主軸方向はN-80°-Eを指している。壁は搅乱を受けているが、外傾して立ち上がり、壁高は15~20cmである。床は第11号住居跡と同じレベルでほぼ平坦であり、よく踏み固められている。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>・P<sub>7</sub>~P<sub>2</sub>の11か所検出されている。いずれも径15~40cm・深さ11~40cmで不揃いであり、配置にも規則性がなく、いずれの住居跡に





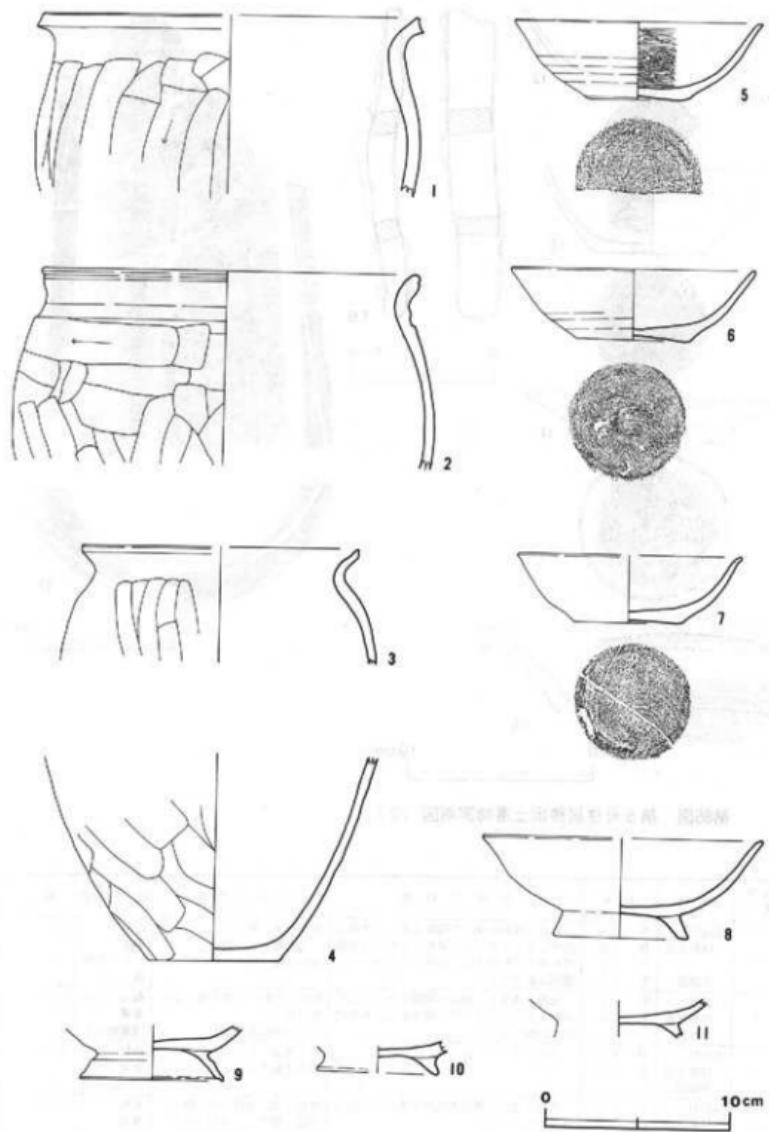
第84図 第5号住居跡カマド実測図

伴うものか不明である。カマドが東壁中央部に付設されているが、耕作によって削平されており、袖部の一部が残っているだけである。推定で長さ130cm・幅112cm・焚口幅45cmで、東壁を約70cm切り込んでいる。覆土はロームブロックを含む黒褐色土や、ローム粒子を多量に含む褐色土が主で、耕作による擾乱を受けていると思われる。

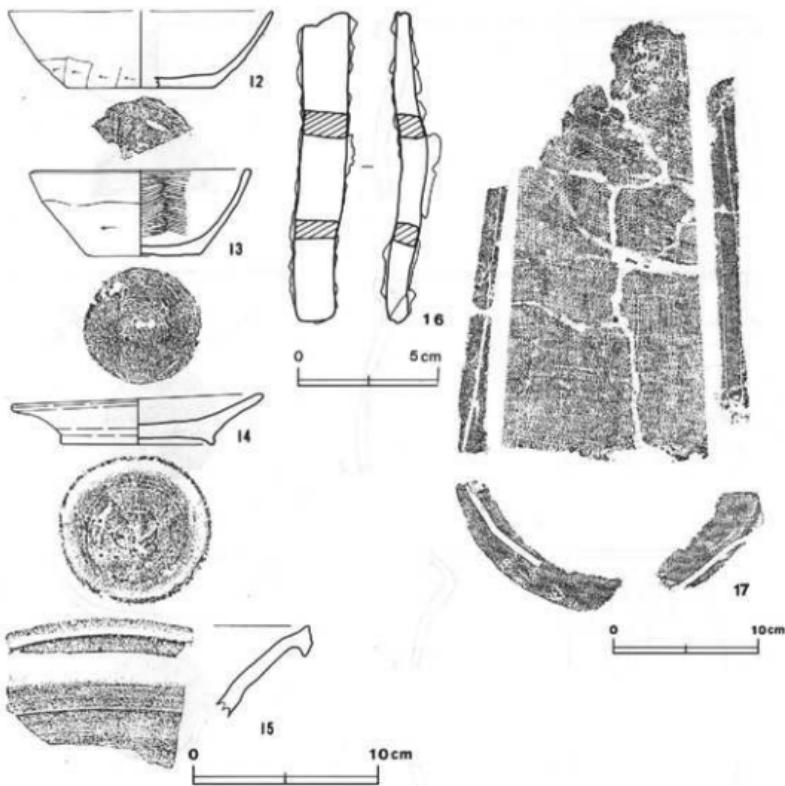
遺物は比較的多く、土師器の變形土器、環形土器、高台付環形土器や、須恵器の環形土器、變形土器が出土している。カマドの南側の東壁際床面から、ほぼ完形の丸瓦（第86図-17）が出土している。

出土土器観察表（第85・86図）

図版番号	器種	法基	器形の特徴	手法の特徴	胎土・底色・色調	備考
1	變形土器 土師器	A (20.8)	側部はやや盛る。口縁部は短く外反し、外端部に凹をなす。	口縁部内・外面一横ナデ 側部外面・斜位へラ削り 内面一ナデ	砂粒 普通 によい緑色	5%
2	變形土器 土師器	A 20.4 B 11.0	側部はやや盛り、其頭を屈するものと思われる。頭部と側部の境には明瞭な棱を有し、口縁部は内反し肥厚である。口縁底下に沈痕が遺る。	口縁部内・外面一横ナデ 側部外面・ヘラ削り 内面一ナデ	砂粒 普通 緑色	30%
3	變形土器 土師器	A (15.0) B ( 6.3)	側部は丸く盛り、口縁部は大きく外反し外端部に凹をなす。	口縁部内・外面一横ナデ 側部外面・斜位のヘラ削り 内面一ナデ	砂粒 普通 赤褐色	10%
4	變形土器 土師器	C 7.1	底部は平底で、側部は内側気味に外傾して立ち上がる。	側部外面・斜位のヘラ削り 内面一ヘラナデ	砂粒 普通	30%
5	環形土器 土師器	A (13.4) B 4.25 C ( 5.6)	底部はやや盛り上がり、体部は内側気味に外上方へ立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	底部・回転糸切り後、中央部のみ余切り端を残し、外端は回転ヘラ削り 内面一ヘラ盛り	砂粒・細粒 良好 によい緑色	35% 内面黒色処理
6	環形土器 土師器	A 13.3 B 3.9 C 6.3	底部はあげ底を廻し、体部は内側気味に外上方へ立ち上がる。	底部・回転糸切り後、外周部回転ヘラ削り 内・外面の水焼き側は弱く、丁寧を作り	細砂(粘土) 普通 によい黄粒色	70%
7	環形土器 土師器	A 12.0 B 3.65 C 6.0	底部はややあげ底を呈し、体部は内側気味に外上方へ立ち上がり、口縁端部は外反する。	底部・回転糸切り ロクロ回転方向は右	灰石・石英 不良 によい緑色	90%



第85図 第5号住居跡出土遺物実測図(1)



第86図 第5号住居跡出土遺物実測図（2）

図版 番号	器種	法 基	器形の特徴	手 法の特 徴	粘土・焼成・色調	備 考
8	高台付 环形土器 土師器	A (15.4) B 5.4 D 7.1 E 1.35	底部と体部との境は不明瞭である。体部は内側しながら外上方へ立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。高台は外下方へのび縁部は面をなす。	体部外面一横ナデ 内面へラ磨き 高台は貼り付け	砂粒 普通 によい赤褐色	40%
9	高台付 环形土器 土師器	D 7.8 E 1.4	底部と体部との境は不明瞭である。高台は外下方へのびて上位に棱を有し、壇部内面に凹縦を造らす。	底部一同転へラ削り後、高台 貼り付け ロクロ回転方向は右	長石・石英 普通 浅黄褐色	55%
10	高台付 环形土器 土師器	D 6.4 E 0.9	高台は外下方へのびる。	内・外面一ナデ 高台は貼り付け	砂粒 普通 によい橙色	25%
11	高台付 环形土器 土師器	D 6.8 E 1.9	底部と体部との境は不明瞭である。高台は外下方へのびる。	体部下端一手持ちへラ削り 内面一横ナデ 高台は貼り付 け 全体に厚底	砂粒 普通 橙色	25%
12	环形土器 須恵器	A (14.2) C (7.8)	底部は平底で、体部は内壁気味に外上方へ立ち上がる。	底部一方向の手持ちへラ削 りで、切り離しには不規 矩形一手持ちへラ削り	砂粒・細砂 良好 灰褐色	25%

国版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	断面・焼成色調	備考
13 土器	壺形 上器	A 11.7 B 4.7 C 6.3	底部は平底で、体部は内側気味に外上方へ立ち上がり。口縁端部は丸い。	底部 中央部に同軸系刃切り痕 体部上半一様ナメ 下半 同 軸ヘラ削り 内面 ヘラ削り ワイヤー削り 方向は右	磯・長石 石井 良	100% 内面墨色処理
	壺形 土器	A 13.7 B 2.5 D 8.3 E 3.05	体部は外反気味に大きく開き、口縁端部は丸い。	底部 一削ヘラ削り後、高台 作り付け 径8mmもある櫛の 存在により焼成時にヒビ割れ が生じている。	磯・長石 不食 灰白色	85%
	壺形 土器 須恵器	/	口縁部破片、口縁部は外反しながら大きく開く。端部は面をなして下方へ細曲する。	水削り成形	鉢輪・織物 普通 灰色	口縁部5%
15						

#### 鉄製品（第86図-16）

16は用途不明の鉄製品である。細長く、断面は長方形を呈する。厚さ6~9mm・幅15~17mm・長さ11cmである。

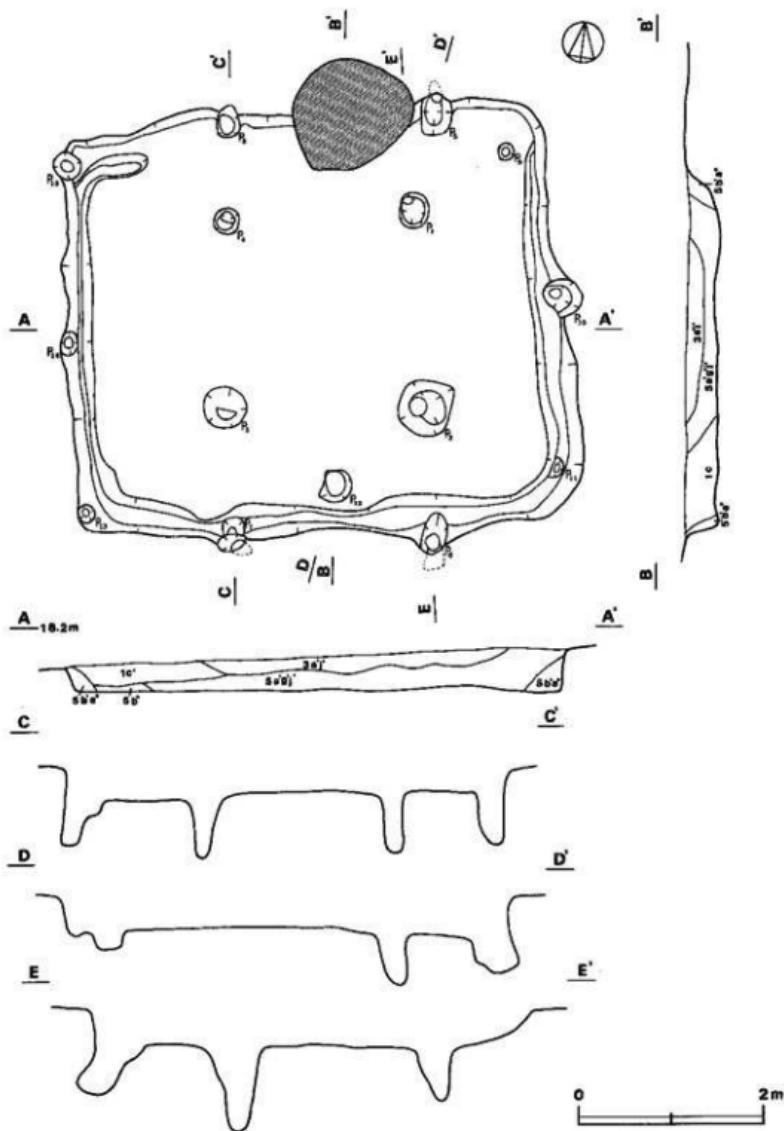
#### 瓦（第86図-17）

17は丸瓦で上端が欠損する。凸面はナデで、凹面は布口を残す。側面と端面はヘラ削りである。胎土はスコリア・細砂を含み、焼成は普通で、色調はにぶい橙色である。現存長は31cm・広端20.6cm・厚さ2.6cmである。

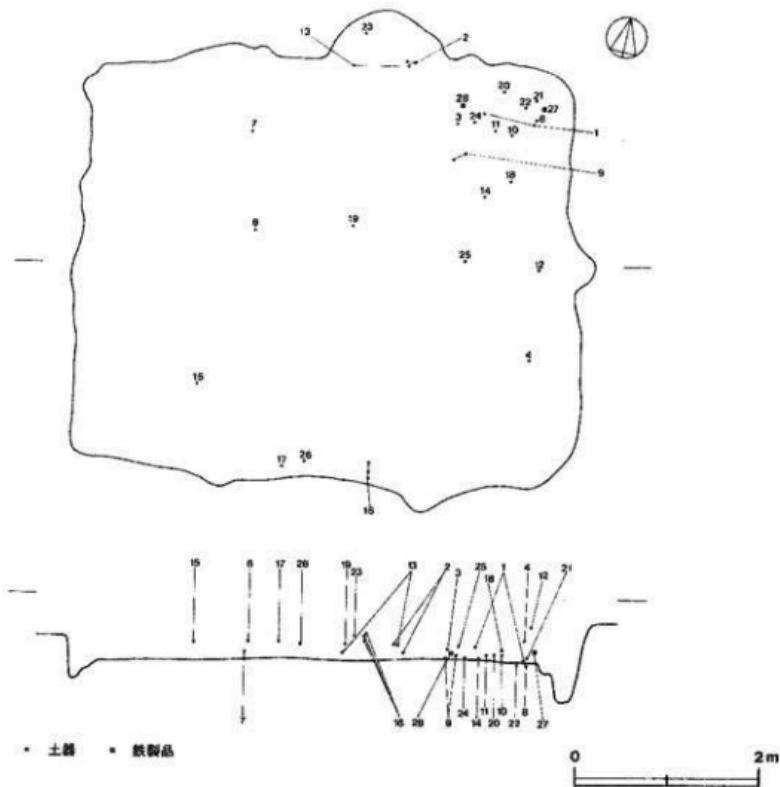
#### 第6号住居跡（第87~89図）

本跡はG1isを中心に確認され、第13号住居跡の東側約2mに位置し、東側は第1号井戸とほぼ接している。

平面形は長軸5.40m・短軸4.50mの長方形を呈し、主軸方向はN-14°-Wを指している。壁高は北西壁で25cm前後・東南壁で40cm前後で、やや外傾して立ち上がっている。壁面はやわらかく、ロームブロックが混入しづれやすい。北壁下を除いて各壁下には、上幅23cm・下幅8cm・深さ6cmほどの壁溝が箇間をしている。床面は平坦で全体に堅い。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>の15か所検出され、その内P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は等間隔で正方形に配置されており、主柱穴と思われる。それぞれ径30~60cm・深さ55~80cmとしっかりしている。P<sub>5</sub>~P<sub>6</sub>は、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>を結んだ線のほぼ延長線上に位置し、幾分壁を切り込み、住居跡内に10~20°傾くように掘り込まれている。いずれも径30~40cm・深さ40~60cmと、規範的に大きく主柱穴同様の機能を有していると思われる。その他各コーナー部、東・西・南壁の中央部のものは補助的なものと思われる。カマドは北壁中央部よりやや東側に付設され、長さ114cm・袖幅80cm・焚口部幅35cmである。北壁を75cmほど切り込んでおり、火床は床を5cm掘り凹めている。天井部は崩落しているが、焚口部の南側壁には壺形土器の大きい破片を袖部の補強のために埋めこんでいる。覆土は大きく2層に分かれ、自然堆積の状態を呈している。上層は焼土粒子・ローム粒子を含む暗褐色土、下層は炭化粒子・焼土粒子を含む褐色土である。



第87図 第6号住居跡実測図

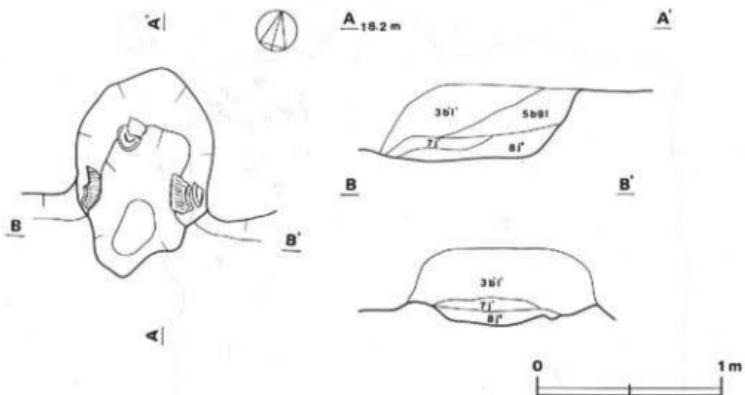


第388図 第6号住居跡遺物出土状態図

遺物は比較的多く、土器の器種も豊富である。土師器では菱形土器・壺形土器が出土し、須恵器では菱形土器・壺形土器・楕形土器のほか、南壁中央部付近の覆土から盤形土器(第92図-26)、北東コーナー部付近の床面から長頸壺形土器(第91図-14)、P<sub>1</sub>の北側の覆土から台付長頸壺形土器(第90図-7)が出土している。また、北東コーナー部覆土から鎌(第92図-27)、カマドの東側覆土から刀子(第92図-28)が出土している。

出土土器観察表(第90~92図)

図版 番号	器種	法量	器形の特徴	手筋の特徴	地土・焼成・色調	備考
1 ·	菱形土器 須恵器	A (29.8)	やや歪った胴部から口縁部に大きく外反し、堆墨を上方へつまみ出している。	口縁部内・外面一横ナード 副部外縁一平行印5目 内面一ナード	砂粒 普通	5%



第89図 第6号住跡カマド実測図

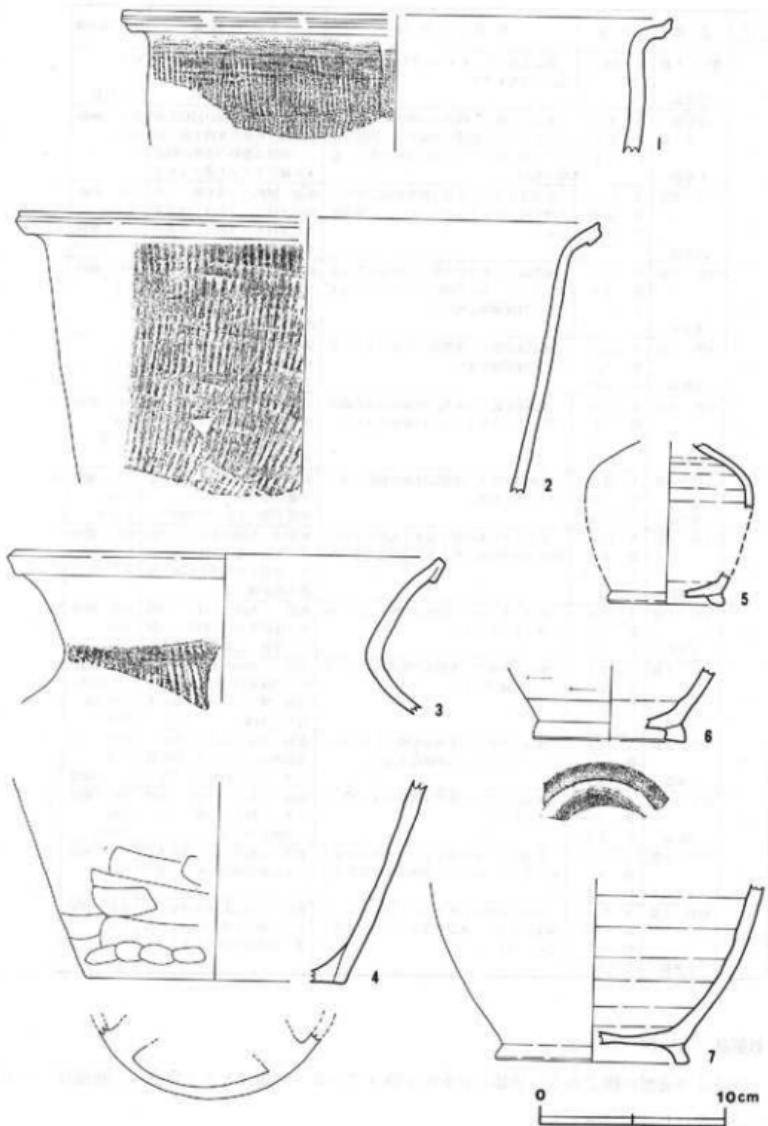
回数 番号	器種	法量	器種の特徴	手法の特徴	船上-底面-色調	備考
2	蝶形 土器 須恵器	A (31.4)	頭部はほとんど張りがなく、口縁部は短く外反し、端部を折り返し、さらに上方へつまみ出している。	口縁部内・外面一横ナデ 頭部外面一縦位の平行叩き目 内面一ハラナデ	砂粒 普通	10%
3	蝶形 土器 須恵器	A (23.0)	口縁部は外反気味に開き、口縁端部を折り返している。	口縁部内・外面一横ナデ 頭部外面一平行叩き目 内面一ナデ	細砂 普通 に黒い黄褐色	10%
4	蝶形 土器 須恵器	C (14.0)	底部は五孔式と思われる。頭部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。	頭部外面一ナデ 内面一ナデ	砂粒 普通 灰褐色	20%
5	台付長瓶 逆形土器 灰釉陶器	D (6.3) E 0.6	頭部は内壁乳突に外上方へ立ち上がり、肩部で内傾する。 高台は短く外下方へのびる。	底部一高台隨り付け後横ナデ 体部内・外面一横ナデ 下端一回転ヘラ削り	細砂 良好	5%
6	台付長瓶 春形土器 須恵器	D (8.2) E 0.85	頭部は内壁気味に外上方へ立ち上がる。 高台は下方に短くのび、端部に面をなす。	底部一回転ヘラ削り後、高台貼り付け 体部下半一回転ヘラ削り 肩部一右部内・外側と頭部下端一横ナデ	細砂 良好 緑灰黄色	10% 内部底部に 自然堆
7	台付長瓶 蝶形土器 須恵器	D (10.4) E 0.85	頭部は内傾しながら外上方へ立ち上がる。 高台は外下方へ短くのび、端部に面をなす。	底部一回転ヘラ削りの後高台 貼り付け	砂粒・細砂 普通 灰色	30%
8	蝶形 土器 土師器	A 18.7	頭部上位はやや張り、口縁部は「コ」の字を呈する。	口縁部内・外面一横ナデ 頭部外面上位一横位 中・下位一繩位のヘラ削り 頭部内面一ハラナデ	砂粒・黒雲母 普通	15%
9	蝶形 土器 土師器	A 18.6	口縁部の破片。 器厚は薄く、口縁部は「コ」の字状を呈する。	口縁部内・外面一横ナデ 頭部外面一縦位のヘラ削り 内面一ヘラナデ	砂粒 普通 褐色	20%
10	蝶形 土器 土師器	A (16.0)	口縁部は「コ」の字状を呈する。	口縁部内・外面一横ナデ 頭部外面上位一横位のヘラ削り 内面一上位一ヘラナデ	砂粒 普通 赤褐色	10%
11	蝶形 土器 土師器	A (17.8)	口縁部破片。 丸く張った頭部から口縁部は大きく外反し、端部を上方につまみ出しあくおさめている。	口縁部内外面一横ナデ 頭部外面一縦位のヘラ削り 内面一横位のヘラナデ クロ回転方向は右	砂粒 良好 に赤い褐色	5%
12	蝶形 土器 土師器	A (18.0)	口縁部破片。 丸く張った頭部から口縁部は大きく外反する。	口縁部内・外面一横ナデ 頭部外面一縦位のヘラ削り 内面一指によるナデ付け	砂粒 良好 に赤い褐色	5%

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手の特徴	胎生・模造・色調	備考
13	環形土器	C (14.7)	底部は平底で、わずかに外反しながら外上方へ立ち上がる。	体部外縁・部位の平行押下 爪跡 ヘラ削り 内面ナゲ	砂粒・普通 普通 灰黒褐色	40%
14	長瓶瓶 形土器 須恵器	A 6.3 B 19.2 C 5.8	底部は平底で、瓶部は内壁気泡に外上方に立ち上がり、瓶部で内傾する。瓶部は外反しながら外上方へのび口縁部へ至り、瓶部は丸い。	底部・右側斜利用の回転系切り 内・外縁の水抜き痕は弱い。 体部に整形成の不備の修正する痕のナゲが、あみられる。	砂粒・細砂 普通 灰色	95%
15	环形土器 須恵器	A (13.0) B 3.85 C 7.0	底部は平底で、体部は器耳を残しながら内壁気泡に外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸い。	底部一回転へフリギ後、一方面の手持ちヘラ削り 体部下半一手持ちヘラ削り 外面の水抜き痕は強目	砂粒・細砂 普通 にぼい黄褐色	50%
16	环形土器 須恵器	A 12.5 B 4.3 C 7.0	底部はややあげ底を呈し、体部は器耳を残しながら、ほぼ直線的に外上方へ立ち上がり。口縁端部は丸い。	底部一方向の手持ちヘラ削り 体部下端 手持ちヘラ削り 外面は水抜き痕は弱く、内面ではやや強目である。	砂粒・細砂 普通 灰褐色	70% 外面粘土層 含まない痕 が見られる
17	环形土器 須恵器	A 13.2 B 3.9 C 6.0	底部は平底で、体部は外上方へ立ち上がり。口縁端部は丸い。	底部・一方向の手持ちヘラ削り 体部下端部に向かって斜後の手持ちヘラ削り	砂粒 不良 同上	100% 底部内面に 漆付着
18	环形土器 須恵器	A (13.6) B 4.2 C (7.2)	底部は平底と思われ。体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸い。	口縁部内・外縁 横ナゲ 体部下半子持ちヘラ削り 外縁中央には、水抜き痕が残るが内面は弱い	砂粒・細砂 普通 灰白色	10%
19	环形土器 須恵器	A (11.8) B 3.95 C (5.4)	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。	底部 手持ちヘラ削りで、切り離しは不明 体部下端一手持ちヘラ削り	砂粒・細砂 普通 灰白色	10%
20	环形土器 須恵器	A (12.4) B 4.1 C (5.3)	底部はややあげ底を呈するものと思われる。体部は内壁気泡に外上方へ立ち上がる。	底部は 方向の手持ちヘラ削り 体部下半一手持ちヘラ削り 体部上半及び内面は、水抜き痕が残らない。	砂粒・細砂 良好 灰褐色	30%
21	环形土器 須恵器	A (12.8) B 3.9 C 5.8	底部はあげ底で、体部は内壁しながら外上方へ立ち上がる。	底部一方向の手持ちヘラ削り 体部下半一手持ちヘラ削り 金体に丁寧な作りである	砂粒・細砂 良好 胎土内に氣泡	30%
22	环形土器 須恵器	A 12.6 B 4.3 C 6.0	底部は平底で、体部は内壁気泡に立ち上がり。口縁端部は丸い。	底部一方向の手持ちヘラ削り 口縁部内・外縁と体部内・外縁 横ナゲ 体部下端一手持ちヘラ削り	砂粒 (長い) 石炭を含む やや不良	90%
23	环形土器 土師器	A 13.8 B 4.4 C 6.9	底部は平底で、体部は内壁しながら外上方へ立ち上がり。口縁端部は丸い。	底部 不一定方向のヘラ削り 体部内面・外縁上半 回転横ナゲ 下半一手持位のヘラ削り	砂粒 普通 にぼい橙色	100%
24	环形土器 土師器	A 13.0 B 3.9 C 6.6	底部は平底で、体部は内壁気泡に外上方へ立ち上がる。	底部 手持ちヘラ削り 体部下半一手持位のヘラ削り ノック回転方向は左。	砂粒・細砂 普通 黒褐色	55%
25	环形土器 土師器	A (13.4) B 4.7 C (7.2)	底部はややあげ底を呈し、体部は器耳を残しながら、外上方へ内壁気泡に立ち上がる。	底部一回転系切り 体部下端一回転利用の回転ヘラ削り	砂粒・細砂 普通 40%二次焼成による焦付着	
26	罐形土器 須恵器	A 15.8 B 3.6 C 9.0 E 9.8	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁端部は丸い。底部は平底で、底台は外下方へのびる。	底部一回転系切り 体部下端の後高台貼り付け 口縁部に施成時の赤がみあり	砂粒・細砂 普通 灰褐色	95%

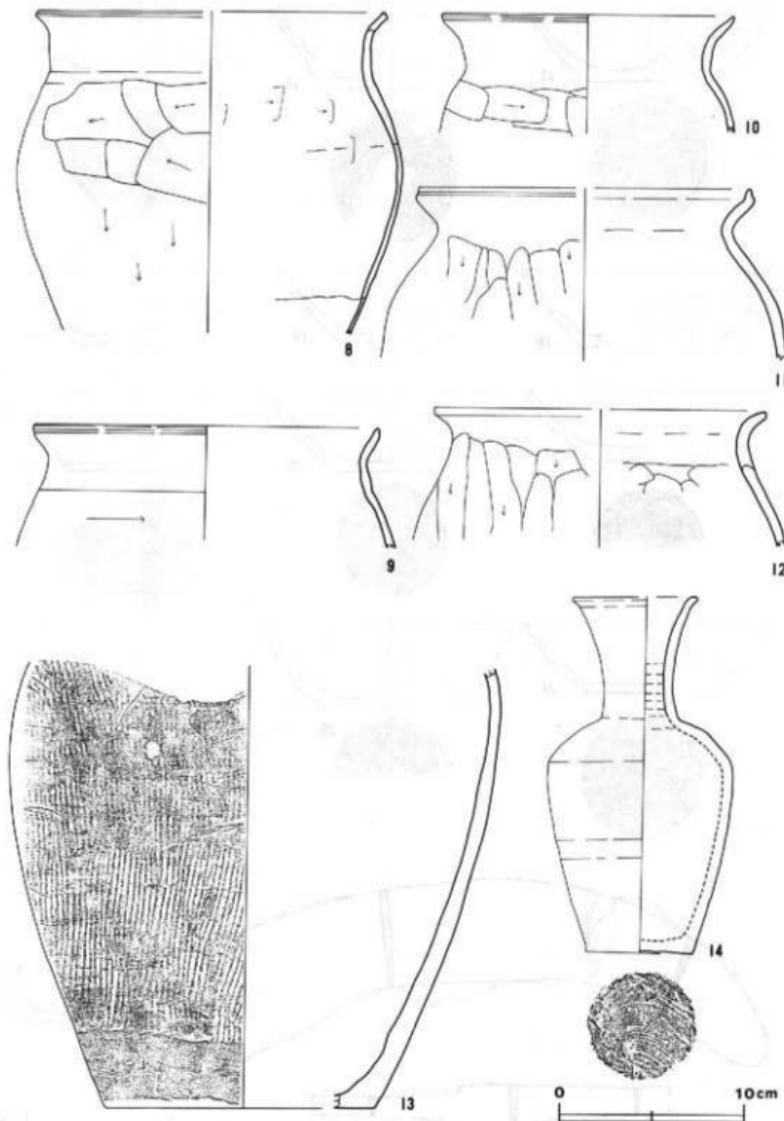
### 鉄製品（第92図-27・28）

27はほぼ完形の鎌である。基部上半を折り曲げている。刃部は大きく彎曲し、断面は三角形を呈し、現存長は22.7cmである。

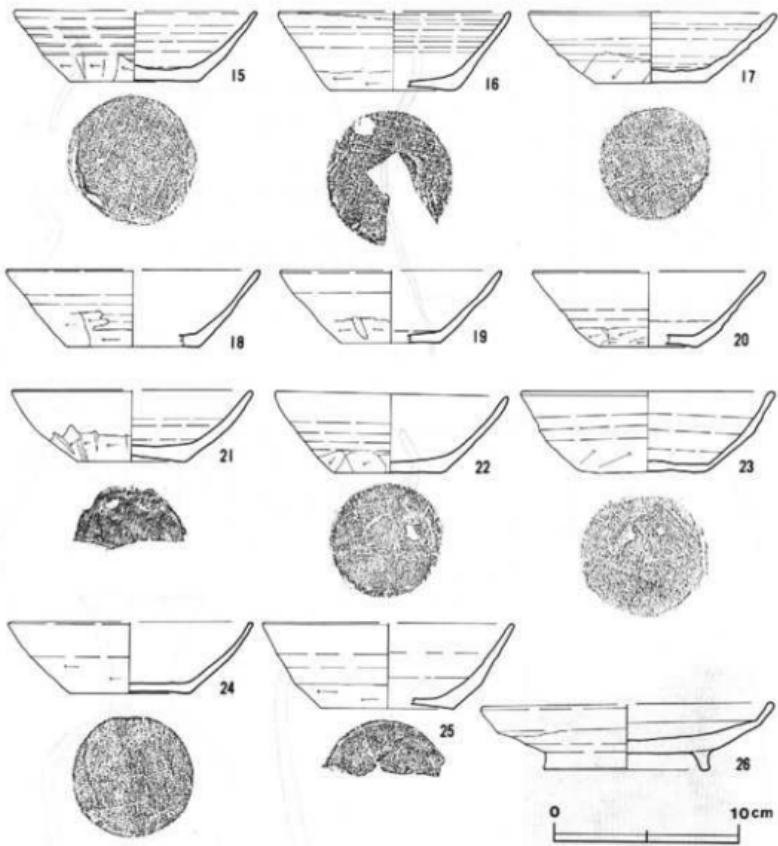
28は刀子で両端部が欠損する。刃と棟の両側に刃を有する。現存長は7.7cm・刃幅1.3cmである。



第90図 第6号住居跡出土遺物実測図(1)



第91図 第6号住居跡出土遺物実測図(2)

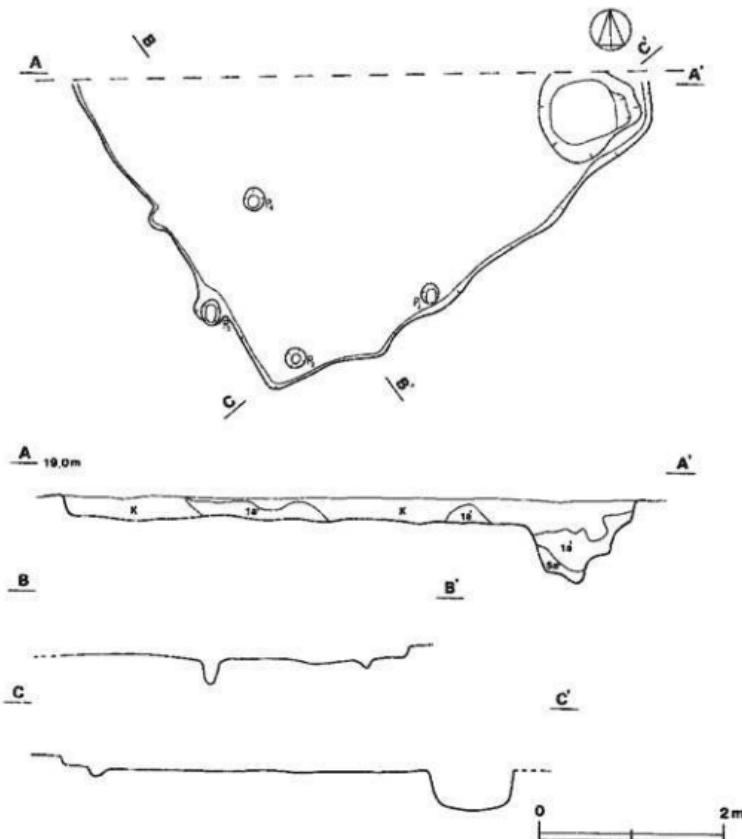


第92図 第6号住居跡出土遺物実測図(3) 1三連高脚盤土器底の断面図 2三連盤

### 第7号住居跡（第93図）

本跡はG2daを中心確認され、第2号住居跡の東側約25mに位置している。全体に擾乱を受け遺存状態は悪く、北半分は土取りによって消滅している。

平面形は1辺5.20mの方形を呈するものと思われる。現存壁も擾乱を受けているが、外傾して立ち上がり、壁高は10cm前後である。床面は全体に平坦でやわらかい。ピットはP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の4か所検出され、径20cm前後・深さ10～30cmである。配置には規則性がなく上柱穴は不明である。貯蔵穴は、東コーナー部に検出され、平面形は長径110cm・短径95cmの楕円形を呈し、深さ46cmで塊状に掘り込まれている。覆土は全体に擾乱を受けており、ロームブロックを多量に含む褐色土がほと

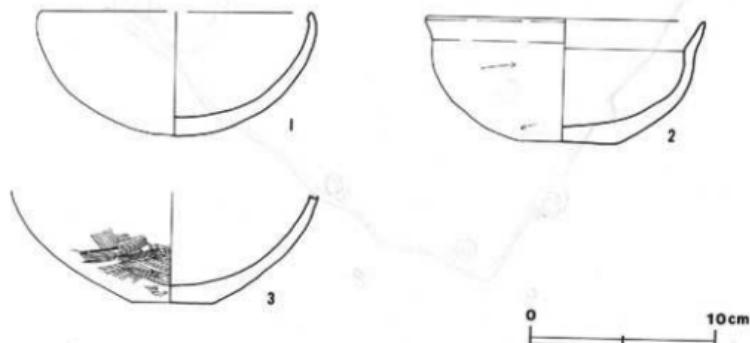


んどである。

遺物は少なく、南東壁中央部付近の床面から變形土器(第94図-3)と壺形土器(第94図-1), 貯藏穴内から壺形土器(第94図-2)が出土している。

出土土器観察表(第94図)

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	粘土-焼成-色調	備考
1	壺形土器 土師器	A 14.6 B 7.6	半球形を呈し、口縁部はやや内傾する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部内・外面一ナデ	砂粒 普通 赤色	60% 内・外全体に赤色
2	壺形土器 土師器	A 15.2 B 6.2 C 5.5	底部は平底で、背部は内側しながら大きく開いて立ち上がる。口縁部は近く外傾する。内面の体部と口縁部の境に縫を有する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外面一ヘラ削り 内面一ナデ	砂粒 普通 にぶい赤色	85%
3	變形土器 土師器	C 4.3	底部は平底で、胴部は内側ながら大きく開いて立ち上がる。	胴部外面一ハケ目 内面一ナデ	砂粒 普通 淡褐色	20%

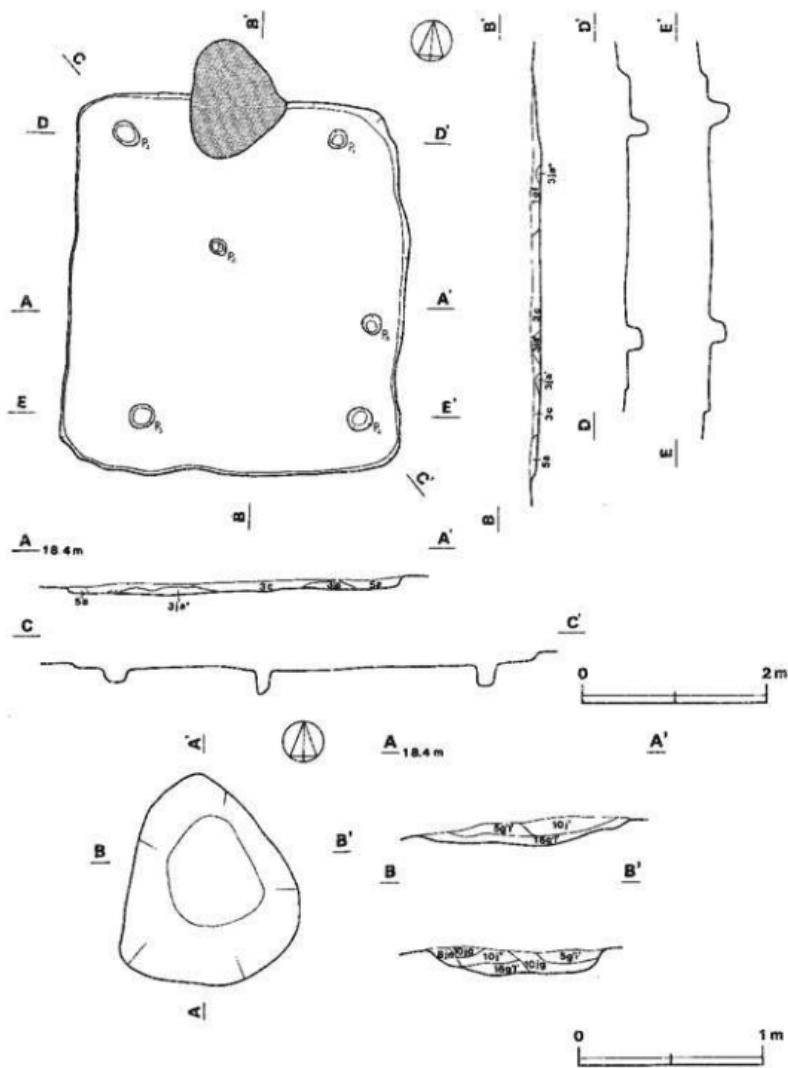


第94図 第7号住居跡出土遺物実測図

第8号住居跡(第95図)

本跡はG1j<sub>7</sub>を中心確認され、第1号井戸の東側約2m、第9号住居跡の北側約1mに位置している。

平面形は長軸4.05m・短軸3.60mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-0°を指している。壁は外傾しており、立ち上がりは悪く、壁高は5cm前後である。床面は全体に平坦でよく踏み固められている。特にカマド周辺から住居跡中央部にかけては堅い。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>の6か所検出され、いずれも径20~30cm・深さ20~30cmである。P<sub>3</sub>はやや東に寄っているが、ほぼ対角線上に位置する。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>が主柱穴と思われる。カマドは北壁中央部に付設されているが、天井部・袖部とも崩壊しており、推定で長さ約100cm・幅約95cmである。北壁を45cmほど切り込み、火床は床を15cm



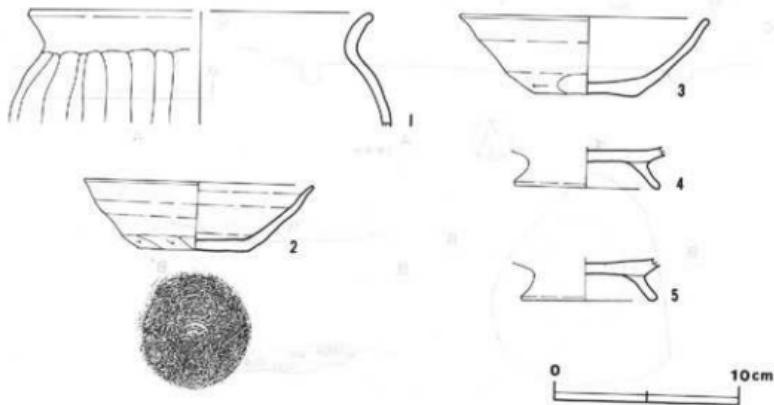
第95図 第8号住居跡・カマド実測図

ほど掘り込んでいる。覆土は西壁から南壁に沿って、幅1mほど擾乱を受けているほかは自然堆積の状態を示し、ローム粒子・焼土粒子を含む暗褐色土が主である。

遺物は少なく、土師器の斐形土器や高台付环形土器などが出土し、カマド内からは須恵器の环形土器（第96図-3）が出土している。

出土土器観察表（第96図）

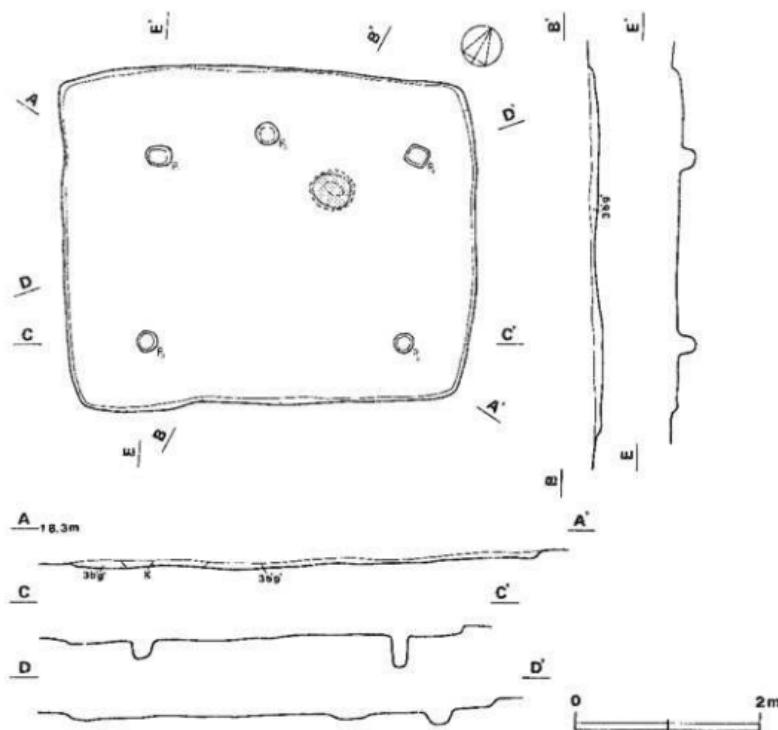
団 舗 番 号	器 種	法 量	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土-焼成-色 相	備 考
1	斐形 土器 土師器	A (18.4) B (6.2)	丸く張った頸部から口縁部は短く外反する。	口縁部内・外面一横ナデ 頸部外面一範囲のヘラ削り 内面一ナデ	砂粒 普通 褐色	5%
2	环形 土器 須恵器	A 12.4 B 3.7 C 5.8	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部はやや外反する。 端部は丸い。	底部一不定方向の手持ちヘラ削り 体部下端一手持ちヘラ削り 内・外面の水焼き痕は弱い。	砂粒 不良 褐色	100%
3	环形 土器 須恵器	A 13.5 B 4.3 C 5.3	底部は平底で、体部は内側気味に外上方へ立ち上がる。口縁部はわずかに外反し。 端部は丸い。	底部調整不明 体部下端一手持ちヘラ削り 内・外面の水焼き痕は弱い。	砂粒・小塊 普通 によい褐色	100%
4	高台付 环形土器 土師器	D 7.8 E 1.4	高台は外下方へのび端部は丸い。	底部外壺一横ナデ 内面一ヘラ磨き 台部内・外面一横ナデ 高台は貼り付け	砂粒 普通 黒色	20% 内面黒色処理
5	高台付 环形土器 土師器	D 7.0 E 1.45	高台は外下方へのび端部は丸い。	底部・台部内・外面一横ナデ 高台は貼り付け	砂粒 普通 褐色	30%



第96図 第8号住居跡出土遺物実測図

第9号住居跡（第97図）

本跡はH1aをを中心に確認され、第8号住居跡の南側約1mに位置している。  
平面形は長軸4.40m・短軸3.65mの長方形を呈し、長軸方向はN-60°-Eを指している。壁は



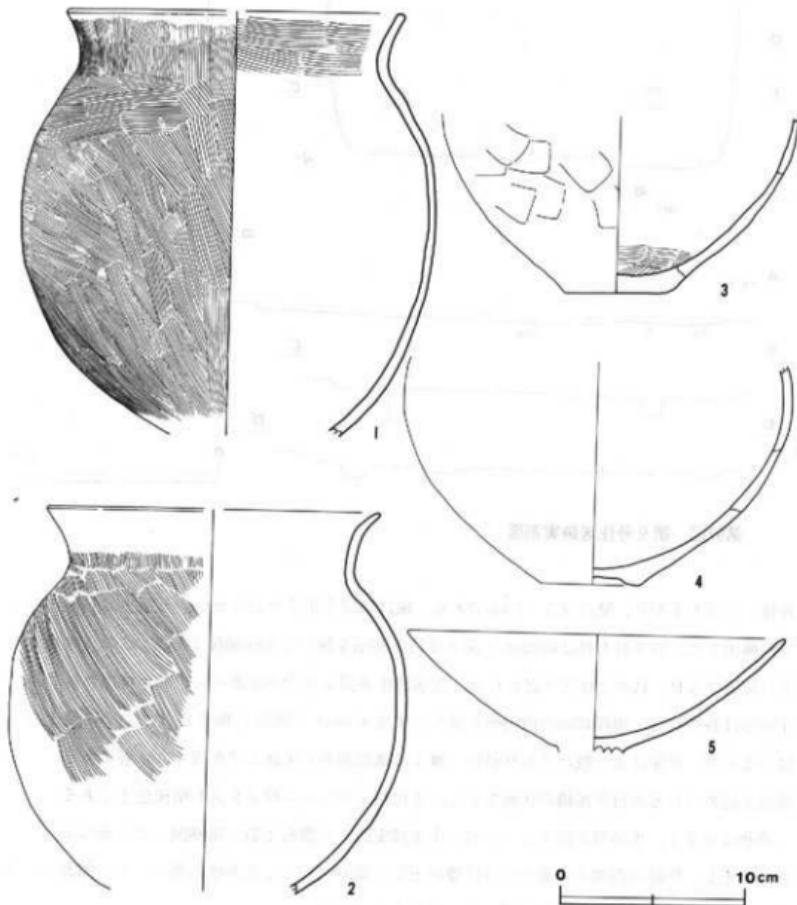
第97図 第9号住居跡実測図

外傾して立ち上がり、壁高は5~10cmである。床はほぼ平坦でやわらかい。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>の5か所検出され、いずれも径は約20cm・深さはP<sub>2</sub>の36cmを除いて20cm前後である。このうち対角線上に位置するP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>が主柱穴と思われる。住居跡中央部よりやや北寄りに炉跡が検出されている。平面形は長径47cm・短径42cmの楕円形を呈し、床を6cmほど皿状に掘り込んでいる。焼土の量は少ないが、炉床はよく焼けており堅い。覆土は確認面から床面までが浅く、1層である。一部擾乱が認められるが自然堆積の状態を示し、炭化粒子やローム粒子を含む暗褐色土である。

遺物は少なく、土師器が出土している。中央部床面から變形土器（第98図-2）がつぶれた状態で出土し、炉跡の西側の床面から台付變形土器（第98図-1）、北西壁の西コーナー部寄りの床面からは高环形土器の環部（第98図-5）が出土している。

出土土器観察表 (第98図)

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土焼成・色調	備考
1	台付彫形 土器 土師器		台部欠損。胴部はやや長卵を呈し、口縁部は外反しながら聞く。	口縁部内・外面一ハケ目 胴部外面一ハケ目 内面一ハナデ	砂粒 普通 灰褐色	50% 外面に焼付着
2	彫形 土器 土師器	A (17.8)	胴部はほぼ球形を呈し、口縁部は外反しながら外上方へ立ち上がる。	口縁部内・外面一横ナデ 胴部外面一斜位のハケ目 内面一ハナデ	砂粒 普通 明赤褐色	30%



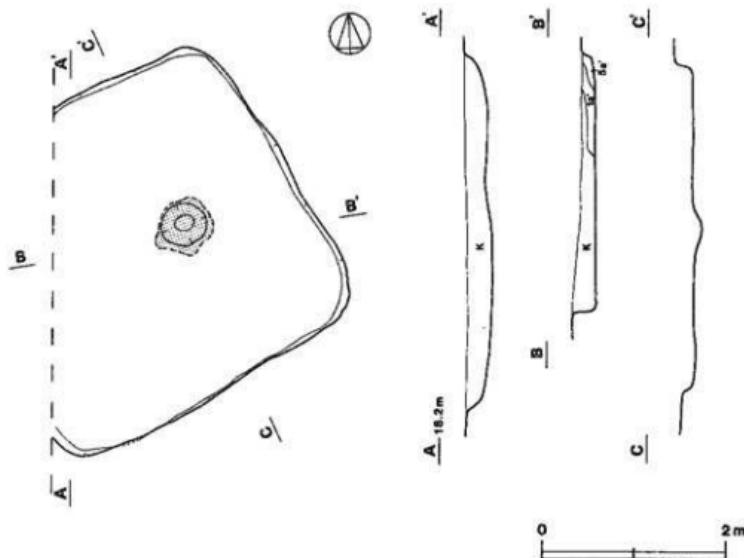
第98図 第9号住居跡出土遺物実測図

回版番号	器種	法星	器表の特徴	手の特徴	胎上-焼成-色調	備考
3	壺形土器 上器	C 5.5	底部は平底で、肩部は内側しながら外上方へ立ち上がり。	底部内面-ハケ目 肩部外面-ハケ目	砂粒 普通 にふい褐色	30%
4	壺形土器 上器	C 5.5	底部はあげ底を呈し、肩部はほぼ球形をなす。	肩部外面-ナデ 内面-ヘラナデ	砂粒 普通 赤褐色	35%
5	高环形土器 上器	A 20.6	全体はやや内側傾向に大きく開いて立ち上がり。そのまま口縁部に至る。	U縁部内・外面-横ナデ 体部内・外面-ナデ	砂粒 不良 にふい褐色	35% 内・外赤形

#### 第10号住居跡（第99図）

本跡はG1aを中心確認され、第4号住居跡の南西側約4m、第6号住居跡の北西側約3mに位置している。西側部は調査区域外へ伸びている。

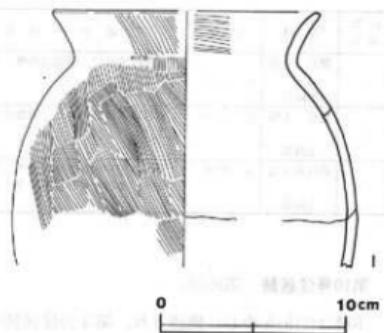
平面形は3.60m×( )mの隅丸方形を呈するものと考えられ、主軸方向はN-26°-Wを指している。壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は南壁13cm、北壁21cmである。東コーナー部付近は擾乱を受け立ち上がりは不明瞭である。床面は擾乱のため東コーナー部付近にやや凹凸が見られるが、ほぼ平坦でやわらかである。南東壁の中央部から北に向かって幅約50cm・長さ約1m範囲は堅く踏み固められており、出入口部と思われる。ピットは検出出来なかった。住居跡中央部か



第99図 第10号住居跡実測図

ら約50cm東寄りに炉跡が検出され、平面形は長径53cm・短径47cmの橢円形を呈し、床を12cmほど皿状に掘り込んでいる。焼土量は少なく炉床もあまり焼けていない。覆土は、ロームブロックを多量に含む暗褐色土が主であり、人為的に埋め戻されたものと思われる。

遺物は少なく、東コーナー部付近の床面から土師器の變形土器（第100図-1）が出土している。



第100図 第10号住居跡出土遺物実測図

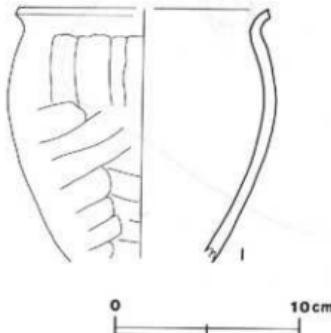
出土土器観察表（第100図）

団体 番号	器種	法 類	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	施土-焼成-色調	備 考
1	變形 土器 土師器	A (14.2)	丸く張った胴部から口縁部は「く」の字 状に聞く。	口縁部内・外面一ハケ目 胴部外面一ハケ目 内面一ハラナデ	砂粒 普通 によい橙色	20%

第11号住居跡（第83図）

本跡はG1g<sub>8</sub>を中心に確認され、第4号住居跡の東側約10m、第8号住居跡の北側約9mに位置している。第5・12号住居跡と重複しているが、本跡は第12号住居跡の上に構築され、第5号住居跡に切られていることから、第12号住居跡より新しく第5号住居跡より古いものと思われる。

平面形は長軸4.65m・短軸4.25mの方形を呈し、長軸方向はN-7.5°-Eを指している。壁は外傾して立ち上がり、壁高は約15cmである。床は第5号住居跡とほぼ同じレベルで堅く、平坦である。ピットはP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>～P<sub>5</sub>の11か所検出されているが、第5・12号住居跡と重複のため、本跡に伴うものかどうか不明である。北西コーナー部に位置するピットは、長径105cm・短径80cm・深さ43cmの規模から、本跡の貯蔵穴かと思われる。北壁中央部には少量の焼土が認められ、カマドを有していたと思われる。覆土は、耕作による搅乱を受けて



第101図 第11号住居跡出土遺物実測図

おり、ロームブロックを含む黒褐色土やローム粒子を多量に含む褐色土が混じり合っている。遺物は少なく、土師器の變形土器(第101図-1)や壺形土器片が貯蔵穴の東側から出土している。

出土土器観察表 (第101図)

調査番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	地土・地盤色調	備考
1	變形土器 上器 上部	A (13.6)	瓶部上位が張り、口縁部は短く外反し、腹部に面をなす。	口縁部内・外面一様ナガ 剥削外表面は概ね、中・下位は剥離のへき剝離 底部内面一ナガ	砂粒 普通 明赤褐色	20%

第12号住居跡 (第83図)

本跡はG1gを中心に確認され、第4号住居跡の東側約10m、第8号住居跡の北側約9mに位置している。第5・11号住居跡と重複しており、本跡の上に第5・11号住居跡が構築されていることから、本跡の方が最も古いと思われる。

平面形は長軸3.90m・短軸3.25mの長方形を呈し、長軸方向はN-12°-Wを指している。壁は外傾しているが、立ち上がりは悪く、壁高は約10cmである。床はやや凹凸があるが、全体によく踏み固められている。ピットはP<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>の6か所検出されているが、規則性がなく、第5・11号住居跡と重複しているため、本跡に伴うものかどうか不明である。炉跡もカマドも検出されていない。覆土は、全体に貼り床にされたローム土が堅く締まって堆積しており、板状にはがれる。

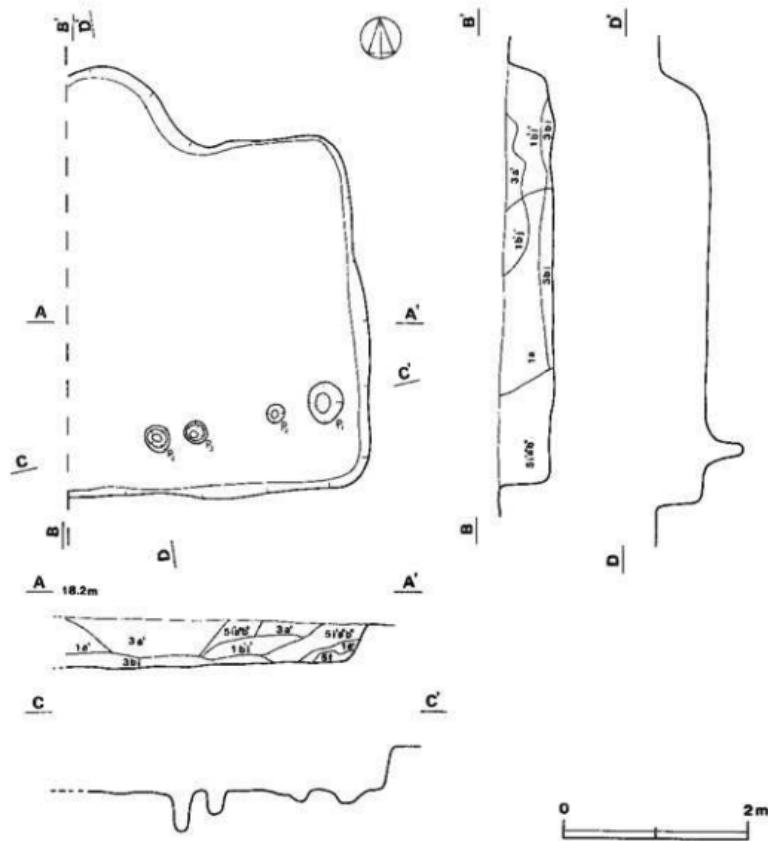
遺物は出土していない。

第13号住居跡 (第102図)

本跡はG1jを中心に確認され、第6号住居跡の西側約2mに位置している。西側部分は調査区城外へ延びている。

平面形は3.85m×( )mの隅丸方形を呈するものと思われ、主軸方向はN-0°を指している。壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は35～45cmである。床は平坦で堅く、カマドの前から南壁中央にかけての幅2mほどの範囲はよく踏み固められている。特に南壁中央のP<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>の周囲は2～3cm床面が盛り上がっていて堅く、出入口部かと思われる。ピットはP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の4か所検出されたが、いずれも南に片寄っており土柱穴ではないと思われる。カマドは北壁中央部に付設されているが、攪乱を受けて全く原形を残さず、床面に少量の焼土が堆積しているだけである。長さと幅は不明であるが、北壁を約100cm切り込んでいる。覆土は、ロームブロックや黒色土ブロックを多量に含む暗褐色土が複雑な層をなしており、埋めもどされたものと思われる。

遺物は土師器の變形土器、壺形土器が出土している。須恵器は壺形土器のほかに、南壁中央部付近の覆土からほぼ完形の變形土器(第103図-7)、カマドの東側の覆土から高盤形土器(第103図

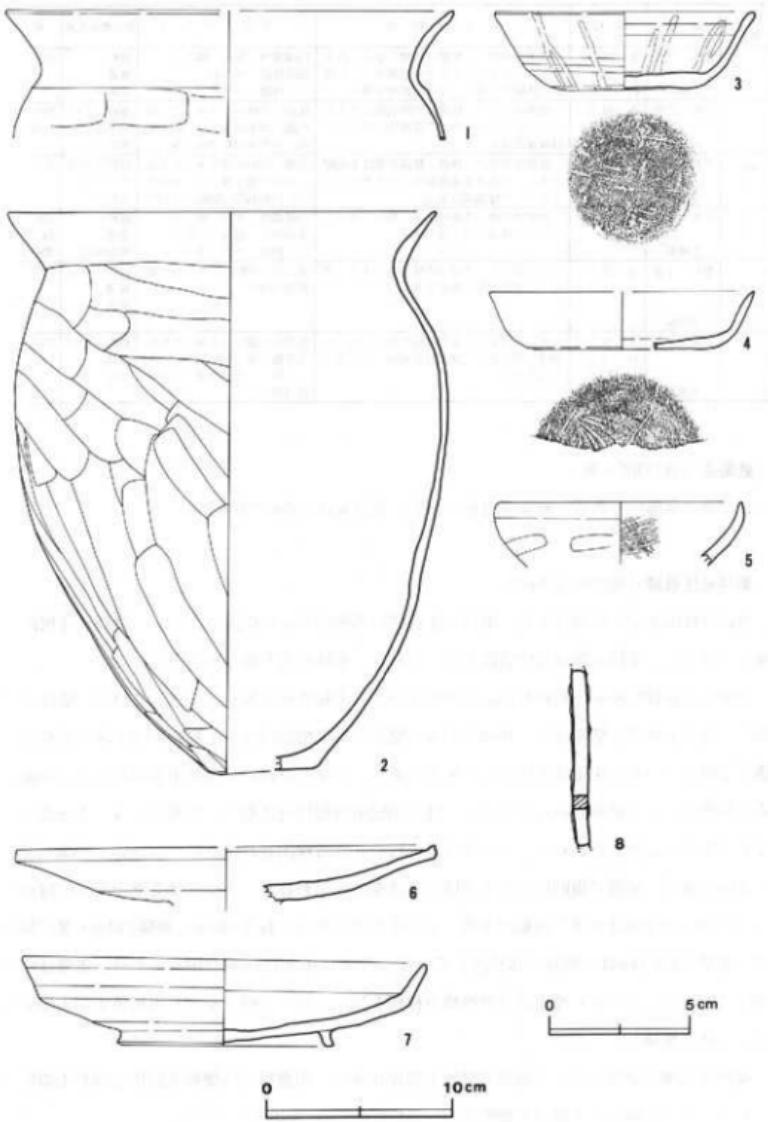


第102図 第13号住居跡実測図

- 6) が出土している。

出土土器観察表 (第103図)

区段番号	器種	法蓋	器形の特徴	手法の特徴	粘土-焼成色調	備考
1	壺形土器 土師器	A (24.0)	胴部は丸く張り、頭部はややくびれる。 口縁部は外反気味に外上方へ立ち上がる。	口頭部内・外面一様ナゲ 胴部外面一様なへう削り 内面一ナゲ	褐紅 普通 に赤い褐色	10%



第103図 第13号住居跡出土遺物実測図

段階番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	粘土成形色調	備考
2	彫形 土器	A 22.6 B 30.4	底部は平底で、肩部は内側しながら外上方へ立ち上がり、上せから内傾する。口縁部は直線的に開き、全体に器厚が薄い。	口縁部内・外面一様ナゲ 軸部外面へラ削り 内面・ヘラナゲ	砂粒 普通 赤褐色	85%
	土師器	C 6.2				
3	環形 土器	A (14.3) B 4.2	底部は平底で、全体は内側弧形に外上方へ立ち上がり。中位から直線的にのびる。口縁部は丸い。	底部一下持ちへラ削りで、切り離しは不明。水抜き痕は弱め。ロクロ回転方向は左。	砂粒・審味 やや不良 黄灰色	70% 火跡あり
	須恵器	C 8.4		底部一回転削り後、中位部に斜めに削り痕を残して、外周部は右回転利用の回転へラ削り	砂粒・繊維 やや不良 灰白色	30%
4	環形 上器	A (14.3) B 3.1	底部は平底で、全体は内側弧形に外上方へ立ち上がり。口縁部は丸い。	底部一回転削り後、中位部に斜めに削り痕を残して、外周部は右回転利用の回転へラ削り	砂粒・繊維 やや不良 灰白色	30%
	須恵器					
5	環形 上器	A 13.4	全体は内側しながら大きくなれて立ち上がり。口縁部は近く直立する。	口縁部内・外面一様ナゲ 軸部外面へラ削り 内面・ヘラミガキ	砂粒 普通 明赤褐色	40%
	土師器					
6	盤形 土器	A (22.5)	受け部のみ。全体は内側弧形に大きく開き、口縁部に面をなす。	盤下部一向転へラ削り後、脚部貼り付け。	砂粒・繊維 普通 灰褐色	30%
	須恵器					
7	高盤形土器	A 21.7 B 4.7 C 11.6 D 0.8	底部は丸底で、蓋台は近く外下方へのび、縁部は面をなす。全体は直線的に外上方へ立ち上がる。	底部切り離しは不明であるが、切り離し後右回転削りの回転へラ削り、内・外面の水抜き痕は弱い。	砂粒・繊維 普通 灰褐色	95%
	須恵器					

#### 鉄製品（第103図--8）

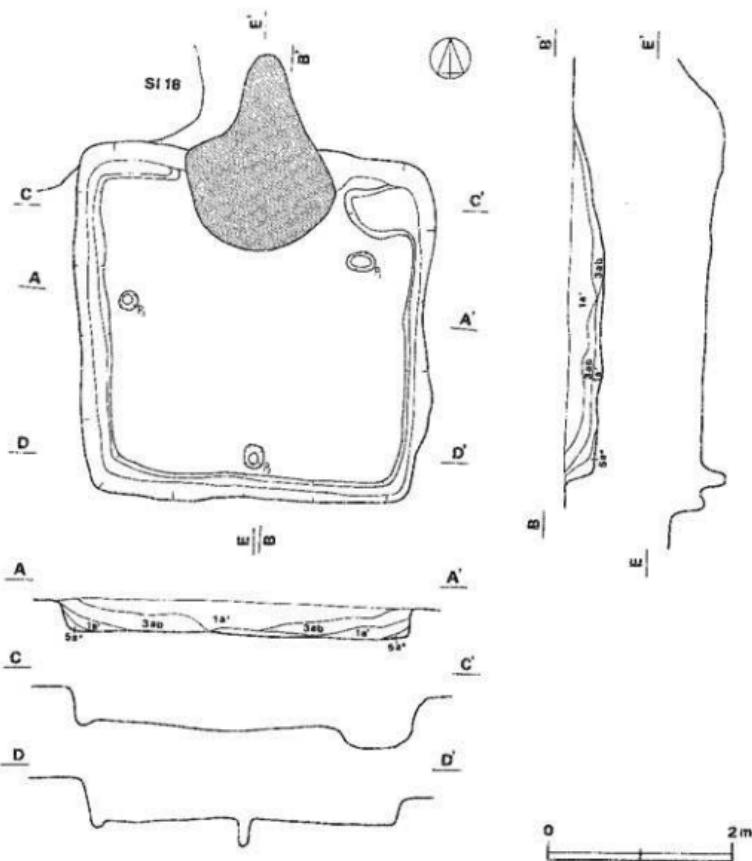
8は雄の茎部片である。断面は方形を呈し、現存長は6.2cmである。

#### 第14号住居跡（第104・105図）

本跡はH1fを中心確認され、第16号住居跡の西側約5mに位置している。第18号住居跡と重複しているが、本跡が第18号住居跡を切っており、本跡の方が新しいと思われる。

平面形は長軸3.80m・短軸3.75mの方形を呈し、主軸方向はN-0°を指している。壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は30~40cmである。壁下には上幅約15cm・下幅約10cm・深さ約6cmの縁溝が全周している。床面は全体として平坦であり、カマドの前から南壁中央部にかけての幅約1mの範囲は、よく踏み固められている。特に南壁中央部付近は堅く、周囲より3~4cm高くなってしまおり出入口部かと思われる。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>の3か所検出され、それぞれ径20~30cm・深さ20~30cmである。配置に規則性がなく主柱穴ではないと思われる。カマドは北壁中央部に付設されているが、天井部は崩落し両袖部が残っているだけである。長さ140cm・袖幅110cm・焚口幅53cmで、北壁を約100cmほど細長く切り込んでいる。火床は床を15cm掘り凹めており、奥壁はゆるやかに立ち上がっている。覆土は自然堆積の様相を呈し、ローム粒子を含む黒褐色土が大部分で、レンズ状に堆積している。

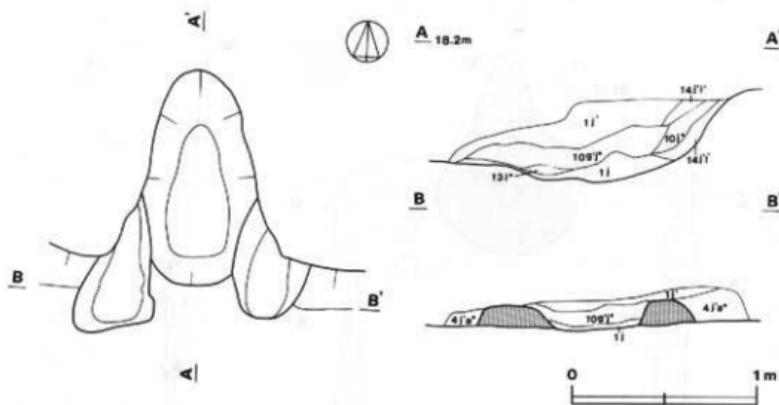
遺物は全体に少ないが、土師器の彫形土器片が多い。須恵器では彫形土器片と環形土器片がみられる。カマド内から土師器の彫形土器（第106図-3）が出土している。



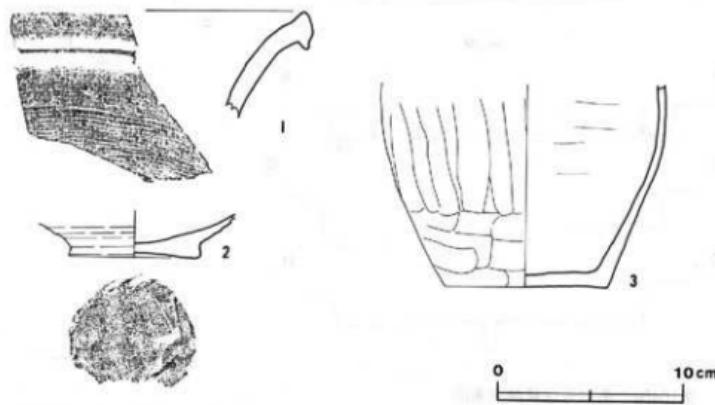
第104図 第14号住居跡実測図

出土土器観察表 (第106図)

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	着土焼成色異	備考
1	變形七唇 須恵器		口縁部は外反しをがら外上方へのび、口縁端部は外下方へ突出する。	口縁部外沿・横位のカキ目 内面・横ナゲ	砂粒・細砂 良好 灰褐色	内面マリーブ灰褐色の自然釉
2	環形上器 須恵器	D 7.0 E 6.5	底部は突出する平底で、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がる。	底部一方向の手持ちへラ削り て、切り離しは不明。体部 外側の水抜き痕はやや強い。	砂粒・細砂 不良 淡黄色	40% 硬化焼成
3	變形上器 上器	C 8.8	底部は平底で、頸部は内湾気味に外上方へ立ち上がる。	頸部外面中位・瓶底へラ削り 下位・横壁へラ削り 内面へラナゲ	砂粒 普通 にぶい褐色	40%



第105図 第14号住居跡カマド実測図



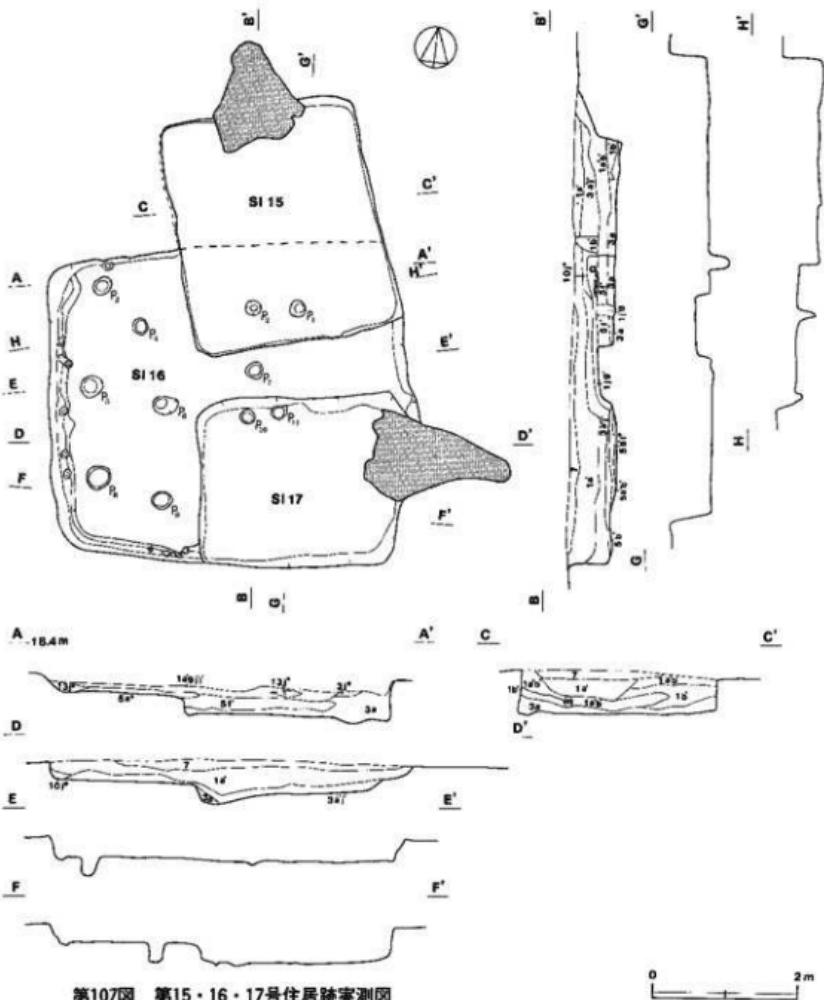
第106図 第14号住居跡出土遺物実測図

### 第15号住居跡（第107・108図）

本跡はH1e<sub>6</sub>を中心確認され、第19号住居跡の南側約3mに位置している。第16号住居跡と重複しており、本跡の床面の方が第16号住居跡より約20cm低く、重複する部分は厚さ10~15cmのロームを貼って第16号住居跡の床としていることから、第16号住居跡より本跡の方が古い。

平面形は長軸3.30m・短軸2.80mの長方形を呈し、主軸方向はN-21°-Wを指している。壁は垂直に立ち上がって、壁高は50~55cmである。床は平坦でよく踏み固められており、特にカマド

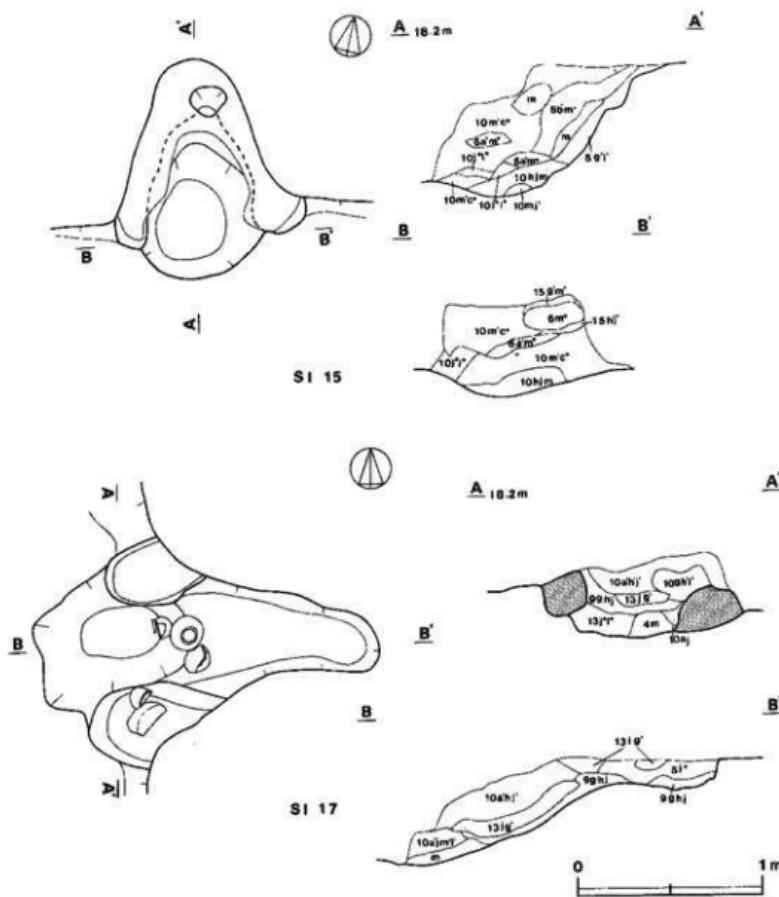
から南壁にかけて約1.5mの幅は堅く、ゴツゴツしている。ピットはP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の2か所検出されているが、P<sub>2</sub>は第16号住居跡に伴うもので、本跡に伴うものはP<sub>1</sub>だけである。P<sub>1</sub>は径23cm・深さ30cmで、周囲は床面が2~3cm高くよく踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設されているが、ほとんど崩壊している。長さ117cm・幅94cmで、北壁を約80cm切り込み、火床は床を9cm掘り凹めている。覆土はほぼ自然堆積の様相を呈し、黒褐色土が大部分で、最下層が暗褐色土であ



第107図 第15・16・17号住居跡実測図

三

遺物は少なく、カマド内から須恵器の杯形土器（第109図-1）が出土している。



### 第108図 第15・17号住居跡カマド実測図

出土土器観察表（第109図）

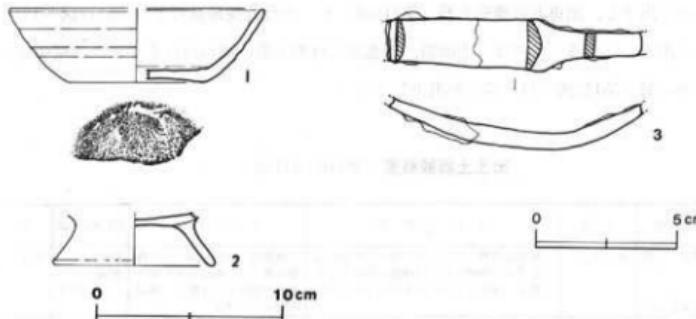
固版 番号	器 様	法 量	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	粒状-液状色調	備 考
1	球形 上唇 圓錐形	A (13.6) B 4.0 C (7.4)	底部は平底で、体部は内凹気味に外上方へ立ち上がる。	底部一回転系切り 手巻き側はやや弱い。	砂粒 不規 褐色	25%

### 第16号住居跡（第107図）

本跡はH1feを中心確認され、第14号住居跡の東側約5m、第21号住居跡の北側約4mに位置している。第15・17号住居跡と重複しており、本跡は第15号住居跡の上に構成され、第17号住居跡によって南東部が切られていることから、第15号住居跡より新しく第17号住居跡より古いと思われる。

平面形は長軸4.90m・短軸4.40mの隅丸方形を呈し、長軸方向はN-82°Eを指している。壁は外傾して立ち上がり、壁高は30-35cmである。床は全体に平坦でそれほど堅くない。第15号住居跡の床面が本跡より約20cm低いため、第15号住居跡と重複する部分は、厚さ10-15cmのロームで貼り床をしている。西壁下と南壁下には上幅約22cm・下幅約13cm・深さ約6cmの壁溝が開け、北壁下には検出されなかった。溝内には径約10cm・深さ10-14cmのビットが15-30cmの間隔で多数認められ、壁柱穴と思われる。ビットはP<sub>2</sub>~P<sub>3</sub>の8か所検出され、いずれも径20-30cmで、深さはP<sub>2</sub>の8cmを除いて22-28cmである。配置に規則性がなく主柱穴は不明である。P<sub>2</sub>は第15号住居跡の床面まで達している。第17号住居跡と重複している部分には本跡のビットと思われるものは検出できなかった。北中央付近に焼土が認められたが、カマドの掘り込みは確認できなかった。覆土は自然堆積の状態を示しており、ローム粒子を含む黒褐色土、暗褐色土が主である。また、ほぼ床全体に炭化物と焼土が広がり、火災を受けていると推定される。

遺物は比較的少ないが、土師器の變形土器片が多い。東壁付近の覆土から高台付环形土器（第109図-2）、南西コーナー部付近の覆土から槍鉋（第109図-3）が出土している。



第109図 第15・16号住居跡出土遺物実測図

出土土器観察表（第109図）

図版番号	器種	法葉	器形の特徴	手法の特徴	粘土焼成色調	備考
2	高台付 环形土器 土師器	D 8.9	高台は外下方へのび、端部は丸い。 底部内面へク窓	高台は貼り付け 窓内・外面一様ナメ	砂粒 普通 褐色	35%

### 鉄製品 (第109図-3)

3は槍鉗で、両端部が欠損する。弓状に反り、断面は三角形を呈する。現存長は9.1cm・刀幅1.8cmである。

### 第17号住居跡 (第107・108図)

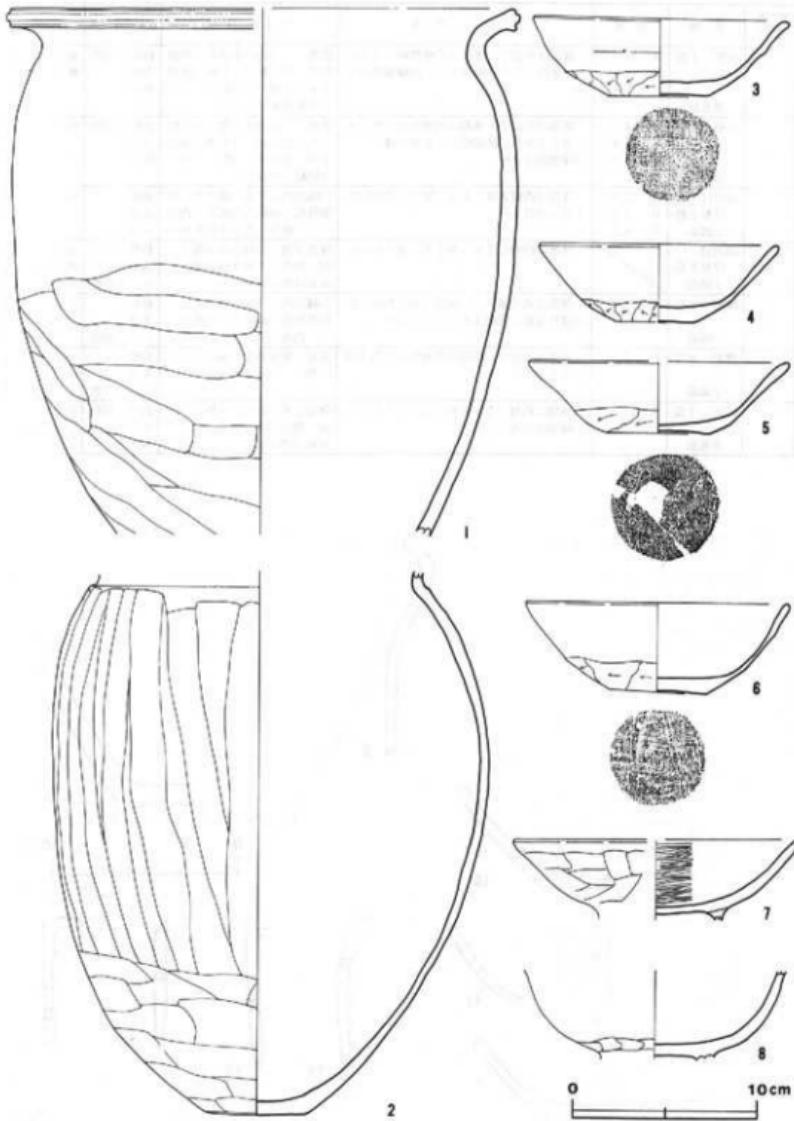
本跡はH1f<sub>6</sub>を中心確認され、第21号住居跡の北側約3m、第20号住居跡の西側約7mに位置している。第16号住居跡と重複しているが、本跡が第16号住居跡を切り込んでいることから、本跡の方が新しいと考えられる。

平面形は長軸2.70m・短軸2.30mの長方形を呈し、主軸方向はN-81°-Eを指している。壁はやや外傾して立ち上がる。壁高は西・北壁は重複のため不明であるが、東・南壁は50~55cmである。隙間を除いて床面の大部分が非常に堅くゴツゴツしている。ピットはR<sub>6</sub>・R<sub>1</sub>の2か所が検出され、いずれも径20cm・深さ約30cmであるが、北壁下に位置しており主柱穴とは考えられない。カマドは東壁中央部からやや北寄りに付設され、長さ183cm・幅114cm・焚口幅50cmで、東壁を約125cm細長く切り込んでいる。奥壁はゆるやかな傾斜で立ち上がり、火床は床を3cmほど掘り凹めている。覆土は自然堆積の状態を呈しており、大きく3層に分かれ、下から暗褐色土・黒褐色土・黒色土が堆積しており、中・下層はローム粒子や炭化粒子を含んでいる。床面には全体に焼土が広がり、柱状の炭化物が見られ、火災を受けていると推定される。

遺物の出土は多く、土器類の変形土器が南壁中央部付近床面（第111図-9）やカマド（第110図-2）から出土し、須恵器の変形土器（第110図-1）や台付長頸壺形土器（第111図-13）もカマド内から出土している。そのほか上師器、須恵器の环形土器や高台付环形土器、南壁中央部付近の覆土から釘（第111図-14~17）が出土している。

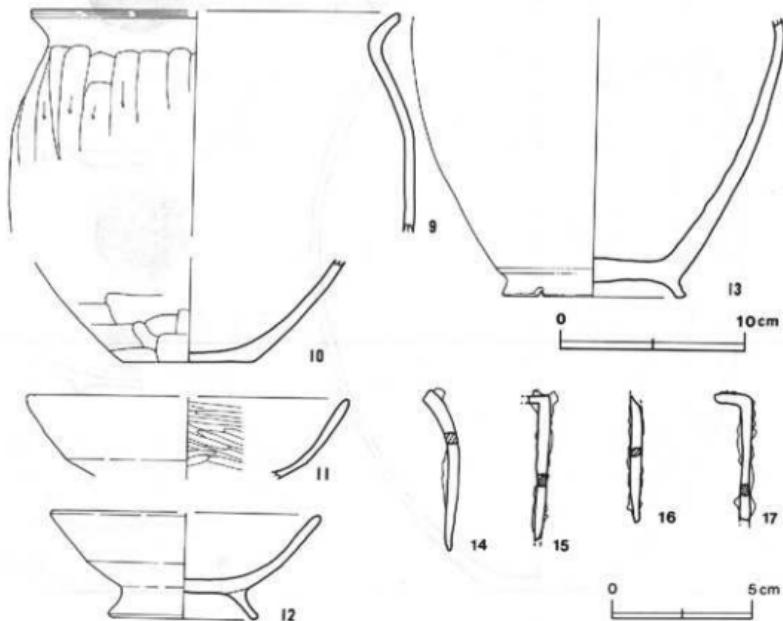
出土土器観察表 (第110・111図)

図版番号	器種	法規	器形の特徴	手法の特徴	地土成色	備考
1	変形土器 須恵器	A (26.2)	体部は内壁しながら上方へ立ち上がり、上段で少し内傾する。口縁部は外反しながら開き、端部は上方へつまみ出されている。	1) 頭部内・外面一括手テ 体部外面上半-縫合の平行叩き 2) 横側のヘラ削り 体部内面-ヘラナデ	砂粒 普通 にぼい褐色	40%
		C 6.0	底部は平底で、周縁部は内壁しながら外上方へ立ち上がり、上位から内傾する。	頭部外面上・中位-縫合のヘラ削り 下位-縫合のヘラ削り 脚部内面-ヘラナデ	砂粒・細粒 普通 褐色	35%
3	環形土器 須恵器	A 13.8 B 4.2 C 5.4	底部は平底で、体部は内壁気味に外上方へ立ち上がる。口縁部はわずかに外反し、端部は丸い。	底部-一方の手持ちヘラ削りで、切り離しは不明 体部下半-手持ちヘラ削り クロ回転方向は右	砂粒・粗粒 不良 にぼい褐色	80% 酸化焼成
		A 12.8 B 4.2 C 4.3	底部は平底で、体部は内壁気味に外上方へ立ち上がり、体部中位は沿厚が薄い。口縁部は丸い。	底部-不定方向のナデで、切り離しは不明 体部下端-手持ちヘラ削り	砂粒・粗粒 不良 浅黄色	95% 酸化焼成 次焼成



第110図 第17号住居跡出土遺物実測図 (1)

図版 番号	器種	法量	器形の特徴	手の特徴	胎土焼成色調	備考
5	環形土器 須恵器	A 14.2 B 3.85 C 5.6	底部は平底で、体部は内縁気味に立ち上がり中位からやや外反する。口縁端部は丸い。	底部一方向の手持ちヘラ削りで、切り離しは不明。体部下半一手持ちヘラ削り ロクロ回転方向は右	砂粒・細砂 不良 黒褐色	40% 被化相焼成
6	環形土器 須恵器	A 14.3 B 4.8 C 5.3	底部は平底で、体部は内縁気味に外上方へ立ち上がり、体部中位は器厚が薄い。口縁端部は丸い。	底部一方向の手持ちヘラ削りで、切り離しは不明。体部下半一手持ちヘラ削り ロクロ回転方向は右	砂粒・細砂 不良 灰色	60%
7	高台付 環形土器 土師器	A 15.8 B 4.3 D 6.5	体部は内縁気味に大きく開き、高台は下方へのびる。	口縁部内・外面一横ナダ 体部外面一回転ヘラ削り 内面一ヘラ磨き 高台は貼り付け	砂粒 普通 灰赤色	50%
8	高台付 環形土器 土師器		体部は内縁しながら外上方へ立ち上がる。	体部下端一手持ちヘラ削り 内・外の水洗き痕は弱い 高台は貼り付け	砂粒 普通 内面黒色処理 におい黄褐色	35%
9	變形土器 土師器	A (19.8)	側部は丸く張り、口縁部は短く外反する。口縁端部に凹面をめぐらしている。	口縁部内・外面一横ナダ 側部外面一綫位のヘラ削り 内面一ナダ	砂粒 普通 におい褐色	20%
10	變形土器 土師器	C (7.2)	底部は平底で、胴部は内縁気味に外上方へ立ち上がる。	底部・側部外面一横位のヘラ削り 内面一ナダ	砂粒 普通 におい橙色	10%
11	環形土器 須恵器	A (17.2)	体部は内縁しながら外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸い。	体部下半一回転ヘラ削り。内面一横位のヘラ磨き。ロクロ回転方向は右。	砂粒・細粒 やや不良 黄褐色	20% 二次焼成



第111図 第17号住居跡出土遺物実測図 (2) (著者撮影・出典: 熊谷良輔著「古墳時代の日本」(1976年))

開版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	施士・焼成色調	備考
12	高台付 環形土器	A 14.5 B 15.8 D 7.7	体部は内壁気味に外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸い。高台は外下方へのび、端部に面をなす。	底部から体部下平にかけて回転ヘラ削り抜き高台割り付け 底部切り離しは不規 ロクロ 回転方向は右	砂炒・細砂 不良 難化焼成 にない黄色	50% 二次焼成
	埴型器					
13	台付長颈瓶 形土器 埴型器	D 9.5 E 0.9	体部は内壁しながら外上方へ立ち上がる。 高台は外下方へのびる。	体部外側・下端一回転ヘラ削り。 高台は貼り付け 内・外 面の水洗き痕は弱い	細砂・粗砂 普通 にない黄色	45% 二次焼成

#### 鉄製品 (第111図--14~17)

14~17はいずれも釘で、断面形は方形を呈する。

14はゆるく曲がっており、頭部を欠損する。現存長は5.6cmである。

16は上部を欠損し、現存長は4.5cmである。

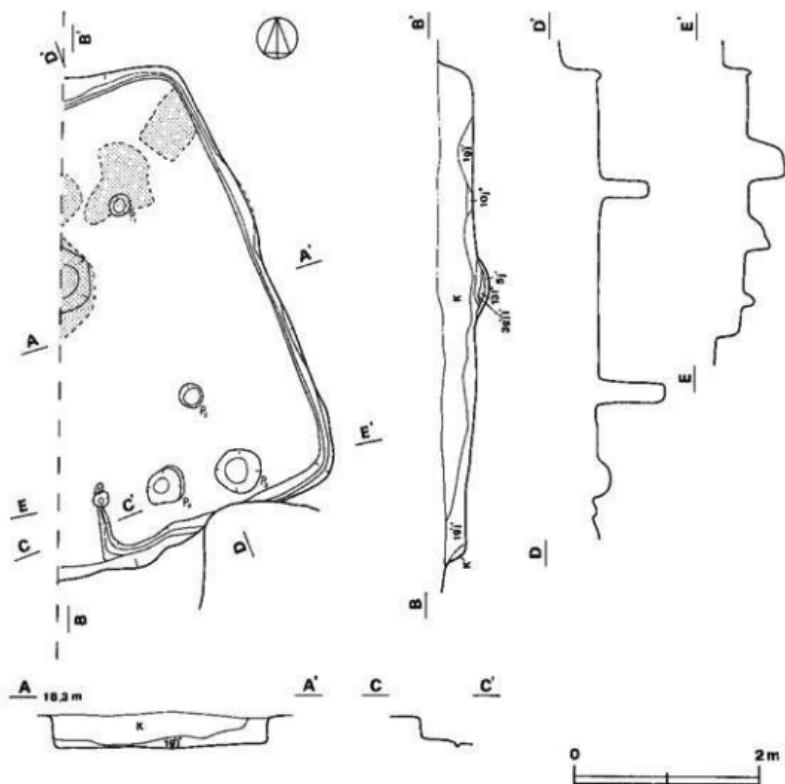
15・17は先端部を欠損し、頭部が屈曲する。現存長は15が4.5cm、17が5.2cmである。

#### 第18号住居跡 (第112図)

本跡はH1eaを中心に確認され、第19号住居跡の南西側約9mに位置している。第14号住居跡と重複しており、第14号住居跡が本跡の南壁を切っていることから、本跡は第14号住居跡より古いと考えられる。本跡の西侧部分は調査区域外へ延びている。

平面形は方形を呈するものと思われ、東壁の長さは4.95mであり、長軸方向はN-23°-Wを指している。南・北・東壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は東で約26cm・北で36cm・南で30cmである。壁下には壁溝が検出され、おそらく全周していとと思われる。上幅13cm・下幅6cm・深さ約5cmであるが、東壁中央部約1mは上幅・下幅とも5cmほど広くなっている。床は全体に平坦で凹凸は少なく堅い。南壁の中央部から住居跡内に向かって、壁溝と同規模の溝が約80cm延びており、その先端に径15cm・深さ14cmのP<sub>3</sub>があり、開仕切りの溝かと思われる。この溝の西側の幅約50cm、長さ約70cmの範囲の床は周囲より約4cm前後高くよく踏み固められており、出入口部かと思われる。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>の5か所検出され、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>はいずれも径25cm・深さ50~76cmでしっかりしており、配設から主柱穴と思われる。P<sub>3</sub>は平面形が径約50cmの円形を呈し、深さが46cmで塊状に掘り込まれており、貯蔵穴かと思われる。住居跡中央部のやや北寄りに炉跡が検出されたが、西側半分は調査区域外にかかっている。平面形は径約60cmの円形で、床面を15cmほど掘り込んでいる。焼土量が多くよく使用したと思われ、炉床は焼けてブロック状を呈している。覆土は大きく2層に分かれ、上層はロームブロックを多量に含む擾乱で、下層は焼土粒子・炭化物を含む黒褐色土で自然堆積の状態を呈している。床面には焼土の広がりや柱状の炭化材も見られ、火災を受けていると思われる。

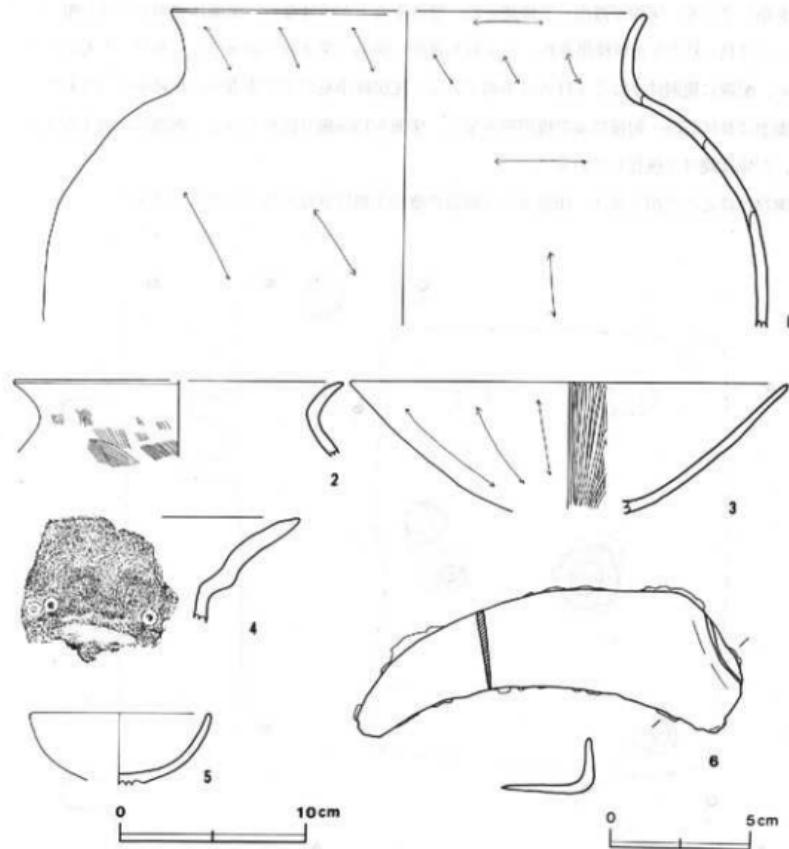
遺物は、土師器の變形土器や环形土器が出土し、東コーナー付近の床面から錫 (第113図-6) が出土している。



第112図 第18号住居跡実測図

出土土器観察表（第113）

図版番号	器種	法號	器形の特徴	手法の特徴	出土地點・色調	備考
1	變形七唇 土師器	A (25.6)	口縁部は外反しながら立ち上がり、脚部は球形を呈するものと思われる。全体に器厚は薄い。	口縁部内・外面と脚部外面 丁寧な斜位のナデ 脚部内面一ハラナデ	砂粒 普通 褐色	20%
2	變形上唇 土師器	A (17.8)	口縁部「く」の字状に向く。	L1横的内・外面一横ナデ 脚部外面一ハケ日 内面一ナデ	砂粒 普通 淡褐色	10%
3	高环形土器 土師器	A 23.7	体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり、そのまま口縁部へ至る。	环部内・外面 丁寧な極位の ヘラ磨き	砂粒 普通 褐色	40%
4	變形上唇 土師器		口縁部片。有段口縁をなす。	外縁一横ナデ後L1横底にハ ケ日 距離下に2個1単位の 円形刺突文 内面一ヘラ磨き	砂粒 普通 に赤褐色	5%
5	高环形土器 土師器	A 9.7	環部は半球状を呈する。脚部を欠損する。	环部内・外面一丁寧なナデ	砂粒 普通 明褐色	40%



第113図 第18号住居跡出土遺物実測図

#### 鉄製品（第113図-6）

6は鎌で完存品である。基部上半を折り曲げている。長さは13.7cmである。

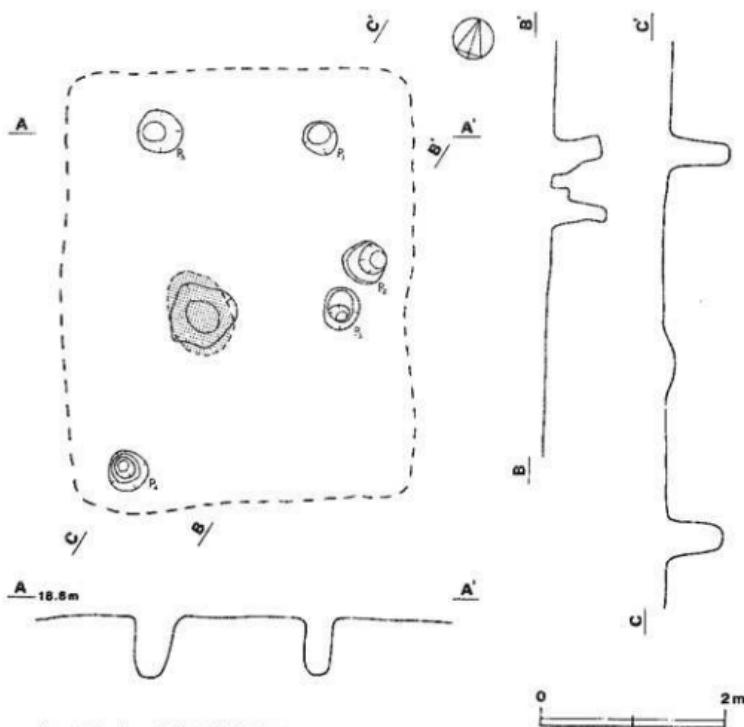
#### 第19号住居跡（第114図）

本跡はH1deを中心確認され、第9号住居跡の南西側約7m、第15号住居跡の北側約4mに位置している。

平面形は長軸約4.60m・短軸約3.60mの長方形を呈するものと思われる。長軸方向はN-20°-

Wを指している。床面が露出して確認され、壁の立ち上がりはない。床面は平坦で全体に堅い。ピットはP<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>の5か所検出され、いずれも径40～50cm・深さ56～69cmでしっかりしたものであるが、配置に規則性がなく主柱穴は不明である。住居跡中央のやや南寄りにがれ跡が確認された。平面形は長径85cm・短径75cmの橢円形を呈し、床面を15cm掘り開めている。内部には焼土が充満し、炉床は焼けて硬化している。

遺物はほとんど出土せず、床面から土師器の變形土器片9片が出土しただけである。

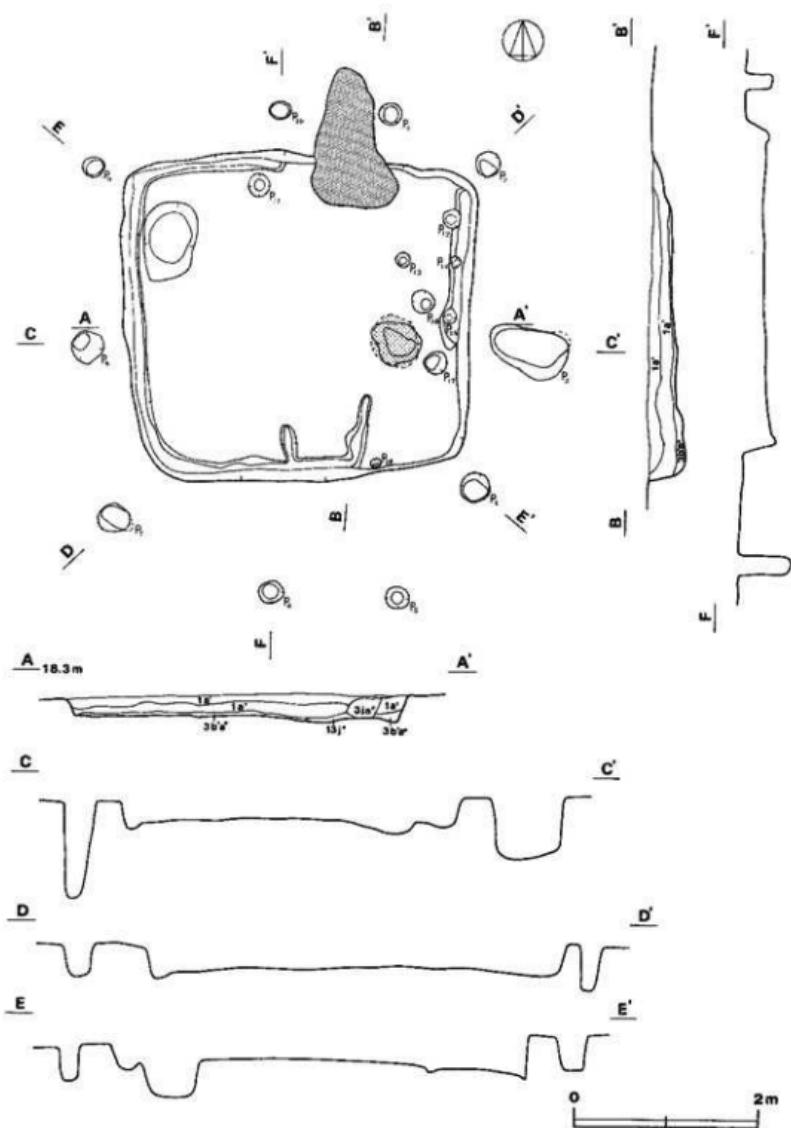


第114図 第19号住居跡実測図

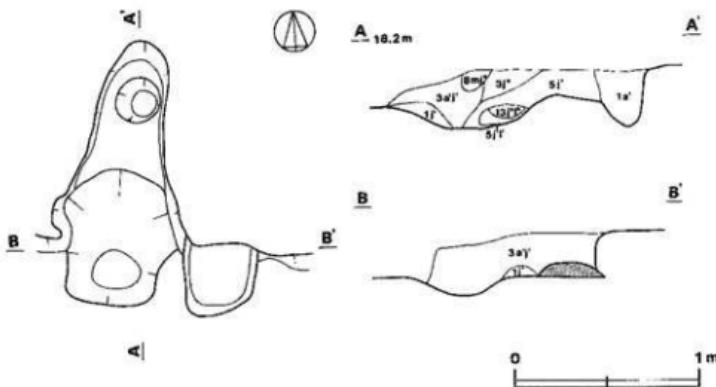
#### 第20号住居跡（第115・116図）

本跡はH1fをを中心に確認され、第17号住居跡の東側約7mに位置している。

平面形は長軸3.75m・短軸3.60mのはば方形を呈し、主軸方向はN—0°を指している。壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は25～35cmである。南東コーナー部付近と、北壁のカマドから北東



第115図 第20号住居跡実測図



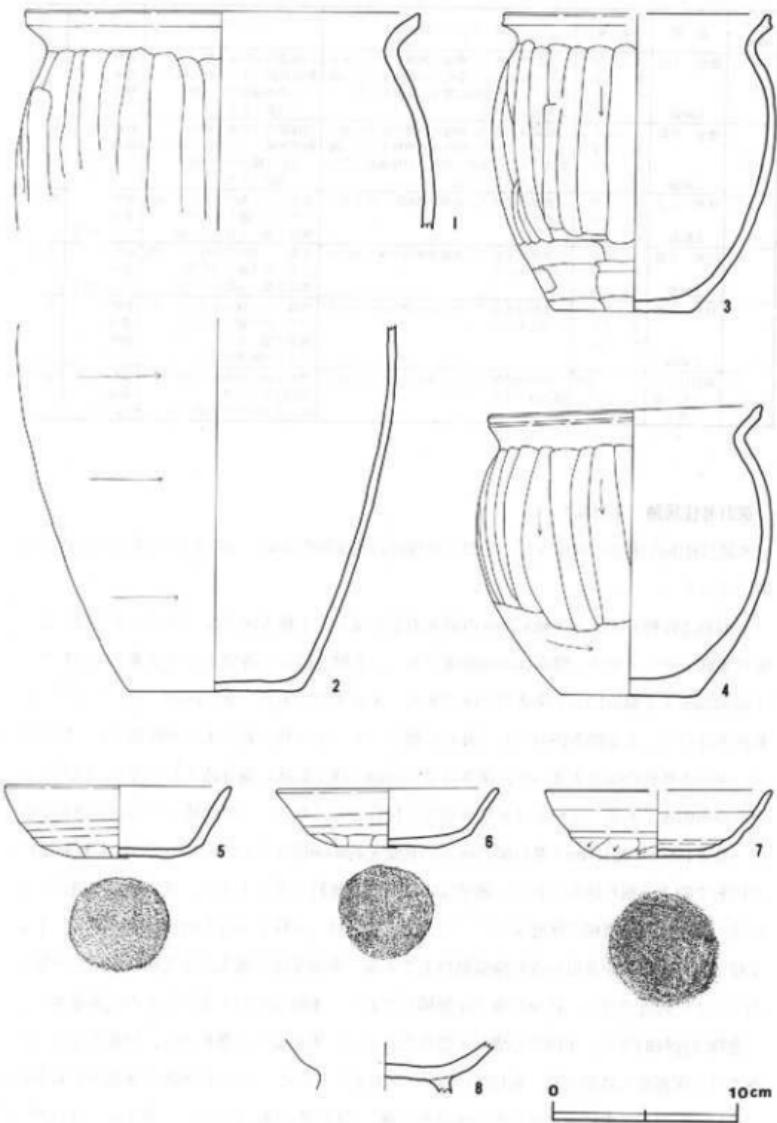
第116図 第20号住跡カマド実測図

コーナーにかけての壁下を除いて壁溝が周回しており、上幅約20cm・下幅約13cm・深さ約5cmである。床は全体によく踏み固められて堅く、住居跡中央部は周辺より床面が約5cm高くなっている。ピットは住居外にR<sub>1</sub>～R<sub>6</sub>の10か所、住居内にP<sub>11</sub>～P<sub>16</sub>の8か所検出された。P<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>は主軸に対称に配置されており、P<sub>5</sub>を除いて径30cm前後である。深さは33～107cmと差があるが、左右対応するピットの深さはほぼ同じであることから、上屋を支えるものと思われる。壁下のP<sub>11</sub>・P<sub>12</sub>・P<sub>13</sub>は竈柱穴かと考えられる。本跡はカマドと炉を有している。カマドは北壁中央部約0.5m東寄りに付設されており、天井部ではなく、袖部もわずかに残っているだけである。推定で長さ145cm、幅140cmで、北壁を細長く110cm切り込み、火床は床を13cmほど掘り凹めている。炉跡は東壁寄りに位置し、平面形は長径57cm・短径47cmの橢円形を呈している。炉床は床を8cmほど掘り凹め、堅く焼き締まっており、内部にはブロック状の焼土が充満している。覆土は自然堆積の状態を呈しており、ローム粒子を含む黒褐色土が主である。

遺物は土師器の壺形土器が、カマド内（第117図-1）や炉跡南側の床面（第117図-4）から出土し、完形の壺形土器（第117図-6）が南壁中央部付近の床面から出土している。

出土土器観察表（第117図）

図版番号	器種	法重	器形の特徴	手法の特徴	粘土種別色系	備考
1	壺形土器 土師器	A (21.2)	腹部は丸く盛る。口縁部は「く」の字状に削き、外端部に面をなす。	1. 球部内・外面一括ナグ 2. 剣部外面 剣位のヘラ削り 3. 内面一ナグ	砂粒 普通 棕色	20%
2	壺形土器 土師器	C 9.1	底部は平底で、胴部は内厚しながら立ち上がり、長頸を呈する。	1. 剣部外面 横位のヘラ削り 2. 内面一ナグ	砂粒・小塊 普通 棕色	40%



第117図 第20号住居跡出土遺物実測図

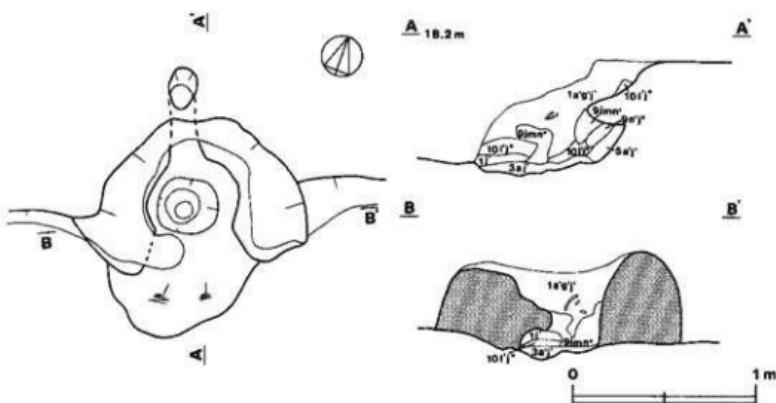
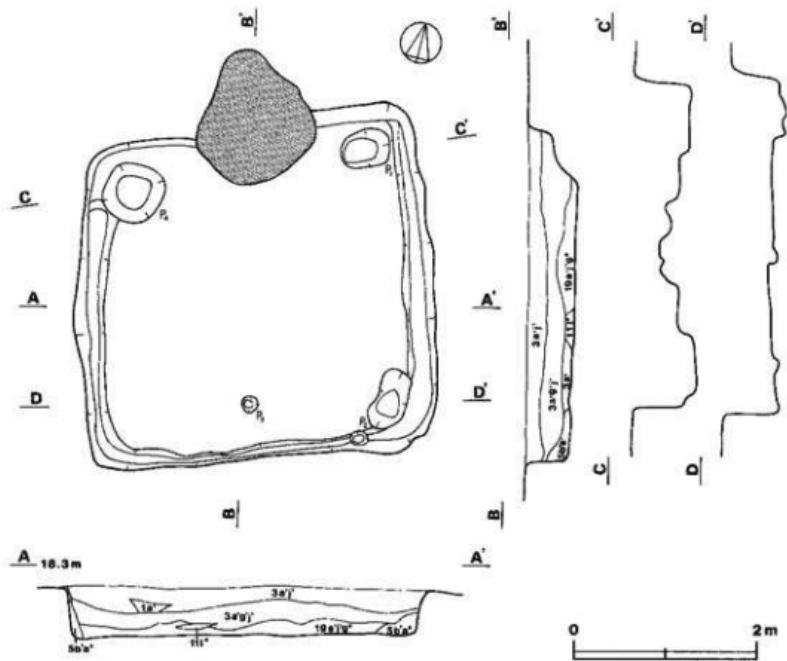
図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	粘土-焼成色度	備考
3	變形土器 土師器	A (14.4) B 16.2 C 7.5	底部は平底で、腹部は内側しながら外上方へ立ち上がり、中段から内傾する。口縁部は「く」の字状に開き、腹部を上方につまみ出している。	17縦部内・外面横ナガ 側部外面-上・中位は瓶位 下位は横位のヘラ削り 内面-ナゲ	砂粒 普通 褐色	50%
4	變形土器 土師器	A 15.0 B 15.4 C 7.4	底部は平底で、腹部は内側しながら外上方へ立ち上がり、中段から内傾する。口縁部は「く」の字状に開き、「U」溝部を上方につまみ出している。	11縦部内・外面横ナゲ 側部外面-上・中位は瓶位 下位は横位のヘラ削り 内面-ナゲ	砂粒 普通 に赤い褐色	50%
5	环形土器 土師器	A 12.3 B 3.9 C 5.0	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	底部一方向の手持ちヘラ削りで、切り離しは不明 体部下端-手持ちヘラ削り	砂粒 普通 に赤い褐色	80%
6	环形土器 土師器	A 12.0 B 3.15 C 5.4	底部は平底で、体部は外反気味に外上方へ立ち上がる。	底部一方向の手持ちヘラ削りで、切り離しは不明 体部下端-手持ちヘラ削り	砂粒 普通 に赤い褐色	100%
7	环形土器 土師器	A (12.4) B 3.7 C 6.0	底部は平底で、体部は内側気味に外上方へ立ち上がる。	底部一方向の手持ちヘラ削りで、切り離しは不明 体部下端-手持ちヘラ削り ロクロ回転方向は右	砂粒多 普通 褐色	50%
8	高台付 16形土器 土師器		体部は内側しながら外上方へ立ち上がり、高台は外下方へのびる。	体部下端-円弧ヘラ削り 高台は取り付け 内・外面の水洗き痕は弱い	砂粒 普通 淡赤褐色	30%

## 第21号住居跡（第118図）

本跡はH1h<sub>0</sub>を中心に確認され、第22号住居跡の北東側約3m、第17号住居跡の南側約3mに位置している。

平面形は長軸3.90m・短軸3.70mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-17.5°-Wを指している。壁は垂直に立ち上がり、壁高は50cm前後である。北壁を除いた各壁下には壁溝が周回しており、上幅約23cm・下幅約12cm・深さ約8cmである。床は平出であり、東・西壁に沿った40~50cm幅の範囲を除いて、よく踏み固められて非常に堅い。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4か所検出され、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>はいずれも径約70cmと大きいが、深さは9~16cmと浅く皿状に掘り込まれており、柱穴であるかどうか不明確である。カマドは北壁中央部に付設されており、一部崩壊しているが遺存状態がよい。長さ138cm・幅128cm・焚口幅35cmで、北壁を約80cm切り込んでいる。火床は床を径約30cmの円形で約7cm掘り凹めており、奥壁はゆるやかな傾斜で立ち上がり、径15cmの煙道へと続いている。覆土は自然堆積の状態を示しており、上層はローム粒子を含む暗褐色土が上で、下層は焼上粒子・炭化粒子を多量に含む極暗褐色土である。床面全体に焼土や炭化物の広がりが見られ、南コーナー付近では5~10cmも焼土が堆積しており、本跡は火災を受けたものと推定される。

遺物は比較的多く、土師器の變形土器片が目立つ。須恵器では變形土器、環形土器のほか、北西寄りの床面から鉢形土器（第120図-10）が出土している。カマドの西側の床面から石製紡錘車（第120図-11）、東壁中央部付近の床面から錐（第120図-14）が出土し、覆土からは環形土器の底部片を利用した紡錘車（第120図-12・13）が出土している。



第118図 第21号住居跡・カマド実測図

出土土器観察表 (第119・120図)

図版番号	器種	法號	器形の特徴	手法の特徴	胎土焼成・色調	備考
1	鉢形 土器 須恵器	A (22.7) B 19.0 C 13.6	底部はやや盛り上がった平底で、体部は内厚気味に外上方へ立ち上がる。頸部はやくびれ、口縁部は近く外反する。縁部は外下方へ突出する。	口縁部内・外面一横ナギ 体部外面上・中位一横位の平行叩き 叩き下位一静止ヘラ削り 内面一ナギ	砂粒・細砂 普通 灰褐色	40%
2	變形 土器 須恵器	A 22.0	体部は丸く張り、口縁部は外反しながら開く。口縁端部は上下に広がり、画面三角形を呈する。	口縁部内・外面一横ナギ 体部外面上一横位の平行叩き 内面一ナギ	砂粒・細砂 良好 灰褐色	50%
3	變形 上器 土師器	A (21.4)	頸部は丸く張り、口縁部は「コ」の字状を呈す。	口縁部内・外面一横ナギ 頸部外面上一横位のヘラ削り 内面一ナギ	砂粒 普通 にない橙色	10%
4	變形 上器 土師器	A (13.2)	口縁部「コ」の字状を呈す。	口縁部内・外面一横ナギ 頸部外面上一横位のヘラ削り 内面一ナギ	砂粒 普通 暗赤褐色	10%
5	變形 土器 土師器	A (19.2)	口縁部「コ」の字状を呈す。	口縁部内・外面一横ナギ 頸部外面上一横位のヘラ削り 内面一ナギ	砂粒 普通 にない赤褐色	10%
6	變形 上器 土師器	A 11.2	頸部は丸く張り、口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面一横ナギ 頸部外面上半一横位、下ギヤー 斜位のヘラ削り 内面一ナギ	砂粒 普通 にない橙色	30%
7	环形 土器 須恵器	A 12.5 B 4.6 C 7.0	底部は平底で、体部は内厚気味に外上方へ立ち上がる。	底部一方向の手持ちヘラ削り で、切り離しは不明 体部 下ギヤー手持ちヘラ削り 口縁部から内面にかけて横ナギ	砂粒 普通 浅黄色	35%
8	环形 土器 須恵器	A (12.0) B 4.2 C (6.4)	底部はやや盛り上がった平底で、体部は外反気味に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸い。	底部一方向の手持ちヘラ削り で、切り離しは不明 体部 下ギヤー手持ちヘラ削り 口縁部から内面にかけて横ナギ	砂粒・細砂 良好 灰褐色	45%
9	變形 土器 須恵器	C 20.4	底部は平底で、体部は内厚気味に外上方へ立ち上がる。	体部外面上一斜位の平行叩き 下端一静止ヘラ削り 体部内面一厚底で調整不規則	砂粒・青砂 普通 褐灰色	20%
10	鉢形 土器 須恵器	A 26.5	体部はほとんど張らず、口縁部は近く外反する。口縁外端部に面をなす。	口縁部内・外面一横ナギ 体部外面上一横位の平行叩き 内面一ナギ	砂粒・細砂 普通 灰褐色	30%

石製品 (第120図-11)

11は紡錘車で完存品である。片面は平滑に、もう片面は丸味をもって研磨されている。長径5.1cm・短径4.9cm・厚さ1.5cm・孔径9mm・重さ52gで、石質は流紋岩である。

土製品 (第120図-12・13)

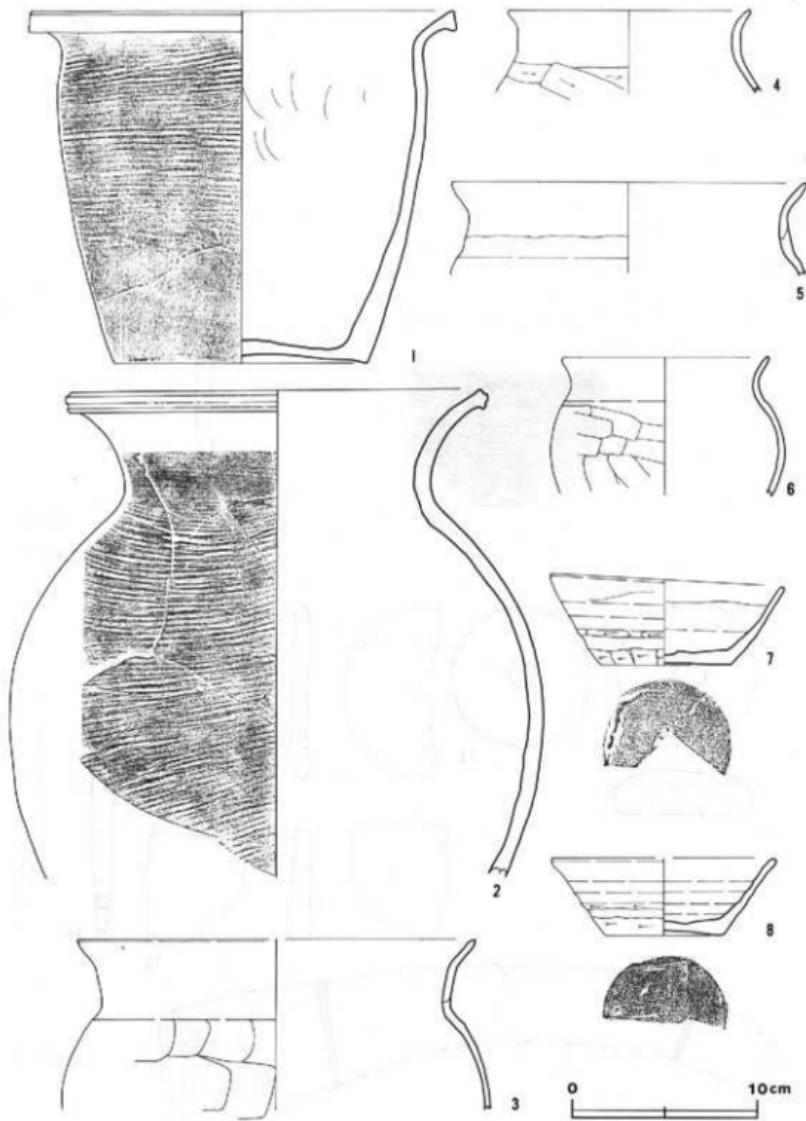
12・13は紡錘車で、須恵器の環形土器の底部を利用したもので、側面を研磨している。

12は推定で直径7cm・厚さ9mmで、13は推定で直径6.2cm・厚さ7mmである。

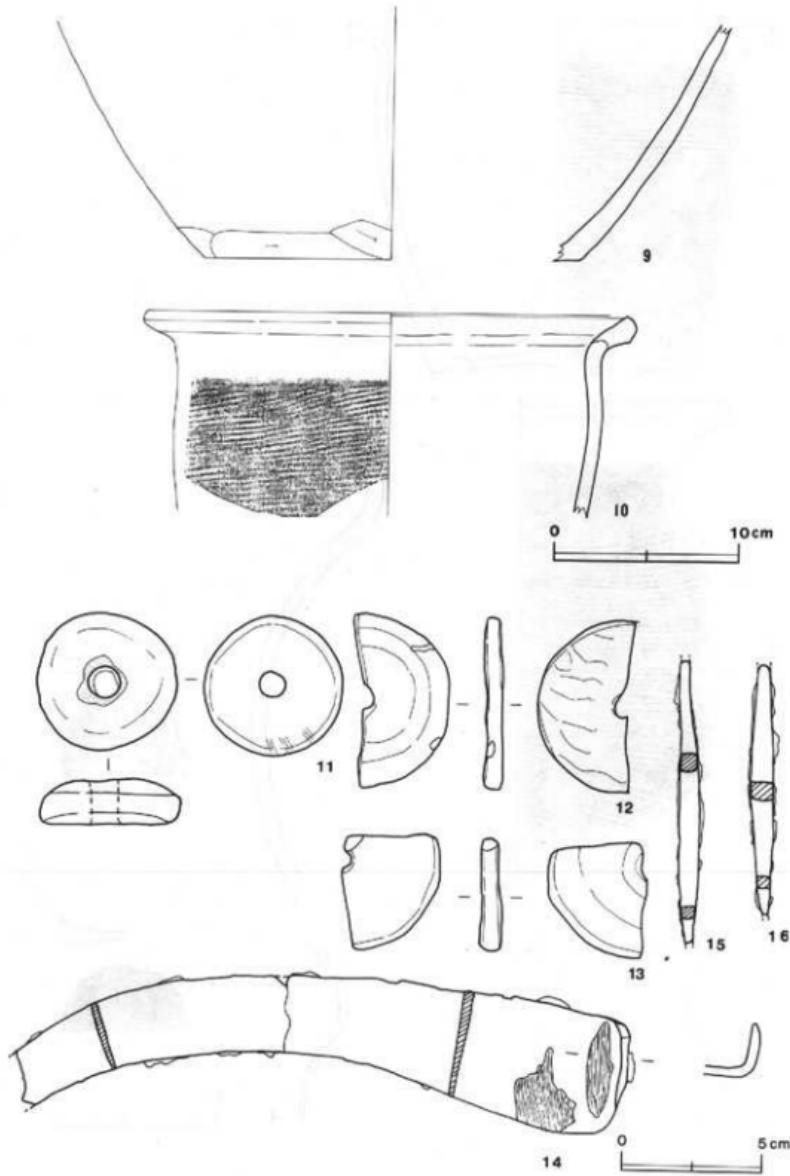
鉄製品 (第120図-14~16)

14は鍼で先端部を欠損する。基部上半を折り曲げてあり、基部には木質部が付着している。現存長は21.6cmである。

15・16は棒状の鉄製品で、両端を欠損しており用途は不明である。断面は方形を呈し、中央部が太く、現存長は15が10.1cm、16が8.9cmである。



第119図 第21号住居跡出土遺物実測図 (1)



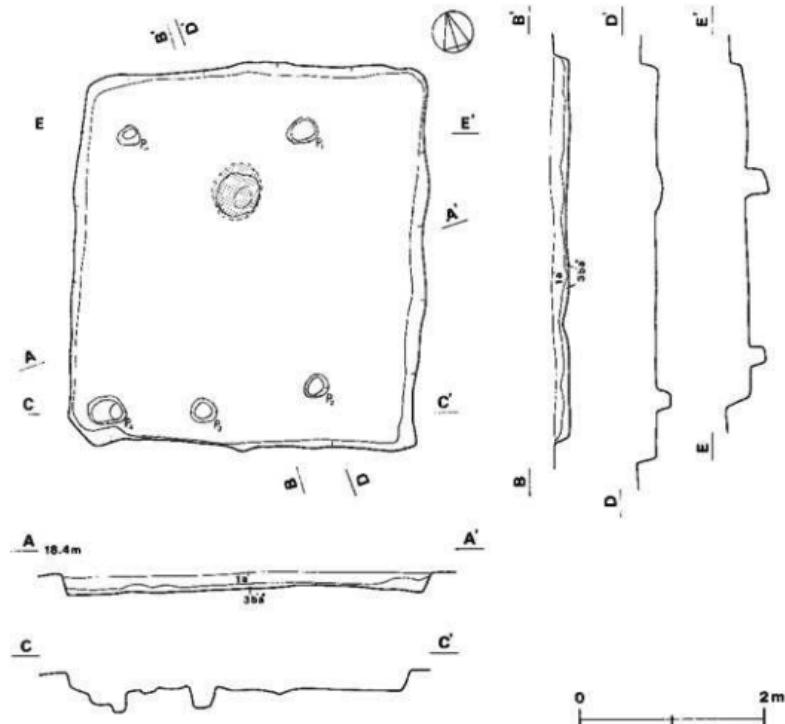
第120図 第21号住居跡出土遺物実測図 (2)

### 第22号住居跡（第121図）

本跡はH1hsを中心に確認され、第21号住居跡の南西側約3m、第14号住居跡の南側約5mに位置している。

平面形は長軸4.20m・短軸3.85mの長方形を呈し、長軸方向はN-20°-Eを指していざれの壁も外傾して立ち上がり、壁高は20~35cmである。床は南西壁近くにやや凹凸が見られるが、ほぼ平坦で軟弱である。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>の5か所検出され、いずれも径25cm前後で深さは21~28cmである。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>は方形に配され上柱穴と思われる。炉跡が住居跡中央部から約50cm北に検出され、平面形は長径50cm・短径43cmの楕円形を呈している。が床は床を8cmほど皿状に掘り凹めており、焼土の量は少なく、それほど焼けていない。覆土は自然堆積の状態を呈しており、2層に分かれ。上層は黒褐色土、下層は暗褐色土で、どちらも少量のローム粒子が含まれている。

遺物はほとんど出土せず、土師器の變形土器片が27点出土しただけである。

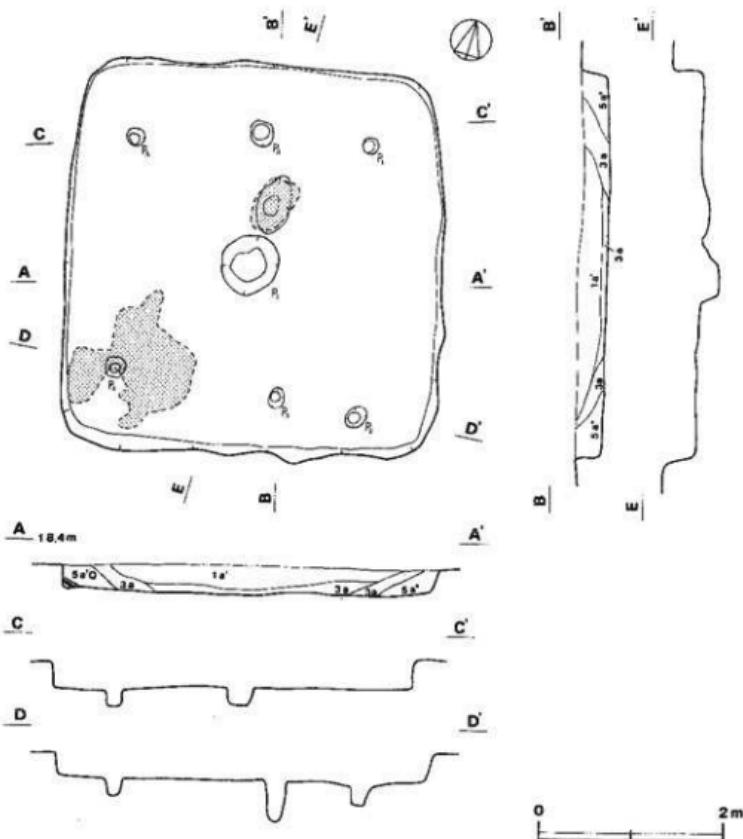


第121図 第22号住居跡実測図

第23号住居跡（第122図）

本跡は11d<sub>9</sub>を中心に確認され、第25号住居跡の東側約2m、第24号住居跡の西側約3mに位置している。

平面形は長軸4.25m・短軸4.10mの隅丸方形を呈しているが、南壁は北壁より約30cm長く、長軸方向はN-14°-Wを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は30cm前後である。床は全体に平坦で締まりがある。ピットはP<sub>1</sub>～P<sub>7</sub>の7か所検出されている。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>はいずれも径20～25cm・深さ21～29cmと同規模であり、ほぼ方形に配置されており、支柱穴と思われる。住居跡中央部にあるP<sub>7</sub>は径60cmの円形を呈し、深さ24cmで塊状に掘り込まれているが性格は不明で



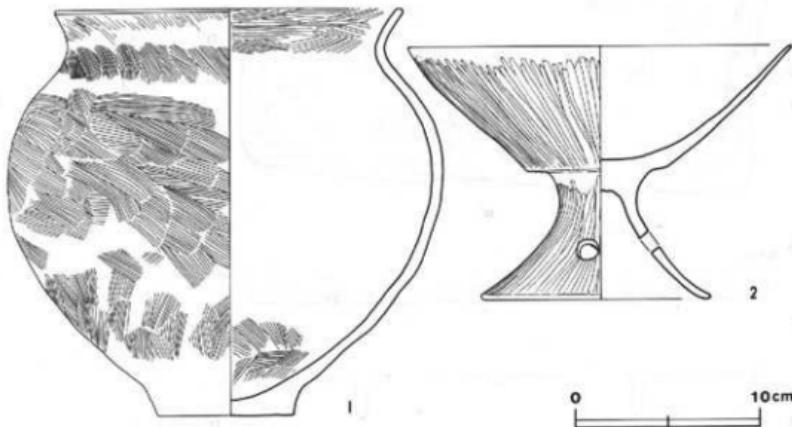
第122図 第23号住居跡実測図

ある。 $P_1$ のすぐ北側に炉跡が検出され、平面形は長径65cm・短径35cmの橢円形を呈している。炉床は床を10cmほど皿状に掘り凹めており、内部には焼土が堆積し、焼土ブロック粒子・炭化粒子が多い量に含まれている。覆土は自然堆積の状態を示し、上層は黒褐色土、下層は暗褐色土。壁下にはローム粒子を多量に含む褐色土が堆積している。南西コーナー部付近の床面には柱状の炭化材や焼土の広がりが見られ、火災を受けていると思われる。

遺物は少ないが、土師器の夔形土器（第123図-1）と高环形土器（第123図-2）が、南東コーナー部付近から完形で出土している。

出土土器観察表（第123図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	粒度・焼成色調	備考
1	夔形土器	A 18.9 B 22.0 C 7.3	底部は突出した平底で、胴部は内側しながら外上方へ立ち上がり、上位に最大径を有す。口縁部は外反気味に開く。	口縁部外面一ハケ目整形後横ナダ 内面一横位のハケ目 脚部外面一ハケ目 内面一ナダ	砂粒 普通 にぼい褐色	98% 外面全体に 焦が付着
	土師器					
2	高环形土器	A 20.0 B 13.6 D 12.0 E 6.9	环部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり、このまま口縁部へ至る。脚部はラッパ状に開き、中位に4孔を穿っている。	环部内・外面一船位のヘラ磨き 脚部外面一瓶位のヘラ磨き 内面一横ナダ	砂粒 普通 赤褐色	95%
	土師器					



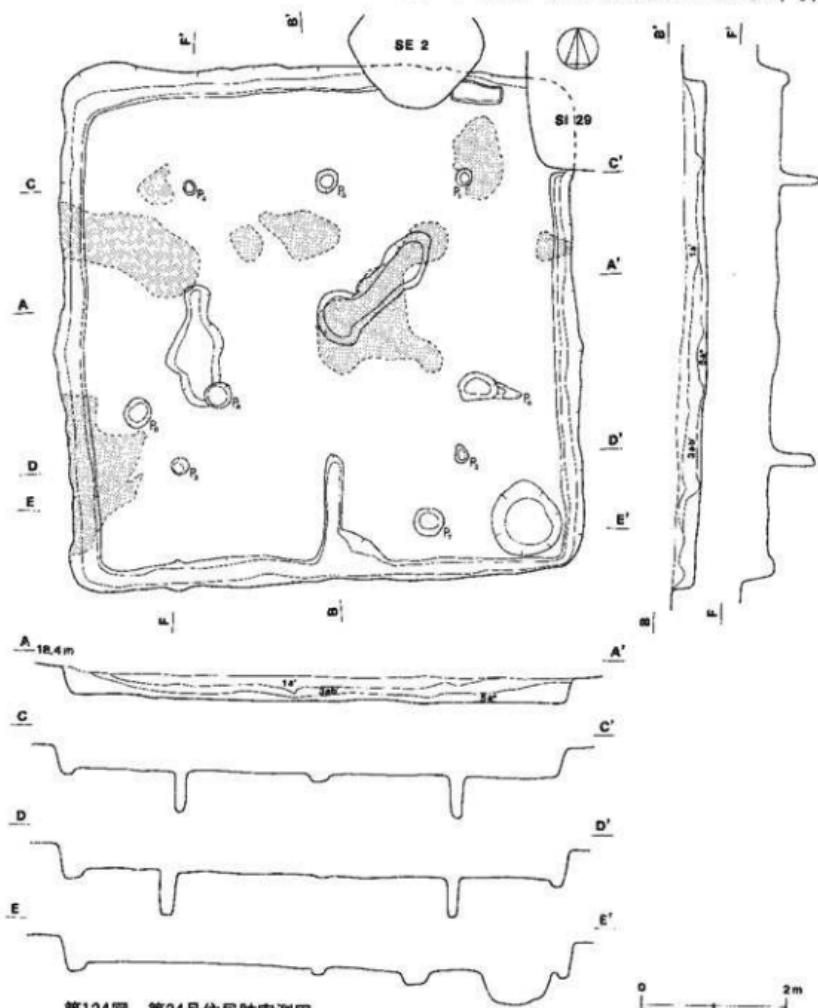
第123図 第23号住居跡出土遺物実測図

第24号住居跡（第124図）

本跡はI2e<sub>1</sub>を中心確認され、第23号住居跡の東側約3mに位置している。第1号溝・第2号井戸・第29号住居跡と重複しているが、いずれの造構も本跡を切っていることから、本跡が最

も古い遺構である。

平面形は長軸7.08m・短軸7.00mの方形を呈し、長軸方向はN-5°-Wを指している。いずれの壁もやや外傾して立ち上がり、壁高は35~40cmである。壁下には腰溝が全周しており、上幅25~30cm・下幅15~20cm・深さ9cmである。床は全体に平坦で堅く舗まっている。特に4本の主柱穴に囲まれた範囲がよく踏み固められている。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>9</sub>の9か所検出されているが、P<sub>1</sub>



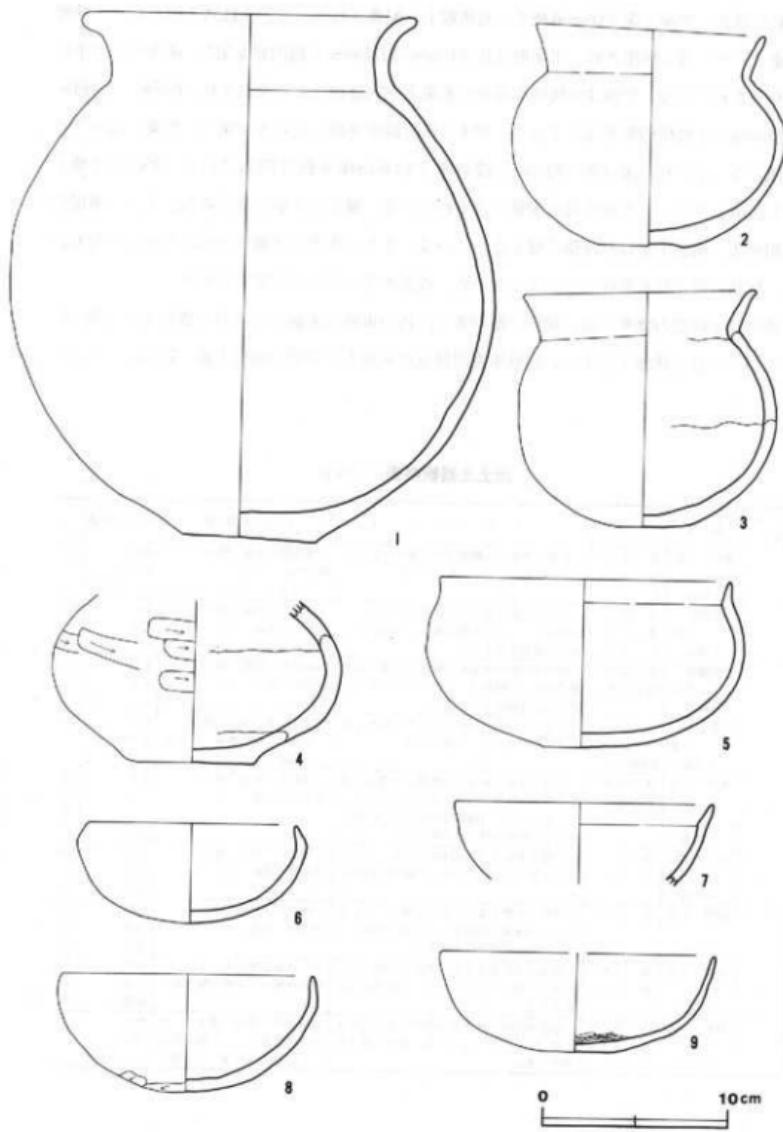
第124図 第24号住居跡実測図

~P<sub>4</sub>は径20~25cm・深さ60cm前後で、対角線上に配置されており、主柱穴と思われる。貯藏穴は南東コーナー部に検出され、平面形は長径105cm・短径94cmの楕円形を呈し、深さ51cmで半球状に掘り込まれている。炉跡は住居中央部から北東方向へ伸びた形で検出され、平面形は長径195cm・短径50cmの不整楕円形を呈している。炉床は住居跡中央部に近い方が深く、北東に向かうにつれて浅くなっている。深い所で約15cm、浅い所で約6cm床を掘り凹めている。炉内には焼土が充満し、焼土ブロックや炭化材が多く含まれている。覆土は3層に分けられ、上から黒褐色土、暗褐色土、褐色土と自然堆積の層をなしている。また、床面には焼土の広がりが何か所も認められ、柱状の炭化材も散在していることから、火災を受けていると推定される。

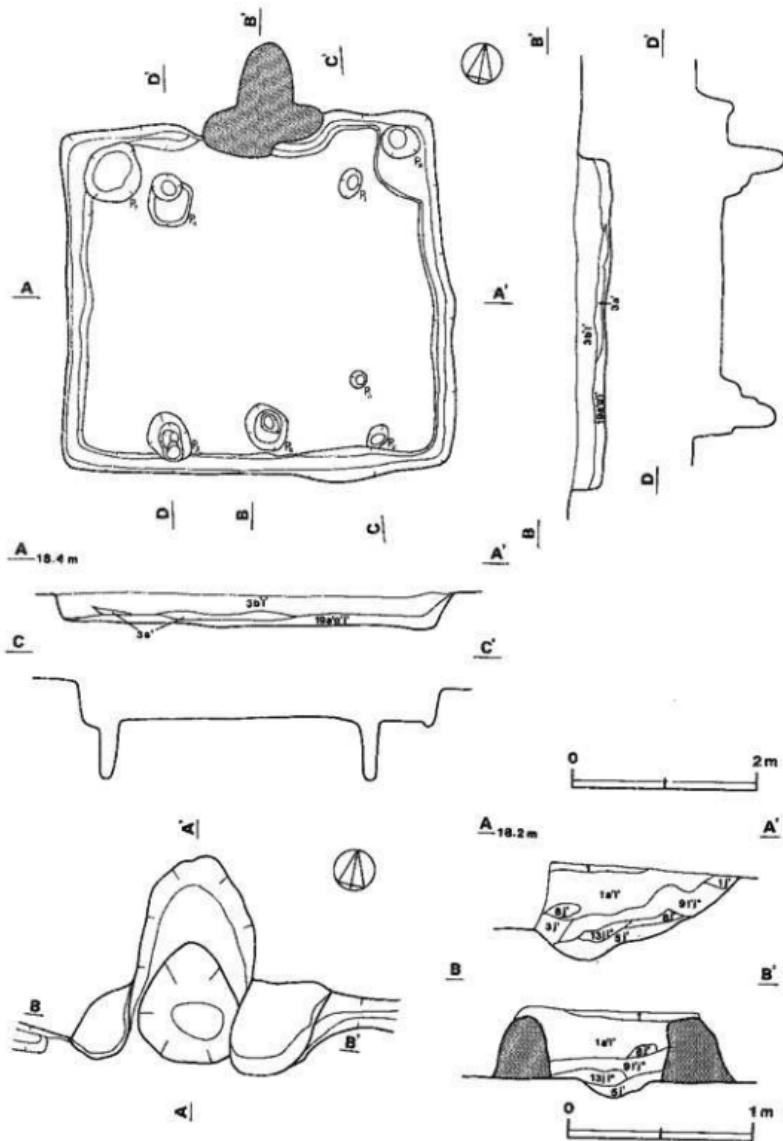
遺物は土器類の壺形土器、壺形土器が多く、P<sub>4</sub>の東側の床面から大形の壺形土器（第125図-1）がつぶれた状態で出土し、西壁中央部付近の床面から完形の壺形土器（第125図-6）が出土している。

出土土器観察表（125図）

図版番号	器種	法號	器形の特徴	手法の特徴	着土・焼成・色調	備考
1	壺形 土器	A 17.5 B 28.0 C 7.5	底部は平底で、胴部はほぼ球形を呈する。 口縁部は直立してから外反して開く。	口縁部内・外面一横ナデ 胴部外側・ナゲ 内面一ヘラナゲ	砂粒 普通 にほい褐色	70%
2	小形壺形 土器 土師器	A 12.4 B 11.7 C 4.5	底部は平底であるが、中央部やや凹む。 口縁部は「く」の字状に開き、胴部はやや扁平な球形を呈する。	口縁部内・外面一横ナデ 胴部内・外側一ナゲ	砂粒 普通 褐色	60%
3	小形壺形 土器 土師器	A 12.5 B 12.8	底部は平底であるが、胴部との境は不明瞭である。 口縁部は「く」の字状に開き、胴部はほぼ球形を呈する。	口縁部内・外面一横ナデ 胴部内・外面一ナゲ	砂粒 普通 にほい褐色	70%
4	桶頭壺形 土器 土師器	C 6.7 並木15.6	底部はやや突出引張の平底で、胴部は扁平な球形を呈する。 口縁部欠損。	胴部外裏面・中位一横筋のヘラナア 下位一摩滅して不明瞭 内面一ナゲ	砂粒 普通 褐色	80%
5	壺形 土器 土師器	A 16.5 B 9.3	底部は平底であるが、体部との境は不明瞭である。 体部は内側しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は外傾する。 内面の外部は口縁部の後に縫を有する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部内・外面一ナゲ	砂粒 普通 内・外面全体に赤色	60%
6	泡形 土器 土師器	A 11.3 B 5.1	底部は丸底を呈し、体部は内側しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部内・外側一ナゲ	砂粒 普通 赤色	100%
7	壺形 土器 土師器	A 14.2	体部は内側しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は外傾する。 内面の口縁部と体部の境に明顯な縫を有する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部内・外側一ナゲ	砂粒 普通 赤色	30%
8	壺形 土器 土師器	A 13.6 B 6.4	底部は丸底を呈する。体部は内側しながら大きく開いて立ち上がる。 口縁部はほぼ直立する。	内・外面全体にナゲ 底部外側にヘラ削り痕が見られる	砂粒 普通 内・外面全体に赤色	80%
9	壺形 土器 土師器	A (15.0) B 5.4 C 3.7	底部は平底で、体部は内側ながら大きく開いて立ち上がる。底部と体部の境は不明瞭である。	口縁部内・外面一横ナデ 体部内・外側一ナゲ 底部外側一ヘラ削り・内面一ヘラ磨き	砂粒 普通 にほい褐色	50%



第125図 第24号住居跡出土遺物実測図



第126図 第25号住居跡・カマド実測図

## 第25号住居跡（第126図）

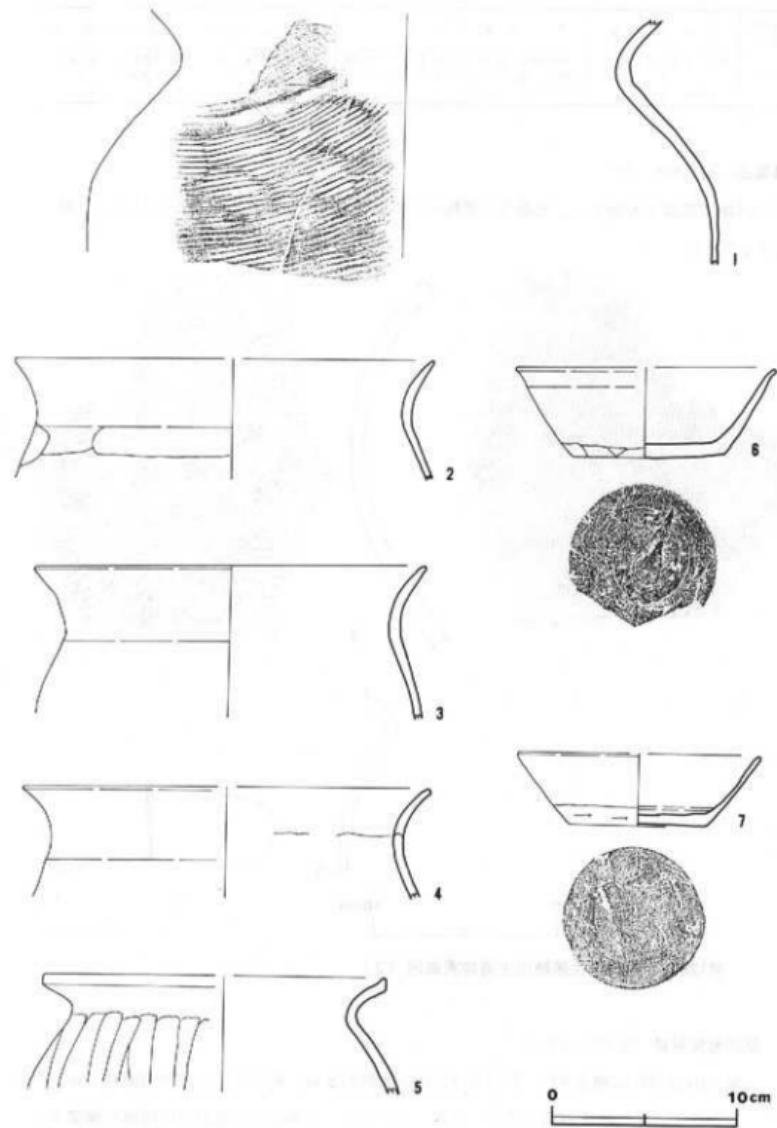
本跡はIIId<sub>4</sub>を中心確認され、第23号住居跡の西側約2m、第37号住居跡の南東側約1mに位置している。

平面形は長軸4.10m・短軸3.85mの方形を呈し、主軸方向はN 14°Wを指している。壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は約35cmである。壁下には壁溝が全周し、上幅は約23cm・下幅約15cm・深さ約8cmである。床は平坦でよく締まっており、特に4本の主柱穴に開まれた部分が堅くゴツゴツしている。ピットはP<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>の8か所検出されているが、これらのうちP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>はいずれも径25～35cm・深さ60～68cmとしっかりしたものであり、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>は主軸に対称に配置されていることから主柱穴と推定される。カマドは北壁中央部に付設されており、天井部は崩落しているが、そのほかの遺存状態は良好である。規模は長さ118cm・幅120cm・焚口幅55cmで、北壁を90cm切り込んでいる。火床は床を17cm掘り凹め、奥壁はゆるやかに立ち上がっている。覆土は自然堆積の状態を示し、上層はローム粒子を含む暗褐色土・下層は焼土粒子を含む極暗褐色土である。

遺物は土師器の變形土器が多い。須恵器ではカマド前の床面から、變形土器（第128図-8）が、北西コーナー部付近の床面から、環形土器（第127図-7）が出土している。南西コーナー部寄りの覆土からは鎌（第128図-10）が出土している。

出土土器観察表（第127・128図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	粘土・焼成・色調	備考
1 須恵器	変形土器		口縁・体部片。体部は丸く張り、口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面一横ナガ 鋤部外縁一横刃のへら削り 内面一ナガ	砂粒 普通 赤褐色	15%
2 土師器	變形土器	A (23.6)	口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面一横ナガ 鋤部外縁一横刃のへら削り 内面一ナガ	砂粒 普通 暗褐色	15%
3 土師器	變形土器	A 21.1	口縁部は「コ」の字状を残す。	口縁部内・外面一横ナガ 鋤部外縁一横刃のへら削り 内面一ナガ	砂粒 普通 赤褐色	20%
4 土師器	變形土器	A (22.0)	口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面一横ナガ 鋤部外縁一横刃のへら削り 内面一ナガ	砂粒 普通 赤褐色	15%
5 土師器	變形土器	A (19.4)	鋤部は丸く張り、口縁部は「く」の字状に開き、外縁部に面をなす。	口縁部内・外面一横ナガ 鋤部外縁一横刃のへら削り 内面一ナガ	砂粒 普通 淡褐色	10%
6 土師器	環形土器	A (14.0) B 4.8 C 8.2	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は丸く、体部中段は基部が深い。	底部一回転へら削り後無調整 鋤部下端 手持ちへら削り 内・外縁の水洗き痕は深い	砂粒 普通 褐色	65%
7 須恵器	環形土器	A 13.0 B 3.9 C 7.4	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は丸く、体部中段は基部が深い。	底部 不定方向の手持ちへら削りで、切り離しは不明 鋤部下端 手持ちへら削り クロコ状転方向は右	雲母・砂粒 普通 褐色	60%
8 須恵器	變形土器		体部片。中段が丸く張る。	体部外縁 平行叩き 内面一圓心円文叩き	砂粒 普通 暗褐色	10%

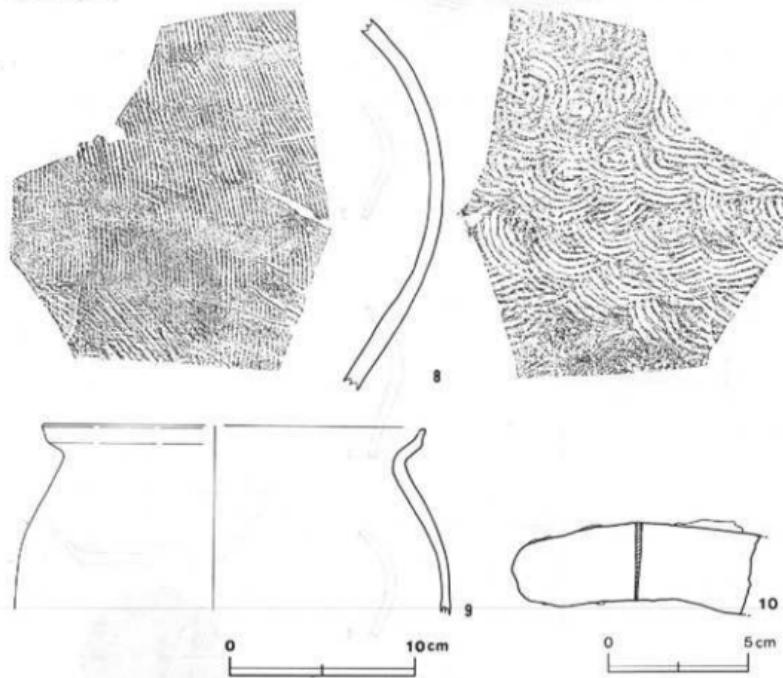


第127図 第25号住居跡出土遺物実測図 (1)

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成色調	備考
9	變形土器 土師器	A (20.6)	脚部は丸く張り。口縁部は「く」の字状に開き。端部は上方につまみ出されている。	口縁部内・外面一横ナデ 脚部内・外面一ナデ	砂粒・黒母 普通 におい褐色	15%

#### 鉄製品（第128図-10）

10は鎌で基部を欠損する。先端部は摩耗のため丸味をもち、断面は三角形を呈する。現存長は8.9cmである。

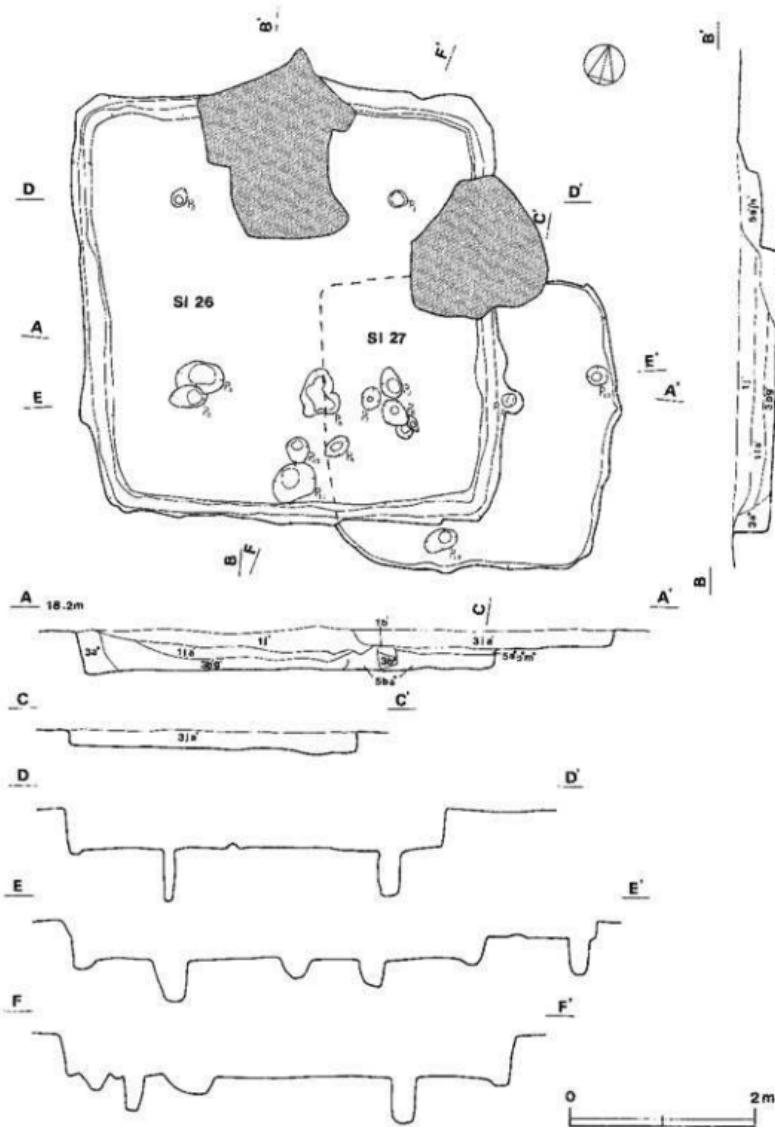


第128図 第25号住居跡出土遺物実測図（2）

#### 第26号住居跡（第129・130図）

本跡は11e<sub>6</sub>を中心確認され、第32号住居跡の北側約2m、第37号住居跡の南側約6mに位置している。第27号住居跡北西側の部分と重複しているが、本跡の上に第27号住居跡が構築されていることから、本跡の方が古い。

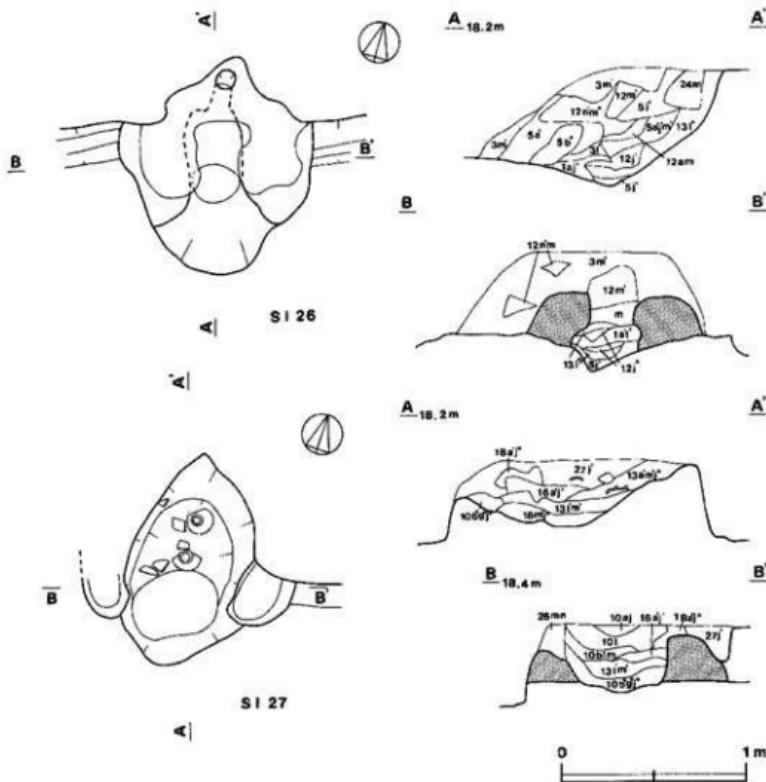
平面形は長軸4.70m・短軸4.45mの方形を呈し、主軸方向はN=17°-Wを指している。壁はや



第129図 第26・27号住居跡実測図

や外傾して立ち上がり、壁高は約45cmである。壁下には壁溝が全周し、上幅20cm・下幅15cm・深さ9cmである。床面は全体的に平坦でよく踏み固められている。ピットはP<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>の11か所検出されている。このうちP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>は径20～30cm・深さ40～57cmで、ほぼ対角線上に配置されており、主柱穴と思われる。カマドは北壁中央部に付設されており、比較的遺存状態は良好である。長さ118cm・幅88cm・焚口幅37cmで北壁を35cmほど切り込み、火床は床を約15cm掘り凹めている。奥壁はゆるやかに立ち上がり、径10cmほどの煙道へと続いている。覆土は自然堆積地3層に分かれている。上層は黒褐色土、中層はローム粒子を含む黒褐色土、下層は炭化粒子を含む暗褐色土がレンズ状に堆積している。

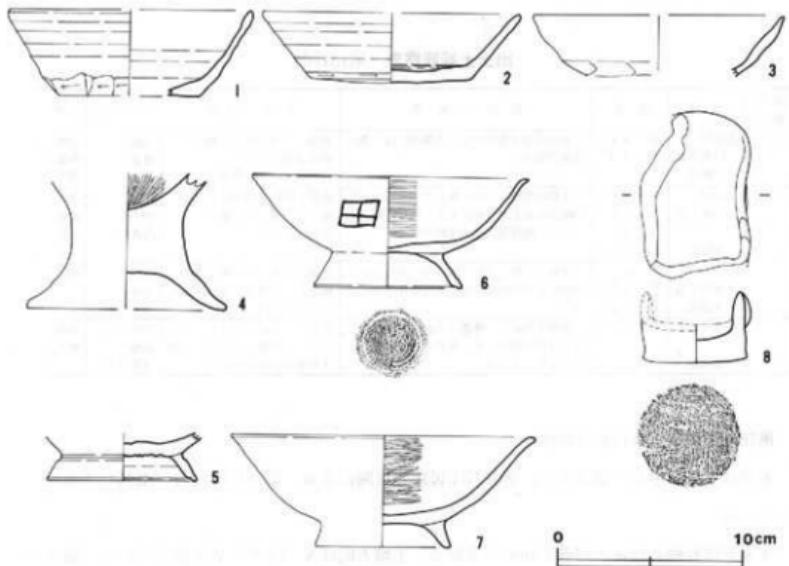
遺物は少なく、覆上から土師器の高台付壺形土器(第131図-5)や須恵器の壺形土器(第131図-1)が出土している。



第130図 第26・27号住居跡カマド実測図

出土土器観察表（第131図）

目次番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	粘土・焼成・色調	備考
1	環形土器 埴輪器	A (13.0) B 4.7 C (7.6)	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は丸い。	底部一方向の手持ちヘラ削りで、切り離しは不明 体部下端一手持ちヘラ削り	砂粒・細砂 やや不良 灰白色	40%
2	环形土器	A (14.0) B 3.8 C (8.5)	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	底部一方向の手持ちヘラ削りで、切り離しは不明 体部下端一手持ちヘラ削り	砂粒・細砂 普通 灰色	25%
3	环形土器	A 13.6	体部は外上方へ立ち上がり。口縁端部は尖る。	体部下端一手持ちヘラ削り 内・外側の水焼き痕は無い	砂粒 普通 灰白色	35%
4	台付 環形土器 埴輪器	C (10.8)	体部は内側気味に外上方へ立ち上がり、台部は外反しながら短く聞く。	体部外面一ナテ 内面へク槽3 台部内・外側一ナテ	砂粒 普通 灰白色 に少しが色	10% 二次焼成



第131図 第26・27号住居跡出土遺物実測図

第27号住居跡（第129・130図）

本跡は Ile<sub>7</sub>を中心確認され、第32号住居跡の北側約1m、第25号住居跡の南西側約5mに位置している。本跡は第26号住居跡と重複しており、重複部分に貼り床をしているので、本跡の方が新しい。

平面形は長軸・短軸とも3.20mの方形を呈し、主軸方向はN-17°-Wを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は15~20cmであるが、重複部分の壁の立ち上がりは不明瞭である。床は

ほぼ平坦で堅い。貼り床の部分は、ロームブロックを多量に含む褐色土を、約5cmの厚さに貼って踏み固めているが、西壁付近はほとんど残っていない。ピットはP<sub>2</sub>～P<sub>4</sub>の3か所検出され、径はいずれも25～30cmであるが、深さは25～48cmと差があり、配置的にもバラバラで主柱穴ではないと思われる。カマドは北壁中央部に付設されているが崩壊しており、袖部の一部が残っているだけである。規模は長さ116cm・幅90cm・焚口幅50cmで、北壁を70cmほど切り込んでいる。奥壁はゆるやかに立ち上がり、火床は床を16cm掘り凹め、多量の焼土が堆積している。覆土は焼土粒子、ローム粒子を含む暗褐色土の1層で自然堆積と思われる。

遺物は住居跡中央部の床面から須恵器の耳皿（第131図-8）、カマド内から土師器の高台付环形土器（第131図-6・7）が出土している。

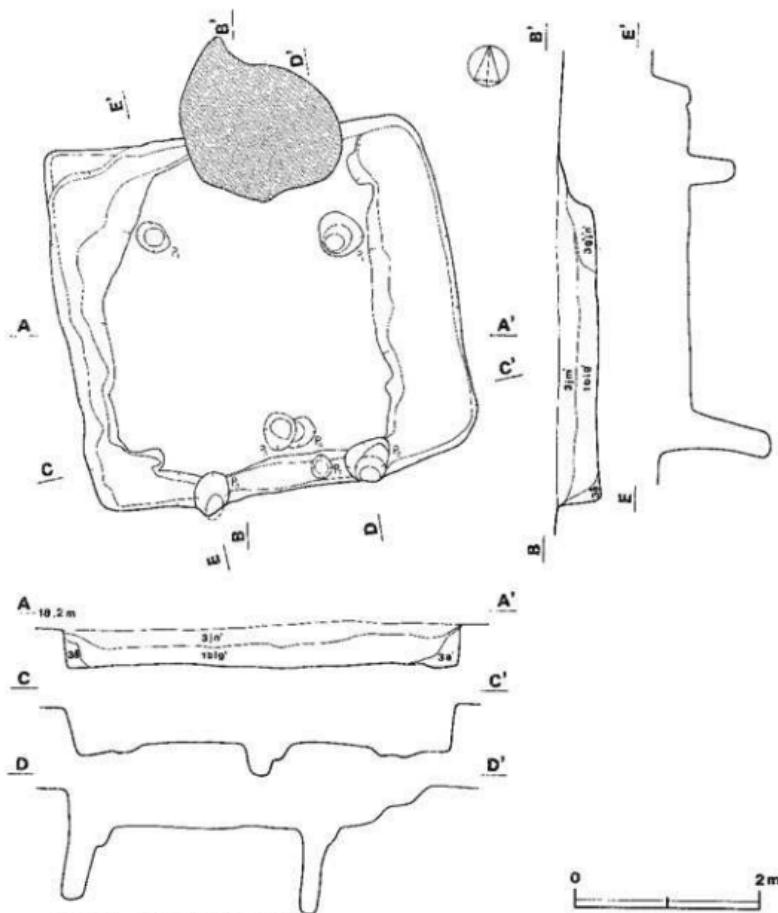
出土土器觀察表（第131図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
5	高台付 环形土器 土師器	D 8.6	高台は外下方へのび、内端部には一条の沈線が通る。	底部一方向のヘラ削き	砂粒	30%
		E 1.4		高台は貼り付け 高台内・外面一横ナダ	普通 褐色	内面墨色処理
6	高台付 环形土器 土師器	A 14.8	体部は内側しながら外上方へ立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。高台は外下方へのび、内端部に浅い沈線が通る。	底部一回転來切り抜を中心にはく 残す 内面一ヘラ削き	砂粒	70%
		B 6.1		高台は貼り付け	やや不真 浅黄褐色	二次 焼成 体部 中位にヘラ 文字「田」
		D 8.0				
	E 1.9					
7	高台付 环形土器 土師器	A 15.4	体部は内側しながら外上方へ立ち上がり、口縁部はやや外反する。高台は外下方へのびる。	底部へら削しは不明 内面一横ナダ	砂粒	85%
		B 6.1		高台は貼り付け 高台内・外面一横ナダ	普通 にぶい褐色	
		C 7.2				
	E 1.2					
8	耳皿 須恵器	A 5.6	底部は平底で、体部は直線的に短く聞く。左右は折り曲げられ、底部からほぼ垂直に立ち上がっている。	底部一方向の手持ちヘラ削りで、切り離しは不明 水挽き	砂粒・粗砂 普通 浅黄褐色	65%
		C 5.6		底部後面部折り曲げ		強化焼成

### 第28号住居跡（第132・133図）

本跡はIIfsを中心に確認され、第32号住居跡の東側約3m、第25号住居跡の南側約7mに位置している。

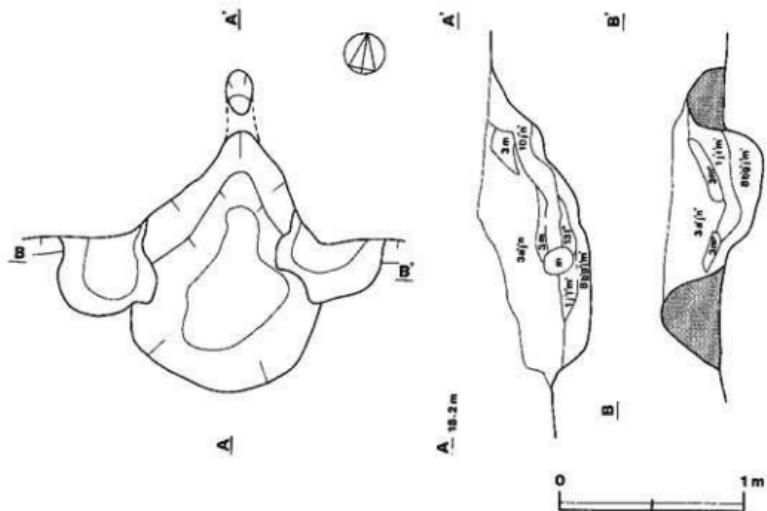
平面形は長軸4.25m・短軸3.90mの方形で、主軸方向はN-12.5°-Wを指している。壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は約40cmである。壁下には壁溝が全周しており、上幅30cm・下幅20cm・深さ14cmであるが、東・西壁の下は床面がやわらかく、溝との境は不明瞭である。床は東・西壁下を除いて平坦で堅く、4本の主柱穴を結ぶ範囲内が特に踏み固められている。ピットはP<sub>1</sub>～P<sub>7</sub>の7か所検出された。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>は主軸に対称に配置され、径40～50cm・深さ55～95cmといずれもしっかりしており、主柱穴と思われる。特にP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>は壁を5～10cm切り込んでやや内傾して掘り込まれている。カマドは北壁中央部に付設されており、天井部が一部崩壊している。長さ165cm・幅203cm・焚口幅70cmで、北壁を90cmほど切り込み、火床は床を15cm掘り凹めている。奥壁はゆるやかに立ち上がり、先端に長径25cm・短径15cmの煙道が確認されている。覆土は自然



第132図 第28号住居跡実測図

堆積の様相を呈しており、大きく2層に分かれる。上層は暗褐色土、下層は黒褐色土で、いずれもわずかにローム粒子、焼土粒子が含まれている。

遺物は上師器の変形土器片が多く427点出土している。須恵器では环形土器が多く南西コーナー部付近の床面からほぼ完形の环形土器(第134図-1)が出土している。そのほか覆土から盤形土器、蓋形土器などが出土している。



第133図 第28号住居跡カマド実測図

出土土器観察表（第134図）

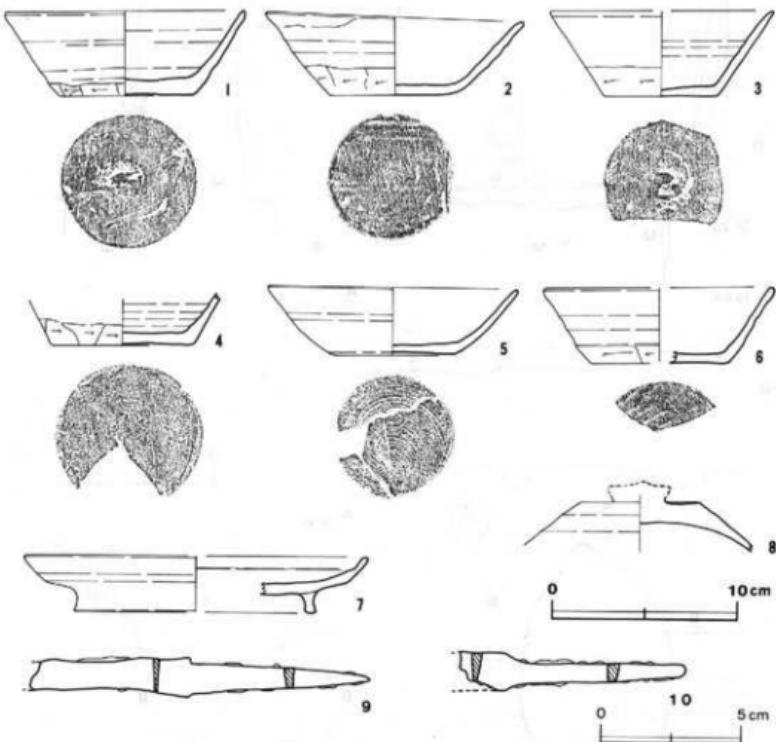
河段 番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	施上・焼成色調	備考
1 須恵器	环形土器	A 12.7 B 4.5 C 7.4	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	底部一回転へラ切り後、不定方向の手持ちへラ削り 体部下端一手持ちへラ削り ロクロ回転方向は右	砂粒・細砂 やや不良 灰褐色(焼成 部付近灰化)	90%
	环形土器	A 13.8 B 4.2 C 6.6	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。	底部一回転へラ切り後、一方向の手持ちへラ削り 体部下半 手持ちへラ削り ロクロ回転方向は右	砂粒・細砂 やや不良 灰色	45%
	环形土器	A (12.1) B 4.6 C (6.2)	底部は平底で、体部は外反気味に外上方へ立ち上がり、端部は丸い。	底部一回転へラ切り後、不定方向の手持ちへラ削り 体部下端 手持ちへラ削り ロクロ回転方向は右	白色砂粒多 細砂 普通 灰褐色	20%
4 須恵器	环形土器	C 7.8	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	底部一方面の手持ちへラ削りで、切り離しは不明 底部下端一手持ちへラ削り	砂粒・細砂 普通 灰褐色	30%
	环形土器	A (13.4) B 3.7 C 6.3	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。	底部一方面の手持ちへラ削り後加調整 内・外面の水抜き孔は無い	砂粒・細砂 不良 灰褐色・灰白色	50%
	环形土器	A (12.3) B 4.1 C (7.4)	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる、端部は丸い。	底部一方面の手持ちへラ削りで、切り離しは不明 体部下端 手持ちへラ削り ロクロ回転方向は右	砂粒・細砂 普通 灰色	20%
7 須恵器	盤形土器	A (18.3) B 3.05 D (13.0)	底部は平底で、高台は下方へのびる。体部はわずかに内脇して立ち上がり、上端端部は丸い。	内・外面の水抜き孔は無いが 器底は平滑でない 高台は貼り付け	素手末・砂 粒・細砂 不良 黄褐色	15%
	盤形土器	E 1.0				くすべ焼きの状態を示している

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成色調	備考
8	蓋形土器 須恵器		頂部が扁平で、外周部に向かってなだらかに下降する。	天井部—頂部は回転ヘラ削り ロクロ回転方向は右	白色砂粒多 普通 灰褐色	20%

鉄製品（第134図-9・10）

9は刀子で切先部を欠損する。刃と棟の両側に区を有する。現存長12.1cm・刃幅1.2cmである。

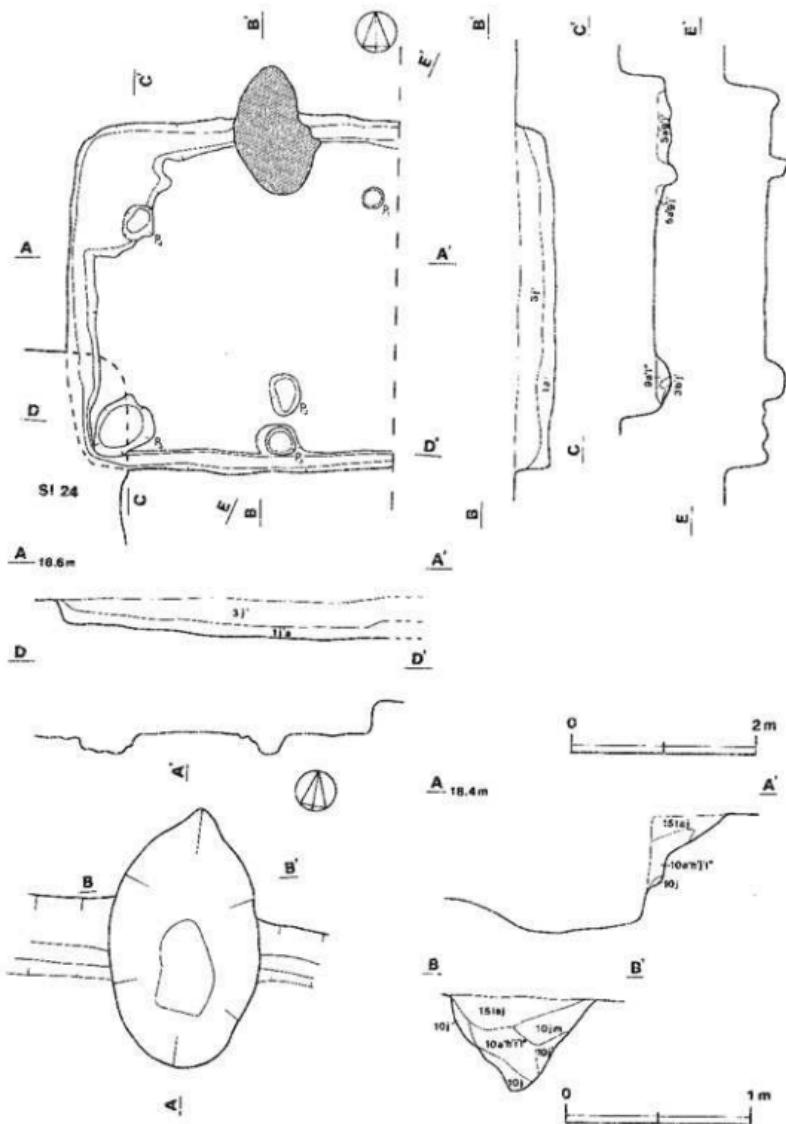
10は刀子の茎部である。刃・棟の両側に区を有するものと思われる。現存長は8.1cmである。



第134図 第28号住居跡出土遺物実測図

第29号住居跡（第135図）

本跡はI2dsを中心確認され、第39号住居跡の南側約2mに位置している。第24号住居跡と重複しており、本跡が第24号住居跡を切っていることから、本跡の方が新しい。東側部分は調査区



第135図 第29号住居跡・カマド実測図

城外へと延びている。

平面形は3.80m×( )mの方形を呈するものと思われ、主軸方向はN-2°-Wを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約45cmである。壁下には壁溝が全周しており、上幅約21cm・下幅は約15cm・深さ約7cmである。床面は全体に平坦であり、堅く締まっているが、北東コーナー一部は床面がやわらかい。ピットはP<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>の5か所検出されたが、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は深さが18～25cmと浅く、径も20～45cmとやや差があり、配置的にも主柱穴であるかどうか不明である。P<sub>5</sub>は南西コーナー部に位置し、長径75cm・短径55cm・深さ23cmで塊状に掘り込まれており、貯蔵穴と思われる。カマドは北壁中央に付設されているが、ほとんど崩壊しており、わずかに焼土が残っているだけである。規模は長さ143cm・幅67cmで北壁を約50cm切り込み、火床は床を15cmほど掘り凹めている。覆土は自然堆積の様相を呈し、2層に分かれる。上層が暗褐色土、下層が黒褐色土で、いずれもローム粒子、焼上粒子をわずかに含んでいる。

遺物は少ないが、土器器の壺形土器片が約200点と多く、須恵器では北東コーナー部付近の覆土から壺形土器（第136図-5）や、南東コーナー部付近の覆土から壺形土器（第136図-1）が出士している。

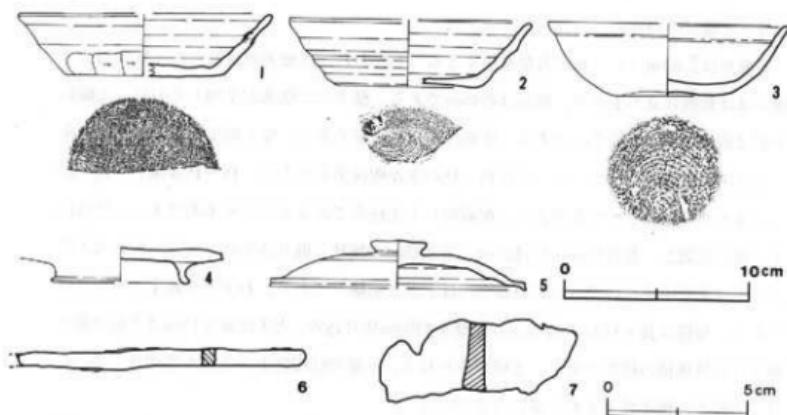
出土土器観察表（第136図）

図版番号	器種	法算	各部の特徴	手法の特徴	胎土・焼成色調	備考
1	壺形土器	A 13.6 B 3.4 C 8.8	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へのびる。口縁端部は丸い。	底部一定方向の手持ちハリ削りで、切り離しは不明。体部下端 手持ちハリ削り	砂粒・墨母 魚肝 灰色	30%
	壺形土器	A (13.0) B 3.6 C (7.4)	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へのびる。	底部一回転無切り筋無調整 内・外側の水陥き痕は強い。クロコ刮削方向は右	砂粒が少無 魚肝 褐色	25%
	壺形土器 土師器	A (13.0) B 3.9 C 6.3	底部は平底で、体部は内唇気味に外上方へ立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	底部一回転無切り筋無調整 内・外側の水陥き痕は弱い	砂粒 青灰 褐色	35%
4	壺台付 壺形土器 須恵器	D 7.5 E 1.3	壺台は下方へのび、腹部は外反する。	壺部一回転へラ削り 壺台は貼り付け 壺台内・外側一様ナゲ	砂粒・粗砂 普通 褐色	25%
	壺形土器 須恵器	A (14.0) B 2.6 つまみ手-3.0 つまみ手-0.7	天井部は弧状を呈し、天井部と口縁部の境に明瞭な棱を有す。口縁部は外下方に屈曲し端部は丸い。天井中央に優すなボタン状のつまみがつくる。	天井部一切部は回転へラ削り 内・外側の水陥き痕は弱い。クロコ刮削方向は右	砂粒・墨母 不良 灰白色	25%

鉄製品（第136図-6・7）

6は鐵の茎部である。断面は方形を呈し、現存長は10.2cmである。

7は用途不明の鉄製品で、板状で不定形である。現存長は7.1cm・幅2.4cm・厚さ5～7mmである。



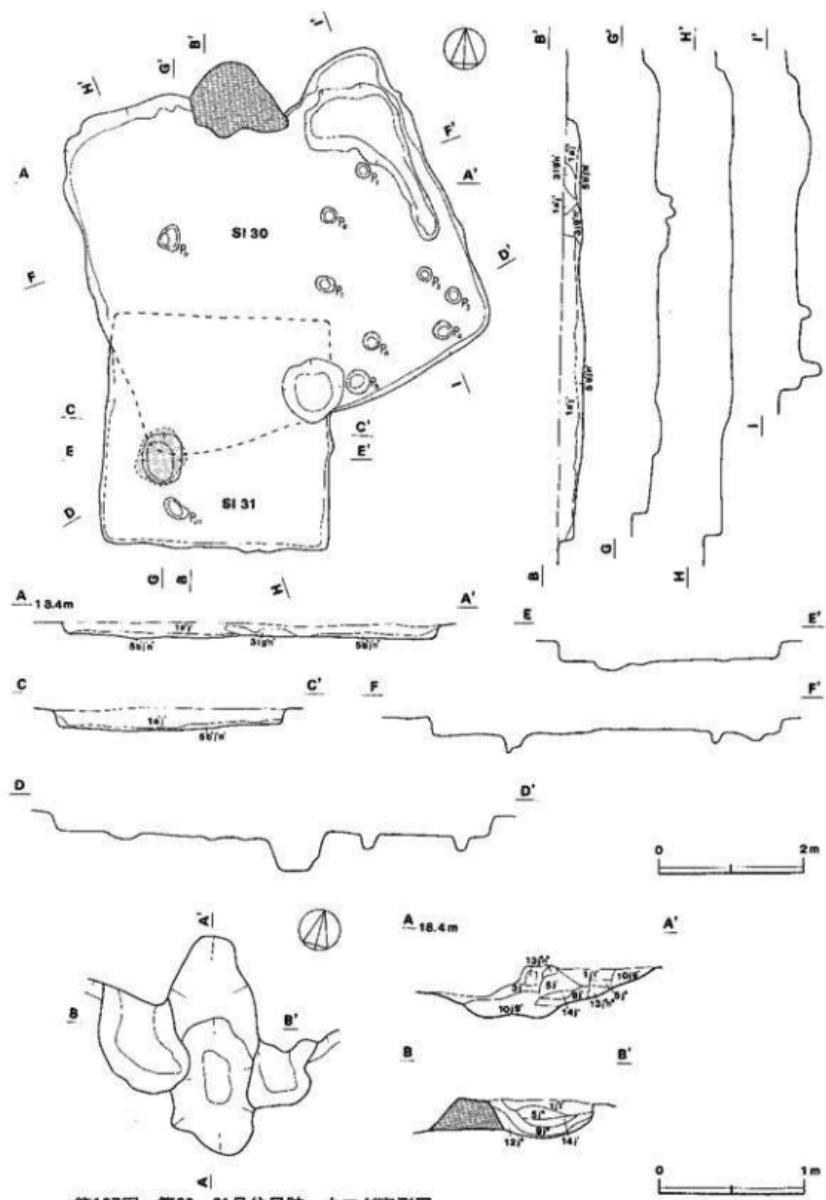
第136図 第29号住居跡出土遺物実測図

### 第30号住居跡（第137図）

本跡は I2f<sub>2</sub>を中心確認され、第28号住居跡の東側約8m、第24号住居跡の南側約0.5mに位置している。第31号住居跡と重複しており、本跡が第31号住居跡を切っていることから、本跡の方が新しい。

平面形は長軸5.00m・短軸4.90mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-21°-Wを指している。壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は25~28cmである。床面はほぼ平坦で堅く、中央部からカマドにかけてはよく踏み固められているが、北東コーナー部付近はやわらかい。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>2</sub>の9か所検出され、径20~30cm・深さ18~29cmのはぼ同規模のものが多いが、配置に規則性が見られず、南東に偏しており、主柱穴は不明である。南壁中央部の壁下には貯蔵穴が検出され、径83cmほどの円形を呈し、深さは47cmで壇状に掘り込まれている。カマドは北壁中央部に付設されているが、袖部が残っているだけである。規模は長さ153cm・幅147cmで、北壁を約60cm切り込んでいる。火床は床を15cmほど楕円形に掘り凹め、奥壁はゆるやかに立ち上がっている。他のカマドに比べ構築材は粘土分が少なくて砂粒が多い。また、残存した袖部全体が赤褐色を呈しており、よく使用されている。覆土は自然堆積で、大きく2層に分かれている。上層はローム粒子を含む黒褐色土、下層は焼土粒子を含む褐色土である。

遺物は比較的多く、土師器の環形土器や高台付環形土器の出土が目立つ。須恵器では、北西コーナー部付近の床面から瓶形土器（第138図-1）が出土し、カマド周辺の覆土からは鐵鏃（第139図-12・13）や鑿（第139図-14）が出土している。



第137図 第30・31号住居跡・カマド実測図

出土土器観察表 (第138・139図)

同版 番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	地色・焼成色	備考
1	瓶形土器 頭部	C 15.8	底部は五孔式で、体部に内側氣味に外上方へ立ち上がる。	体部外面 機械的ヘラ削り 内面 ナマ	砂粒 普通 浅黄褐色	30%
2	甕形土器 上部	A 22.0	腹部は丸く張る。口縁部は「く」の字状に開き、縫部を内側させてから外上方へつまみ出している。	口縁部内・外面一様ナマ 側面部・外面 ナマ	砂粒・青母 普通 にふい褐色	10%
3	高台付 环形土器 上部	D 8.7	体部は内側氣味に外上方へ立ち上がる。 高台は外下方へのび、縫部は丸い。	体部内面へら削き 外面 水抜き痕(跡) 高台は貼り付け 高台内・外面一様ナマ	砂粒 普通 内面黒色處理	30%
4	高台付 环形土器 上部	D 7.8 E 1.9	体部は内側しながら外上方へ立ち上がる。 高台は外下方へのび、縫部は丸い。	体部内面へら削き 外面 水抜き痕(跡) 高台は貼り付け 高台内・外面一様ナマ	砂粒 普通 内面黒色處理	15%
5	高台付 环形土器 上部	A 15.2 B 5.9 D 6.6 E 1.5	体部は内側氣味に外下方へ立ち上がり。 高台は外下方へのびる。	体部外面へら削き 外面 水抜き痕(跡) 高台は貼り付け 高台は貼り付け 高台内・外面一様ナマ	砂粒 普通 にふい褐色	70%
6	高台付 环形土器 上部	A 14.0 B 6.9 D (7.7) E 1.4	体部は内側しながら外上方へ立ち上がり。 高台は外下方へのび、縫部は丸い。	内・外面 水抜き痕(跡) 高台は貼り付け 高台内・外面一様ナマ	砂粒 普通 赤褐色	30%
7	高台付 环形土器 七脚	A (13.6) B 5.7 D (7.0) E 1.6	体部は内側しながら外上方へ立ち上がり。 高台は外下方へのびる。	底部貼り繋しは不明 外面 水抜き痕(跡) 内面へら削き 高台は貼り付け 高台 内・外面一様ナマ	砂粒 普通 細粒	25%
8	高台付 环形土器 上部	A (14.2) B 5.3 D (6.2) E 2.0	体部は内側しながら外上方へ立ち上がり。 口縁部は外反する。高台は外下方へのびる。	底部貼り繋しは不明 外面 水抜き痕(跡) 内面 へら削き 高台は貼り付け 高台内・外面一様ナマ	砂粒 普通 赤褐色	30%
9	环形土器 土器	A (13.2) B 3.8 C 5.0	底部は平底で、体部は内側ながら外上方へ立ち上がり。口縁部はわずかに外反する。	体部貼り繋しは不明、回転 へら削り 体部下端 回転へ ら削り 内面へら削き	砂粒 普通 内面黒色處理	40%
10	环形土器 上部	A (12.8) B 3.6 C 6.8	底部は平底で、体部は内側氣味に外上方へ立ち上がる。	底部・鋸歯切り複数 体部外面 水抜き痕(跡) 内面へら削き	砂粒 普通 赤褐色	50%
11	环形土器 土器	A (14.7) C (6.0)	底部は平底で、体部は内側ながら外上方へ立ち上がり。口縁部はやや外反する。	底部は内側を凹凸し、粘土を 貼り付けて削っている 体部 下端へら削り	砂粒 普通 褐色	40%

## 鉄製品 (第139図-12~17)

12は凹基の鎌で、片方の脚が欠損する。穂の断面はレンズ状、茎部の断面は長方形を呈する。

現存長は8.6cmである。

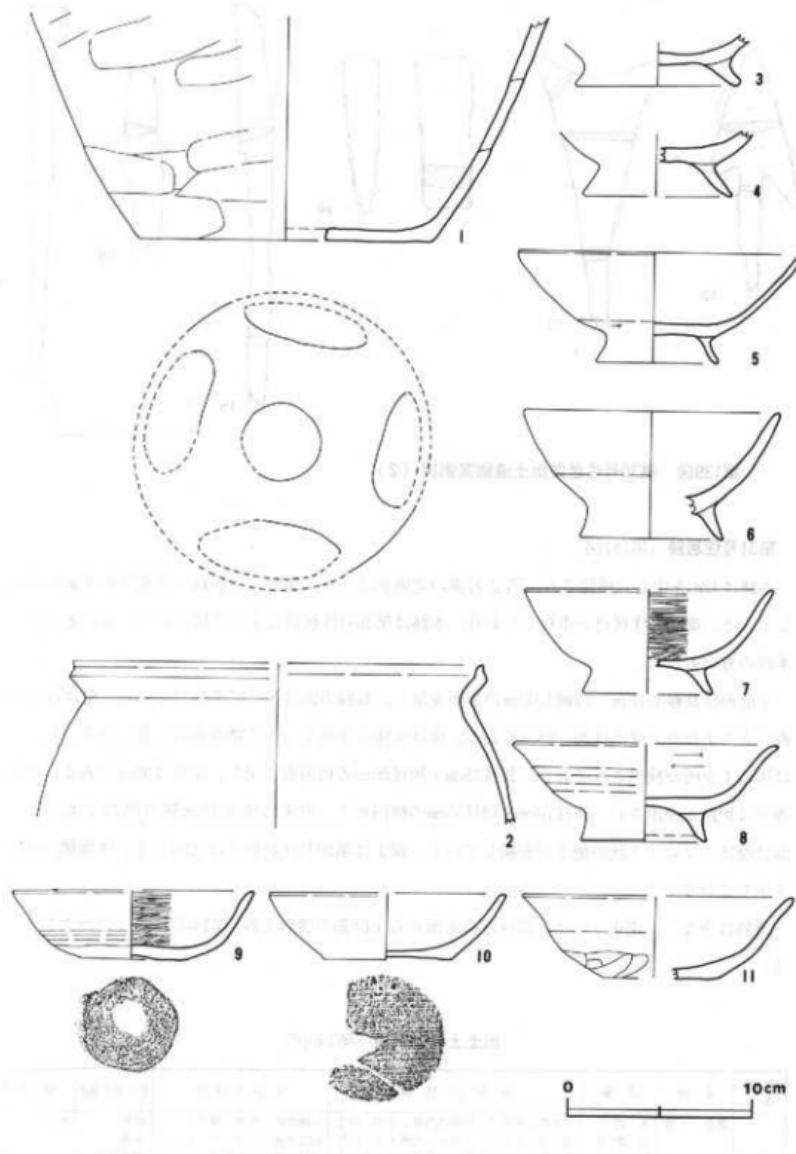
13は雁股の鎌で、茎部が欠損する。現存長は9.6cmである。

14は鎌で完存品である。頭部は長方形で、側面はV字形を呈する。現存長は5.4cm・刃幅1.7cmである。

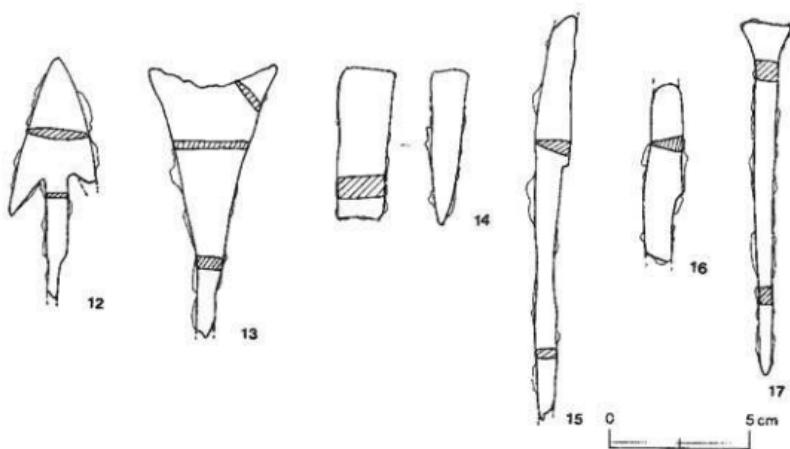
15は刀子で両端部が欠損する。棟側に区を有し、現存長は14.4cm・刃幅は1.4cmである。

16は刀子で両端部が欠損する。棟側に区を有する現存長は6.5cm・刃幅は1.2cmである。

17は釘で完存品である。断面は方形を呈する。現存長は12.6cmである。



第138図 第30号住居跡出土遺物実測図（1）



第139図 第30号住居跡出土遺物実測図（2）

#### 第31号住居跡（第137図）

本跡はI2g<sub>1</sub>を中心に確認され、第2号溝の北側約3.5m、第40号住居跡の北東側約6mに位置している。第30号住居跡と重複しており、本跡は第30号住居跡によって切られていることから、本跡の方が古い。

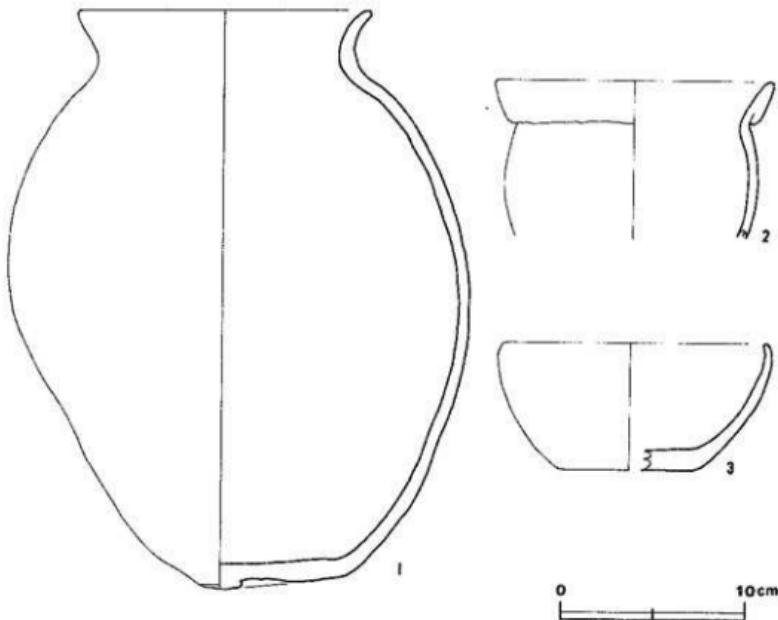
平面形は長軸3.10m・短軸3.00mの方形を呈し、長軸方向はN-0°を指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は20~25cmである。床は全体に平坦で、よく踏み固められている。ピットはB<sub>3</sub>の1か所が検出されており、長径35cm・短径20cmの楕円形を呈し、深さは30cmである。西壁寄りに炉跡が検出され、長径70cm・短径55cmの楕円形で、炉床は床を13cm掘り回めており、内部は焼けたブロック状の焼土が充満している。覆土は第30号住居跡とほぼ同じく自然堆積の状態を示している。

遺物は少なく、南東コーナー部付近の床面から土師器の変形土器（第140図-1）が出土している。

#### 出土土器観察表（第140図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	変形土器 土師器	A 15.2 B 30.9 C (< 7.0)	底部は平底で、腹部は内側しながら外上方へ立ち上がり、上位から内傾する。口縁部は外反しながら開く。全体にゆがみがある。	口縁部内・外面一括ナガ 腹部外縁一ラナゲ 下半 斜位の窓なしラナゲ 内面 ラナゲ	妙軟 普通 明赤褐色	85%

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
2	壺形 上器 上鉢器	A 15.1	胴部は丸く張り、口縁部は折り返し口縁で「く」の字形に向く。	口縁部内・外面・横ナデ 胴部外面一器面削落して壺形不明 内画一ナデ	砂粒 普通 よい褐色	40%
3	壺形 土器 土鉢器	A 14.1 B 6.9 C 7.4	底部は平底で、体部は内側しながら外上方へ立ち上がり。口縁部は内接する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部内・外面一ナデ	砂粒 普通 暗灰色	45%



第140図 第31号住居跡出土遺物実測図

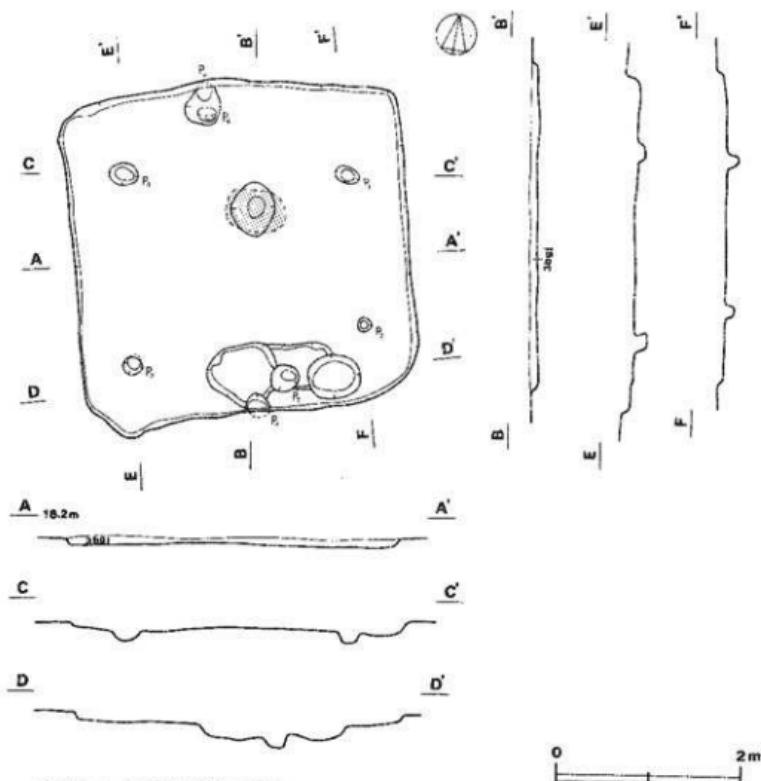
#### 第32号住居跡（第141図）

本跡はIIg<sub>7</sub>を中心確認され、第27号住居跡の南側約1m、第28号住居跡の西側約3mに位置している。

平面形は長軸3.60m・短軸3.60mの隅丸方形を呈し、長軸方向はN-18°-Wを指している。壁高は5~10cmである。壁の立ち上がりは不明瞭で、床はほぼ平坦であり中央部から南壁にかけてはよく踏み固められている。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>8</sub>の8か所検出され、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の径は15~33cmとやや差がある。深さは12~17cmと浅いがほぼ方形に配置されており、主柱穴と思われる。P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>の周囲は擾乱を受けており床面が凹凸である。炉が住居跡中央部のやや北壁寄りに確認され、平面形は

長径58cm・短径48cmの楕円形を呈し、炉床は床を8cm皿状に掘り凹めている。内部にはブロック状の焼土が堆積して、炉床は焼けて硬化している。覆土は自然堆積の状態を示し、確認面から床面まで浅いため、ローム粒子を含む暗褐色土が1層だけである。

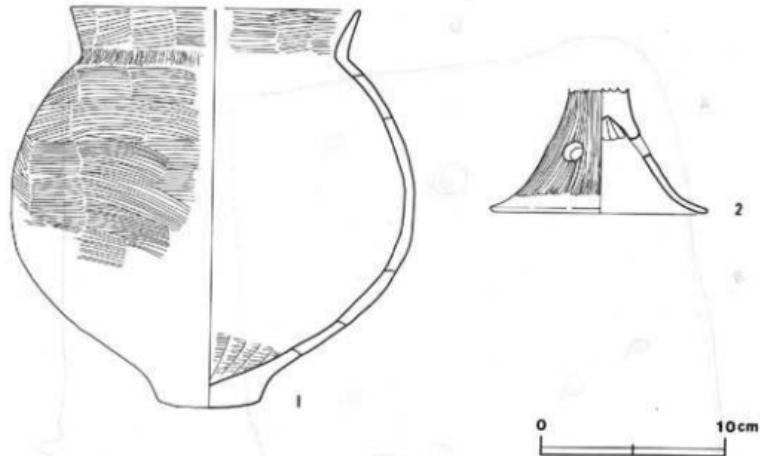
遺物は少なく、北東コーナー部付近の床面から土師器の壺形土器（第142図-1）が出土しただけである。



第141図 第32号住居跡実測図

出土土器観察表 (142図)

河原番号	器種	法算	器形の特徴	手法の特徴	胎土焼成色調	備考
1	壺形土器 土師器	A (15.6) B 21.7 C 3.5	底部は突出した平底で、腹部はやや扁平な球形を呈している。口縫部は「く」の字状に開く。	口縫部内・外面一様位のハケ目 H 炉床外側 壁位のハケ目 腹部外側一様位のハケ目 内面-ハラナテ	深紅 普通 にほい赤褐色	50%



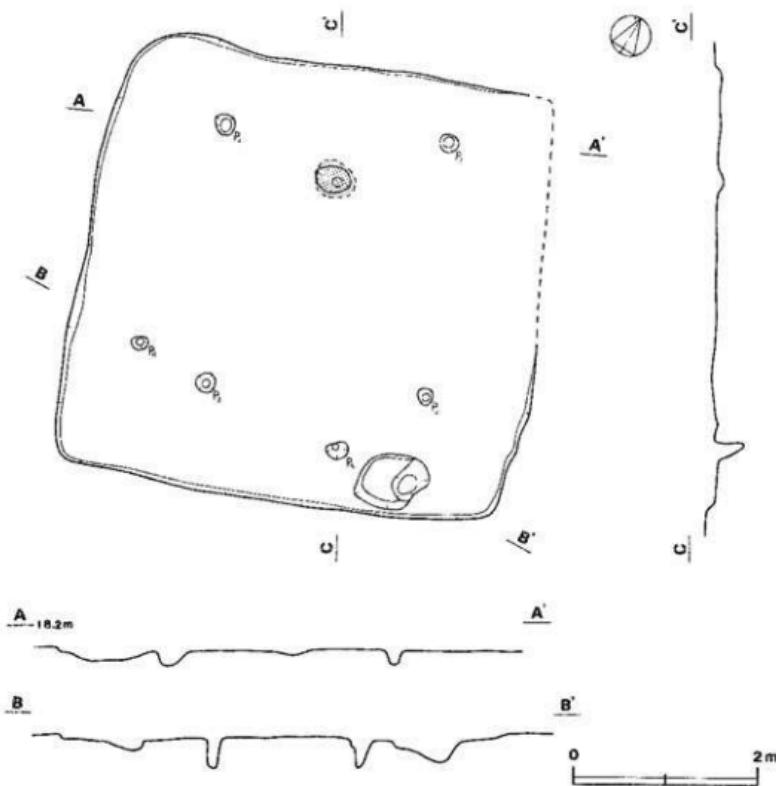
第142図 第32・33号住居跡出土物実測図

#### 第33号住居跡（第143図）

本跡はIIh<sub>4</sub>を中心に確認され、第40号住居跡の西側約12m、第2号溝の南側約2mに位置している。

平面形は長軸4.90m・短軸4.75mの方形を呈し、主軸方向はN-23°-Wを指している。確認面から床面までが浅く、また、北東壁は耕作の搅乱を受けているため、壁の立ち上がりは不明瞭であり、壁高は0~5cmである。床はほぼ平坦でやわらかい。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>の6か所検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>はいずれも径が約25cm、深さはP<sub>3</sub>の34cmを除いて15~18cmであり、ほぼ方形に配置されていることから主柱穴と思われる。住居跡中央部から北西壁寄りに炉跡が検出され、平面形は長径38cm・短径27cmの楕円形を呈し、床を7cmほど皿状に掘り込んでいる。耕作の搅乱のため焼土がわずかに残っているだけで、炉床もあまり焼けていない。東コーナー部のやや西寄りに貯蔵穴が検出され、平面形は長径85cm・短径60cmの楕円形を呈し、深さは27cmである。覆土は自然堆積と思われ、ローム粒子を含む黒褐色土が主であるが、堆積しても厚さ2~3cmで床面が露出している部分もある。

遺物は土師器の變形土器片が13点と、貯蔵穴内から高環形土器の脚部（第142図-2）が出土している。



第143図 第33号住居跡実測図

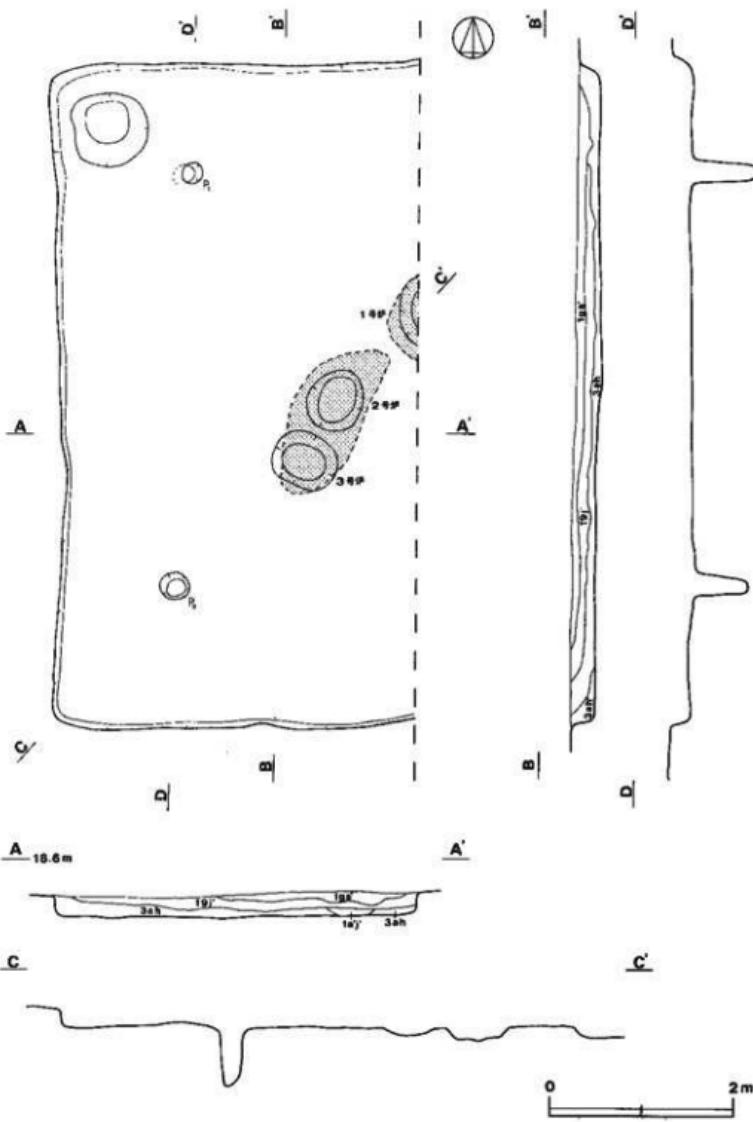
出土土器観察表（第142図）

因版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	粘土-焼成色調	備考
Z	高环形土器 土瓶器	C 11.6	16部火照。 脚部はラッパ状に開き、中位に3ヶ所の穿孔が見られる。	脚部外側一組位のヘラ磨き 内面・ナデ 裾部内・外面一様ナデ	砂粒 若透 橙色	50%

第34号住居跡（第144図）

本跡はI2j<sub>1</sub>を中心確認され、第2号溝の南側約2m、第35号住居跡の北側約1mに位置している。東側部分は、調査区域外へと延びる。

平面形は7.10m×( )mの方形を呈すると思われ、主軸方向はN-4°-Wを指している。號は



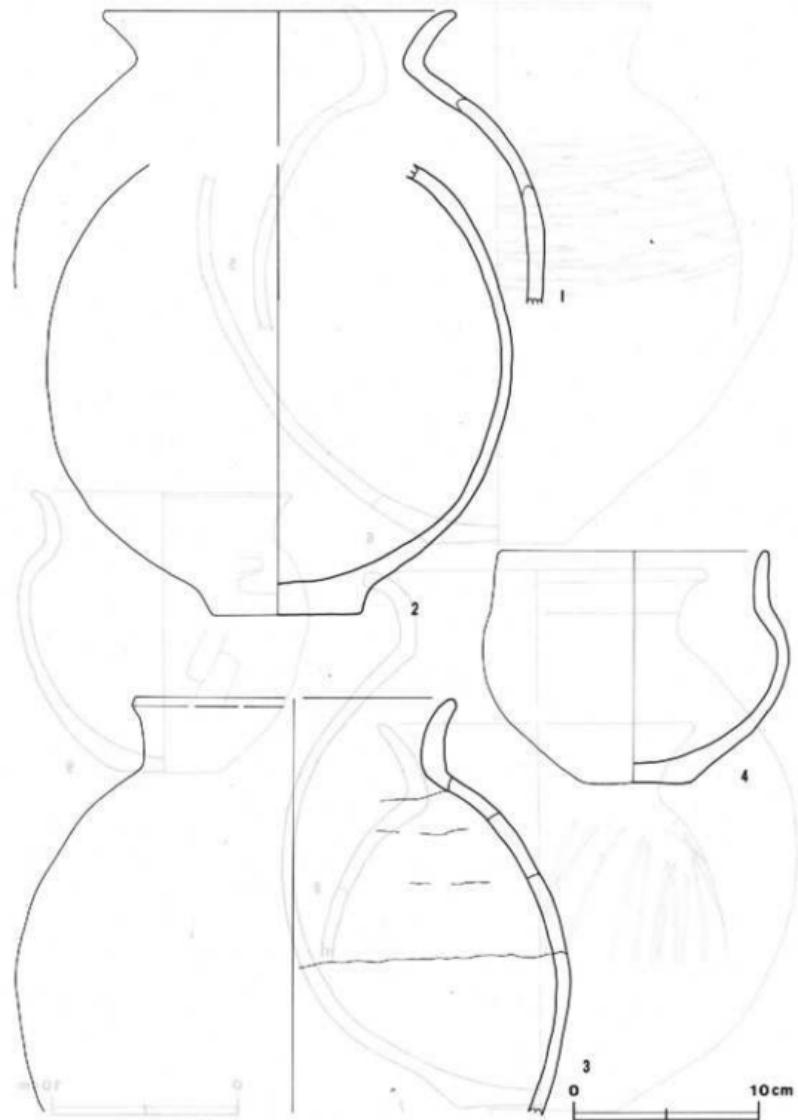
第144図 第34号住居跡実測図

やや外傾して立ち上がり、壁高は25~28cmである。床面はほぼ平坦で堅く、特に炉跡の周辺がよく踏み固められている。ピットはP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の2本が検出されたが、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>とも径25~30cm、深さはP<sub>1</sub>が74cm、P<sub>2</sub>が60cmと深く配置的に上柱穴と思われる。炉跡は住居跡中央部に2基、北東寄りに1基の合わせて3基が確認され、北から第1・第2・第3号炉跡とした。いずれも長径約70cm、第1号炉を除いて短径約55cm、深さ約15cm掘り凹めている。いずれも内部には焼土や焼土ブロックが多く充満している。北西コーナー部には貯藏穴が検出され、平面形は径約90cmの円形を呈し、約60cm掘り込んでおり床面は平坦である。覆土は大きく3層に分かれ、自然堆積の様相を呈しており、下から暗褐色土・極暗褐色土・黒褐色土と堆積し、各層ともローム粒子や炭化粒子を含みやわらかである。

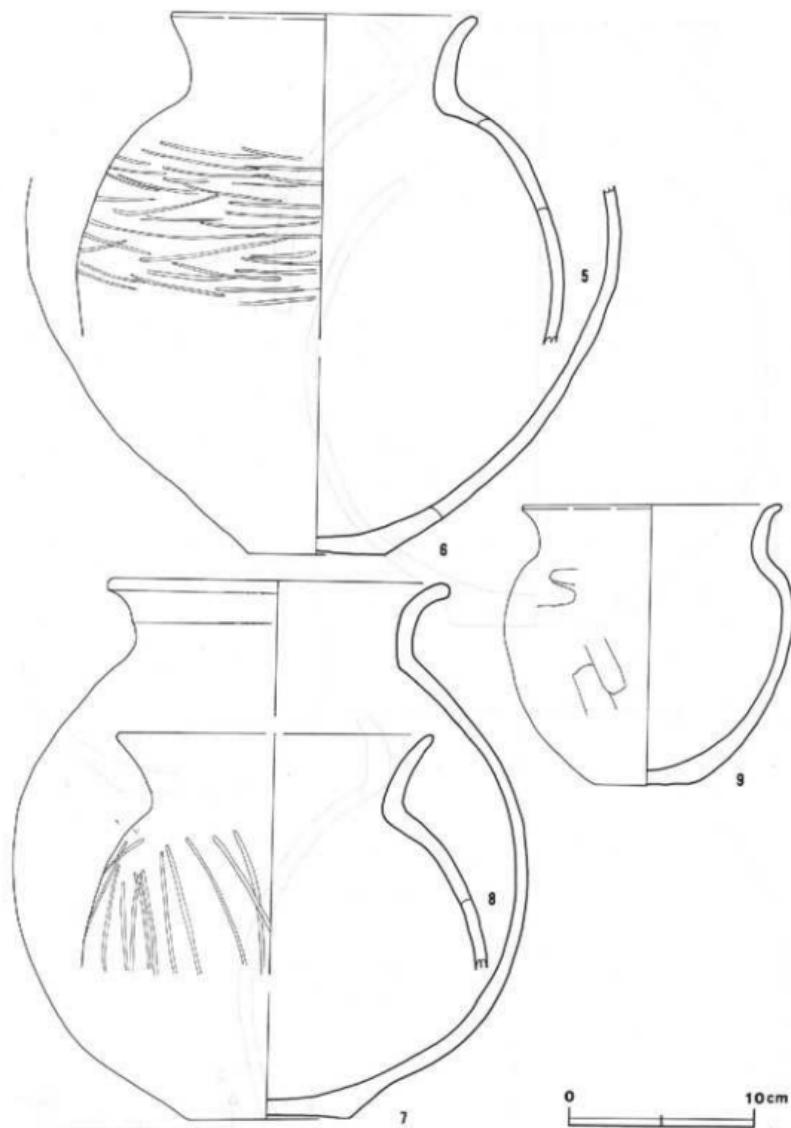
遺物は、ほとんどが北西コーナー部付近の床面から集中して多量に出土している。土師器の壺形土器が多く、破片が620点、接合して実測できたものが3点、そのうち大形のものが8点ある。このほか壺形土器、瓶形土器が出土している。

出土土器観察表（第145・146・147[図]）

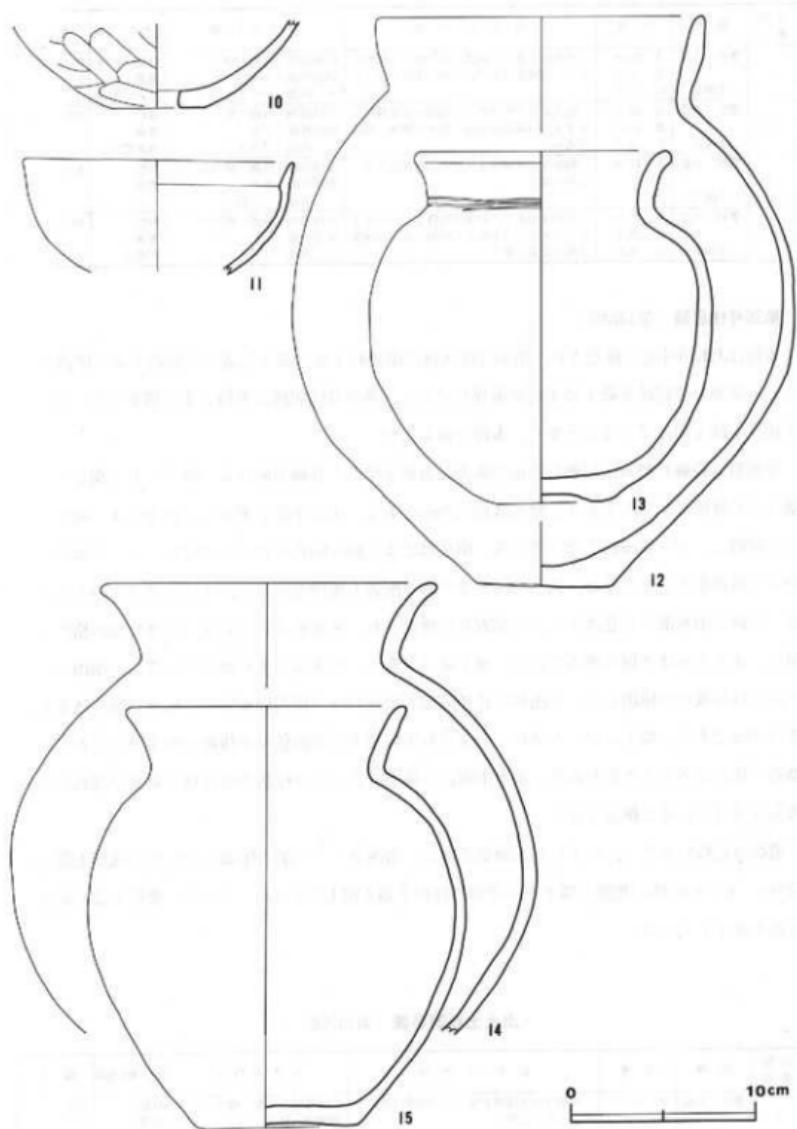
図版番号	器種	法 直	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	砂粒	褐色	考
1	壺形 土器 土師器	A 19.2	腹部はぼ球形を呈し、口縁部は「く」の字状に開く。	口縁部内・外面一横ナデ 腹部外面一ナデ 内面一ヘラナデ	砂粒 普通 にぼい褐色	40%	
2	壺形 土器 土師器	C 8.2	底部は平底で突出し、腹部はぼ球形を呈する。	腹部内・外面一ヘラナデ	砂粒 普通 にぼい褐色	70%	
3	壺形 土器 土師器	A 17.2	腹部はぼ球形を呈し、口縁部は外反しながらわざかに開く。	口縁部内・外面一横ナデ 腹部外側一ナデ 内面一ヘラナデ	砂粒 普通 にぼい褐色	40%	腹部外側 付着
4	壺形 土器 土師器	A 14.6 B 12.6 C 5.8	底部は平底で、腹部は内側しながら外上方へ立ち上がり、腹部上位で内傾する。口縁部はぼ直立する。	口縁部内・外面一横ナデ 腹部内・外面一ナデ	砂粒 普通 にぼい褐色	90%	
5	壺形 土器 土師器	A 15.8	腹部はぼ球形を呈し、口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面一横ナデ 腹部外側一ナデ後端なへく開き 内面一ヘラナデ	砂粒 普通 明赤褐色	35%	
6	壺形 土器 土師器	C 7.3	底部は平底で、腹部は内側しながら外上方へ立ち上がる。	腹部外側一ナデ 内面一横ナデ	砂粒 普通 にぼい褐色	20%	
7	壺形 土器 土師器	A 18.2 B 29.4 C 8.2	底部は平底で、腹部はぼ球形を呈する。口縁部は直立してから外反して開く。	口縁部内・外面一横ナデ 腹部外側一ナデ 内面一ヘラナデ	砂粒 普通 にぼい褐色	65%	
8	壺形 土器 土師器	A 17.0	腹部はやや共側を呈し、口縁部は「く」の字状に開く。	口縁部内・外面一横ナデ 腹部外側一ナデ後端なへく開き 内面一ナデ	砂粒 普通 にぼい褐色	30%	
9	壺形 土器 土師器	A 13.9 B 15.2 C 5.7	底部は平底で、腹部は内側しながら外上方へ立ち上がり、腹部上位で内傾する。口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面一横ナデ 腹部外側一ナデ 内面一ナデ	砂粒 普通 黒色	90%	
10	壺形 土器 土師器	C 5.2	底部は平底で、腹部は内側しながら大きくて開いて立ち上がる。底部中央に穿孔している。	腹部外側一ナデ 内面一ナデ	砂粒 普通 浅赤褐色	20%	
11	壺形 土器 土師器	A 14.7	底部は内側しながら大きくて開いて立ち上がり、口縁部はやや外傾する。内面の口縁部と体部の縁に縫を有する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部内・外面一ナデ	砂粒 普通 赤褐色	80%	



第145図 第34号住居跡出土遺物実測図 (1)四底尖脚壺土出瓶底封节口高 15cm



第146図 第34号住居跡出土遺物実測図（2）



第147図 第34号住居跡出土遺物実測図（3）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
12	変形土器 土師器	A 17.6 B 30.4 C 7.4	底部は平底で、側部は丸く張り、球形に近い。口縁部はわずかに開き中位が膨らむ。	口縁部内・外面一横ナデ 側部外面一ナデ 内面一ラナデ	砂粒・粗疋 普通 に近い褐色	85%
13	変形土器 土師器	A 13.0 B 19.0 C 6.2	底部はやや凹げ底で、側部はほぼ球形を呈する。口縁部は外反しながら開き、端部は丸い。	口縁部内・外面一横ナデ 側部外面一ナデ 内面一ラナデ	砂粒 普通 淡黄褐色	85%
14	変形土器 土師器	A (15.8)	側部はほぼ球形を呈し、口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面一横ナデ 側部外面一ナデ 内面一ラナデ	砂粒 普通 に近い褐色	40%
15	変形土器 土師器	A 15.0 B 22.7 C 8.0	底部は平底で、側部は内擣しながら外上方向に立ち上がり上位から内傾する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部内・外面一横ナデ 側部外面一ナデ 内面一ラナデ	砂粒 普通 深褐色	90%

### 第35号住居跡（第148図）

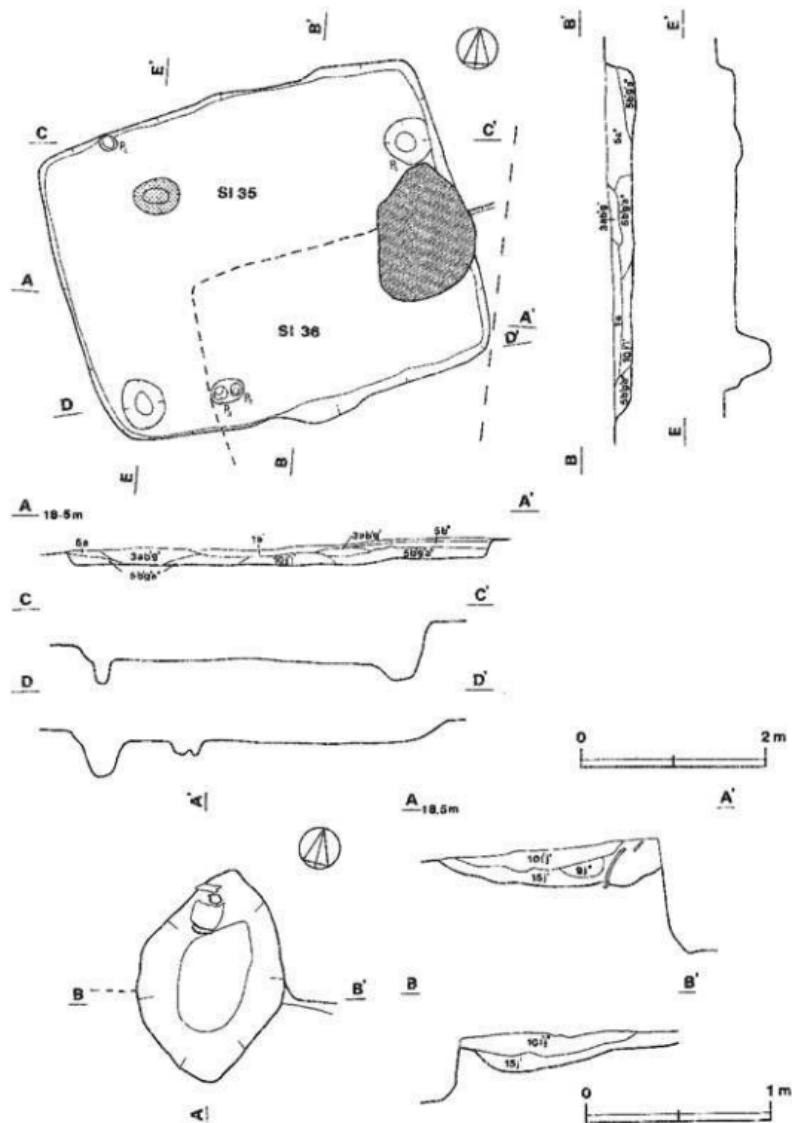
本跡はJ2baを中心に確認され、第34号住居跡の南側約1m、第3号溝の北側約7mに位置している。第36号住居跡と第1号土坑が重複しており、第36号住居跡が本跡の上に構築され、第1号土坑が本跡を切っていることから、本跡が最も古い。

平面形は長軸4.35m・短軸3.70mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-68.5°-Eを指している。壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は15~20cmである。床は平坦であるが、西から東へ向かってやや傾斜し、4~6cm低くなっている。中央部はよく踏み固められていて堅い。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4か所検出されているが、15~50cmと差があり配置も規則性がなく、主柱穴ではないと思われる。炉跡が中央部から北西コーナー部寄りに検出され、平面形は長径50cm・短径40cmの橢円形を呈し、床を7cmほど掘り回めている。焼土量は少なく、炉床はあまり焼けていない。南西コーナー部には貯蔵穴が検出され、平面形は長径55cm・短径45cmの橢円形を呈し、塊状に掘り込まれ深さは39cmである。覆土はロームブロックを含む黒褐色土や暗褐色土が複雑な層を呈しており、人為的に埋め戻されたと思われる。また床面には焼土の広がりや柱状の炭化材の散布が認められ、火災を受けていると推定される。

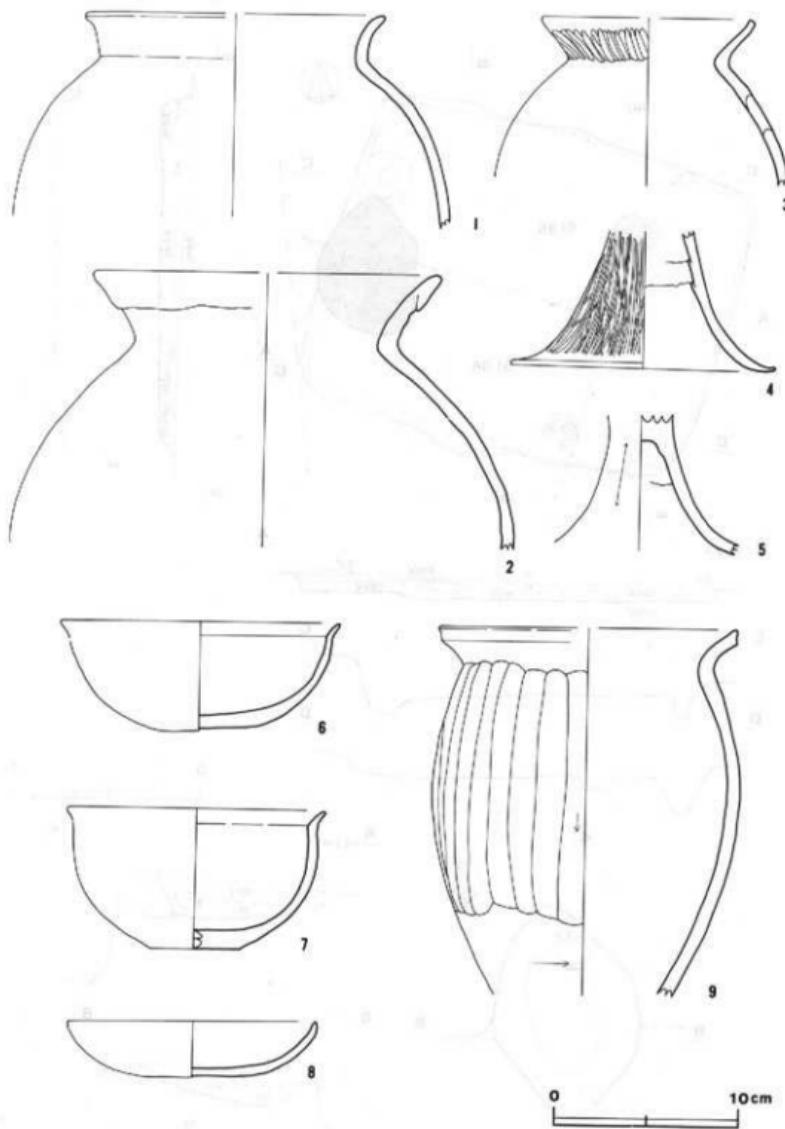
遺物は比較的少なく、いずれも土師器である。南西コーナー部の床面から完形の壺形土器（第149図-6）や炉跡の北側の覆土から完形の壺形土器が出土している。このほか変形土器や高壺形土器も出土している。

### 出土土器観察表（第149図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	変形土器 土師器	A 16.0	側部はほぼ球形を呈し、口縁部は外反しながら立ち上がる。	口縁部内・外面一横ナデ 側部内・外面一ナデ	砂粒 普通 暗赤褐色	15%
2	変形土器 土師器	A 18.4	側部はほぼ球形を呈し、口縁部は「く」の字状に開く。	口縁部内・外面一横ナデ 側部内・外面一ナデ	砂粒 普通 に近い褐色	15%



第148図 第35・36号住居跡・カマド実測図



第149図 第35・36号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
3	變形土器 土師器	A 11.5 H 6.0	底部は錐形を呈し、口縁部は「く」の字状に開く。	口縁部内・外面一様ナダ 底部外面へラオサエ 底部内・外面ナダ	砂粒 普通 暗褐色	30%
4	変形土器 土師器	D 34.3	底部欠損。脚部は「ウッパ」状に開く。	脚部外底一様位のヘラ削き 内面ナダ 上位に輪横筋 底部内・外面一様ナダ	砂粒 普通 淡褐色	40%
5	変形土器 土師器		脚部は「ウッパ」状に開く。	脚部外底一様位のヘラ削き 内面ナダ	砂粒 普通 棕色	40%
6	變形土器 土師器	A 35.6 H 6.0	底部は平底で、体部は内削しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は既に外傾する。内面の口縁部と体部との境に棱を有する。	底部 不定方向のヘラ削り 口縁部内・外面 横ナダ 底部内・外面 ナダ	砂粒 普通 赤褐色	100% 体部外面に赤彩
7	變形土器 土師器	A (23.4) B 7.7 C (4.8)	底部は平底で、体部は内削しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は外傾する。内面の口縁部と体部の境に棱を有する。	口縁部内・外面一様ナダ 体部内・外面ナダ	砂粒 普通 暗褐色	40%
8	球形土器 土師器	A 23.5 B 3.3	底部は平底で、体部は内削しながら大きく開いて立ち上がる。	口縁部内・外面 横ナダ 体部内・外面へラナダ	砂粒 普通 赤色	100%

### 第36号住居跡（第148図）

本跡はJ2b<sub>3</sub>を中心確認され、第34号住居跡の南側約3mに位置している。第35号住居跡と第1号土坑と重複しているが、本跡は第35号住居跡の上に貼り床としており、第1号土坑によって切られていることから、第35号住居跡より新しく第1号土坑より古いと考えられる。耕作による削平のため、本跡はカマドと北壁の一部しか残っておらず、東側半分は調査区域外へ延びている。

平面形は長軸・短軸とも不明である。主軸方向も推定でN-20°-Wぐらいと思われる。壁はカマドの東側だけしか残っておらず、立ち上がりも不明瞭で壁高は約5cmである。床面はカマドの周辺だけが残っており、よく踏み固められているが他は削平されている。第35号住居跡と重複する部分は貼り床をしており、ほとんどが削平されているが、カマドの南側では約5cmの厚さでロームブロックが固められている。ビットは検出されなかった。カマドは北壁中央に付設されていたものと思われ、耕作のためほとんど破壊され焼土が残っていただけである。推定で長さ114cm、幅80cmで床を11cm掘り凹めている。覆土はなく床面が露出している。

遺物はカマド内から、土師器の變形土器（第149図-9）が出土しただけである。

### 出土土器観察表（第149図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
9	變形土器 土師器	A 16.0	底部は中位でやや盛り、長脚を呈する。口縁部は外反しながら開き、底部を上方へつまみ出している。	口縁部内・外面 横ナダ 脚部外底上・中位一様位 下位 棱位のヘラ削り 脚部内面ナダ	砂粒 普通 灰褐色	40%

### 第37号住居跡（第150・151図）

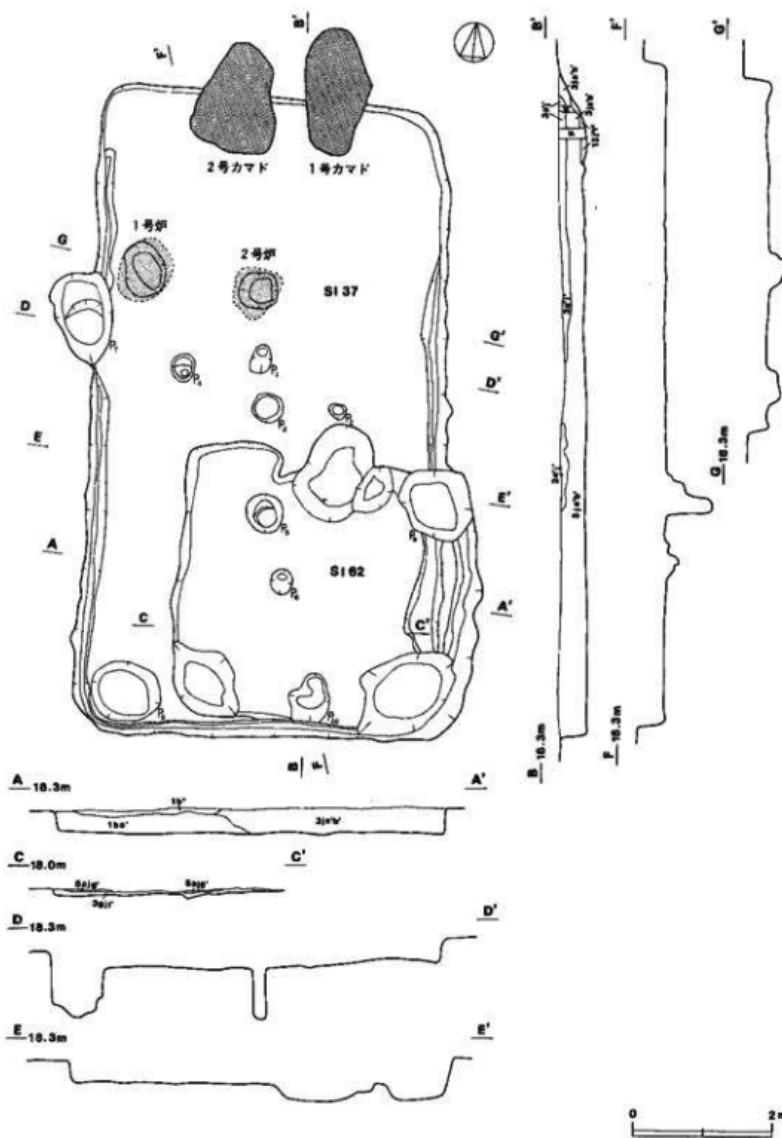
本跡はIIb<sub>2</sub>を中心に確認され、第38号住居跡の東側約2m、第25号住居跡の北西側約1mに位置している。第62号住居跡と重複しており、本跡は第62号住居跡の上に構築されていることから、本跡の方が新しい。

平面形は長軸9.05m・短軸5.05mの長方形を呈し、上軸方向はN-7°-Wを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約35cmである。床は全体に平坦で堅く、よく縮まっている。第62号住居跡との重複部分は貼り床となっており、踏み固められたロームが3cm前後の厚さで残っている。ピットはP<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>の10か所検出され、いずれも径23～60cm・深さ14～74cmと不揃いで、配置的にも規則性がなく上柱穴ではないと思われる。また、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>は本跡に伴うものかどうか不明である。P<sub>6</sub>は長径100cm・短径85cmの楕円形を呈し、25cmほど掘り込まれ、南西コーナー部に位置しており、貯蔵穴かと思われる。炉跡が住居跡中央部のやや北寄りの位置と、西壁寄りの位置に2基検出された。第1号炉は長径80cm・短径55cmの楕円形を呈し、床面を21cm掘り凹めている。第2号炉は径約50cmのほぼ円形を呈し、床を32cm掘り凹めている。いずれも焼土量は少なく、が床もあまり焼けていない。カマドは、北壁中央部に約50cm離れて2基付設されている。いずれもはとんど崩壊しており、火井・袖部は残っていない。第1号カマドは長さ155cm・幅90cmで、北壁を80cm切り込んでいる。奥壁はゆるやかに立ち上がり、火床は床を17cm掘り凹めている。どちらもほぼ同じ規模で、火床は焼けてブロック状を呈し焼土が充満している。覆土は自然堆積の状態を示しており、ローム粒子とロームブロックをわずかに含む暗褐色土と黒褐色土が主である。北壁下を除いて壁溝が周回しており、上幅約18cm・下幅約17cm・深さ約5cmである。

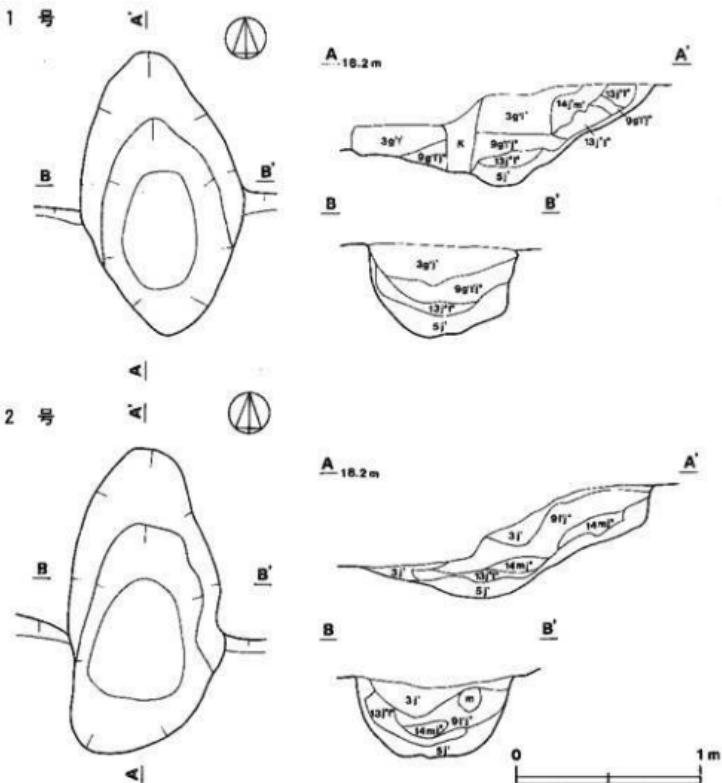
遺物の出土量は多く、土師器の變形土器片は1,155点も出土し、环形土器や高台付环形土器も多い。須恵器では环形土器片が170点出土している。土器のほかには覆土から刀子、鉄鏃、釘などが出土している。

### 出土土器観察表（第152・153図）

図版番号	器種	法藻	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	變形土器 上部	A (19.0)	口縁部はやや長鈍を呈する。口縁部は外反2缺孔開き、端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面一横ナデ 口縁部外面 ヘラ削り 内面 ナデ	砂粒 普通 暗赤褐色	20%
2	變形土器 上部	A (21.6)	口縁部は「コ」の字状を呈する。	口縁部内・外面一横ナデ 口縁部外面 振抜のヘラ削り 内面一ナデ	砂粒 普通 赤色	10%
3	變形土器 上部	A 14.9	口縁部「コ」の字状を呈し、外端部に沈窓がある。	口縁部内・外面 橫ナデ 口縁部外面一横位のヘラ削り 内面一ナデ	砂粒 普通 橙色	15%
4	環形土器 上部	A (13.0) B 4.2 C 6.6	底部は平底で、体部は内擱しながら外上方へ立ち上がる。	底部一回転系切り後無調整 体部外面一本抜き痕は弱い 内面 ヘラ削り	砂粒 普通 橙色	50%

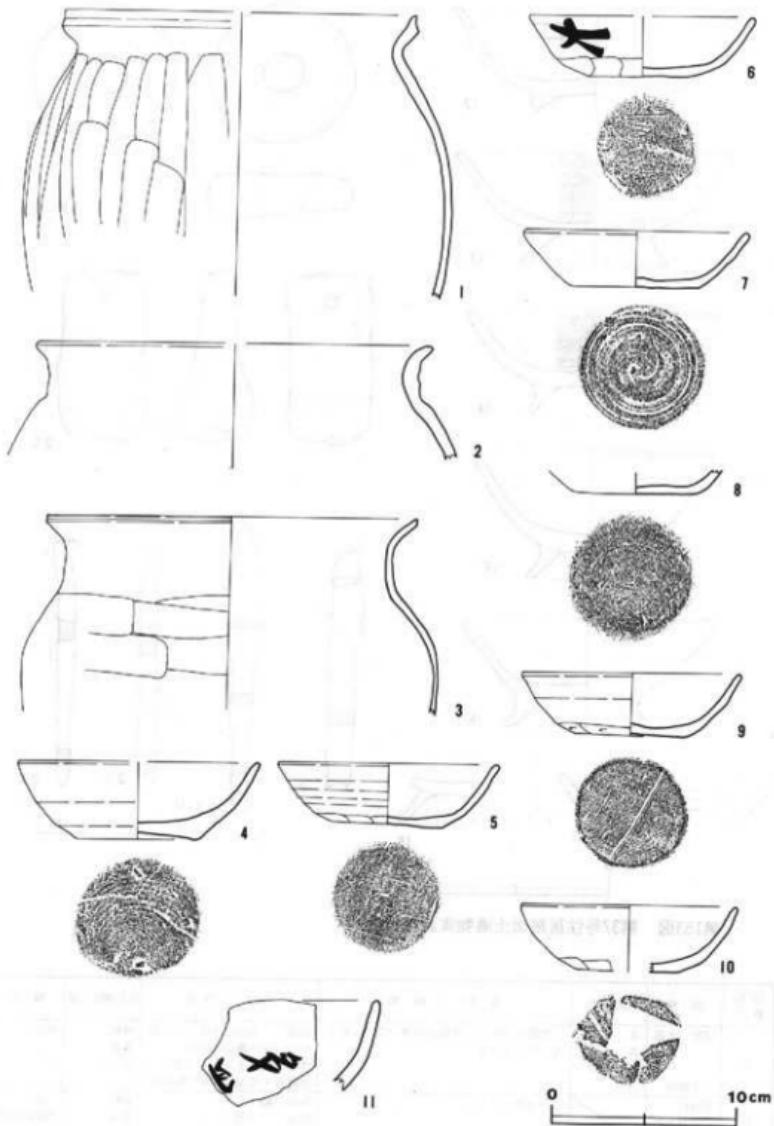


第150図 第37・62号住居跡実測図

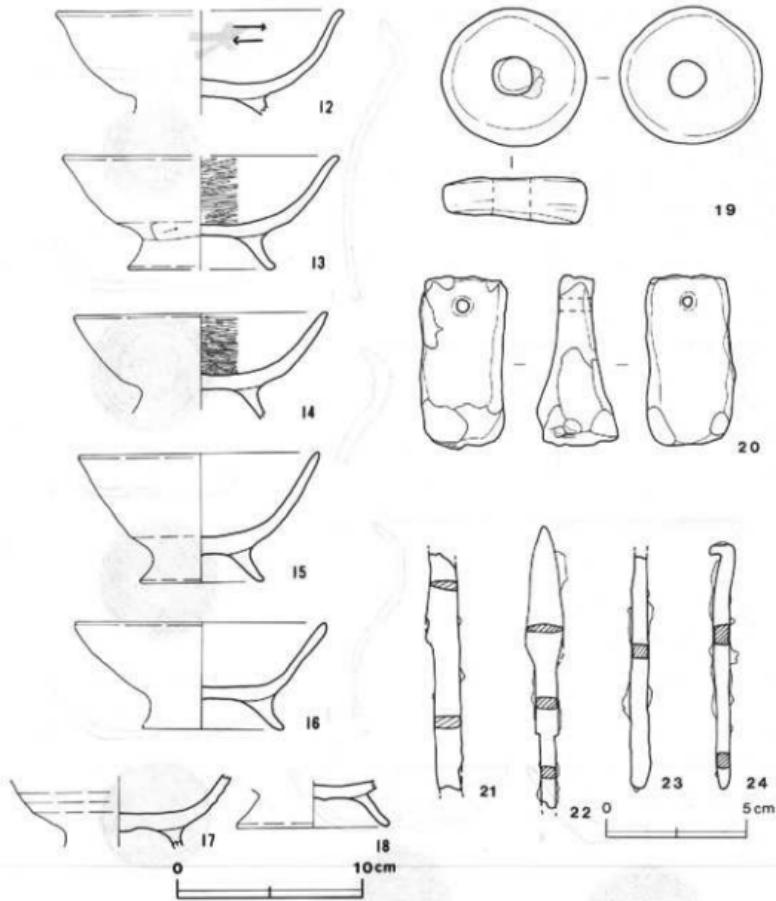


第151図 第37号住居跡カマド実測図

図版番号	器種	法基	器形の特徴	手法の特徴	地土・焼成色	備考
5	環形 土師器	A 12.0 B 4.3 C 6.1	底部は平底で、体部は内壁気味に外上方へ立ち上がる。	底部一切り離し不規則、手持ちヘラ削り 体部下端—手持ちヘラ削り	砂粒 普通 にぶい褐色	60%
6	環形 土器	A (12.4) B 3.3 C 5.4	底部は平底で、体部は内壁しながら立ち上がり。口縁端部は丸い。	底部一切り離し不規則、手持ちヘラ削り 体部下端—手持ちヘラ削り	砂粒 普通 淡褐色	60% 滴青「大」
7	環形 土器	A 12.0 B 3.1 C 6.8	底部は平底で、体部はやや内壁気味に外上方へ立ち上がる。	底部一回転ヘラ削り後軽くへラ削り 体部内・外面・水浸き痕は弱い	砂粒 普通 にぶい褐色	100%
8	環形 土器	C 6.6	底部は平底で、体部は外上方へ立ち上がる。	底部・川松み切り後無調整 体部外側一様ナカ 内面 ヘラ削き	砂粒 普通 赤色	20% 内証黒色処理
9	環形 土器	A 12.0 B 3.6 C 6.0	底部は平底で、体部はやや内壁しながら外上方へ立ち上がる。	底部一方向の手持ちヘラ削りで、切り離しは不明 体部内・外面・水浸き痕は弱い	砂粒 普通 褐色	100%



第152図 第37号住居跡出土遺物実測図（1）



第153図 第37号住居跡出土遺物実測図（2）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	粘土・焼成・色調	備考
10	環形土器	A 11.8 B 5.2 C 3.6	底部は平底で、体部は内側しながら外上方へ立ち上がる。	底部一一方向の手持ちヘラ削りで、切り離しは不明 体部下端一手持ちヘラ削り 体部内・外面一水焼き痕は無い	砂粒 普通 灰白色	90%
	土師器					
11	高台付 環形土器 土師器		口縁部片である。	外面一横ナデ 内面一ヘラ削き	砂粒 普通 淡黄色	内面黒色処理 外面に崩落
12	高台付 環形土器 土師器	A (15.6) B 5.2	体部は内側しながら外上方へ立ち上がり、 口縁部は外反する。高台は外下方へのびる。	体部内面一ヘラ削き 高台は貼り付け 高台内・外面一横ナデ	砂粒 普通 淡黄色	60% 内面黒色処理

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	断面・色調	備考
13	高台付 環形土器 上部器	A (15.0) B 6.2 D (8.2) E 1.9	体部は内側しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。高台は外下方へのびる。	体部内・外面一ヶ所磨き 高台は貼り付け 高台内・外面一箇ナデ	砂粒 普通 にぶい褐色	70% 内面黒色処理
14	高台付 環形土器 上部器	A 13.8	体部は内側しながら外上方へ立ち上がり、高台は外下方へのびる。	体部内面一ヶ所磨き 高台は貼り付け 高台内・外面一箇ナデ	砂粒 普通 にぶい褐色	85%
15	高台付 環形土器 上部器	A (13.2) B 7.0 D 7.8 E 1.5	体部は外反気味で外上方へ立ち上がり、高台は外下方へのびる。	体部内面一箇ナデ一ヶ所磨き 高台は貼り付け 高台内・外面一箇ナデ	砂粒 普通 褐色	70%
16	高台付 環形土器 上部器	A 13.7 B 5.8 D 8.8	体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸い。高台は外下方へのびる。	内・外面一ヶ所磨き 高台は貼り付け 高台内・外面一箇ナデ	砂粒 普通 淡黄色	80%
17	高台付 環形土器 上部器		体部は内側しながら外上方へ立ち上がり、高台は外下方へのびる。	内・外部一ヶ所磨き 高台は貼り付け 高台内・外面一箇ナデ	砂粒 普通 にぶい褐色	50%
18	高台付 環形土器 上部器	D 8.1 E 1.6	高台は外下方へのびて端部は丸い。	高台は貼り付け 高台内・外面一箇ナデ	砂粒 普通 にぶい褐色	40%

### 石製品（第153図-19・20）

19は紡錘車で完形品である。全体に削減している。長径5.2cm・短径4.9cm・厚さ1.3~1.7cm・孔径13mmで、石質は軽石である。

20は砥石（提紙）である。長方形を呈し一端に径4mmの孔を要する。両端を除く4面が使用されている。長さ6cm・幅3.1cm・厚さ1.2~2.9cmで、石質は安山岩である。

### 鉄製品（第153図-21~24）

21は刀子で両端部が欠損する。刃側に刃を有する。現存長は8.5cm・刃幅1.1cmである。

22は鎌で茎部が欠損する。穂は細長く、断面はレンズ状を呈す。現存長は10.1cmである。

23は鎌の基部で、断面は方形を呈する。現存長は8.4cmである。

24は釣で完存品である。頭部は屈曲し、断面は方形を呈する。長さは8.8cmである。

### 第38号住居跡（第154図）

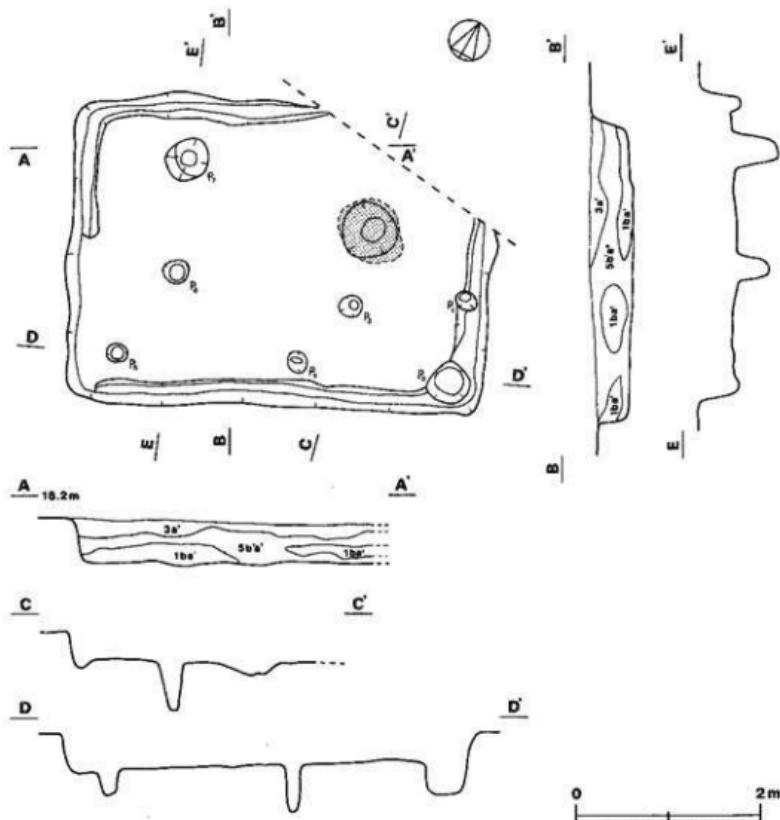
本跡はIIb<sub>2</sub>を中心に確認され、第37号住居跡の西側約2m、第22号住居跡の南側約8.8mに位置している。北コーナー部は道路にかかっている。

平面形は長軸4.60m・短軸3.30mの長方形を呈し、長軸方向はN-62°-Eを指している。壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は約35cmである。南西壁の南半分を除いて各壁下には壁溝が開いており、上幅約19cm・下幅約10cm・深さ約7cmである。床は平坦で堅く締まっている。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>7</sub>の7か所検出され、径は約25cmである。配置的に南に偏しており、上柱穴の可能性は薄い。東コーナー部に位置するP<sub>2</sub>は、径約45cmの円形を呈し、深さ38cmで貯蔵穴とも考えられる。

中央部から北東壁寄りに炉跡が検出され、平面形は径約60cmの円形を呈し、炉床は床を13cm掘り

問めている。焼土の量は少なく炉床もあまり焼けていない。本跡の周囲は、耕作により搅乱を受けており、本跡の覆土も全体に搅乱され、ロームブロックを含む褐色土や黒褐色土が混じり合っている。

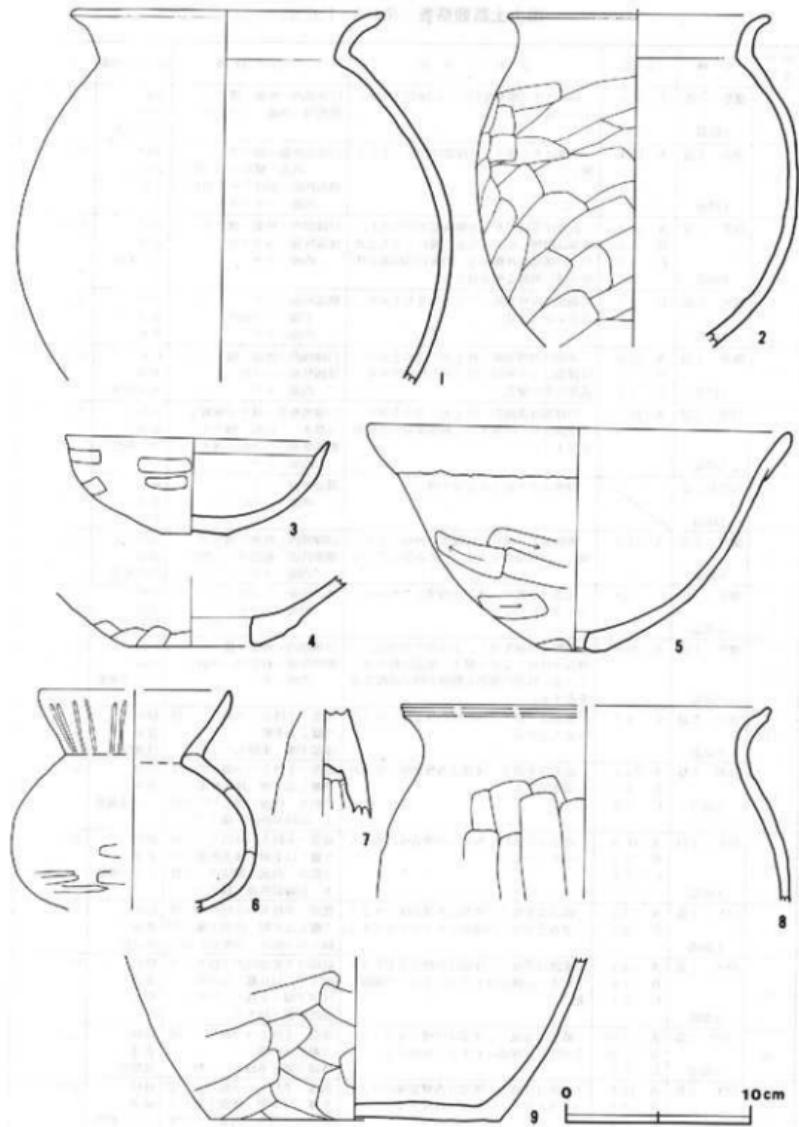
遺物は東コーナー部付近の床面から、土師器の壺形土器（第155図-3）や甑形土器（第155図-5）が出土し、そのほか壺形土器、壺形土器が出土している。このほかに本跡に伴う遺物ではないが、南西壁付近の搅乱された覆土上層から集中して、土師器の壺形土器、壺形土器、高台付壺形土器や須恵器片が出土している。これらの遺物は、本跡の遺物よりも新しい時期のものであり、本跡の上にあった別な造構が、耕作による搅乱を受け遺物だけが残ったものと思われる。



第154図 第38号住居跡実測図

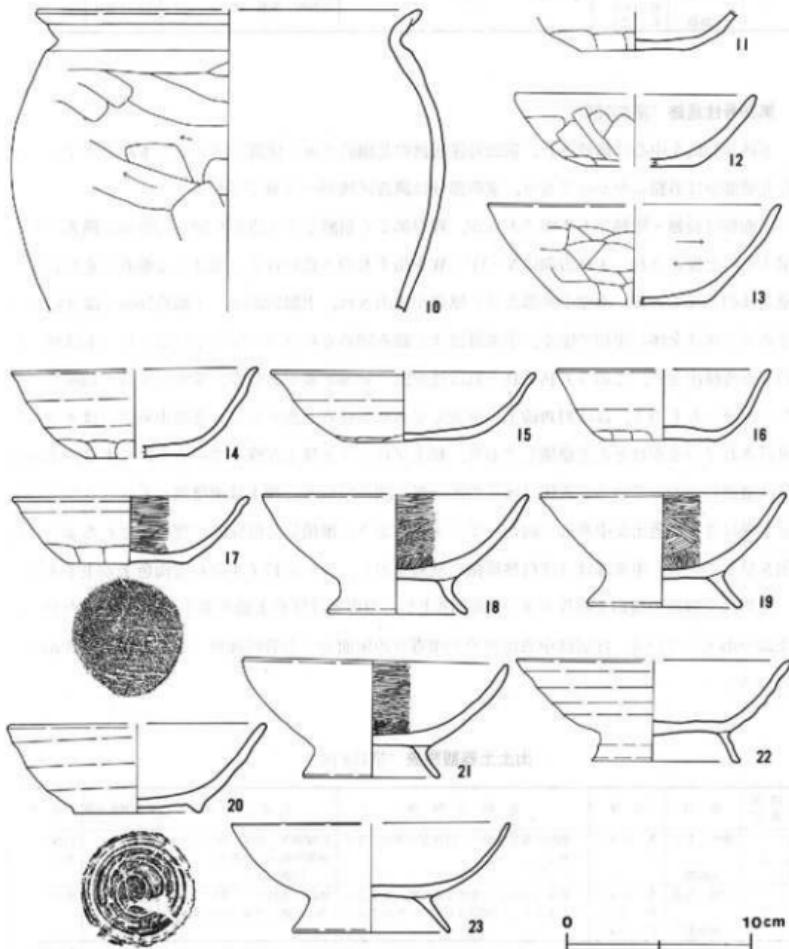
## 出土土器観察表 (第155・156図)

団体番号	器種	法寸	器形の特徴	手法の特徴	差上-焼成-色調	備考
1	變形土器 土師器	A 16.8	底部はほぼ丸形を呈し、口縁部は外反しながら開く。	口縁部内-外面-横ナギ 底部内-外面-ヘラナギ	砂粒 普通 明赤褐色	50%
2	變形土器 土師器	A 13.4	底部は丸く盛り、口縁部は外反しながら開く。	口縁部外-横ナギ 内面-横位のヘラ削り 底部外-斜位のヘラ削り 内面-ヘラナギ	砂粒 普通 赤褐色	80%
3	堆形土器 土師器	A 14.3 B 5.2 C 3.7	底部は平底であるが中央部がやや盛り、体部は内壁しならぎなく開いて立ち上がり、口縁部は外反する。内面の口縁部と体部の間に閉塞な縫を有する。	口縁部内-外面-横ナギ 体部外-内面-ヘラナギ 内面-ナギ	砂粒 普通 暗赤褐色	95%
4	瓢形土器 土師器	D 5.3	側部は内壁気味に外上方へ立ち上がり、底部中央に穿孔。	側部外-ナギ 下端-ヘラ削り 内面-ナギ	砂粒 普通 黑色	10%
5	瓢形土器 土師器	A 23.0 B 12.0 C 2.8	体部は内壁気味に外上方へ立ち上がり、口縁部はやや外傾し折り返し口縁である。底部中央に穿孔。	口縁部内-外面-横ナギ 体部外-ヘラ削り 内面-ナギ	砂粒 普通 明赤褐色	80%
6	堆形土器 土師器	A (10.3)	口縁部は直線的に外上方へ立ち上がり、先端部はやや内増す。側部は底平き基部を呈する。	口縁部外-横ナギ後壁なへ ウ巻き 内面-横ナギ 底部外-ヘラ削り後ナギ 内面-ナギ	砂粒 普通 明赤褐色	15%
7	高环形土器 土師器		側部はやや膨らみながら開く。	側部外-ナギ 内面-ヘラナギ	砂粒 普通 褐色	15%
8	變形土器 土師器	A 24.0	側部は丸く盛り、口縁部は外反しながら開く。口縁底部を上方につまみ出している。	口縁部内-外面-横ナギ 側部外-横位のヘラ削り 内面-ナギ	砂粒 普通 明赤褐色	20%
9	變形土器 須恵器	C 7.8	底部は平底で、体部は内壁しながら外下方へ立ち上がる。	体部外-ヘラ削り 内面-ヘラナギ	砂粒 普通 灰褐色	15%
10	變形土器 土師器	A 20.8	側部は長脚を呈し、上位がやや盛る。口縁部は外反しながら開き、堆部は折り返している。外縁の側部と側部の堤状閉塞な縫を有する。	口縁部内-外面-横ナギ 側部外-斜位のヘラ削り 内面-ナギ	砂粒 普通 二重い褐色	20%
11	环形土器 土師器	C 6.1	底部は平底で、体部は内壁気味に外上方へ立ち上がる。	底部-手持ちヘラ削りで、切 り離しは不明 作部下端-手持ちヘラ削り	砂粒 普通 浅褐色	40%
12	环形土器 土師器	A (13.1) B 4.0 C 5.6	底部は平底で、体部は内壁気味に外上方へ立ち上がる。	底部-手持ちラ削りで、切 り離しは不明 体部外-ヘ ラ削り 内面-横位のヘラ削 き 口縁部内-横ナギ	砂粒 普通 にぶい褐色	50%
13	环形土器 土師器	A (16.0) B 5.4 C 7.8	底部は平底で、体部は内壁気味に外上方へ立ち上がる。	底部-手持ちヘラ削りで、切 り離しは不明 体部外-ヘ ラ削り 内面-横位のヘラ削 き 口縁部外-横ナギ	砂粒 普通 にぶい褐色	20%
14	环形土器 土師器	A 13.4 C 4.9	底部は平底で、体部は内壁気味に外上方へ立ち上がり。口縁部はわざかに外反する。	底部-手持ちヘラ削りで、切 り離しは不明 体部下端-手持ちヘラ削り	砂粒 普通 灰白色	40%
15	环形土器 土師器	A 14.5 B 3.8 C 7.7	底部は平底で、体部は内壁しながら立ち上がる。口縁部はわざかに外反して堆部は丸い。	底部-手持ちヘラ削りで、切 り離しは不明 体部下端-手持ちヘラ削り 底部内-横ナギ	砂粒 普通 褐色	60%
16	16形土器 土師器	A (11.6) B 3.9 C 6.2	底部は平底で、体部は内壁しながら立ち上がる。口縁部はわざかに外反する。	底部-手持ちヘラ削りで、切 り離しは不明 体部下端-手持ちヘラ削り	砂粒 普通 浅褐色	40%
17	环形土器 土師器	A 12.8 B 3.6 C 6.4	底部は平底で、体部は内壁気味に外上方へ立ち上がり。口縁部は外反する。	底部-手持ちヘラ削りで、切 り離しは不明 体部下端-手持ちヘラ削り 内面-ヘラ削り	砂粒 普通 にぶい褐色	60%
18	高台付 环形土器 土師器	A 24.4 B 6.5 D 7.2	体部は内壁しながら外上方へ立ち上がり、高台は外下方へのび堆部は丸い。	体部内-ヘラ廢き 高台は盛り付け 高台内-外面-横ナギ	砂粒 普通 にぶい褐色	70%



第155図 第38号住居跡出土遺物実測図（1）

図版 番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	粘土・焼成色調	備考
19	高台付 环形土器	A 13.5 B 6.1 D ( 8.1 ) E 1.5	体部は内壁気味に外上方へ立ち上がり、 高台は外下方へのび端部は丸い。	体部外面一ハラ摩き 高台は貼り付け 高台内・外面一横ナデ	砂粒 普通 赤色	90%
20	高台付 环形土器	A (14.0) B 4.8 D 6.9 E 0.5	体部はわずかに内寄しながら外上方へ立ち上がる。高台は短く三角形状を呈する。	底部一回転ヘラ切り 高台は貼り付け 高台内・外 面一横ナデ 内・外面の水模き痕は弱い	砂粒 普通 浅黄褐色	70%



第156図 第38号住居跡出土遺物実測図（2）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	地土・焼成・色調	備考
21	高台付 环形土器	A 14.5 B 6.3 D 7.4 E 1.8	体部は内側しながら外上方へ立ち上がり、高台は外下方へのび、端部は丸い。	体部内面へラözき 高台は貼り付け	砂粒 普通 赤褐色	70%
	土師器			高台内・外面一横ナデ		
22	高台付 环形土器	A (15.0) B 5.5 D 8.0 E 1.4	体部は内側気味に外上方へ立ち上がり、高台は外下方へのび、端部に面をなす。	高台は貼り付け 高台内・外面一横ナデ 内・外の水焼き痕はやや強い。	砂粒 普通 褐色	60%
	土師器					
23	高台付 环形土器	A (15.3) B 6.0 D 8.5 E 2.0	体部は内側しながら外上方へ立ち上がり、高台は外下方へのびる。	体部内面へラözき 高台は貼り付け	砂粒 普通 にほく真褐色	40%
	土師器			高台内・外面一横ナデ		

### 第39号住居跡（第157図）

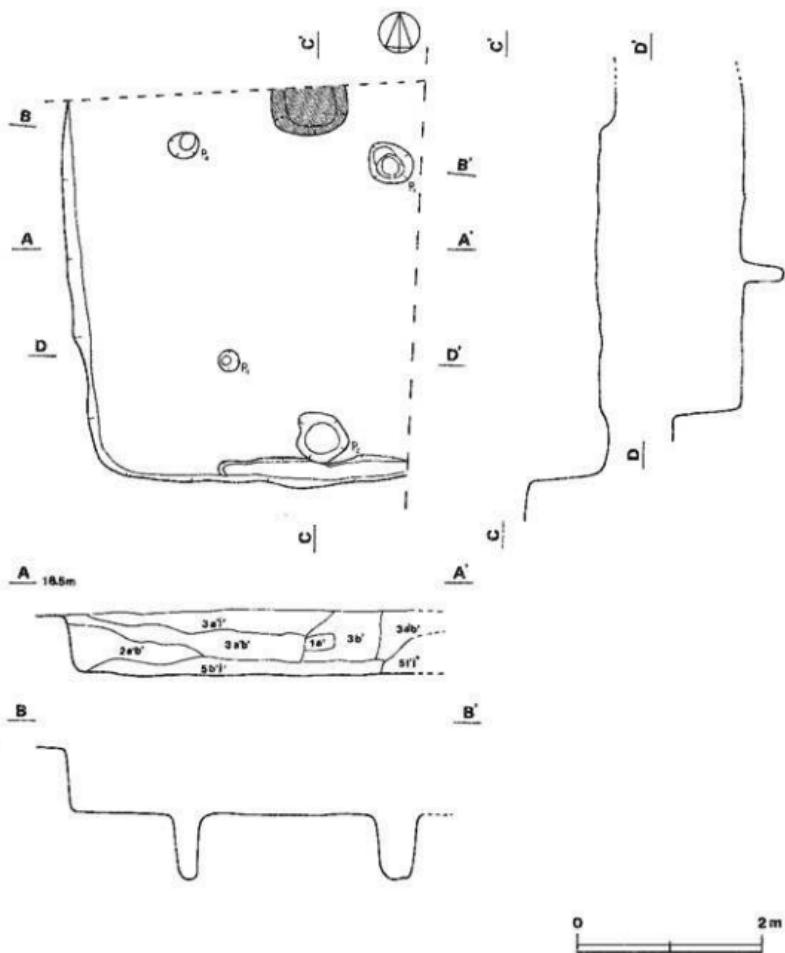
本跡はI2b<sub>2</sub>を中心確認され、第29号住居跡の北側約2mに位置している。本跡のカマドを含む北壁部分は道路にかかっており、東側部分は調査区域外へと延びている。

平面形は長軸・短軸とも不明であるが、残存部から判断して1辺が4.50~5.00mの隅丸方形を呈すものと推定され、主軸方向はN-11°-Wを指すものと思われる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約75cmである。南壁中央部だけに壁溝が検出され、上幅約20cm・下幅約16cm・深さ約8cmである。床は全体に平坦で堅く、中央部はよく踏み固められゴツゴツしている。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4か所検出され、このうちP<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>は径が25~50cmと差があるが、深さ72・47・73cmと深くしっかりしたもので、ほぼ対角線上に位置しており主柱穴と思われる。北壁中央部にはカマドが付設されているがほとんど崩壊しており、粘土ブロックと焼土が残っているだけである。北側部分は道路にかかっている。火床は床を約20cm掘り凹めている。覆土は南壁側からロームブロックを多量に含む褐色土が中央部に向かってくずれるように堆積し、部分的に埋め戻されたような様相を呈している。中央部はほぼ自然堆積の状態を示し、ローム粒子を含む暗褐色土が主である。

遺物は土師器の変形土器片が多く526点出土し、須恵器は環形土器が多く、そのほか高台付環形土器が出土している。住居跡中央部のやや南寄りの床面から石製紡錘車（第159図-15）が出土している。

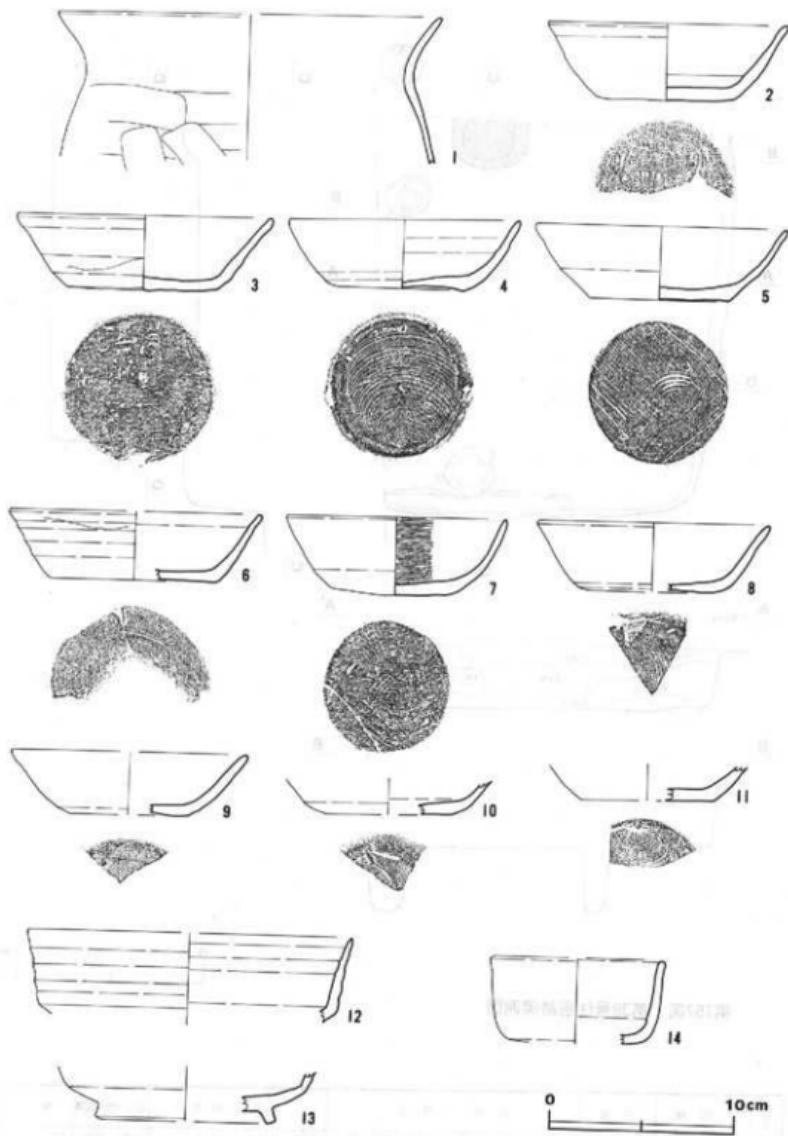
### 出土土器観察表（第158図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	地土・焼成・色調	備考
1	変形土器	A 20.6	底部の張りは細く、口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面一横ナデ 脚部外面へラözり 内面一ナデ	砂粒 普通 赤褐色	I1縁部のみ 40%
	土師器					
2	環形土器	A 12.8 B 4.2 C (7.4)	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	底部へラözり 内・外の水焼き痕は弱い	砂粒・細砂 普通 灰褐色	40%
	須恵器					



第157図 第39号住居跡実測図

房室 番号	器種	法 量	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	粘土・陶成・色調	備 考
3	環形 上器 渦巻器	A 13.6 B 4.1 C 8.0	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり、底部は丸い。	底部一手持ちヘラ削り 体部下端 面取り状の手持ち ヘラ削り 内・外面の水焼き 痕は無い	砂程・細砂 赤褐色 普通 灰白色	80%



第158図 第39号住居跡出土遺物実測図（1）

測定番号	器種	法 量	器形の特徴	手法の特徴	生土・焼成色調	備考
4	环形土器	A 12.3 B 3.8 C 7.3	底部は平底で、体部は内壁気味に外上方へ立ち上がる。	底部一回転糸切り後、外周部のみ手持ちへラ削り 内・外面の水焼き痕は弱い	砂粒・粗砂 普通 灰褐色	85%
5	环形土器	A (13.6) B 4.0 C 7.6	底部は平底で、体部は内壁気味に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸い。	底部一回転糸切り後、中央部に希切り削を残し、手持ちへラ削り。クロロ回転方向は右	砂粒 やや不良 黄褐色	45%
6	环形土器	A (13.4) B 3.7 C ( 9.0)	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり。口縁部はわずかに外反する。	底部一回転糸切り後、下持ちへラ削り 内・外面の水焼き痕は弱い	砂粒・粗砂 やや不良 黄褐色	30%
7	环形土器	A 11.8 B 4.25 C 7.0	底部は平底で、体部は内壁しながら外上方へ立ち上がる。	底部一切り離し不明で、手持ちへラ削り 内面内面へラ削き	砂粒 普通 によい橙色	95% 内面黒色処理
8	环形土器	A (12.5) B 3.75 C ( 7.0)	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。	底部一回転糸切り後、外周部のみ手持ちへラ削り 内・外面の水焼き痕は弱い	砂粒・粗砂 やや不良 黄褐色	10%
9	环形土器	A 12.4 B 3.4 C ( 6.4)	底部は平底で、体部は内壁気味に外上方へ立ち上がる。	底部一回転糸切り後、外周部は手持ちへラ削り 内・外面の水焼き痕は弱い	砂粒・粗砂 普通 灰褐色	10%
10	环形土器	C ( 7.0)	底部は平底で、体部は内壁しながら外上方へ立ち上がる。	底部一回転糸切り後無調整 クロロ回転方向は右	砂粒・粗砂 普通 灰色	10%
11	环形土器	C ( 7.1)	底部は平底で、体部は内壁気味に外上方へ立ち上がる。	底部一回転糸切り後無調整 クロロ回転方向は右	砂粒・粗砂 良好 灰褐色	10%
12	高台付 环形土器	A (17.5)	体部は外反気味に外上方へ立ち上がる。	底部外周部一回転へラ削り クロロ回転方向は右 外面の水焼き痕はやや強い	砂粒・粗砂 普通 灰褐色	10%
13	高台付 环形土器	D ( 9.8)	底部は高底気味で、高台は外下方へのびる。	器面は摩耗が激しく、調整痕不明 高台は磨り付け	砂粒・粗砂 不良 灰褐色	10%
14	高台付 环形土器	A ( 9.3)	体部は内壁気味に上方へ立ち上がり、口縁部はわずかに外傾し、底部は丸い。	底部外周部へラ削り 内・外面の水焼き痕は弱い	粗砂 良好 褐灰色	15%

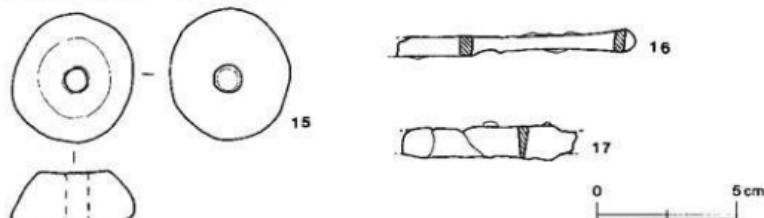
#### 石製品（第159図-15）

15は紡錘車で完成品である。截頭円錐形を呈し、全面ともよく研磨されている。長径4.7cm・短径4.3cm・厚さ2.0cm・孔径8mm・重さ52.9gで、石質は流紋岩である。

#### 鉄製品（第159図-16・17）

16は鎌の茎部である。断面は方形を呈し、現存長は8.5cmである。

17は刀子で両端部が欠損し、刃、棟の両側に刃を有する。現存長は6.2cm・刃幅1.1cmである。



第159図 第39号住居跡出土遺物実測図（2）

#### 第40号住居跡（第160図）

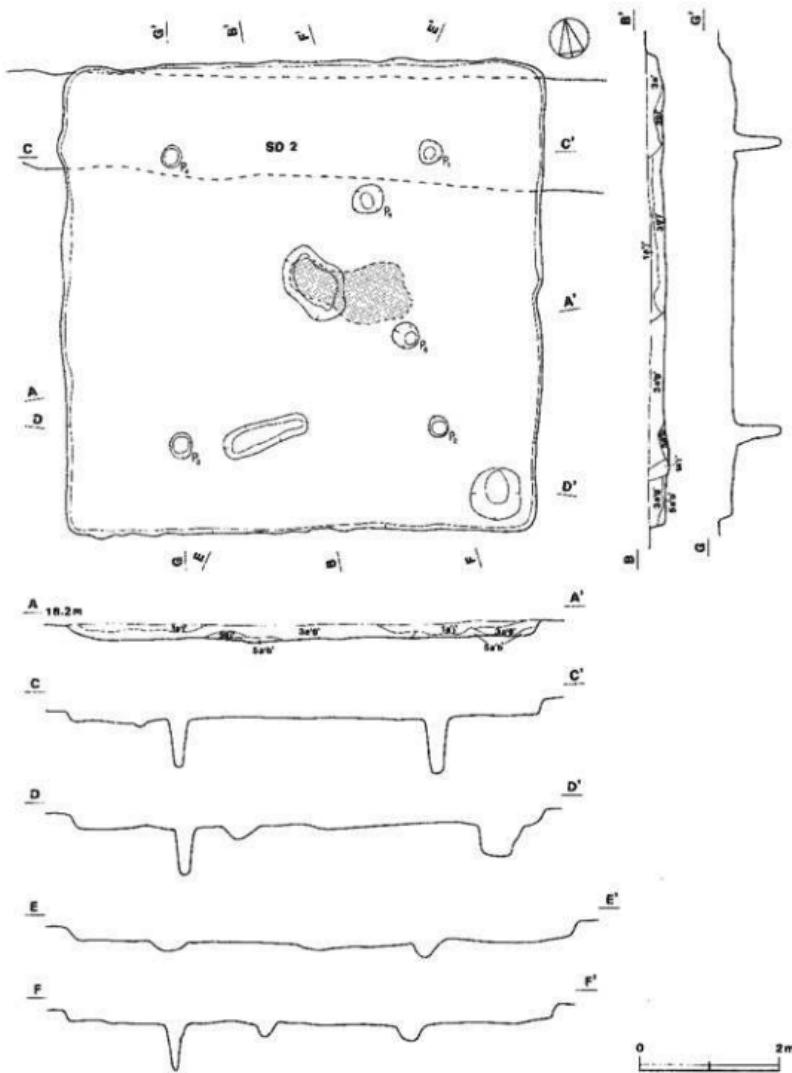
本跡はIIhsを中心に確認され、第33号住居跡の東側約12m、第28号住居跡の南側4mに位置している。第2号溝と重複しており、本跡の北側部分が第2号溝によって切られていることから、本跡の方が古い。

平面形は長軸6.80m・短軸6.75mの方形を呈し、長軸方向N-12.5°-Eを指している。壁は良好でやや外傾して立ち上がり、壁高は15~20cmである。床は部分的に凹凸があるが、全体にはほぼ平坦でよく締まって堅い。4本の主柱穴に囲まれた部分は特によく固められている。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>の6か所検出されており、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>はいずれも径35cm前後で深さ65~79cmと深く、ほぼ方形に配置されており上柱穴と思われる。炉跡は住居跡中央部に検出され、長径110cm・短径71cmの不整橢円形を呈している。炉床は床を8cmほど掘り凹め、焼けてブロック状を呈している。南東コーナーに貯蔵穴が検出され、平面形は径約75cmのほぼ円形を呈し、深さは46cmである。覆土は東側に一部擾乱が見られるが、ほぼ自然堆積の状態を示し、ローム粒子と焼土粒子をわずかに含む暗褐色土が大部分である。また、床面には焼土の広がりが多く見られ、炭化材が散布していることから火災を受けていると思われる。

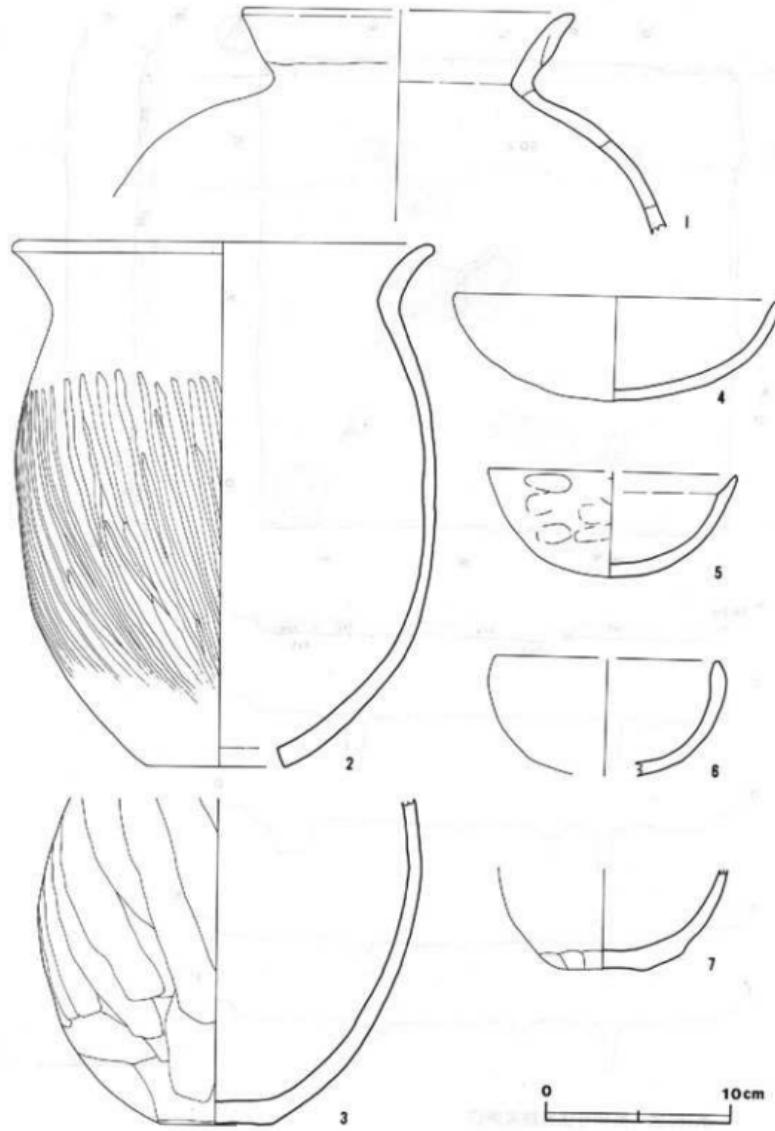
遺物はいずれも土師器で、貯蔵穴内から壺形土器（第161図-1）、P<sub>4</sub>の東側床面から环形土器（第161図-4）が出土しているほか、境形土器や壺形土器も出土している。

出土土器観察表（第161図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	粘土・焼成・色調	備考
1	壺形土器 土師器	A (17.9)	口縁部は「く」の字状に開き、胸部は球形を呈する。	口縁部内・外面一横ナデ 胸部内・外面 ヘラナデ	砂粒 普通 に赤褐色	30%
2	壺形土器 土師器	A 22.3 B 28.3	胸部は内厚しながら外上方へ立ち上がり、中位から内傾し、横円形を呈する。口縁部は外反しながら開く。底部は正円状に抜けた。	口縁部内・外面一横ナデ 胸部外面へタナデ後端斜位のヘラ磨き 内面へタナデ	砂粒 普通 に赤褐色	50%
3	壺形土器 土師器	C 7.4	底部は平底で、胸部は内厚しながら外上方へ立ち上がる。	胸部外面一ナデ 内面 ヘラナデ	砂粒 普通 褐色	35%
4	环形土器 土師器	A 17.8 B 5.7	体部は内厚しながら大きくなっている立ち上がり、弧状を呈しそのまま口縁部へ至る。	口縁部内・外面一横ナデ 体部内・外面一ナデ	砂粒 普通 赤色	90%
5	境形土器 土師器	A (13.6) B 5.2	体部は平壌状を呈し、内面の体部と口縫部の間に接を有する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外面へタナデ 内面一ナデ	砂粒 普通 褐色	30%
6	壺形土器 土師器	A (12.2)	体部は内厚しながら外上方へ立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部内・外面一ナデ	砂粒 普通 灰褐色	30%
7	壺形土器 土師器	C 4.5	底部は平底で、体部は内厚しながら外上方へ立ち上がる。	腹部外面一ナデ 下端へリボリ 内面へタナデ	砂粒 普通 に赤褐色	30%



第160図 第40号住居跡実測図

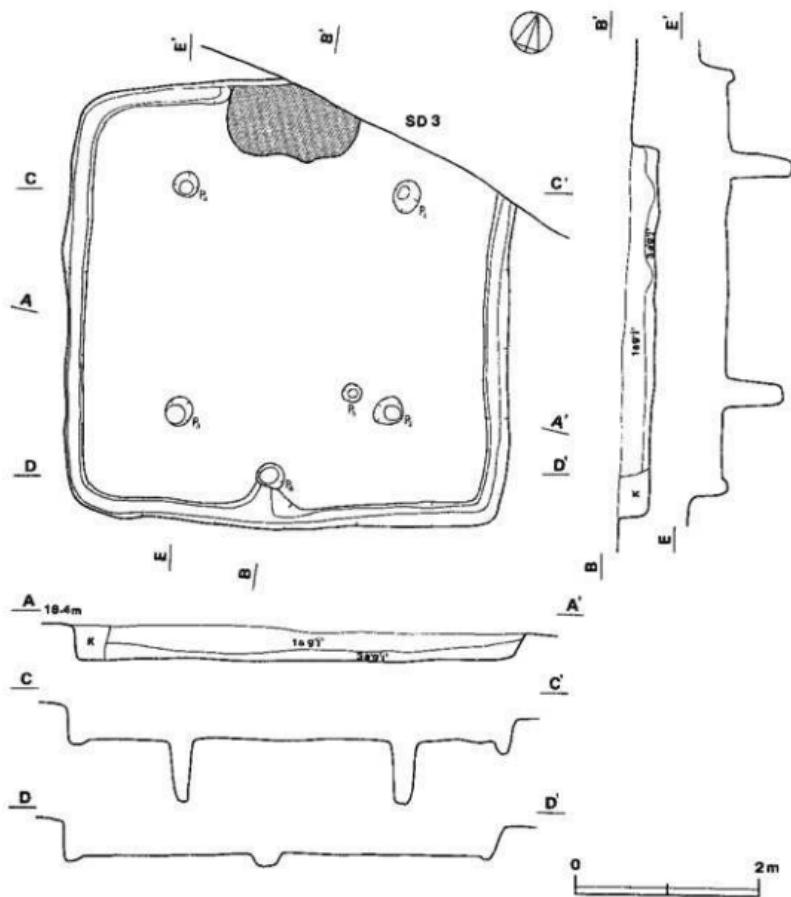


第161図 第40号住居跡出土遺物実測図

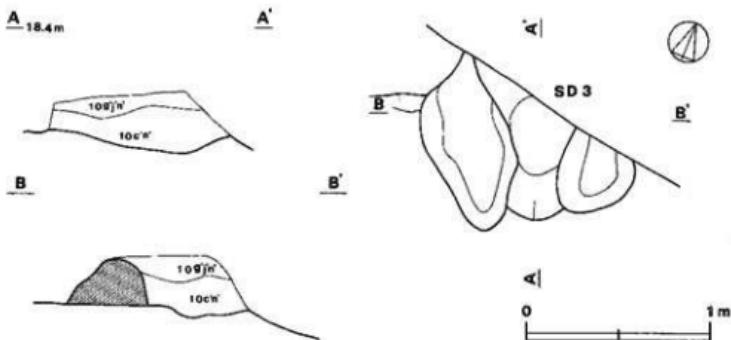
第41号住居跡（第162・163図）

本跡はJ2e<sub>2</sub>を中心確認され、第45号住居跡の北側約4m、第35号住居跡の南側8mに位置している。本跡は第3号溝と重複しており、第3号溝によって切られていることから、本跡の方が古い。

平面形は長軸4.85m・短軸4.75mの方形を呈し、主軸方向はN-19°-Wを指している。壁は造存状態が良好でほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約35cmである。各壁下には壁溝が全周しており、上幅約18cm・下幅約12cm・深さ約6cmである。床面は平坦で隙間を除いてよく踏み固められ硬化



第162図 第41号住居跡実測図



第163図 第41号住居跡カマド実測図

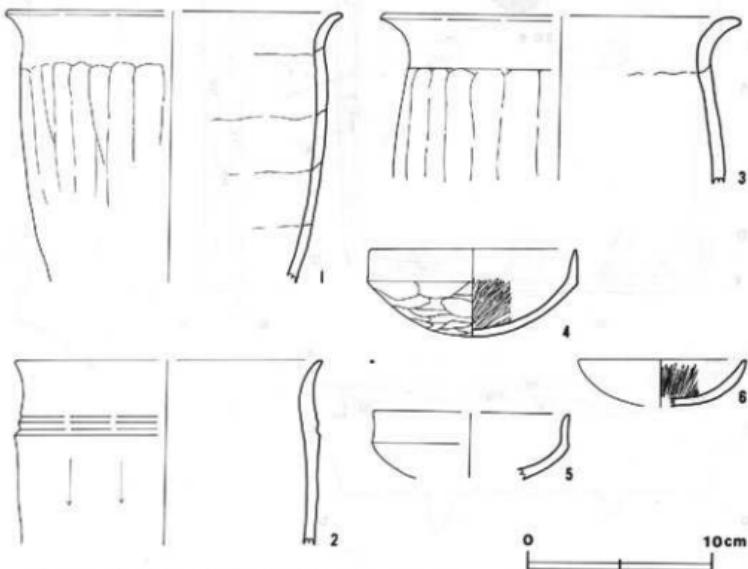
している。ピットはP<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>の6か所検出されており、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は対角線上に配置され、いずれも径25～30cm・深さ56～71cmとしっかりしたものであり主柱穴と思われる。カマドは北壁中央部に付設されているが、第3分溝によって右袖から奥壁にかけて切られており、遺存状態はよくない。幅105cmで、火床は床を10cm掘り凹めている。覆土は西壁と南壁間に擾乱が見られるが、自然堆積の様相を呈し2層に分かれている。下層は焼土粒子・炭化物を含む暗褐色土、上層はローム粒子を含む黒褐色土が堆積している。また、床面には中央部から南西コーナー部にかけて、焼土の広がりが数か所認められ、炭化材が散乱していることから火災を受けていると推定される。

遺物は少なく、ほとんど土師器である。變形土器がカマド内（第164図-1）や南西コーナー部付近（第164図-2）の覆土から出土し、環形土器（第164図-6）が南壁中央部壁下の覆土から出土している。

出土土器観察表（第164図）

図版番号	器種	法某	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	變形土器 土師器	A (18.0)	胴部は内壁気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は外反しながら聞く。	口縁部内・外面一横ナデ 胴部外面・腹位のヘラ削り 内面一ナデ	砂粒 普通 に近い褐色	20%
2	變形土器 土師器	A (16.6)	胴部はほぼ円筒形を呈し、口縁部は外反しながらわざかに聞く。胴部に2本の沈線が這る。	口縁部内・外面一横ナデ 胴部外面・腹位のヘラ削り 内面一ナデ	砂粒・小塊 普通 に近い褐色	20%
3	變形土器 土師器	A (19.2)	胴部はわずかに張り、口縁部は外反しながら聞く。	口縁部内・外面 橫ナデ 胴部外面・腹位のヘラ削り 内面 ナデ	砂粒 普通 褐色	10%
4	環形土器 土師器	A 11.2 B 4.8	底部は丸底で、体部は内壁しながら大きく張り立ち上がり、口縁部は直立する。外側の口縁部と体部の境に縫を有する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外面 ヘラ削り 内面一ヘラ磨き	砂粒 良好 に近い赤褐色	60%
5	環形土器 土師器	A 10.6 B 4.8	底部は内壁しながら大きくなり、口縁部は外反気味に直立する。外側の体部と口縁部の境に縫を有する。	口縁部内・外面 橫ナデ 体部外面一ヘラ削り 内面一ヘラ磨き	砂粒 普通 に近い褐色	30%

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	粘土・焼成・色調	備考
6	坪形土器 土師器	A 9.1	体部は内側しながら大きく開く。	口縁部内・外面一横ナメ 体部外面一ヘラ削り 内面一ヘラ磨き	砂粒 普通 にぶい赤褐色	80%

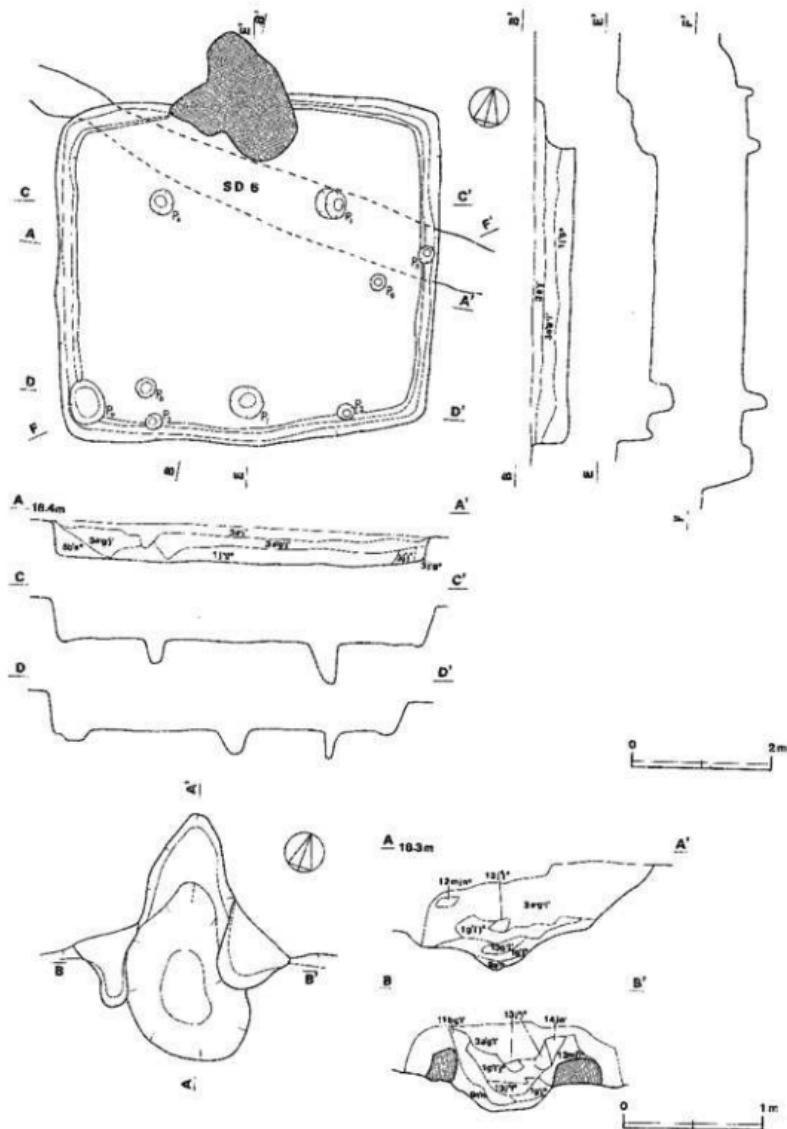


第164図 第41号住居跡出土遺物実測図

#### 第42号住居跡（第165図）

本跡はK2aを中心確認され、第43号住居跡の南側約5mに位置している。第6号溝と重複しており、第6号溝が本跡の東壁中央部から北西コーナー部にかけて切り込んでいることから、本跡の方が古い。

平面形は長軸5.40m・短軸4.95mの方形を呈し、主軸方向はN-14.5°-Wを指している。壁は遺存状態が良好で、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は45~50cmである。床は平坦で全体によく締まっており、カマド前から南壁中央部にかけてはよく踏み固められている。P<sub>1</sub>の周囲は3~4cm床面が高くなっている。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>9</sub>の9か所検出されている。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>は主軸とほぼ対称に配置され、径25~45cm・深さ37~58cmとしっかりしたものであり主柱穴と思われる。カマドは北壁中央部に付設されているが、袖部がわずかに残るだけで大部分崩壊している。長さ175cm・幅145cmで北壁を約90cm切り込んでいる。奥壁はゆるやかに立ち上がり、火床は床を23cm楕円形に



第165図 第42号住居跡・カマド実測図

掘り回め、内部には多量の焼土が堆積している。覆土はほぼ自然堆積の状態を示し、3層に分かれる。上層はローム粒子を含む暗褐色土、中層はローム粒子や焼土粒子をわずかに含む暗褐色土、下層は焼土粒子や炭化物を多量に含む黒褐色土が堆積している。床面には柱状の炭化材と焼土が散乱しており、本跡は火災を受けたものと推定される。

遺物は土器器の變形土器片が多く、約400点出土している。南東コーナー部寄りの床面から須恵器の變形土器（第166図-1）、P<sub>3</sub>の東側の覆土から鉄鏃（第167図-11）、中央部床面から刀子（第167図-12）が出土している。

出土土器観察表（第166・167図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	釉色・焼成・色調	備考
1	變形土器 須恵器	A (26.1)	底部は大きめで、口縁部は内凹しながら開き、口縁外端部に溝をなす。	口縁部内・外面一様ナガ 体部外面一同心円文の叩き 内面一ナガ	砂粒・細粒 普通 灰色	30%
2	變形土器 須恵器	A 19.5 B 33.0 C 16.0	底部は平底で、体部は内凹しながら外上方へ立ち上がり、上部から内傾する。腹部は外反弧線に開きそのまま口縁部へ至る。 口縁端部は丸い。	口縁部内・外面一様ナガ 体部外面一横筋の平行叩き 下端へラ削り 内面一ナガ	砂粒 普通 明赤褐色	25%
3	環形土器 須恵器	A 12.3 B 3.8 C 7.5	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	底部一丁目ナガナガで、切り離しは小窓、クロ回転方向は右、内・外面の水接き痕は弱い。	砂粒・細粒 良好 灰色	90%
4	洋形土器 須恵器	A 19.1 B 4.8 C 7.8	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	底部一回転へラ削り後ナガ 内・外面の水接き痕は弱い。	砂粒 良好 灰色	100%
5	環形土器 須恵器	C (8.5)	底部は平底で、体部は外上方へ立ち上がる。	底部一回転へラ削りで、切り離しは不明。	細粒・青母 やや不良 灰色	15% 成部 にヘタ起方 上
6	環形土器 須恵器	A 11.8 B 3.5 C 7.0	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	底部一回転へラ削り後中央部 は一向向、外周部一不定方向 の手持ちヘタ削り	砂粒・細粒 やや不良 灰白色	60%
7	環形土器 上端部 上端部	A 12.8 B 3.8	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。	底部一手持ちヘタ削りで、切 り離しは不明、内・外面の水 接き痕は弱い。	砂粒 普通 灰白色	40%
8	洋形土器 上端部	A 16.2 C 11.0	底部は平底で、体部は内凹弧線に外上方へ立ち上がる。	底部一手持ちヘタ削りで、切 り離しは不明、内・外面 溝なしハラ磨き 下端一手持 ちヘタ削り	砂粒 普通 明赤褐色	25%

#### 石製品（第167図-9・10）

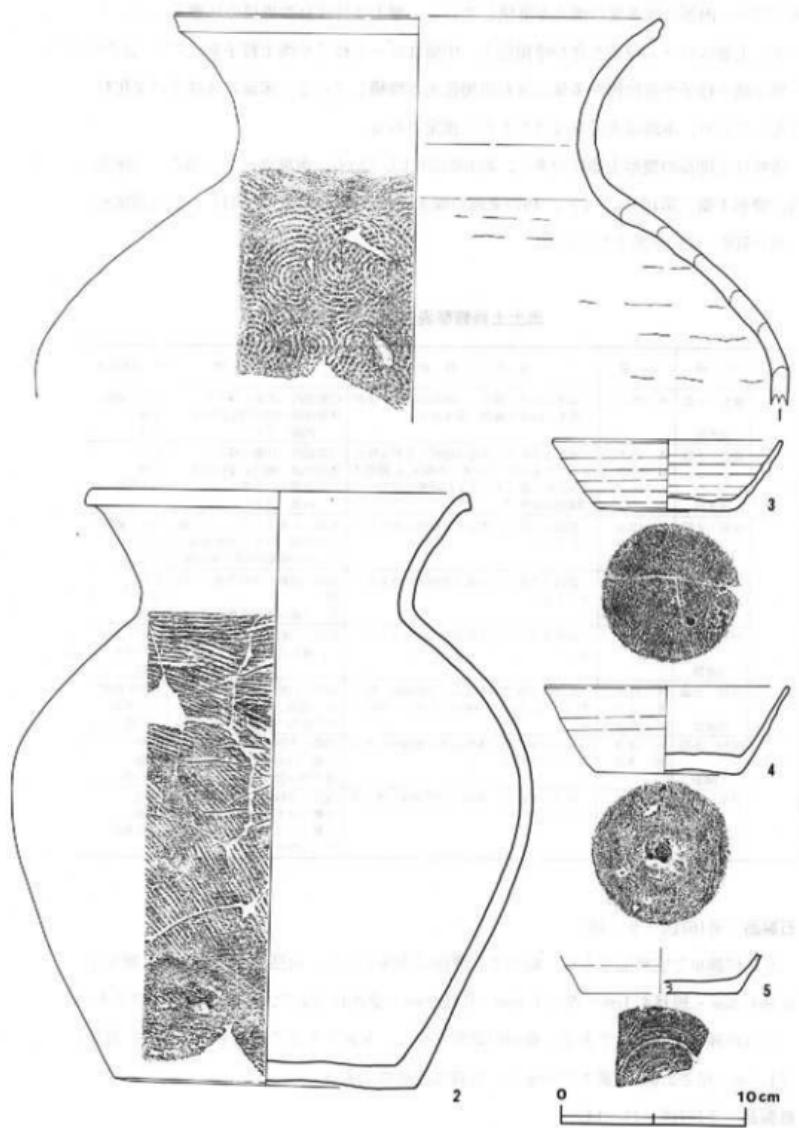
9は紡錘車で完形成である。扁平で、側面は丸味をもつ。自然面が残り全体に難な作りである。長径4.3cm・短径4.1cm・厚さ1.5cm・孔径9mm・重さ41.5gで、石質は滑石片岩である。

10は紡錘車で完形成である。截頭円錐形を呈し、全面ともよく研磨されている。長径4.5cm・短径4.4cm・厚さ2.6cm・重さ73.6gで、石質は流紋岩である。

#### 鉄製品（第167図-11～14）

11は鏃で莖部が欠損する。穂は三角形で、断面はレンズ状を呈する。現存長は7.3cmである。

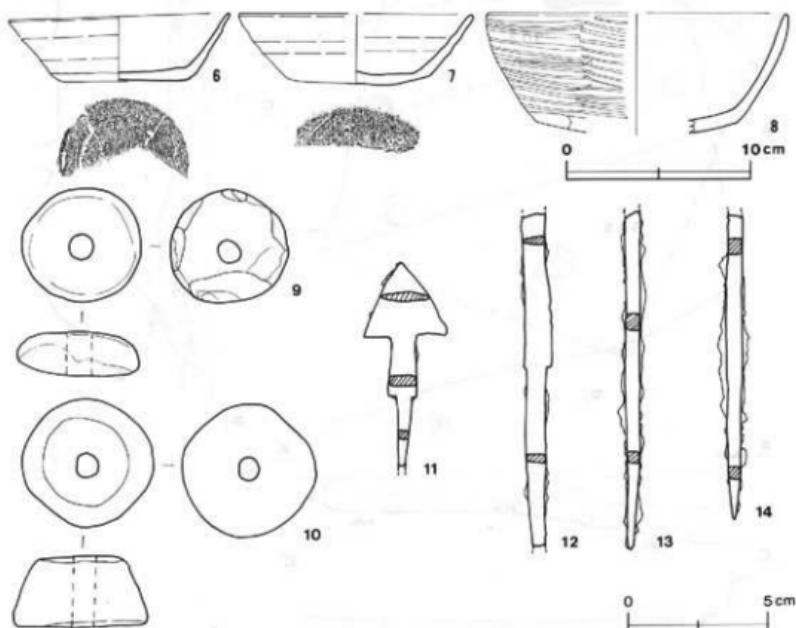
12は刀子で両端部が欠損する。刃・棟の両側に区を有する。現存長は11.9cm・刃幅は0.9cmで



第166図 第42号住居跡出土遺物実測図（1）

ある。

13・14は棒状の鉄製品で、用途は不明である。いずれも先端部が尖り、断面は方形を呈する。現存長は13が12cm、14が10.8cmである。

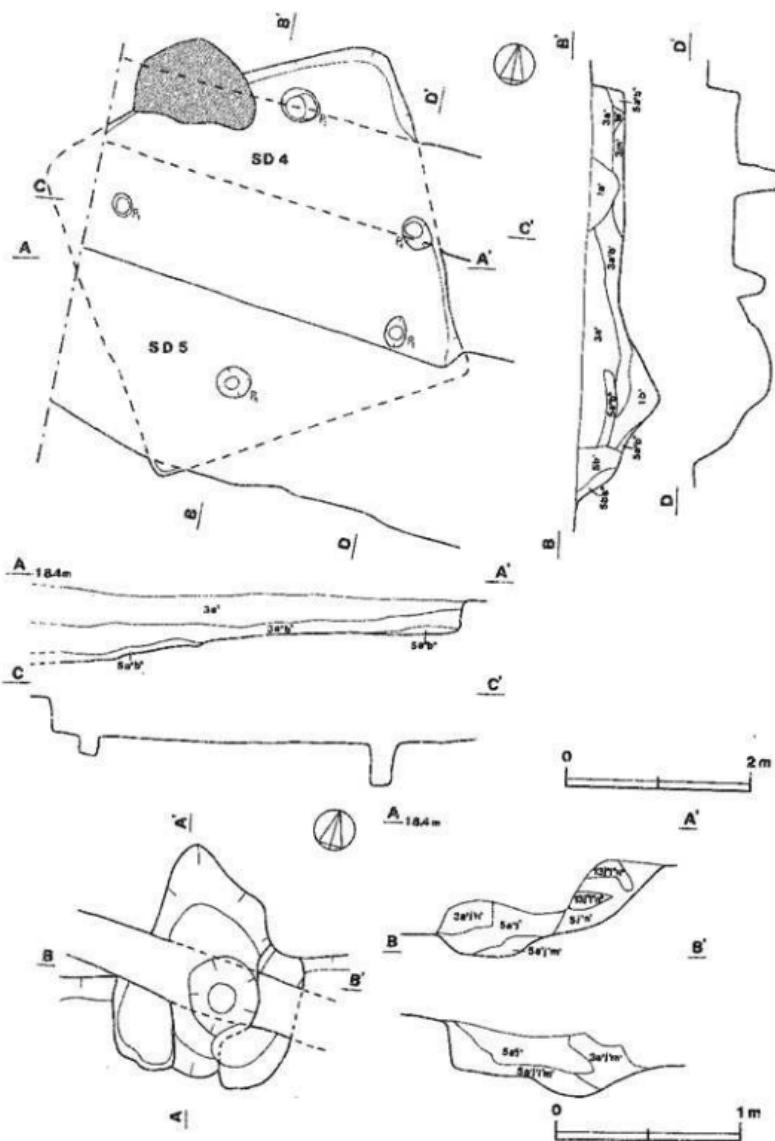


第167図 第42号住居跡出土遺物実測図（2）

#### 第43号住居跡（第168図）

本跡はJ2izを中心確認され、第45号住居跡の南西側約3.5mに位置している。第4・5号溝と重複している。第4号溝によって北東壁からカマドにかけて切られ、第5号溝によって南側部分を切られていることから、本跡の方が古い。西コーナー部は土取りによって消滅している。

平面形は推定で、1辺が3.50m～4.00mの方形を呈するものと思われ、主軸方向は約N-30°Wを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約35cmである。床面は平坦でよく踏み固められ硬化している。ピットはP<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>の5か所検出されている。P<sub>1</sub>はやや北寄りであるがP<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>は方形に配されたうちの3か所で主柱穴かと思われる。南側に位置するもう1か所は、第5号溝によって消滅していると考えられる。P<sub>5</sub>は第5号溝の底面を掘り込んでおり、本跡に伴うものではないと思われる。カマドは北西壁中央部に付設されていたが、第4号溝によって中央部を幅30cm



第168図 第43号住居跡・カマド実測図

ほど東西に切られており、焼土もわずかに残っているだけである。長さ130cm・幅105cmで北西壁を約60cm切り込んでいる。奥壁はゆるやかに立ち上がり、火床は床を13cm掘り回している。覆土は第4・5号溝による擾乱も見られるが、ほぼ自然堆積の状態を示しておりローム粒子を含む暗褐色土が主である。

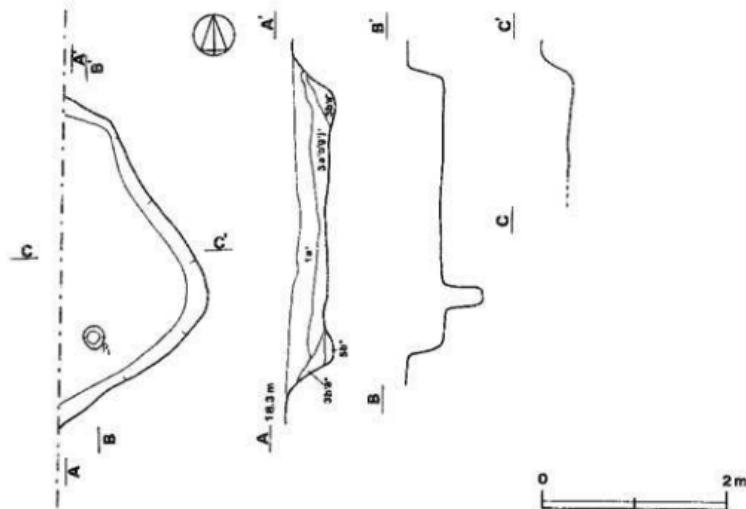
遺物は少なく、土師器や須恵器の變形土器片、坏形土器片が出土している。

#### 第44号住居跡（第169図）

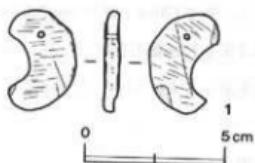
本跡はK2f<sub>1</sub>を中心に確認され、第7号溝の南側約11.5mに位置している。東コーナー部周辺以外は土取りによって消滅しているため、平面形と規模は不明である。

壁は外傾して立ち上がり、壁高は35~40cmである。床はほぼ平坦であるが、それはほど堅くない。ピットは南東壁寄りに1か所検出され、径24cm・深さ42cmである。遺構の大部分が消滅しているため、カマドも炉跡も検出されていない。覆土は自然堆積の状態を示し、2層に分かれている。上層はローム粒子を含む黒褐色土、下層は炭化物や焼土粒子をわずかに含む暗褐色土となっている。

遺物は土師器と須恵器の坏形土器片が、ごく少量出土しているほか、東コーナー部付近の床面から、石製模造品（勾玉）（第170図-1）が出土している。



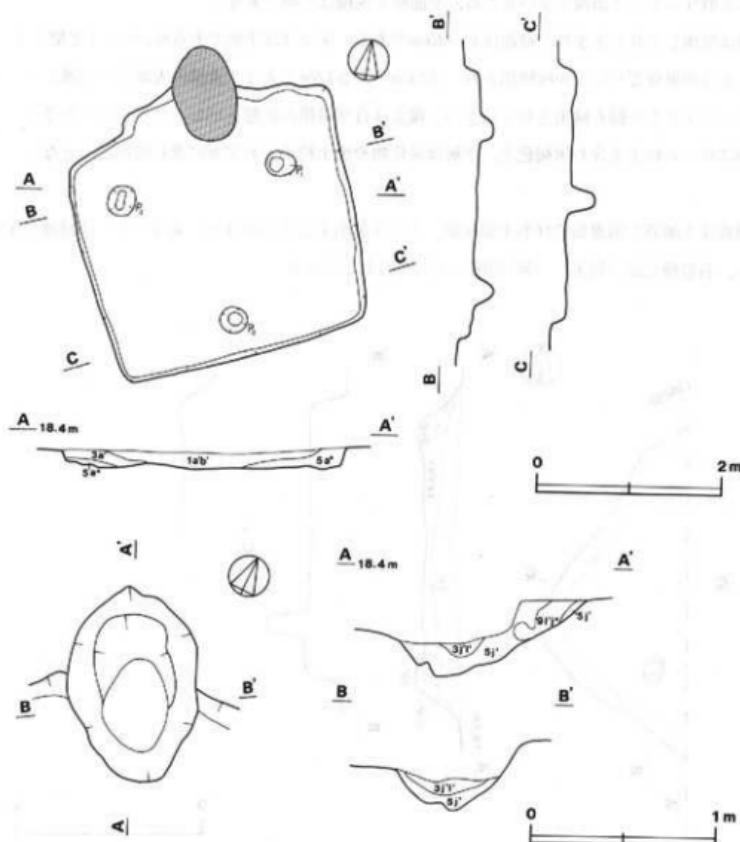
第169図 第44号住居跡実測図



石製品（第170図-1）

1は勾玉の模造品である。板状を呈し、全面研磨されているが粗製である。長さ3.6cm・幅2.4cm・腹部幅1.7cm・厚さ0.5cm・孔径2mmで、石質は滑石である。

第170図 第44号住居跡出土遺物実測図



第171図 第45号住居跡・カマド実測図

#### 第45号住居跡（第171図）

本跡はJ2g<sub>2</sub>を中心確認され、第41号住居跡の南側約4m、第4号溝の北側約4mに位置している。

平面形は長軸2.95m・短軸2.75mの方形を呈し、主軸方向はN-22.5°-Wを指している。壁は外傾して立ち上がるが、西壁とカマドの西側は擾乱を受けており、立ち上がりはよくない。壁高は15~20cmである。床はやや凹凸があるがよく踏み固められて硬化している。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>の3か所検出され、いずれも径約30cm・深さ18~30cmである。P<sub>1</sub>とP<sub>3</sub>は主軸から左右ほぼ等間隔に位置し、また、P<sub>2</sub>は南壁中央部ではほぼ主軸上に配置されており、土柱穴の可能性もある。カマドは北壁中央部に付設されているが擾乱を受けており、焼土が残っているだけで規模は不明である。火床は床を24cm掘り凹めている。覆土は、西壁からカマドにかけて擾乱を受けているほかは自然堆積の状態を示し、ローム粒子を含む黒褐色土が主でよく縮まっている。

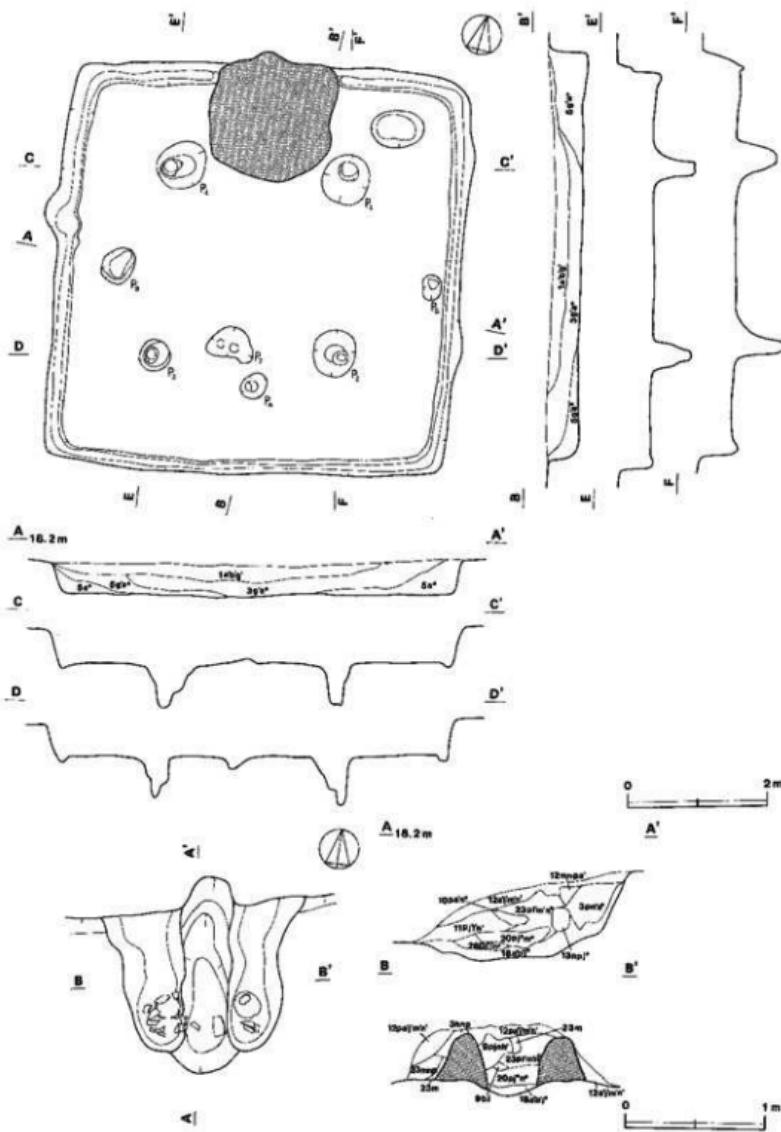
遺物は土師器の変形土器片と、須恵器の壺・壺形土器片がごく少量出土している。

#### 第46号住居跡（第172・173図）

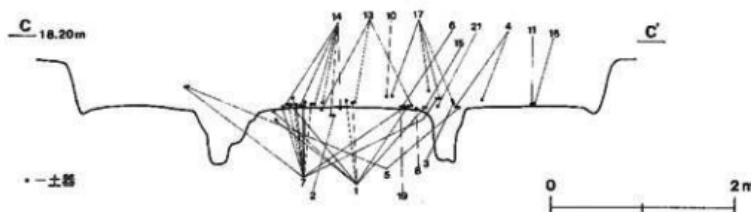
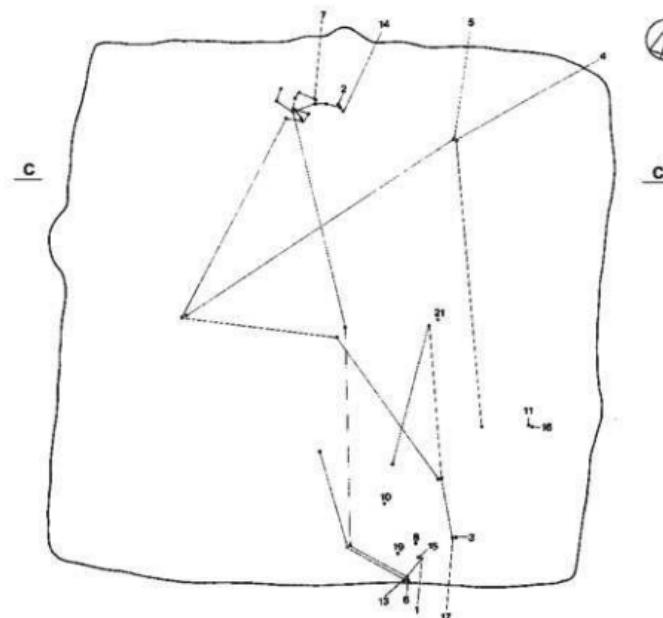
本跡はK1deを中心確認され、第48号住居跡の西側約4mに位置している。

平面形は長軸5.85m・短軸5.80mの方形を呈し、主軸方向はN-12°-Wを指している。壁は明瞭に検出され、遺存状態もよくほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は約50cmである。各壁下には豊溝が全周し、上幅約20cm・下幅約11cm・深さ約6cmである。床はほぼ平坦でやや縮まっている。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>8</sub>の8か所検出され、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は径45~70cm・深さ57~60cmと深くしっかりとおり、対角線上に配置されていることから土柱穴と思われる。貯蔵穴は北東コーナー部に検出され、平面形は長径77cm・短径50cmの楕円形で、断面はU字形を呈し深さは48cmである。北壁中央部にはカマドが付設されており、遺存状態は比較的良好である。長さ140cm・幅110cm・焚口幅32cmで、北壁を20cmほど切り込んでいる。天井部は崩落しているが、両袖はほぼ残っている。砂を多量に含む粘土で構築しており、両袖の先端に近い部分に長胴甕を倒立させて埋め込み、焚口部の補強として使用している。天井部の補強には、左右両袖に倒立させた長胴甕の底部と底部を2個の長胴甕で横位につなぎ、それを埋め込んでいる。奥壁は約60cmで急に立ち上がり、火床は床を10cmほど掘り凹め内部には焼土や灰が充満している。覆土は自然堆積の状態を呈しており、壁際にはローム粒子を含む褐色土の三角堆積が見られ、中央部では上層に黒褐色土、下層に暗褐色土が堆積している。

遺物の量は多く、大部分が土師器である。特に壺形土器が多く、そのほか壺形土器、鉢形土器、瓶形土器が出土している。カマド左袖内部には第174図-1、右袖内部には第174図-2が倒立して出土し、第175図-14と第175図-7は天井部に使用されたもので、崩落してつぶれた状態で出土している。



第172図 第46号住居跡・カマド実測図

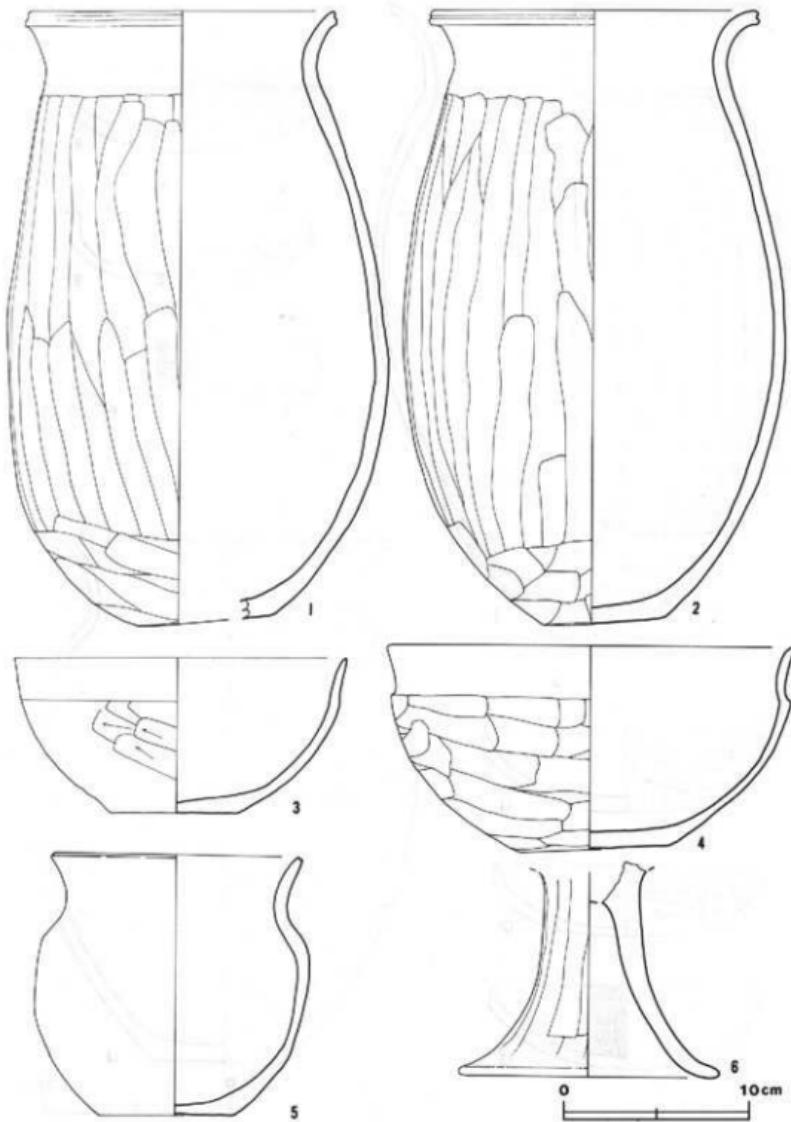


第173図 第46号住居跡遺物出土状態図

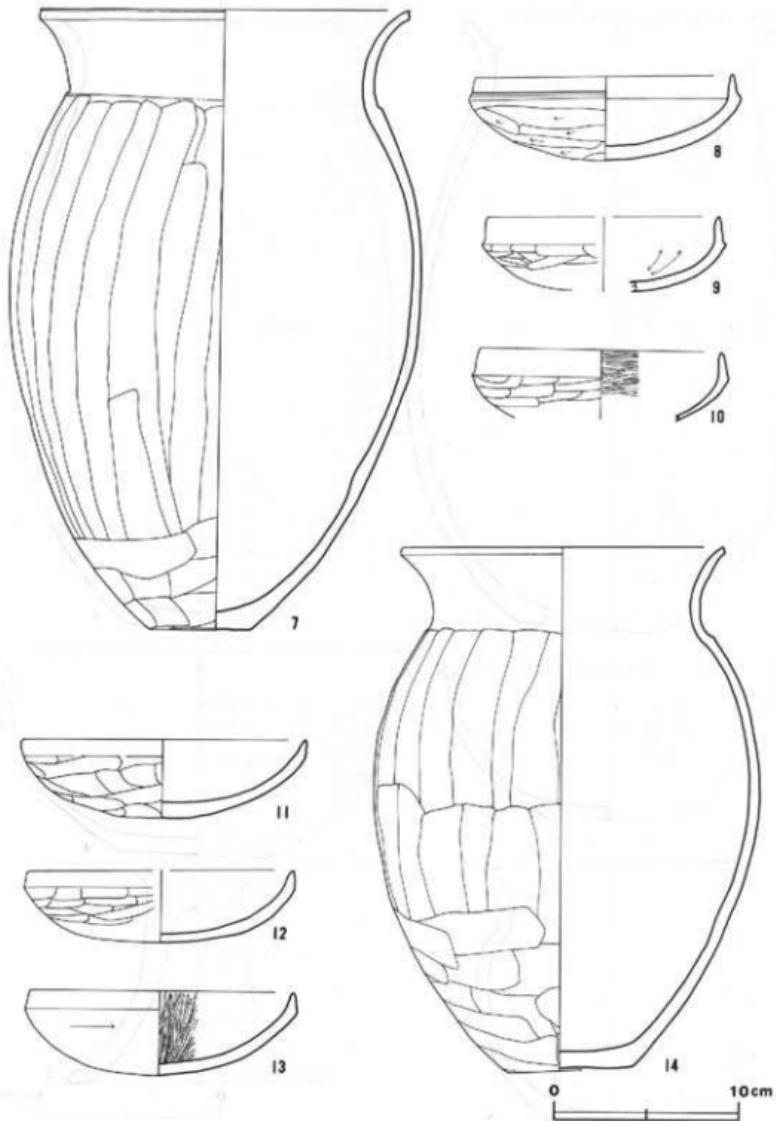
出土土器観察表 (第174~176図)

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	鉢土・施釉色調	備考
1	斐形 土器 土師器	A 16.4	底部は平底で、脚部は長脚を呈し、下ぶくれである。口縁部は外反しながら開き、端部は浅い沈窪が出来る。	口縁部内・外面 積ナデ 脚部外面 脊位のヘラ削り 内面-ヘラナデ	砂粒・粗確 普通 褐色	95%
		B 33.0				
		C 6.1				
2	斐形 土器 土師器	A 17.6	底部は平底で、脚部は長脚を呈し、下ぶくれ気味である。口縁部は外反しながら開き、端部は浅い沈窪が出来る。	口縁部内・外面一掃ナデ 脚部外面一概拉のヘラ削り 内面-ヘラナデ	砂粒・粗確 普通 にぶい褐色	90%
		B 33.0				
		C 7.0				

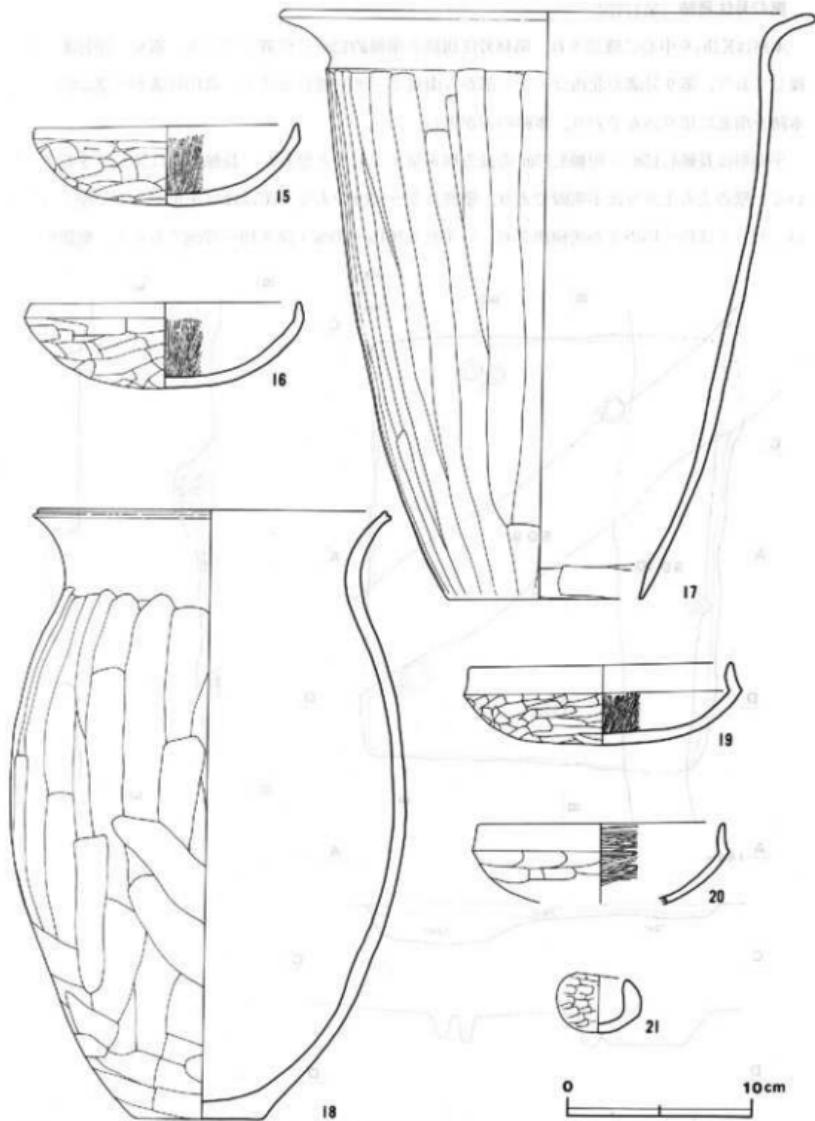
図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	社士・地衣色等	参考
3	鉢形 土器	A 17.9 B 8.5 C 6.9	底部は平底で、内壁しながら外上方へ立ち上がり。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面一横ナデ 脚部外面 ヘラ削り 内面一ナデ	砂粒 普通 にぶい褐色	100%
4	鉢形 土器	A 22.3 B 11.0 C 8.1	底部は平底で、体部は内壁しながら外上方へ立ち上がり。口縁部は外反しながらく間に開く。外面の口縁部と体部の境に接を有する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外面 ヘラ削り 内面一ナデ調整後継なへう巻き	砂粒・細穂 普通 にぶい褐色	50%
5	甕形 上器	A 13.2 B 14.2 C 7.3	底部は平底で、胴部は内壁しながら外上方へ立ち上がり。胴部上位でやや縮む。 口縁部は外反しながらく間に開く。	口縁部内・外面一横ナデ 胴部内・外面 ナデ	砂粒 普通 赤色	90%
6	高環形土器 土師器	D 14.1	口縁部欠損。脚部はラッパ状に開く。	脚部外側一横位ヘラ削り 内面 ヘラナデ 根部内・外面 横ナデ	砂粒 普通 明赤褐色	40%
7	甕形 上器	A 19.9 B 33.5 C 6.0	底部は平底で、胴部は長削を呈し、中位がやや張っている。口縁部は外反しながらく間に開く。外面の脚部と脚部の境に接を有している。	口縁部内・外面一横ナデ 脚部外側一横位のヘラ削り 下端 横位のヘラ削り 内面一ヘラナデ	砂粒・細穂 普通 にぶい褐色	90%
8	环形 上器	A 14.0 B 4.7	底部は丸底で、体部は内壁しながら大きく開いて立ち上がり。外面の口縁部と体部の境に接を有する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外側一ヘラ削り 内面一ナデ	砂粒 普通 にぶい褐色	98%
9	环形 土器	A 12.6	底部は丸底で、体部は内壁しながら大きく開いて立ち上がり。口縁部はほぼ直立する。外面の口縁部と体部の境に接を有する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外側一ヘラ削り 内面一ヘラ巻き	砂粒 普通 赤色	40%
10	环形 上器	A 13.1	体部は内壁しながら大きく開いて立ち上がり。口縁部はやや内傾する。外面の口縁部と体部の境に接を有する。	口縁部外側 横ナデ 体部外側 ヘラ削り 脚部・体部内面 ヘラ磨き	砂粒 普通 赤色	50%
11	环形 土器	A 15.2 B 4.2	底部は丸底で、体部は内壁気味に大きく開いて立ち上がり。口縁部は直立する。外面の口縁部と体部の境に接を有する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外側 ヘラ削り 内面一ナデ	砂粒 普通 にぶい褐色	90%
12	环形 上器	A (14.5) B 4.9 C 2.0	底部は丸底で、体部は内壁しながら大きく開いて立ち上がり。口縁部は直立する。外面の口縁部と体部の境に接を有する。	口縁部内・外面 横ナデ 体部外側一ヘラ削り 内面 ヘラ巻き	砂粒 普通 橙色	30%
13	环形 土器	A 14.2 B 4.6	底部は丸底で、体部は内壁しながら大きく開いて立ち上がり。口縁部はほぼ直立する。外面の口縁部と体部の境に接を有する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外側一ヘラ削り 内面一ヘラ巻き	砂粒 普通 橙色	60%
14	甕形 土器	A 17.4 B 28.0 C 6.7	底部は平底で、胴部は長削を呈し、中位が張っている。口縁部は外反しながらく間に開く。外端部は蓋をなす。	口縁部内・外面一横ナデ 脚部外側上・中段一横位ヘラ削り 下端一横位のヘラ削り 脚部内面 ヘラナデ	砂粒・細穂 普通 にぶい褐色	90%
15	环形 上器	A 14.4 B 4.3	底部は丸底で、体部は内壁しながら大きく開いて立ち上がる。口縁部は直立する。外面の口縁部と体部の境に接を有する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外側 ヘラ削り 内面 ヘラ巻き	砂粒 良好 赤褐色	100%
16	环形 上器	A 14.6 B 4.7	底部は丸底で、体部は内壁気味に大きく開いて立ち上がる。口縁部は直立する。外面の口縁部と体部の境に接を有する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外側 ヘラ削り 内面 ヘラ巻き	砂粒 良好 赤色	100%
17	甕形 上器	A 28.7	胴部は内壁気味に外上方へ立ち上がる。口縁部は外反しながらく間に開く。底部は正円状に接する。	口縁部内・外面 横ナデ 脚部外側 縮伏のヘラ削り 内面一横位のヘラ巻き	砂粒 普通 にぶい褐色	60%
18	甕形 上器	A 18.7 B 32.7 C 6.6	底部は平底で、胴部は長削を呈し、中位がやや張っている。口縁部は外反しながらく間に開く。外面の脚部と脚部の境に接を有する。	口縁部内・外面一横ナデ 脚部外側一横位のヘラ削り 下端 横位のヘラ削り 内面一ヘラナデ	砂粒・細穂 普通 にぶい褐色	95%
19	环形 上器	A 14.3 B 4.3	底部は丸底で、体部は内壁しながら大きく開いて立ち上がり。口縁部は外反気味に内傾する。外面の口縁部と体部の境に明瞭な接を有する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外側 ヘラ削り 内面 ヘラ巻き	砂粒 普通 褐色	100%
20	环形 土器	A 13.5	体部は内壁しながら大きく開いて立ち上がり。口縁部は外反気味に内傾する。外面の口縁部と体部の境に接を有する。	口縁部外側一横ナデ 体部外側 ヘラ削り 脚部・体部内面 ヘラ磨き	砂粒 普通 赤色	50%
21	ミニチュア 土器 上器	A 2.7 B 3.1	底部は丸底で、体部は内壁しながら立ち上がる。	外面一ヘラ削り 内面一指によるナデ	砂粒 普通 褐色	100%



第174図 第46号住居跡出土遺物実測図（1）



第175図 第46号住居跡出土遺物実測図（2）



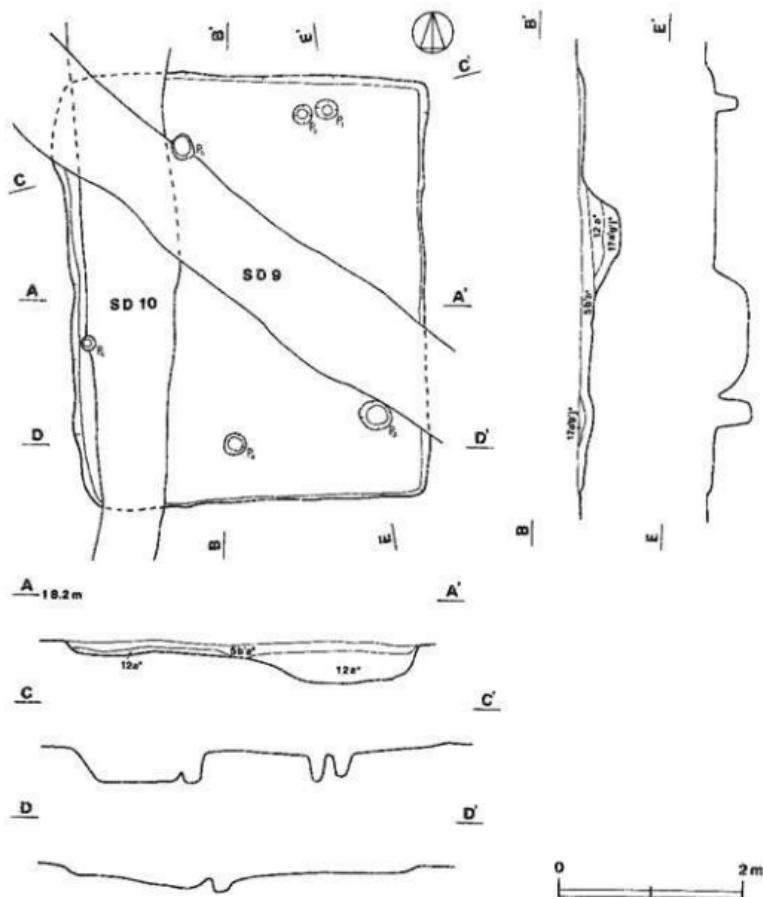
第176図 第46号住居跡出土遺物実測図3)

（昭和四九年八月撮影）

第47号住居跡（第177図）

本跡はK1hsを中心に確認され、第48号住居跡の南側約12mに位置している。第9・10号溝と重複しており、第9号溝が北西コーナー部から南東コーナー部にかけて、第10号溝が西壁に沿って本跡を南北に切り込んでおり、本跡の方が古い。

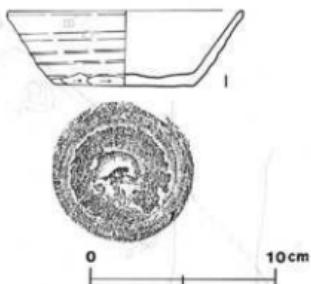
平面形は長軸4.15m・短軸3.75mの長方形を呈するものと思われ、長軸方向はN~Øを指している。壁の立ち上がりは不明瞭であり、壁高は5~10cmである。床はほぼ平坦であるが堅くはない。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>の6か所検出され、いずれも径15~30cm・深さ19~37cmであるが、配置的に



第177図 第47号住居跡実測図

規則性がなく主柱穴とは考えられない。跡もカマドも検出されていない。覆土はほぼ1層で、厚さは5~6cmである。ローム粒子を多量に含む褐色土が主で自然堆積と思われる。

遺物は土師器の變形土器片のほか、住居跡中央部の覆土から須恵器の壺形土器（第178図-1）が出土している。



第178図 第47号住居跡出土遺物実測図

出土土器観察表（第178図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	粘土・焼成・色調	備考
1	変形土器 須恵器	A 12.6 B 4.1 C 7.7	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は丸い。	底部一回転ヘラ切り後軽い手持ヘラ削り、手挽き痕は強い ロクロ回転方向は右	砂粒・細砂 普通 灰色	90%

#### 第48号住居跡（第179図）

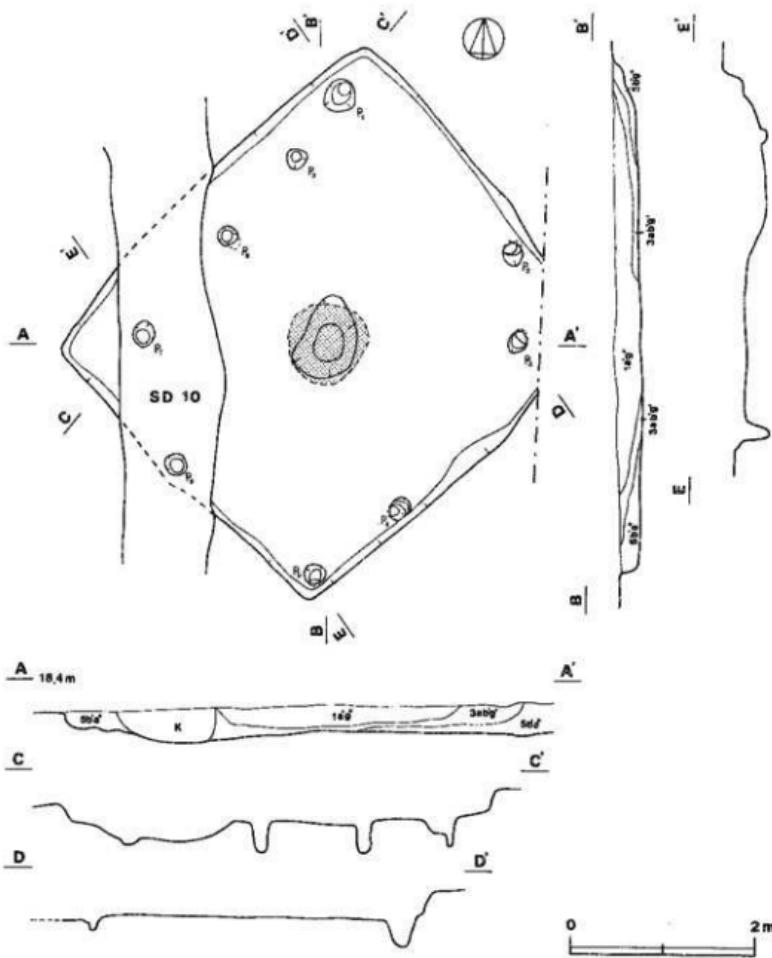
本跡はK1dsを中心に確認され、第47号住居跡の北側約12mに位置している。第10号溝と重複しており、第10号溝が西コーナー部付近を南北に切っていることから、本跡の方が古い。東コーナー部は土取りによって消滅している。

平面形は長軸4.75m・短軸4.25mの長方形を呈し、長軸方向はN-53°-Eを指している。壁は外傾して立ち上がり、壁高は20cm前後である。床面はほぼ平坦でやわらかい。ピットはP1-P6の9か所検出され、いずれも壁際に掘られている。径は25~30cm・深さ20~43cmであるが間隔は一定せず、主柱穴は不明である。住居跡中央部に炉跡が検出され、平面形は長径90cm・短径55cmの橢円形を呈し、床面を13cmほど皿状に掘り凹めており、内部は焼土が充満している。覆土は自然堆積の状態を示しており、大部分が黒褐色土で、壁際にはローム粒子を含む暗褐色土や褐色土が堆積している。

遺物は少なく、土師器の變形土器や壺形土器が出土している。

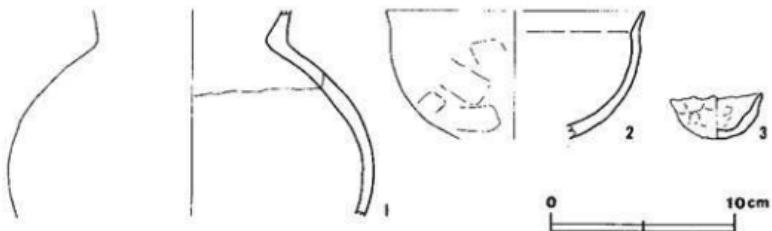
出土土器観察表（第180図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	粘土・焼成・色調	備考
1	変形土器 土師器		底部はほぼ球形を呈し、口縁部は「く」の字形に開く。	口縁部内・外面一横ナデ 胴部内・外面一ナデ	砂粒 普通 浅黄褐色	30%
2	壺形土器 土師器	A 14.2	体部は内側しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は外傾する。内面の口縁部と体部の境に棱を有する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外面一棘々ヘラ削り 内面一ヘラナデ	砂粒 普通 浅黄褐色	30%



第179図 第48号住居跡実測図

試験番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	粘土・焼成・色調	備考
3	手捏ね上器 土器器	A 5.0 B 2.2	壺形を呈する。	内・外面に指痕痕が残る。	砂粒 普通 にふい褐色	100%



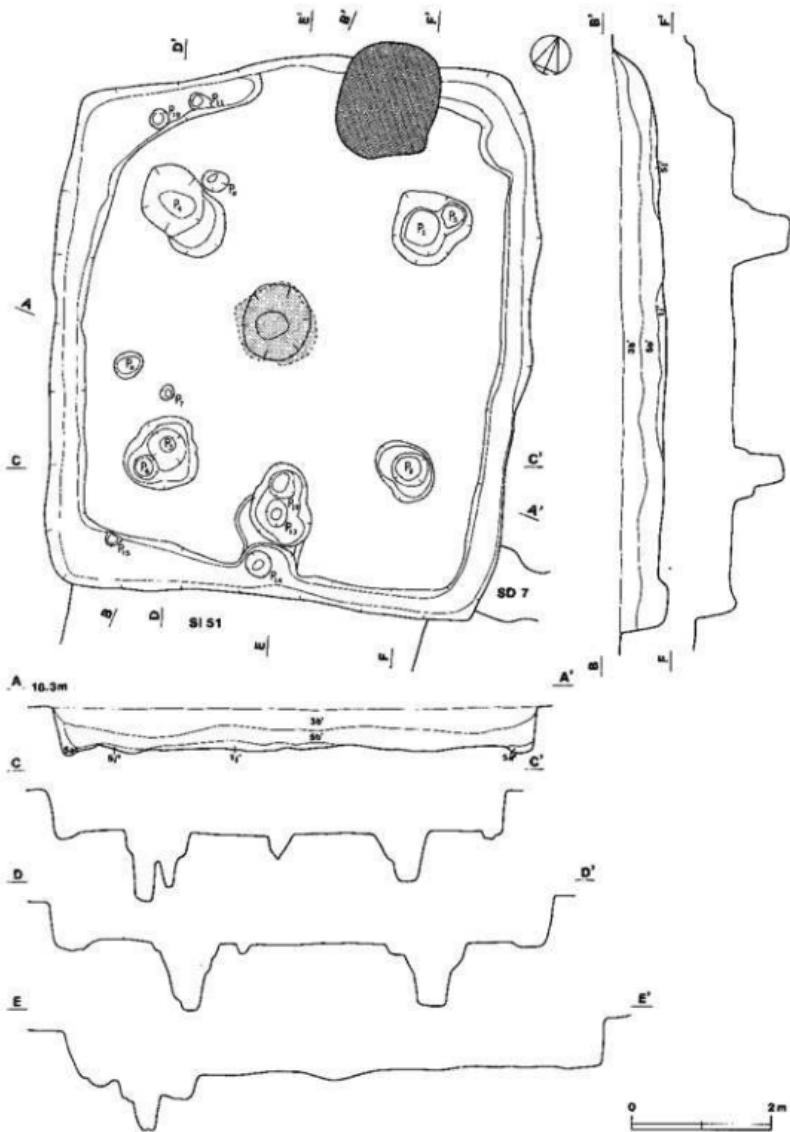
第180図 第48号住居跡出土遺物実測図

第49号住居跡（第181～183図）

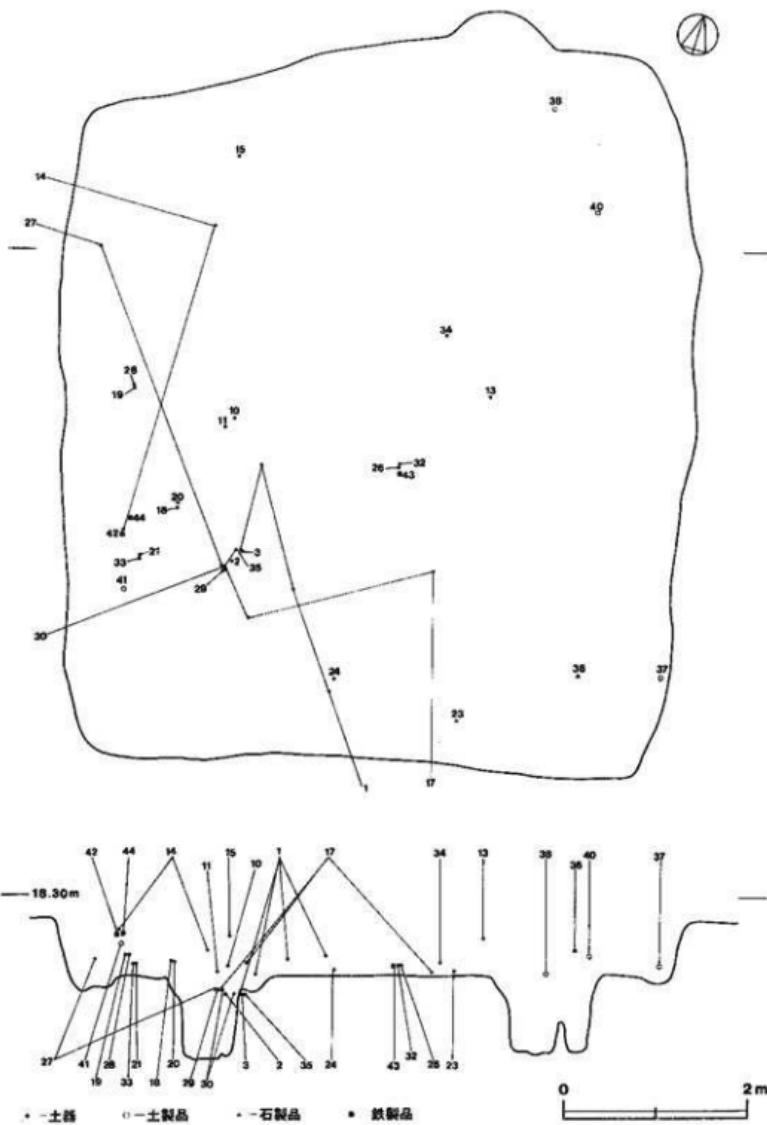
本跡はJ1jsを中心に確認され、第50号住居跡の西側約0.5mに位置している。本跡は第51号住居跡、第7号溝と重複しており、第51号住居跡を切っていることと、東壁を第7号溝に切られていることから、第51号住居跡より新しく、第7号溝より古いと思われる。

平面形は長軸7.70m・短軸6.90mの方形を呈しており、主軸方向はN-22°Wを指している。壁は遺存状態が良くやや外傾して立ち上がり、壁高は56～70cmである。床は平坦で全体に堅く、特に中央部は踏み固められ、かなり硬化している。壁下には壁溝が全周しているが、他の住居跡に比べて幅が広く、上幅30～70cm・下幅20～60cm・深さ約11cmである。ピットはP<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>の15か所検出されている。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>はP<sub>3</sub>の長径100cm・短径80cmを除いて径55～60cmであり、深さはいずれも73～98cmと深い。また掘り込みもしっかりとおり、対角線上に配置されていることから主柱穴と思われる。P<sub>5</sub>とP<sub>6</sub>はP<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>に接して掘り込まれており、径はどちらも約35cm・深さは85cm・101cmで補助柱穴と思われる。カマドは北壁の東コーナー部寄りに付設されており、比較的遺存状態は良好で天井部・袖部とも残っている。長さ143cm・幅114cm・焚口幅42cmで、北壁を約65cm切り込んでいる。奥壁はほぼ垂直に立ち上がり煙道へと続いている。火床は床を18cm掘り凹め、内部には焼土や灰が堆積している。住居跡中央部には炉跡が検出され、平面形は長径110cm・短径94cmの楕円形を呈し炉床は床を15cm掘り凹めており、焼けて硬化している。覆土はほぼ自然堆積の様相を呈しており、ほぼ2層に分かれている。上層は暗褐色土、下層は褐色土でどちらもわずかにロームブロックを含んでいる。床面には焼土の広がりが何か所も見られ、火災を受けていると思われる。

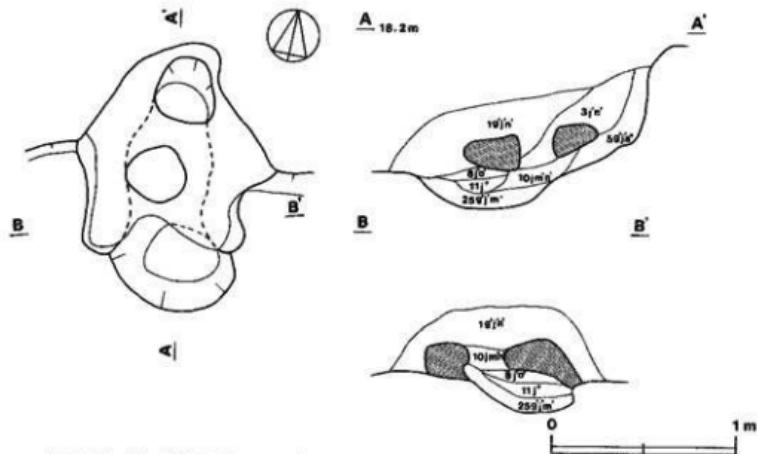
遺物は非常に多く出土し、土師器が大部分である。环形土器片が1045点、變形土器片が1758点と多く、そのほかに鉢形土器、高环形土器片などが出土している。环形土器はほとんどが同じ器形・整形であり、比較的小形のものが目立つ。須恵器は少なく环形土器、台付長頸壺形土器などが出上している。また、刀子、鎌の茎部、勾玉、土玉なども出土している。



第181図 第49号住居跡実測図



第182図 第49号住居跡遺物出土状態図



第183図 第49号住居跡カマド実測図

出土土器観察表 (第184-185図)

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	粘土焼成色調	備考
1	変形土器 土師器	A (17.3) B	腹部は丸く盛り、口縁部は直立してから外反する。	口縁部内・外面一横ナデ 腹部外面一棒状のヘラ削り 内面一ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	30%
2	變形土器 土師器	A 14.1 B 16.8	底部は平底で、腹部は丸く盛り、口縁部は外反気味に直立する。	口縁部内・外面一横ナデ 腹部外面一ヘラ削り 内面一ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	95%
3	小形變形土器 土師器	A 12.4 B 12.7 C 6.9	底部は平底で、腹部は内壁しながる外上方へ立ち上る。口縁部はわずかに外反して、外反気味に内傾する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外面一ヘラ削り 内面一ヘラ磨き	砂粒 普通 橙色	85%
4	變形土器 須恵器		口縁部片	内・外面共に水焼き	砂粒・細砂 良好 灰色	5%
5	變形土器 須恵器		頸部片	水焼き乾燥後、8本1束の波状又は平行線を交叉に施している	青母 不良 赤褐色	5% 酸化焰焼成
6	环形土器 須恵器		底部は平底である。	外面一削離が激しく調整例不明	細砂 普通 灰色	20%
7	环形陶器	C 6.7	底部は平底である。	底部一回転ヘラ削り 体部下端一回転ヘラ削り	砂粒・細砂 良好 灰白色	10% 内外面に淡緑色の掛け着
8	台付長颈壺 形土器 須恵器	D 11.0 E 0.5	高台は短く下方へのびる。	底部一回転ヘラ削り 高台は貼り付け	細砂 普通 灰色	10%
9	蓋形土器 須恵器	C 10.6	口縁部片	天井部一回転ヘラ削り	細砂 普通 灰色	10%
10	高环形土器 土師器	A 8.2 B 4.0 D 7.0 E 1.7	全体部は大きく開き、口縁部は直立する。 脚部は大きく「く」の字形に閉く。 外側の口縁部と体部との境に縫を有する。	口縁部外面一横ナデ 体部・脚部外面一ヘラ削り 体部内面一ナデ 脚部内面一指によるナデ	砂粒 普通 にぶい黄褐色	95%

問版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	監七・底成・色調	備考
11	环形 上器 土師器	A (11.8)	体部は内彌しながら大きく聞いて立ち上がり。口縁部は外反気味に直立する。外面のU縁部と体部の境に縫を有する。	U縁部内・外面一横ナデ 体部外側へラ削り 内面へラ磨き	砂粒 普通 によい褐色	30%
12	环形 上器 土師器	A (12.0)	底部は丸底で、体部は内彌しながら大きく聞いて立ち上がり。口縁部は外反気味に直立する。口縁部と体部の境に縫を有する。	U縁部内・外面一横ナデ 体部外側へラ削り 内面へラ磨き	砂粒 普通 によい褐色	20%
13	环形 上器 土師器	A (12.7)	底部は丸底で、体部は内彌しながら大きく聞いて立ち上がり。口縁部は直立する。外面の体部と口縁部の境に縫を有する。	U縁部内・外面一横ナデ 体部外側へラ削り 内面へラ磨き	砂粒 普通 によい褐色	30%
14	环形 七器 土師器	A (12.0)	体部は内彌しながら大きく聞いて立ち上がり。口縁部は外反気味に直立する。外面のU縁部と体部の境に縫を有する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外側へラ削り 内面へラ磨き	砂粒 普通 によい赤褐色	20%
15	环形 土器 七器器	A 10.6 B 3.8	底部は丸底で、体部は内彌しながら大きく聞いて立ち上がり。U縁部は外反気味に直立する。外面のU縁部と体部の境に明顯な縫を有する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外側へラ削り 内面へラ磨き	砂粒 普通 によい褐色	100%
16	环形 七器 土師器	A 9.5	体部は内彌しながら大きく聞いて立ち上がり。口縁部はやや内斜する。外面のU縁部と体部の境に縫を有する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外側へラ削り 内面へラ磨き	砂粒 普通 暗赤褐色	60%
17	环形 土器 土師器	A 12.2 B 5.2	底部は丸底で、体部は内彌しながら大きく聞いて立ち上がり。口縁部は直立し、先端部はやや外反する。外面のU縁部と体部の境に縫を有する。	U縁部内・外面一横ナデ 体部外側へラ削り 内面へラ磨き	砂粒 普通 褐色	80%
18	环形 土器 土師器	A 10.6 B 4.0	底部は丸底で、体部は内彌しながら大きく聞いて立ち上がり。口縁部は直立し、先端部はやや外反する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外側へラ削り 内面へラ磨き	砂粒 普通 によい褐色	95%
19	环形 土器 土師器	A (11.0) B 3.3	底部は丸底で、体部は内彌しながら大きく聞いて立ち上がり。口縁部はほぼ直立する。外面の体部と口縁部の境に縫を有する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外側へラ削り 内面へラ磨き	砂粒 普通 褐色	45%
20	环形 土器 土師器	A 8.8 B 3.9	底部は丸底で、体部は内彌しながら大きく聞いて立ち上がり。口縁部はほぼ直立する。外面のU縁部と体部の境に明顯な縫を有する。	U縁部内・外面一横ナデ 体部外側へラ削り 内面へラ磨き	砂粒 普通 暗褐色	100%
21	环形 土器 土師器	A 10.6 B 4.0	底部は丸底で、体部は内彌しながら大きく聞いて立ち上がり。口縁部は直立する。外面のU縁部と体部の境に縫を有する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外側へラ削り 内面へラ磨き	砂粒 普通 によい褐色	70%
22	环形 土器 土師器	A 11.4 B 3.8	底部は丸底で、体部は内彌しながら大きく聞いて立ち上がり。口縁部は直立する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外側へラ削り 内面へラ磨き	砂粒 普通 褐色	90%
23	环形 土器 土師器	A (8.7) B 4.1	底部は丸底で、体部は内彌しながら大きく聞いて立ち上がり。口縁部は直立する。	口縁部外側一横ナデ 体部外側へラ削り 口縁部・体部内面へラ磨き	砂粒 普通 によい褐色	50%
24	环形 土器 土師器	A (11.2) B 3.7	底部は丸底で、体部は内彌しながら大きく聞いて立ち上がり。口縁部は直立する。外面のU縁部と体部の境に縫を有する。	U縁部内・外面一横ナデ 体部外側へラ削り 内面へラ磨き	砂粒 普通 褐色	35%
25	环形 土器 土師器	A 10.6 B 4.6	底部は丸底で、体部は内彌しながら大きく聞いて立ち上がり。U縁部はわざかに外斜する。外面の体部とU縁部の境に縫を有する。	U縁部内・外面一横ナデ 体部外側へラ削り 内面一ナデ	砂粒 普通 によい褐色	75%
26	环形 土器 土師器	A 10.7 B 4.4	底部は丸底で、体部は内彌しながら大きく聞いて立ち上がり。U縁部は直立する。外面のU縁部と体部の境に縫を有する。	U縁部内・外面一横ナデ 体部外側へラ削り 内面へラ磨き	砂粒 普通 によい黄褐色	70%
27	环形 土器 土師器	A (10.4) B 4.6	底部は丸底で、体部は内彌しながら大きく聞いて立ち上がり。口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外側へラ削り 内面へラ磨き	砂粒 普通 褐色	70%
28	环形 土器 土師器	A (13.3) B 3.7	底部は丸底で、体部は内彌しながら大きく聞いて立ち上がり。口縁部はわざかに外斜する。外面のU縁部と体部の境に縫を有する。	U縁部内・外面一横ナデ 体部外側へラ削り 内面へラ磨き	砂粒 普通 によい褐色	20%
29	环形 土器 土師器	A 9.2	底部は丸底で、体部は内彌しながら大きく聞いて立ち上がり。口縁部はわざかに外斜する。外面のU縁部と体部の境に縫を有する。	U縁部内・外面一横ナデ 体部外側へラ削り 内面へラ磨き	砂粒 普通 によい褐色	30%

開版番号	器種	法星	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
30	环形土器 土師器	A 9.7 B 2.9	底部は丸底で、体部は内側しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は外傾する。外面の口縁部と体部の境に縫を有する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外面一へラ削り 内面一へラ削き	砂粒 普通 褐色	90%
31	环形土器 土師器	A (10.0)	底部は丸底で、体部は内側しながら大きく開いて立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外面一へラ削り 内面一へラ削き	砂粒 普通 明赤褐色	45%
32	环形土器 土師器	A 7.8	底部は丸底で、体部は内側しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部はやや外傾する。外面の口縁部と体部の境に縫を有する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外面一へラ削り 内面一へラ削き	砂粒 普通 にぶい褐色	30%
33	环形土器 土師器	A 9.8	底部は丸底で、体部は内側しながら大きく開いて立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外面一へラ削り 内面一へラ削き	砂粒 普通 にぶい褐色	95%
34	环形土器 土師器	A (9.4) B 2.0	底部は丸底で、体部は内側しながら大きく開いて立ち上がり、そのまま口縁部に至る。外面の口縁部と体部の境に縫を有する。外面の口縁部と体部の境に縫を有する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外面一へラ削り 内面一へラ削き	砂粒 普通 褐色	50%
35	环形土器 土師器	A (10.0)	底部は丸底で、体部は内側ながら大きく開いて立ち上がり、口縁部はやや外傾する。外面の口縁部と体部に縫を有する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外面一へラ削り 内面一へラ削き	砂粒 普通 明赤褐色	50%

#### 石製品（第185図-36）

36は勾玉である。両側とも孔の周囲が円形に摩耗している。長さ2.3cm・幅1.4cm・腹部幅0.8cm・孔径2mmである。

#### 土製品（第185図-37~41）

37は丸玉の模造品と思われる。焼成は良好で、色調はにぶい褐色である。径1cm・孔径1.5mmである。

38は臼状の玉で、表面はなめらかでつやがある。焼成は良好で、色調はにぶい橙色である。長さ1cm・径1cm・孔径1mmである。

39は切子玉の模造品である。表面はなめらかでつやがあり、中央部が太い。焼成は良好で、色調はにぶい橙色である。長さ2.4cm・径1.2cm・孔径2mmである。

40は管玉の模造品と思われる。表面はなめらかでつやがあり、両端は丸味をもっている。焼成は良好で、色調はにぶい橙色である。長さ1.8cm・径1.2cm・孔径1mmである。

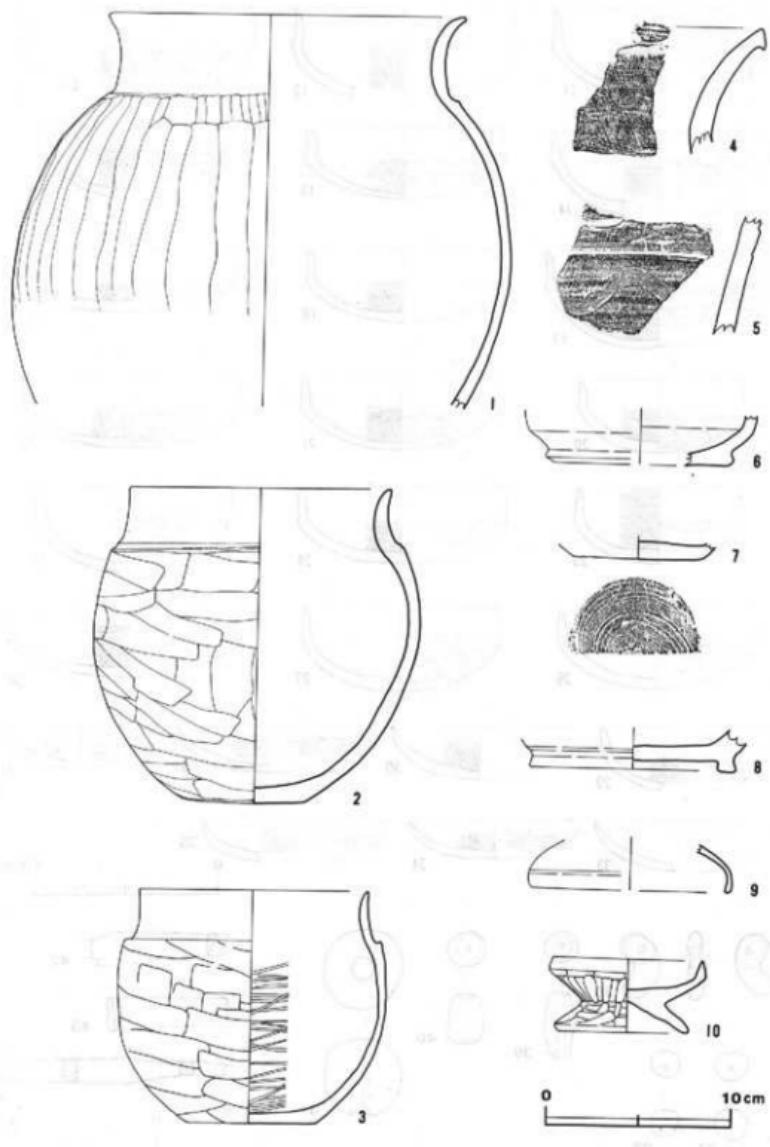
41は土糸で、指ナデにより整形されている。焼成は普通で、色調はにぶい橙色である。径2.9cm・高さ2.8cm・孔径8mmである。

#### 鉄製品（第185図-42~44）

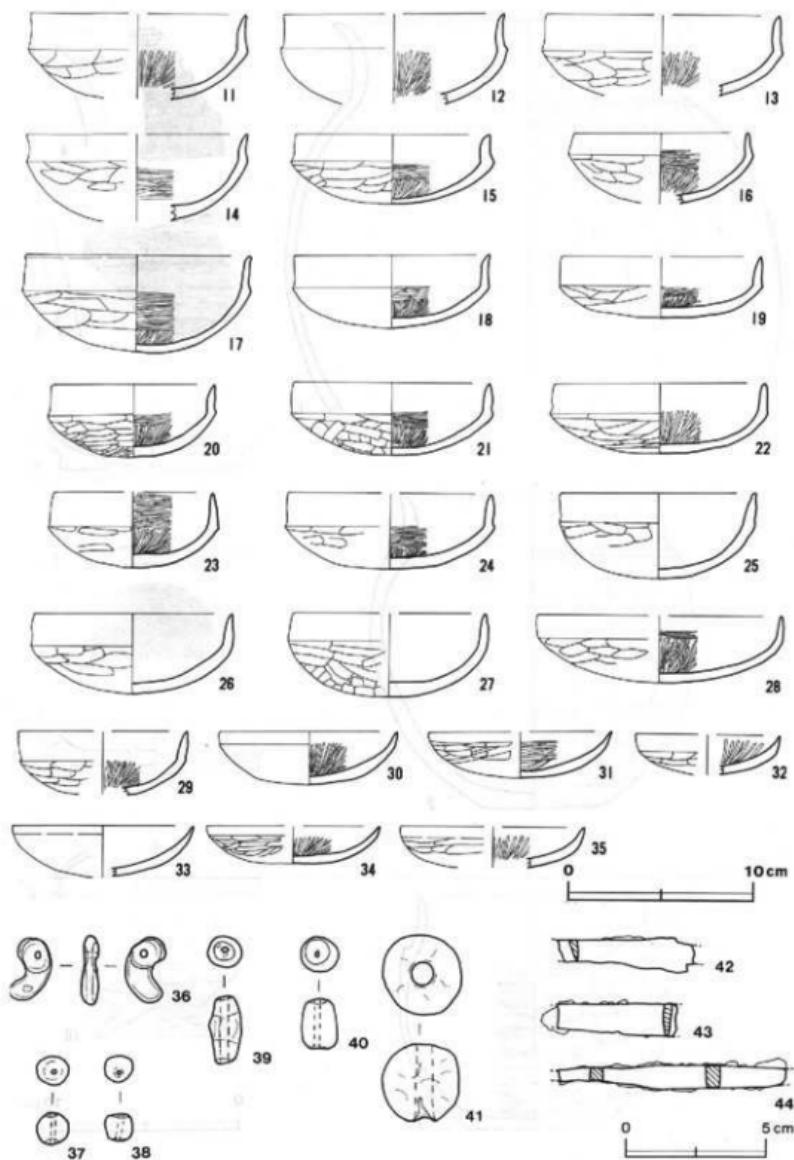
42は刀子で両端部が欠損する。刃・棟の両側に区を有する。現存長4.9cm・刃幅1.2cmである。

43は刀子の刀身部片で、現存長4.2cmである。

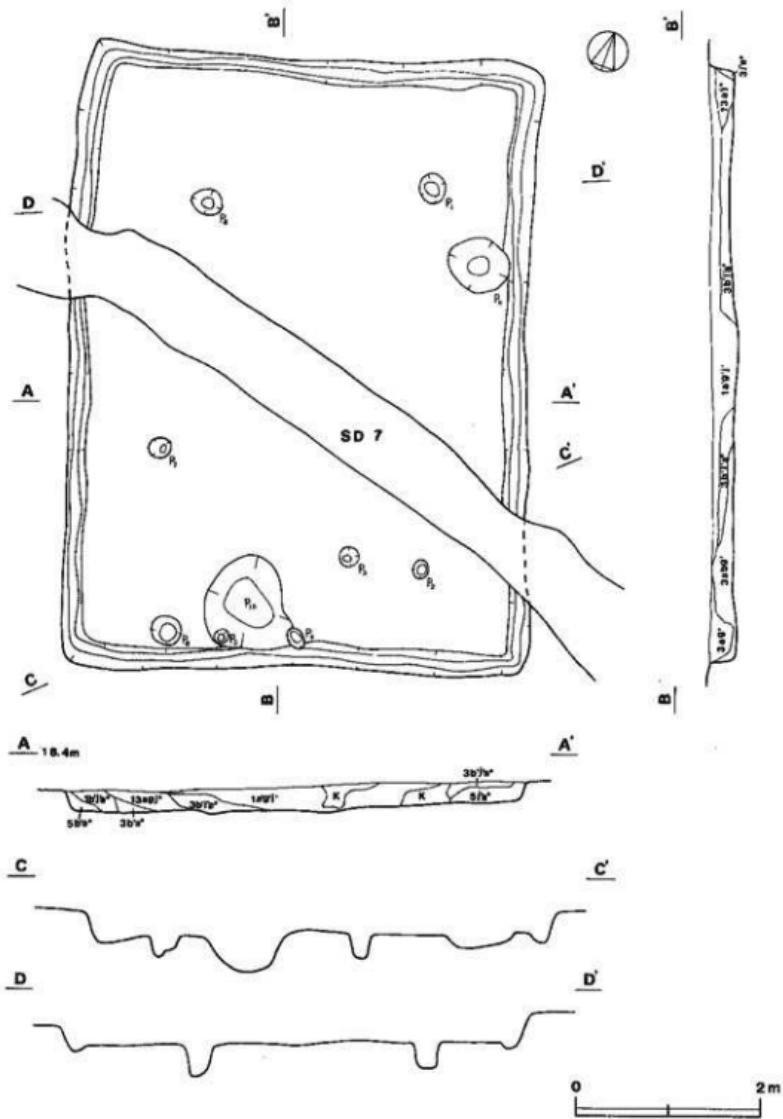
44は鎌の茎部である。断面は方形を呈し、現存長は8.2cmである。



第184図 第49号住居跡出土遺物実測図1 (大昭和町古墳出土品前編分類図表)



第185図 第49号住居跡出土遺物実測図2 (1) 開溝実測面出土遺物実測図 (2) 開溝実測面出土遺物実測図



第186図 第50号住居跡実測図

### 第50号住居跡（第186図）

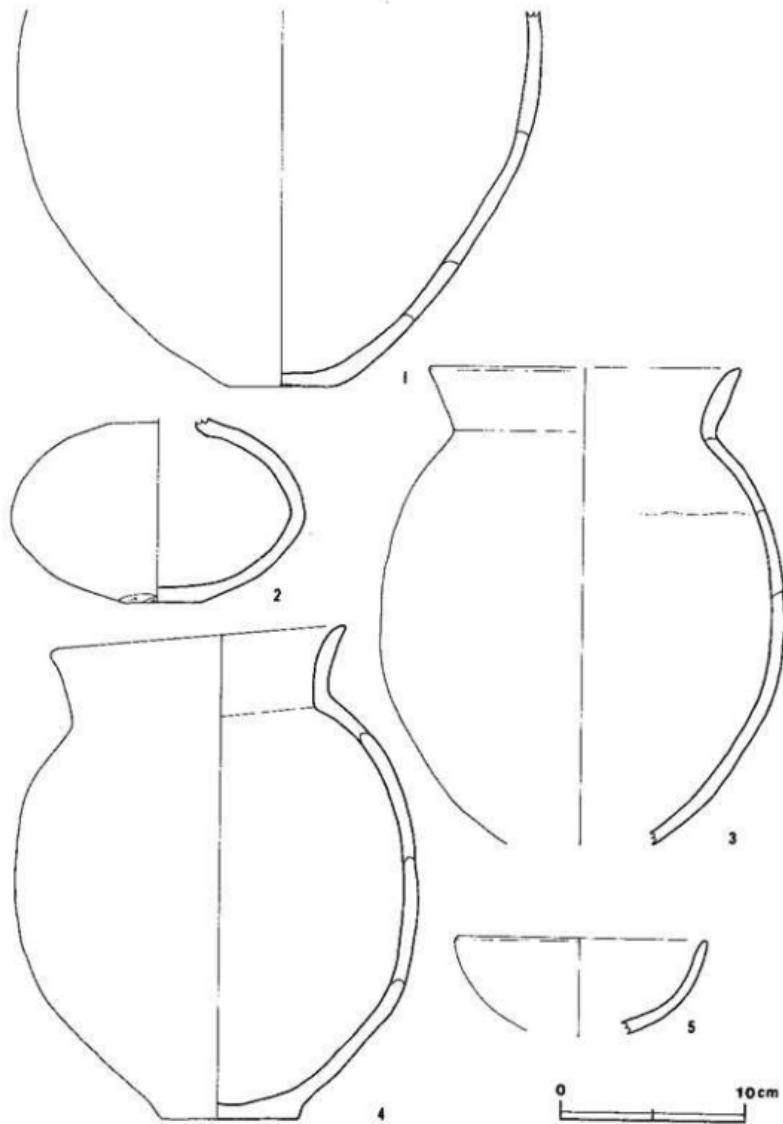
本跡はK1asを中心に確認され、第49号住居跡の東側約0.5m、第46号住居跡の北側約4mに位置している。第7号溝と重複しているが、本跡の中央部を第7号溝が東西に横切っており、本跡の方が古い。

平面形は長軸6.50m・短軸4.90mの長方形を呈しており、長軸方向はN-17.5°-Wを指している。壁は外傾して立ち上がり、壁高は30~40cmである。各壁下には壁溝が全周しており、上幅約20cm・下幅約11cm・深さ約6cmである。床は平坦でやわらかい。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>の10か所確認されている。このうちP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>はいずれも径20~35cm・深さ23~37cmであるが、規則性がなく主柱穴は不明である。P<sub>5</sub>は長径68cm・短径57cmの楕円形を呈し、深さ65cmでほぼ円筒状に掘られ、P<sub>6</sub>は長径103cm・短径70cmの不整楕円形を呈し、深さ43cmで塊状に掘られている。それぞれ東・南壁際に位置し貯蔵穴とも考えられる。かと思われる痕跡は検出されなかったが、第7号溝によつて切られて消滅した可能性もある。覆土は一部擾乱が見られるが、ローム粒子を含む暗褐色土や黒褐色土が上で自然堆積の様相を呈している。

遺物は少なく、いずれも土師器である中央部付近の覆土から壺形土器（第187図-2）、北寄りの西壁際の床面から完形の變形土器（第187図-4）が倒立で出土している。

出土土器觀察表（第187図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	變形土器 土師器	C 5.8	底部は平底で、胴部は内側しながら外上方へ立ち上がる。	胴部外側一横ナゲ 内面一ヘラナゲ	砂粒 普通 暗褐色	30%
2	變形土器 土師器	C 4.1	底部は平底で、胴部は大きく張り扁平な球形をなす。	胴部内・外面一横ナゲ 底部及び胴部下端一ヘラ削り	砂粒 良好 赤色	85% 外面全体に赤彩
3	變形土器 土師器	A 17.0	胴部は丸く張り、やや長脚を足し、口縁部は「く」の字状に開く。	口縁部内・外面一横ナゲ 胴部外側一ナゲ 内面一ヘラナゲ	砂粒 普通 明褐色	40%
4	變形土器 土師器	A 16.0 B 26.2 C 7.4	底部は突出気味の平底で、胴部は丸く張り、やや長脚を足す。口縁部は「く」の字状に開く。	口縁部内・外面一横ナゲ 胴部外側一ヘラナゲ 内面一横位ヘラナゲ	砂粒 普通 において褐色	100% 外面全体に媒付着
5	壺形土器 土師器	A 13.9	体部は内側しながら大きく述べて立ち上がり、そのまま口縁部へ至る。手球状を呈す。	口縁部内・外面一横ナゲ 体部内・外面一ナゲ	砂粒 普通 赤色	70% 外面赤彩

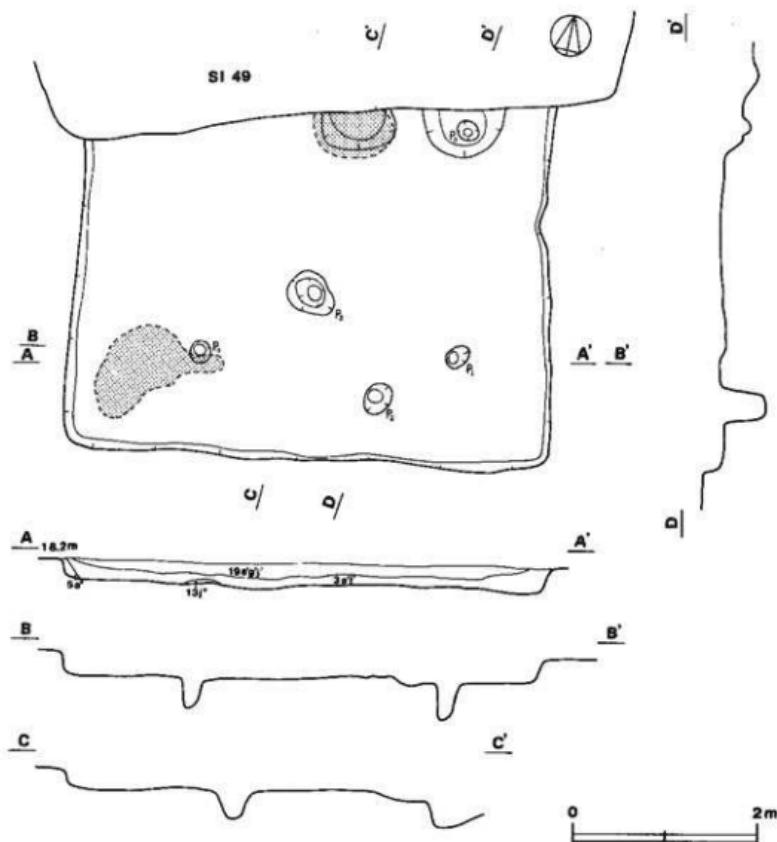


第187図 第50号住居跡出土遺物実測図

第51号住居跡（第188図）

本跡はK1bsを中心に確認され、第50号住居跡の西側約2m、第46号住居跡の北側約4mに位置している。第49号住居跡と重複しているが、本跡の北側部分は第49号住居跡によって切られており、本跡の方が古い。

平面形は( )m × 5.00m の方形を呈するものと思われ、主軸方向はN - 13°-Wを指している。壁は遺存状態がよくやや外傾して立ち上がり、壁高は20~25cmである。床はほぼ平坦で全体によく縮まっており、炉跡の周囲は特に堅い。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4か所確認され、本跡の北側部分のピットの位置は不明であるが、P<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>は径25cmと23cm・深さ42cmと32cmで、位置的に方形に配され



第188図 第51号住居跡実測図

た4本の主柱穴のうちの2本の可能性がある。Psは第49号住居跡によって北側半分を切られているが、径90cmの円形を呈するものと思われ、深さは35cmで塊状に掘られており貯蔵穴とも考えられる。炉跡も第49号住居跡に北側半分を切られて検出されている。平面形は径約80cmの円形を呈するものと思われ、床面を13cm掘り回めている。覆土は自然堆積の状態を示しており2層に分かれている。上層は極暗褐色土、下層は暗褐色土となっており、いずれもローム粒子や焼土粒子を含んでいる。床面には焼土の広がりが見られ、炭化材が散乱していることから火災を受けたと思われる。

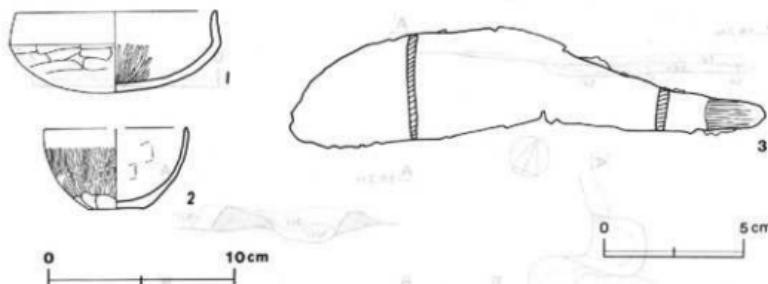
遺物は少なく、土師器の變形土器片が65点、壺形土器などが出土している。

出土土器観察表（第189図）

回数 番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	粒土・焼成・色調	備考
1	壺形土器 土師器	A 1.9	底部は丸底で、全体は内側しながら大き く開いて立ち上がり、口縁部は外反乳暈に やや内側する。	口縁部内・外面一横ナデ 全体外側へラ削り 内面へラ削き	砂粒 普通 褐色	80%
		B 4.4				
2	壺形土器 土師器	A (7.7)	底部は平底で、胴部は内側しながら外上 方へ立ち上がり、そのまま口縁部へ至る。	口縁部内・外面一横ナデ 全体外側へケ目 下端へ ラ削り 内面一ナデ	砂粒 普通 赤褐色	40%
		B 4.4				
		C 3.0				

鉄製品（第189図-3）

3は鎌ではほぼ完成品である。基部に木質部が付着する。現存長は17cmである。

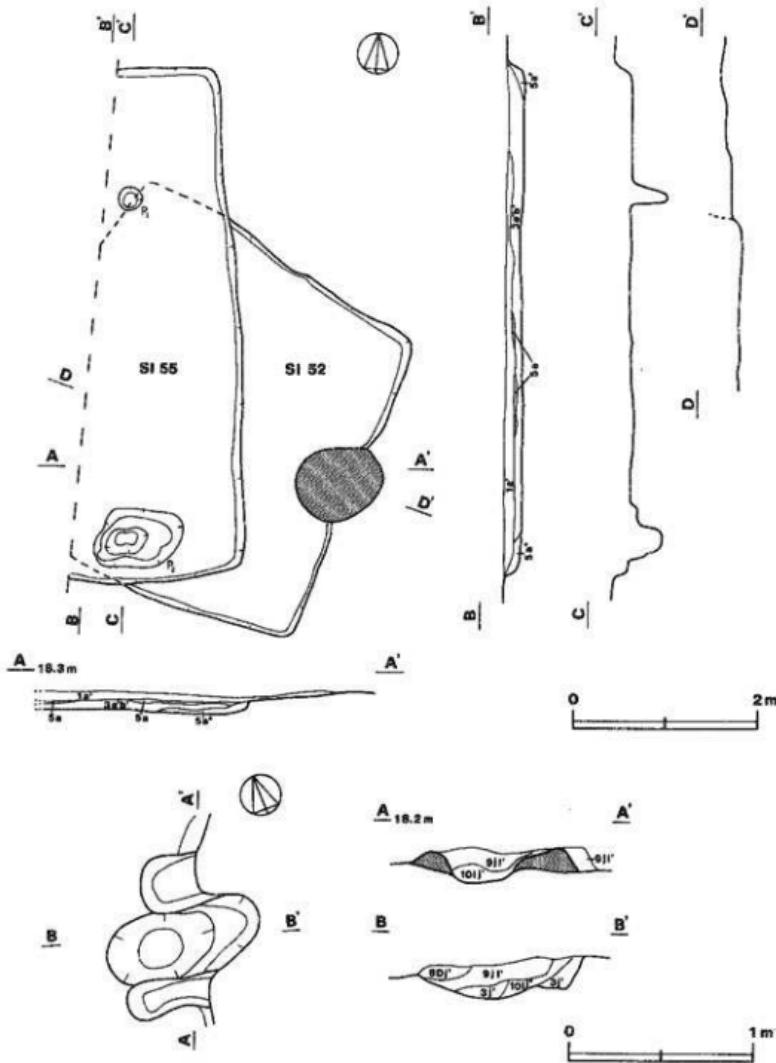


第189図 第51号住居跡出土遺物実測図

第52号住居跡（第190図）

本跡はK1eをを中心に確認され、第46号住居跡の北西側約3mに位置し、第51号住居跡の南西側に接している。第55号住居跡と重複しているが、本跡は第55号住居跡の上に構築されており、本跡の方が新しい。

平面形は3.85m × ( )m の方形を呈するものと思われ、主軸方向は N-110°-E を指している。



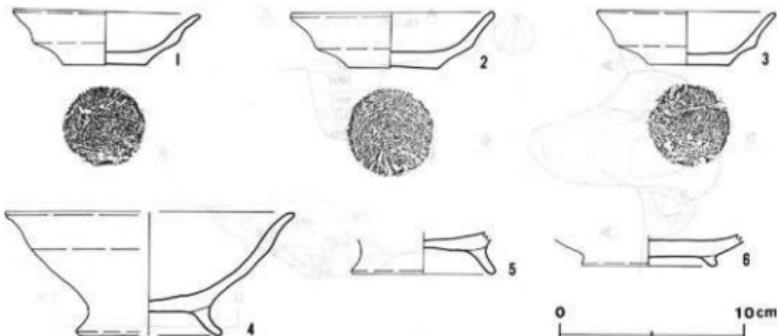
第190図 第52・55号住居跡・カマド実測図

壁は削平されているため立ち上がりは不明瞭で、壁は5cm前後である。床はほぼ平坦であり全体に硬く、カマドの周囲はよく踏み固められている。また、第55号住居跡との重複部分には、ロームブロックで踏み固めた厚さ5~6cmの貼り床が部分的に残っている。ピットはP<sub>1</sub>の1か所検出され、径26cm・深さ40cmであるが、本跡に伴うものかどうか不明である。カマドは東壁中央に付設されているが、削平されて袖の一部が残っているだけである。長さ90cm・幅85cm・焚口幅34cmで、東壁を約30cm切り込んでいる。火床は床を9cm掘り凹めている。覆土はローム粒子をわずかに含む黒褐色土が一層だけであり、自然堆積と思われる。

遺物は少なく、カマド南側の覆土から、土師器の环形土器や高台付环形土器が出土している。

出土土器観察表（第191図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	粘土・焼成色調	備考
1	环形土器 土師器	A 10.1 B 2.9 C 4.5	底部は平底で、体部は外反気味に外上方へ立ち上がる。体部中位に段を有する。	底部一回転糸切り	砂粒 普通 褐色	90%
2	环形土器 土師器	A 10.9 B 3.0 C 4.9	底部は平底で、体部は外上方へ立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。体部中位に段を有する。	底部一回転糸切り	砂粒 普通 褐色	75%
3	环形土器 土師器	A 9.8 B 2.9 C 4.5	底部は平底で、体部は外上方へ立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。体部中位に段を有する。	底部一回転糸切り	砂粒 普通 にほい褐色	50%
4	高台付 环形土器 土師器	A (15.6) B 6.7 D (7.7) E 1.3	体部は内翻気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。 高台は外下方へ外反し、端部は丸い。	内・外面一水焼き痕は弱い 高台は貼り付け 高台内・外面一横ナデ	砂粒 普通 にほい褐色	55%
5	高台付 环形土器 土師器	D 7.8 E 1.4	高台は外下方へのび、端部は丸い。	高台は貼り付け 高台内・外面一横ナデ	砂粒 普通 褐色	20%
6	高台付 环形土器 土師器	D 6.7 E 0.5	体部は外上方へ立ち上がる。高台は短く外下方へのび、端部に面をなす。	高台は貼り付け 高台内・外面一横ナデ	砂粒・雲母 普通 にほい褐色	40%

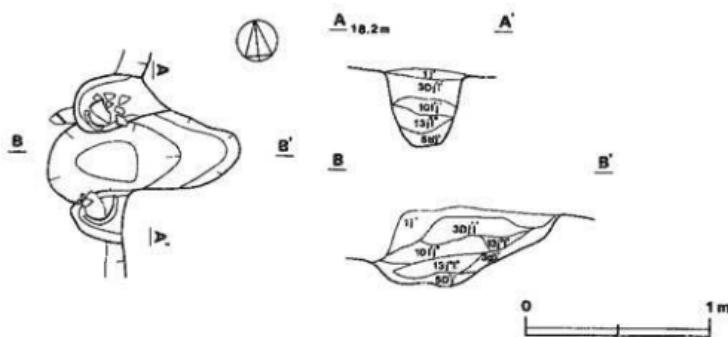
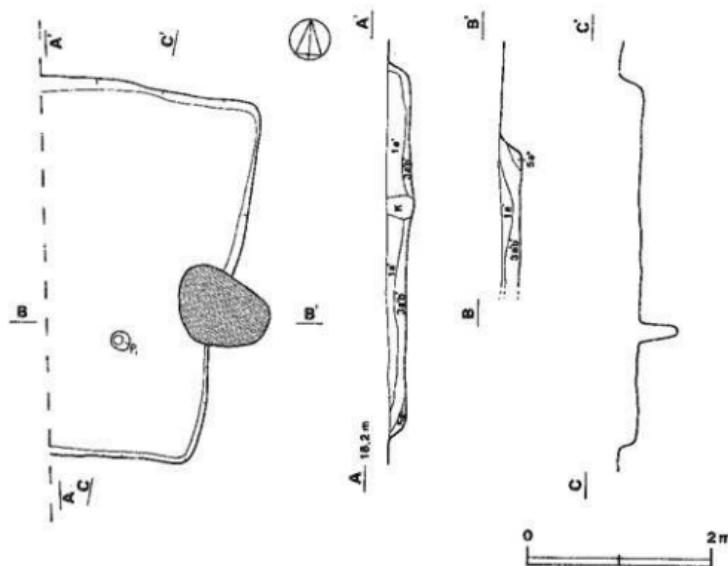


第191図 第52号住居跡出土遺物実測図

第53号住居跡（第192図）

本跡はK1e4を中心確認され、第52号住居跡の南側約4m、第54号住居跡の北側約1mに位置している。西側約半分は調査区域外へと延びている。

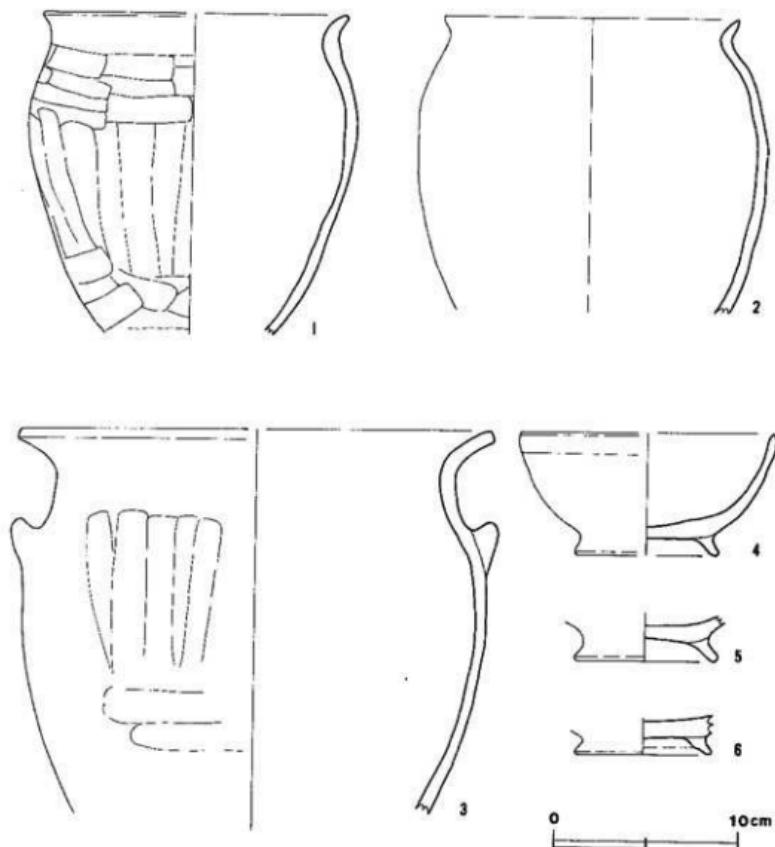
平面形は $4.05m \times ( ) m$  の方形を呈するものと思われ、主軸方向はN-100°-Eを指していると思われる。西壁を除く壁は外傾して立ち上がり、壁高は20cm前後である。床はやや小さな凹凸



第192図 第53号住居跡・カマド実測図

が見られるが、全体によく踏み固められており、カマド周辺は特に堅くなっている。ピットはP<sub>1</sub>の1か所検出されただけで、径20cm・深さ43cmである。カマドは東壁の中央部よりやや南寄りに付設されている。削平され天井部や袖上部は崩壊している。規模は、長さ105cm・幅90cm・焚口幅32cmで、東壁を60cmほど切り込んでいる。両袖内部からは、補強のために使用した變形土器が出土している。奥壁はゆるやかに立ち上がり、火床は床を12cm掘り凹めている。覆土は一部搅乱も見られるが、自然堆積の状態を示しており、大きく2層に分かれている。上層は黒褐色土、下層は暗褐色土でそれぞれローム粒子を含んでいるが、下層の方が多い含んでいる。

遺物は少なく、土器がほとんどである。變形土器がカマドの左袖内部から第193図-1、右袖



第193図 第53号住居跡出土遺物実測図

内部から第193図-2が倒立して出土し、袖部の補強として使用されたものと思われる。カマドの前の覆土から高台付壺形土器が出土している。

出土土器観察表（第193図）

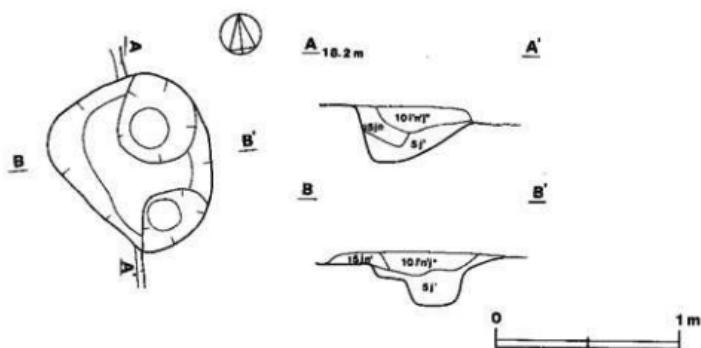
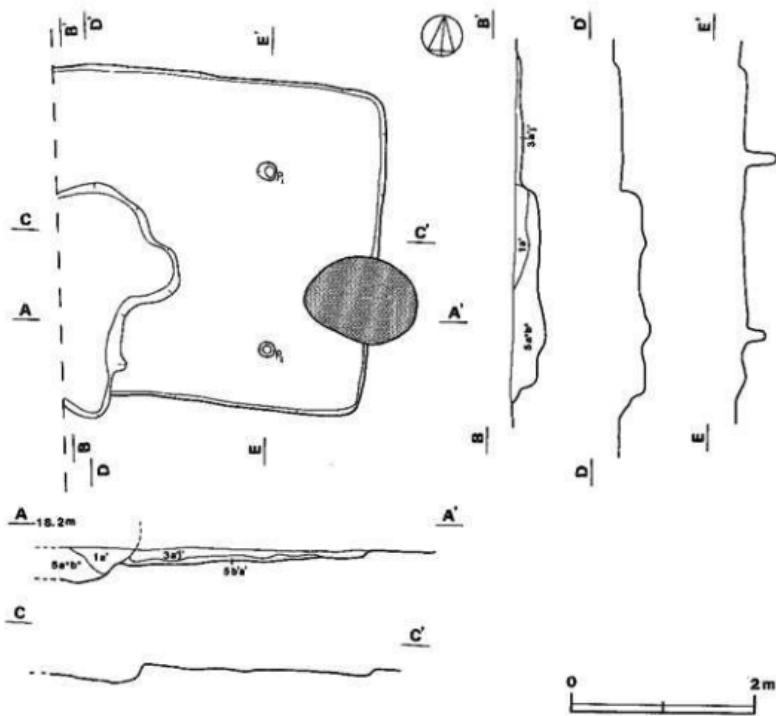
同版 番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	粘土・焼成・色調	備考
1	壺形土器 土師器	A 15.6	胴部は上位でやや張り、以下ゆるやかにすぼむ。口縁部は短く外反して開く。	口縁部内・外面一横ナデ 胴部外面上位一縱位。中・下位一横位のへラ削り 内面一ヘタナデ	砂粒・普通 褐色	40% 底部欠損
2	壺形土器 土師器	A 16.0	胴部は卵形を呈し、口縁部は短く外反しながら開く。	口縁部内・外面一横ナデ 胴部内・外面一ヘタナデ	砂粒・小球 普通 赤褐色	75%
3	壺形土器 土師器	A 25.2	胴部は内側しながら外上方へ立ち上がり、上位が張る。口縁部は外反しながら開き、肩部に凹をなす。胴部上位にこぶ状の把手が対付く。	口縁部内・外面一横ナデ 胴部外面上位一縱位。中・下位一横位のへラ削り 内面一ヘタナデ	砂粒・普通 褐色	30% 側部下位以下欠損
4	高台付 壺形土器 土師器	A (13.8) B 6.7 D 7.6 E 1.0	全体は内側しながら外上方へ立ち上がる。 高台は外下方へのび、底部は丸い。	全体外周一水浸き痕は弱い 内面一縦なへラ磨き 高台は貼り付け 高台内・外面一横ナデ	砂粒 普通 に弱い褐色	30%
5	高台付 壺形土器 土師器	D 7.5 E 1.3	高台は外上方へのび、端部は丸い。	高台は貼り付け 高台内・外面一横ナデ	砂粒 普通 褐色	30%
6	高台付 壺形土器 土師器	D 7.9 E 0.9	高台は外下方へのびる。内面中位に段を有し、端部は丸い。	底部内面一へラ磨き 高台は貼り付け 高台内・外面一横ナデ	砂粒 普通 褐色	30%

第54号住居跡（第194図）

本跡はK1f.sを中心に確認され、第53号住居跡の南側約1m、第9号溝の北側約2.5mに位置している。西側の一部は調査区域外へと延びている。

平面形は3.50m×( )mの方形を呈するものと思われ、主軸方向はN-90°-Eを指している。壁の立ち上がりは不明瞭で、壁高は6~8cmである。床はほぼ平出で全体によく踏み固められており、カマド周辺は特に堅くなっている。南西部は擾乱を受けており床面がえぐられている。ピットはP<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>の2か所検出され、それぞれ径20cm・18cm、深さ35cm・21cmであるが柱穴かどうかは不明である。カマドは東壁中央部のやや南寄りに付設されていたと思われるが、焼土がわずかに残っているだけである。両袖部にある部分にほぼ円形を呈する深さ20cm前後のピットが検出されたが、袖部の補強のための壺などを立てた穴と思われる。覆土は擾乱された部分を除いて自然堆積の様相を呈しており、上層にローム粒子を含む暗褐色土が、下層にローム粒子を多量に含む褐色土が堆積している。

遺物はほとんどなく、土師器の壺形土器片32点、壺形土器片10点、須恵器の壺形土器片4点が出土している。



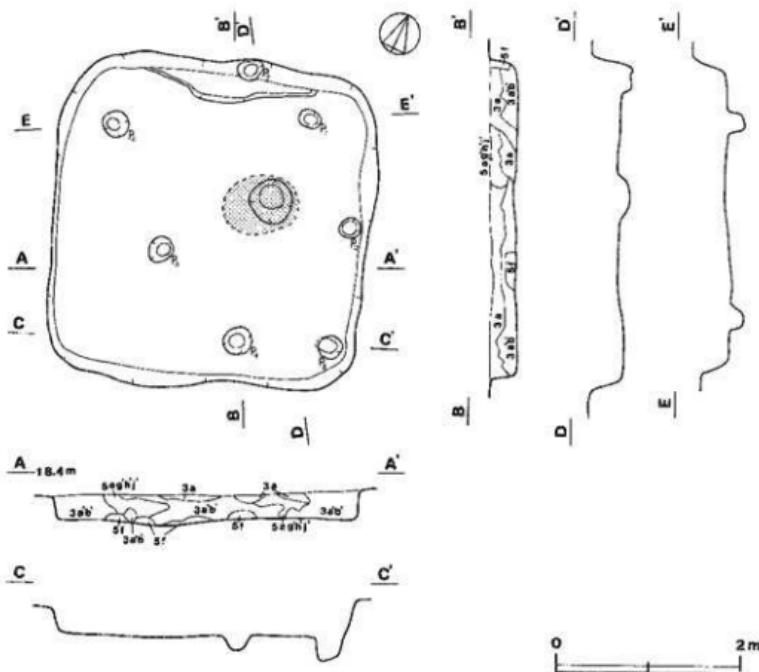
第194図 第54号住居跡・カマド実測図

第55号住居跡（第190図）

本跡はK1b<sub>4</sub>を中心に確認され、第53号住居跡の北側約4m、第51号住居跡の西側約0.5mに位置している。西側部分は調査区域外へ延びている。第52号住居跡と重複しており、本跡の上に第52号住居跡が構築されていることから、本跡の方が古い。

平面形は検出された部分から $5.45\text{m} \times ( )\text{m}$ の方形を呈するものと思われ、長軸方向はN-8.5°-Wを指している。壁は外傾して立ち上がっており、壁高は13~17cmである。床はほぼ平坦であるが全体にやわらかい。ピットはP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の2か所が検出され、P<sub>1</sub>は径26cm・深さ40cmで本跡に伴うものかどうか不明である。南東コーナー部のP<sub>2</sub>は長径100cm・短径65cmの楕円形を呈し、深さ38cmで塊状に掘り込まれており、貯蔵穴と思われる。焼跡もカマドも検出されていない。覆土は自然堆積の状態を示し、ローム粒子を少し含む暗褐色土が大部分である。

遺物は出土していない。



第195図 第56号住居跡実測図

#### 第56号住居跡（第195図）

本跡はJ1gsを中心確認され、第3号土坑の南側約4m、第5号溝の北側約0.5mに位置している。

平面形は長軸3.45m・短軸3.40mの隅丸方形を呈し、長軸方向はN-22°-Wを指している。壁は外傾して立ち上がり、壁高は30~35cmである。床は壁際よりも中央部が約5cm高くなっている。全体に縦まりがあるがそれほど堅くない。北壁下だけに壁溝が検出され、上幅は約18cm・下幅約13cm・深さ約10cmである。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>7</sub>の7か所検出され、径25~30cm・深さ15~25cmである。P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>6</sub>は径25~30cm・深さ15~25cmで、それぞれコーナー部近くに配置され主柱穴と考えられるが、南西コーナー部近くには検出されていない。か跡は中央部からやや北寄りに検出され、径約50cmのほぼ円形を呈している。炉床は床を約10cm掘り凹めているが、焼土の量も少なくそれほど焼けていない。覆土は全体に縦まりがあるが、ロームブロック・ローム粒子を含む暗褐色土が複雑な層を呈しており、埋め戻されたものと思われる。

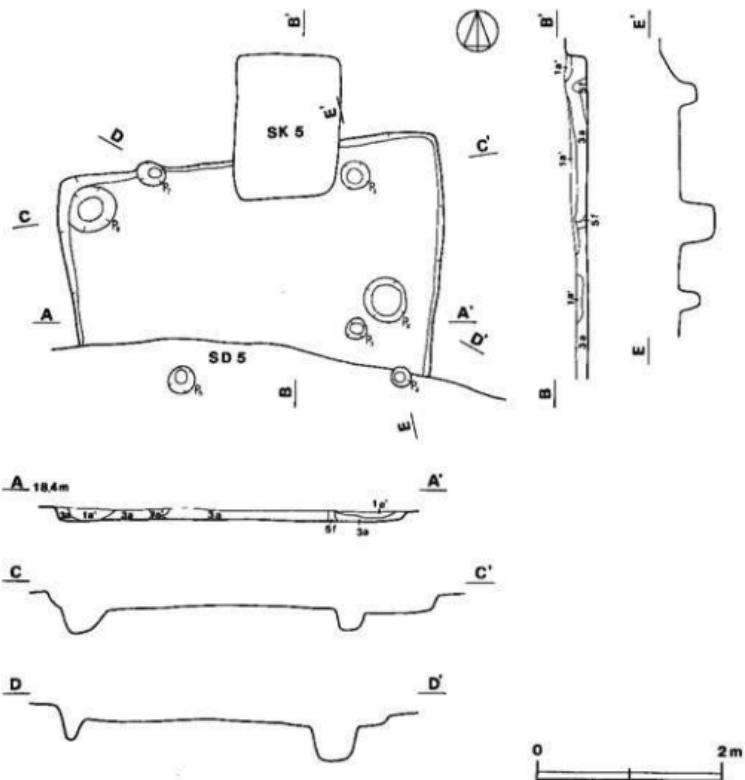
遺物はほとんどなく、土師器の變形土器片が33点、塊形土器片1点が出土しただけである。

#### 第57号住居跡（第196図）

本跡はJ1gsを中心確認され、第4号土坑の南側約2m、第56号住居跡の東側約6mに位置している。第5号溝・第5号土坑と重複しているが、本跡は第5号溝に南側半分を、第5号土坑に北壁を切られており、本跡の方が古い。

平面形は4.20m×( )mの方形を呈するものと思われ、長軸方向はN-1°-Wを指している。壁は外傾して立ち上がり、壁高は10~15cmである。床は平坦で軟弱である。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>7</sub>の7か所検出されている。P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>・P<sub>7</sub>は径20~40cm・深さ20~25cmであるが、配置に規則性がなく主柱穴は不明である。北西コーナー部のP<sub>6</sub>は径50cmの円形を呈し、深さ28cmで塊状に掘り込まれており貯蔵穴と思われる。か跡もカマドも検出されていない。覆土はほぼ自然堆積の状態を示しており、上層に黒褐色土、下層に暗褐色土が堆積している。

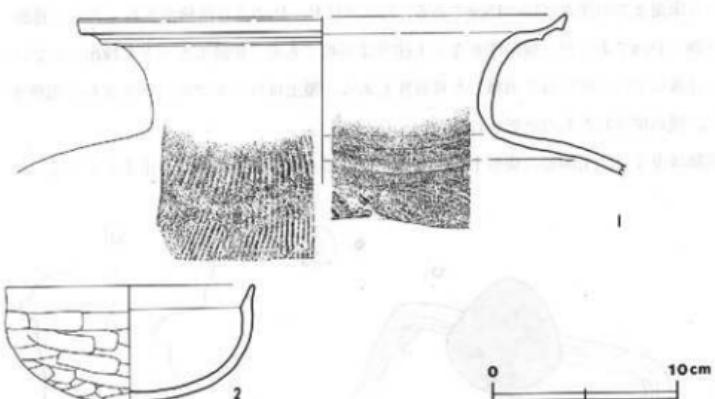
遺物は少なく、北東コーナー部付近の床面から土師器の塊形土器（第197図-2）が完形で、南東寄りの床面から須恵器の變形土器が出土している。



第196図 第57号住居跡実測図

出土土器観察表（第197図）

試験番号	器種	法算	器形の特徴	手法の特徴	地土・焼成・色調	備考
1	圓形土器 須恵器	A (26.3)	体部は大きく張り、頭部は外反しきながら立ち上がり。口縁部は大きく開き、端部は外上方へつまみ出される。口縁直下には段を有する。	I縁部内・外面、頭部内面一横ナデ 頭部外面一カキ目調 縁後縁ナデ 体部外面一洞位の平行叩き 内面一ナデ	砂粒・細砂 良好 灰色	20% I縁部内面・肩部に黄灰色のふりもの
		H 6.3				
2	圓形土器 土師器	A 13.4 H 6.3	底部は丸底で、体部は内側しながら大きくなり開いて立ち上がり。口縁部は短く外傾する。内面の口縁部と体部の境に縫を有する。	I縁部内・外面一横ナデ 体部外面一ヘラ削り 内面一ナデ	砂粒 普通 赤色	100% 内・外面赤彩

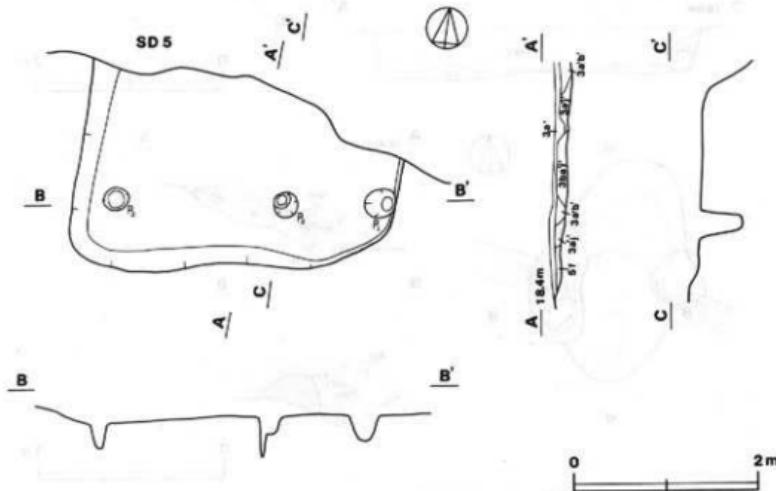


第197図 第57号住居跡出土遺物実測図

第58号住居跡（第198図）

本路はJ11<sub>6</sub>を中心に確認され、第6号溝の北側約3mに位置している。第5号溝と重複しており、本路の北側部分は第5号溝によって切られていることから、本路の方が古い。

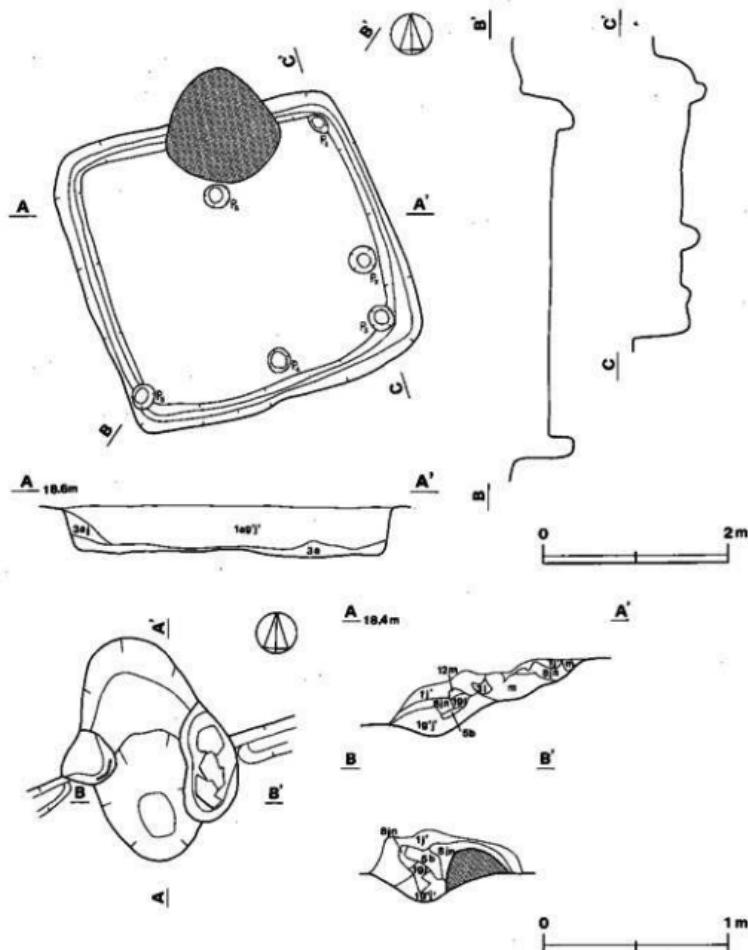
平面形は $3.50\text{m} \times (\quad)\text{m}$ の方形を呈するものと思われるが、全体に遺存状態が悪い。長軸方向はN-0°である。壁は崩れが目立ち立ち上がりは不明瞭で、床面との境もはっきりしない。確認



第198図 第58号住居跡実測図

面から床面までの深さは10~15cmである。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>の3か所検出されており、径25~33cm・深さ28~43cmであるが、規則性がなく主柱穴は不明である。炉跡もカマドも検出されていないが、第5号溝によって切られて消滅した可能性もある。覆土はロームブロックを含む暗褐色土が大部分で、埋め戻されたものと思われる。

遺物は少なく、土師器の變形土器片67点、須恵器の變形土器片が12点出土している。



第199図 第59号住居跡・カマド実測図

### 第59号住居跡（第199図）

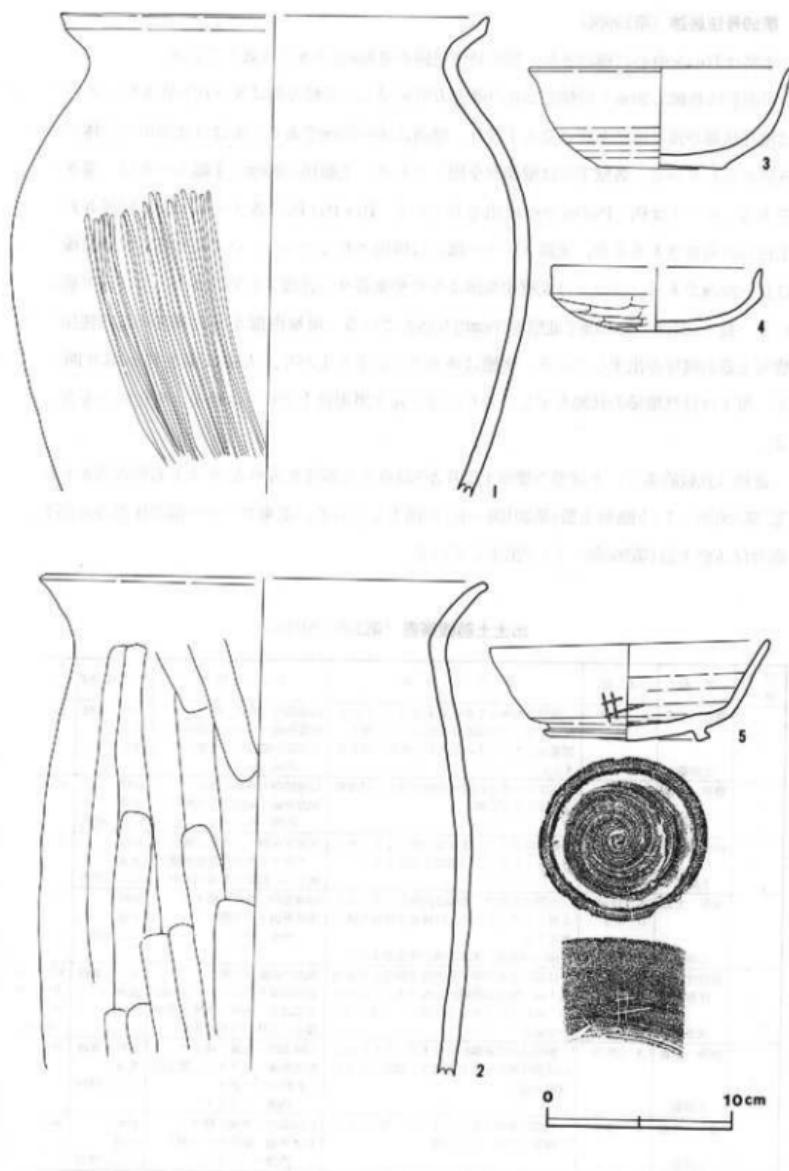
本跡はJlesを中心で確認され、第60号住居跡の東側約2.5mに位置している。

平面形は長軸3.30m・短軸3.25mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-19°Wを指している。壁は遺存状態が良くほぼ垂直に立ち上がり、壁高は50~55cmである。床はほぼ平坦で全体によく踏み固められている。各壁下には壁溝が全周しており、上幅16~20cm・下幅5~8cm・深さ約5cmである。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>の6か所検出されている。P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>5</sub>は各コーナー部に配置されており半柱穴の可能性もあるが、北西コーナー部には検出されなかった。いずれも径は25cm前後で深さは10~27cmである。カマドは北壁中央部よりやや東寄りに付設されているが、ほとんど崩壊している。長さ122cm・幅95cmで北壁を70cm切り込んでいる。両袖内部からは補強のため使用された變形土器の破片が出土している。奥壁はゆるやかに立ち上がり、火床は床を15cm掘り凹めている。覆土は自然堆積の状態を示しており、ほとんど黒褐色土でローム粒子、炭化粒子を含んでいる。

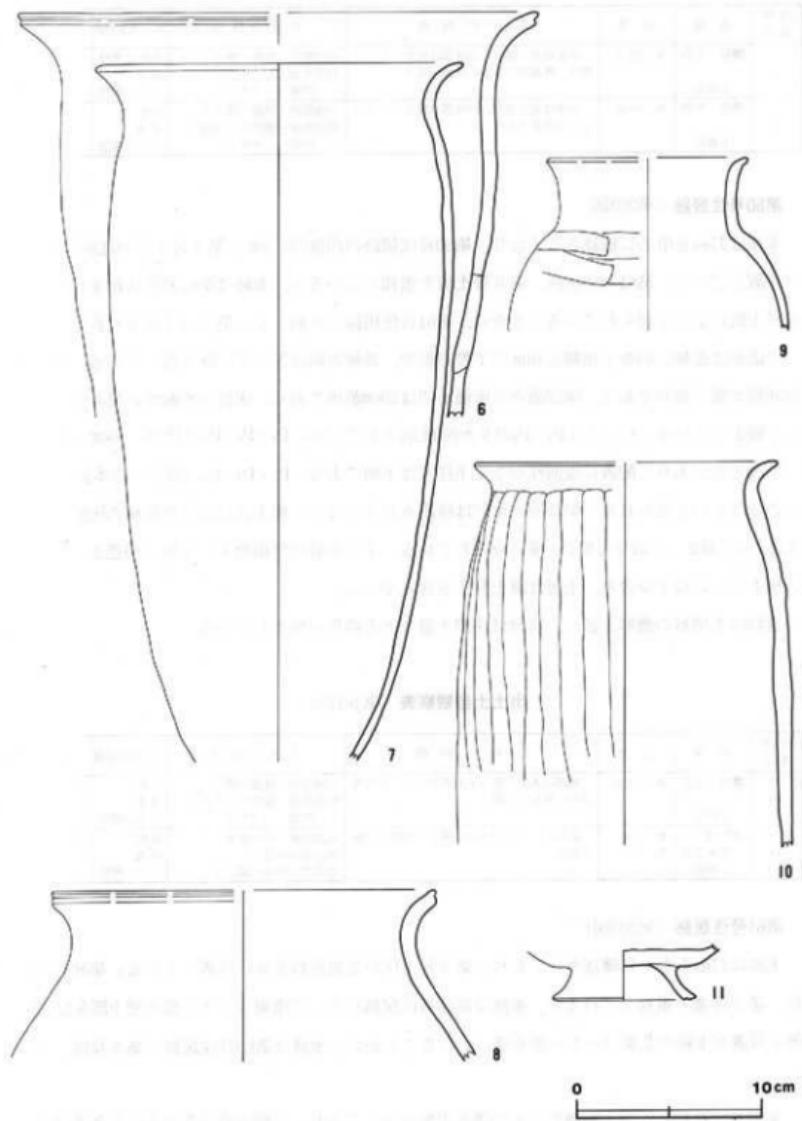
遺物は比較的多く、土師器の變形土器片が523点で大部分を占める。カマド右袖内部から變形土器（第200図-1）と楕形土器（第201図-6）が出土している。北東コーナー部の床面から須恵器の高台付环形土器（第200図-5）が出土している。

出土土器観察表（第200・201図）

目次番号	器種	法算	器形の特徴	手法の特徴	器上-地成-色調	備考
1	變形 土器 土師器	A (23.0)	胴部は内側さがり外上方へ立ち上がり、斜面を呈す。口縁部は外反しながら開き、底部は上方へまみ出され、外側に面を有する。	口縫部内・外面一様ナガ 胴部外面へラナダ・底中位以下斜位の傾度のヘラ焼き 内面へラナダ	砂粒・素面 普通 褐色	30%
2	變形 土器 土師器	A (23.8)	胴部はわずかに張り直腹を呈し、口縁部は外反しながら開く。	口縫部内・外面一様ナガ 胴部外面・底位のヘラ削り 内面へラナダ	砂粒 普通 に赤い褐色	40%
3	球形 土器 土師器	A 14.3 B 3.5	底部は平底で、体部は内側しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。	水滴き成形で、内面は横位のヘラ焼きであるが底面剥離が異しい。底部 厚成で不明。	砂粒 普通 に赤い褐色	80%
4	球形 土器 土師器	A (11.4) B 3.5	底部は丸底で、体部は内側しながら大きく開いて立ち上がり。口縫部は外反気味に直立する。 外面の口縫部と体部の邊に縫を有する。	口縫部内・外面一様ナガ 胴部外面へラナダ 内面ナガ	砂粒 普通 に赤い褐色	20%
5	高台付 环形土器 須恵器	A 15.1 B 5.7 D 8.0 E 0.5	通常は丸底で、中央部が高台よりも突出する。体部は直線的に外上方へ立ち上がる。高台は斜く外上方へ開く。金体に埋めがある。	底部・回転へラ削り 高台は貼り付け・リフロ回転 方向は右 内面 水滴き頭が残る。金体に埋めあり	小石・砂粒 普通 褐色	65% 体部 下位「金」 のヘラ記号 (焼成前)
6	變形 土器 土師器	A (26.0)	胴部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縫部は外反しながら開き、底部に1本の沈線が進る。	口縫部内・外面一様ナガ 胴部外面へラナダ、部分的に削位のヘラ焼き 内面へラナダ	砂粒・素面 普通 に赤い褐色	20%
7	變形 土器 土師器	A 19.8	胴部は長絶を呈し、ほとんど張りはない。口縫部は外反しながら開く。	口縫部内・外面一様ナガ 胴部外面へラ削り 内面へラナダ	砂粒 普通 に赤い褐色	65%



第200図 第59号住居跡出土遺物実測図



第201図 第59・60号住居跡出土遺物実測図

出所 番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	粘土・焼成・色調	備考
8	變形土器 土師器	A (20.4)	腹部は丸く盛り、口縁部は外反しながら開き、外端部に1本の走線が巡る。	口縁部内・外側一様ナメ 脚部外側一ナメ 内面一ハラナメ	砂粒・壳角 普通 にない褐色	20%
9	變形土器 土師器	A (10.6)	腹部は丸く盛り、口縁部は直立してから上部は外反する。	口縁部内・外側一様ナメ 脚部外側一様ほのハリ削り 内面一ハリナメ	砂粒 普通 にない褐色	20%

### 第60号住居跡（第202図）

本跡はJ1eeを中心に確認されており、第59号住居跡の西側約2.5m、第4号土坑の北側約2.5mに位置している。第61号住居跡、第6号土坑と重複しているが、本跡は第61号住居跡を切り、第6号土坑によって切られていることから、第61号住居跡より新しく、第6号土坑より古い。

平面形は長軸5.45m・短軸5.40mの不整方形で、長軸方向はN-5°-Wを指している。壁は遺存状態が悪く崩れており、確認面から床面までは20cm前後である。床はやや起伏が見られ全体によく縮まっている。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>9</sub>の9か所検出されている。P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>・P<sub>9</sub>は径25~50cm・深さ16~52cmと差があり、配置に規則性がなく主穴は不明である。P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>は形狀から本跡に伴うものではないと思われる。が踏やカマドは検出されていない。覆土はほぼ自然堆積の状態を示し、全体によく縮まっており大きさく3層に分かれている。上・中層は暗褐色土、下層は褐色土でいずれの層もローム粒子を含み、上層は焼土粒子を含んでいる。

遺物は土器器の變形土器や、高台付壺形土器などの破片が出土している。

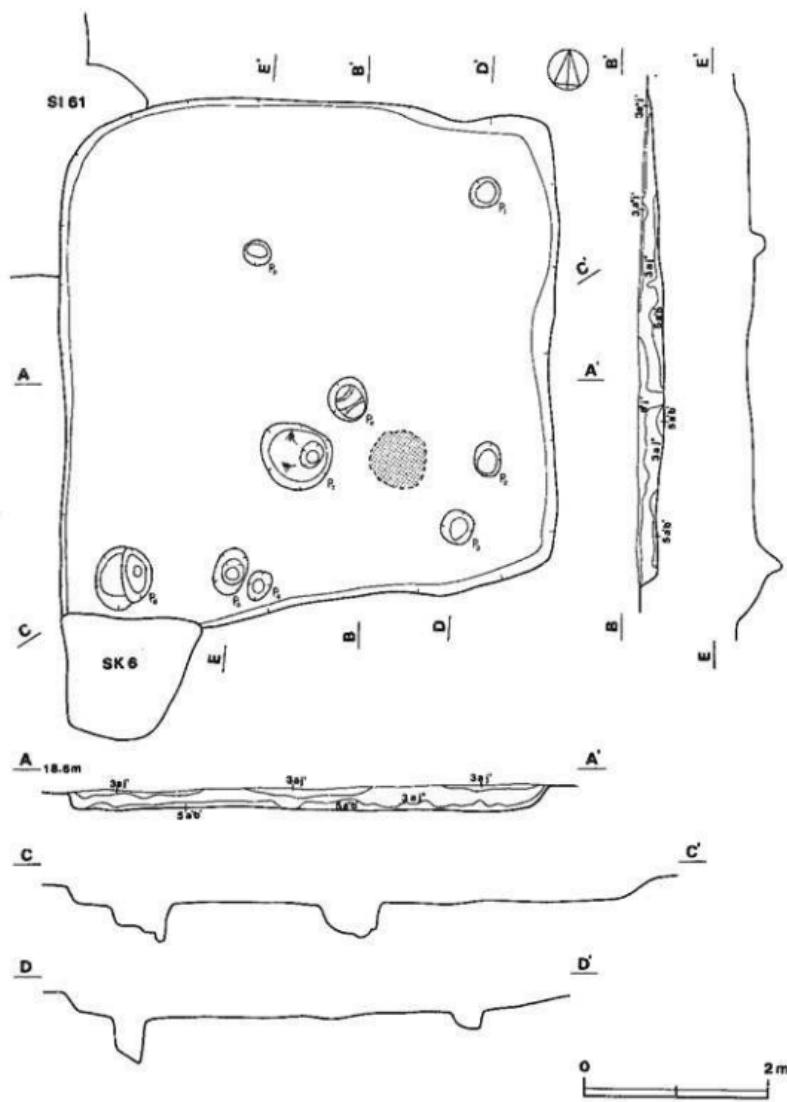
### 出土土器観察表（第201図）

出所 番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	粘土・焼成・色調	備考
10	變形土器 土師器	A (16.4)	腹底はあまり盛らず長軸を主とし、口縁部は幅広く外反して開く。	口縁部内・外側一様ナメ 脚部外側一複数のハリ削り 内面一ハラナメ	砂粒 普通 にない褐色	20%
11	高台付 壺形土器 土師器	D 7.0 E 1.8	高台は「ハ」の字状に開き、端部に浅縫が巡る。	高台内面一ハラナメ 高台は詰り付け 高台内・外側一様ナメ	砂粒 普通 にない褐色	10%

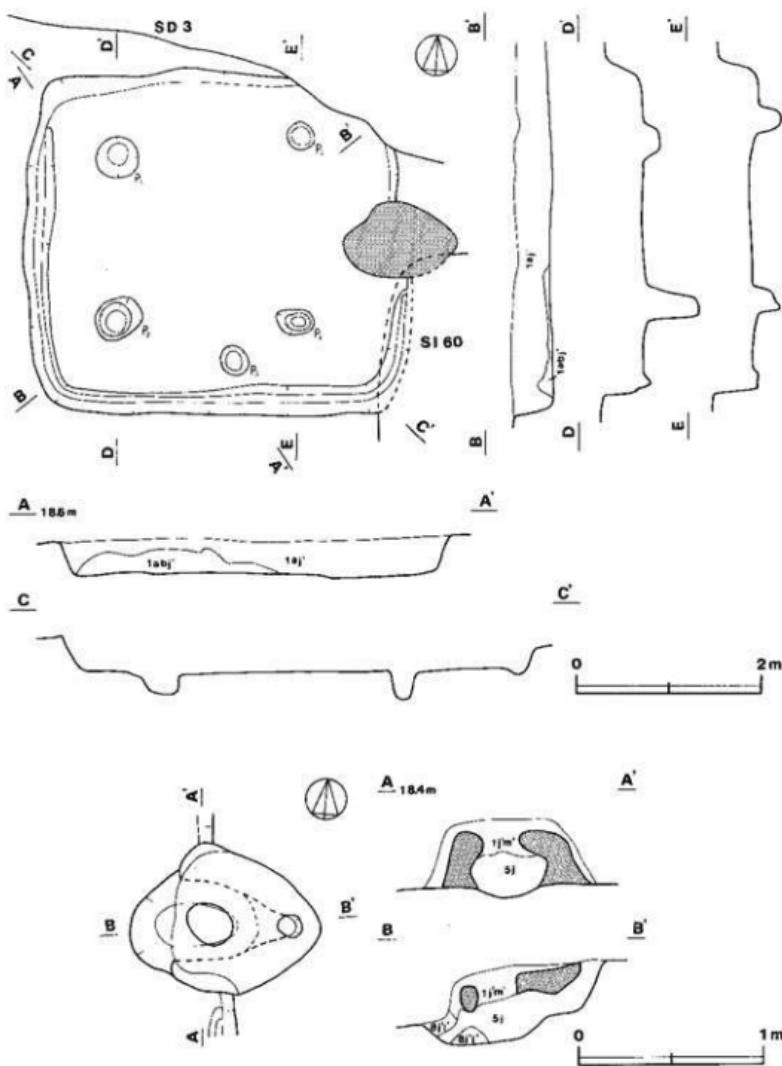
### 第61号住居跡（第203図）

本跡はJ1dsを中心に確認されており、第3号土坑の北東側約2mに位置している。第60号住居跡、第3号溝と重複しているが、本跡は第60号住居跡によって南東コーナー部の壁上部を切られ、第3号溝が本跡の北東コーナー部を切っていることから、本跡は第60号住居跡・第3号溝より古い。

平面形は長軸4.20m・短軸3.65mの隅丸方形を呈しており、主軸方向はN-86.5°-Eを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり壁高は約45cmである。カマドの南側の東壁と南・西壁下には壁溝が周回しており、上幅20~25cm・下幅8~18cm・深さ約5cmである。北壁からカマドにかけて



第202図 第60号住居跡実測図



第203図 第61号住居跡・カマド実測図

は大きく擾乱を受けているため、壁の立ち上がりは悪く壁溝は検出できなかった。床はほぼ平坦で全体に縮まりがあり、カマドから中央部にかけてはよく踏み固められている。ピットはP<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>の5か所検出されているが、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は径30～45cm・深さはP<sub>2</sub>の60cmを除いて25～28cmで、ほぼ対角線上に配置されており主柱穴と思われる。カマドは東壁中央部に付設しており、比較的遺存状態は良好である。長さ105cm・幅80cm・焚口幅43cmで、東壁を50cm切り込んでいる。火床は床を12cm掘り凹め、奥壁は約60°の傾斜で立ち上がり径約13cmの煙道へ続いている。覆土は北壁からカマドにかけての擾乱部を除いて、ほぼ自然堆積の様相を呈し、ローム粒子を含む黒褐色土が大部分である。

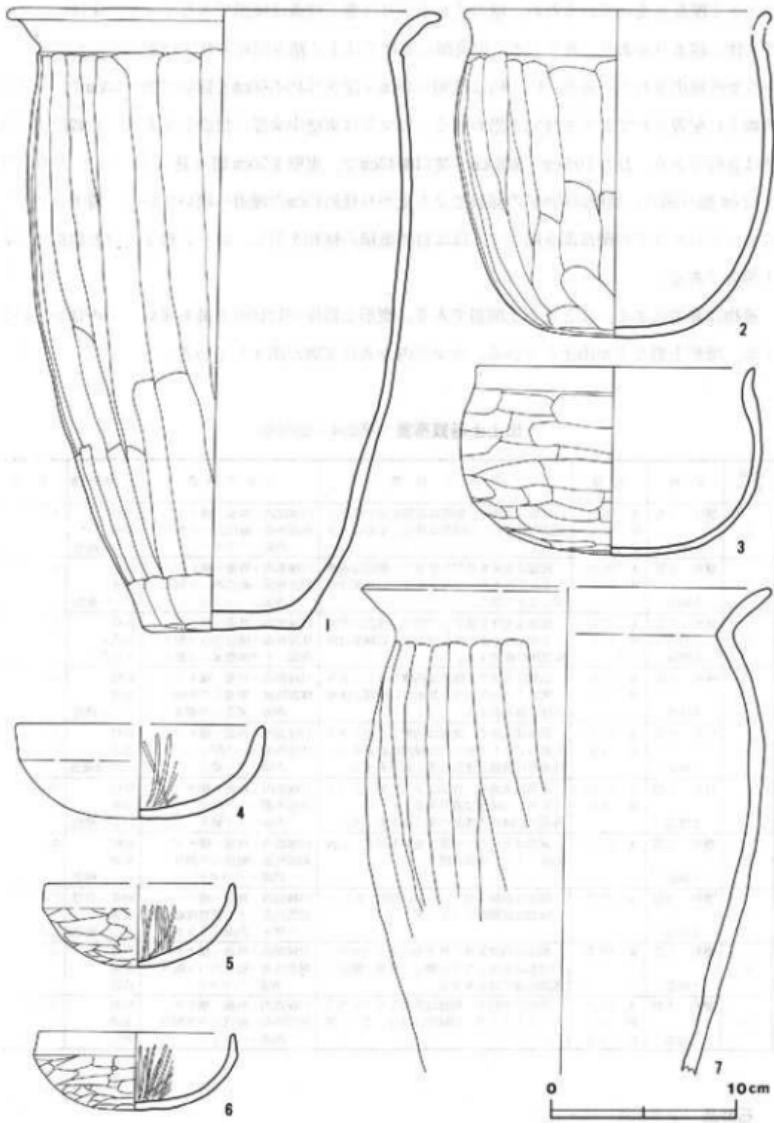
遺物は非常に多く、ほとんど土器器である。甕形土器片が1219点と最も多い。そのほか、环形土器、塊形土器などが出土している。カマド内からは支脚が出土している。

出土土器観察表（第204・205図）

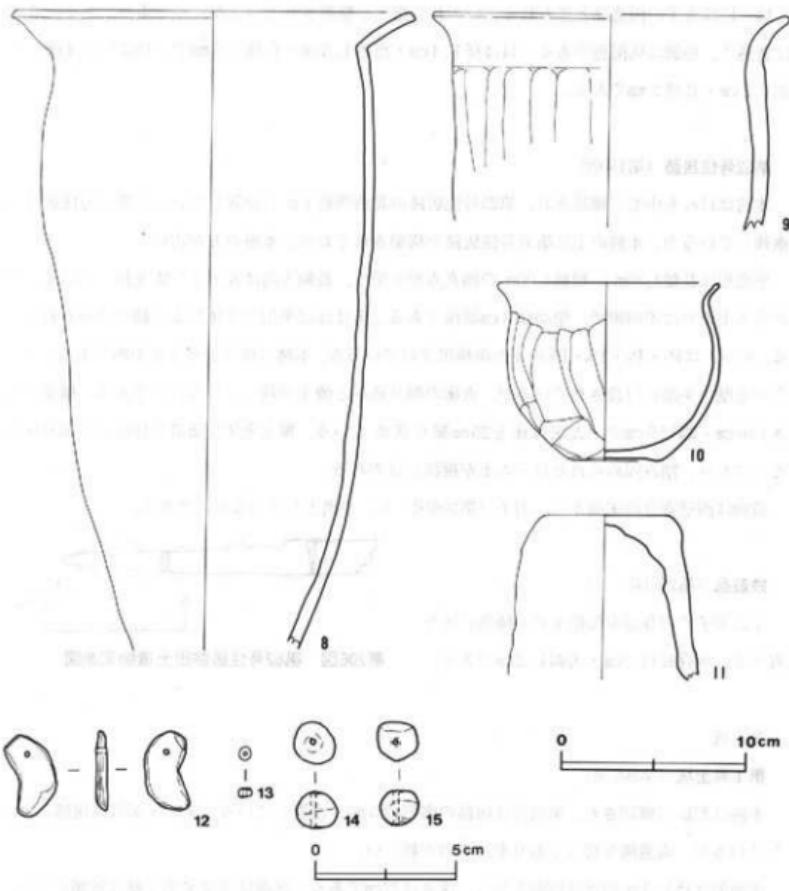
図版 番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	粘土-焼成色調	備考
1	甕形 土器	A 23.0	底部は平底で、胴部は長脚を呈しほどんと盛りはない。口縁部は外反しながら大きくなっている。	口縁部内・外面一横ナデ 胴部外面・縫合のヘラ削り 内面一ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい褐色	90%
	土器器	B 33.4 C (8.2)				
2	甕形 土器	A (16.0)	底部は丸味を帯びた平底で、胴部は内側しながら外上方へ立ち上がり。口縁部は外反しながら開く。	III縁部内・外面一横ナデ 胴部外面一縫合のヘラ削り 内面一ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい褐色	40%
	土器器	B 17.7				
3	甕形 土器	A 15.0	底部は丸味を帯びた平底で、体部は内側しながら外上方へ立ち上がる。口縁部は外反傾向に直立する。	III縁部内・外面一横ナデ 胴部外面一縫合のヘラ削り 内面一ヘラナデ調理後ヘラ削き	砂粒 普通 灰褐色	70%
	土器器	B 10.1				
4	环形 土器	A 13.6	底部は丸底で、体部は内側しながら大きくなっている。外側の口縁部と体部の縫合に棱を有する。	II縁部内・外面一横ナデ 体部外面一縫合して不明 内面一縫合ヘラ削き	砂粒 普通 にぶい褐色	45%
	土器器	B 6.0				
5	环形 土器	A (10.2)	底部は丸底で、体部は内側しながら大きくなっている。外側の口縁部と体部の縫合に棱を有する。	II縁部内・外面一横ナデ 体部外面一ヘラ削り 内面一ヘラ削き	砂粒 普通 にぶい褐色	30%
	土器器	B 4.6				
6	环形 土器	A (10.6)	底部は丸底で、体部は大きくなっている。外側の口縁部と体部の縫合に棱を有する。	II縁部内・外面一横ナデ 体部外面一ヘラ削り 内面一ヘラ削き	砂粒 普通 にぶい褐色	70%
	土器器	B 4.3				
7	甕形 土器	A (21.8)	胴部は上段がやや盛り長脚を呈し、口縁部は「く」の字状に開く。	III縁部内・外面一横ナデ 胴部外面一縫合のヘラ削り 内面一ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい褐色	40%
	土器器					
8	甕形 土器	A 21.7	胴部は長脚を呈し、ほとんど盛りはない。口縁部は直線的に大きくなっている。	III縁部内・外面一横ナデ 胴部外面一ナデ調理後縫合のヘラ削き 内面一ヘラナデ	細粒 普通 にぶい褐色	70%
	土器器					
9	甕形 土器	A (18.2)	胴部に内側気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は外反しながら開く。外側の胴部と頸部の縫合に棱を有する。	III縁部内・外面一横ナデ 胴部外面一縫合のヘラ削り 内面一ヘラナデ	砂粒 普通 褐色	30%
	土器器					
10	甕形 土器	A 11.9	底部は平底で、胴部は内側しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は外反しながら開く。	III縁部内・外面一横ナデ 胴部外面一縫合のヘラ削り 内面一ヘラナデ	砂粒 普通 褐色	70%
	土器器	B 9.7				
		C 4.8				

石製品（第205図-12・13）

12は勾玉の模造品である。板状を呈し、全面雑に研磨されている。長さ2.9cm・幅1.5cm・厚部幅1.2cm・厚さ0.5cmで、石質は滑石である。



第204図 第61号住居跡出土遺物実測図（1）



第205図 第61号住居跡出土遺物実測図（2）

13は白玉である。側面を縦方向に研磨し、ほぼ円形に仕上げている。上下面とも平坦に研磨されている。径4.8mm・長さ2.3mm・孔径1.8mmで、石質は滑石である。

#### 土製品（第205図-11・14・15）

11は支脚である。上面は平坦で、下に向かってわずかに開く。空洞で下部が欠損しており、コップを倒立させたような形である。手捏ねにより整形され、指頭痕が残る。加熱によりもろくなつており、にぶい赤褐色を呈する。上面径7.1cm・現存高8.8cmである。

14・15は丸玉の模造品と思われる。いずれも指ナデ整形されているが、やや歪みがある。焼成は普通で、色調は灰褐色である。14は径1.4cm・高さ1.3cm・孔径1.5mmで、15は径1.4cm・高さ1.2cm・孔径2mmである。

#### 第62号住居跡（第150図）

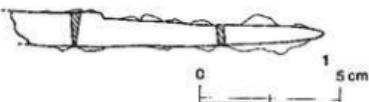
本跡はIIc<sub>7</sub>を中心に確認され、第25号住居跡の北西側約1mに位置している。第37号住居跡と重複しているが、本跡の上に第37号住居跡が構築されており、本跡の方が古い。

平面形は長軸4.30m・短軸4.00mの隅丸方形を呈し、長軸方向はN-7°-Wを指している。壁の立ち上がりは不明瞭で、壁高は3cm前後である。床はほぼ平坦で全体によく踏み固められている。ピットはPs・Ps・Ps・Pnの4か所検出されているが、本跡に伴うかどうか不明である。カマドが北壁中央部に付設されているが、火床の掘り込みと焼上が残っているだけである。推定で長さ136cm・幅125cmで、火床は床を25cm掘り凹めている。覆土全体が第37号住居跡の貼り床となっており、踏み固められたローム土が板状にはがれる。

遺物は西壁寄りの床面から、刀子（第206図-1）が出土しているだけである。

#### 鉄製品（第206図-1）

1は刀子で刀身部が欠損する。棟側に区を有する。現存長11.3cm・刃幅1.2cmである。



第206図 第62号住居跡出土遺物実測図

#### (2)土坑

##### 第1号土坑（第207図）

本跡はJ2b<sub>8</sub>に確認され、第34号住居跡の南側約5mに位置している。第35・36号住居跡と重複しているが、両遺構を切っており本跡の方が新しい。

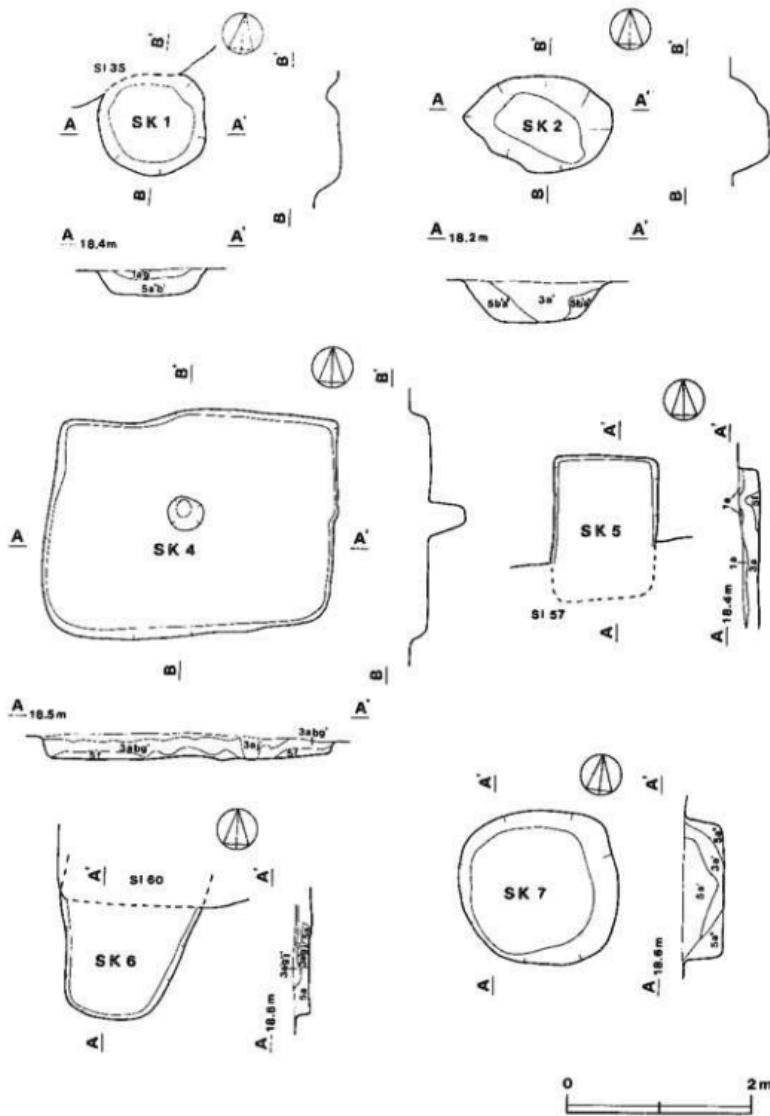
平面形は径1.1mのほぼ円形を呈し、深さは27cmである。底面はほぼ平坦で壁は外傾して立ち上がっている。覆土は自然堆積の状態を示し2層に分かれ、上層は黒褐色土、下層は褐色土で全体にやわらかい。

遺物は出土していない。

##### 第2号土坑（第207図）

本跡はK1h<sub>8</sub>に確認され、第47号住居跡の西側約0.5mに位置している。

平面形は長径1.65m・短径1.05mの不整規円形を呈し、長径方向はN-86°-Wを指している。深さは40cmで、底面はほぼ平坦である。覆土は自然堆積の状態を示し2層に分かれ、上層は暗褐色



第207図 第1・2・4~7号土坑実測図

色土、下層は褐色土である。いずれもローム粒子を含み縮まりがある。

遺物は出土していない。

#### 第4号土坑（第207図）

本跡はJ1f<sub>1</sub>に確認され、第60号住居跡の南側約2.5m、第5号土坑の北約1mに位置している。

平面形は長軸3.1m・短軸2.5mの不整方形を呈し、長軸方向はN-88°-Eを指している。壁はやや外傾し、深さ20cmである。底面は平坦で、中央に径40cmの円形で深さ42cmのピットがある。覆土は自然堆積の状態を示し3層に分かれ、上・中層は暗褐色土、下層は褐色土で全体に縮まりがある。

遺物は出土していない。

#### 第5号土坑（第207図）

本跡はJ1g<sub>7</sub>に確認され、第4号土坑の南側約1mに位置している。第57号住居跡と重複しており、第57号住居跡を切っており本跡の方が新しい。

平面形は長軸1.5m・短軸1.1mの方形を呈し、長軸方向はN-3°-Eを指している。深さは25cmで、壁はやや外傾して立ち上がり、底面は平坦である。覆土は自然堆積の状態を示し、ローム粒子を含む暗褐色土が主である。

遺物は出土していない。

#### 第6号土坑（第207図）

本跡はJ1f<sub>6</sub>に確認され、第4号土坑の北西側約1.5mに位置している。第60号住居跡と重複しているが、第60号住居跡を切っており本跡の方が新しい。

平面形は長軸( )m・短軸1.2mの不整方形を呈し、長軸方向はN-5°-Eを指している。深さは20cmで、壁は外傾して立ち上がり、底面は平坦である。覆土は暗褐色土が主であるが擾乱を受けている。

遺物は出土していない。

#### 第7号土坑（第207図）

本跡はJ1f<sub>6</sub>に確認され、第59号住居跡の南東側約6.5mに位置している。

平面形は径1.7mの円形を呈している。深さは45cmで、壁は外傾して立ち上がり、底面は平坦である。覆土は自然堆積の状態を示し、褐色土が主で全体にやわらかい。

遺物は出土していない。

### 第3号土坑（第208回）

本跡はJ1e<sub>4</sub>に確認され、第56号住居跡の北側約4m、第61号住居跡の南西側約2mに位置している。

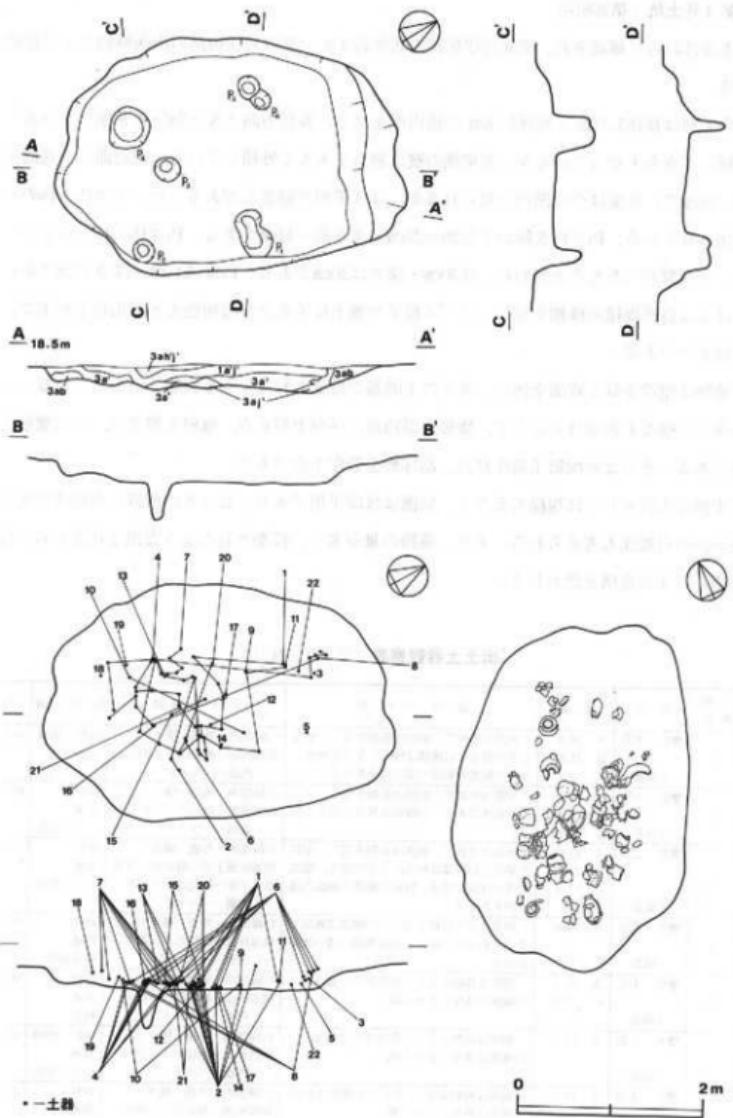
平面形は長径3.70m・短径2.50mの梢円形を呈し、長径方向はN-28°-Eを指している。壁は外傾して立ち上がっているが、北東側の壁は崩れて大きく外傾している。確認面から底面までは23~28cmで、底面はやや凹凸が見られるが、ほぼ平坦で綺麗である。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>の6か所検出されている。P<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>を除いて径20~25cm・深さ30~44cmである。P<sub>5</sub>はP<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>と同じく2つのピットが繋がったものと思われ、径30cm・深さは30cmである。P<sub>6</sub>は径45cm・深さ42cmである。覆土はほぼ自然堆積の様相を呈し、ローム粒子や焼土粒子を含む暗褐色土と黒褐色土が主で、全体に綺麗である。

遺物は壁際を除く底面全体に、多くの土師器が投棄されたような状態で出土している。いずれも復元可能なものがほとんどで、變形土器13点、環形土器6点、壺形土器2点、台付變形土器1点である。そのほか塊形土器片11点、高環形土器片1点である。

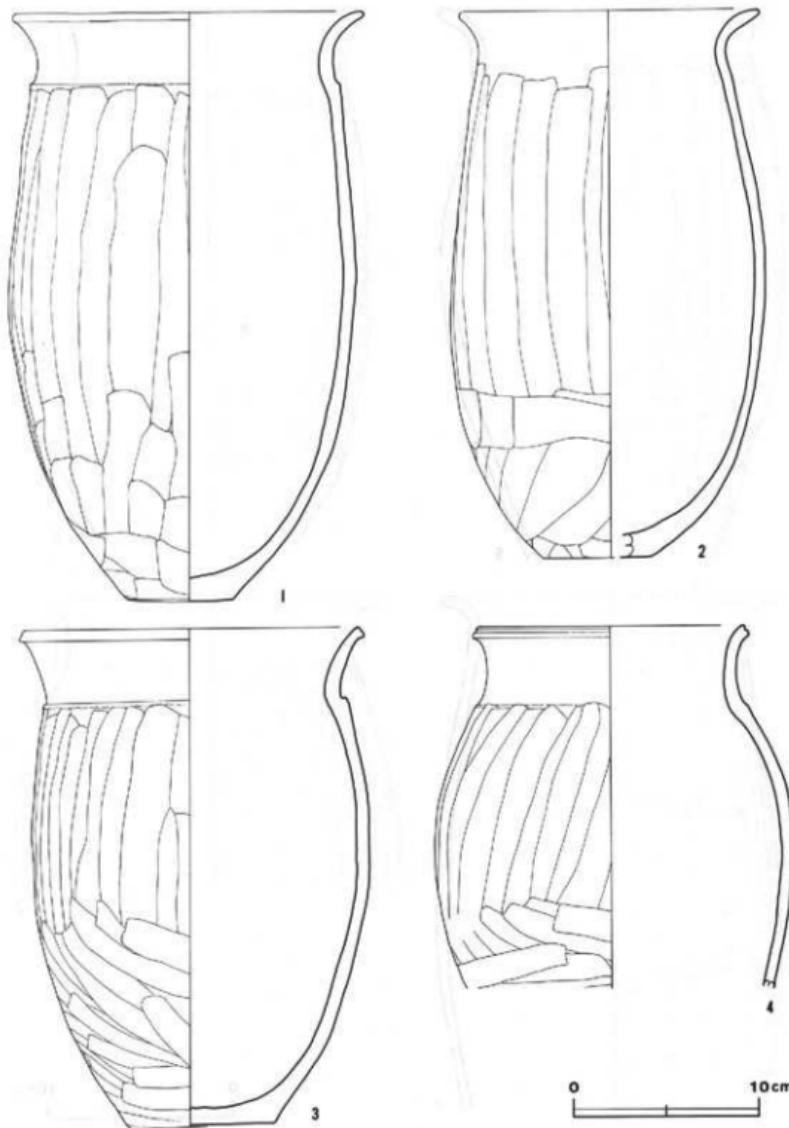
本跡は土坑としては規模も大きく、底面はほぼ平坦であり、ピットの配置は規則性に欠けるが住居跡の可能性も考えられる。また、遺物の量が多く、投棄されたような出土状態から、特別な性格を有する遺構と思われる。

出土土器觀察表（第209~212回）

回数 番号	器種	法景	器形の特徴	手法の特徴	胎土-速成-色調	備考
1 土師器	變形土器	A 18.8 B 31.6 C 5.7	底部は平底で、腹部は長脚を呈し、中位がやや張る。 口縁部は外反しながら開き、外側の腹部と脚部の境に縫隙を有する。	口縁部内・外面一横ナタ 脚部外側一縫合のヘラ削り 内面一ヘラナガ	砂粒・粗粒 普通 に赤褐色	85%
	變形土器	A 15.6 B 29.4 C (5.8)	底部は平底で、腹部は長脚を呈し、下ぶくれた気味である。 口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面一横ナタ 脚部外側一縫合のヘラ削り 内面一ヘラナガ	砂粒 普通 に赤褐色	69%
	上脚器	A 17.8 B 27.0 C 7.4	底部は平底で、腹部は長脚を呈し、中位が張る。 口縁部は外反しながら開き、腹部に浅い沈線が巡る。 外側の腹部と脚部の境に縫隙を有する。	口縁部内・外面一横ナタ 脚部外側上半一縫合のヘラ削り 下半一斜位のヘラ削り 内面一ヘラナガ	砂粒 普通 に赤褐色	70%
4 上脚器	變形土器	A 14.4	腹部はやや長脚を呈し、口縁部は外反しながらわざわざ開く。 口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面一横ナタ 脚部外側一縫合のヘラ削り 内面一ヘラナガ	砂粒 普通 明赤褐色	60%
	上脚器	A 17.7 C 7.9	脚部は長脚を呈し、中位がやや張る。 口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面一横ナタ 脚部外側一縫合のヘラ削り 内面一ヘラナガ	砂粒 普通 赤褐色	60%
6 土師器	變形土器	A 17.0	脚部は長脚を呈し、中位がやや張る。 口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面一横ナタ 脚部外側一縫合のヘラ削り 内面一ヘラナガ	砂粒・粗粒 普通 に赤褐色	65%
	土師器	A 18.2	脚部は長脚を呈し、ほとんど張りはない。 口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面一横ナタ 脚部外側一縫合のヘラ削り 内面一ヘラナガ	砂粒 普通 赤褐色	40%
8 上脚器	變形土器	A 17.7	脚部は長脚を呈し、中位が張る。 口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面一横ナタ 脚部外側一縫合のヘラ削り 内面一ヘラナガ	砂粒 普通 明赤褐色	30%
	上脚器					

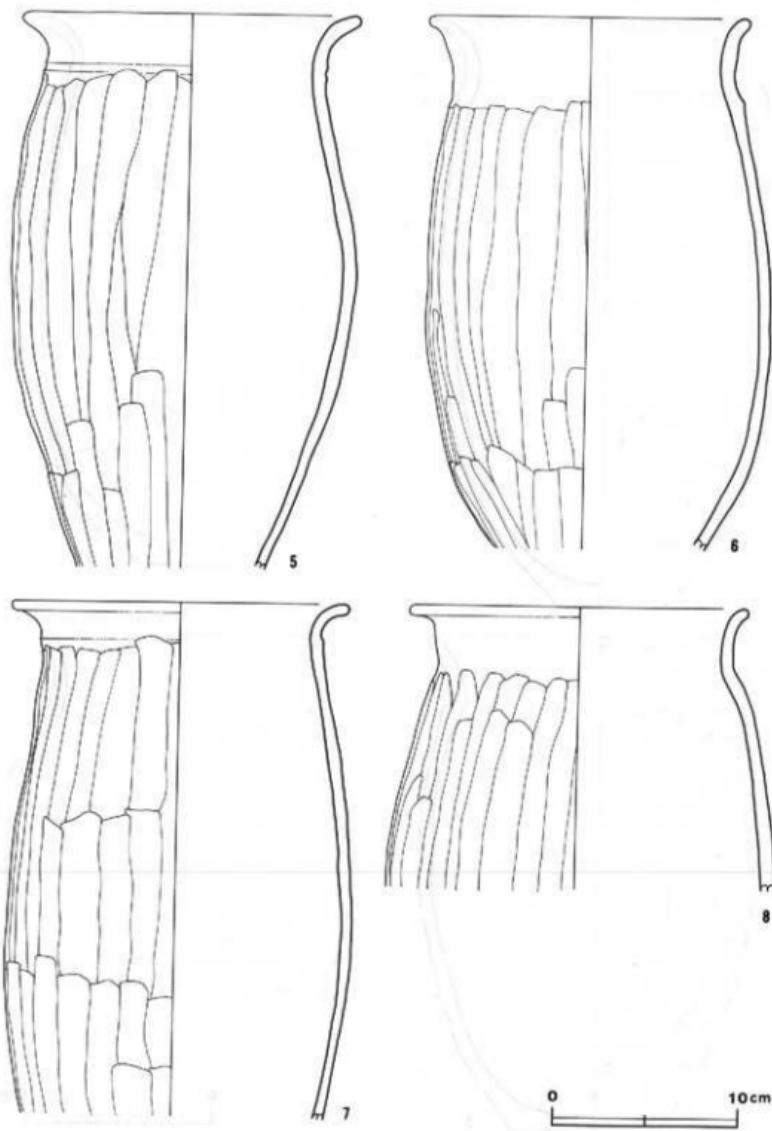


第208図 第3号土坑実測図・遺物出土状態図



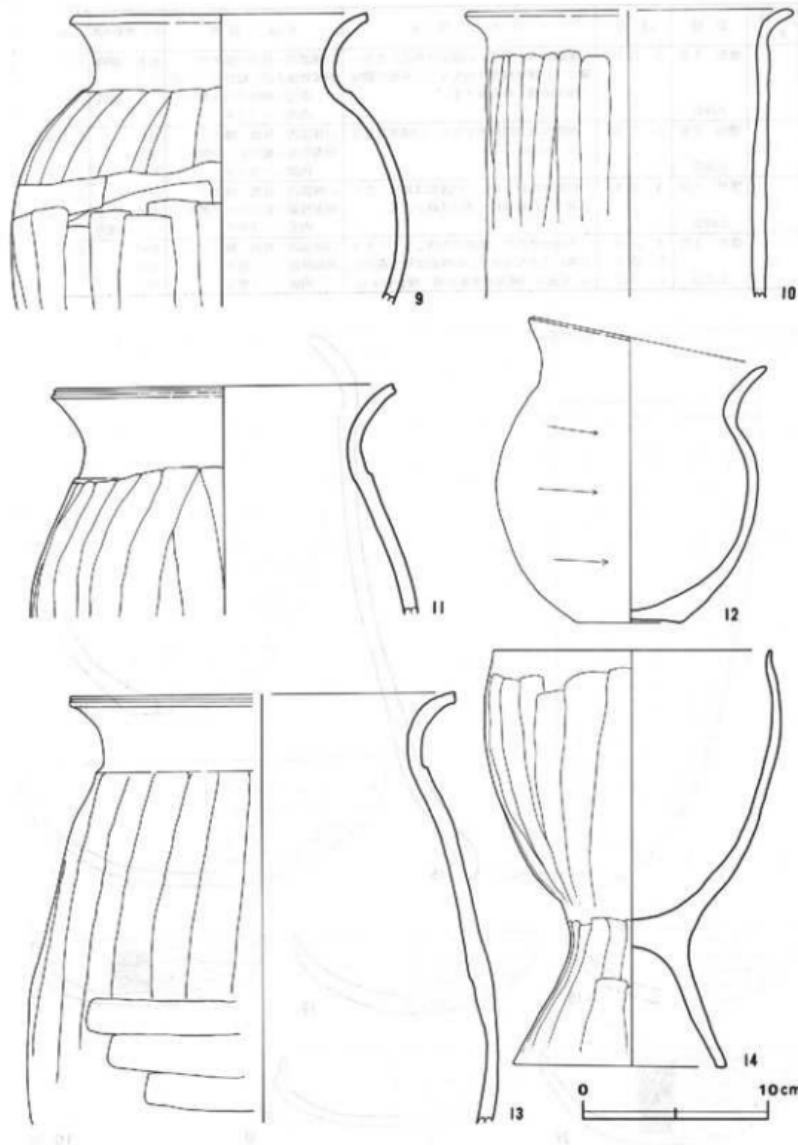
第209図 第3号土坑出土遺物実測図(1)

中國漢代漆器出土品之研究



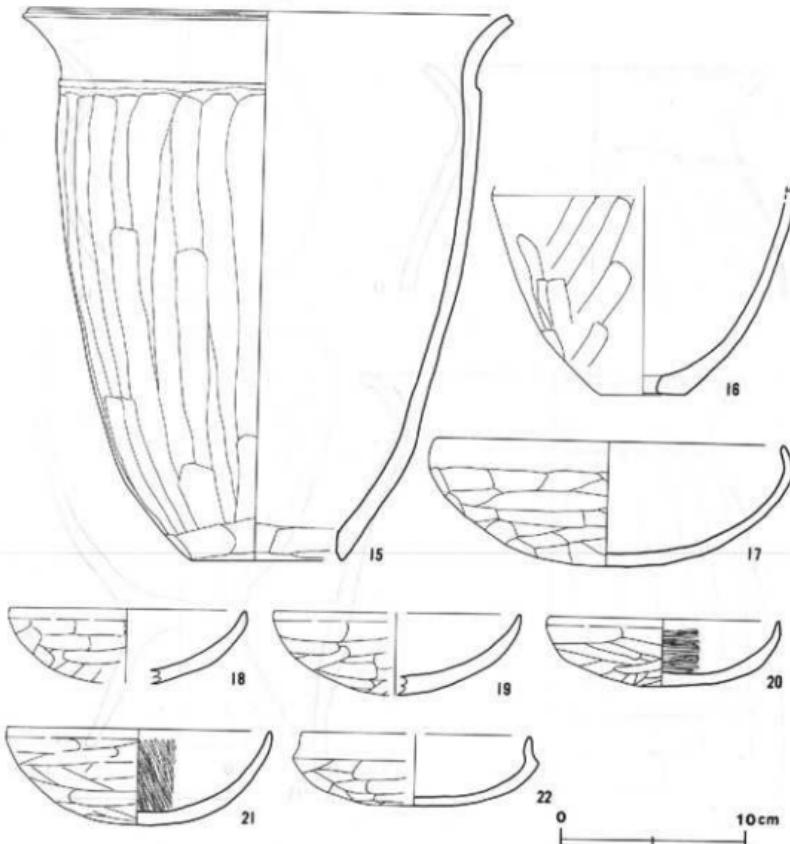
第210図 第3号土坑出土遺物実測図2)

(圓底深溝盤・出筋土器等) (三重色彩)



第211図 第3号土坑出土遺物実測図3

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
9	變形土器 土師器	A 15.8	胴部は丸く彌り、口縁部は外反しながら開く。口縁外端部は面をなし、外面の頸部と胴部の境に縫を有する。	口縁部内・外面一横ナデ 胴部外面上位一縦位のヘラ削り 中位一横位のヘラ削り 内面一ヘラナデ	砂粒・粗緻 普通 にぶい褐色	30%
10	變形土器 土師器	A (17.8)	胴部はほぼ円筒形を呈し、口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面一横ナデ 胴部外面上位のヘラ削り 内面一ヘラナデ	砂粒 普通 橙色	20%
11	變形土器 土師器	A 18.4	胴部は長胴を呈し、口縁部は外反しながら開く。口縁端部に浅い沈窪が遺る。	口縁部内・外面一横ナデ 胴部外面上位のヘラ削り 内面一ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい赤褐色	30% 二次焼成
12	變形土器 土師器	A 13.0 B 15.5 C 5.7	底部は平底で、体部は内側しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は高く直立する。外面の口縁部と体部の境に縫を有する。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外面上位一横ナデ 内面一ヘラ削り	砂粒 普通 橙色	55%



第212図 第3号土坑出土遺物実測図(4)

5. 考古学的土器出土品の実測図(4)六四

回数 番号	跡種	法數	遺形の特徴	手法の特徴	地土・成色・色調	備考
13	環形 土器	A (20.8)	脚部は長軸を呈し、中位がやや弧曲。口縁部は外反しながら開き、端部に1本の浅縫がある。外側の脚部と脚部の境に縫を有する。	I脚部内・外面一横ナガ 脚部外面 ヘラ削り 内面一ヘラナガ	砂粒 普通 褐色	20%
14	台付雙孔土器 七脚器	A 15.0 B 32.4 D 11.8	脚部は内側しながら上方へ立ち上がり、そのままI縫部へ至る。台部は「ハ」の字状に開く。	I脚部内・外面一横ナガ 脚部外面・台部外底 異位の ヘラ削り。脚部内面一ヘラナ ガ。台部内面一横ナガ	砂粒・粗粒 普通 赤色	85% 二次焼成
15	瓶形 上器 土師器	B 29.6 C 8.2 孔径 7.4	脚部は内側気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は外反しながら開き、口縁部に浅い沈縫がある。底盤は正円状に接着する。脚部と脚部の境に削り残し部分が馬蹄として残る。	口縫部内・外面一横ナガ 脚部外面一横位のヘラ削り 内面一ヘラナガ	砂粒・粗粒 普通 に赤い褐色	80%
16	瓶形 土器 七脚器	孔径( 1.6)	底部は平底で、脚部は内側しながら外上方へ立ち上がり。I縫部と脚部の境に縫を有し、底部中央を穿孔している。	脚部外面一ヘラ削り 内面一ヘラナガ	砂粒 普通 に赤い褐色	30%
17	环形 上器 土師器	A 18.7 B 6.7	底部は丸底で、底部は内側しながら大きく開いて立ち上がり。口縫部は内折する。	口縫部内・外面 横ナガ 体部外面一ヘラ削り 内面一ナガ	砂粒・粗粒 普通 褐色	95%
18	环形 上器 土師器	A 12.8	底部は丸底で、体部は内側しながら大きく開いて立ち上がり。I縫部は短く直立する。外側の口縫部と体部の境に縫を有する。	口縫部内・外面 横ナガ 体部外面一ヘラ削り 内面一ナガ	砂粒 普通 暗赤褐色	98%
19	环形 土器 土師器	A (13.4)	底部は丸底で、体部は内側しながら大きく開いて立ち上がり。口縫部は短く直立する。外側のI縫部と体部の境に縫を有する。	口縫部内・外面一横ナガ 体部外面 ヘラ削り 内面一ナガ	砂粒 普通 灰褐色	30%
20	环形 土器 土師器	A 12.7 B 3.7	底部は丸底で、体部は内側ながら大きく開いて立ち上がり。口縫部は短く直立する。外側のI縫部と体部の境に縫を有する。	口縫部内・外面一横ナガ 体部外面 ヘラ削り 内面一ヘラ削り	砂粒 普通 に赤い褐色	100%
21	环形 上器 土師器	A 14.3 B 5.2	底部は丸底で、体部は内側しながら大きく開いて立ち上がり。I縫部は短く直立する。外側のI縫部と体部の境に縫を有する。	口縫部内・外面 横ナガ 体部外面一ヘラ削り 内面一ヘラ削り	砂粒 普通 褐色	55%
22	环形 上器 土師器	A (12.4) B 3.9	底部は丸底で、体部は内側しながら大きく開いて立ち上がり。I縫部は内折する。外側の口縫部と体部の境に明顯な縫を有する。	口縫部内・外面 横ナガ 体部外面 ヘラ削り 内面一ナガ	砂粒 普通 褐色	50%

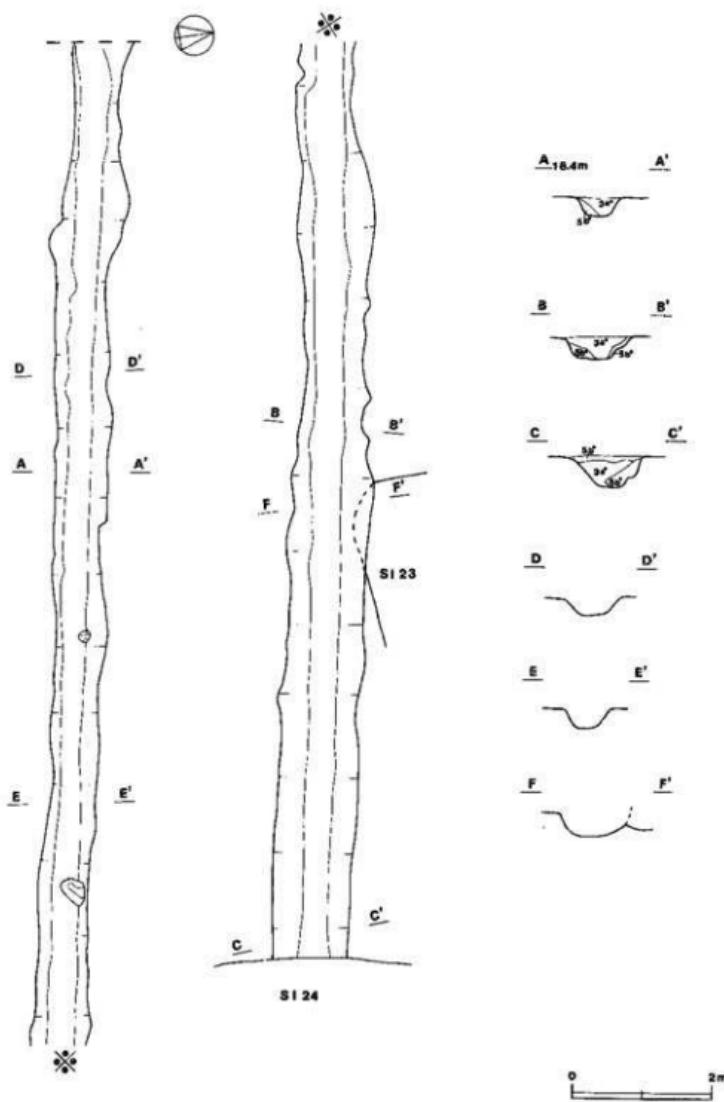
### (3) 溝

#### 第1号溝 (第213回)

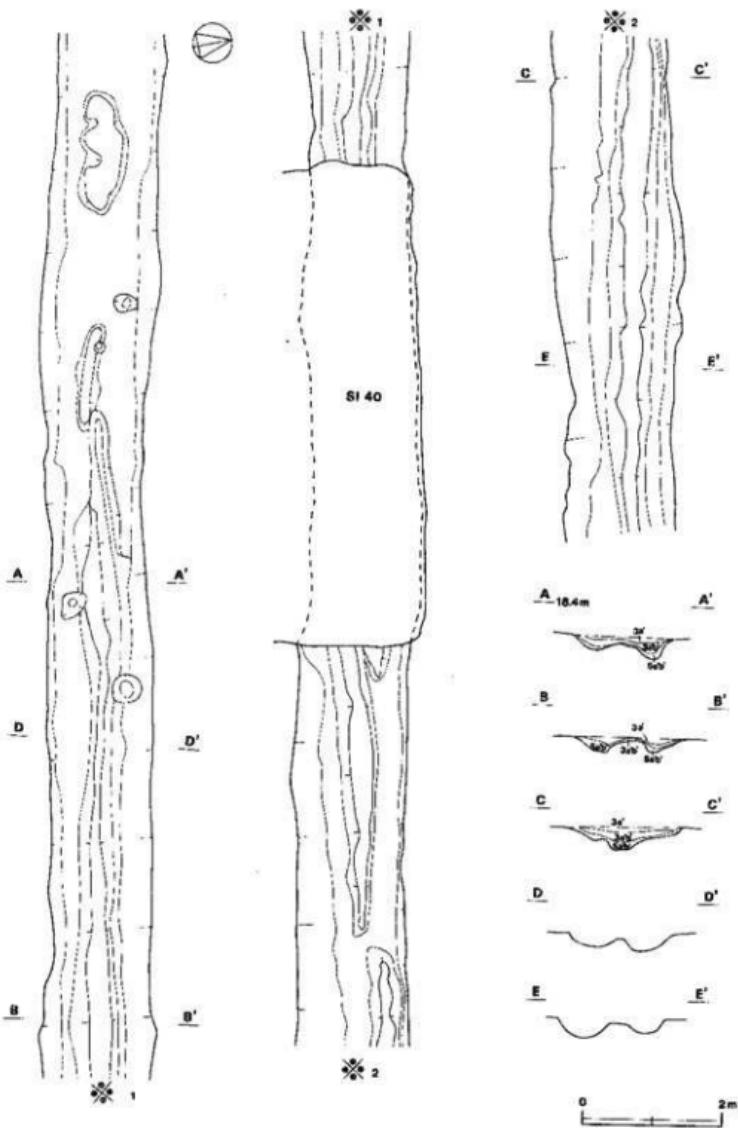
本跡はI1bに確認され、第2号溝が南側約12mに並行している。I1eで第23号住居跡、I2eで第24号住居跡と重複しているが、本跡が両住居跡を切り込んでいるため、本跡の方が新しい。

検出された長さはI1dからI1eまでの約32mで、上軸方向はN-81°-Wを指し、ほぼ直線的に延びている。西端はさらに調査区域外へ延び、東端は第24号住居跡と重複して消滅している。上幅は西から東へ向かってわずかに広くなり、西端で約70cm・東端で約110cmである。下幅はほぼ一定しており40cm前後である。断面形は「L」形を呈し、遺構認面から底面までの深さは30~35cmで、底面のレベル差はほとんどない。覆土は自然堆積の状態を示しており、大きく2層に分かれている。上層は暗褐色土、下層は褐色土でいずれもローム粒子を含んでいる。

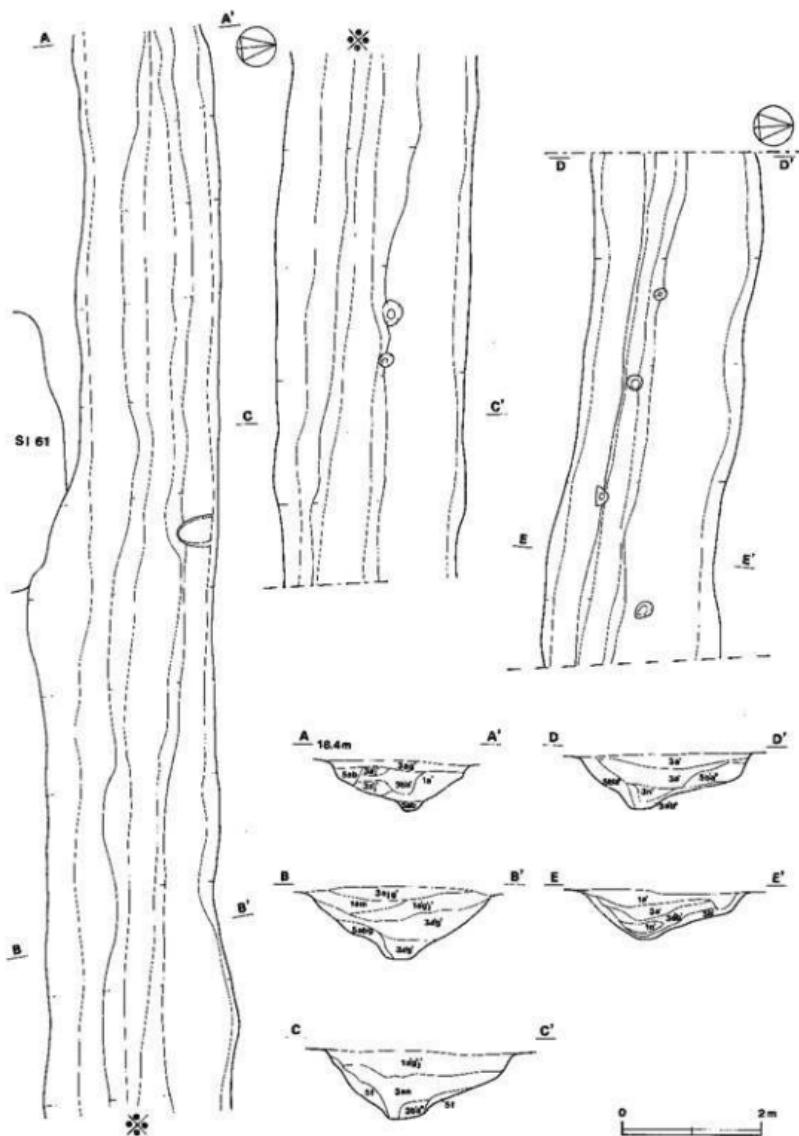
遺物は出土していない。



第213図 第1号溝実測図



第214図 第2号溝実測図



### 第215図 第3号満実測図

### 第2号溝（第214図）

本跡はJ1・J2区に確認され、第1号溝の南側約12mに並行している。IIhs・IIhsで第40号住居跡と重複しているが、本跡が第40号住居跡を切っており、本跡の方が新しい。

検出された長さはIIgsからI2dsまでの約40mで、両端はそれぞれ調査区域外へ続いている。主軸方向はN-76°-Wを指しほぼ直線的に延びている。上幅は約150cmで断面は「へ」形を呈している。造構確認面から底面までの深さは25-30cmである。壁面・底面は全体に凹凸が多くゴツゴツしている。底面のレベルは東から西に向かってわずかに低くなっている、その差は約15cmである。覆土は自然堆積の状態を示し、ローム粒子を含む暗褐色土・褐色土が主である。

遺物は流れ込みと思われる少量の土器片が出土している。

### 第3号溝（第215図）

本跡はJ1区とJ2区にかけて確認され、第59号住居跡の北側約1.5m、第1号掘立柱建物跡の南側約8mに位置している。第41・61号住居跡と重複しているが、両住居跡を切っており本跡の方が新しい。

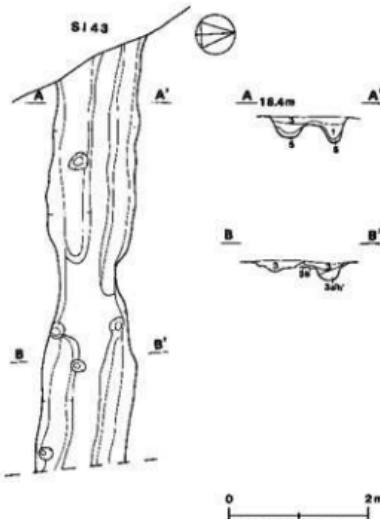
検出された長さはJ1csからJ2dsにかけての約40mで、J1dsとJ2dsにかけて約8mは土取り工事で消滅しており、両端はさらに調査区域外へと延びている。主軸方向はN-81°-Wを指しほぼ直線的に延びている。上幅は狭い所で約200

cm・広い所で約270cmあり、下幅は30-50cmで断面は「へ」形を呈している。北側の壁はなだらかな傾斜で、南側の壁は急に落ち込んでいる。造構確認面から底面までの深さは70-100cmで、東から西に向かって深くなり、東端と西端の底面のレベル差は約25cmで西端が低い。覆土はほぼ自然堆積の状態を示している。暗褐色土が主で、底面にはロームブロックを含む褐色土が堆積している。

遺物は流れ込みの土器片が少量出土している。

### 第4号溝（第216図）

本跡はJ2区に確認され、第5号溝の北側約1mに位置している。第43号住居跡と重複し



第216図 第4号溝実測図

ているが、第43号住居跡を切っており、本跡の方が新しい。

検出された長さはJ2hsからJ2hsにかけての約7mで、第43号住居跡と重複してさらに西へ延びるものと思われるが、土取りによって消滅しており、またJ1区へも延びていない。主軸方向はN-84°-Wでほぼ東西に直線的に延び、東端は調査区域外へ続いている。上幅は約130cmで断面は「U」形を呈している。遺構確認面から底面までの深さは25~30cmで、底面のレベル差はほとんどない。覆土は自然堆積の状態を呈し、暗褐色土が大部分で全体にやわらかい。

遺物は出土していない。

#### 第5号溝（第217図）

本跡はJ1・J2区に確認され、第4号溝の南側約1m、第6号溝の北側約4mに位置している。第43・57・58号住居跡と重複しているが、各住居跡を切っており、本跡が最も新しい。

検出された長さはJ1hsからJ2isまでの約40mであるが、J1is・J2isにかかる約7mは土取りのため消滅している。主軸方向はN-82°-Wを指し、ほぼ直線的に延び、両端とも調査区域外まで続いている。上幅200~300cm・下幅50~80cm・深さ80~90cmで底面のレベル差はほとんどなく、断面は「一」形を呈している。壁面は凹凸が多く不規則な大小のピットがみられる。覆土は自然堆積の状態を呈し、暗褐色土が主で上層にはローム粒子・下層にはロームブックを含み、粘性がある。

遺物は、覆土から流れ込みと思われる土師器片少量と鉄滓数個が出土している。

#### 第6号溝（第218図）

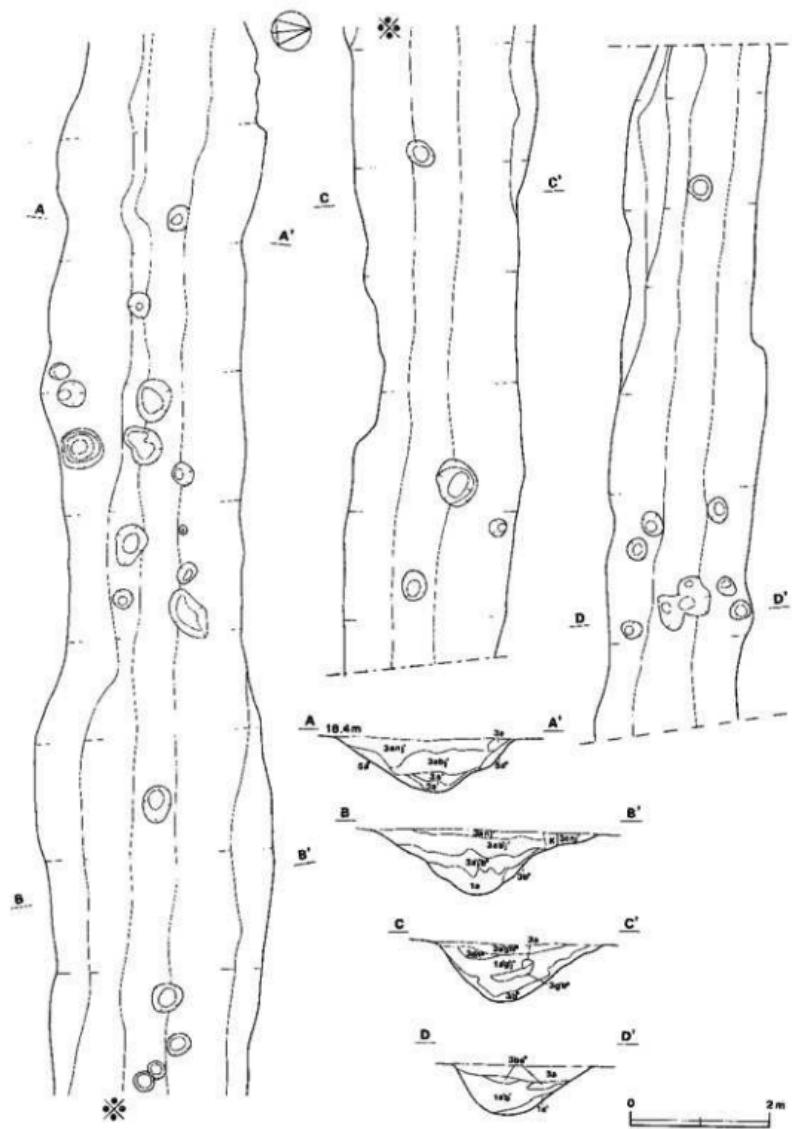
本跡はJ1・J2区に確認され、第5号溝の南側約3.5m、第7号溝の北側約8mに位置している。第42号住居跡と重複しているが、第42号住居跡を切っており、本跡の方が新しい。

検出された長さはJ1jsからJ2jsの約28mで、J1je・J2jeにかかる約6mは土取りによって消滅している。主軸方向はN-83°-Wで直線的に延びており、東端は調査区域外へ延び、西端はJ1jeで切れている。上幅60~90cm・下幅30~50cm・深さ25~35cmで、底面のレベル差はほとんどなく、断面は「U」形を呈している。覆土は2層に分かれ、上層が黒褐色土、下層が暗褐色土で自然堆積の状態を示している。

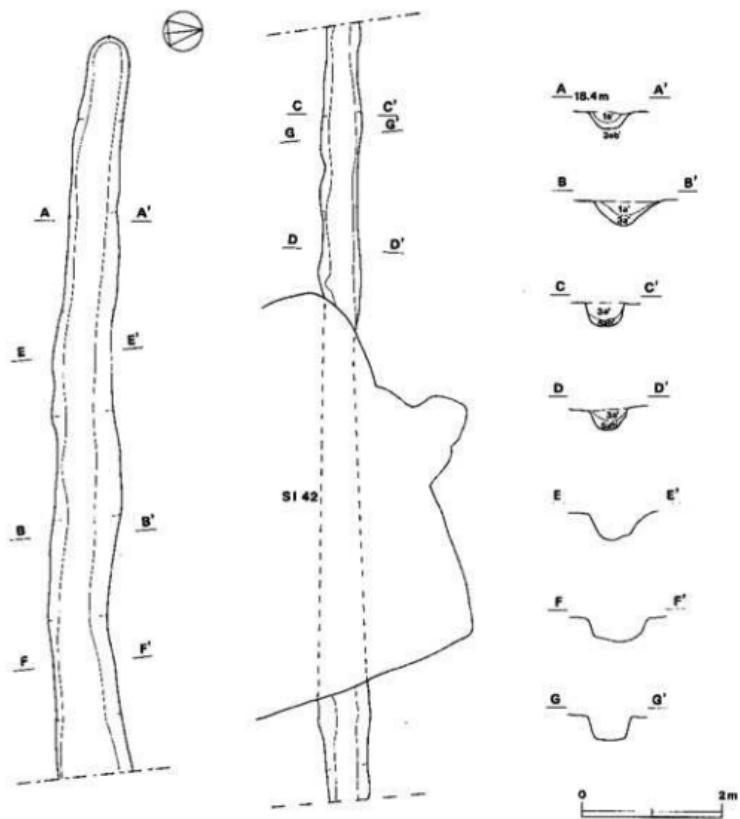
遺物は出土していない。

#### 第7号溝（第219図）

本跡はK1・K2区に確認され、第6号溝の南側約8mに位置している。第49・50号住居跡と重複しているが、両住居跡を切っており、本跡の方が新しい。

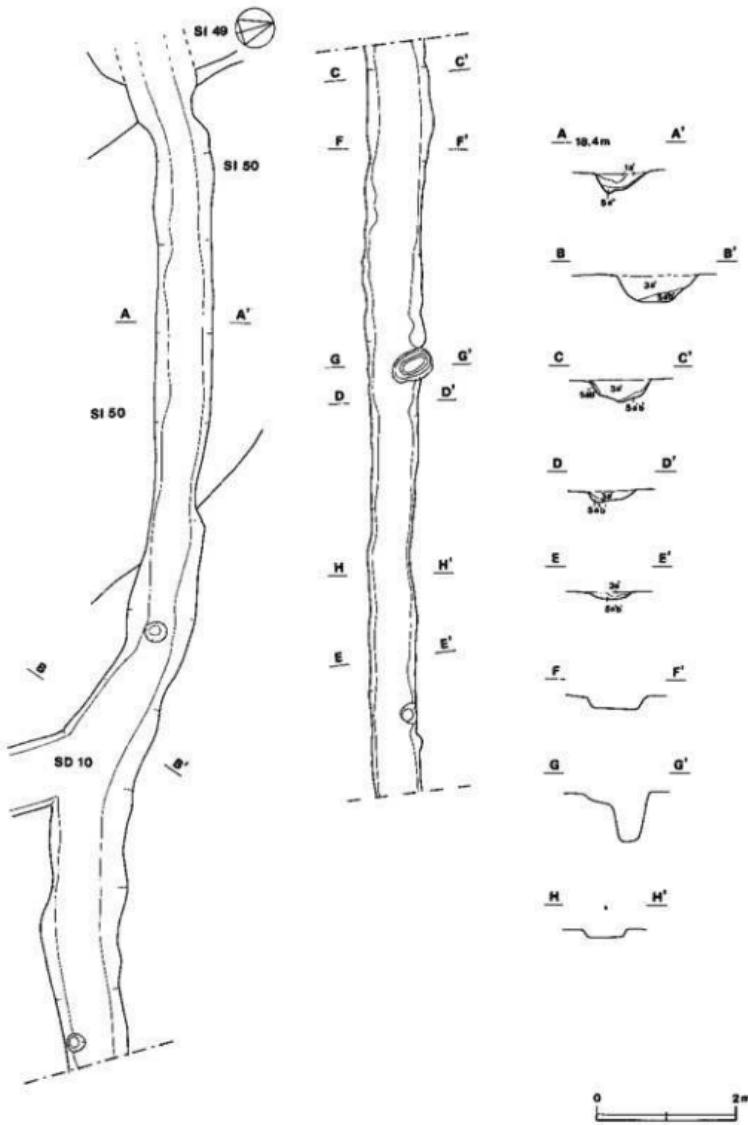


第217図 第5号溝実測図



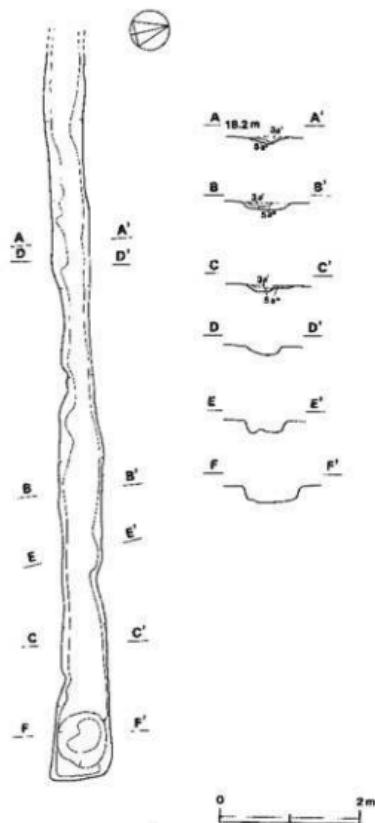
第218図 第6号溝実測図

検出された長さは K1as から K2ca までの約34m で、K1bs から K2bz にかけての約8m は土取りによって消滅している。東端は調査区域外へ延び、西端は第49号住居跡と重複し、その先は消滅している。また、K1bs で本跡から第10号溝が分かれ南へ走っている。K1bs 以後の約23m は主軸方向 N-82°-W を指してほぼ直線的に伸びている。K1bs 以西の約12m は西北西へ向かった後、ゆるやかにカーブしながら西へ伸びている。上幅70~100cm・下幅30~60cmで、断面は「U」形を呈している。確認面から底面までの深さは20~30cmで、壁面・底面とも凹凸は少ない。底面のレベルは西へ向かうにつれてわずかに低くなり、西端と東端の差は約25cmである。覆土は自然堆積の



第219図 第7号溝窓測図

状態を呈し、暗褐色土が大部分を占め、底面近くにはローム粒子を含む褐色土が堆積している。遺物は出土していない。



第220図 第8号溝実測図

#### 第8号溝（第220図）

本跡はII区に確認され、第33号住居跡の南側約1.5mに位置している。第1号掘立柱建物跡と重複しているが、第1号掘立柱建物跡を切っており、本跡の方が新しい。

検出された長さはII<sub>4</sub>からII<sub>6</sub>までの約10.5mで、上軸方向はN-77°-Wを指し直線的に伸びている。両端はさらに伸びていたと思われるが、削平されており検出できなかった。上幅50~70cm・下幅20~30cm・深さ15~20cmで、断面は皿状を呈し、底面のレベル差はほとんどない。覆土は上層に暗褐色土、下層に褐色土が堆積し、自然堆積の様相を呈している。

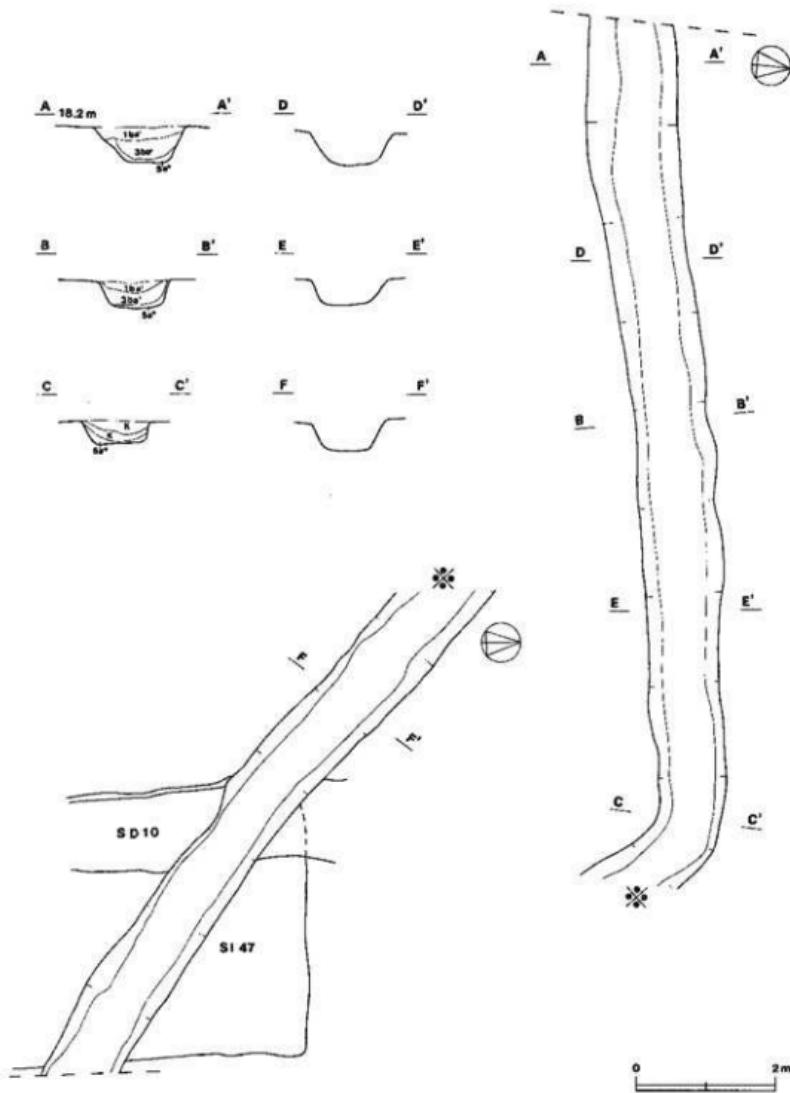
遺物は出土していない。

#### 第9号溝（第221図）

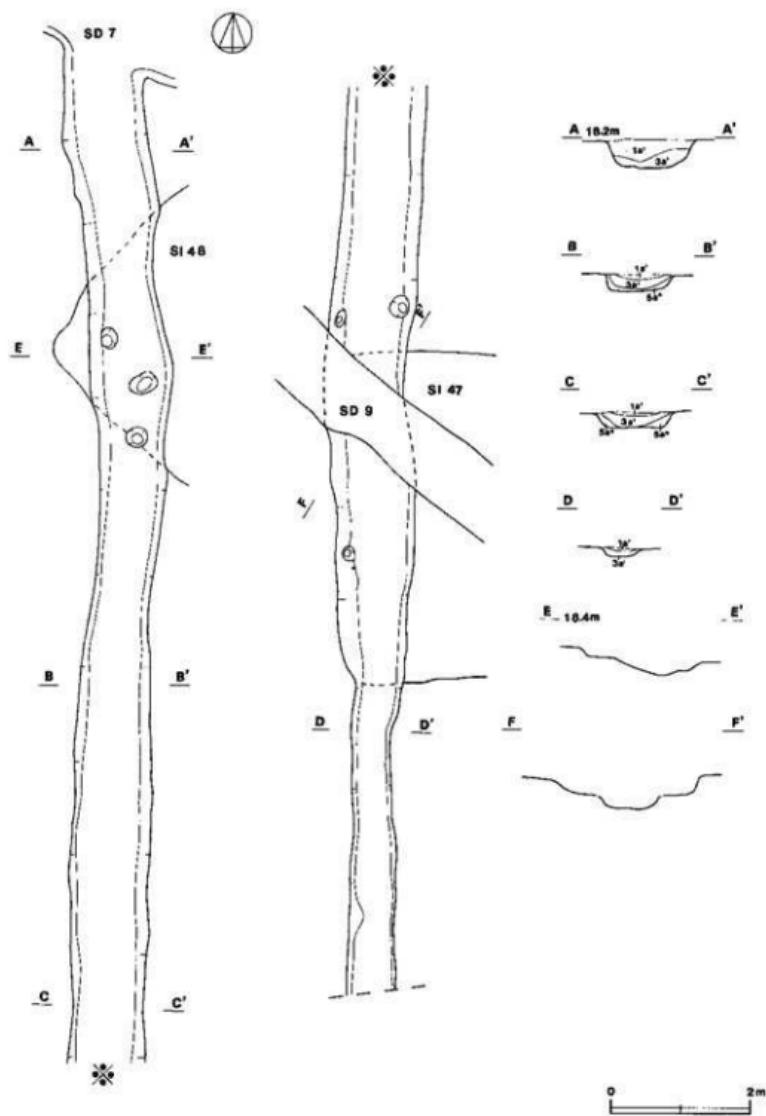
本跡はK1区で確認され、第54号住居跡の南側約3mに位置している。第47号住居跡、第10号溝と重複しているが両遺構を切っており、本跡が最も新しい。

検出された長さはK1g<sub>4</sub>からK1h<sub>5</sub>までの約22m、K1g<sub>4</sub>から上軸方向N-78°-Eを指してほぼ直線的に約22m伸び、K1f付近で屈曲し

てから、上軸方向はN-50°-Wで南東方向へ約10m伸びている。西端は調査区域外へ伸びており、東端はK1h<sub>5</sub>で上取りのため消滅しており、その延長は確認されていない。上幅100~150cm・下幅60~80cm、遺構確認面から底面までは35~45cmで、壁面・底面とも凹凸はほとんど見られない。断面は「U」形を呈し、底面のレベル差はほとんどない。覆土は自然堆積の状態を示し3層に分かれている。上層から下層へ黒褐色土、暗褐色土、褐色土となっており全体に縮まりがあ



第221図 第9号溝実測図



第222図 第10号溝窓測図

る。

遺物は出土していない。

#### 第10号溝（第222図）

本跡はK1区に確認され、第46号住居跡の東側約5mに位置している。第47・48号住居跡、第9号溝と重複しているが、本跡は第47・48号住居跡を切っており、第9号溝によって切られてい るため、第47・48号住居跡より新しく第9号溝より古いと考えられる。

検出された長さはK1bsからK1isまでの約30mで、K1bsで第7号溝から分かれた主軸方向はN=0°を指し、ほぼ直線的に南北に延び、南端は調査区域外へと続いている。上幅70~120cm・下幅50~80cmで、深さは南に向かって浅くなり、北端で35cm、南端で15cmとなる。底面のレベル差はないが、南端の5~6mは台地のゆるやかな南斜面へと向かっており、わずかに低くなる。覆土は自然堆積の状態を呈し、3層に分かれている。上層は黒褐色土、暗褐色土、褐色土となっており、下層はローム粒子を多量に含んでいる。

遺物は流れ込みの土師器片がごく少量出土している。

#### （4）井戸

##### 第1号井戸（第223図）

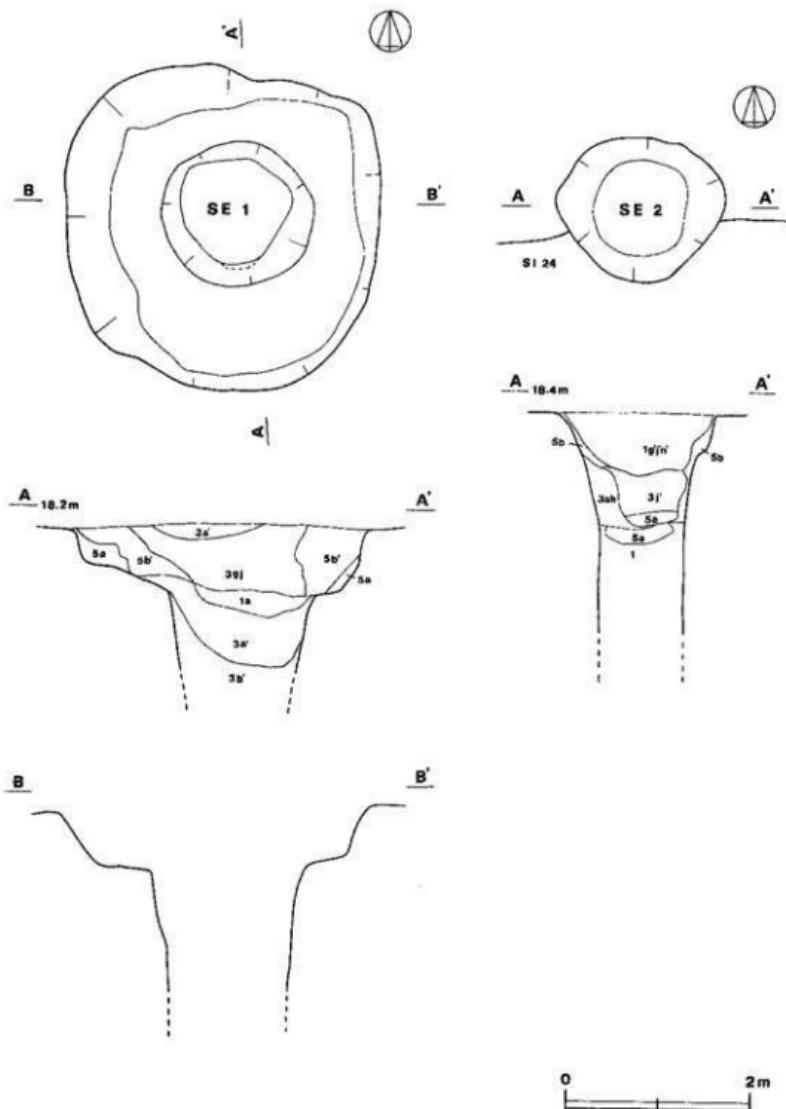
本跡はG1jsを中心に確認され、第8号住居跡の西側約2mに位置し、第6号住居跡の東側に接している。

掘り方は二段に掘り込まれている。上段は長径3.80m・短径3.30mの不整円形で、深さ60~70cm掘り込み、長径3.20m・短径2.60mの不整円形の足場と思われる平坦な面を設けている。下段は、この面の中央を径約1.6mで円筒状に約1.6m掘り込んでいる。底面はほぼ平坦で、平坦面から約1.2m下付近で湧水している。上段の壁は外傾しており、下段の壁はほぼ垂直となっている。覆土はほぼ自然堆積の状態を示し、上層は暗褐色土で焼土粒子・炭化粒子を含み、中層は黒褐色土、下層は暗褐色土でじめじめしている。

遺物は上部の覆土から、須恵器の环形土器や高台付环形土器が出土している。

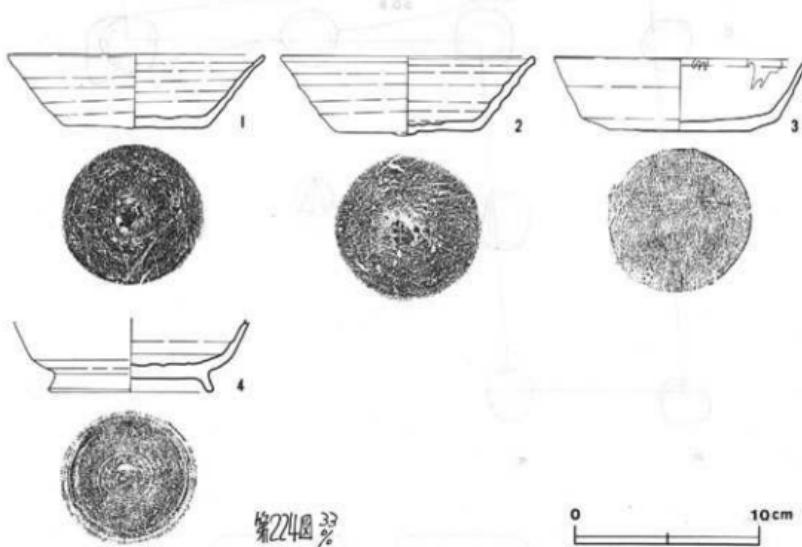
出土土器観察表（第224図）

図版 番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土-焼成色調	備考
1	环形土器 須恵器	A 13.6 B 4.0 C 7.8	底部は平底で、全体は外反気体に外上方へ立ち上がる。	底部一回転ヘラ切り後、不定方向の手持ちヘラ削り ロク丁回転方向は右 内・外面の水焼き痕はややぼい	砂粒・細砂 普通 灰白色	85%



第223図 第1・2号井戸実測図

図版 番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土-焼成色調	備考
2	环形土器 須恵器	A 13.8 B 4.3 C 7.9	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり、嘴部は丸い。	底部一回転ヘラ切り後、不定方向の手持ちヘラ削り ロクロ回転方向は右	黒色の砂粒 不真 灰白色	80%
3	环形土器 須恵器	A 13.6 B 4.0 C 7.8	底部は平底で、体部は下端に幅狭の面を有し、上部は直線的に外上方へ立ち上がる。	底部一定方向の手持ちヘラ削り ロクロ回転方向は右 水挽き痕は弱く丁寧な作り	細砂・小石 普通 赤褐色	100% 口縁部に油 煙付着
4	高台付 环形土器 須恵器	D 8.6 E 1.0	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、高台は外下方へのびる。	底部一回転ヘラ削り 高台は 貼り付け 高台内・外面一様 ナメ 水挽き痕は弱い	砂粒・雲母 普通 暗灰色	50%



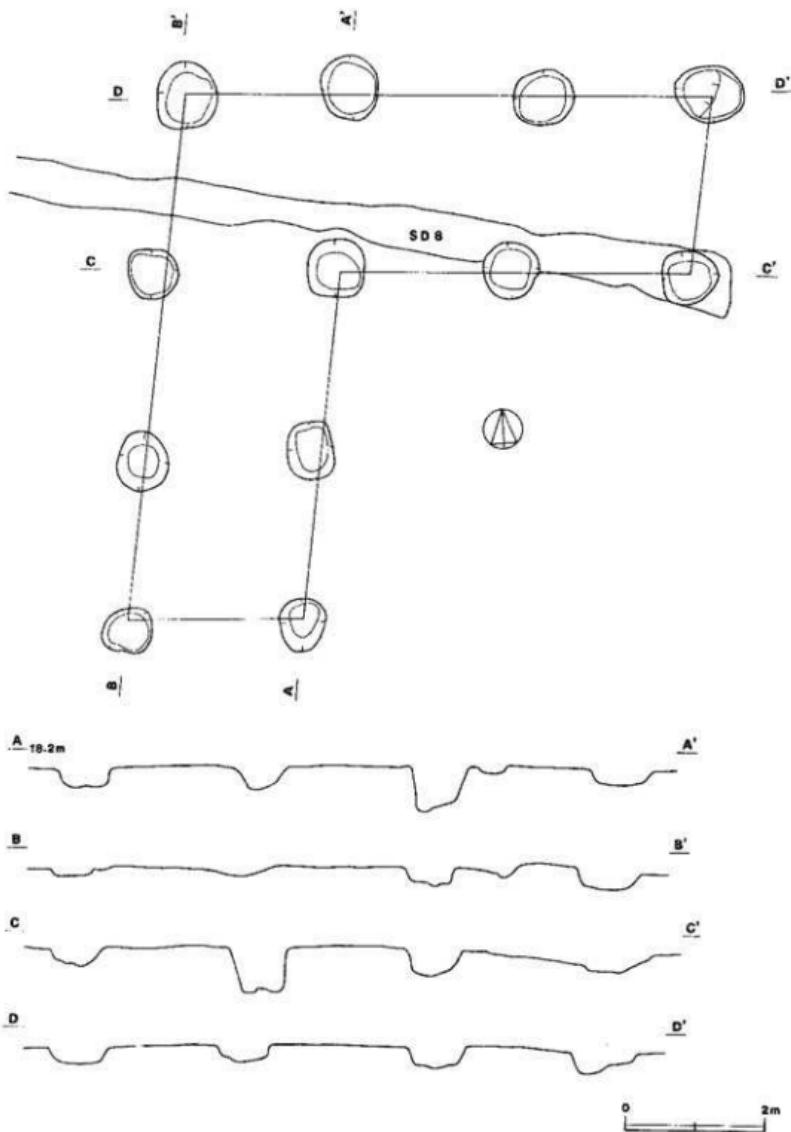
第224図 第1号井戸出土遺物実測図

### 第2号井戸（第223図）

本跡はI2dsに確認され、第29号住居跡の西側約0.5mに位置している。第24号住居跡と重複しているが、第24号住居跡を切っており、本跡の方が新しい。

平面形は長径1.85m・短径1.55mの不整円形を呈し、深さは3.5m以上である。確認面から約1.2mまでの壁はやや外傾しているが、それ以下はほぼ垂直に落ち込んで円筒状を呈している。覆土は自然堆積の状態を示し、上層は黒褐色土で硬く、中・下層は暗褐色土でやわらかい。

遺物は出土していない。



第225図 第1号掘立柱建物跡実測図

(5) 堀立柱建物跡

第1号堀立柱建物跡（第225図）

本跡はIIJ<sub>4</sub>を中心に確認され、第33号住居跡の南側約0.5m、第3号溝の北側約8mに位置している。第8号溝と重複しており、第8号溝が本跡を切っており、本跡の方が古い。

東西3間（7.5m）・南北3間（7.5m）のL字形の建物で、その角度は約95°である。柱間寸法は桁行・梁行とも2.5m（8尺）である。柱穴の掘り方は径70～90cmの円形を呈し、深さ8～66cmと一定せず、どのピットからも柱痕跡は確認されていない。覆土はロームブロックを含む暗褐色土が主で、埋めもどされた様相を呈している。

遺物は出土していない。

## 4 まとめ

北新田A遺跡からは、竪穴住居跡62軒、土坑7基、溝10条、井戸2基、掘立柱建物跡1棟が検出され、遺物は土師器・須恵器・鉄製品・石製品・土製品などが出土している。これらの遺物は五傾期から圓分期にかけてのものであるが、そのほとんどは住居跡から出土した土器であり、住居跡以外で遺構に伴う遺物は第3号土坑と第1号井戸から出土した土器だけである。そこで、これらの土器の古いものから順に分類し、各遺構の時期をより明確にすることによって集落の変遷をたどってみたい。

### (1) 土器の分類

土器の分類にあたっては、従来の編年資料を参考にしながら、各住居跡の形態、配置、重複関係を考慮し、住居跡からの一括出土土器を中心にその形態・技法などから12期に区分した。

#### I期（第226図）

本期は北新田A遺跡において最も古い時期に位置づけられ、第9・10・23号住居跡の出土土器を中心とした。器種としては土師器の變形土器、小型變形土器、台付變形土器、高環形土器がある。出土量が少なく良好な資料に乏しいが五傾Ⅱ式に比定されるものと思われる。

變形土器は口縁部が外反しながら開き、胴部上位が張るもの（1）と、口縁部が「く」の字状に開き、胴部中位が張るもの（2）がある。いずれも最大径は胴部にあり、底部は突出した平底で、口縁部内・外面、胴部外面にハケ目が施されている。

小型變形土器は図示したもの（3）だけである。口縁部が外反しながら開き、胴部はほぼ球形を呈し、最大径は胴部中位にある。大形の變形土器と同じく、胴部外面にはハケ目が施されているが、口縁部内・外面は横ナデである。

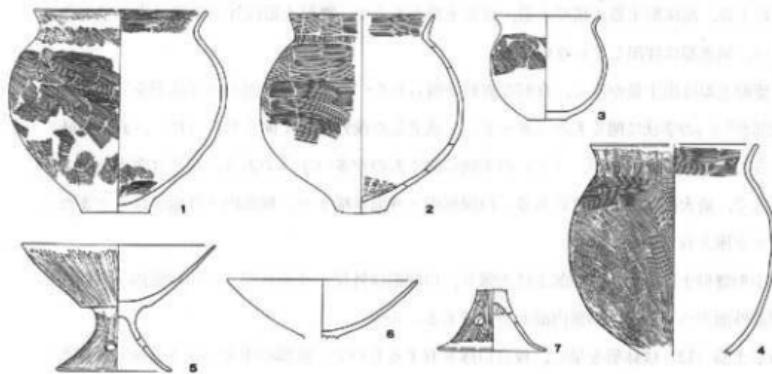
台付變形土器も4だけで、底部以下が欠損している。變形土器にくらべ胴部の張りは弱く、胴部下半がゆるやかにすぼまる。整形は變形土器と同じである。

高環形土器は、环体部が直線的に聞くもの（5）と、内縁気味に聞くもの（6）がある。脚部はラッパ状に聞き、3孔を有するもの（7）と4孔を有するもの（8）がある。5は外面全体が丁寧にヘラ磨きされ、6は内・外面ともナデが施されている。

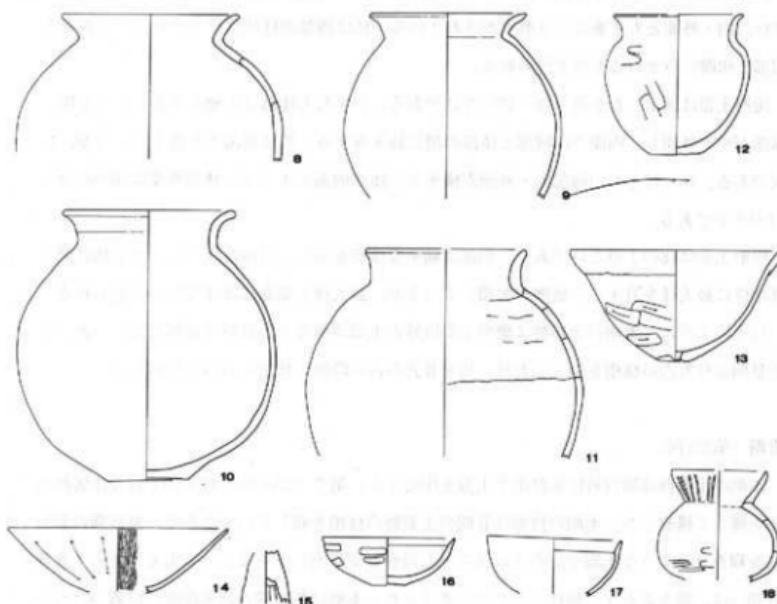
#### II期（第226図）

II期とIII期の土器群は時期的に非常に接近しており、同一期のものとして考えることも可能である。しかし本期はその中でも古い段階として、第34・38号住居跡出土土器を中心に、第10号住居

I 期



II 期



第226図 土器編年図(1)

跡出土土器を加えて構成し、Ⅲ期とは区別した。器種は豊富で土師器の變形土器、小形變形土器、輪形土器、高環形土器、碗形土器、壺形土器があるが、變形土器以外の器種は出土量が非常に少ない。須恵器は伴出していない。

變形土器は出土量が多く、良好な資料が得られた。いずれも胴部がほぼ球形を呈しており、口縁部が「く」の字状に開くもの（8・9）、直立した後外反して開くもの（10）、直立気味に外反するもの（11）があるが、「く」の字状に開くものが多いようである。底部は突出気味の小さな平底で、最大径は胴部中位にある。口縁部内・外面は横ナデ、胴部内・外面にはナデまたはヘラナデが施されている。

小形變形土器（12）は胴部上位が張り、口縁部は外反しながら開く。口縁部内・外面が横ナデ、胴部外面がヘラナデ、胴部内面がナデである。

輪形土器（13）は鉢形を呈し、複合口縁を有するもので、底部の中央に小さな単孔が穿たれている。口縁部内・外面が横ナデ、体部外面が難なヘラ削り、体部内面がナデである。

高環形土器はいずれも破片である。14は環体部で、内縁気味に開き、環体部と底部の境に棱はない。内・外面とも丁寧にヘラ磨きがされている。15は脚部の柱状部片でややふくらみがあり、裾部と明瞭に分かれるものと思われる。

壺形土器は図示した2点（16・17）だけである。いずれも体部は内縁しながら大きく開き、口縁部がやや外傾し、内面の口縁部と体部の境に棱を有する。17は底部が欠損しているが、16は平底である。16・17とも口縁部内・外面が横ナデ、体部内面がナデで、体部外面は16がヘラナデ、17がナデである。

壺形土器は18の1点だけである。胴部は扁平な球形を呈し、口縁部は「く」の字状に開き、胴部中位に最大径を有する。底部が欠損しているが、最大径と器高はほぼ等しいと思われる。

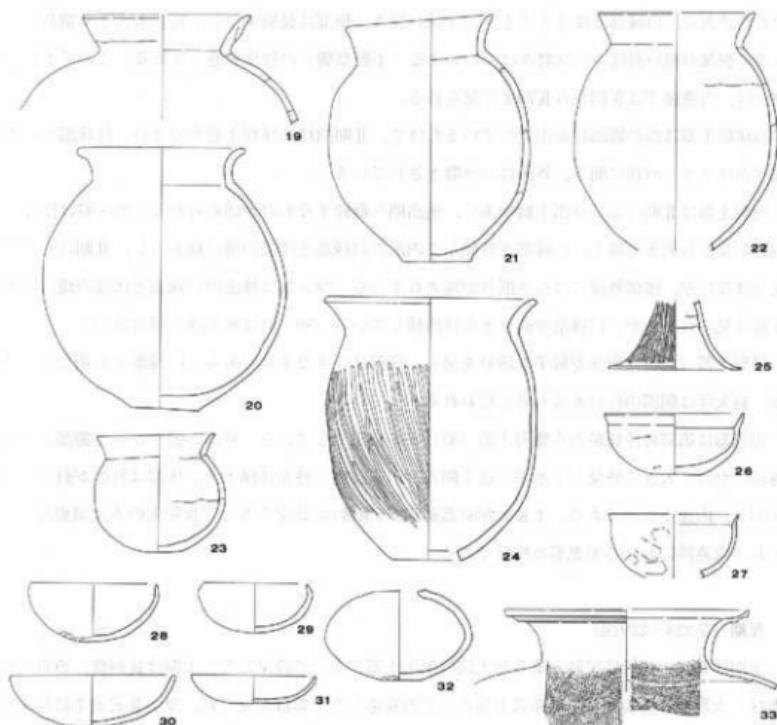
以上のように、本期の土器群は變形土器以外の土器は少なく、良好な資料に乏しいが、後述するⅣ期よりも古い様相を呈しており、和泉Ⅱ式の古い段階に比定されると思われる。

### Ⅲ期（第227図）

本期の土器群は第24号住居跡出土土器を中心とし、第7・35・40・48・50・57号住居跡出土土器を補って構成した。本期の特徴はⅡ期の土器群の様相を残しているなかで、鬼高峰期の器形や手法を窺わせるような土器が認められることと須恵器が伴出していることである。従ってⅡ期からⅢ期へは、間をおかずして移行したものと考えられ、本期は和泉期の終末段階に位置づけられるものと思われる。器種には土師器の壺形土器、變形土器、小形變形土器、輪形土器、高環形土器、壺形土器、壺形土器と須恵器の變形土器があり、Ⅱ期にくらべ壺形土器の出土量が多い。

壺形土器は図示したもの（19）のほかに1点出土している。いずれも口縁部が「く」の字状に

III 期



第227図 土器編年図（2）

開き、古い段階とされている複合口縁の名残りをとどめている。胴部はほぼ球形を呈し、口縁部内・外面は横ナデ、胴部内・外面はヘラナデである。

變形土器はⅡ期の様相を引き継いでいるものと、新しい変化が見られるものがある。20はⅠ期の10と器形・整形とも変化が見られず、口縁部は直立してから外反して開き、胴部は球形を呈している。21・22は口縁部が「く」の字状に開くが、Ⅱ期のものよりその屈曲度が多くなっており、胴部も長胴化している。いずれも胴部中位に最大径を有し、口縁部内・外面が横ナデ、胴部内・外面はナデやヘラナデが施されている。

小形變形土器（23）は口縁部が「く」の字状に開き、胴部はほぼ球形を呈するもので、最大径は胴部中位に有り、頸部の屈曲度が弱い。

彫形土器（24）は彫形を呈する大形のもので、Ⅱ期の鉢形のものとは全く異なり、新しい段階のものである。口縁部はゆるく「く」の字状に開き、胴部は長削を呈し、底孔も大きく筒抜けている。胴部の粗い斜位のヘラ磨きは、いわゆる「下野型彫」の技法を感じさせる。この「下野型彫」は、当遺跡ではⅣ期からⅤ期まで見られる。

高环形土器は25の脚部片が出土しているだけで、Ⅱ期同様高环形土器が少ない。柱状部から裾部へかけてラッパ状に開き、外面はヘラ磨きされている。

塊形土器はⅡ期にくらべ出土数が多く、鬼高窓へ継続するものが認められる。26・27は体部が内彎しながら大きく開き、口縁部が外傾して内面の口縁部と体部の境に棱を有し、Ⅲ期のものと大差はないが、体部外面にはヘラ削りが施されている。28・29は外面の口縁部と体部の境に明瞭な棱は見られないが、口縁部が直立または内傾している。30・31は底が浅く杯に近い。

壺形土器（32）は胴部が扁平な球形を呈し、底部は小さな平底である。口縁部が欠損しているが、最大径は胴部中位にあるものと思われる。

須恵器は第57号住居跡から彫形土器（33）が1点出土している。肩部の張りが強く頸部から口縁部にかけて大きく外反して水平に近く開き、口縁部内・外面は横ナデ、体部は外面が斜位の平行叩き、内面がナデである。TK-208（高窓208号窯跡）に比定できる5世紀末の古式須恵器と思われ、当遺跡における須恵器の初現である。

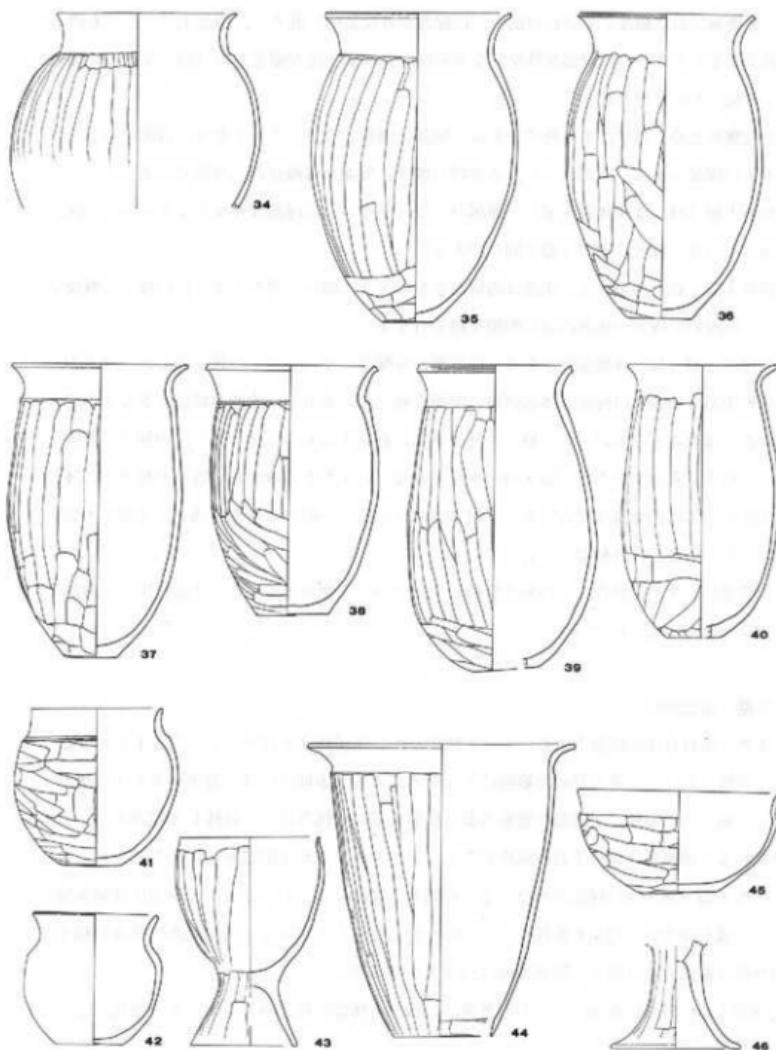
#### Ⅳ期（第228・229図）

本期は第46・49号住居跡、第3号土坑の出土土器によって設定した。本期は長削彫、須恵器模倣壺、大形壺に代表され、鬼高式土器としての安定した土器群が見られ、鬼高Ⅱ式前半に比定されると思われる。わずかながら須恵器も伴出しており、器種は土師器の壺形土器、彫形土器、小形彫形土器、台付彫形土器、懐形土器、鉢形土器、高环形土器、須恵器の彫形土器、壺形土器、蓋形土器、台付長頸壺形土器がある。

壺形土器（34）は口縁部が直立してから外反し、胴部はほぼ球形を呈している。口縁部内・外面が横ナデ、胴部外面は継位のヘラ削り、胴部内面はヘラナデである。

彫形土器はほぼ長削化が達せられるのが本期の特色である。これらは、最大径を胴部中位に有するもの（35・36）、胴部最大径と口径がほぼ等しいもの（37・38）、胴部中位から下位にかけて張る下ぶくれのもの（39・40）の3つに分けられる。新しくなるにつれて、最大径が胴部から口径に移るという一般的の傾向からすれば、本期の彫形土器には若干の時間差もあり、本期をさらに区分することも可能であるが、3タイプが共存していることから最大径が口径に移る前の段階として一括した。いずれも口縁部は外反しながら開き、底部は小さな平底である。また、口縁部と胴部の境には段があるものとないものがある。口縁部内・外面は横ナデ、胴部外面はヘラ削り、胴部

IV期 (1)



第228図 土器編年図 (3)

内面はヘラナダである。

小形夔形土器は頸部のくびれが弱く、口縁部が外反気味に直立し、胴部上位が張るもの（41）と頸部が少しくびれ、口縁部が外反しながら開き、胴部上位が張るもの（42）がある。後者はⅢ期から続くものと思われる。

台付夔形土器（43）は1点だけである。胴部は内彌しながら立ち上がり、器肉を減じながらそのまま口縁部へ至る。台部は「ハ」の字状に開き、外面全体縦位のヘラ削りである。

夔形土器（44）は深鉢形を呈し、頸部のくびれがない。口縁部は外反しながら開き、底部全体が抜けている。整形は夔形土器と同じである。

鉢形土器（45）は平底で、体部は内彌しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は外反気味に開く。外面の口縁部と体部の境に明瞭な棱を有する。

高环形土器（46）は脚部片である。柱状部から柄部にかけてラッパ状に開くが、開きが小さい。

环形土器は外面の口縁部と体部の境に明瞭な棱（段）を有し、本期の特色となるものである。口縁部には直立するもの（47・48）、外反気味に直立するもの（49・50）、内傾するもの（51・52）、矧か直立するもの（53・54）が見られる。いずれも口縁部内・外面が横ナデ、体部外向ヘラ削りで、体部内面はほとんどがヘラ磨きされている。一般には体部が浅く、小形のものが後出的とされているが、各種混じり合っている。

須恵器はいずれも破片で、良好な資料に欠けている。夔形土器（55）は頸部片で、波状文と平行縞文が交互に配されている。

#### V期（第229図）

本期は第41号住居跡出土土器によって構成した。住居跡は1軒だけで、出土土器も少なく、良好な資料に欠けるが鬼高里式の範疇に入るものである。本期は口径に最大径を有する夔形土器をもって画した。器種は上師器の夔形土器、杯形土器の2種だけで、器種も限定されてくる傾向が見られる。須恵器は夔形土器の破片がごく少量であり、まだ土師器が主体である。

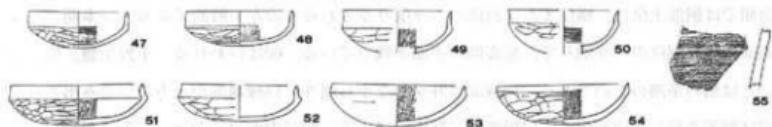
夔形土器（56）は口縁部が外反しながら開き、頸部にはくびれがない。胴部は長胴を呈し、ほとんど張りがない。器高もⅣ期にくらべやや低くなるようである。口縁部内・外面が横ナデ、胴部外面は椎位のヘラ削り、胴部内面はヘラナダである。

环形土器（57）はⅣ期で見られた外面の口縁部と体部の境に棱を有するものが続いているが小形化している。

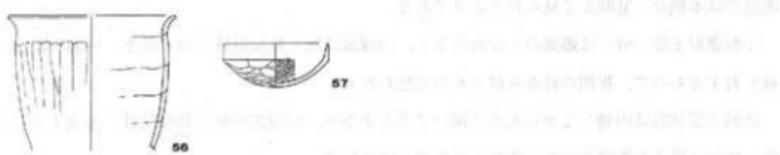
#### VI期（第229図）

本期は第59・60号住居跡出土土器からなる。V期からの継続性と新しい様相を呈する土器群と

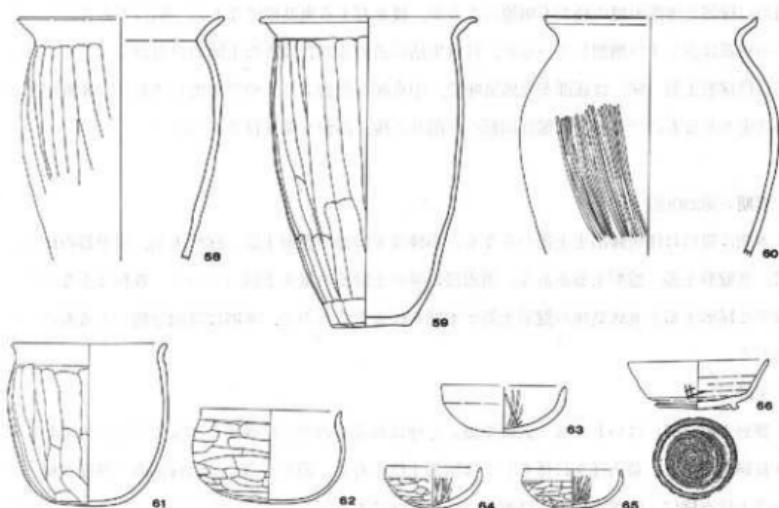
IV期(2)



V期



VI期



第229図 土器編年図(4)

してとらえられるもので、真間期前半に比定されるものと思われる。器種は土師器の變形土器、小形變形土器、鉢形土器、環形土器などがあるが、須恵器は變形土器、環形土器の破片が少量で、良好な資料に欠け、図示できたのは高台付環形土器1点である。

變形土器はV期よりも口縁部の開きが大きくなり、頸部もくびれ、胴部上位が張るもの(58)

が主体となるが、まだ頸部のくびれも弱く、胴部もほとんど張りがないもの(59)も見られる。真間期では胴部上位に、横位または斜位のヘラ削りがされるものが一般的であるが、本期ではまだ胴部全体が縦位のヘラ削りで、鬼高窓の手法が残っている。60はいわれる「下野型變」で、58・59とは別の系譜のものである。口縁部は外反しながら開き、口縁端部が上方につまみ出され、胴部は卵形を呈し上位が張る。口縁部内・外面が横ナデ、胴部内面はヘラナデ。胴部外面はヘラナデ後中位以下に斜位のヘラ磨きが施されている。この變形土器はいずれも破片ではあるが、当遺跡では本期からⅪ期まで見られるようである。

小形變形土器(61)は頸部のくびれがなく、口縁部は短く外反気味に少し開き、胴部との境に棱を有するもので、Ⅳ期の41から続くものと思われる。

鉢形土器(62)は内側しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部が短く外反気味に直立するもので、体部は張るがⅣ期の45から変化したものと思われる。

壺形土器(63・64)は内側しながら大きく開き、そのまま短い口縁部へ至る小形のもので、外側の口縁部と体部の境の棱が不明瞭になるが、棱を有する鬼高窓的なもの(65)もある。

須恵器は少しずつ増加しているが、日常生活に占める割合はまだ土師器の方が多いようである。高台付壺形土器(66)は底部が丸底気味で、中央部が高台よりもやや突出しており、8世紀前葉に比定されるものである。底部は回転ヘラ削りの後、高台を貼り付けている。

#### Ⅳ期(第230図)

本期は第13号住居跡出土土器からなる。器種は土師器の變形土器、壺形土器、須恵器の壺形土器、高盤形土器、盤形土器があり、須恵器の量が土師器の量を上回っている。資料は少ないが、扁平な壺形土器と丸底気味の盤形土器が本期を代表するもので、本期以降国分期に入るものと思われる。

##### 〈土師器〉

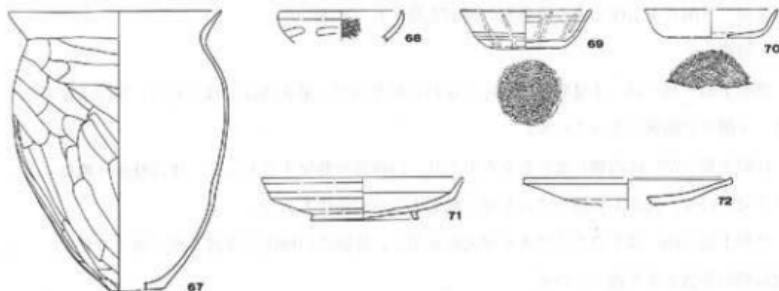
壺形土器(67)はいわゆる「武藏型變」と呼ばれるもので、口縁部がゆるく「く」の字状に開き長胴を呈する。最大径を口径もしくは胴部上位に有し、器肉が薄い。口縁部内・外面が横ナデ、胴部上位が横位、胴部中位以下は斜位のヘラ削りである。

壺形土器(68)は鬼高窓の特徴を残しているもので、外面の口縁部と体部の境の棱は不明瞭である。

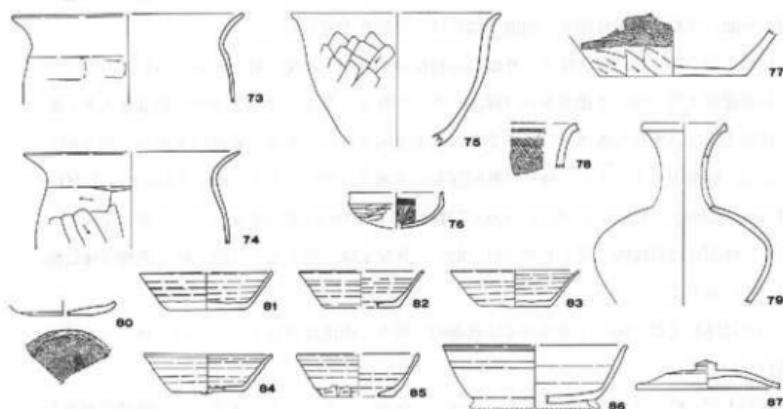
##### 〈須恵器〉

壺形土器(69・70)は器高が低く扁平なもので、体部下半に丸味をもつ。それぞれ口径14.0cm・14.3cm、器高4.2cm・3.1cm、底径8.4cm・9.0cmである。69は底部全体に手持ちヘラ削りが施され、切り離しは不明である。70は回転糸切後、外周部に回転ヘラ削りが施されている。

## Ⅶ期



## Ⅷ期



第230図 土器編年図（5）

盤形土器（71）は、底部が丸底を呈しているが、高台の内側におさまっている。高台はやや細めである。

高盤形土器（72）は受け部片である。体部は内縁気味に大きく開き、口縁外端部は面をなす。

## Ⅸ期（第230図）

本期は第2・3・26号住居跡、第1号井戸出土土器からなる。器種は土師器の變形土器、鉢形土器、環形土器、須恵器の變形土器、鉢形土器、長頸壺形土器、環形土器、高台付環形土器、蓋

形土器があり、且付土器の主体は完全に土師器から須恵器に移っている。本期は切り離し後、底部全面へラ削りを主体とする須恵器の环形土器をもって画した。

#### 〈土師器〉

環形土器(73・74)は前期とほとんど変わりがないが、最大径は口徑に有り、胴部上位の横位のヘラ削りが回答になっている。

鉢形土器(75)は内縁しながら立ち上がり、口縁部が外反するもので、体部外面に雑なヘラ削りが見られる。底部を欠損しているが、瓶形土器の可能性もある。

环形土器(76)は1点だけであるが丸底を呈し、外面の口縁部と体部の境に棱を有するもので、鬼高期の手法がまだ残っている。

#### 〈須恵器〉

環形土器(77)は胴部下位から底部にかけての破片で、器形は窺えない。底部は平底を呈し、胴部外面には斜位の平行叩き、胴部下端にはヘラ削りが見られる。

鉢形土器(78)は口縁部片で、外面には斜位の平行叩きの後、横ナデがなされている。

長頸壺形土器(79)は頭部から口縁部へかけて外反しながら立ち上がり、胴部は大きく張る。

环形土器はいずれも底径が口径の2分の1を上回るものである。底部は全面ヘラ削りが主体であるが、底部中央をわずかに残して外周部をヘラ削りしているもの(80)も見られる。口径13.0~14.1cm、器高3.8~4.3cm、底径7.6~9.0cmで前期よりもやや口径が小さく、器高が高くなっている。また、体部には直線的に開くもの(81・82)、外反気味に開くもの(83・84)、内縁気味に開くもの(85)がある。

高台付环形土器(86)は棒部がほぼ直線的に開き、底部は平底で「ハ」の字状にふんばる短い高台がつく。

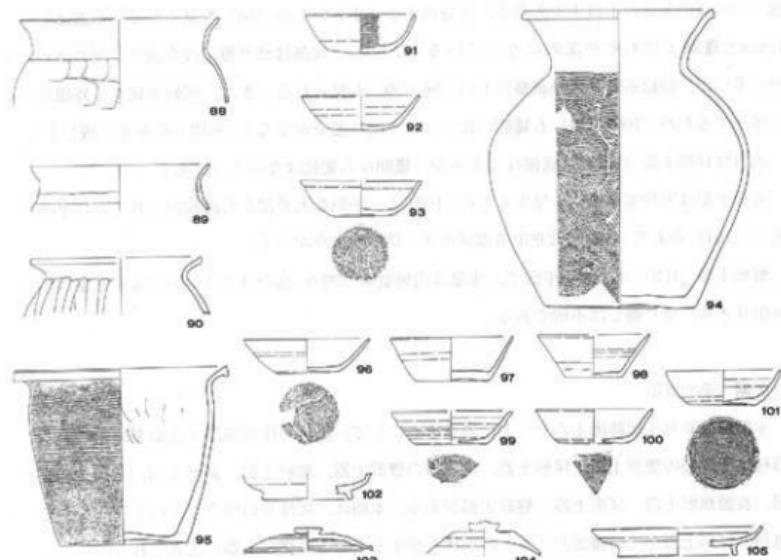
蓋形土器(87)は平坦な天井部から口縁部に向かってなだらかに下降し、口縁端部が下方につまみ出され、擬宝珠形のつまみがつく。

#### Ⅳ期(第231図)

本期は第28・29・30号住居跡出土土器を中心とし、更に第1・21・25・42号住居跡出土土器を加えて構成した。器種は土師器の環形土器、环形土器、須恵器の環形土器、鉢形土器、环形土器、高台付环形土器、蓋形土器、盤形土器がある。本期は回転糸切り後、底部無調整のものを含む須恵器の环形土器をもって画した。

#### 〈土師器〉

環形土器は口縁部がゆるやかに「く」の字状に開くものも残るが、88・89は直立気味に立ち上がってから外反し、「コ」の字状に近くなる。また、胴部上位に張りが出てきて最大径は胴部上



第231図 土器編年図（6）

位にくる。整形は竈期と同じで、器肉も3~5mmと非常に薄い。90は武藏型甕や下野型甕とは別の系統をひくものと思われる。口縁部が短く「く」の字状に外反し、口縁端部が上方につまみ出され、胴部外面は縦位にヘラ削りされている。

壺形土器は丸底のものが消滅する。91~93はいずれもロクロにより整形されたもので、平底を呈し、体部の立ち上がり部分が丸味をもち、底部と体部の境は不明瞭である。91・92は底部切り離し後手持ちヘラ削り、93は回転糸切り後無調整である。

#### （須恵器）

變形土器（94）は胴部が外傾して立ち上がり、中位のやや上が張る。口縁部は外反気味に開き、底部は平底である。胴部外面には平行叩き、胴部下端にはヘラ削りが施され、胴部内面はナデ、口縁部内・外面は横ナデである。

鉢形土器（95）は底部が平底で、体部は内脣気味に外傾して立ち上がる。頸部がややくびれ、口縁部は短く外反する。口縁部内・外面は横ナデ、体部外面は平行叩き、体部下端はヘラ削り、体部内面はナデである。

环形土器は口径11.8~13.6cm、底径6.4~7.8cmとⅨ期よりもさらに小形化している。底径も大部分が口径の2分の1以上であるが、2分の1より小さいもの(96)も見られる。器高は3.6~4.8cmとⅨ期よりもやや深めになっている(97・98)。底部は切り離し後全面ヘラ削りされるものが多いが、回転糸切り後無調整のもの(96・99)も見られる。また、回転糸切り後外周部をヘラ削りするもの(100・101)もⅨ期に比べ、ヘラ削り部分が少なく、糸切り痕を多く残している。高台付环形土器(102)は底部片であるが、Ⅸ期から変化はないようである。

菱形土器は天井部が弧状を呈するもの(103)と、平坦な天井部から直線的に外下方に下降するもの(104)がある。103は天井中央部にボタン状のつまみがつく。

盤形土器(105)は底部が平底で、体部は内側気味に開き、高台は下方にのびる。底部は回転ヘラ削りされ、切り離しは不明である。

#### X期(第232回)

本期は第6号住居跡出土のセット土器を中心にして、第14号住居跡出土土器を加えて構成した。器種は土師器の菱形土器、环形土器、須恵器の菱形土器、椭形土器、鉢形土器、台付長頸壺形土器、長頸瓶形土器、环形土器、盤形土器がある。本期は、底径が口径の2分の1よりも小さい須恵器の环形土器と、口頸部が「コ」の字状を呈する土師器の菱形土器に代表される。

##### 〈土師器〉

菱形土器は口縁部が直立してから外反して、ほぼ「コ」の字状を呈すようになる(106)。このほかに口縁部がいく分内傾または外傾してから外反するもの(107・108)も見られる。いずれも胴部上位が張り、最大径も上位にある。109はⅧ期の90と同系統のもので、胴部上・中位には縱位、下位には横位のヘラ削りがなされている。

环形土器(110・111)は直よりもやや器高を増すようである。体部の立ち上がり部分の丸味はなく、体部下端のヘラ削りが顕著で、体部と底部は明瞭に分かれている。

##### 〈須恵器〉

菱形土器(112)は口縁部片で、外反気味に開き口縁端部を折り返している。

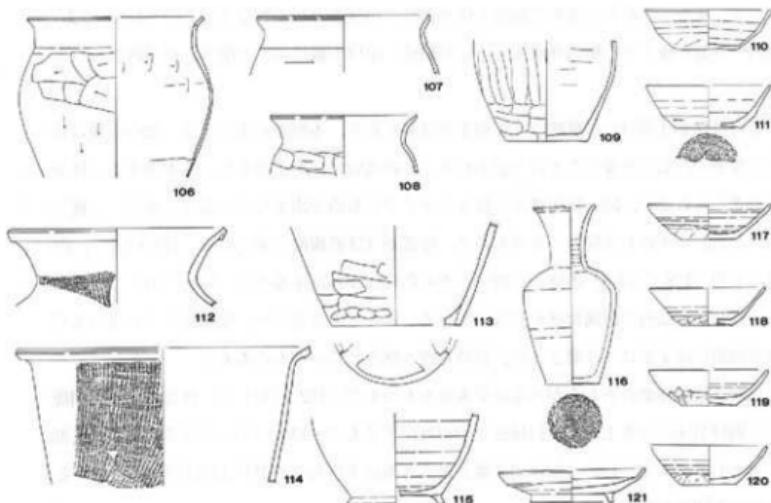
椭形土器(113)は底部片で五孔式と思われる。胴部はほぼ直線的に外傾して立ち上がり、胴部下端がヘラ削りされている。

鉢形土器(114)は胴部がほぼ直線的に外傾して立ち上がり、口縁部が短く外反する。頸部のくびれはほとんどない。

台付長頸壺形土器(115)は胴部中位以上を欠損している。胴部は内側気味に外上方へ立ち上がり、底部は回転ヘラ削り後、短く聞く高台を貼り付けている。

長頸瓶形土器(116)は胴部が直線的に外傾して立ち上がり、胴部上位で内側する。頸部から口

X 期



第232図 土器編年図 (7)

縁部にかけてラッパ状に開き、底部は平底で、回転糸切り後無調整である。

环形土器は口径11.8~13.6cm、器高3.9~4.4cm、底径5.3~7.0cmである。IX期と比べて口径・器高ともほとんど変化はないが、底径が更に小さくなっている。大半は底径が口径の2分の1以下である。いずれも体部下半は手持ちヘラ削りされ、底部は切り離し後、手持ちヘラ削りされている。体部は直線的に開くもの(117・118)と内縫気味に開くもの(119・120)がある。

盤形土器(121)はIX期の105よりも、体部と底部の境が明瞭に分かれる。

XI期 (第233図)

本期は第5・17・20・30・37・53号住居跡出土土器で構成した。器種は土師器の變形土器、高台付环形土器、环形土器、須恵器の變形土器、瓶形土器、台付長頸壺形土器、环形土器、皿形土器があり、須恵器は減少傾向にある。本期は土師器の高台付环形土器の出現と普遍化をもって画した。

〈土師器〉

變形土器はX期まで主体を占めていた口縁部が「コ」の字状を呈するものが退化し、122のように「コ」の字がくずれたものが出てくるようになり、器肉も厚くなる。しかし、まだ「コ」の字状を呈するもの(123)も残っている。124は胴部上・中位に縦位、下位に横位のヘラ削りがされ、

Ⅸ期の90、Ⅹ期の109から継続するものである。Ⅸ・Ⅹ期よりも口縁端部のつまみ出しが強くなっている。また、これらのほかに胴部上位が張り、口縁部が短く外反するもの(125)がある。口縁部内・外面が横ナデ、胴部外面上・下位が横位、中位が縦位のヘラ削り、胴部内面はヘラナデである。

高台付环形土器は、当遺跡ではⅧ期までは見られず、本期から出現する。他の器種に比べ、量的にも多く、広く普及したものと思われる。この高台付环形土器をもって本期を史に区分することも考えられるが、同一住居跡から様々なタイプのものが出土していることから、一括して一期とした。いずれも水挽きによるもので、体部がほぼ直線的に開くもの(126・127)、内縛して開くもの(128・129)、内縛して開いてから口縁部が外反するもの(130・131)などがある。また、高台孫、高台の断面形状や高さにもいろいろなものが見られ、定型化していないようである。体部内面には口寧にヘラ磨きされ、黒色処理が施されているものもある。

环形土器は体部の立ち上がり部分が丸味をもつもの(132・133)と、体部が底部と明確に分かれて内縛気味に立ち上がり、口縁部がやや外反するもの(134・135)がある。前者はⅨ期にも見られたものである。132・133は切り離し後、底部は手持ちヘラ削り、134は回転ヘラ削りされ、135は回転糸切り後無調整である。

#### 須恵器

變形土器(136)は口縁部片で、外反しながら大きく開き、端部は面をなして下方へ屈曲する。

瓶形土器(137)は五孔式のもので、胴部上半を欠損する。胴部は内縛気味に外傾して立ち上がり、胴部外面下位には横位にヘラ削りされている。

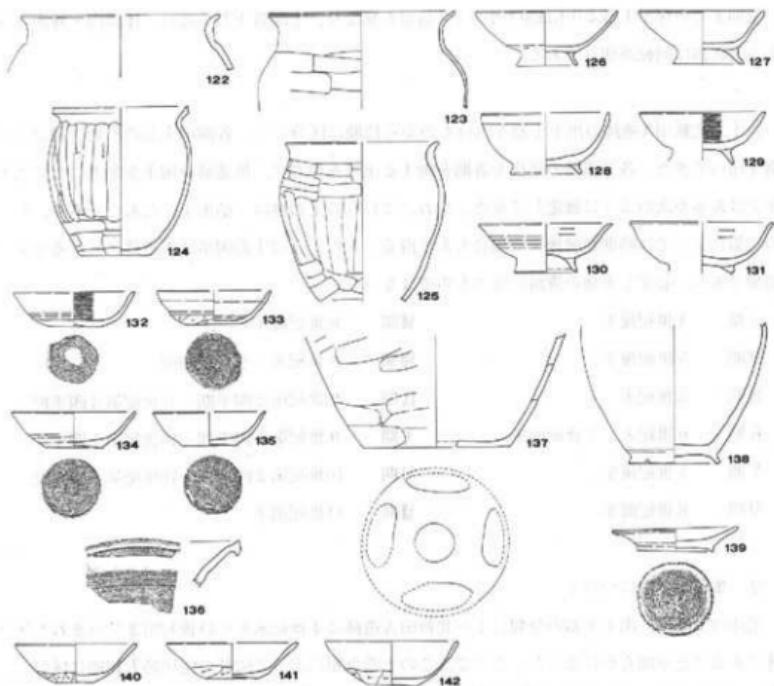
台付長頸壺形土器(138)は胴部上半を欠損する。Ⅹ期の115とほぼ同じく、胴部は内縛気味に外傾して立ち上がり、底部には回転ヘラ削り後短く開き高台を貼り付けている。

壺形土器(139)は体部が外反気味に大きく開き、口縁端部を丸くおさめている。底部には回転ヘラ削り後、低い高台を貼り付けている。

环形土器は口径12.4~14.3cm、器高3.7~4.8cm、底径4.3~5.8cmである。Ⅹ期と比べ、器高はほぼ同じであるが、口径がやや大きくなる。底径は更に小さくなり、口径の3分の1に近いものも見られる。体部はほぼ直線的に開くもの(140)、外反気味に開くもの(141)、内縛気味に開くもの(142)がある。いずれも体部中位の器肉が薄く、口縁端部を丸くおさめ、体部下端は手持ちヘラ削りされている。底部は切り離し後、全面に手持ちヘラ削りされているものが多い。

#### 埴期 (第233図)

本期は当遺跡における最も新しい時期に位置づけられ、第52号住居跡出土土器によって構成した。器種は土師器の高台付环形土器、环形土器があるが、須恵器は非常に少なく、變形土器と



第233図 土器編年図 (8)

形土器の小破片がごく少量だけで、図示できるものはなかった。本期は須恵器の終末段階にあり、土師質土器を思わせる環形土器の出現をもって画した。

高台付環形土器（143）はXI期から見られるものである。体部は内脣気味に開き、口縁部はやや外反し、高台は「ハ」の字状に開く。

環形土器は口径9.8~10.9cm、器高2.9~3.0cm、底径4.5~4.9cmで、図示したもの（144）のほかにも2点出土している。いずれも体部は内脣気味に開き、口縁部はやや外反するもので、体部中

位が肥厚して段をなしかずかに棱を有する。口径9.8~10.9cm、器高2.9~3.0cm、底径4.5~4.9cmでⅣ期までの环形土器よりも法量も小さく、器形も異なり、七輪質土器に近い。体部内・外面が横ナデ、底部は回転糸切りである。

以上、北新田A遺跡の出土土器を古いものから12期に区分して、各期の上器の形態、技法の特徴を述べてきた。各土器群の年代を各期を画する土器を中心に、他地域の編年を参考にして大まかではあるが次のように推定してみた。なお、これらの土器群は一括出土したものであり、個々の土器によっては時期が前後する場合もあり得る。また、この土器編年は当遺跡における分類の結果であり、必ずしも他の遺跡に及ぶものではない。

I期	4世紀後半	VII期	8世紀後半
II期	5世紀後半	VIII期	8世紀末~9世紀初頭
III期	5世紀末	IX期	9世紀第2四半期~9世紀第3四半期
IV期	6世紀末~7世紀前半	X期	9世紀第4四半期~10世紀第1四半期
V期	7世紀後半	XI期	10世紀第2四半期~10世紀第3四半期
VI期	8世紀前半	XII期	11世紀前半

## (2) 集落の変遷について

前述のように、出土土器の分類により北新田A遺跡は4世紀末から11世紀頃まで営まれた集落跡であることが明らかになった。そこで、この土器分類に沿って62軒の住居跡も12期に区分し、各時期ごとに住居跡の形態・配置等を検討しながら、集落の変遷をたどってみたい。しかし、上器分類による1時期は25~50年の幅をもつため、土器の中にも新旧両相が認められることや、住居の耐久年数から、該期の住居跡がすべて同時に存続したとは言えない。また、集落全体を調査していないため、本来の意味での集落をとらえることは不可能であり、限定された範囲内での変遷にならざるを得ない。なお、主軸方向・規模等の不明な住居跡については推定値を用いた。住居跡以外の遺構については、遺物により時期が判明した第3号土坑と第3号井戸を変遷の中に加えた。

当遺跡は、北から南へ延びる標高18~19mの平坦な台地の南から西にかけての縁辺部に立地しており、調査区域は幅約40m、長さ約400mで南北に細長くなっている。遺構が検出されたのはF~K区で、調査区域の南端から中央部までの約240mの間である。F区よりも北側のA~E区からは全く遺構は検出されず、遺物もごく少量出土しただけである。K区の南側は台地の南端で急斜面となっており、遺構の存在は考えられない。従て集落の範囲はF区よりも北へ、K区よりも南へは延びていないものと思われる。これに反し、調査区域の東西幅は約40mしかなく、検出さ

れた遺構のうち、住居跡9軒、溝10条は調査区域の東または西へ延びていることや、区域外にも遺物が散布していることから、集落は東西両方向へ広がることは容易に理解できる。

#### I期（第234・235図）

本期に属する住居跡は、第4・9・10・19・22・23・32・33・51・56号住居跡の10軒である。

（なお、第51号住居跡から鬼高期の環形土器が1点出土しているが、他の遺物は五領期のものであり、本跡を切っている第49号住居跡のものと思われる。）

長軸方向は第9・22号住居跡を除いて、N-13°～35°-Wの範囲におさまる。規模は長・短軸とも3.4～5.0mで、一定している。平面形は長方形・隅丸長方形を呈するものが多いが、長軸短軸の差は少なく、方形に近い。また、それぞれ床面中央か北寄りに炉を有しており、本期の住居には規則性が認められる。

配置からすると、10軒は調査区域の中央部から南端近くまでにわたって点在している。いずれも調査区域の西半分に偏していることから、集落は西へ延びているものと思われる。また、互に重複関係はない、2～3軒ずつ4群に分けることができる。北から第4・10号住居跡の2軒、第9・19・22号住居跡の3軒、第23・32・33号住居跡の3軒、第51・56号住居跡の2軒である。これらの群には、住居跡の形態がほぼ一定していることや、また、本期の土器群の中にはそれほどの新旧差が認められないことから、大きな時間差はないと思われる。

#### II期（第234・235図）

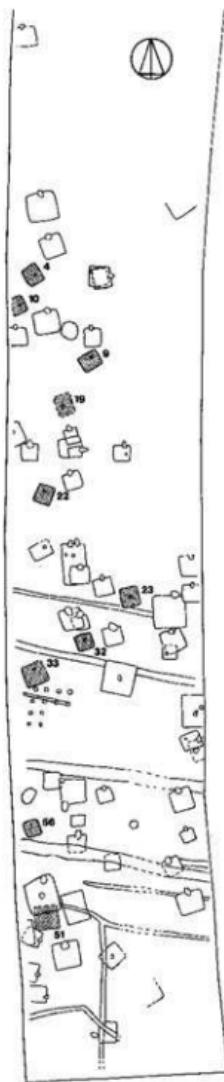
本期に属する住居跡は、第18・34・38号住居跡の3軒である。土器分類からはI期と本期との間には空白期間がある。

長軸方向は第18号住居跡が23度、第34号住居跡が4度西に、第38号住居跡は62度東に撮れており、2つに分かれている。第18・34号住居跡はいずれも調査区域外へ延びており、規模・平面形は推定で、それぞれ約5m、7.1mの方形を呈するものと思われる。第38号住居跡は4.6×3.3mの長方形を呈している。本期の住居跡は3軒だけであるが、長軸方向・形態とも一定していないようである。

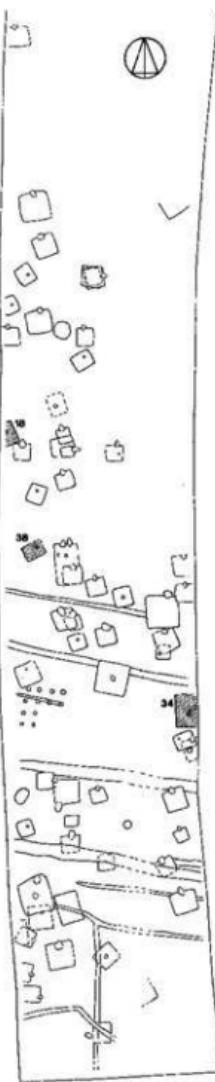
配置からみると、北から第18号住居跡が在り、その南約20mに第38号住居跡、そこから南東約43mに第34号住居跡が在る。3軒はそれぞれ大きく離れ、集落の形態をなさないが、土器分類の上からは本期とIII期は非常に接近しており、III期の集落が形成される初期の段階と思われる。

#### III期（第234・235図）

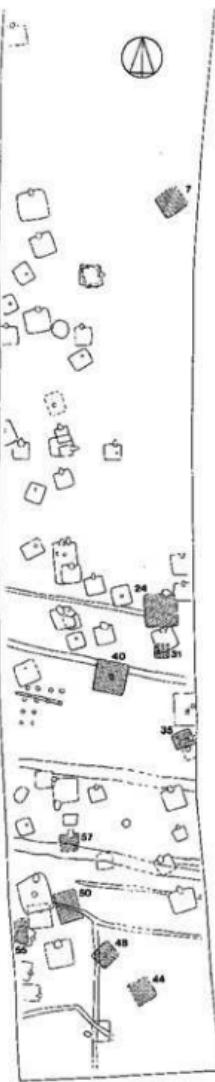
本期に属する住居跡は、第7・24・31・35・40・44・48・50・55・57号住居跡の10軒である。



I 期



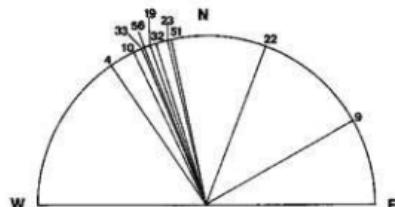
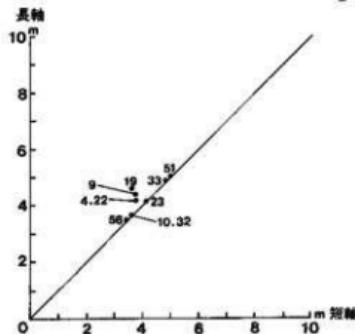
II 期



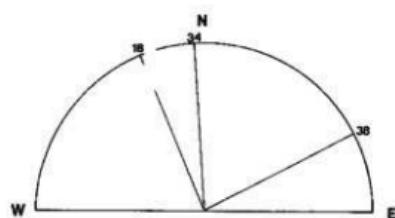
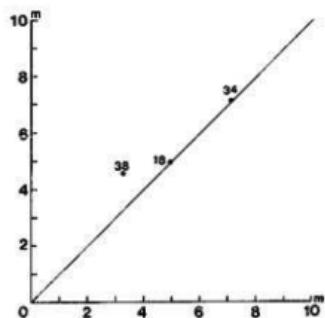
III 期

第234図 時期別住居跡配置図（1）

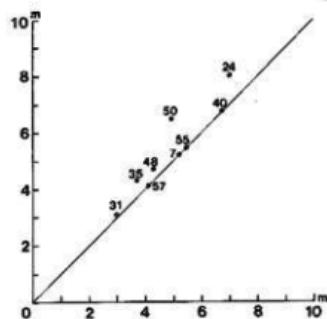
I 期



II 期



III 期



第235図 時期別住居跡規模・主軸方向 (1)

長軸方向はN-12.5°-E～N-29°-Wの範囲と、N-53°-68.5°-Eの範囲の2つに分かれている。規模は長・短軸が3～7mと大小差が見られ、平面形は方形を呈するものが多いが、長方形、隅丸方形を呈するものもある。これらの傾向はⅡ期から見られるものである。

配置をみると3群に分かれる。北から第7号住居跡1軒、第24・31・35・40号住居跡の4軒、第44・48・50・55・57号住居跡の5軒である。各群とも調査区域の東か西に偏していることや、調査区域外へ延びている住居跡も見られることなどから、集落も東または西へ広がることが推察できる。Ⅱ期の34号住居跡はⅢ期の35号住居跡の北約1mに位置しており、第24・31・35・40号住居跡の群に属しているものと考えられ、集落がⅡ期からⅢ期へ間断なく移行したことが理解できる。また、Ⅱ期とⅢ期の住居跡の形態が同じ傾向を示していることも、それを裏づけていると思われる。さらに、本期は群を構成する住居数が増え、群内の住居規模にも大小が見られるようになり、集落構造が整いつつあることがうかがえる。

#### IV期（第236・237図）

本期に属する住居跡は、第46・49号住居跡の2軒で、これに第3号土坑が加わる。土器分類からは、Ⅲ期と本期の間には空白期間がある。

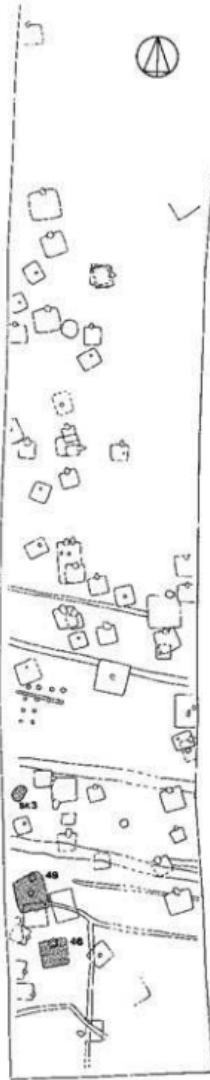
主軸方向は第46号住居跡がN-22°-W、第49号住居跡がN-12°-Wを指し、いずれも西に振れる。規模は長・短軸が5.8～7.7mと大形で、平面形はほぼ方形を呈している。また、しっかりといた4本の主柱穴と北壁にカマドを有している。壁高は50～70cmで、床面も堅く締まり、壁溝が全周し、全体に整った典型的な鬼高期の住居跡である。

配置からみると、3造構とも調査区域の南端近く、西に偏している。南へ向かうと急斜面となり、集落は南へは延びず西へ広がるものと思われる。3造構とも造物が多いことや、變形土器の長胴化、大形の瓶形土器の出現は生産力が増大したことを示すものであり、調査区域の西側には大規模な集落が存在し、本期の遺構はその集落の東端に位置していた可能性もある。土器分類からすると若干の時間差はあるが、同時存在に近く、一時期は同時に存在して廃絶期に差があったと思われる。

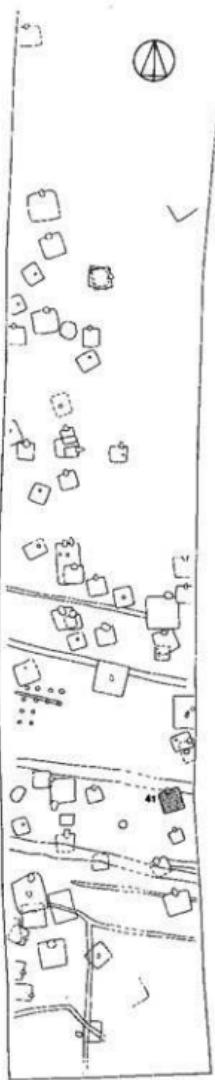
#### V期（第236・237図）

本期に属する住居跡は、第41号住居跡1軒である。

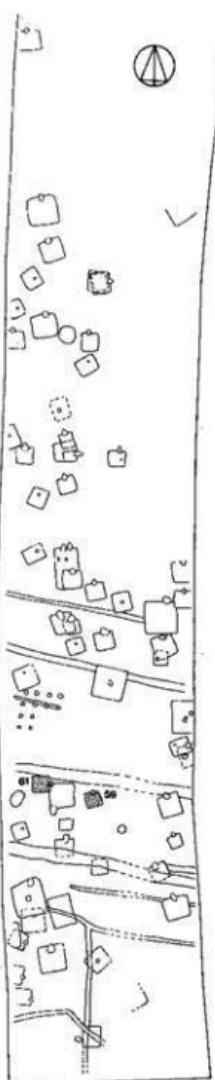
主軸方向はN-19°-Wを指し、規模は長・短軸とも約4.9mで、平面形は方形を呈している。また、4本の主柱穴と北壁にカマドを有し、Ⅳ期のように整った住居跡であるが、小形化している。1軒だけで集落について考えることは困難であるが、集落規模が縮小している傾向を示しているものと思われる。



IV 期



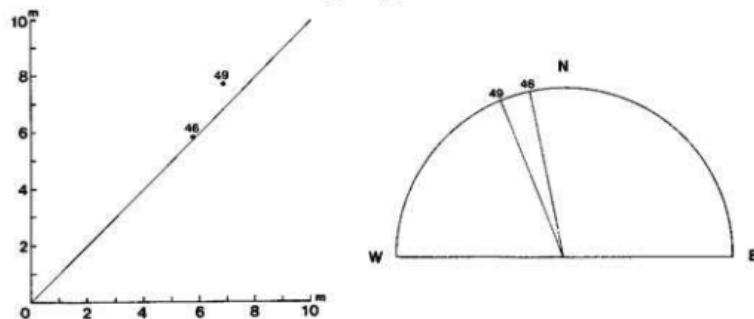
V 期



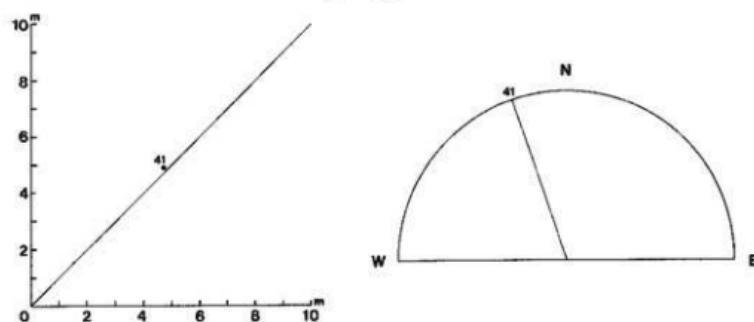
VI 期

第236図 時期別住居跡配置図（2）

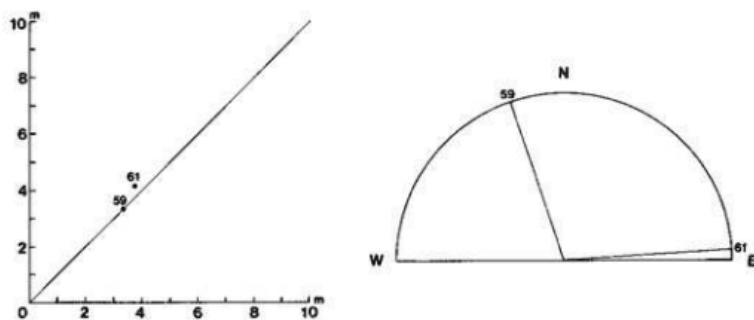
IV 期



V 期



VI 期



第237図 時期別住居跡規模・主軸方向（2）

配置からみると、調査区域の東に偏しており、集落が東へ広がることは考えられる。

#### VI期（第236・237図）

本期に属する住居跡は、第59・61号住居跡の2軒である。

主軸方向は第59号住居跡がN-19°-W、第61号住居跡がN-86.5°-Eで、大きく分かれる。規模はV期よりも更に小形化する傾向にあり、長・短軸は3.3~4.3mである。平面形はいずれも隅丸方形を呈し床面は堅い。第59号住居跡は北壁にカマドを有し、主柱穴は不明であるが、第61号住居跡は東壁にカマドを有し、規則的に4本の主柱穴を配している。当遺跡では、本期から東壁にカマドを構築した住居跡が見られるようになるが、その数は少ない。

配置をみると、2軒とも調査区域の南寄りに位置し、互に重複することなく近接しているが、カマドの位置と主柱穴配置の差は、2軒の間の時間差を示すものと見られる。しかし、上器分類の上からは大きな時間差はないと思われる。

#### VII期（第238・239図）

本期に属する住居跡は、第13号住居跡1軒である。

主軸方向はN-0°を指し、規模は1辺3.85mで、平面形は隅丸方形を呈している。V期からの住居規模の小形化の傾向は続いているようである。

本跡は調査区域の西へ延びており、集落の中心もその方向にあたることも考えられるが、1軒だけであるため、集落の構成については不明である。しかし、V期から本期までは、住居跡数が1~2軒と少なく、当遺跡では、集落としても小規模なものが続いたものと思われる。

#### VIII期（第238・239図）

本期に属する住居跡は、第2・3・26号住居跡の3軒で、これに第1号井戸が加わる。

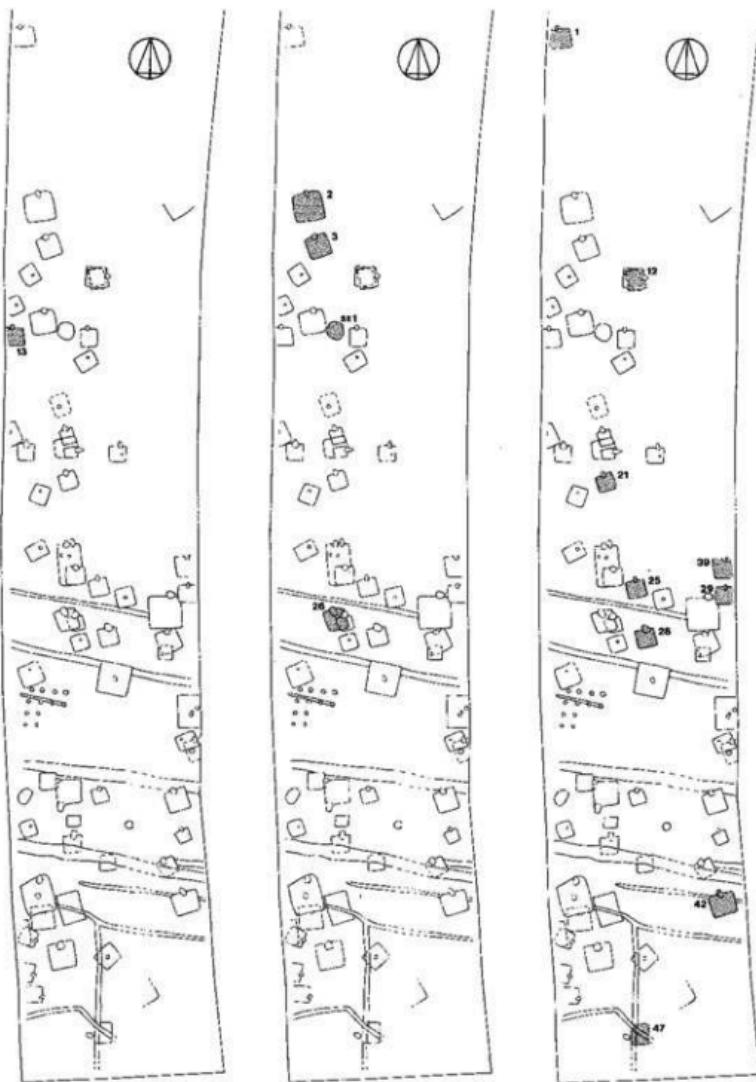
主軸方向はN-10°~22.5°-Wの範囲におさまる。規模は第2号住居跡が6.6×6.5mと大きく、第3・26号住居跡は長・短軸が4.5~4.8mと小さい。平面形はいずれも方形を呈している。

配置からみると、北から第2・3号住居跡・第1号井戸の群と、南へ約60m離れて第26号住居跡の2群に分かれる。上器分類の上からは若干の新旧差が認められ、第26号住居跡・第1号井戸が古く、第2・3号住居跡が新しいと考えられる。

#### IX期（第238・239図）

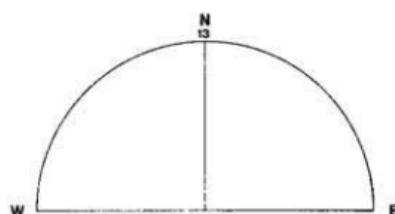
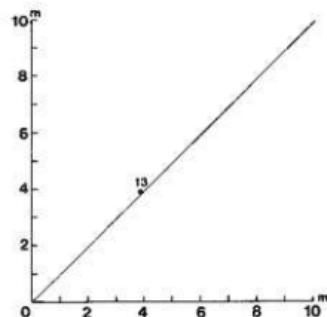
本期に属する住居跡は、第1・12・21・25・28・29・39・42・47号住居跡の9軒である。

主軸方向はN-0°~17.5°-Wの範囲におさまる。規模は第42号住居跡の5.4×4.95mを除き、

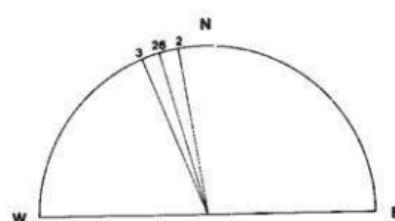
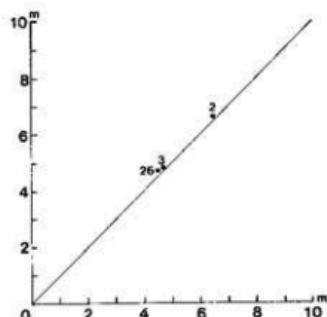


第238図 時期別住居跡配置図（3）

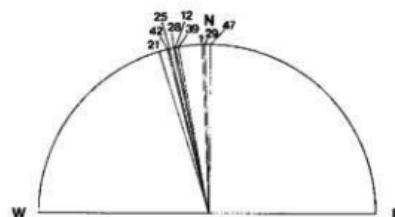
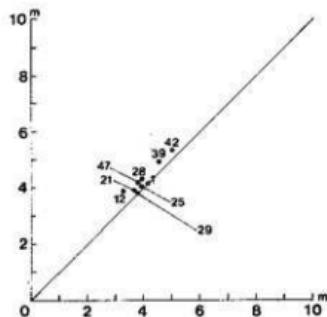
VI 期



VII 期



IX 期



第239図 時期別住居跡規模・主軸方向 (3)

他は長・短軸が5m以下に集約され、ほぼ小形化が定着している。平面形は方形、隅丸方形、長方形を呈し、主柱穴も不明なものが多く一定していない。

配置からみると、調査区域の中央部から南端まで200m以上にわたって分散している。これらの住居跡の時間差はすべて同時存在したとは考えられないが、土器分類の上からは区分が困難である。第29号住居跡と第39号住居跡の間隔は2mで、同時存在したとは認め難く、本期の集落も2段階以上にわたるものと推定される。

#### X期（第240・241図）

本期に属する住居跡は、第6・11・14・15・62号住居跡の5軒である。

主軸方向はN-21°-W-N-7.5°-Eの範囲におさまる。規模は第6号住居跡の5.4×4.5mを除き、他は長・短軸が5m以下で、第15号住居跡は3.3×2.8mと特に小さい。平面形はX期と同じく方形、隅丸方形、長方形を呈し、一定していない。

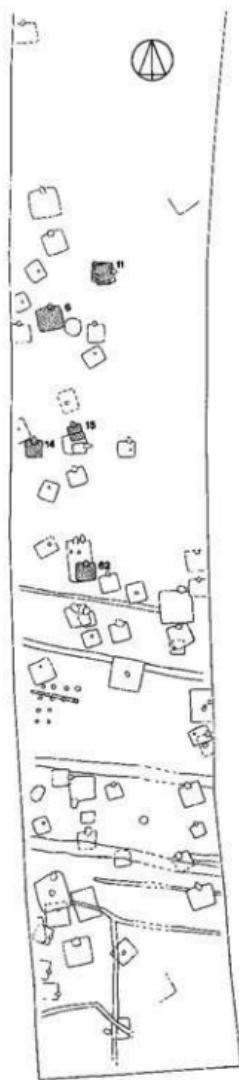
配置から見ると、北から第6・11号住居跡の2軒、第14・15号住居跡の2軒、第62号住居跡1軒の3群に分かれるが、土器分類の上からは、第6号住居跡を除いて土器が少なく時間差はとらえにくい。

#### XI期（第240・241図）

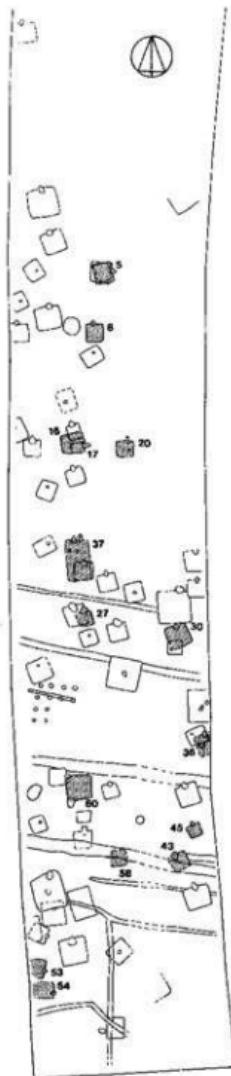
本期に属する住居跡は、第5・8・16・17・20・27・30・36・37・43・45・53・54・58・60号住居跡の15軒である。

主軸方向はN-0°-30°-Wの範囲と、N-80°-100°-Eの範囲の2つに分かれる。後者のうち、第5・17・53・54号住居跡は東壁にカマドを有している。規模は第37・60号住居跡を除いて、長・短軸が5m以上で、平面形は方形、隅丸方形、不整形、長方形と一定していない。この傾向はX期から続いている。また竪穴も整ったものは少なくすれ気味である。第37号住居跡は9.05×5.05mと大形の長方形を呈し、また北壁には同時に使用したと思われるカマド2基を有し、他の住居跡とは大きく異なっている。

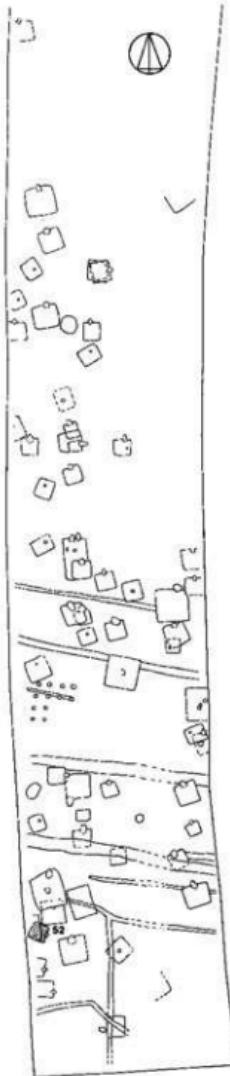
配置からみると、15軒が調査区域のほぼ中央部から南端まで分散している。土器分類の上からは、若干の新旧差が認められるが、それらが共存しており住居跡の時間差はとらえにくい。しかし、第16・17号住居跡は重複関係にあり、また、第53号住居跡と第54号住居跡は約1mしか離れておらず、同時に存在したとは言い難い。従って、本期の集落も少なくとも2段階以上の経過があったものと思われる。本期は住居数も多く、配置からは調査区域外への広がりも考えられ、当道跡の集落が最も安定・拡大した時期であったことがうかがえる。



X 期



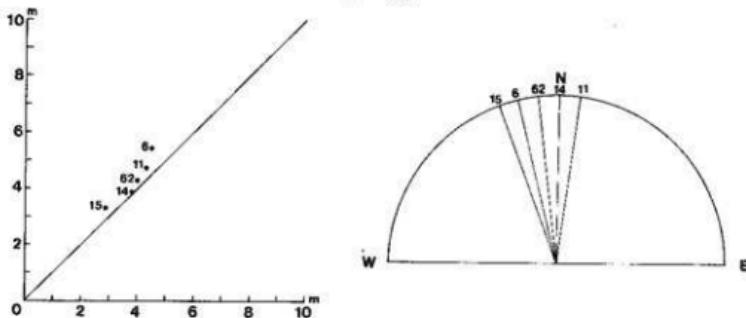
XI 期



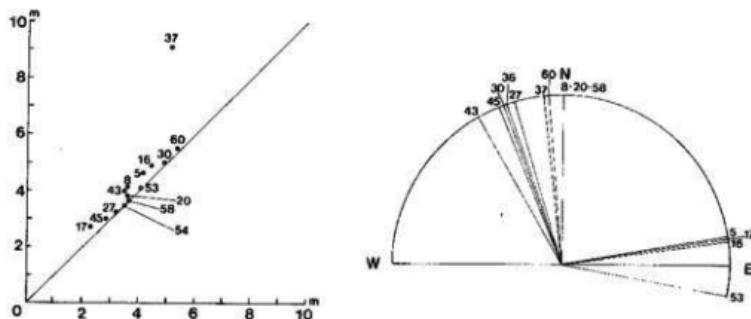
XII 期

第240図 時期別住居跡配置図（4）

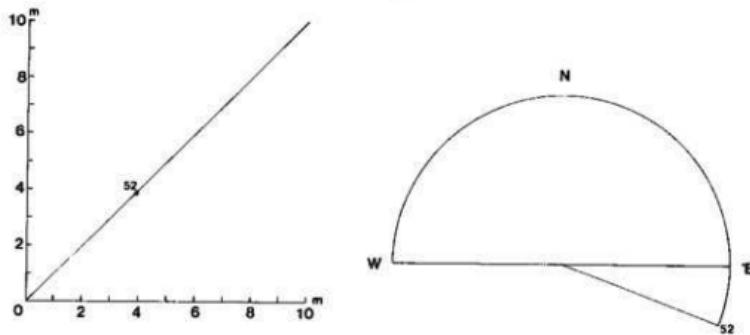
X 期



XI 期



XII 期



第241図 時期別住居跡規模・主軸方向 (4)

### 初期（第240・241図）

本期に属する住居跡は、第52号住居跡1軒である。上器分類の上からは、XI期と本期の間には若干の空白期間がある。

主軸方向はN-110°-Eを指し、東よりはやや南へ振れる。規模は1辺3.85mで、平面形は方形を呈するものと思われるが、XI期と同じく竪穴の状態はくずれ気味である。

配置からみると、調査区域の西に偏し区域外へ延びていることから、集落は西へ広がっている可能性がある。しかし、1軒だけであり、本期で集落が急に衰退・消滅したものと考えられる。

以上、各時期における住居跡と集落の変遷をたどってみたが、当遺跡の場合、道路という線上の調査であり、集落を面でとらえるまでは至らなかった。従って、調査区域外については推定の域を出ないものであるが、当遺跡における集落の変遷過程の概略はとらえられたものと思われる。

表8 住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模		床面	柱穴数	押・カマド	覆土	出土遺物	時期	備考
				正方形 正角×短軸( )	壁高(m)							
1	G1d <sub>4</sub>	N-2.5°-W	方形	4.30×( )	10~15	平坦	17	カマド	自然	土師器・須恵器 古鏡・鉄鏃	Ⅳ	
2	G1e <sub>3</sub>	N-10°-W	方形	6.60×6.50	50~70	平坦	8	カマド	自然	土師器・須恵器 铁斧・鎌	Ⅴ	貯蔵穴
3	G1e <sub>3</sub>	N-22.5°-W	方形	4.80×4.70	50	平坦	13	カマド	自然	土師器・須恵器	Ⅴ	
4	G1g <sub>2</sub>	N-35°-W	隅丸方形	4.15×3.75	25~38	平坦	6	炉	擾乱	土師器	Ⅰ	
5	G1g <sub>3</sub>	N-80°-E	方形	4.55×4.05	15~20	平坦	11	カマド	擾乱	土師器・須恵器 丸瓦	Ⅱ	S111-12と重複
6	G1j <sub>3</sub>	N-14°-W	長方形	5.40×4.30	25~40	平坦	15	カマド	自然	土師器・須恵器 鍬・刀子	Ⅲ	
7	G2d <sub>3</sub>	(N-98°-E)	方形	5.20×( )	10	平坦	4		擾乱	土師器	Ⅲ	貯蔵穴
8	G1j <sub>2</sub>	N-0°	隅丸方形	4.05×3.60	5	平坦	6	カマド	自然	土師器・須恵器	Ⅲ	
9	H1a <sub>2</sub>	N-60°-E	長方形	4.10×3.65	5~10	平坦	5	炉	自然	土師器	Ⅲ	
10	G1h <sub>3</sub>	N-26°-W	隅丸方形	3.60×( )	13~21	平坦		炉	人為	土師器	Ⅲ	
11	G1g <sub>2</sub>	N-7.5°-E	方形	4.65×4.25	15	平坦	11	カマド	擾乱	土師器・須恵器	Ⅲ	S15-12と重複
12	G1g <sub>3</sub>	N-12°-W	長方形	3.90×3.25	10	凹凸	6		人為		Ⅳ	S15-11と重複
13	G1j <sub>2</sub>	N-0°	隅丸方形	3.85×( )	35~45	平坦	4	カマド	擾乱	土師器・須恵器	Ⅳ	
14	H1f <sub>4</sub>	N-0°	方形	3.80×3.75	30~40	平坦	3	カマド	自然	土師器・須恵器	Ⅳ	S118と重複
15	H1e <sub>2</sub>	N-21°-W	長方形	3.30×2.80	50~55	平坦	1	カマド	自然	土師器・須恵器	Ⅳ	S116と重複
16	H1f <sub>5</sub>	N-82°-E	隅丸方形	4.90×4.40	30~35	平坦	8		自然	土師器・須恵器 鉗鉗	Ⅳ	S115-17と重複
17	H1f <sub>6</sub>	N-81°-E	長方形	2.70×2.30	50~55	平坦	2	カマド	自然	土師器・須恵器 釘	Ⅳ	S116と重複

件名 番号	位 置	上地方向	平面形	規 模		床面	柱穴数	伊・カマツ	覆土	出 土 遺 物	時期	備 考
				長軸×短軸(m)	壁高(cm)							
18	H1e	N- 23°-W	方形	4.95×( )	26~36	平坦	5	伊	自然	土師器・砾	II	SI14と重複
19	H1d	N- 20°-W	長方形	(4.60×3.60)		平坦	5	炉		土師器	I	
20	H1f	N- 0°	方 形	3.75×3.60	25~35	平坦	18		自然	土師器・須恵器	XI	
21	H1h	N-17.5°W	圓角方形	3.90×3.70	50	平坦	4	カマド	自然	土師器・須恵器・石製鍛錬車	IX	
22	H1h	N- 20°-E	長方形	4.20×3.85	20~35	平坦	5	炉	自然	土師器	I	
23	H1d	N- 14°-W	圓角方形	4.25×4.10	30	平坦	7	炉	自然	土師器	I	
24	12e	N- 5°-W	方 形	7.08×7.00	35~40	平坦	9	炉	自然	土師器	III	SI29-SD1-SE2と重複
25	H1d	N- 14°-W	方 形	4.10×3.85	35	平坦	8	カマド	自然	土師器・須恵器	IX	
26	H1e	N- 17°-W	方 形	4.70×4.45	45	平坦	11	カマド	自然	土師器・須恵器	III	SI27と重複
27	H1e	N- 17°-W	方 形	3.20×3.20	15~20	平坦	3	カマド	自然	土師器・須恵器	XI	SI26と重複
28	H1f	N-12.5°W	方 形	4.25×3.90	40	平坦	7	カマド	自然	土師器・須恵器	IX	
29	12d	N- 2°-W	方 形	3.80×( )	45	平坦	5	カマド	自然	土師器・須恵器	IX	SI24と重複
30	12f	N- 21°-W	圓角方形	5.00×4.90	25~28	平坦	9	カマド	自然	土師器・須恵器・鍛錬車・刀子・釘	XI	SI31と重複
31	12g	N- 0°	方 形	3.10×3.00	20~25	平坦	1	炉	自然	土師器	III	SI30と重複
32	H1g	N- 10°-W	圓角方形	3.60×3.60	5~10	平坦	8	炉	自然	土師器	I	
33	H1h	N- 23°-W	方 形	4.90×4.75	0~5	平坦	6	炉	自然	土師器	I	
34	12j	N- 4°-W	方 形	7.10×( )	25~28	平坦	2	炉	自然	土師器	II	貯藏火
35	J2b	N-68.5°E	圓角方形	4.35×3.70	15~20	平坦	4	カマド	人為	土師器	III	SI36・SK1と重複
36	J2b	(N-20°-W)			5			カマド		七輪器	XI	SI35・SK1と重複
37	H1b	N- 7°-W	長方形	9.05×5.05	35	平坦	10	カマド	自然	土師器・須恵器・鍛錬車・刀子・釘	XI	S162と重複
38	H1b	N- 62°-E	長方形	4.60×3.30	35	平坦	7	炉	攪乱	土師器	II	
39	H2b	N- 11°-W	圓角方形	-邊4.5~5m	75	平坦	4	カマド	自然	土師器・須恵器・石製鍛錬車・鉄錠	IX	
40	H1h	N-12.5°E	方 形	6.80×6.75	15~20	平坦	6	炉	自然	土師器	III	SD2と重複
41	J2e	N- 19°-W	方 形	4.85×4.75	35	平坦	6	カマド	自然	土師器・須恵器	V	SD3と重複
42	K2a	N-14.5°W	方 形	5.40×4.95	45~50	平坦	9	カマド	自然	土師器・須恵器・刀子・石製鍛錬車・鉄錠	IX	SD6と重複
43	J2i	N- 30°-W	方 形	1邊3.5~4m	35	平坦	5	カマド	自然	土師器・須恵器	XI	SD4・5と重複
44	K2f	N- 29°-W			35~40	平坦	1			土師器・丸玉	II	
45	J2g	N-22.5°W	方 形	2.95×2.75	15~20	凹凸	3	カマド	自然	土師器・須恵器	XI	
46	K1d	N- 12°-W	方 形	5.85×5.80	50	平坦	8	カマド	自然	土師器・須恵器	IV	
47	K1h	N- 0°	長方形	4.15×3.75	5~10	平坦	6		自然	土師器・須恵器	IX	SD9・10と重複
48	K1d	N- 53°-E	長方形	4.75×4.25	20	平坦	9	炉	自然	土師器	III	SD10と重複

住居跡 番号	位 置	土軸方向	平面形	現 横		床面	柱穴数	炉・カマド	櫛上	出 土 遺 物	時期	考
				長軸×短軸m	壁高cm							
49	J1j+	N~22°~W	方 形	7.70×6.90	56~70	平坦	15	炉・カマド	自然	土師器・瓦器・土瓦 瓦子・瓦器・勾玉	IV	S151・SD7と重複
50	K1as	N~17°~W	長方形	6.50×4.90	30~40	平坦	10		自然	土師器	III	SD7と重複
51	K1bs	N~18°~W	方 形	( )×5.00	20~25	平坦	4	炉	自然	土師器・鍵	I	S149と重複
52	K1cs	N~10°~E	方 形	3.85×( )	5	平坦	1	カ マ ド	自然	土師器・須恵器	VII	S155と重複
53	K1e+	N~10°~E	方 形	4.05×( )	20	圓凸	1	カ マ ド	自然	土師器・須恵器	XI	
54	K1fs	N~90°~E	方 形	3.50×( )	6~8	平坦	2	カ マ ド	自然	土師器・須恵器	XI	
55	K1bs	N~8.5°~W	方 形	5.45×( )	13~17	平坦	2		自然		III	S152と重複
56	J1g+	N~22°~W	圓角方形	3.45×3.10	30~35	やや 起伏	7	炉	人為	土師器	I	
57	J1gs	N~1°~W	方 形	4.20×( )	10~15	平坦	7		自然	土師器・須恵器	III	SK5・SD5と重複
58	J1is	N~9°	方 形	3.50×( )	10~15	平坦	3		人為	土師器・須恵器	XI	SD5と重複
59	J1es	N~19°~W	圓角方形	3.30×3.25	50~55	平坦	6	カ マ ド	自然	土師器・須恵器	VI	
60	J1es	N~3°~W	不整形	5.45×5.40	20	やや 起伏	9		自然	土師器・須恵器	XI	S161・SK6と重複
61	J1ds	N~86.5°E	圓角方形	4.20×3.65	45	平坦	5	カ マ ド	自然	土師器・須恵器 勾玉・土瓦	VI	S160・SD3と重複
62	I1c+	N~7°~W	圓角方形	4.30×4.00	3	平坦	4	カ マ ド	人為	刀子	X	S137と重複

### 主な参考文献（順不同）

- 栗城謙一・越間正昭・比田井克仁 「多摩ニュータウン地域の古代（1）」『研究論集Ⅰ』  
 （財）東京都埋蔵文化財センター 1982
- 比田井克仁 「7世紀における多摩地方の土器様相」『研究論集Ⅲ』 （財）東京都埋蔵文化財センター 1985
- 飯塚武司他 「No769 遺跡 奈良・平安時代編」『多摩ニュータウン遺跡』 （財）東京都埋蔵文化財センター 1985
- 梅沢太久夫・石岡憲雄他 「六反田」埼玉県大里郡間部町六反田遺跡調査会 1981
- 高田和夫・鈴木秀雄他 「伴六」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第11集 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982
- 増田逸朗他 「後服」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第15集 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982
- 横川好富他 「若宮台」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第28集 （財）埼玉県埋蔵文化

- 財調査事業団 1983
- 酒井清治 「台耕地 II」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第33集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 宮内勝己 「東京湾沿岸における奈良・平安時代土器の様相」『シンポジウム資料 房総における奈良・平安時代の土器』史館同人・市立市川考古博物館 1983
- 阪田正一他 「八千代市権現後遺跡」 荘田地区埋蔵文化財調査報告書1 (財)千葉県文化財センター 1984
- 井上唯雄 「歌舞伎遺跡」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- 大金寅亮・橋本澄朗他 「井頭」 栃木県教育委員会 1974
- 岩淵一夫他 「赤羽根」 栃木県埋蔵文化財調査報告 第57集 栃木県教育委員会 (財)栃木県文化振興事業団 1984
- 村山好文 「房総における和泉式土器編年試案」『日本考古学研究所集報V』 日本考古学研究所 1983
- 茨城県教育財團 「鹿の子C遺跡」『茨城県教育財團文化財調査報告第20集』1983

## 北新田B遺跡

### 1 遺跡の概観

当遺跡は、猿島郡総和町大字柳橋字西原581-2ほかに所在し、調査面積は3200m<sup>2</sup>である。現況は畠と一部山林である。当遺跡は本町の東端部で、古河市と千代川村を結ぶ県道(宗道-古河線)に沿った柳橋集落の北約1.3kmに位置している。当遺跡の立地する台地は、旧長井戸沼に向かって舌状に延びており、西側は旧長井戸沼から枝分かれした宮戸川に沿って水田が開かれ、同じように東側も旧長井戸沼から枝分かれした大川及びその支流に沿って水田が開かれている。台地は、標高約20mでほぼ平坦である。遺跡の西方250mには長井戸沼の西枝が入り込み、台地の縁辺部は標高14~15mの沖積低地へと傾斜している。当遺跡の南方約500mに北新田A遺跡、北方約500mに北新田C遺跡が同じ新4号バイパス計画線上に所在している。当遺跡から、縄文式土器片が極少量出土しただけである。

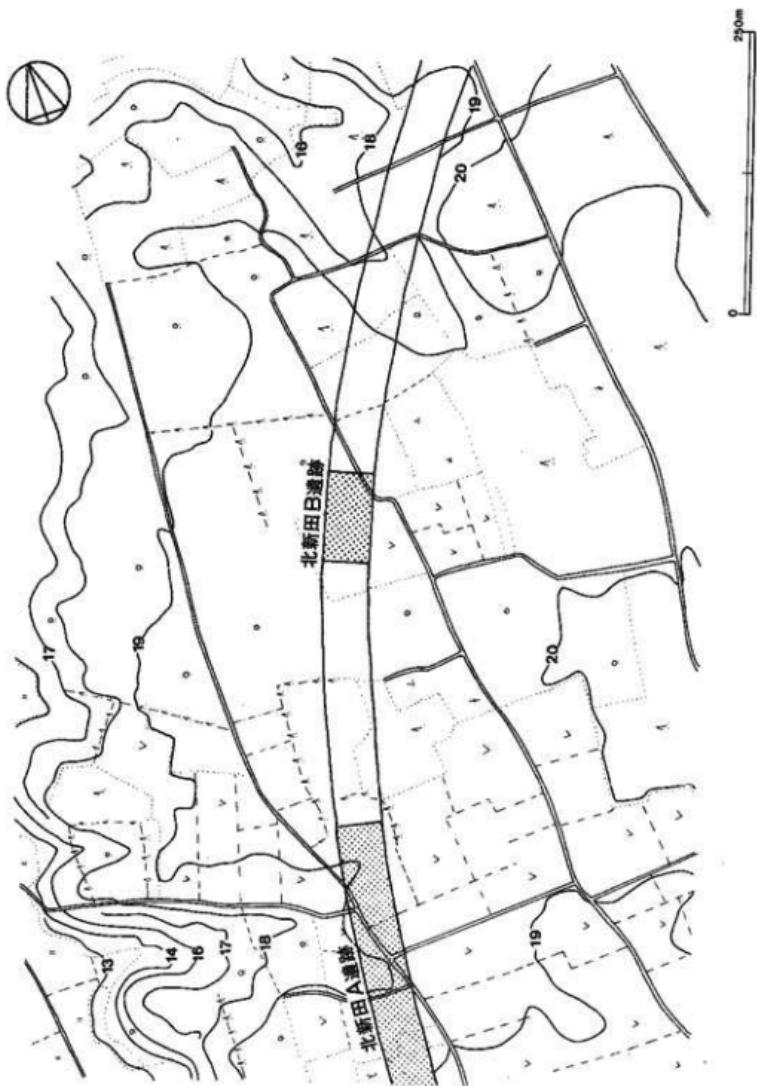
### 2 調査経過

(昭和58年度)

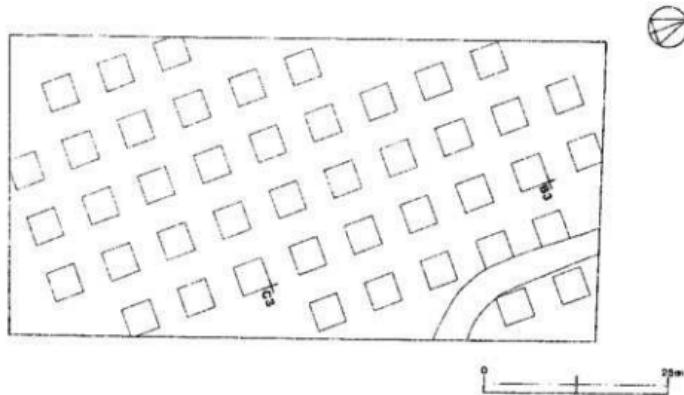
- 5月前半 遺跡の調査を開始し、調査予定地内の雑木の伐開及び草刈りをした。調査前全景写真を撮影した後、X軸+19500m、Y軸-4600mの交点を基準として方眼杭打ちを行い、調査区を設定した。4分の1のグリッド発掘を、C2区B2区から開始した。遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。
- 5月後半 B2区・B3区・C2区のグリッド発掘を行ったが、この地区でも遺構は確認できず、ごくわずかの縄文式土器片が出土した。
- A2区・B2区・B3区は、山林跡のためグリッド内に根株があり、確認作業が困難であったが、5月26日4分の1のグリッド発掘を終了した。B2je区に落ち込みが見られたのでグリッド拡張をしたが、遺構はなかった。調査後の遺跡全景写真の撮影を行い5月30日に調査地域内の全ての調査を完了した。

### 3 遺 物

調査区域の4分の1にあたるグリッド発掘を行ったが、遺構は確認できなかった。極少量の縄



第242図 北新田日遺跡地形図



第243図 北新田Ⅱ遺跡全体図

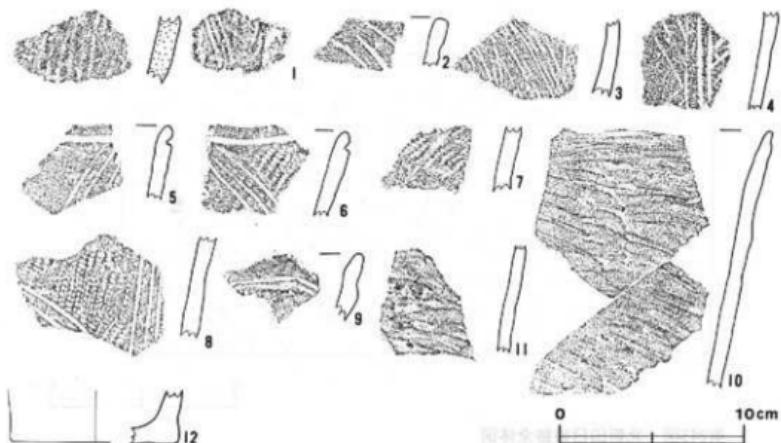
文時代の土器片が出土したのみである。

(1) グリッド出土土器 (第244図)

1は胸部片で、表裏面に斜位の条痕文を施している。色調はにぶい橙色であり、胎土には、繊維を含んでいる。2は口縁部で、斜行の沈線を施している。色調は明褐灰色であり、胎土には、砂粒、石英を含んでいる。3・4は胸部片で、縄文を地文とし斜位・縦位に沈線文を施している。5・6は口縁部で、口唇直下に深い1条の沈線を横位に巡らし、縄文の地文上に斜位の平行沈線を施している。色調はいずれも灰褐色である。7は胸部片で、縄文を旋している。色調は赤褐色で、胎土には砂粒、石英と少量のスコリアを含んでいる。8は胸部片で、縄文の地文上に斜位・縦位に平行沈線を施している。色調は赤褐色であり、胎土にスコリアを少量含んでいる。9は波状を呈する口縁部片で、口唇直下に2条の横位の沈線を巡らし、下位に縄文を施している。色調は赤褐色で、胎土には少量のスコリアを含んでいる。焼成は良好である。10・11は同一個体の口縁部と胸部片であるが、接合はできなかった。いずれもヘラ状工具で整形している。色調は燈色であり、胎土には石英と少量のスコリアを含んでいる。12は底部片で、底部は平底を呈している。胸部は底部からほぼ垂直に立ち上がる。色調は赤褐色であり、胎土には石英、スコリアを含んでいる。

#### 4 まとめ

調査の結果、グリッド発掘による遺構確認作業の過程で、極少量の縄文式土器片が表土から出土



第244図 グリッド出土土器拓影図

したが、縄文期の造構は検出されず、また、その他のいざれの時代の造構も検出されず、遺跡の性格は不明である。しかし、縄文時代の土器片が出土していることをみると、北新田B遺跡の近くに、当時の人々の集落のあとが存在するものと推察される。

# 北新田C遺跡

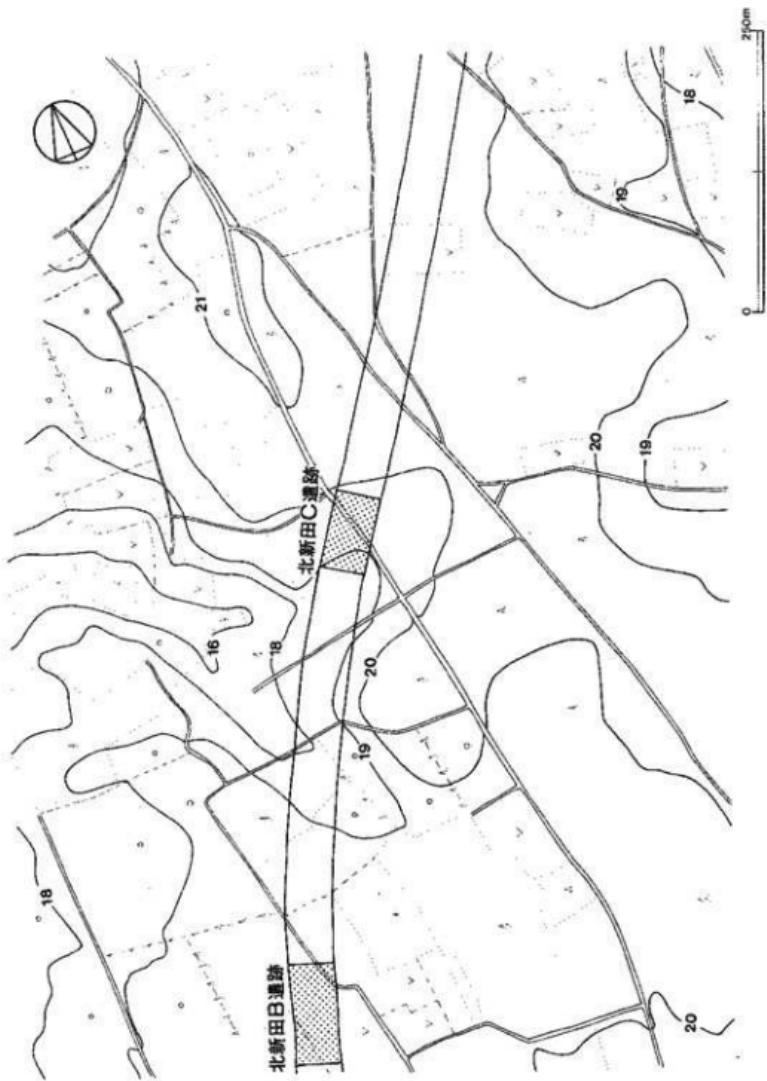
## 1 遺跡の概観

当遺跡は、猿島郡総和町大字稻宮字下原197-1ほかに所在し、調査対象面積は2800m<sup>2</sup>である。現況は、畠地と一部山林である。当遺跡は、稻宮集落の南方800mの台地に位置し、上大野地区と柳橋を結ぶ町道によって2地区に分断されている。町道の西側は畠で、標高は約20mであり、町道の東側は山林である。当遺跡の西側約100mには、長井戸沼の西枝からなる小支谷が入り込み、谷津田が形成されており、水田との比高は2.5mである。当遺跡の南方約500mの同じ新4号バイバス計画線上に北新田B遺跡が所在し、北東約600mに二十五里寺A遺跡が所在している。当遺跡から、方形周溝状遺構1基が検出され、その南溝から8世紀に比定される4個の环が出土した。

## 2 調査経過

（昭和58年度）

- 6月前半 北新田B遺跡の調査が5月30日に終了し、5月31日に当遺跡の調査を開始した。土物除去及び草刈りを行い、焼却後発掘前の遺跡全景写真撮影を行なった。X軸+19860m、Y軸-4400mの交点を基準として方眼枕打ちを行い調査区を設定し、4分の1のグリッド発掘をA2区・B1区・C1区から開始した。
- 6月後半 グリッド発掘を続け、B1区から縄文式土器片が極少量出土した。A2区から周溝状構の落ち込みを確認した。18日に当遺跡の調査を一旦中止し、北新田A遺跡の調査に移った。
- 7月前半 北新田A遺跡調査のため中止していたグリッド発掘をB1区から開始した。遺構プラン追求のため周溝状構周辺のA2区を拡張した。山林跡のため根株が多く、そのうえ、確認面まで約80cmと深かったため拡張に日数がかかった。グリッド拡張の結果、方形周溝状遺構1基を確認した。
- 7月後半 方形周溝状遺構調査の掘り込みを実施し南溝から土師器の环4個体分が出土した。調査後の遺跡全景写真撮影を実施し、調査地域内の全ての調査を完了した。



第245図 北新田C遺跡地形図



第246図 北新田C遺跡全体図

### 3 遺構と遺物

当遺跡の北部に1基の方形周溝状遺構が検出された。

#### (1) 方形周溝状遺構

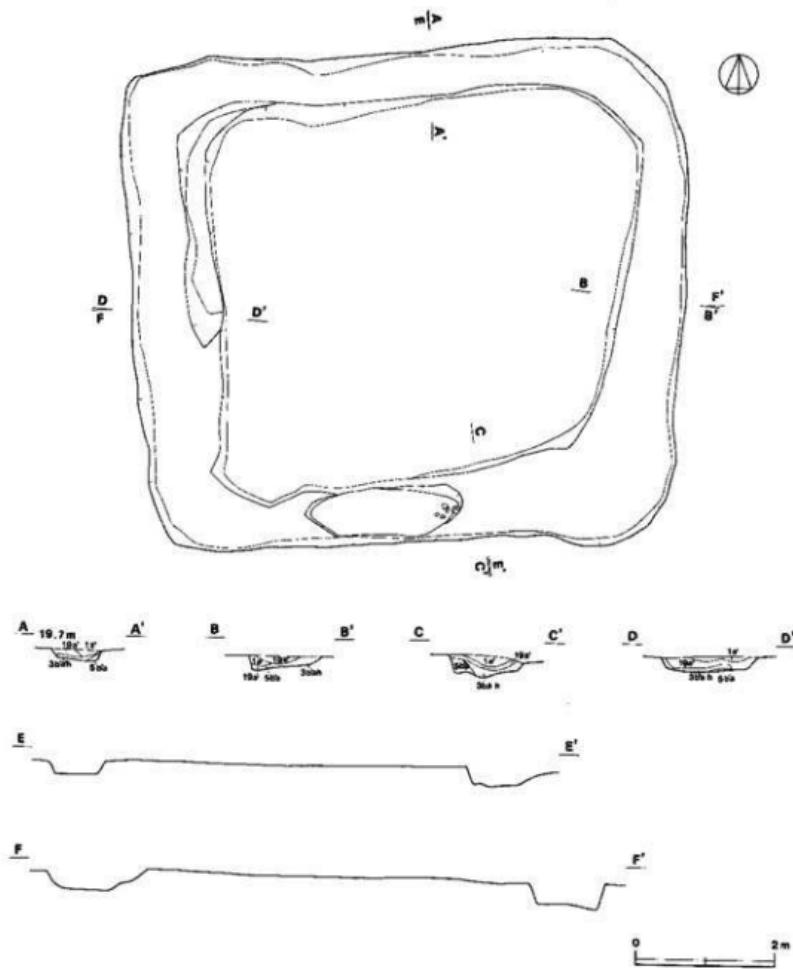
##### 第1号方形周溝状遺構（第247図）

本跡は、当遺跡北部のA2f<sub>2</sub>区を中心に確認された。平面形は隅丸方形で、規模は長軸で7.99m、短軸7.00mである。また方台部の規模は、長軸5.95m・短軸5.20mで、長軸方向はN-8°-Wを指している。南東コーナーはやや外側にふくらんでいる。周溝部の断面は「～」の形状を呈しており、周溝南側の内側の壁が外側の壁よりも急な傾斜を示している。その他は内側の壁外側の壁とも同じ角度で掘りこまれている。溝幅は上幅が1.90~2.10m、下幅が0.53~1.00mである。検出面から溝底までの深さは12~36cmであり、溝底は、周溝の南側で凸凹がみられる以外はほぼ平坦である。周溝の南側の中央部に長径2.28m、短径0.68m、深さ5~10cmの長楕円形を呈する窪みを検出したが、窪みからは遺物等が出土していない。

溝内の覆土は自然堆積を示し、暗褐色土を中心で、各層にローム粒子・ロームブロックが混入

しており、やわらかである。

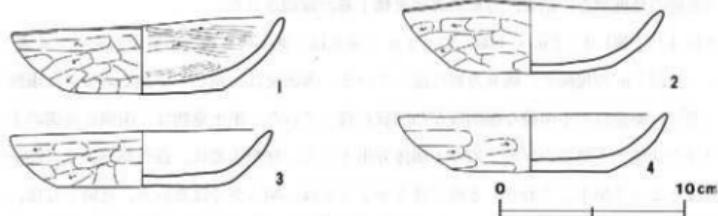
遺物は、南側の周溝の上面からくだけた状態で4個体分の土師器の杯形土器と、周溝の東側から土師器片3点が出土している。



第247図 第1号方形周溝状造構実測図

出土土器観察表（第248図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	環形土器 土師器	A 14.0 B 3.0 C 9.2	均一の厚さで、底部から体上部にかけてやや内側気味に立ち上がり。口縁部はややゆがんでいる。底部は平底である。	口縁部内・外面一様ナデ 体部外面一ハラ削り 内面一概いへラ削き	砂粒 良好 明赤褐色	70%
2	環形土器 土師器	A 14.1 B 3.9 C 8.7	体部はやや内側気味に立ち上がり。口縁部はややゆがんでいる。底部は平底である。	口縁部内・外面一様ナデ 体部外面一ハラ削り 内面一ナデ	砂粒 良好 にぶい橙色	100%
3	环形土器 土師器	A 14.0 B 3.0 C 9.2	底部から体部にかけて均一の厚さで、外傾して立ち上がる。底部は平底である。	口縁部内・外面一様ナデ 体部外面一ハラ削り 内面一ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	65%
4	環形土器 土師器	A 14.5 B 3.2 C 8.5	底部から体部にかけて均一の厚さで、内側気味に外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面一様ナデ 体部外面一ハラ削り 内面一ナデ	砂粒 普通 橙色	60%



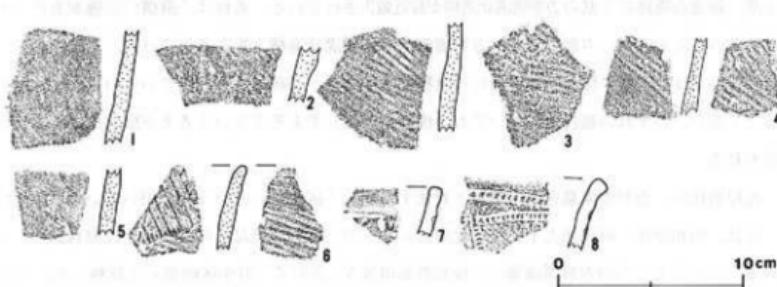
第248図 第1号方形周溝状遺構出土遺物実測図

(2) グリッド出土土器

縄文式土器（第249図）

表面探査やグリッド発掘中に出土した遺物は、縄文式土器の細片で、しかも極少量である。いずれも表土層から出土したものである。

1・2は同一個体の胴部片であるが、接合はできなかった。無文で、色調はにぶい橙色である。胎土には、纖維を含んでいる。3・4は胴部片で、表裏に条痕を施している。色調は橙色で、



第249図 グリッド出土土器拓影図

胎土には繊維を含んでいる。焼成は普通である。5は胴部片で無文である。胎土には砂粒・スコリア・繊維を含んでいる。6は口縁部片で、表裏に貝殻条痕文を施し、さらに器表面になぞりを加え、微隆起線文を施している。色調は橙色で、胎土には、砂粒・砾・少量のスコリアを含んでいる。7は口縁部で、口唇直下に無文帯を有し、下位の横走する沈線の下に刺突文が施されている。色調は灰褐色である。8は、縄文地文上に半截竹管状施文具による爪形文と円形竹管文を施している。色調は赤褐色で、胎土にはスコリアを含んでいる。焼成は良好である。

#### 4まとめ

当遺跡の発掘調査の結果、方形周溝状遺構1基が確認された。

本跡は、上幅1.9~2m・下幅0.53~1m・深さ12~36cmの逆台形の断面形を呈する溝が、長辺8m・短辺7mの規模で、隅丸方形に造っている。溝底面は、縦じて平坦であるが、南側の周溝の一部に、築造時の不明瞭な掘削跡が凸凹状に残っていた。出土遺物は、南側の周溝の上面から、くだけた状態で土師器の环形土器が4個体分出土した。环形土器は、長径38cm、短径23cmの範囲からまとめて出土しており、本跡に伴うかどうかは、明らかではないが、近隣からは、住居跡や古墳等が確認されていないので、本跡に伴うものと推察される。环形土器の時期は、8世紀前半に編年できる。

方形周溝墓（方形周溝状遺構も含む）は、関東地方では弥生後期から9世紀初頭にかけてみられるが、ここでは8世紀以降に重点をおいて述べてみたい。

近年、関東地方において、方形あるいは円形に溝が巡り、これに伴う主体部等が検出されず、しかも時期を判定するにたりる遺物が出土しない方形周溝状遺構の報告例が増加している。特に茨城県や千葉県を中心にその遺構の報告例を多く見ることができるが、県内においては、守谷町<sup>注(1)</sup>の北今城遺跡に方形周溝墓が1基、石岡市の兵崎遺跡に2基、大谷津A遺跡に3基、外山遺跡に<sup>注(2)</sup>4基、新池台遺跡に5基の方形周溝状遺構が最近報告されている。名称は、遺構の形態が方形のものが多いこともあり、方形周溝墓、方形周溝、方形周溝状遺構と報告されている。遺構の性格づけについては、遺構に伴うと思われる遺物等が少なく、詳細に述べられていないのが現状である。しかし、いずれの報告例においても、機能上「墓」であろうという考えが根底にあるように思われる。

佐原真氏は、方形周溝墓を他の墓制と対比する際、「区画墓」という語を用いている。渡辺修一氏は、昭和38年、財團法人千葉県文化財センターの『研究連絡誌』のなかで、佐原真氏が「区画墓」というところの方形周溝墓に、後期群集墳等をも含めて「群小区画墓」と総称して、方形周溝遺構を述べている。これによると、千葉県内の19遺跡の調査例を挙げて「古墳群に混在して

検出した方形周溝遺構は、出土遺物や外の混在する墳墓の形態等で支群に分けられた内の小区画墓の1つである」と定義づけている。築造年代は、出土遺物等を比較検討した結果、混在する墳墓と同時期あるいはそれに近い時期の8世紀としている。また、方形周溝遺構の歴史的意義を、律令国家成立以後も一定の土地を占有する墓制である「群小区画墓」が継続していることに注目して農業共同体の構造自体が殆んど国家権力による政治的再編を受けなかったことを立証するものであるとし、さらに方形周溝遺構は基本的に同一階級による墓制であるとしている。

同じく『研究連絡誌』において金丸誠氏は、方形周溝と円形周溝を一括して、それらを「古墳時代後期から歴史時代における明確な形態での埋葬主体及びマウンドを遺存しない方形ないし円形状の溝からなる墳墓の遺構」としている。一方、山岸良二氏は『方形周溝墓』において、方形周溝状遺構は、「一時的中断や確執がありながらも、形態面で方形周溝墓を受け継ぎ、性格面では墓としての機能が希薄化して葬送の一部を催行する場のために残存した遺構ではないか」と指摘している。

いずれも、方形周溝状遺構の性格づけに具体性を欠いたままであるが、共通していえることは「墓」という意識の基に述べていることである。

当遺跡においては、方形周溝状遺構1基だけで、しかも、出土遺物が遺構に伴っているものかどうか明らかでない出土状況だけに、性格や時期を正しく論じ得ないが、周溝の自然堆積の上面から検出された出土遺物が8世紀のものであることから、本跡の築造された時期は、8世紀かそれ以前のそれほど遠くない時期であろうと思われる。

また、本跡の方台部はほぼ平坦であり、しかも主体部は検出されず、周溝にも埋葬施設と考えられる遺構は確認されなかった。したがって、墓であるかどうか明確にすることはできなかった。

#### 注

- (1)茨城県教育財團 「北今城遺跡」『茨城県教育財團文化財調査報告第8集』 1981
- (2)茨城県教育財團 「長崎・大谷津A・外山」『茨城県教育財團文化財調査報告第13集』 1982
- (3)茨城県教育財團 「新池台遺跡」『茨城県教育財團文化財調査報告第17集』 1983
- (4)佐原 真 「弥生時代の集落」『考古学研究 25-4』 1979
- (5)山岸良二 「方形周溝墓」 ニューサイエンス社 1981



## 溜原B遺跡

### 1 遺跡の概観

当遺跡は、猿島郡総和町大字上大野溜原字芳山2644ほかに所在し、総和町の北東部に位置している。現況は畑で、面積は2400m<sup>2</sup>である。総和町の東側を南流する宮戸川と、三和町の西側を南流する大川の支流に挟まれた標高22mの沖積台地縁辺部に立地している。当遺跡の南側には国道125号線が東西に走り、北側は水田となっている。遺跡はこの水田に向かって南西から北東にかけて緩やかに傾斜している台地上にある。遺跡の近くには縄文時代の包蔵地として地蔵堂遺跡、地蔵遺跡（ともに総和町上大野）、古墳時代の包蔵地の本田山A遺跡（上大野）、北久保遺跡（総和町福宮）、大松山古墳群（総和町磯部）、諸川八幡塚古墳（三和町諸川）、歴史時代の製鉄跡である弁天遺跡、本田山B遺跡（ともに上大野）、北久保遺跡（福宮）などが存在する。

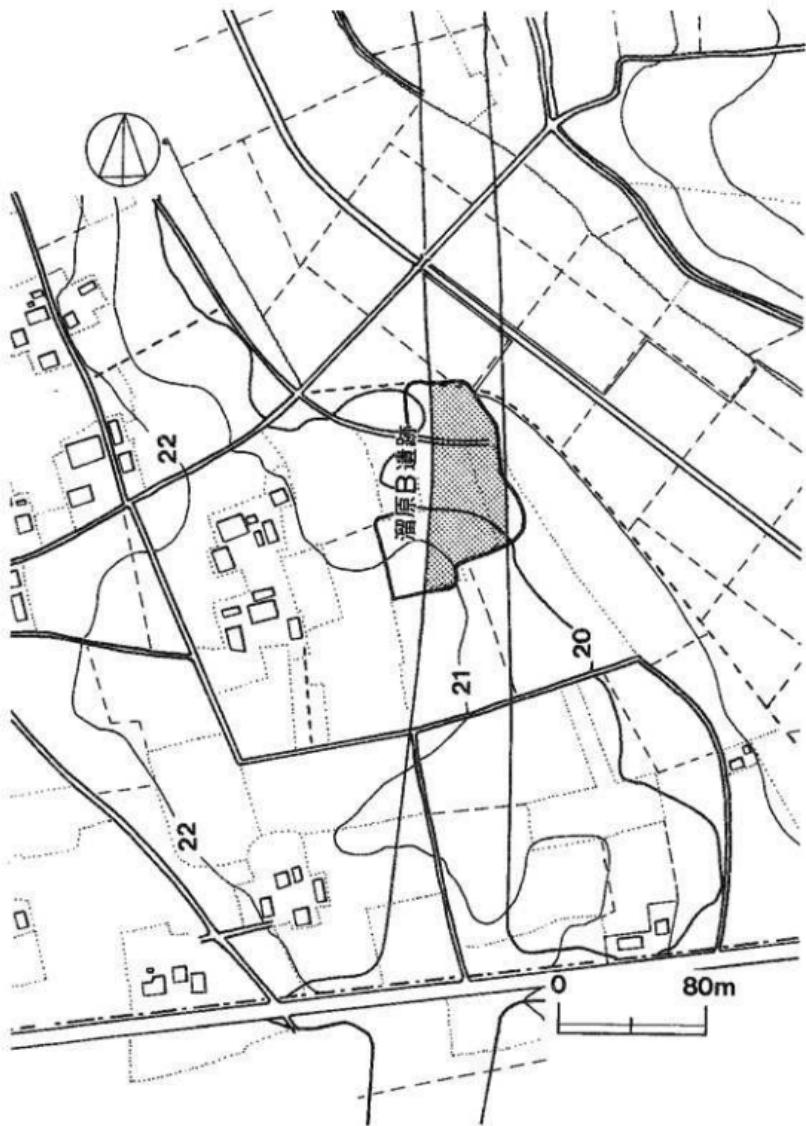
なお、当遺跡からは時代不明の溝が1条検出され、遺物はグリッドから縄文式土器片、土師器片、土製品、石器が合せて遺物収納箱に1箱出土している。

### 2 調査経過

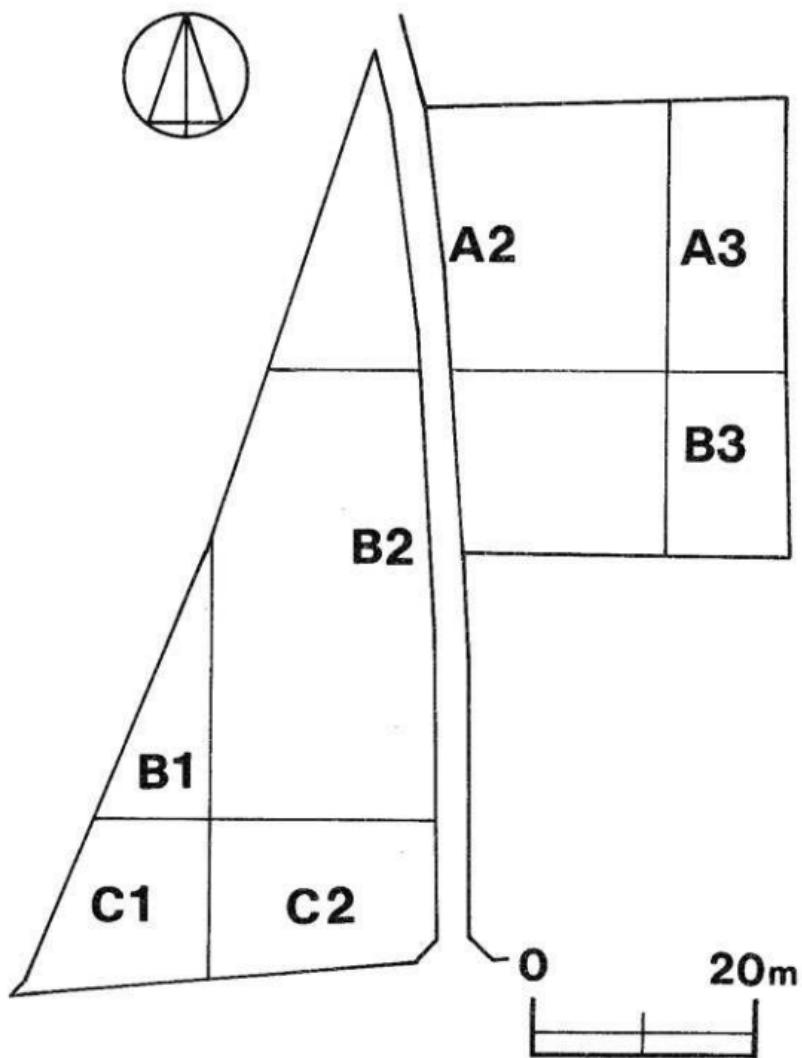
- 6月 18日発掘前の遺跡全景写真を撮影する。その後草刈りを行い、遺構確認のための $\frac{1}{4}$ グリッド発掘を行った。20日にグリッド発掘を終了し、遺跡の北部に溝1条を確認した。24日遺構の確認されない地区の $\frac{1}{4}$ グリッド発掘を行い、遺構確認に努めたが、他の遺構は検出されなかった。（基準杭はX軸+22220m、Y軸-3160mの交点）  
26日から土層観察用のトレチ発掘を行い、27日にトレチ土層の実測を終了した。  
また、溝が確認された遺跡の北部A2区については、グリッド拡張を行い、溝の調査に備えた。
- 7月 9日に調査を再開し、グリッド拡張を終了した。同日ベルトを設定し、溝の掘り込みを開始した。10日セクションを終了し、ベルト除去にかかる。遺構が浅いことや、遺物が出土しないため、1日で調査を終了させた。  
12日に平面図実測、完掘写真撮影を完了させ、埋め戻しを行った。

### 3 遺構と遺物

当遺跡では、溝が1条検出された。遺物はグリッドから縄文式土器片や土師器片が少量出土し



第250図 溜原B遺跡地形図



第251図 滝原B遺跡グリッド図

ている。

### (1)溝

#### 第1号溝（第253図）

本溝はA2j<sub>4</sub>から南北方向に延び、A2f<sub>4</sub>区まで確認され、更に北方のエリア外まで延びている。ほぼ直線的に延び、長さは16mである。

溝の幅は上幅で40~100cm、下幅で20~40cmである。壁はソフトロームできほど堅くなく、外傾して立ち上がりしている。底面はハードロームでやや堅く、ほぼ平坦である。南側のA2l<sub>4</sub>区では下幅が48cmあり、水たまり場状を呈している。A2g<sub>4</sub>区の西側には、径100cmの半円形のテラス状の段をもっている。確認面からの深さは15~20cmである。断面は「U」形をしている。底面のレベルはA(北)で20.09m、Bで20.0m、C(南)で20.06mである。

覆土は1~2層で、1層は黒褐色土、2層は暗褐色土である。北側の覆土は1層だけで、暗褐色土のみ堆積している。どのベルトも自然堆積である。

遺物は出土しておらず、時期や性格については不明である。

### (2)グリッド出土遺物

#### 縄文式土器（第254・255図）

いずれも破片で、器形をうかがえるものはない。拓本が可能なものだけを掲載し、4群に分類した。

#### 第1群土器（TP1~15）

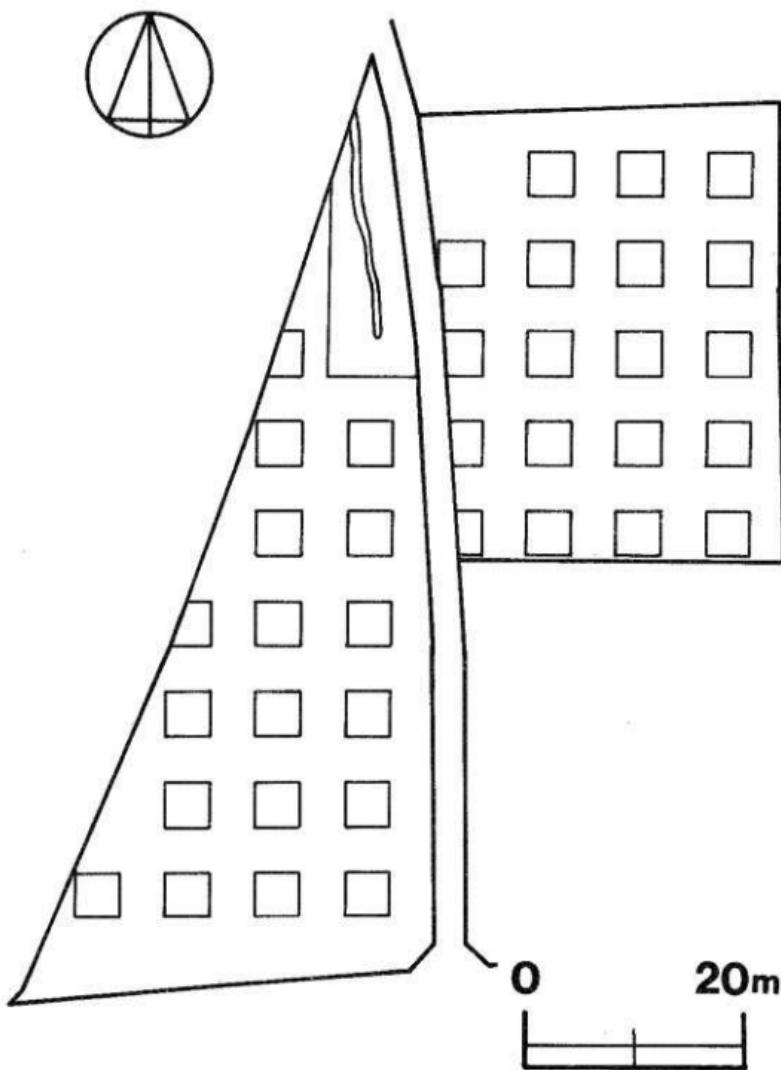
早期の土器である。1は口唇部が肥厚し、外反して開く。口唇直下に押圧の点列文が付けられ、その下には縱走する縄文が施されている。砂、バミス、スコリアを含んでいる。井草式である。2~4は摩滅しているが縱走する縄文がわずかに残っている。胎土は2だけ砂を含むが、3~4は礫も含んでいる。2~4は夏島式である。5は斜めの平行な細沈線が付されている。砂・石英・礫を胎土に含んでいる。田戸下唇式である。6~15は茅山上唇式の土器である。6~7は口縁部で、他は胴部である。6~7は口唇にも文様を付けている。すべて表裏に貝殻による平行条痕文を施し、胎土に纖維を含んでいる。

#### 第2群土器（TP16）

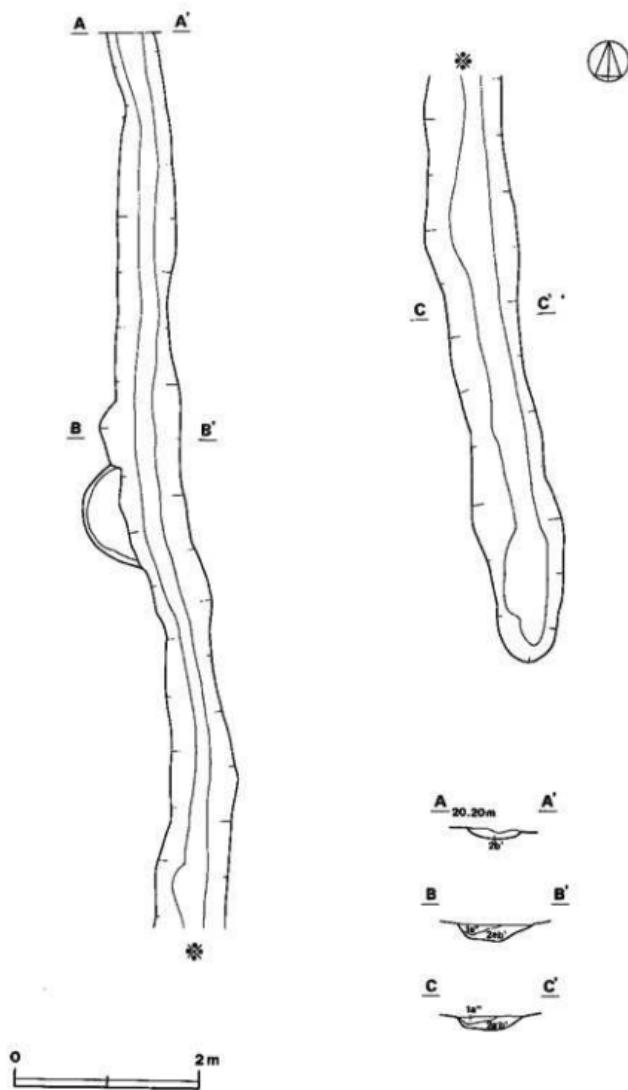
前期の土器で、黒浜式である。全面に粗い縦の縄文（LR）が施され、胎土に砂・バミス・スコリアを含んでいる。

#### 第3群土器（TP17~19）

中期の土器である。17は口縁に近い胴部片で、わずかに横位の爪形文が残っている。18~19は



第252図 滝原B遺跡全体図



第253図 第1号溝実測図

底部で、加曾利E式である。

#### 第4群土器 (TP20~44)

後期の土器である。

##### 第1類 (TP20~29)

20~24・28は2本の沈線で区画した磨消繩文帶を施し、20・25~27は平行な細沈線を付けている。29は横位の繩文がわずかに残る。25のみ砂礫を含んでいるが、他は砂だけの胎土で、焼成は良好である。堀之内式である。

##### 第2類 (TP30~35)

30~32は口縁部、33~35は胴部片である。33だけ繩文が施され、他は無文である。31が堀之内式、32、34が安行式と思われるが他は不明である。

##### 第3類 (TR36~44)

36~42が口縁部、43・44が胴部片である。36・37は隆帯を付け、指などによる連続押土を施し、斜行の条線文を付している。44はこの文様の胴部片である。38~40は隆帯を付けた後、繩文を施している。41~43は刺突文に以たキザミ目を入れ、連続させて列をつくっている。どの土器片も、砂やバミスを含み、裏面を丁寧になでている。安行式である。

### 土師器

22片出土した。いずれも胴部破片で、器形をうかがえるものはない。実測図、拓本は割愛した。

### 土製品 (第255図DP 1)

DP 1はA3g区から出土した土偶の足である。残存高4.5cm、縦幅3.5cm、横幅2.5cm、重さ25gである。

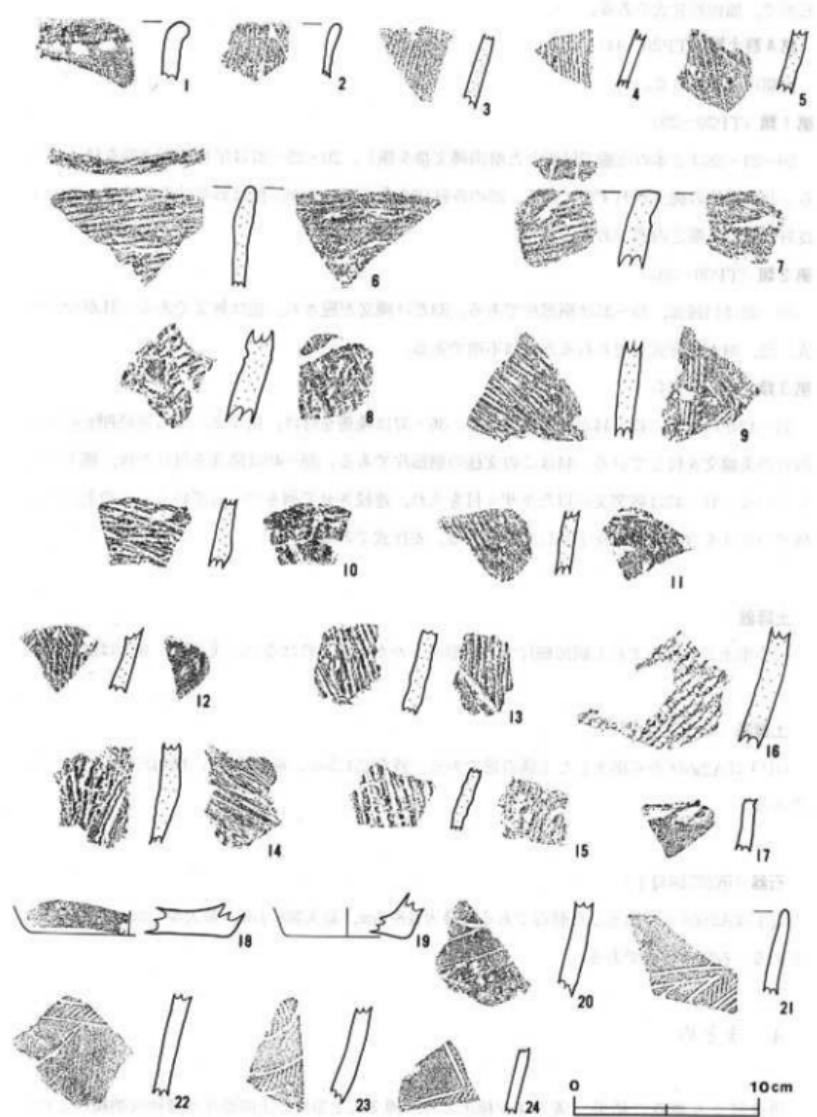
### 石器 (第255図Q 1)

Q 1はA2i区から出土した磨石である。最大長8.8cm、最大幅8.1cm、最大厚3.2cm、重さ385gである。石質は碧岩である。

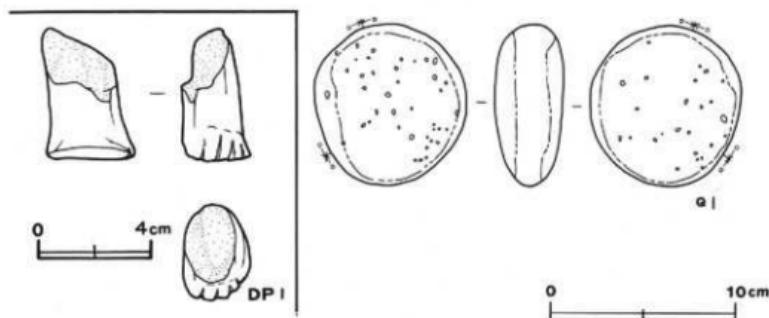
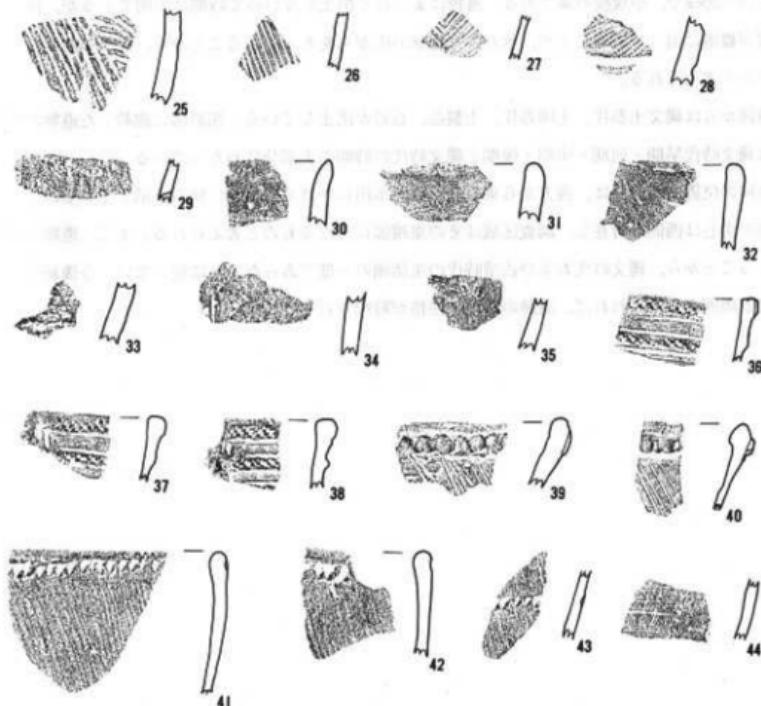
### 4まとめ

当遺跡から調査の結果、溝1条が検出され、繩文式土器片と土師器片が遺物収納箱に1箱出土した。

溝は、遺跡の北部から北方の遺跡まで、南北方向に伸びている。長さ16m、上幅40~100cm、



第254図 グリッド出土土器拓影図（1）



第255図 グリッド出土土器拓影図(2), 土製品・石器実測図

深さ15～20cmで、小規模の溝である。遺物はまったく出土しないので時期は不明であるが、検出位置が農道に沿っていることや、水たまり場状の広がりをもっていることから、道路の側溝ではないかと考えられる。

遺跡からは縄文土器片、土師器片、土製品、石器が出土している。拓影図に掲載した遺物の時期は縄文時代早期・前期・中期・後期と縄文時代の時期の大部分にわたっている。

遺跡の位置する台地は、西方から東の大川や、水田にかけて緩やかに傾斜を示しているので、遺跡の中心は西側に所在し、調査区域はその東端部にあたるものと考えられる。また、遺物が出土することから、縄文時代および古墳時代の生活圏の一部であったことは疑いない。今後新しい資料が周囲から得られれば、遺跡の時期、性格が解明されると思う。

## 終 章 む す び

新4号国道建設に伴う、茨城県のルート内に所在する27遺跡の発掘調査は、昭和57年度から始まり現在も続けられているが、今回、昭和57年度から昭和60年度にかけて調査を実施した総和町所在の12遺跡の報告書が刊行される運びとなった。これらの遺跡は道路という線上にあり、遺跡によってはその中心から離れ、必ずしも十分な遺構・遺物は検出できなかった。しかし、その中で向坪B遺跡、北新田A遺跡の調査成果には大きなものがあった。

向坪B遺跡の第1号住居跡からは、古墳時代中期末の土器のほかに、子持勾玉1点、勾玉10点、白玉3570余点、七玉9点が壁際にまとまって出土し、祭祀遺構として大いに注目される。古代祭祀については調査例も増えているが、まだまだ解明されていない点が多い。本例はその意味で、大変貴重なものであるが、第1号住居跡の性格、祭祀の対象やその状況などについては、推定の域を脱し得ない部分が多い。

北新田A遺跡からは、住居跡・土坑・溝などの遺構と、土師器・須恵器・鉄製品などの遺物が多数検出され、古墳時代前期から平安時代にわたる集落跡であることが判明した。集落は途中若干の空白期はあるが、4世紀後半から11世紀前半まで営まれたもので、調査例の少ないこの地域の土器や集落の変遷をたどる上で、良い資料となるものと思われる。しかし、道路敷地内という限定された範囲の調査のため、集落の全容をとらえるまでには至らず。また、土器の分類も大まかであり、再検討が必要であろう。

このほかの遺跡は、遺構・遺物が少なく、十分な成果が得られなかつたが、少ないながらも縄文時代から中・近世にわたるもので、当時の生活の一端をうかがえる貴重な資料である。

以上、12遺跡の調査は多くの成果をもたらした反面、研究の余地を多く残している。今後、これらを課題として、十分に検討を加えていきたい。

末筆ではあるが、本報告書をまとめるにあたって、御指導・御協力をいただいた関係各位には、心から感謝の意を表したい。

